

魔王様、リトライ！

神崎 黒音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこにでもいる社会人、大野晶は自身が運営するゲーム内の「魔王」と呼ばれるキャラにログインしたまま異世界へと飛ばされてしまう。

そこで出会った片足が不自由な女の子と旅をし始めるが、圧倒的な力を持つ「魔王」を周囲が放っておくわけがなかった。

魔王を討伐しようとする国やら聖女から狙われ、一行は行く先々で騒動を巻き起こす。

見た目は魔王、中身は一般人の勘違い系ファンタジー！

2017/01/20

第五回ネット小説大賞、期間中受賞の一作目選ばれました。

2017/06/30

双葉社モンスター文庫から、一巻が発売されました。

同日、コミカライズが決定！

2017/10/20

モンスターコミックスにてコミカライズ版が公開されました。

※挿絵がある話には ★ を付けています。

※この作品は、小説家になろう様の方でも投稿しています。

目次

一章 魔王降臨

始まりの0時 | 1

大森林 | 9

魔王と悪 | 29

願いの祠 | 50

魔王の指輪 | 64

二章 聖女

聖光国 | 79

忍び寄る影 | 90

聖女 | 107

異世界の街 | 126

悪の御嬢様 | 139

金色のルナ | 152

三人の夜 | 167

キラークイーン | 179

サタニスト | 192

龍人 | 209

旅立ち | 227

神都へ | 236

三章 神都

魔王軍の始動 | 251

桐野 悠 | 264

神の手 | 278

冒険者達 | 294

容赦無き侵略 | 305

慈悲無き侵略	315
聖なる国	328
晩餐会	339
騒乱の兆し	354
魔王の片鱗	363
悪魔 VS 魔王	379
童話遊戯	395
聖城へ	407
正義漢	421
乾坤一擲	440
四章 魔王の躍動	
聖女との対談	453
対談の裏側	464

魔神達	476
はじめの一步	490
野戦病院	504
温泉旅館	516
踊る詐欺師と大金貨	525
P O K E R F A C E	534
田原 勇	549
変化していく村	562
其々の夜	575
マダムの来訪	586
マダム、温泉旅館へ	604
マダム、吼える	619
魔王の鬼謀	635

適合率20% ★	648
ユキカゼ、襲来	660
重責を担う者達	678
白天使と魔王様	689
湯煙の死闘	703
北へ	715
記録 とあるチャットにて	
NEO UNIVERSITY	734
第五章 恋の迷宮	
大帝国と異世界	739
ルーキー	754
前夜	768
監獄迷宮 一階層	780

鬼湧きとラビの村	798
田原の視察	810
側近達	825
監獄迷宮五階層〜七階層	840
白き光	853
魔王の行進	868
無情の行進	880
監獄迷宮 十二階層〜十五階層	
892	
ホワイトの帰還	907
白蝶会談	918
魔王の帰還	935
魔王のスカウト	954

魔王様、リトライ!	1044
特別SS その先へ	1033
未知との対峙	1010
魔王と魔女	1099
侵略者	988
嵐の前②	976
嵐の前	967
魔王のスカウト②	

一章 魔王降臨

始まりの0時

— D I V E T O G A M E —

帝曆2XXX年——

世界の大半を支配した通称 “大帝国” は恐るべきGAMEを開始した。

征服した国々の支配を磐石にするため、反逆の芽を摘むため、見せしめとも言える残酷なショーを大々的に開催したのだ。

狂気としか思えぬ、その内容とは——

属国となった国々からランダムで “プレイヤー” と呼ばれる国民を集め、最後の一人になるまで殺し合わせるといふもの。

大帝国はそれらを世界中に放映し、公のギャンブルとした。

誰が勝ち残るか、二番目に残るのは誰か、最初に死ぬのは誰か？

残酷かつリアリティ溢れる内容はある種、映画などを遥かに超えたものであり、大帝国の民——神民の心を驚掴みにしていったのだ。

全世界へ流されるGAME——ここでは幾多のドラマや悲恋が生まれ、生き残るために、何の恨みもない他人を殺す“剥き出しの人間”の姿を見ることができた。

人間競馬、人生ゲーム、蜘蛛の糸、GAMEには様々な呼び名が与えられ、暇を持て余した大富豪達がGAMEへと注ぎ込む莫大な賭け金は、次第に国家の重要な資金源と化していった——

選ばれる側の“国民”は日夜、恐怖に怯え。

見る側の“神民”は、狂気の娯楽に酔い痴れた。

「GAME」

勝ち残った一人に与えられるのは莫大な財産——そして、神民への切符。
但し、それ以外の参加者に待っているのは例外無く、死であった。



西暦2016年 日本——

「このイベント、懐かしいな……」

今まさに、そんな恐ろしい「ゲーム」に参加している男が居る。

だが、彼の表情には怯えも恐怖も無い。

彼の名は大野^{おおの}晶^{あきら}——何処にでも居る社会人である。

勝手知ったる何とやら、とでも言うべきか。

彼はこのゲームを個人で運営している男であり、全てを知り尽くした会場に恐るべき何物も存在しなかった。

何よりゲームはPC画面の中にあつて、現実には何の影響を与えるものでもない。

「長い趣味になつたな」

ぼつりと、消え入りそうな声で男が呟く。

このゲームが動き出したのは2001年、世はインターネットの黎明期であつた。そして、今や2016年である。15年物の骨董品、そう呼んで良いだろう。

その長い歴史も——今日で終わる。

男はカタカタとキーボードを叩き、時にはマウスを激しく動かし、ゲーム画面を次々に切り替えていく。その様を見ている限り、特に目的らしい目的はないのだろう。

ただ、画面に映る全てを網膜に焼き付けようとしている——そんな姿だった。

(もう少しで0時か……………)

いつもはゲームの開始を告げる時刻だが、会場には男一人しか居ない。

0時になればサーバーの契約が切れ、ゲーム会場は丸ごと消し飛ぶ。男は大勢での別れではなく、一人での別れを選んだのだ。

(15年は長すぎたな……………)

義務教育より長い期間のゲームなど、普通に考えればありえないことだ。

現にゲームが始まった当時は中学生だったような子らが、今では立派な社会人となっているのだから。中には結婚し、立派な親となった者も居るし、海外へ行った者も居る。

其々が責任ある立場となり、自由な時間を失っていったのだ。

——それらはある意味、健康的と言うべきだろう。

男とて例外ではない。

かつては自由気ままにゲームの改造へ熱中し、時には睡眠すら忘れてゲームの運営へ没頭していた男も、年月と共に立場が出来上がり、仕事に大部分の時間を取られるようになっていった。

「次はどのエリアに行くかな……」

男はこのゲームのラスボスとも言えるキャラへログインし、時間ギリギリまで各地を歩く。時にそこは住宅街であったり、辺鄙な寺であったり、底の見えない深い池などであった。

その一つ一つが、男にとっては忘れ難い場所なのだろう。

23 : 58 : 20

「九内、お前もお疲れ様」

男が画面内のキャラへと話しかける。傍から見ればちよつと怖い光景だ。

画面の中では、優に肩まで届きそうな長い髪をした男が居る。

歳は軽く40を超えているが、その肉体は極限まで鍛え抜かれたものであり、その容貌は何処までも鋭い。設定では大帝国の高官にして、この悪名高いGAMEの主権者でもある。

——くない、はくと九内 伯斗

このGAMEによる犠牲者アクセス数——4143792人という膨大な流血と嘆きを生み出した魔王。

終焉の時を迎えるこの時であっても、その顔には酷薄な瞳が張り付いており、浮かべている冷笑はまるで変わらない。

九内の姿に何か感じるものがあつたのか、男が軽く身震いする。

「まさか、最後の瞬間をお前と過ぐすなんてな……夢にも思ってたよ」

男は九内の鋭い視線から逃れるように、それだけを言った。

その言葉を受けても、九内の表情は変わらない。当たり前だ——彼は操作されなければ動けない、ただのPCに過ぎないのだから。

だと言うのに、男は何かから逃れるように矢継ぎ早に言葉を吐き続けた。

「何だか不満そうな面だな？ 言っとくけど、お前がラスボスだろうが魔王だろうが、リアルには勝てないんだよ。まだ遊び足りないってんなら、勝手に続きをやってくれ——俺は明日に備えて寝るさ」

23:59:50

「じゃあな、九内。それと、お休み——XXXXXXXXXXXX」

00:00:00

男が万感の思いを込めて目を閉じ、次に開いたとき——
視界に映ったのは「大森林」であつた。

そこは神が見放し、天使が絶望する世界。

どうか驚かないで。

そして、聞いてほしい。

耳を澄ませば聞こえるはず。

0時のベルはいつだって、「君」の始動を告げる音色なのだから——

大森林

(何だ、これ……?)

目の前に広がる、鬱蒼とした大森林に“俺”は息を飲む。

次に笑いが込み上げてきた。

確かに15年も続けてきた趣味が終わるってことで、多少の酒は飲んでいたが、流石に大森林に放り込まれるような白昼夢を見るほどには飲んでいない。

まして、明日は仕事だ。

と言うか、あれか……

起きてたと思ってたのは俺だけで、いつのまにか寝オチしてたって展開か？

「つか、大森林ハンパねえな……お前、グリーン過ぎるだろ」

最近は会社と自宅の往復をする日々だったので、余計に真緑の色が目痛い。

疲れきった体に大自然の尊さを染み込ませてくるようだ。とは言え、早く明日に備え

なければちよつと不味い。

PC前で寝ていたら、翌日は筋肉痛不可避だ。

「しっかし、夢とは思えんくらいにリアルだな……」

差込む日差しに、辺りを飛ぶトンボ、セミの鳴き声まで聞こえてくる。遠くを見れば、太陽を反射してキラキラと光る湖まであるのだ。

夢は願望を表すなんて言うけど、俺は心の奥底では森林浴でもしたいと願っていたんだらうか？

湖に近付こうと一步を踏み出したとき、背中に冷や汗が流れた。

「何だ、この足……」

目に映ったのは、皺一つ入っていない高級な革靴。そして、体を見れば上下の黒いスーツ。

このクソ暑い季節だというのに、ご丁寧に足首にも届きそうなロングコートまで羽織ってくれている。この姿を見たら、誰もが「何処のマフィアのボスだ」と突っ込んで

くるに違いない。

(何か、嫌な予感が……………)

さつきから、心臓が嫌な音を立てている。慌てて湖へと走ると、隼のような速度であつと言う間に森を突っ切ってしまった。

その異様な速度に、嫌な予感が一層濃くなつていく。

最後に湖へ映る自分の姿を見たとき——予感確信へと変わった。

「何で……………九内が……………」

湖に映るのは、見慣れたラスボス。

並居るプレイヤー達を絶望のドン底へと叩き落とし続けた、“魔王”が居た。その顔は何が可笑しいのか、笑みを浮かべているようにも見える。

「ふざけんなよ……………！ 何で俺がこんな“オッサン”に……………！」

自分も他人のことを言える歳ではないが、流石にこれは無い。

大体、さつきから五感に入ってくる全てがリアルすぎて、とても夢とは思えないのだ。まさかとは思うが、アニメや漫画でよく見る異世界転移とか言うんじゃないだろうか？ もしくは、心臓発作とかで俺は既に死んでて、天国に居るとか？ いや、それなら九内の姿になっているのは変だろ……。

「ま、待て……落ち着け、まだ慌てるような時間じゃない」

しかし、頬や頭を叩いても痛い。

呼吸をすれば肺がしっかりと動いているのが分かる——分かってしまう。

これは本格的に不味いんじゃないのか？

（うおおい！　せめてHDDの整理してからにしてくれよ！）

魂からの叫びであった。異世界に行くのはまだ良い。

万歩譲って許せるとしても、こんなオッサンになって異世界転移なんて夢が無さ過ぎるだろ！　せめて、超絶のイケメンとか大富豪とかにしてくれよ！

後、HDDの整理な！ 大事な事だから二回言っとくぞ！

何でよりもよって、こんなガチムチのオッサンに……。

俺がいったい、何をしたっていうんだ!?



(とにかく情報だ……何か見つけないと……)

あれから暫く歩き回ってみたが、夢から覚める、なんてことは無さそうだった。

むしろ、あれからも刻々と意識が体へ馴染んでいくようで、今では殆ど違和感すら覚え
えない。

時折、吹き抜けるような森の息吹が体を揺らし、この世界がまやかしてはないと伝えてくるようだ。

(この世界は、この森は何だ……せめてヒントでも無いのか)

服を漁っても、現状を打破するような物は無かった。

ロングコートの内側には九内の得意武器であるナイフが多数仕込まれており、他には九内が愛用する煙草などがあるだけ。

こうなったら、腹を括って「アレ」を叫ぶしかないだろうか？

プレイヤーの一人でもあった、マツシヴも「異世界へ行ったら、これを叫べば間違いないですよ」と言つてたしな……。

頼むぞ？　い、行くからな……？

「す、ステータス！」

——森に静寂が広がり、カラスが一声鳴いた。

「出ないのかよ！」

恥の掻き損じじゃないか！

何か数値やら画面でも出るのかと思いきや、何事も起こらず、むしろ風に揺れる木々が爆笑しているようにも感じられた。

いや、待て——これが九内なら——

俺なら——もつと相應しい言葉があるじゃないか。

「ADMINISTRATOR——」

——ビンゴ！

空中に黒いパネルとキーボードのようなものが広がり、パスワードを打ち込む画面が浮かび上がった。これだよ、これ！これを待っていました！

「よし、パスワード入力つと……あれ？」

パスワードが受理されると同時に、無数のコマンドが浮かび上がったが、そのどれもが真っ黒に塗りつぶされており、内容を見ることすらできなかつた。

そこに書かれているのは、《規定条件を満たしていません》の羅列。思わず腰から下の力が抜け、横の太木へ凭れかかる。

「何が規定条件だ……何がしたいんだよ、こいつは……」

思わず懐から煙草を取り出し、火を点ける。吸い慣れた煙を口から吐き出したが、その美味さが否応無しに現実を突き付けてくるようだった。

夢で煙草の味を感じるなど、ありえないことだ。

2本、3本と続けざまに煙草を吸うも、頭の中は真つ白のまま。むしろ吸いすぎで頭がクラクラしてきた。

「どうすりや良いんだ……こんなことになるなら、もっとラノベを読んでおくべきだったのか？」

考えが纏まらなくて苛々する。

それに、森の奥から聞こえてくる荒っぽい足音に、余計に神経が掻き乱されるようだ。いや、待て……足音って誰か居るってことじゃないのか？

何かから逃げるような荒っぽい足音が近付き、遂に「それ」が姿を現した。

(子供、か……？ 随分と汚れてるけど)

何か声を掛けようとしたが、そもそも日本語が通じるんだろうか？

何処かで転んだのか、子供の顔や服には黒い泥がべったりと付いており、性別すらよく分からない。髪の毛は金髪だし、目に至っては赤色ときてる。

とても日本語が通じるとは思えないが、何はともあれ、この子供に色々聞いてみるしかないだろう。

（九内の口調って、かなり気障で皮肉屋だったよな）

自分が創作したキャラではあるが、ラスボスだから滅多に出てこないしな……。どうか記憶を辿りつつ、まずは確認のために子供へ話しかける。

「あー、その、何だ。君は言葉は通じるか？」

「逃げてくださいッ！」

「は？」

見ると、子供の後ろには剥き出しの骨でできた翼を持つ、化物が居た――

その体はくすんだ灰色をしており、ファンタジー世界などでよく出てくるガーゴイルに酷似している。そのシルエットに頭の中が真っ白になり、またしても笑いが込み上げ

てきた。

どうにもこうにも、本気で俺は変な世界へ迷い込んだらしい。

(いや……変なのは俺の頭の方か?)

日本の、いや、世界中の何処を探しても、こんな生物が居るはずも無い。居て堪るか、と叫びたくなる。

「何と言うべきか……後ろの可愛くない化物は君のペットかな? なら、大人しくするようにはしゃげてほしいんだが」

「早く逃げてください! これは悪魔です!」

悪魔。悪魔ときたか。

もう笑えば良いのか、逃げた方が良いのか、それとも命乞いでもすれば良いのか、サツパリ分らない。俺はいつたい、何に巻き込まれてる?

「——矮小なる人間、血肉を捧げよ」

「怖ッー！」

思わず持っていた煙草を落とす。

真つ赤な眼をした化け物が、“食い物”を見る眼でじりじりと近付いてくる姿は控えめに言ってもホラーだ。と言うか、普通に怖い。もう叫びながら逃げたい。

猛ダツシユで逃げようとした瞬間、化け物が大きな手を振りかぶり、凄まじい速度で顔面へ爪を叩き付けてきた。額に鈍い痛みが走り、目の奥からチカチカと赤い光が迸る。

「いっ……っ……」

こいつ、本気で襲ってきた……？

俺を、殺そうと？

腹の底から、得体の知れない感情が込み上げてくる。

「——お前、何のつもりだ？」

とても自分の声とは思えない、低い声が喉から漏れる。戸惑っているような化物が視界に映った瞬間、目にも止まらぬ速さで右手がコートの内側へと伸びた。

——自動反撃発動！

(ちよ、体が勝手に……！)

自分の意思とは裏腹に、手足が勝手に動き出す。

理想的とも言えるフォームから、稲妻のような速度で——ナイフが投擲された！

九内の反撃！

「リベンジ」——判定成功！ 反撃ダメージ増加！

「必殺」——判定成功！ クリティカル率30%増加！

クリティカルヒット！

致命的ダメージ——悪魔王グレオールは消滅した！

——熟練度500 OVER！

「強制突破」「極連撃」——判定失敗！ 相手は既に斃れている！

——戦闘スキル発動！

「覇者」——判定失敗！ 相手は既に斃れている！

「開眼」——判定失敗！ 相手は既に斃れている！

「粉碎」——判定失敗！ 相手は既に斃れている！

——生存スキル発動！

「瞑想」——判定成功！ 九内の体力が回復した！

頭の中に次々と「戦闘ログ」が流れ、その内容に眩暈が起こる。

これ、完全にGAMEのままじゃないか！

気付けば襲ってきた化物の姿は跡形もなく、ナイフが突き刺さった衝撃なのか、その体は完全に爆散してしまっていた。これではどちらが化物か分からない。

「……………」

誰も言葉を発せぬまま、痛い程の静けさが森を覆う。
ごくりと唾を飲み込み、恐る恐る口を開く。

「ま、まあ、その……何だ、 “正当防衛” というやつだな。私は悪くないぞ」

目の前に居る子供からの視線が痛い。

あれは明らかに怯えと恐怖を湛えた目だ。

どう考えても正義のヒーローを見る目ではないだろう。

「ま、魔王様……食べないでください！ ぼ、僕は美味しくありませんからっ！」
「ふざけんなよ！ 人を何だと思ってるやがる！」

こうして、未知の異世界へ一人の魔王が舞い降りた。

中身は只の一般人でしかない彼が、この残酷な異世界をどのように生きていくのか。
それはまだ、誰にも分からない――

情報の一部が公開されました。



悪魔王グレオール

種族 最上位悪魔

レベル 34

体力 45 / 666

気力 200 / 200

攻撃 66

防御 66

俊敏 66

魔力 66

魔防 66

魔法

死の風 火炎地獄 暗黒破壊光線 その他多数
スキル

上級悪魔使役 支配強化 その他多数

遙か昔、智天使によつて封印された大悪魔。

上級悪魔すら使役する、悪魔種の“王”と呼べる個体。

封印によつてその体力は激減しており、本来の体力には程遠かったが、その圧巻の防御力を前にして、傷を付けられる者など存在するはずもない。

多くの魂を喰らい、肉を喰らい、その体力を取り戻した暁には、あらゆる地上に地獄を齎したであろう。



くないはくと
九内 伯斗

種族 人間

年齢 45 (NPC故、年を取らない)

武器 —— ソドムの火

投、斬、共に使用可能なナイフ。

回数無限。

追加効果として一定確率で「火傷」を与える。

防具 —— アサルトバリア

LV30に達していない者からの攻撃を無効化。

耐久力無限。

GAMEには存在しなかった「魔法」には効果が無い。

所持品 —— 帝国法典

九内を打倒したプレイヤーに与えられるアイテム。

実は何の効果もない。

これが効果を生み出すのはGAMEではなく、リアル世界であった。

所持品 —— マイルドヘブン

大帝国で最も人気のある煙草。

他にもバスターやハイナイトなど、多様な煙草が存在する。

GAME特有のシステムと言うべきであろうか？

体に悪いどころか、吸えば気力が回復する仕様となっている。

レベル 1

体力 40000 / 40000

気力 600 / 600

攻撃 70 (+50)

防御 80 (+20)

俊敏 60

魔力 0

魔防 0

属性スキル

FIRST SKILL | 突撃

SECOND SKILL | 目潰し

THIRD SKILL | 迅雷

戦闘スキル

狂撃 強制突破 脱力 威圧 必中 必殺 本能 統率 リベンジ 深慮遠謀

開眼 覇者 粉碎 無双 限界突破 孤高

生存スキル

回復 闘争心 二面性 一枚上手 瞑想 医学

決戦スキル

暴君 その他多数

特殊能力

ADMINISTRATOR (管理者権限)

— ? —

— ? —

— ? —

「GAME」のラスボスからガワと能力だけ借りた、中身は大野晶という社会人。

カテゴリーとしては一応、一般人ではあるが、腹を括ると相当なタマ。

長いゲーム運営と、社会人生活で鍛えられており、

あらゆる状況に合わせての「演技」が非常に得意。

「逸一般人」——でも言うべきか。

ラスボスという設定だけあってステータスが異常に高いが、

特筆すべきは、その異次元とも言える体力。

一見すると無敵のようにも思えるが、GAMEには無かった「魔法」に対し、何の抵抗も持っておらず、非常にアンバランスな存在。

ちなみに、体の奥底には「元的人格」もしつかりと存在している。

その性、極めて冷酷にして、残忍――

4143792人という、屍山血河の頂点に立つ正真正銘の魔王である。

魔王と悪

人の気配など絶えて久しい森であつたが、今日は二人もの人間が居た。

一人は怪しげな長髪の男であり、もう一人は子供だ。

「わ、私は……九内と言う。怪しい者ではないぞ？　まして、魔王などとは無縁の存在だ。幾つか君に聞きたい事があるのだが、良いかね？」

男……いや、「魔王」が長い髪を後ろへとやりながら口を開く。

何と名乗るのか、それなりに苦悩があつたようだが、最終的には九内と名乗る事にしたようだ。子供を前にして、一応は大人らしい口調を心掛けているようだが、そのメツキはすぐにでも剥がれそうであつた。

「は、はい……」

魔王が怪しまれぬよう、精一杯の笑顔を浮かべて話すものの、子供は目を一杯に見開

き、体をカタカタと震わせていた。

無理も無い、目の前であの最上位悪魔が吹き飛ばされたのだ。

この世界において、アレがどれ程の存在であるかを知っていれば、当然の反応と言えた。最上位悪魔を歯牙にもかけない存在——それは「魔王」以外にありえないではないか。

見ただ目まで——魔王として相応しい容貌であり、怖い。

「その前に、君の名前を聞くべきか。良ければ聞かせて貰えんかね？」

「ぼ、僕はアクと言います……」

その返事に魔王が「ブホオ！」と嘖き出し、激しく咳き込む。まあ、気持ちとは分からないでもない。「魔王」と「アク」とは——何の判じ物であろうか。

「と、とても良い名だな。それで、日本という国は知っているかね？ もしくは、ニュー

ヨークなどでも良い」

「す、すみません……僕は聞いた事がないです……」

魔王が小さく「だろうな」と呟きながら煙草に火を点ける。吸いすぎだ。

彼の見るところ、アクが着ている服はどう考えても近代的な服ではない。粗末な布で出来た服のような代物に、申し訳程度の青い紋様のようなものが入っているだけであり、お洒落には程遠いものだ。

下には膝に届くか届かないかくらいの半ズボンを履いており、顔の綺麗さと相俟って余計に性別を分かり辛くさせている。

髪はショートヘアであるが、前髪だけは異様に長く、顔の左半分を覆ってしまっていた。

魔王は思わず、ストレートに性別を聞きそうになったが、大人としての矜持で何とか堪える。

流石に初対面の子供に向かって「お前は男か？ 女か？」などと聞くのは恥ずかしいと思っただろう。

彼が「九内伯斗」であれば、あらゆる手段を用いて情報を根こそぎ吐き出させたであろうが、中身が「別人」であつた事がアクに幸いした。

魔王の質問は止まらない――

この世界の名前は？ この森は何だ？ 先程の悪魔は何だ？

それに対するアクの返事はしどろもどろであり、要領を得ない。

と言うより、アクには余り知識らしい知識がないようであった。

この世界の常識などは問題なく弁えているようだが、大きな世界的な知識などは持ち合わせていないのであろう。

服装からしても、只の村人である。

村人Aと一般人Aが膝を突き合わせたところで、何が得られるという事もない。

「聞きたい事はまだあるが……その前に、そこに湖があつてな。先に泥を落としてくればどうだ？」

「い、良いんですか!？」

「ん……? ま、まあ、良いんじゃないのか。ついで体も拭いてくると良い」

「あ、ありがとうございますっ!」

アクが浮かべた笑顔に一瞬、魔王が喉を詰まらせる。

彼は汚れた顔と服を見て、何気なく言ったに過ぎない。そう、彼は知らないのだ——この地において「水」というものが、どれ程に貴重なものであるのかを。

この地では飲料としての分と、煮炊きに使う分で精一杯であり、それ以上を求めるのであれば当然、有料であった。

体を拭く事に水を使える者など、一部の人間だけの特権である。

この僻地においては、水が重要な財源となつて領主を潤していた。



(はあ……どうしたもんだか)

アクがうきうきとした足取りで湖へと向かう姿を見送り、*「俺」*は溜息をつく。

折角の情報源を見つけたと思いきや、アクは何の変哲もない村人であり、得られた情報は少なすぎた。分かったのは精々、この国の事とアクが住んでいるという村の事だけである。

(聖光国だっけ？ そんな国、地球にある訳ないよな……)

あの悪魔を封じた、智天使とやらを信仰している国であるらしい。その下には智天使に仕える3人の聖女と呼ばれる存在や、聖堂騎士団やら、聖堂教会やら、もう呆れて笑うしかないような単語の羅列を聞かされた。

ファンタジー世界、ここに極まれりだ。

青春真っ盛りの高校生とかが飛ばされるならまだしも、こんなオッサンと呼ばれるのにリーチがかかっている社会人を呼んでどうしようというのか。

そこまで考えた時、嫌な予感が頭をよぎる——呼ばれたのは、“自分”ではないんじゃないのか、と。

(呼ばれたのはむしろ、この体の方じゃないのか……?)

これだけ不思議な体験を連続で目の当たりにすれば、一般的な常識が段々壊れてくる。プレイヤーの一人でもあった、ダイナマイト☆死国なども「猫も杓子も異世界転移ですよ」などと笑っていたではないか。ゲームキャラだろうが、仏像だろうが、戦国武将だろうが、もう何が召喚されてもおかしくない世の中だ。

そんなぶつ壊れた頭で考えるなら、この“体”が呼ばれたのも納得がいく。

何の目的があるのか知らないが——“九内 伯斗”であるなら、使い道は幾らでもあるだろう。ただ、呼ぶ筈であったキャラにたまたま自分が“ログイン”していたというだけの話で。

(要するに、俺は「巻き込まれた」って事じゃないか！)

そこまで考えが及んだ途端、怒りが湧きあがってくる。

このクソ親父の所為で、自分はこんな訳の分からない世界へ放り込まれたのだ。絶対そうだ、そうに違いない。と言うか、そう思わなければやってられない。

(さっさと帰る手段を見つけないと)

今回に限っては幸いと言うべきだろうか？ 既に両親とは死別し、独り身ではあるが、どう考えても会社が不味い。

こんな歳になつて無断欠勤などしようものなら、何を言われるか……。

(そうと決まれば、何処かの街に向かうべきか？ それとも、この森で手がかりを探すべきか？)

ゆつくりと辺りを見渡すが、森には不気味な静けさだけが広がっている。

余り、長居したいような場所ではなかった。

(それにしても、アクのやつ遅いな……遅くない?)



(生きてて良かった……っ！)

アクは今、喜びの絶頂にあった。

透き通るような大量の水に浸かり、存分に体や服を洗えるのだ。村長ですら、こんな贅沢は出来ない。自分達が体や服を洗える時など、精々が雨を待つしかないのだから。

それも少量の雨ではなく——大量の雨が必要だ。この地はかつて悪魔が跋扈したお陰で大地が枯れ果て、古井戸も殆どが毒に侵されており、最低限の水を確保する事すら難しい。

何より——只でさえ「穢れた身」なのだ。こんな機会は絶対に逃せない。

(それにしても、あの人は何者なんだろう……)

裸になり、湖に首まで浸かりながらアクは考える。

あの最上位悪魔を一撃で消し去ってしまった人。やはり、神都の伝承に残っていると
言われる——魔王と呼ばれる存在なのだろうか。

あの黒尽くめの全身を見ている限りでは、とても天使様とは思えない。

大体、この森に一人で居たこと自体が異常だ。この森には伝承に残る聖なる祠などが
あり、立ち入るのは憚れる場所なのだから。

この森には綺麗な湖があるとは言われていたが、誰もここへ入れなかったのは、伝承
への憚りだけでなく、あの悪魔まで居たからに他ならない。

(まさか、僕の体を綺麗にしてから食べようか……?)

体に悪寒が走る。

このまま逃げたくなったが、服は綺麗に洗って木に干してあった。

下手をすれば裸で逃げる事になりかねない。他にも悪魔が居るかも知れない事を考
えると、自殺行為だ。

「おーい、まだか？ あくしろよ」

「ご、ごめんなさいっ！ すぐに出ますから！」

「いや、すまん、一度言ってみたかっただけだ。ゆっくり泥を落としてくれ」

ゆっくりと言われても、魔王様を待たせっていると考えると体に震えが走る。今はまだ、自分を生かしておく理由があるのかも知れない。

が、少しでも機嫌を損ねたら命はないだろう。

今もブツブツと何かを言いながら、両手を忙しく動かしている。

何か、呪いの儀式でもしているんだらうか？

「やった！ 管理機能が使えるようになった！」

カンリキィノウとは何だろう……古の邪神の名だろうか？

言われて見れば恐ろしい感じがする名だ。そして——自分の考えは正しかった。

魔王様の前に漆黒の空間が浮かび上がり、その中に躊躇なく右手を突っ込まれたのだ。中から出てくるものを想像するだけで泣きそうになる。

暗黒の鎌だろうか、それとも闇の呪装具だろうか、もしかすると、自分を食べる為の

“食器”かも知れない。

「よしよし、出てきた……ほれ、石鹼とバスタオルだ。これを使え」

「へ……？ まさか、これってシャボンですか!？」

「じゃ、シャボンで。まあ、良い。私は念の為、この辺りを一通り見てくる」

それだけ言うと、魔王様は湖から離れていった。去りながらも「SPがガンガン減るな……」などとよく分からない事を呟いていたけど、何の事だろう？

いや、それよりも今はシャボンでしょ！ 死ぬまでに一度で良いから使ってみたいと思っていた、夢の品！こんな、貴族様でもないと思えない高級品を一体、何処から!？」



「何が役立つかわかんもんだな……」

管理画面を開きながら、思わず心の声が漏れる。

先程、とある事で管理者としての権限の一部が解放されたのだ。GAMEの独特のシ

ステムであるSPを消費する事によって、使用出来るようになったらしい。

スキルポイント

SP——GAMEでは戦闘や反撃、アイテムの使用などで増減するポイントだ。

GAMEではこれを消費して強力なスキルを覚えたり、守りを固めたり、逆に敵から奪う事によって弱体化させたりする。

この世界でも、戦闘によって問題なく入手出来るようだ。

「しかし、あんなゴミアイテムで5Pも使うとはな……」

下級アイテム作成——5P

中級アイテム作成——10P

上級アイテム作成——20P

希少アイテム作成——50P

管理機能が解放された喜びについて、はしゃいで作成してしまっただが、作った物がショボすぎた。石鹼とは投属性のゴミ武器であり、バスタオルも体の防具なのだが、効果は共に+1で目も当てられない代物だ。

GAMEの後半でこんなものを装備していたら、5秒も経たぬ間に瞬殺されるだろ

う。

「残りは30ちよいか……貯めればもつと他の項目も解放されるのか？ それとも、他の条件もあるのか？」

さつきの敵がどれだけの強さだったのかは分からないが、入手したSPを見るに、相手のレベルは相当高かったようにも思える。

だが、その割には余りにも雑魚すぎた。相手の弱さと、得られた成果がまるでチグハグであったのだ。

「何もかもがGAMEと一緒に、って訳では無さそうだな……」

GAMEではバランスを取る為に自分と相手とのレベル差によって、入手出来るSPが大幅に増減するようになっていた。つまり低レベルが高レベルを攻撃すればSPを大量に、逆なら僅かしか入手できないというシステムだったのだ。だが、高レベルの者は例外無く、凶悪極まりない存在であった。

「つまり、アレか……あいつは金属的なスライムだったのかもな」

国民的なRPGに出てくるモンスターが頭に浮かぶ。

弱くて逃げ足は速いが、倒せば莫大な経験値が入るといふやつだ。この辺りにまだ出没するなら、一匹残らず、徹底的に狩るべきだろうか？

「ま、魔王様！ お待たせしました！」

「だから、私は魔王では……ああ、もう良い。それより、さっきの雑魚はこの辺りにまだ出没するのか？」

「と、とんでもない！ あんなのが他にも居たら国が滅びますよー！」
「え〃っ……アレってそんなにヤバい奴なの？」

アクが激しく首を動かし、肯定する。

もしかすると、俺の認識は大分ズレているんだろうか……ともあれ、管理機能を十全に使う為には、SPの入手が何よりも最優先だ。

出来る事なら、森を出る前にSPを十分に稼いでおきたい。

この調子じゃ、外に出ても何が起こるか分かったもんじやないだろう。

何より、SPを稼いで管理機能を全て解放すれば、元の世界へ戻る方法などが出てくる可能性だってある。

「アク、あいつの巣穴や寝床などを知らないか？ 少し調べてみたい」

「悪魔王は……この森にある、『願いの祠』に封印されていたと聞いています」

「願いの、ね……すまんが、そこに案内してくれるか？」

「す、すみません。案内したいのは山々なのですが、僕は足が弱くて……」

よく見ると、アクの右足首には大きな傷が残っている。大きな裂傷でも負い、殆ど処置出来ないまま傷だけ塞がったような、痛々しいものだ。

いや、そう決め付けるのは早計か？ この世界特有の病気という可能性もある。

残念ながら、自分は医者でも何でもない。NPCの中には、あらゆる病気や怪我を治癒する反則的な存在がいたが、無い物ねだりというやつか……。

「仕方ない……おぶってやるから背中に乗れ」

「と、とんでもない！ 魔王様の背中に、僕のような汚い身に乗せるなんて！」

「すまんが、時間が惜しくてな。二度は言わん、早くしろ」

「……………っ」

しゃがんで背中を向けたものの、まるで乗ってくる気配がない。

それどころか、その俯いた顔は苦渋に満ちており、今にも泣きそうであった。

おいおい……泣く程に嫌だつて事か？ 流石に傷付くんですけど!?

「ぼ、僕は昔から村の厄介者なんです。だから、いつも村のゴミを集めて捨てたり、糞尿を集めて捨てる仕事をしたり、自分なりに頑張つてたんですけど……」

「……要するに、ゴミ処理だの下水処理つて事だろう？ 大切な仕事だろうが」

「いつも、村の人から汚い、臭いって……それで、とうとう、悪魔への生贄に出されちゃいまして……」

あはは、とアクが泣き笑いのような表情を浮かべる。

よく分からんが、余り聞いていて気持ちの良い話ではなかった。こんな小さな子供にそんな仕事をさせて、あまつさえ、その仕打ちはないだろう。

「村の皆が言うんです。僕に触ると『穢れる』つて……だから」

まるで、小学生の虐めでも見ているようだ。

空いた口が塞がらないとは、この事を指すんだろう。俺は黙ってアクの襟首を掴むと、問答無用で背中へと乗せた。

「ちよ、ちよつと！ 待つて下さい、僕に触れると！」

「そんな事で人間が穢れたりするもんか。人間の体なんざ、洗えばいつだって新品になるんだよ」

「……………っ」

「それより、その祠って場……………」

言おうとした言葉が、途中で詰まる。

背中から——嗚咽が聞こえてきたからだ。

（ちよ……………何かマジ泣きしてるし！ と言うか、傍目から見たら誘拐犯みたいになつてないか、俺!!）

よく考えたら、泣いてる子供を無理やり攫ってるような姿に見えなくもない。

この世界に警察のような組織があれば、間違ひなく逮捕されるだろう。異世界へ来て早々、誘拐犯として投獄なんて前代未聞すぎないか？

「貴方は、僕に触れても平気なんですか……っ」

背中から聞こえる声に、何と答えるべきか一瞬、悩む。

アクの境遇を聞くに、ずっと汚いだの穢れるだのと言われ続けてきたのだろう。

現代ならトラウマにでもなつて、鬱病コース一直線だ。下手すりゃ、自殺してもおかしくない。

「アク、お前は私を魔王と言つたが——お前に穢される程、魔王という存在は脆弱なのか？」

ヤバイ、ちょっとキザな言い回しだったか？

会社の同僚に今の台詞を聞かれたら、10年はネタにされるに違ひない。

「いえ……そんな事はありません……っ」

アクの体から力が抜け、背中にかかる重みが増したように思えた。

と言っても、この体ならダンプカーですら片手で引つ張れそうな気もするので、子供の体重など何の問題もない。

「ありがとうございます……魔王様……」

アクの柔らかい体が背中に密着し——その体からは、石鹸の良い香りがした。

「……お前、ちよつとくっ付きすぎじゃないか？」

「そ、そんな事ないです！」



情報の一部が公開されました。

アク

種族 人間

年齢 13歳

所持品 —— 石鹼（大帝国製）

この世界の石鹼は原始的な製法と材料で作られた粗悪な物であるが、貴族や富豪、娼婦などが大枚を叩いて購入する為、一般に出回る事は少ない。

世界の大半を支配した超技術大国「大帝国製」の石鹼は凄まじいまでの作り込みがなされており、比べるのも愚かしい程の差がある。

所持品 —— バスタオル（大帝国製）

あらゆる分野において「変態的」とも称される程に、こだわりや職人芸を見せる大帝国であったが、一枚のバスタオルにも様々な工夫がなされている。

このバスタオルも「柔軟剤、替えたる？」と言われるような柔らかかさがあり、その吸収性は他の追随を許さない。

防具 —— 布の服

防御力など皆無。

但し、悪魔王への生贄に出すという事で、村の水準からすれば上等な類を着せられた。貧しい者は、麻で作られた物を着ているケースもある。

レベル	1
体力	10 / 10
気力	20
攻撃	1
防御	1
俊敏	1
魔力	1
魔防	1

アクは前髪だけ長く、その長さは顔の左半分を覆う程である。お洒落ではなく、その左目が碧色の為であった。

ヘテロクロミア(虹彩異色症)であった為、余計に虐めの対象となったのであろう。両親は幼くして病死しており、それが村全体での迫害に拍車をかける事となった。

願いの祠

長髪の男が、年端も行かない子供をおぶって歩いている。

それだけ聞けば親子のようにも思えるが、男の姿が異様であった。この世界では珍しいとも言える黒い髪をしており、それが女性のような長髪ときている。

トドメに全身の服まで黒尽くめであり、見る者が見れば悪魔か死神のようにしか思えないであろう。

「願いの祠とか言つてたな？　それはアレか、賽銭でも投げて手を合わせるような場所なのか？」

「僕も詳しいことは分かりませんが、その祠の力を借りて、智天使様は悪魔王を封印されたと聞いています」

その言葉に「オカルトかよ」と、魔王が小さく呟く。

彼はつきり神社か何かの親戚のように思っていたのだが、どうも違うらしい。そもそもその話として、智天使だの悪魔だの言われても、ピンと来ないのだろう。

中の人とも言える大野晶は宗教には無関心であり、無神論者に近い。

九内伯斗に至っては、神とは何ぞやと問われれば——それは即ち「自分」であると答えるだろう。

どう考えてもファンタジー世界で生きるには不適合としか言いようがなく、異端審問などがあれば、真つ先に火炙りにされるべき男達であった。

「何だか、行っても目ぼしいものは無さそう気がしてきたな……」

「そ、そんなことはありません！ 来訪者の願いを叶えるって言い伝えがあるみたいですよ」

そう言いながら、アクが首に回した手の力を強める。

魔王の歩くスピードが恐ろしく速いらしい。振り落とされないためであろうが、どうも態度を見ていると、それだけではなさそうだ。

「こ、こんなに、誰かと触れ合ったのなんて、その、はじめて、です」

アクが背中に顔を押し付けるように言ったが、それを聞いた魔王は片眉を上げる。

(こいつの性別って、未だにさっぱり分からのだが……)

「ま、魔王様が祠に行かれればきつと、世界を支配する力とかが！」

「要らんわ、そんな力！」

既に大人としての態度が崩れつつある魔王であったが、ようやく目的地へと辿り着く。人気のない森の中でも、更に人が近寄らぬであろう空間。

それは大きな岩肌にポツカリと空いた——洞窟であった。



(おいおい、この臭いって……)

洞窟に近づくとつれ、異臭が鼻をつき、魔王が顔を顰める。

「アク、ここで待ってる。中は危なそうだ」

「は、はいっー！」

臭いの原因はすぐに分かった。洞窟の奥に、人の死体が散らばっていたのだ。

大きな爪で体を裂かれたような死体や、細切れになった体の一部、黒焦げになっている死体、それらが流す大量の血や、腸からバラ撒かれた糞尿などが混じり合い、酷い異臭を生み出していた。

(黒魔術の儀式かつっーの)

それらの死体を見下ろすように、一つの石像が鎮座している。

見るからに邪悪さが漂っている像であり、これが動き出して人を殺したのかと思えるほどだ。願いの祠という名称と、この有様は余りにも乖離しすぎていた。

魔王が更に足を一步進めた瞬間、像の目が赤く光る。

その姿を見て魔王の右手がナイフへと伸びたが、像はそれつきり動くことはなく、むしろ、その目は侵入者の全身を観察しているようであった。

動くはずもない像の口が開き、何事かを呟く。

「なるほど——確かに『魔王』である」

「……ん？」

「幾多の願いを叶えてきたが、恐らくはこれが最後になるであろう」

「ちよ、ちよつと待て……お前は何を知ってる？　もしかしなくても、俺を呼んだのはお前か？」

魔王の問いに像は暫く沈黙していたが、やがてその口を開く。その返答は魔王にとつては極めて重大であつたが、像はあつけなく口にする。

「我ではなく——その者達と言うべきか。『魔王を降臨』させよ、とな」

「こいつらが……!?　さっきの化物もこいつらが呼んだのか？」

「あれはとうに自力で復活した——奴のお陰で、我の力は尽きかけておる」
「尽きるつて……なら、その前に俺を元の世界へ戻してくれ」

像の返答は実にシンプルであつた——「それはできない」と。

酷く断定的な口調に、魔王が頭を掻き耨る。

「何でできないんだよ。賽銭でも欲しいのか？ それとも、ここの連中みたいに死体を捧げろ、とか言い出すんじゃないだろうな」

「そんな死体は、グレオールがやったものよ。それに、願いに“反する願い”は叶えられぬ——」

魔王の降臨を願われ、叶えた——それを反故にするような願いは叶えられないということだろう。ある意味、律儀であった。

「とはいえ、お主が最後の来訪者であろう——これを与える」

像から禍々しい指輪が現れ、魔王の指へ強制的に嵌められた。そのおぞましいデザインを見て、魔王が必死に外そうとするが指輪はビクともしない。

「お前、ふざけんなよ！ こんな指輪着けて歩くとか、罰ゲームだろうか！」

「お主の願いが——叶うことを祈る——」

「この邪神野郎っ……ちよつと待てよ！」

「我とて、元は白き姿であった——長きに亘る、人間達の邪悪な願いがこの身を変えた」

その言葉を最後に像がボロボロと崩れ出し、遂には砂となって台座から零れ落ちていく。その姿を見ても魔王にはどうすることもできず、その崩壊を呆然と見守るしかなかった。

「はあ……こんな指輪だけ貰っても、どうすりゃいいんだよ」

右手の中指に着けられた指輪を見て、魔王が項垂れる。

「どれだけ力を入れようと、何をしようと、全く外れないのだ。見た目もそうだが、完全に負のアイテムであった。」

「管理者権限——《アイテム鑑定》」

魔王がブツブツ言いながらアイテムの鑑定をし、更に項垂れる。

これが「呪いの属性」を持つアイテムなら、解呪するアイテムを使って外そうとしたのだが、アテが違ったらしい。

「何で普通のアイテム扱いなんだよ……そのうえ、鑑定にもSP使うとか……」

魔王の溜息は終わらない。

これでは願いの祠どころか、溜息の祠だ。洞窟の外へ出ると、アクが笑顔で「どうでした?」と話しかけたが、魔王は仏頂面のままであった。

「やっぱり世界征服でしょうか? それとも、酒池肉林とかですか?」

その言葉を聞いた魔王は無言でアクの首に手を回し、がっちりロックする。そして、おもむろに軽いゲンコツを頭へと見舞った。

「ヨガッ! ヨガッ!」

「痛い痛い! 止めてください、魔王様!」



(どうしたもんだか……何処かの街にでも行って、情報を集めるべきか?)

“俺”は長い髪を後ろへ跳ね飛ばしながら、思考に耽る。

知らないこと、分からないことが多すぎるのだ。

このまま何も知らずにいたら、思わぬ落とし穴に嵌りかねない。こんな辺鄙な森に居るのも、そろそろ切り上げ時だろう。

(あの死体からは何も見つけられなかったしな……)

思い出すだけで、吐き気がしそうな光景だった。

GAMEの中ではいつでも死体が溢れていたが、現実で見るとは違いすぎる。さっきの悪魔とやらがあの光景を作ったと言うなら、消しておいて正解だった。

あの悪魔は、生きていてだけで死体を量産したに違いない。

「アク、この辺りに大きな街などはあるか？」

「はい……ですが、その前に僕の村へ寄ってもらえませんか？ 少ないですけど、持ち物

とかもあるのです……」

「うん？ お前、付いてくる気か？」

「だ、ダメでしょうか……その、生贄に出されたのに、また戻って生活するわけにもいなくて……うう……」

アクの言葉に頭を抱えそうになったが、悪くない提案だと思い直した。何せ、自分はこの世界のことを知らな過ぎる。

この世界の住人が隣に居れば、何かと心強いだろう。それに、これまでの話を聞いている限りでは、アクはその村に居てもロクな目に遭わないだろうしな。

「分かった、先にお前の村へ行こう。近いのか？」

「ありがとうございます！ 魔王様の足ならすぐです！」

こうして再度、魔王が子供をおんぶして歩く図が出来上がった。

魔王は「子連れ狼じゃあるまいし……」などとぶつぶつ言っていたが、アクの頬は緩んでおり、心なしか嬉しそうであった。



(この際だ、村に行くまでに色々聞いておくか……)

道中、様々な疑問や質問をアクへぶつけてみる。

今更ではあるが、日本語が通じるようだし、メモ帳に書いた日本語や数字、アルファベットなどを見せたりもしたが、問題なく読めるようであった。

何らかのフィルターでもかかっているのか、元から日本語が通じる世界なのか、その辺りまでは分からない。

「ま、通じるならそれに越したことはない……この歳になって異世界語の勉強なんて真っ平だしな」

「……? とても綺麗な文字で読みやすかったですよ?」

そう、メモ帳に書いた文字は恐ろしいほどに達筆だったのだ。

俺ではなく、九内の字が綺麗なのだろう。流石は高官という設定だけはある。

自分の字が汚い分、妙な所で敗北感を覚えてしまった。

「しかし、生贄とはまた前時代的なもんだな……この辺りでは、そういう風習でもあるの

か？」

「悪魔王が何年か前に復活して、この辺りを荒らしまわったので……周辺各村から順番に生贄を出す、つてなつたみたいですよ……」

「よく分からんな……お前の言つてた『国』は何もしないのか？ 討伐なり何なりしても良さそうなものだが」

「この辺りは、神都から遠く離れた地なので……」

要するに『都会』から見れば、どうでもいい土地つてことか？

日本でも限界集落だの、離島だの、ニユースでたまにやっていたが、あんな感じなのかも知れない。

「あの、魔王様は……何処からいらつしやつたのですか？」

何と答えるべきか一瞬、迷う。

日本と言つても分からないだろうし、まして大帝國など余計に意味不明だ。あれは自分の妄想が作つたGAME世界であり、現実には存在しないのだから。

「ま、まあ……遠くと言っておこうか」

曖昧に言葉を濁し、足を早める。ありのままに話しても誰も信じないだろうし、良くて狂人と思われるのがオチだろう。

「あ、魔王様、あの柵の向こうが僕の村です！」

「あれか……」

いつの間にか『魔王』と呼ばれることに慣れつつある自分が怖かったが、柵の向こう側の光景はもつと怖かった。

ゴーストタウンというより、まるで怪談に出てくるような、寂れた村が目の前に広がっていたのだ。



情報の一部が公開されました。

装備品 —— 魔王サタンの指輪リング

座天使が残した最後の奇跡。

世に混沌と破滅を齎せば、数多の願いが叶うだろう。

地に光などなく、無からの再構築が望ましい。

管理者権限 —— アイテム鑑定

時間の経過により、権限が復活。

SPを1消費する。

アイテムの名称と属性を判明させる程度で、詳しいことは分からない。

上位アイテム鑑定の権限も存在するが、まだまだ先は遠そうだ。

魔王の指輪

まだ明るい時間だというのに、その村からは「人の活気」とでもいうものが殆ど感じられなかった。山奥などにある、閉鎖的な村が頭に浮かぶ。

「何だか余所者は信用できん、とか言われそうな村だな」

「は、はい……僕の村は、余所から来られた方を嫌う傾向にあります」

本当にそうなのか……偏見で言っただけだったんだが。

あわよくば食料や路銀とかを分けてもらおうと考えていたが、そんな目論見は通りそうもなかった。

「僕の家はこつちです。少し嫌な思いをさせてしまうかも知れませんが、どうかお許しください……すぐに済みますので」

アクが背中から降り、右足を引き摺りながら歩き出す。

その後ろ姿を見ていると、物悲しい気分になる。アクはまともな医者に診てもらおうとができなかったのかも知れない。

アクの後ろを付いていきながら、村の中を油断無く見ていくと、やはりと言うべきか、近代的な文明を感じることはできなかった。

(家屋は剥き出しの木と、固めた土……藁の屋根もあるな)

日本なら当然あるべき、室外機やアンテナなどは全く見当たらない。

ここが、日本とはまるで違う世界なのだと再認識する。

辺りを一つ一つ確認していると、遠くに村人の姿もチラホラと目に入ってきた。

GAMEの影響か、咄嗟に身を隠してしまう——GAMEでは他プレイヤーに見つくとロクな目に遭わないので、殆ど職業病に近い。

「応戦姿勢、変更——《隠密姿勢》」

その言葉を発した瞬間、まるで風景に同化するように体がぼやける。

GAMEでは相手からの発見率を劇的に下げる効果のあるものだったが、その分、攻

撃と防御が大きく下がってしまいうデメリットも抱えてしまう。

自分の姿が消えたことを確認し、ホッと胸を撫で下ろす。

内心、少しドキドキしていたが、周りの反応を見ている限り、自分のことをまるで視認できていないようだ。

ここまでGAMEのままだと、空恐ろしくなってくる。

この世界は——GAMEにあった全てが具現化するのだろうか？

なら、他にも色々試してみるべきだろう。

「あれ……魔王様？」

やはり、アクからも見えていないらしい。

この絶好とも言える状況下で、是非試したいことがある。

GAMEでは余り使う事は無かった《通信》はどうだろうか？　これはプレイヤー間でメッセージを残す機能だ。

GAMEを開始した当初は、当然のことながらスマホなんて物は無かった。あの頃だと通信は重宝されていたが、近年では完全に錆付いていた機能である。

《通信 “アク” へ——聞こえるか?》

《……え。頭の中に魔王様の禍々しい声が!?!》

《禍々しいは余計だ。私のことは気にしなくて良い、近くに居るんでな》

《は、はいっ》

無事、通信機能が動いていることを確認できた。

やはり、色々と試してみるもんだ。あのまま一人で森に居れば、何も分からなかったことばかりだったであろう。

俺はもつと、アクに感謝しなくてはならないのかも知れない……。

(しかし、俺の神経も凶太いもんだな……普通なら、そろそろ泣き叫んでもおかしくないような状況だと思っただが)

もしかすると、体の持ち主である “九内本人” に意識まで引き摺られているのかも知れない。

(よせ、よせ……何のホラーだったっの)

自分で考えておきながら、それはとても——恐ろしい想像だった。
慌てて首を振り、下らない妄想を振り払う。

「おい、ゴミ人間——何でお前がここに居る！」

不快な言葉に目をやると、村人らしき数人がアクを指差して怒鳴っていた。
考えなくてもすぐ分かる。これがアクを虐めていた連中なのだろう。いや、村全体が
そうなのかも知れない。

「ゴミ人間、まさかお前……逃げ出してきたんじゃないだろうなッ！」

「冗談じゃない！あの悪魔がこの村に来たらどうするつもりだ！」

「生贄に出された意味を分かってんのか!？」

村人達が口々に叫ぶ内容に頭が痛くなる。

こいつらは子供に何を言っているのか、ちゃんと分かっているんだらうか？

とは言うものの、この世界の住人でも何でもない俺が、この世界の事情(?)に口を

挟むのは中々に難しいものがある。

この世界では、悪魔に生贄に出すのが当たり前の世界なのかも知れない。外国の独特な風習や、「日本では考えられないが、とある国では常識」などというのは現代でもよくあることだ。

(とは言っても、な……)

やはり、大の大人が子供を責め立てているのは気分の良いものではない。隠密姿勢のまま連れて行けば、騒ぎにならないで済むんだらうか？

『不快に思うなら、*“*粛清*”*すれば良い——』

頭の中に響いた声に、背筋が凍る。

それが*“*誰*”*であるのか、すぐに分かってしまった。そして、右手の中指から発する——耐え難い痛み。思わず手を押さえ、その場に蹲る。

余りの痛みに、とてもじゃないが立っていられない……！

『不適切だと断じた者を処分する——その“権限”が“私”にはある』

ふざけるな……あれはGAMEの話だろうが。

現実に生きてる人間を粛清だの、処分だの、そんなことができるはずがない。

『妙なことを言う。そんな権限を、GAMEを、システムを、あんな狂った国を作ったのも、全部——“お前”ではないか』

その言葉に、思わず黙り込む。

『お前こそが“諸悪の根源”なのだ。私が魔王なら、お前はさしずめ全世界に破滅を齎す——』

指輪を潰れるほどの力で握り締め、無理やり声を掻き消す。

こんなもの、幻聴に過ぎない——そう信じて、強く目を閉じる。色んなことが起こりすぎて、きつと、俺は疲れているんだろう。

《アク、そんな連中は放っておいて荷物を取つてくるといい》

暫く待ったが、返事がない。

目を開けると、仰向けに倒れているアクの姿が目に入った。村人が手を振り上げ、何か汚い言葉で罵っているようだ。

これ以上はとも見ていられず、隠密姿勢を解く。

途端——村人達が大騒ぎする。いきなり姿を現したのだから無理もないが、その狼狽っぷりは中々に笑えるものがあつた。

「アク、早く荷物を取つてこい」

「わ、わかり………ました」

アクが足を引き摺りながら家へ向かう姿を確認し、ゆっくりと煙草に火を点ける。

その間も村人達の騒ぎは収まらず、その数はどんどん増えていく。本来なら様々なことを聞くべきなんだろうが、この連中とは会話をする気が起きなかつた。

「あ、あんたは悪魔なのか……？ あのお方の、手下なのか……？」

「この村には手を出さないでくれ！ 生贄は出したはずだ！」
「約束が違う！ 悪魔といえど契約は守るものだろ！」

煙を吐き出しながら、村人達の言葉を考える。

悪魔との約束や、契約とは興味深い言葉であった。それらを「先方」が守るつもりがあるのかどうか、甚だ心許なく思えるが。

むしろ、契約を持ち掛けて相手を雁字搦めに縛ろうとしたんじゃないのか？

「お待ちせしました、魔王様！」

「ま、魔王だつて!?!」

「ままま魔王！」

(おいおい、余計なことを言うな……!?)

アクの言葉に村人達のざわめきが一層、大きくなっていく。

とは言え、この連中相手に誤解を解く気力もない。子供をゴミ呼ばわりし、生贄に出し、あまつさえ村全体で虐める。

こんな連中相手に頑張る必要があるだろうか——？ いや、無い。

「りよ、領主様に連絡してくるぜ！」

そう言つて、アクを転ばせたらしき男が走り出す。

その顔には嫌らしい笑みが張り付いている。

男は何かを思い出したのか、一旦家へと戻り、出てきたときには鞆らしき物を手にしていた。褒美を貰つたとき、入れるための物なのだろう。

無意識に——眉間へ皺が寄る。

まるで自分の感情に呼応したかのように、指輪が妖しい光を放つ——だが、今回ばかりは止める気がしない。

右手がコートの内側に伸び、無造作に男の家へとナイフを投擲した。

狙い違わず、ナイフが家の壁へと突き刺さり、刀身から黒い炎が噴き出す。木でできた家は一瞬で火が回り——黒煙に包まれていった。

「い、家が……俺の家があああああ！」

『——アツハツハツ！ 火はいつ見ても良い、心が洗われるようだ！』

突然、口を突いて出た言葉に仰天する。

慌ててアクを背中に乗せ——この場から逃げ出す。勢いでこの指輪に身を任せてしまえば、大変なことになってしまいそうだ。

（放火魔みたいになってんじゃねーか！）

冷や汗を掻きながら、全速力で走り出す。景色が飛ぶように流れ、まるで自分だけが早送りで動いているようだった。

「ま、魔王様——だ、大丈夫なんですか、あれ！」

「ご、誤解するなよ、あれは暖を取ってやったのだ。むしろ、私の優しさと言っても過言ではない。うん、そんな気がしてきた！」

走り出した足はもう止まらない。

適当なことばかり言う口も、もう止まらない。

「で、でも……! 少しだけ、すつきりしちゃいました!」

そう言って、アクが笑う。

それは出会ってから初めて見た“笑顔”だったかも知れない。

「そ、そうだろう! やはり、人の優しさというのは伝わるものだな!」

適當すぎる言葉に、今度は自分が噴き出してしまう。

気付けば、二人で大笑いしていた。

空を見れば、明るかった太陽が沈み、夜の帳が下りようとしている。この疲れ知らずの体なら、何処までも走れそうであった。

「魔王様、何処まで行くんですか!」

体を吹き抜けるような風の中、アクが叫ぶ。

これまでその顔には、何処か暗さが見え隠れしていたが、今は年相応の明るさと輝き

があつた。思わず——自分も歳を忘れて叫び返す。

「都会へ——『神都』とやらに行くぞ！」

こうして、軽い放火魔と化した魔王様と、明るい『悪』の旅が始まつた。
二人が巻き起こす数々の騒動が、聖光国を大騒ぎさせていくこととなるが……

——それはもう少し、先のお話。

一章 — 魔王降臨 — FIN



情報の一部が解放されました。

「ステータス」

攻撃や防御などの「1」とは、平均的な人間が持つ数値である。

これは子供であれ、大人であれ、変わらない。

つまり、「2」という数値であるなら、平均的な人間の2倍の数値。

まして「3」などになると3倍の数値であり、これが4や5ともなると……

強引に現代に当て嵌めるとするなら、

それは超一流のアスリートや、オリンピック選手などに近いと言えるだろう。

この世界における1と2ではかなり違いがあり、一つ上の数値へ行くには、大きな壁が存在している。それは「才能の壁」と言えるものかも知れない。

「気力」

様々な用途に使われ、魔法などもこれを消費して放たれる。

基本、これが尽きるまでは全力で動ける指数。

超一流の戦士ともなれば、50は備えているとも。

これは二時間もの間、全力で動ける数値だ。

九内の気力は600。

彼はGAMEの仕様上、24時間——常に全力で動けるようになっていた。
どうしようもない“怪物”であり、“魔王”であった。

二章 聖女

聖光国

——聖光国 僻地の領主館

この辺りの寒村を幾つか支配している領主、ピリツツオ・ラングは久しぶりの朗報に喜色を浮かべていた。何と、蘇った「悪魔王」が死んだというのだ。

只でさえ税金などロクに望めない地であるというのに、あんな化物に荒らされてはどうしようもないではないか。

(運が巡ってきた……)

そして、続けて入ってきた「魔王降臨」の一報。それを聞いたとき、ピリツツオは完全に運命の女神が自分に微笑んでいることを感じた。

悪魔王の復活に対し、神都にどれだけ早馬を送ろうと、なしのつぶてであつたのだ。しかし、魔王の降臨ともなれば——流石に無視はできないだろう。

(出来るだけ大袈裟に騒いで、神都を巻き込むべきだ)

ビリッツオ本人は、魔王などという存在を信じていない。

愚民が騒いでいるだけのことだと思っっている。自身がこのまま一生をこの僻地で終えることを恐れているのだ。

何らかの騒ぎが起きれば、この閉塞感しかないクソつたれな僻地から抜け出せる可能性がある。

(一つの村を焼き払った、とでもしておくか?)

報告では一軒の農家が延焼した、というだけであつた。

それを聞いて、ビリッツオは失笑したものだ。

それだけでも、魔王などという存在が眉唾ものであることが分かる。ビリッツオの見解では大方、食い詰めた傭兵崩れが放火でもした、といったところだ。

(しかし……悪魔王は何故、死んだ?)

遙か昔、智天使様が封じたときれる存在。

とてもではないが、人がどうこうできるような次元の生物ではない。地震や台風などの「災害」に近いものだ。

(不完全な復活であつたということか。伝承とは、得てしてそんなものよな)

ピリッツオは生まれたときから貴族であり、苦勞を知らない男だ。

台風が消えたのなら、別に原因まで追究しようとは思わない。ただ、それをネタにして、どうにかこの腐った境遇から抜け出そうとするだけである。

(よし、その魔王が悪魔王を滅ぼした、ということにしよう！)

臭いものに臭いものを押し付ける、名案だとピリッツオは自画自賛する。

しかし、彼は知らなかった。

その適当なでっち上げが——紛れも無く「事実」であることを。



——聖光国 某所

修道服を着た女の子が、その清楚な服には相応しくない金切り声を上げていた。彼女は今、豪華な馬車に乗って僻地へと向かっているのだが、馬車の揺れが気に食わないらしい。

「あんだねえ、私に対する信心が足りないんじゃないのっ！」

その声に、馬車の手綱を握る御者が首を竦める。

馬車に乗せているのは貴人の中の貴人——“聖女様”の一人なのだ。

下手を打てば、本当に火炙りにでもされかねない。特に三人の聖女様の中でも、末っ子である彼女は非常に我侷であり、誰もが手を焼く存在であった。

だが、その見た目——外見は聖女と呼ばれるのに相応しい容貌である。

ウエーブのかかったピンク色の髪は、桜を思わせるような可憐なものであり、瞳まで淡いピンク色であった。修道服に包まれているとは言え、その手足は非常に細く、魅力

的だ。

尤も、まだ子供ということもあって、胸部だけはまな板であったが。

「私はね、今から伝承に謡われる魔王を討伐しに行くの！ その前にお尻にアザでもできたらどうするつもり!?」

「も、申し訳ありません……この辺りは道も舗装されてないもんでして……」

「あんた……それ、御政道への批判ってわけ？」

「め、滅相も無い！」

確かに、この辺りは道と言えるほどの立派なものはない。

神都などでは石畳を敷き、時には魔法で道も舗装しているが、貧しい地域は殆ど野晒しであり、雨などが降れば水捌けをするだけでも大変である。

「し、しかし、他の聖女様はいらっしゃらないので？」

「なあに、それ……私一人じゃ手に余るとも言いたいの？」

「とんでもない！ ルナ様なら、お一人でも十分でさあ！」

「フン、当然でしょ。いつまでもお姉様に負けてられないんだからっ！」

ルナ・エレガント——16歳。

名は体を表すと言うが、どうもエレガントには程遠い聖女であった。

馬車の周りには25名にも及ぶ護衛隊がついていたが、彼女はそれらの力など全くアテにしていない——自分一人で討伐し、自分だけの功績にするつもりであった。

事実、彼女は魔法に関する天賦の才がある。

それは“魔王”と戦うにあたり——強力な刃となるであろう。



——聖光国 神都への道中

そんな、周辺がキナ臭くなっていく少し前——

人気も明かりもない道で、“魔王”と子供が騒いでいた。

見た目の組み合わせとしては親子に近いが、どうも違うらしい。魔王の方は顔を赤くしており、微妙に酒が入っていた。通りがかった親切な馬車から、何本か酒を貰ったらしい。

「我が英知の欠片よ、出でよ——《サバイバルグッズ》」

魔王が漆黒の空間に手を突っ込み、大きな物体を取り出す。

それは大帝国製のアイテム。その名の通り、野営に関する様々な物が詰め込まれており、GAMEでの必需品の一つであった。

「魔王様、凄いですっ！ 他にもあるんですか!？」

対する子供も少し、顔を赤くしている。酒は飲んでいないが、雰囲気だろう。

この世界では規制など無いに等しく、子供でも普通に酒を飲むが、魔王が止めたようだ。

そういうところでは、妙に小市民な魔王である。

ちなみに、この地では水の方が高く——酒の方が安い。

「我が『漆黒』に果ては無い——《防衛グッズ》」

この魔王、ノリノリである。

妙なポーズを取りながら更にアイテムを取り出す。

こちらも大帝国製のアイテム。他プレイヤーから身を守るため、様々な物が詰められており、これまたGAMEの必需品であった。これらは単体では何の効果もないが——
“合成”した時に真価を発揮するのだ。

「アイテム合成——《砦設置》」

魔王の言葉に従うように、二つのアイテムが合成されていく。そして、瞬く間に“拠点”が出来上がった。GAMEでは他プレイヤーからのダメージを大きく減少させ、完全に回復行動を取れる優秀なアイテムである。

拠点へ更にアイテムを組み合わせ、様々な機能を持たせることも可能であった。

「これは魔法ですか?!? 凄すぎますよ、魔王様!」

子供——いや、アクが感極まったように魔王へ抱きつき、魔王の方も上機嫌な笑い声を上げた。

「これは魔法ではないぞ？　アク、お前に大切なことを一つ教えておこう」

そうやって、魔王が一つ呼吸する。

そして、さも重大な事を告げるようにアクへ指を突きつけた。

「良いか——大帝国に不可能はない！」

魔王が長い髪を掻き上げ、そのまま拳を天に突き上げる。

見るからに馬鹿っぽい姿であった——いや、只の酔っ払いか。

アクは何も分かっていないのだろうが、手をパチパチと叩いて拍手していた。

「これ、凄く……大きいです。それに、カチカチで、硬いです……」

アクが怪しげなことを口にしていたが、酔っている魔王は気付かない。それどころか益々、上機嫌そうな声をあげ、自慢し始める始末であった。

「こいつはロケットランチャーなどの《砲撃》にも耐えられる仕様だな。GAMEではこいつが無ければ、まともに寝ることもできなかつたものさ。《強化資材》や《防火壁》などで補強していけば、中規模、大規模と拠点の防御力を更に底上げすることも可能だぞ」

「ホウゲキ、ですか……？ 魔王様のお話は難しいです……」

「まあ、頑丈だということだ。アク、今日はこの拠点で寝るぞ。私はデリケートなんで野宿なんぞ真つ平ゴメンだしな」

「はいつ、家事はお任せください！」

マイペースな二人が鼻歌を歌いながら拠点の中へと入っていく。

周辺に漂う怪しい気配など、今の二人は知る由もなかつた。

SP残量——残り10



情報の一部が解放されました。

「拠点」

サバイバルグッズと防衛グッズを合成することによって完成。

他、プレイヤーからの攻撃ダメージを減少させ、砲撃からも身を守る。

砲撃にはSPを減少させるものや、防具の耐久力を奪うものなどもあり、

これに対して無防備でいると、致命的な事態を招く。

拠点と言うだけのことはあつて、中にはパイプベッドやドラム缶風呂、簡易的なキッ

チンなども備えられており、最低限の生活を送ることが可能である。

これが中規模や大規模の拠点になると、内装も遥かに豪華となっていく。

どういう素材でできているのか、その防御力はRPG-7やRPG-29などの対戦車擲弾発射器の攻撃をも防げる規模。

この世界において、これを破ることは至難の業であろう。

GAME特有の仕様でこれを設置するのも、小さく畳んで持ち運ぶのも自由である。

忍び寄る影

——聖光国 神都への道中

(これが、お風呂……！)

拠点に入ってからというもの、アクは驚きっぱなしである。

自分達の家とは根本的に違う——「頑強さ」を最初に感じた。例えば、熊や猪などが突っ込んできたとしても、ビクともしないのではないだろうか？

相手が凶悪な魔物であっても、ここが破られる気がしない。

拠点の中にはベッドやキッチンまで備え付けられており、つい自分が一端の人間になつたような気分になつてしまう。

家では藁などに粗末な布を敷いて、その上で寝るのが精々だったのだ。

それに比べれば、まるでここは天国である。

(極め付けは、このお風呂——！)

魔王様が言うには「ドラム缶風呂」というらしい。

驚くべきことに、この中には温かい「お湯」が入っていたのだ！ 信じ難いほどの贅沢さであり、入っている今も、体の震えが止まらない。

（でも、魔王様は何故か謝ってたけど……）

正確には「すまん、今はこの拠点が限界だわ」だったかな……？

正直、言っている意味がよく分からなかった。

只、これが「限界」だと言うなら、それは当たり前のことだ。これ以上の贅沢など、自分には想像も付かない。

（魔王様は何処から来たんだろう？ 魔界とか、そんな風に思ってたけど……）

酔ったときに口に使っていた「大帝国」というのが、少し気になった。

もしかすると、そこが魔王様の故郷なのかもしれない。

そんなことを考えていると、魔王様の声が扉の向こうから聞こえてきた。

「狭くて悪いな。だが、見ていろ——いずれは『温泉旅館』を設置してやるぞ」

それだけ言うと、魔王様はまた足音を立てながら去っていった。

魔王様の言葉は、とても難しい……もつと自分の頭が良ければ理解できたのかも知れないけど、無いものねだりというものだろう。

(それにしても、オンセンリヨカンって何だろう?)

アクが素朴な疑問を浮かべながらも、ドラム缶風呂を堪能する——
何とも平穏な光景であった。

一方——

(この世界にも月があるんだな……)

『魔王』もパイプベッドに寝転がり、窓から見える夜空に目をやっていた。

暫くこうしていれば、酔いも醒めていくだろう。

この世界に来てそれなりに時間が経ったが、自然と元の世界へ戻る、などということは無さそうであつた。

(権限を全て戻せば、本当に帰れるのか……?)

少なくとも、管理者権限とはGAMEに関するものであり、「元の世界へ戻る」などというコマンドは当然、存在しない。

あの邪神っぽい石像に呼ばれたとするなら、似たような物を探して、それに頼むしかないんじゃないだろうか？

(一番の問題は戻れたとして、同じ時間なのか？ ということだな……)

あの日、あの時間に戻れるなら何の問題も無い。

ただ、ここで過ごした時間と、元の世界の時間が同じように動いているとすれば、それこそ致命的だ。

一カ月後などに戻ったとしたら、失踪扱いで大変な騒ぎになっているだろう。よもや

「異世界へ行つてました。えへへ」などで通るわけもない。

その日から俺は、鉄格子の付いた病院へ長期入院させられるだろう。

(当面は、あらゆる権限の回復を目指すか?)

それには何が必要なのか、まだ分からない。

単純にSPを稼げば良いのか、金でも稼げば良いのか、アイテムでも集めるのか。

いずれにせよ、ボーナスとしていても何にもならないだろう。むしろ、旅行にでも来た
と思つて楽しんで方が余程、建設的だと思える。

(戻つてもどうせ仕事の日々、か……)

「魔王様ー! ドラム缶つて幸せですねっ!」

その声につい、嘔き出す。

戦時中じゃあるまいし、あんな風呂で幸せと言われても反応に困つてしまう。

何の因果か一緒に旅をすることになったが……管理機能が戻れば、色々と驚かしてやるのも良いかもしれない。

アクはこれまで、あまり幸せな人生を歩んでなかったようだしな。

(温泉旅館、か……どうせやるなら「不夜城」を復活させてやるか?)

不夜城——「九内伯斗」をはじめ、他のNPCが全員鎮座するGAMEの最終エリア。

世界中の大富豪の中でも、特別な人間だけが招待され、リアルタイムでGAMEを鑑賞できる、という設定の場所だ。

NPCだけでなく、二千名もの兵隊で守られた、鉄壁の最終防衛拠点。

大帝国の科学力が全て結集したあれをアクに見せてやれば——どんな反応をするだろうか?

十年以上の月日に亘り、数多のプレイヤーを撃退し続けた血塗られた場所ではあるが、不夜城があれば身の安全も完璧に確保できる。

あの場所が落とされたことなど、過去に一度しかないのだから。

それに、他のNPCもこの世界に来られるなら、行動範囲も格段に広がるだろう。

「魔王様、今日もシャボンで体を洗いましたっ」

「ん……確かに、良い香りがするな」

「本当ですか？ えへへ……」

アクが嬉しそうに笑い、そのままベッドに潜り込んでくる。

金髪ということもあって、毛並みの良い子猫にでも懐かれたような気分だ。

「お前、一緒に寝る気かよ」

「ダメですか？」

「お前は私のことを父親のようなオッサンと思っているようだが、とても大切なことを伝えておく——良いか、本当の私は“お兄さん”なんだ。もう一度言っておくぞ、私はまだオッサンではない」

「魔王様、ちよつと何を言ってるのか分からないです」

こうして、魔王が無駄な足掻きをしつつ、夜は更けていく。



数日後——聖光国 山中

四十名近い「山賊」が山中に蠢いていた。

彼らはこの麓を聖女が乗った馬車を通る、という情報を聞きつけたのだ。そんな絶好の機会を山賊達が逃すはずもなく、襲撃の準備を整えていた。

この辺りでは——土竜もぐらと呼ばれ、忌み嫌われている連中である。

彼らは獲物を選ばない。

相手がどんな強者であれ、弱者であれ、等しく襲う。

それによつて、時には手痛い逆撃を蒙ることもあるが、その総数は減る数より、増えていく数の方が多い。それだけ、国が乱れているということだろう。

そんな命知らずの集団を率いる頭領が悠々と切り株に座り、麓を睥睨していた。

十代の頃から追剥ぎを始め、今では近隣にまで知られる一端の頭領である。既にその齢は51にもなるが、その体は頑強であり、壮年の頃と何ら変わっていない。

彼が酒瓶を緩やかに傾けたとき、麓に人影が見えた。

——例の獲物ではない。

彼は即座に判断したものの、別のことが頭に浮かぶ。

こんな荒野とも呼べる僻地を、馬車にも乗らず、二人で歩いている姿。

——罨か。

少人数の美味しい餌に食い付けば、後方から本隊が来る——

気付けば包囲され、ほうほうの体で逃げ出すというのはままあることだ。

彼はいまいち掴めなかつた聖女の目的が、ここに至つて理解できた。聖女は自分達を炙り出し、これを殲滅するつもりなのだ、と。

「……へつ、安く見られたもんだ」

「頭領、あの二人はどうしましょうか？」

「殺せ——後ろから本隊が来る前に退くぞ」

この道で長く生きている所為か、頭領の決断は酷く早い。

鉄火場で迷っている暇などなく、行動しなければ死ぬからだ。大事な場面で迷い、死んでいった連中の何と多いことか。

手下が音も立てずに動き出し、弓に矢を番える。

同時にそれを放つ——人を殺すことに全く躊躇のない動きであつた。



(お粗末なもんだな……)

飛んできた矢を見ながら、魔王が溜息をつく。

気配もまるで消せていなければ、その矢も至って普通のものである。

——何の力も乗っていない。

これがGAMEなら、属性スキルの《五月雨打ち》などで軽く二十数本の即死級の矢が飛んでくるであろう。

通りかかった人間へ、行き当たりばったりで撃つたのだろうか。

(あえて食らうか——?)

魔王が腹を決め、あえて矢を受けることにする。

どれだけのダメージが来るのか、試してみたかったのだろうか。あの悪魔との遭遇以来、敵対者が居なかつたため、ロクに実験をすることもできなかつた。

これは、絶好の機会であろう。

念のため、魔王は既に自動迎撃や自動反撃などの機能は切つてある。

どんな判断で“それ”が行われるか分からないため、信用できなかったのだ。下手をすれば、何の問題も無い行為に対しても、致命的な反撃をしてしまうかもしれない。化物相手ならまだしも、それが人間に向けられるともなれば流石に困ると考えたのだろう。

「アク、下がっている」

「……………え？」

飛んでくる矢が、魔王の眼にはまるで止まっているように見える。

それも当然か——彼はGAME上ではマシンガンから吐き出される銃弾を避け、ショットガンからぶち撒けられる、散弾すら回避するのだから。

飛んできた矢がようやく魔王の目前に迫ったが、体に突き刺さる前に軽い電子音が響き、矢は力を無くしたように地に転がった。

「ふむ、LV30未満か……ゴミだな」

GAMEのラスボスである九内には、システム上の上限であるLV30のプレイヤー

のみがダメージを与えることができる。それ以下のプレイヤーは、対峙する資格すら与えられない。

尤も、カンストしたプレイヤーであったとしても、魔王とはまともな戦闘にもならないだろう——彼はRPGのラスボスのように、様々なアイテムを使わなければロクにダメージも通らないし、その体力はあまりにも異常すぎた。

「人を殺そうとしながら、高みの見物か——？」

魔王の言葉に、ようやく山賊達が姿を現す。

その顔にあるのは、一様に驚愕や戸惑いであった。

「てめえ、何をした……魔法使いか!？」

「凶に乗ってんじやねえぞ。魔法使いなんぞ、気力が尽きりや只の案山子だ!」

「ほう、案山子ね……それは良いことを聞いた」

鉄火場だというのに、魔王の表情が緩む。

あくから「魔法」という単語は聞いていたが、あくはその内容までは詳しくは知らない

かったため、いまいち理解が進んでいないのだ。

「お前達の中に魔法使いが居るなら、是非とも一発見舞つてほしいもんだが」

その言葉に、山賊達が色めき立つ。

舐められている、などという次元ではない——何か、昆虫相手に雑多な実験でもしている風情であった。とうとう耐え切れなくなったのか、髭を揺らしながら頭領が顔を出す。

「おう、オツサン。随分と吹くじゃねえか」

「誰がオツサンか——！」

魔王が思わず叫ぶ。

だが、彼の外見はどう鼻肩目に見ても青年には見えない。頭領の方が面食らつたように黙り込み、山中に微妙な空気が流れた。

「俺は土竜もぐらの頭領、オ・ウンゴールつてんだが、おめえは——」

「オウンゴール？」

「オ・ウンゴールだッ！ 妙な言い方をするんじゃないねえ！」

「……で、自殺点は何の用だ？」

「誰が自殺点だ——！ てめえ、耳がイカれてんのか！」

二人のオッサンの、醜い争いであつた。

頭領の怒りに呼応するように、続々と山賊達が山から降り、二人を包围する。

「ま、魔王様！ 危ないですよ……逃げましょうっ！」

ここ数日、ドラム缶風呂に入り、心なしか肌がツヤツヤしているアクが叫ぶ。

まさに、水をも弾く年齢だ——

周囲の小汚いオッサン達の中では、完全に浮いた存在と言って良い。

「ああん、魔王だあ……？ オッサン、ガキにそんな大層な名前で呼ばせてやがんのか

？」

山賊の一人が大笑いし、周りの男達も手を叩いて爆笑する。魔王のこめかみに怒りマークが浮かんだが、山賊達が笑うのも無理はない。

周りからすれば「良い歳して、魔王ごっこか」といったところだ。

ただ、一つだけ難点を挙げるなら——その男は「本当に魔王」であったことだろう。

「よし、お前達……ゲームをしようじゃないか——」

そんな言葉とともに、九内が最初に笑った男へ「デコピン」をかます。

男が猛風に吹き飛ばされたように後方へと吹き飛び、何度かバウンドしながら無様に転がっていく。その動きが止まったとき、男の体はピクピクと痙攣し、完全に失神していた。

「ほら、次はお前の番だぞ——おや、起きられない？ 残念、私の不戦勝だな」

魔王が人を食ったような笑みを浮かべ、山賊達を見回す。

全員が息を呑んだように静まり返っていたが、やがて正気に戻ったのか、口々に騒ぎ出す。それらを見て、今度は九内が笑った。

「流石に『オウンゴール』に率いられてるだけはある。吹き飛んだ方向が自軍のゴールなのかな？」

「ふざける！ てめえ、いったい何をしやがったあああ！」

「こいつ、指に何か魔法を仕込んでやがるぞッ！」

——魔法が何ですって？

そんな言葉が聞こえ、山賊達の視線が声のした方向へと向けられる。

視線を向けたのも束の間、すぐさま悲鳴と絶叫が山中に木霊した。

声の主から金色の光が迸り、山賊達の体が——派手に千切れ飛んだのだ。



情報の一部が公開されました。

「属性スキル」

先制攻撃時、任意で発動。

FIRST SKILL—SECOND SKILL—THIRD SKILLと繋がっていく地獄の連鎖コンボ。

九内の攻撃力でこれを放ち、THIRD SKILLまで繋げてしまえば、凶悪な魔族であっても裸足で逃げ出すだろう。

GAMEでは強力な反面、武器の個数を著しく消費するため、諸刃の剣でもあった。使用武器が銃であるなら、弾丸も空っぽになってしまう。

加熱した戦場では、リロードしている間に殺されることも珍しくない。

九内の武器はNPC特有のものであり、個数は無限——

聖女

「魔王討伐に来たら、薄汚い山賊まで居るなんてね」

聖女——ルナが笑みを浮かべる。

その顔は非常に可愛らしいものであったが、その行為はえげつない。

彼女の放った金色の光は、一瞬で五人もの山賊の体を引き裂いたのだ。

「チツ……てめえら、引き上げるぞ！」

「バツカじゃないの？ 私から逃げられるわけじゃないじゃない」

ルナが小さな羽の付いた杖を掲げ、詠唱を始める。

途端、彼女の周りに金色の光が集まり出す。

それは、この世界における元ELEMENT素——

それも、彼女は極めて珍しい素を操る。

「金色こんじきに裂かれよ——《金刃／ゴールドスラッシュ！》」

瞬間、ルナの杖から無数の金色の刃が放たれ、更に六人の体がズタズタに切り裂かれた。その光景を見て、魔王の額から冷や汗が流れる。

(こいつ、マジかよ……)

初めて見る魔法に度肝を抜かれた、というのもある。

その威力に恐怖を感じた、というのもある。

だが、何より驚いたのは——こんな少女が容赦無く人を殺したことだ。

(逃げるか……?)

瞬間、そんな考えが頭に浮かんだが、即座にそれを打ち切る。少女は一人で来たのではなく、その周りに無数の兵隊を引き連れていたのだ。

それを確認したとき、迷いは無くなった。

即座に所持品から拠点を出し、その中にアクを放り込む。

「え、ま……!?!」

「一番端で伏せてろ。良いな?」

案の定、魔法を使った少女はこちらを凝視していた。

何も無い所から、いきなり建物を出してみせたのだから当然だろう。

「なあに、これ……あんだ、魔法使い? それとも、何かの魔道具?」

それには答えず、懐から煙草を取り出して火を点ける。

正直、こうでもしないと落ち着かない。

アレを食らっても、自分は平気でいられるのか? 何はともあれ、この少女相手に、動揺は絶対に見せられない——付け込まれる。

見た目は子供しか思えないが、こいつは躊躇無く、人を殺したのだ。

少女は拠点が気になるのか、近づいて手でペタペタと触ったり、興味深そうに中を覗き込んだりしている。その好奇心溢れる姿だけは、年相応で可愛らしくはあるが……

今はその「無邪気」さに恐ろしさを感じてしまう。

「見たことのない材質ね……あんた、これ、私に献上しなさいよ。そしたら見逃してやつても良いわ」

「それは取引なのかな、御嬢さん？ その約束が守られる保証は？」

「はあああ？ あんた、誰に向かって口を利いてるか分かってんの？」

「生憎と、そちらのご尊名をまだ伺っていないのでね」

悠々と煙を吐き出しながら答える。

見た目とは裏腹に、内心では心臓がバクバクと音を立てていた。逃げに徹すれば殺されない自信はあるが、余りにも相手の能力が未知数だ。

話し合いで穏便に収まるのであれば、この場はそうするべきか——？

「とんだ田舎者も居たものね……いえ、薄汚い山賊なら仕方がないか」

いつの間にか山賊の仲間数えられていることに、軽い苛立ちを覚える。

何が悲しくてオウンゴールの手下にならなければならないのか。

背後からいつ撃たれてもおかしくない名だ。

「聖女様よお……こいつは俺らの仲間なんかじゃねえゾ？」

オウンゴールが、ニタニタと笑みを浮かべながら言う。

そうだ、言つてやれ。つか、殺し合いなんてお前らで勝手にやつてろ！
何で無関係の俺が巻き込まれなきゃならんのか。

(ん、聖女だと……?)

それは確か、この国のお偉いさんだった気がする。

三人の聖女がどうたら、とかアクが言っていたよな？

「聖女様よお……このオッサンは『魔王様』だつてよ！ だつはつはつ！」

「何ですつて!？」

このオッサン、要らんこと言いやがつて！

ふざけんなよ、オッサン！

死にてえのか、オッサン！
ぶちのめすぞ、オッサン！

「オウンゴール、そんなに自殺点を決めたいのか？ だったら、てめえのゴールに決めて、空港でハバネロ入りの卵でも投げられて死ね！」

「何を訳の分からねえ事を……それと、オウンゴールだつて言つてんだろが！ ちゃんと区切れ、馬鹿野郎ッ！」

——うるさいっうるさいっ！

痲癩を起こしたように少女が叫び、その杖から金色の光が迸る——！

密かに“それ”を待ち構えていた俺は、即座に拠点の影へと身を隠す。勿論、アクが伏せている場所とは正反対の所だ。

金色の刃が拠点へぶつかり、その勢いが目に見えて落ちた。だが、その勢いは殺しきれず、体にまで刃が到達する。

「いっ……っ……っ……」

これが、魔法——咄嗟に両手で顔を庇ったが、両手がかなり痛い。だが、痛さと引き換えに幾つものことが分かった。拠点があれば、魔法のダメージも問題なく軽減される。反面、最重要の防具であるアサルトバリアは作動しなかった。

(この子供がLV30か、それ以上とは思えないしな)

カンストしたプレイヤーというのは、一種独特のオーラがある。この少女からは、まるでそんなオーラを感じない。

とは言え、もっと強力な魔法が存在する可能性もある。

——やはり、魔法は危険だ。

横を見ると、オウングールと周りの数人が地に転がっていた。やはり、と言うべきか——オウングールは手下を盾にしたのだろう。

その姿は傷だらけであったが、まだ息をしていた。

周りに居た山賊達は逃げ散ったのか、既に人影は見当たらない。

「まだ生きてるなんて……あんた、本当に魔王なの？」

「さてな。それより、いきなり攻撃してきたことへの——弁明を聞こうか？」

「弁明？ 聖女が悪しき存在を討つなんて当たり前のことじゃない」

「なるほど、お前の『遺言』として覚えておく」



「遺言ですって？」

その言葉に、ルナが思わず失笑する。

この男は何を勘違いしているのか、先程から態度がなっていない。聖女に対する敬虔な態度が欠片も見当たらないのだ。

山賊ならまだしも、この男の身なりはそれなりにしつかりとしている。

見かけない服ではあるが、着ている物の一つ一つに場違いとも言えるほどの高級感があるのだ。

その所作も決して悪くない。

何気ない動きにも洗練された気品があり、最初は没落した貴族かと思ったほどだ。

だが、ここまで聖女に対する知識の欠如を見てみると、それはあり得ない。要するに、他国の人間ということだ。

——そういえば、まだ名乗ってなかったわね。

「私は聖女の一人——こんじき金色のルナ・エレガントよ」

この男が、何者であるのかは分からない。

流石に人の姿をした者を魔王とは思わないが、危険な存在には違いないだろう。

自分の魔法に耐えたこと、いきなり建物を出現させたこと——
どちらにせよ、得体の知れない存在だ。

男はこちらが名乗ったにも拘らず、苦虫を嘔み潰したような表情を浮かべていた。それどころか、先程まで感じなかった静かな怒気まで感じる。

この男はもしかすると、他国から送り込まれた破壊作業員なのかもしれない。

「いきなり人へ魔法をぶつ放すようなガキがエレガントなあ？ 小汚いオツサンらほともかくとしても……お前、アクが怪我したらどうするつもりだったんだ？」

「はあ?? 悪人の分際で何を言ってるの?」

男が放つ気配を察知したのか、護衛が自分の周囲を囲む。いつもなら邪魔だと叫ぶところだけど、この男はちよつと底が見えない。

取り囲んで、弱つたところを魔法で仕留めた方が良さそうだ。

「あんたたち、この間抜けを捕らえなさいっ!」

馬に乗った騎兵が槍を振りかぶり、男へ叩きつける。

だが、その槍が男に届くことは無かった。まるで、見えない壁に遮られたかのように槍が停止したのだ。不可思議な現象に、全員の目が泳ぐ。

「残念、どうやら君達は——私の前に立つ『資格』がないようだ」

男が槍を握り、そのまま騎士ごと軽々と持ち上げる。

冗談のような光景に一瞬、頭が真つ白になった。次の瞬間、男が無造作に槍を振ると、騎士が石ころのように遠くへ投げ飛ばされてしまったのだ。

男は馬に乗った騎士を掴んでは次々と投げ始め、気付けば二十五名の護衛は何処にも居なくなっていた。

(なに、これ……)

その間、自分は何もできず、呆然とそれを見ていただけ——
いや、こんな事態を前に、何ができたというのだろう。

「あ、あんた……もしかして、巨人族か何かなの？」

遙か東の山脈には、化物のような巨体を持つ種族が居るといふ。

その膂力は鉄すら砕くなどと言われていたのだ。

こいつはきつと、その血を引——って、体が——

「ちよ、ちよつと！ あんた、何してんのよつ！」

気付けば、男の小脇に抱えられていた。

まさか、この男……私を攫って、あんなことや、こんなことを……!

「次は何メートル飛ぶかな」

「え？」

「その前に、〃おいた〃を躡けておくか」

「えっ……待つて、ヤダヤダ！ 何する気よ!?!」

「私は襲ってくる者には——女でも容赦しないッ！」

そこから先の出来事は——ルナが生涯忘れられぬ、黒歴史となった。

魔王の顔がキリツと引き締まり、その手が振り上げられる。

その手がルナの尻へと振り下ろされたとき——

蒼天に乾いた音が一つ、響き渡った。

「いっつったあああああああいつ！」

ルナの叫びが大空に木霊したが、魔王の手は止まらない。

その顔も、何処かオーケストラの指揮者のように荘厳であった。

スパーン！

スパアアン！

スパパパパアアン！

スパツパツパアアアアン！

リズムカルとも言える、芸術的な音色が辺りに響く。

それは掌と臀部の衝突——そこから生み出される一流の打楽器であった。

「いたあああつああい！ お、お尻、お尻やめてえええええ！」

「これは右手の分ツ！ これは左手の分ツ！ そして両手の分ツ！ 最初に戻って右手の分ツ！ これはちよつと楽しくなってきた分ツ！」

魔王が繰り広げる熱いспанキングはその後、彼が飽きるまで続いた。



— 聖光国 神都への道中

「ふう……良い汗を掻いたな」

「だ、大丈夫なんですか……？ 聖女様のお尻は……」

お仕置きを済ませ、アクを肩車しながらのんびりと魔王が歩いていった。

追っ手が来るかもしれないというのに、堂々たる態度だ。

むしろ、〃待っている〃のかも知れない。

「元から割れてるんだから大丈夫だろう」

「そ、そういう問題じゃ……」

一歩間違えば、いや、どう考えてもセクハラであった。

この国における最高の権威への侮辱——もはや火炙りですら生温いかもしれない。

そんな事態ではあるが、魔王の表情は明るかった。

先程の戦闘とも呼べない戦闘であつても——〃SP〃を入手できたからだ。

「夢が広がるな。管理機能が全て動くようになれば、ふふ……」

「ま、魔王様……ちよつと怖いです」

「さて、金も入ったことだし、今日は何処かの街に泊まるか！」

魔王は聖女が持っていた金を「慰謝料」と称し、強奪していた。

その態度は清々しいほどであり、アクが口を挟む暇すらなく、いつの間にか金の詰まった皮袋が魔王の懐に仕舞われていたのだ。

執拗なスパンキングのうえ、所持金の強奪——やはり、この男は魔王であった。

いや、只の山賊か。



「ごろじでやるううう！ あの男、見てなさいよっ！」

馬車の中でルナが唸り声を上げ、魔王への呪詛を叫んでいた。

その声に御者が首を竦め、溜息をつく。

この道中の間に、彼の髪は禿げ上がってしまったかもしれない。

「あの男……いいえ、あれは魔王よっ！ 絶対に討伐してやるんだからああ！」

その声を聞いて、周りの護衛は顔を青くした。冗談じゃない、と。

聖女様の魔法に耐え、人間をあれだけ軽がると投げ飛ばすような怪物と、どう戦えと言うのだろう。もつと言うなら、相手の動きが速すぎてまともに視認することもできなかった。

全員が「討伐軍には絶対に入らない」と堅い決意を固める。

「この馬鹿御者っ！ もつとゆっくり進みなさいよ！ お尻に響くでしょ！」
「す、すみません！」

知らない間に勝手に魔王呼ばわりされている男が引き起こす騒動は、この先、益々大きくなっていくのだ――。

SP残量——残り100以上



情報の一部が解放されました。

ルナ・エレガント

種族 人間

年齢 16

武器 —— ラムダの杖

智天使の祝福を受けた、由緒正しい杖。

この世界では非常に珍しい、気力の消費を抑える効果がある。

逆に気力の消費を増加させ、魔法の威力を爆発的に高めることも可能。

防具 —— ラムダの修道服

智天使の祝福を受けた、由緒正しい修道服。

魔法防御力を劇的に高める。

余程の魔法でなければ、彼女には傷一つ付けられない。

レベル 17

体力 ?

気力 ?

攻撃 ?

防御 ?

俊敏 ?

魔力 30 (+25)

魔防 25 (+25)

三人居る聖女の末っ子。

上に二人の姉が居るが、別に血は繋がっていない。

聖堂教会の中から資質のある者が選ばれ、年齢によつて姉妹となる。

彼女は聖女の中でも飛び抜けた魔法の才があり、

その魔力はいつたい、何処まで伸びるのか空恐ろしいほどである。

只、如何せんまともな戦闘経験が少なく、咄嗟の対応力が皆無。

その天賦の才によって蝶よ花よと育てられたこともあり、非常に我侷である。姉の前では大人しくしているが、いずれ屈服させようと企んでいる。

次女の名はキラール・クイーン。

長女の名はエンジェル・ホワイト。

異世界の街

——聖光国 交易の街「ヤホー」

「この国のネーミングセンスは色々と酷いな」

「そうですか？」

行き交う人の群れは、確かに交易の街に相応しい賑わいであった。

この街には特産品と呼べるようなものは無かったが、幾つもの大道が重なる地点にあり、あらゆる地方からの品が集まるのだ。

ターバンを巻いている者や、見るからにガタイの良い戦士も居れば、肌を多く露出させている踊り子のような女もいる。

道の端では怪しげな占いをしている老婆も居るし、大きなトカゲに乗っている商人も居た。

「よくあんなのに乗れるもんだな……」

「あれは砂蜥蜴サンドリザードと言つて大人しい生き物ですよ」

アクが嬉しそうに話す。

普段、驚かされる事が多いので、魔王に何かを教えられる事が嬉しいのだろう。

と言つても、アクも街に關しては殆ど無知である。村から出た事など、両親がまだ健在だった頃の話であり、その記憶は遙か昔のものだ。

大通りを見れば、露店も非常に多い——其々の屋根がカラフルな為、何かの祭りでもやっているのかと思える程だ。聖光国の僻地は貧しい地が多いが、反面、栄えている所は何処までも栄えている。

(格差社会つてやつか……?)

魔王はおぼろげにそんな事を頭に浮かべたが、確かにこの国の格差は酷いものであった。それは地域だけでなく、個人にも及ぶ。

かつて智天使と共に悪魔王と戦った者の末裔は貴族となり、人民の上に立つて贅沢な暮らしを享受している。

智天使を信奉する宗教のお陰で、国としては一つに纏まってはいるが、その内部は非

常に対立が多い。貴族の制度を無くせと叫ぶ者も居れば、社会に絶望し、遂には悪魔を信奉する一派も存在する。それもこれも、魔族領から遠く離れた地域だからこそ出来る内紛であつた。

魔族が跋扈する地域では、そんな「贅沢」は出来ない。

「金はあるんだし、適当に何か買つてみるか？」

「それ、聖女様のお金ですよね……」

「いきなり人を殺そうとする聖女なんて居るもんか……スパンキングされて喜んでいたようだしな。あれは性女だろう」

魔王が一つの露店に近寄り、売られている物を覗き込む。

何かの肉を焼いているようであり、微かに胡椒のような香りがした。

途端、魔王の腹が鳴る。

これまで、拠点に常備してある《乾パン》しか食べていなかったのだ。アクは大喜びで食べていたが、魔王に取っては拷問でしかなかった。

「これは幾らするんだ？」

「串三本で銅貨五枚だよ」

「アク、銅貨ってどれだ？」

「これですっ！あ、凄い……大銅貨も入ってる。えっ、これ噂の銀貨?!」

アクが驚いている姿を尻目に、小さいながらも綺麗に鑄造された硬貨を魔王が無造作に掴んで店主に渡す。他人の金だというのに、無駄使いする事に全く躊躇のない姿であつた。

「アク、私の奢りだ——遠慮なく食らうが良い」

「あの、二回目ですけど……聖女様のお金ですよね……」

「正当防衛の結果だ。むしろ、温情溢れる処置だったと言わざるを得ない」

確かに、魔王の言っている事は間違つてはいない。理由は何であれ、いきなり殺そうとしたのだから、相手は殺されても文句は言えなかつたであろう。

只、今回の場合——

相手が聖女であつた事が、色んな意味で規格外過ぎた。

「これがエロゲーなら《囚われの聖女　くあんたと子作りなんて嫌っ！く》とかつてタイトルで性奴隷コース一直線だぞ？　それを思えば、自分の優しさに泣けてくる」

「えろげって何ですか？」

「おいおい、あんた……見慣れねえ服だし、ヨソもんだろ。この国じゃ奴隷はご法度だぜ？　冗談でも口にしちやいけねえよ」

魔王の口振りに、見かねた店主が口を挟んだ。

聖光国の格差は酷いものだが、奴隷は一切、認められていない。その禁を破れば、どれだけの地位のものであれ、即座に処断される。

「まるでヨソの国じゃ、奴隷が居るみたいな口振りだな」

「北や東の方だと……あっちは野蛮だからよ」

（野蛮ね……この国のトップも十分に野蛮だったと思うんだが）

魔王は内心、そんな事を思ったが口には出さず、代わりに串を放り込んだ。



——宿屋「ググレ」

「本当に酷い名が多いな」

「そうですか……? 僕は可愛いと思うんですが」

名こそ奇妙ではあったが、ヤホーの街でも屈指と言われる最高級の宿である。

庶民には中々、その敷居は跨げない。

魔王がカウンターへと近づき、店主に話しかける。初めての街だというのに、全く物怖じない姿であった。

——クソ度胸、と言って良い。

最早、完全に開き直っているのだろう。

「店主、一番良い部屋を頼む」

魔王の言葉に店主は一瞬、眉を顰めたが、その姿を見て考え直す。

見慣れない服だが、客商売で慣らした店主の目には、その服がかなり上等な布で仕立

てられている事が一目で分かったのだ。

「一番良い部屋となりますと、金貨一枚になりますか……」

「ええええ、ダメですよ！　魔王様！」

「ま、魔王……？」

余りの値段にアクが叫んだが、店主が魔王という単語に訝しげな視線を送る。

「い、いや、私はマ・オーと言いう名でな。紛らわしくて困っているのだよ」

「そ、そうですか……」

店主が微妙な表情を浮かべたが、別にそれ以上は追及しようとはしなかった。見るからに他国の人間であり、国によっては色んな名や風習があるものだ。

そんな店主を尻目に、魔王とアクが《通信》で会議を始める。

《人前では魔王と呼ぶなど言っただろう！　私の事は“お兄さん”と呼べ》

《ええー……それは、ちよつと無理があるような……》

《なら、兄貴とか、お兄ちゃんとか、先輩とか、色々あるだろ》

《パ、パパ、とかはどうでしょう……?》

《ふざけるなよ！ 私はピチピチの独身だぞ！》

ピチピチ、などという死語を使っている時点で、この男がお兄さんなどと呼ばれる資格はあるまい。

「と、とにかく……金貨一枚だったな、これで良いだろう」

魔王が袋の中から金色の硬貨を取り出し、店主へと渡す。

アクは口を押さええられてバタバタしていたが、金を渡された店主はほくほく顔で二人を部屋へと案内した。



「……中々の眺めだな」

最高級の部屋に入り、魔王が偉そうに窓からの風景を見る。

彼は内心、部屋の豪華な内装に驚いていたのだが、アクが居る手前、格好を付けて偉そうにふんぞり返っていた。

「す、凄い……貴族様のお屋敷みたいですよっ!」

「フン……いずれ、私に相応しい『居城』を建ててやるさ!」

魔王はそう嘯いたが、それが実際に建てられた時——世界にどういった影響を及ぼしてしまうのか? この男はまだ、そこまで考えてはいない。

いや、『世界』などというあやふやなものに対し、この男は責任を負おうなどと考えるまいだろう。

一体、誰が日々の生活の中で、いちいち世界全体の事を考えながら行動などするだろうか。誰もが自分の為に働き、自分の為に食い、自分の為に寝る。

それと同じように、この男は自分の為に、全ての権限を取り戻そうとするだろう。

その結果、大量の血が流れるかも知れないし、救いが齎されるかも知れない。

未来はまだ、この時点ではどうなるのか誰にも分からないのだ——

「にしても、魔王様という呼び名は色々和不味い。他の呼び名はないのか？」
「く、九内様……とかでしようか？」

「うーん……しつくり来ないな」

注文の多い男である。

こういうタイプは得てして、外食やデートの行き先などが中々決まらない。

「……やっぱり、お兄ちゃんの良いんじゃないのか？」
「ないです」

魔王が悪あがきしていたが、アクがバツサリと切る。

最初の頃と比べ、アクも成長してきたのだろう。この調子で行けば、無知からの暴走をしがちな魔王の、良いブレーキになるに違いない。

「それにしても、さっきのお肉はとても美味しかったですねっ」

「うん……？ まあ、そうだな」

アクの無邪気な言葉に、魔王が言い淀む。

魔王からすれば、あの肉は決して美味いとは言い難いものである。血抜きがちやんとされていないのか、肉も固く、獣臭さが残っていた。

だから胡椒のようなもので、香りを無理やり誤魔化していたのだろう。

その流れもあつて、魔王はわざわざ最高級の宿へと来たのだ。夕食ぐらい、まともなものをお願いしたくなつたに違いない。

「あ、でも、僕は《乾パン》も大好きですよ。ほんのり甘くて幸せになります」
「幸せ、ねえ……」

アクがふにやつと表情を崩し、それを見た魔王の顔が一瞬曇る。

あれは災害用の非常食なのだ。

確かにGAMEの設定上、変態的とも言える大帝国は、非常食にもこだわりを見せ、味にも様々な工夫をしていたが、魔王の気分的には食事とは言えない。

「なら、次の『幸せ』を求めて今日は豪勢なディナーと行くか」

それを聞いたアクが嬉しそうに魔王のもとへ歩み寄り、その手を掴む。

一瞬、魔王の目が痛ましい右足へと向けられたが、彼は何も言わず、その体を抱えて肩へと乗せた。

「その前に、お前の服をどうにかしよう。この世界ではどうだか知らんが、デイナーの場では、服装も大事だからな」

「服ですか?？」

最早、魔王の意識の中では、聖女の金などという事は完全に忘れ去られているのだから。完膚なきまでに自分の金扱いであった。その目には一片の曇りも無い。

オウンゴールがこの姿を見れば、「あいつこそが山賊だ」と叫ぶ事だろう。

こうして、“魔王様と悪”のお買い物が始まった――



情報の一部が公開されました。

「魔法」

この世界における元ELEMENT素を操り、発動する。

基本となる四大元素——「土」「水」「火」「風」

理外とされる——「光」「魔」の六つを以って為す。

中には上位互換が存在し、壁を踏み越えた者だけが、その領域を駆使する。

才ある者は素を組み合わせ、混合の素すら扱う者も。

魔法名の文字数により、第一魔法〜第十魔法まで存在するが、

規格外の魔力を持っていた、悪魔王ですら第六魔法が限界であった。

ちなみに聖女であるルナが駆使していたのは——「金」

「光素」の上位は「聖素」であり、

彼女の使う「金」は「光」から独立した、オリジナルとも言える元素。

これを食らって死ななかつた自殺点は、特殊なスキルを持っていた為である。

悪の御嬢様

——人氣服飾店 「ファッションチェック」

店主が店に入ってきた二人へ鋭い目をやり、上から下まで一瞬でチェックする。

黒い髪に、見慣れない服——完全に他国の人間であつた。

とは言え、この街は他国の人間には非常に寛容だ。交易で持っている街なのだから当たり前とも言えたが、氣質的にもこの街は明るい。

だが、店主が眉を顰めたのは——その後ろに居る子供だ。

乞食一步手前、とも言えるような粗末な服を着ている。前の男と比べれば、そのアンバランスさはどうにも拭い難い。

(奴隷か……?)

幾ら他国の人間であつても、奴隷は不味い。

本来なら街の外で待機させるなり、預かつて貰うなり、あからさまにはしないのが最

低限のルールだ。この客の身なりは非常に良いが、その辺りの暗黙の了解を知らないのだろうか？

「いらつしやいませ、今日はどのようなものをお探でしょうか？」

にこやかな営業スマイルを浮かべ、男へ話しかける。

会話の中でそれとなく探り、指摘するしかないだろう。下手にこちらにまで飛び火してきたら堪ったものではない。

「すまんが、この子に似合う服を用意してやってくれ」

「ど、いえ……こちらのお客様に、で間違いないのでしょうか……？」

「うん？ そうだが」

奴隷に服を用意する？

もしかして、そういつたプレイでも楽しんでるのだろうか。良い服を買い与え、それを無理やり破い……いや、そこまで深く考える必要はないだろう。

商売は商売だ、金を払うと言うなら藪を突くことはない。後は、奴隷でないことを確

認すれば良いだけのことだ。

「私は人の服を選ぶのが苦手だな。プロに任せるよ」

そう言つて男が懐から皮袋を取り出す。

見た目からして、かなりの重さがありそうだ。思わず、喉がごくりと鳴る。もしかすると、この客は金貨の一枚でも落としてくれるのではないか？
そんな嫌らしい予感が胸をよぎる。

「これが一番、大きいな……こいつで頼む」

男が無造作に取り出したものに、仰天する。

取り出しただけで、店内が明るくなるほどの眩き——「大金貨」であった。

「な」つ……お、お客様……そ、それで選べ、と……？」

「うん……？ 足りないのか？」

「滅相もないっ！ 今すぐに、すぐに、御用意させていただきます！」

物珍しそうにあちこちを見ていた「高貴な御嬢様」をエスコートさせるべく、全従業員を呼び付ける。念のため、今日は休日のもも呼ぶように指示を伝え、同時に飲み物を用意させた。

人生で今、一番頭が回転しているかもしれない。

「それと、煙草を吸いたいんだが、灰皿を」

「この手にツ！どうか、この手に灰を落としてくださいませっつ！」

「怖えーよ！　そういうのじゃなくて、普通の灰皿と、何処か座れる椅子を」

「この背にツ！どうか、この背にお座りくださいませッツ！」

「怖えーよ！　何だ、この店?！」

二人が無限ループを繰り返している間、アクは店員にエスコートされ、見たこともないような沢山の服に囲まれることとなった。



店内が見たこともないほどの活気に包まれている。

休日であった者も駆り出され、五人もの店員が慌しく走り回っているのだ。

それらがアクに張り付き、あれよこれよと様々な服やアクセサリー、帽子などを持ち寄って時ならぬ大騒ぎとなっていた。

無理もない、魔王が——「大金貨」を出してしまったのだから。

智天使が残した、数が限られている「ラムダ聖貨」を除いては一番上の通貨なのだ。大金貨など、国を代表するような大商会の者でなければ、お目にかかることはあるまい。

店主が奮発し、アクが気に入った服を運んだ者には銀貨一枚の臨時ボーナスを出すと言ったことで、店員達の目にも完全に火が灯ってしまった。そんなことも知らず、魔王は窓の外に目をやり、活気に満ちた大通りの風景を見ては頬を緩めている。

どうやら、賑やかなのが嫌いではないらしい。

異世界へ来たことを、しみじみと実感しているような姿であった。暫くすると、後ろにかかっていたカーテンが開かれ、アクが姿を現す。

「あ、あの……に、似合いますか……？」

「お、おう……」

白いドレスを身に纏ったアクに、魔王が密かに息を呑む。

妙な所で大雑把な魔王は、アクの性別も知らないまま適当に店に入ったのだ。そして、出てきたのは——小さなお姫様である。

「如何でしょうか、お客様……良ければ、他の物もお持ちしますが」

「そ、そそそうだな……似合うものは全て貰おうか」

動揺した魔王が煙草の灰を床に落としたが、店主の動揺の方が大きかった。

「す、すすす全て、でございますか……お客様……」

その言葉にアクが何か言いそうになったが、店主の声の方が遥かに早かった。

「みんなっ！ 早くッ！ 御嬢様に、最高の服をツツッ！」

「はいっ！」

こうして数え切れないほどの服や下着、靴などが次々と購入されていくこととなっ

た。何を見ても、魔王が「似合う」と言ったためである。

確かに、アクは何を着てもよく似合うのだ。可愛らしいものだけでなく、ボーイッシュなものを着ても非常に合うため、得な顔をしているとも言える。

購入した物が次々と宿へと運ばれ、宿屋の主人まで目を剥くこととなった。

だが、何と言っても最高級の部屋に泊まる「お大尽」である。さもありませんと頷き、上客の到来に思わずガッツポーズを作った。

こうして、魔王とアクは一瞬で「他国の王族」「北方の大富豪」などと噂されるようになり、その周辺は益々騒がしくなっていく。

魔王が聞けば大笑いし、アクが知れば失神するだろう。



買い物を終え、宿屋ググレに連結しているレストランに二人が現れた。

魔王はいつものスーツではなく、白いシャツの上に黒いタキシードを着ている。

胸元にもポケットチーフを入れ、中々の伊達男っぷりであった。アクも最初に着た白いドレスに身を包み、目を奪うような可憐な少女となっている。

店内の客達は嫌らしくない程度に二人に目をやり、話題のタネの一つとした。

「あまり見慣れない服だが、あれが北方の流行なのか？」

「都市国家群で、似た服を見たことがあるぞ」

「あの二人、親子かしら？」

「いや、違うな。そんな空気じゃあない」

「噂じゃ、小国の王族らしい」

「とんでもない富豪と聞いたぞ。さしずめ、商売の下見つてところじゃないか？」

「あの少女の服のためだけに大金貨を使ったとか？」

「よほど、溺愛しているようだな……」

其々が好き勝手なことを話す中、二人がテーブルに着き、メニューを広げる。

魔王はボーイへ適当に注文すると、先に一番良いワインを持ってくるように言った。遠慮もクソもない態度である。

その姿を見て、余計に周りの勘違いが進むのだが、本人はそんな空気を知りもせず、実にマイペースであった。

「入るなり、一番良いワインか」

「商人ではなく、鉾山の主かもしれないな」

そんな声を尻目に、魔王がおもむろに煙草へ火を点けた。

この世界でも葉巻めいたものがあるが、れつきとした交易品であり、一本で幾らと
いった値段が付けられる高級品である。

彼の持つ煙草は見たことのない白色であり、それだけで人の目を引いた。

全員が密かに注目する中、彼は運ばれたワインに口につけると「合わんな」と一言洩
らしたのだ。いったい、普段は何を飲んでいるというのか。

しかも、何を思ったのか一番安いエールを注文し直し、それに口を付けるとニツコリ
と笑顔を見せたのだ。

「うん、リーマンにはやっぱりこれだな。最初の一杯はこれに限る」

リーマンという聞き慣れない単語であったが、地方の名なのだろう、と客達は勝手に
脳内で変換する。何せ北方は10ヶ国近い国が群雄割拠しており、北東には都市国家群
まである。

聖光国からすれば、他国は未だ野蛮な——乱世の状態であった。



(格好付けるとロクな事にならない……)

「俺」はエールで口直しをしながら、運ばれてきた肉を切り分け、口へ放り込んだ。こっちは中々にいける肉だ。昼間食ったモノとは違う。

本当はGAMEで使われていた大帝国製の物を食ったり、飲んだりしたかったが、Sの消費はできる限り避けなければならない。

「本当に、夢、みたいですよ……」

「……うん？」

前を見ると、アクはテーブルの上の料理に何も手を付けていなかった。

真っ白なドレスに、頭には王冠のようなティアラまで載せられており、何処かのお姫様のようにも見える。

「ありがとうございます。僕なんか、こんなに、いっぱい……」

「気にするな。それより、冷めないうちに食おう」

「気に——しますよ」

アクから向けられる、強い視線に思わず手が止まる。

左右の異なる瞳——赤と碧の光に、思わず気圧されたのだ。見ているだけで何やら神秘的なものを感じてしまい、つい視線を逸らしてしまう。

「どうして、こんなに良くしてくれるんですか？」

「……別に、良くしたつもりはないが」

実際、良くしたつもりなどない。

俺のやったことと言えば、襲ってきた化物をブチ殺して、挙句に軽い放火魔と化し、聖女にスパンキングをして金を強奪したに過ぎない。

改めて並べると、酷いものである。

自分のやってきた所業に思わずエールを噴き出しそうになった。正当防衛とはいえ、鬼畜と呼ばれても仕方があるまい。

「この恩を、どう返せば良いのか分からないんです」

「別に返す必要など無い。そもそも、恩なんて与えたつもりもないしな」

言いながら、次々に肉を口へ放り込む。

冷めた肉とぬるいビールは、この世で俺が最も嫌うものだ。

特にぬるいビールは酷い。愛する酒がこの世で最も不味くなる様には、人生の無常さすら感じてしまう。

「魔王様、何でも言ってくください。僕にできることなら何でもしますから」
「ん？ 今、何でもするって言ったよな？」

その言葉と同時に、店の入り口から大きな声が響く。
それどころか、ドアが蹴破られていた。

「——見つけたわよ！ 魔王っ！」

そこには先日、スパンキングをした聖女が顔を真っ赤にして立っていた。心なしか息も荒く、興奮しているようだ。故に、俺が返す言葉は一つしかなかった。

「また君か。ストーカーを注文した覚えは無いんだが——」

第二次聖女大戦の開幕である——

金色のルナ

「——見つけたわよ！ 魔王っ！」

自分の叫び声に、店内がざわめく。

ちよつと不味かったかもしれない……魔王の討伐はお姉様達に知らせず、勝手に城から抜け出してきたしまったのだから。

変に騒ぎになると、神都にまで届くかも知れない。そうなってしまうと、どんな横槍が入るか……。

「ふむ、この国では——ドアを蹴破るのがマナーなのかね？」

魔王の言い様に、頭の血管が切れそうになる。

テールには先日とは違う格好をした二人が居たが、その服は随分と高価な物だ。まさかとは思うが、自分のお金が無くなっていたのは……。

「あんたね……私のお金を盗ったのは！」

「ディナーの席を騒がし、挙句に盗人呼ばわりかね？ いやはや、この国の見識を疑うな」

「ふざけないでっ！ あれは私が貯めてきたお小遣いなものよ！」

「額に汗して働いたわけでもあるまい？ 国のトップがこれでは、治安が乱れるのも無理はないな。少しは民衆の声に耳を傾けてはどうかね？」

この魔王、話題を逸らして——人の金を盗ったのを有耶無耶にしようとしている！

その狡猾なまでの話術に、握った拳が震えてきた。

現に魔王は自分から目を逸らし、あらぬ方向を見ている。

「返して、私のお金……！　そして、死ぬっ！」

「言い掛かりの次は言葉の暴力かね？　世にも恐ろしい聖女が居たものだ」

「うるさいうるさいっ！　馬鹿っ！　変態！　泥棒！　死んじやえ！」

「そう叫んでないで、まずは席に着いたらどうだ。　ここが食事をする場所なのだということを忘れていないか？」

魔王のそんな声に、周囲が何となく同意している気配を感じた。

何で、何で、こっちの形勢が悪い感じなの……。

この魔王——周りを巻き込んでこっちを封じ込める気だ！

「誰があんたの言うことなん——」

「お前——また、躰されたいのか？」

魔王の鋭い眼光が、自分の全身を飲み込む。

その右手がゆるりと持ち上がったとき、お尻へ電撃が走り、得体の知れない鼓動が胸から突き上げてきた。

(嘘……何これ……)

顔がリングゴのように赤くなり、息も荒くなっていく。

遂には立っていられなくなり、へなへなと座り込んでしまった。

「分かってくれたようで何より。皆さん、お騒がせしました——僭越ながら、これは私

からの気持ちです」

魔王が優雅に一礼し、テーブルに一本ずつワインを付けるように注文する。その声に店内から明るい声が漏れた。

この店のワインは、決して安いものではない。柔らかい笑みを浮かべた魔王が周囲に手を振って応え、座り込んだ私を抱えてテーブルへと戻る。

何で、どうして、こんなことになってるの……？

気が付けば、魔王が注文した料理が前に並べられ、夕食の席となっていた。

「私の奢りだ——遠慮なく食べたまえ」

「馬鹿っ！ むしろ私の奢りでしょ！」

「ふむ、まあ——そうとも言うな」

魔王がカラリと笑い、不覚にも——その子供っぽい表情にドキリとした。

この変態魔王、妙な魔法でも使ったんじゃない……っ！



「あの、聖女様、ごめんなさい！ 魔王様は決して悪い人ではないんです！」
「あんた馬鹿あ？ 良い魔王なんて居るわけないでしょ！」

ルナが叫びながらも、次々と肉やサラダを口に放り込んでいく。

お腹が空いていたようだ。

その姿を見て、俺は改めて考える――

（それにしても……「聖女」とはいつたい、何だ？ 智天使とは？）

何故、この世界はGAMEのスキルやアイテム、管理機能などが使えるのか。

あまりにも分からないことが多い。

単純に――「九内 伯斗だから」ということなのだろうか？

それとも、自分がGAMEの管理者であるからなのか？ これから聖女に問おうとする内容を考え、まずはテーブルの下でアイテムを作成する。

漆黒の空間へ手を伸ばし、作成した小さな機械を取り出した。

これは《プライベートシステム》と呼ばれるもので、聞かれたくない会話を情報マス

キング音でカモフラージュするものだ。

GAMEでは他プレイヤーの《通信》を妨害する装置だったが、ネットの発達と共に《通信》は廃れ、遂にはGAME会場から廃棄されたものだった。

(この環境だと……「No19. ファミレスの喧騒」で良いか)

装置をセットすると同時に、自分達の声が喧騒に溶け込み、周囲に音の壁が出来上がった。アイテムがちゃんと効果を發揮していることについて、頬が緩む。

何はともあれ、これで準備は整った――

「ルナと言ったな。この機会に幾つか聞きたいことがある」

「な、なによ……」

何でこいつはこんな警戒してるのか。いや、自分の所業を思えば当然か？

予定外のことではあるが、国の中枢部に居る人間から、色んなことを聞ける絶好の機会だ。様々な疑問をぶつけてみるべきだろう。

「ルナ、日本やアメリカといった国に、聞き覚えは？」

「はあ、なあにそれ？　というか、勝手に呼び捨てにしないで」

ピンク色の瞳をぎよろりとこちらへ向け、威嚇してくる。

何だか毛並みの良いチワワみたいだな。

「では、GAMEや大帝国、インターネット、などという単語に聞き覚えは？」

「さっきから何言ってるの？　馬鹿なの？　今すぐ死んで」

(どんだけ口が悪いんだよ、こいつは……)

アクもようやく落ち着いたのか、料理を少しずつつ口に入れては、幸せそうな顔をしていた。その顔を見て、何とか精神を落ち着かせる。

とてもではないが、目の前のチワワと同じ生物とは思えないほどに清らかだ。

「淫乱ピンク——智天使とはいったい、何だ？」

「だ、だだだ誰が淫乱よっ！　あんた、私を何だと思ってるの!？」

「チワワ、さっさと聞かせろ。お前と違って、私の時間は貴重なんだ」

「わ、私の時間だつて貴重なんだからっ！　大体、チワワつて何よ！」

ルナを宥めすかしながら、少しずつ話を聞いていく。

智天使に関しては、アクから聞いていた話とそう変わりはない。

ただ、他にも二人の天使が居たらしい。

智天使は悪魔王を封印した後に消滅し、他には座天使と熾天使というのが居たらしいが、姿を見せなくなつて久しい、とのことだった。

（三人の天使、ね……なるほど、わからん）

西洋と言うか、そっち方面の話に疎い自分にはさっぱり分からない。

この機会に、あの石像のことも聞いておくべきか？

こいつなら、何かを知っている可能性がある。

「願いの祠に置かれてあつた——『石像』を知っているか？」

その問いに、ルナの顔が少し歪む。

やはり、こいつは何かを知っているようだ。

「あれが、座天使様だという不心得者も中には居るわ……いずれ、神罰が下るに違いないんだから」

「あれが、座天使……？」

確かに、元は白き姿だった——とか言ってたような気がする。

だからと言って、自分にはどうすることもできなかつたが。要するに悪堕ちした天使とか、そういう感じなんだろうか？ エロゲーだと「座天使陵辱　く肉棒に穢されてく」とかってタイトルでありそうな感じがするが。

「お前達の信じる智天使の教えとは、どういったものだ？」

「あら、魔王のくせに智天使様の教えを請いたいってわけ？」

ルナがほんの少し笑顔を見せ、得意気な顔で語り出す。

と言つても、その内容は宗教と言うよりは、セミナーのようなものだ。努力し、自らの力を高め、困難に打ち勝つ。

努力する者には天使が微笑み、大きな力と加護を与える——大雑把に言えば、そんな内容であった。まあ、言っている内容はそれほどおかしくはないが……。

「つまり、人も地域も、格差があつて当然——というわけか」

努力によつて変わる。

なら、頑張つた者は富み、頑張らなかつた者は貧しいまま、というわけだ。アクを見ていると、単純にそうとも言い切れない気もするが。

「努力の差を格差と呼ぶなら、そうでしょうね。私は常に努力してきたもの」

「ぼ、僕知ってます……聖女様は、孤児院から才能を見出されたつて……」

「……昔の話よ」

アクが途中で挟んできた言葉に、少し興味が湧く。

その話が本当なら、確かにこいつは自力で這い上がったのだろう。だからこそ、その教えに傾倒しているのかもしれない。

いや、その教えが正しかったと——“実感”したのだ。

「なるほど——野心と功名心に溢れるわけだ」

「なあに、その含みのある言い方は？」

ピンクのジト目がこちらへ向く。

こいつは仮にも、魔王と呼ばれる存在を単独で討とうとしたのだ。他に二人居ると言われている聖女も連れず、たった二十人ばかりの軽兵を連れて、だ。

成り上がった人間特有の——功名心と、抜け駆けであろう。

「察するところ——他の二人」が邪魔なようだな」

「な」っ……な、なな何を根拠に言ってるのよっ」

「——隠すな。私には分かる」

自信満々に言い放ったが、特に意味はない。

“できる大人”っぽい台詞を、一つぐらいほざいておこうと適当に言っただけである。それに対し、相手が全力でボロを出してきただけだ。

この聖女は、まともな対人接触の経験がないんだろうか？

まあ、この偉そうな態度と口の悪さを見ると、友達など居そうもないしな。

「——『ぼっち』」

「うゝっ……！ き、急に何を言ってるのよ……」

「いや、なに。ぼっちぼち、店を出ようかな、と……」

「そ、そそそうね……私も忙しい身だし！」

聖女の目が落ち着きなく動き、慌しく席から立ち上がる。

何て分かりやすい奴だ。

「私はググレという宿に泊まっている——何か用があるなら来ると良い」

「あなたに用なんてないわよっ！ バカ！」

聖女——ルナが飛び出すように店を出ていき、辺りに静寂が戻った。

自分達もそろそろ、部屋へ戻って休むべきか。

会計を済ませ、アクを連れて店を出る。優雅なディナーのはずが思わぬ展開となつてしまったが、得た物も多い。

「……魔王様は優しい時と、いじわるな時がありますね」

「私はいつだって紳士だ。ただ——相手を選んでいるに過ぎん」

「聖女様はとても偉いんですよ？　魔王様は——わわっ！」

それだけ言うと、アクをお姫様抱つこの形で抱え、宿へと戻る。

流石にこの可憐なドレス姿をおんぶやら、肩車するわけにもいかない。周囲からの視線が少し痛かったが、旅の恥は掻き捨てと言うしな。

「や、やつぱり……優しい、と言いなおします……」

「ん？　今日は、久しぶりに良いベッドで眠れそうだな——」

二人が笑みを浮かべ、平穩に夜が過ぎて——いかなかった。

部屋に戻つてすぐ、ルナが扉を激しくノックしてきたのだ。扉を開けると、そこには涙目になっているルナが居た。

「バカっ！　あんたのせいで泊まるお金が無いじゃないっ！」

その姿にほんの少し同情心が湧いたが、こんなうるさそうな奴を泊めるのは絶対にゴメンであつた。偏見だが、寝言までうるさそうな感じがする。

「野宿でもしろ。ついでに風邪でも引いて、熱を出せ」

「ふっざけんな！ あんたのせいでこんなことになつてんでしようがっ！」

「ま、魔王様……聖女様が風邪なんて引かれたら大変ですよ」

「仕方ない……ほれ、金は返すから何処にでも泊まれ」

あまり付き纏われるのも面倒臭そうなので、金の詰まつた皮袋を返す。

そろそろ、自分で金を稼ぐ手段も見つけないとならぬだろうしな。これが丁度、良い機会かも知れない。

(ん……?)

金を返したというのに、ルナは扉の前から動く気配がない。

それどころか益々、涙目になっていく。

何だ？ まだ金はたっぷり残っていたはずだが……。

「し、ししし仕方ないから、私もここで泊まってあげるわっ！」

「はあ???? お前、頭は大丈夫か？」

こいつはいつたい、何を言ってるんだ？

これもう、わかんねえな……。

「こ、ここは私のお金を使って泊まっているんじゃない！ なら、私が泊まるのなんて当たり前でしょっ！」

「……ぼつちを拗らせると、こうなるのか」

「誰がぼつちよ！ どきなさい、私が一番良いベッドを使うんだから！」

こうして「聖女」と「魔王」と「悪」という妙な組み合わせが出来上がった。

夜はまだまだ、騒がしそうである。

三人の夜

部屋のベッドにルナとアクが座り、楽しげに会話を交わしていた。

アクはさつき買ったパジャマがあるから当然としても、ルナまでパジャマを持参して
るってのはおかしいだろ。

こいつ、最初から泊まる気満々だったんじゃないか。

「管理者権限——《アイテムファイル》」

俺と言えば、買ってきた大量の服を収納していた。と言っても、別にダンスに仕舞っているわけではなく、アイテムファイルへの投入である。

GAMEでは最大、十個のアイテムしか持てなかったが、管理ファイルの一つであるアイテムファイルには、無制限に投入が可能だ。

- ・ 純白のドレス
- ・ 銀のクラウン

投入したアイテムは一行の文字で記され、何度か実験してみたが、いつでも任意に取

り出すことができた。何だか、アイテムを出したり入れたりしていると、自分が国民的アニメの青タヌキにでもなったような気がしてくるが……。

「良い、アク？ 私のことはルナ姉様と呼びなさい」

「聖女様に、そんな呼び方をして良いんでしょうか……」

「私が良いって言ってるんだから、良いの。私が法なの」

ベッドの上ではルナが指を立て、勝手なことをほざいている。

私が法って……。

あいつのプライドの高さは、殆ど病気を疑うレベルだな。と言うか、友達が居なくて寂しいから来ただけだろ、あいつ。

「歳のせいであつ子になってるけど、本当なら私が一番偉いんだからねっ」

「そうなんですか!?!」

嘘吐け、お前が一番偉かったらこの国はとうに滅んでるわ。

お姉さんぶりたい年頃なんだろうが、あんな小煩い奴が姉を名乗るなど片腹痛いとい

うものだ。

姉とはもっと包容力があって、お淑やかな存在であろう。

このまま放っておくと、アクが適当な与太話を信じかねない。

そろそろ、口を挟むべきか。

「で、狼少女……お前も神都に行くのか？」

「狼……なあに、それ？　ちよつと格好良いじゃない」

ルナが嬉しそうにこちらへ向く。

残念ながら、良い意味でも何でもないんだな、これが。

「嘘つき女という意味だ——お前にピッタリだろう？」

「あんたに言われたくないわよっ！　この変態魔王！　髪切れ、バカっ！」

髪と何の関係があるのか……。

こいつはきつと、口の悪さで聖女に選ばれたんだろう。

そうとしか思えない。

「大体ね、神都に行くも何も、神都にある聖城が私の家なんですけど？」

「ふむ——なら、我々は別の街に行くことにしよう」

「な、何だよ!？」

「お前と旅なんぞ、考えただけで頭が痛くなる。只の罰ゲームだろうが」

「そ、そこまで言わなくても良いじゃない……」

はあ??

何でこいつ、落ち込んでるんだ……? 機嫌の上げ下げ具合が激しすぎるだろ。

ジェットコースターか何かか?

「魔王様、そんな言い方は聖女様が可哀想ですよ……一緒に行きましょ?」

「ほんつと、アクは良い子ね。この変態とは大違い!」

ルナが嬉しそうにアクへ抱きつき、頬擦りする。

本当にこいつ、友達が居なかつたんだらうな。

その姿を見てると、ちょっと可哀想な気もしてくるが……。

「聖女様、魔王様も優しいんですよ……？」

「何が優しいのよ！ 髪は長いし、私のお尻ばかり見てるしっ！ 今もきつと、私の桃のようなお尻を虎視眈々と狙ってるんだからっ！」

前言撤回、やっぱりこいつに同情する余地はないな。

こんなガキの尻に、何の魅力があるというのか。ついでに言えば、胸もまっ平らであり、滑走路のようであった。

台風が来ても離着陸できる、と確信できるほどだ。

(それにしても、神都か……)

天使について調べるなら、やはり首都とも言うべき場所に行くべきだろう。

管理機能の回復を除けば、今の俺が知りたいことは一つだ。

「桃尻、神都で『熾天使』のことを調べることはできるのか？」

「ややややっぱり、私のお尻を狙ってるんじゃないっ！ お尻魔王！」

「お前が自分で言ったんだろが……」

ルナがお尻を押さえながらベッドから立ち上がる。

その顔は心なしか赤い……こいつはDMか何かなのか？

いや、こいつの尻なんて今はどうでも良い。

俺の見立てでは、あの石像はやはり座天使というやつだったように思える。

普通に考えて、異世界から何かを転移させるなど、神様レベルの存在でなければできないだろう。そして、その神様レベルの存在は——『砂となつて消えた』のだ。

最早、元の世界に戻る手がかりといえれば、熾天使という存在しかない。

「あんた、熾天使様を調べて何をするつもり……？ 神都で何か悪事を働こうとしてる

なら、許さないわよ」

「いきなり魔法をぶつ放すのは、悪事とは言わんのか」

「聖女には悪人を裁く、『権限』があるのっ！」

その言葉について、嘖き出しそうになる。

「こゝでも——『権限』か。」

そういうえば、ついでだ。魔法のこともこいつに聞いておくか。

「ルナ、魔法のことを聞いても良いか？」

「な、何よ……急に名前と呼ぶな……バカッ」

くああ……ミラクルに面倒臭いぞ、こいつ。

そんなツンデレは、十代の少年相手にやってくれ！

ダメだ、こいつと居ると自分のオッサンさ具合を感じて死にたくなる……俺だつてなあ、昔はツンデレとかもイける口だったんだぞ。

でもな、歳を重ねるにつれ、面倒臭いと思えなくなってきたんだよ！
くっそおお……。



「聖女様、魔王様から頂いたこのシャボンが凄いですよっ」

「シャボンって……アクったら、随分と子供っぽい言い方するのね。これは石鹸と呼ぶのがレディーなのよ」

風呂場から聞こえてくる声に脱力する。

と言うか、壁が薄いのか勝手に聞こえてくるのだ。あれから魔法について幾つか聞いてみたが、ルナとは会話をするだけで困難であった。

合間にちよいちよいツンデレっぽい態度が混じるので、その度にこっちの精神力がガリガリ削られていくという、殆ど拷問に近い有様であった。

今は二人で、上機嫌に水風呂に入っている。

この国は基本暑いので、水に浸かるのが贅沢なことらしい。

俺からすれば、水風呂だけなどありえないことだ。たとえ真夏であろうと、湯船に浸からない生活など考えられない。

(ともあれ、思案すべきことが多いな……)

今後の生活——金のこと。

それに、魔法への対策も考えなければならぬ。

「ほら、凄いキメ細やかな泡が出て、肌がツルツルになるんです」

「あのね、アク。たかが石鹼にそんな効……あううつ！ 何なのこれえ！」

うつるせえええ……考え事もままならん。

テラスにでも出て考えよう。

「汚れだつて凄く落ちますし、香りだつて良いんですよ？」

「くつ、あの変態魔王……私はこんなことで屈しないんだからっ！」

あいつはいつたい、何と戦つてるんだ……。

二人の騒ぎを尻目に、テラスへ出て夜の街を眺める。所々に松明のようなものが置かれているが、大きな通りには街灯のような明るさを放つ物も置かれている。

あれが「光素」とやらを使った魔法らしい。

魔法はその場だけでなく、あんな感じで——「魔石」とやらに封じ込めて使うこともできるようだ。

（社会のインフラか……）

第一魔法というのを使えるものは一生、食いつばぐれが無いとルナから聞いたが、この光景を見て何となく分かった気がする。

「火」だの「水」だの、科学がない時代では使い所が幾らでもありそうだ。

日本ではキッチンでボタンを押せば火が出るし、蛇口を捻れば水も出る。

ここでは魔法の込められた魔石——がその代わりとなっているのだろう。ファンタジー世界、ここに極まれりだ。

（幾らか、金も稼がないとな）

正直、そっち方面はあまり心配していない。

GAMEで使っていたアイテムを売れば、それなりの値になるだろう。

単純に考えるなら《水》だ。

この国では綺麗な水がそれなりの値段になるらしいが……問題は、GAMEで使われていた水は「体力を二十回復」させるアイテムであったことだ。

（売れば、問題になりそうだよな……他にはないか？）

暑い国ということを考えれば《吉凶アイス》というものもある。

これはアイスを食べた後、棒に書かれてある占いでステータスが変化するというものだ。大吉などが出れば気力が回復する優れものだった。

……ダメじゃん、絶対これも騒ぎになるじゃん。

(やっぱり、石鹸なのか……?)

洋酒セット、洋菓子、饅頭、保存チーズ、塩漬け肉、備蓄用缶詰、マンガ肉、様々なアイテムが頭に浮かぶが、全て体力が回復したり、気力が回復するものばかりであった。当然、武器や防具は論外だ。

(茶碗や湯飲みつてのはどうだ……他にも仏像とか)

これは良いかもしれない。

俺の姿は、ここでは完全に遠い国の人間扱いだっただけだな。

いっそ、遠国の美術商とかそんな感じで攻めてみるか？ ダメだったら……全力で石

鹸のセールスマンになろう。

ちなみに、言うまでも無く、茶碗や湯飲みは攻撃＋１のゴミアイテムである。ただ、佛像の方は結構強くて＋１８の棍属性の武器だったりするが。

流石に仏像を武器にするやつはいないよな……？ 美術品として売るわけだし。

(よし、まずは茶碗を《茶器》と称して売ってみるか……)

こうして、騒がしい夜が更けていく。

だが、時を同じくして、一つの「災厄」がヤホーの街へと迫っていた。

キラークイーン

一つの大きな“建造物”が街道を爆走していた。

それは十頭もの馬に率いられた——“巨大な椅子”である。

椅子の下には巨大な車輪が幾つもついており、小石を踏み砕きながら凄まじい速度でヤホーの街へと迫りつつあった。

その周囲は聖堂騎士団から出された、選りすぐりの108騎もの精鋭が固めており、何処かと戦争でもしにいくような雰囲気である。

騎士団の男達も、鎧こそ統一された神聖なものを身に纏っているが、その頭はスキンヘッドやモヒカンの者が多く、とてもではないが天使を信仰している集団とは思えない。

聖女——キラー・クイーンが率いる軍勢である。

知らない者が見れば、世紀末な山賊集団にしか見えないであろう。

だが、彼女が率いる軍勢こそ、この国で最も頼りにされ、民衆からの愛情と尊敬を一

身に集める集団であつた。

理由は至つて単純——悪を見れば見敵必殺、を旨としているからだ。

相手がどんな悪党であれ、権力者であれ、彼女が通つた後は草木一本残らない。

分かりやすい正義であり、暴力なのだ。

他国が侵略してきた際にもその暴力は遺憾なく発揮され、戦場に彼女が現れば、それだけで敵が壊乱して逃げ出したことすらある。

「姉御、もう少しで街へ着きます」

大きな岩としか思えないような大男が、敬愛して止まぬ主へと声をかける。

男の名は——マウント・フジ。

元は近隣を荒らしまわつた手の付けられないほどの山賊であつたが、今では主のために水火に飛び込むことも辞さない。主に何度もぶちのめされ、遂には改心し、今では立派に聖堂騎士団の騎士として働くようになった男である。

大男の母親は涙を流して喜び、聖女へ感謝を捧げた。

彼女にはこの手の美談が非常に多く、その無慈悲なまでの暴力すら、全て是とされる稀有な存在であつた。

「あの『クソ』が……手間かけさせやがって」

巨大な椅子の上で足を高々と組み、キラー・クイーンがワインを呷る。

疾走中であるというのに、椅子は小揺るぎもしていない。無駄に風と土の魔石が使われており、彼女に不快感を与えない作りをしているのだ。

「魔王を討伐しようなど、雄々しいことじゃありませんか。流石は姉御の妹君であると、周りも感心しておりますよ」

「この『ダボ』が……あのクソは目立ちたいだけなんだよ。大体、魔王なんざ居るかよ、阿呆が」

姉妹揃って極めて口が悪い。

もはや聖女という存在が何なのか分からなくなってくるが、騎士達の溢れんばかりの熱い感情は、全て彼女一人へと捧げ尽くされている。

口こそ悪いが、その美貌も末っ子とはまた違う種類のものであった。

長いストレートの金髪に、その身は戦闘で鍛えられているのか、細く引き締まってお

り、修道服に入った大きなスリットから覗く足は酷く艶かしい。

瞳だけは末っ子と同じくピンク色ではあったが、その眼光の鋭さは末っ子とは比較にもならないほどである。どんな悪党であつても、彼女の眼光に晒されれば小便を洩らしながら命乞いするとまで言われるほどであつた。

修道服の帽子に当たる部分も後ろへ跳ね飛ばされており、見た目は殆ど破戒僧といった感じであつたが、その美しい容貌が全てを是としていた。

全く——美人とは何をしてしても許されるのであろう。

「ですが、悪魔王が殺された——という話もあります」

大男の言葉に、クイーンが顔を歪める。

悪魔王の復活という一大事は、彼女の下へ届かなかつた情報である。

裏から手を回され、その情報が届かぬように細工されていたのだ。

(姉貴の奴……何のつもりだ)

クイーンは自分の下に情報が届かぬようにした相手を思い浮かべ、舌打ちする。

その相手が何を考えてそうしたのか、何となく察してしまったからだ。

（俺が負けると思ったのかよ……クソツタレが）

事実、彼女では——あの存在に勝つことはできなかったであろう。

どれだけ弱っていたとしても、あの怪物相手にダメージを与えられる存在など、この世界においては絶望的なまでに少ない。

（魔王、か……）

クイーンの頭に、そんなあやふやなものが浮かぶ。

そんな存在は、伝承やお伽噺の類で謳われているだけのものだ——
歴史を遡っても、そんな姿を見た者など誰も居ない。普通に考えれば、完全に眉唾物の存在であり、空想の産物であった。

「フジ、おめえは信じてんのかよ——魔王とやらを」

クイーンのような声に、フジが驚いたように目を見開く。

彼女が誰かを呼ぶときは大抵、クソやらダボやら、阿呆やらウスノロなどであり、名前前で呼ぶことなど滅多にない。

それだけ——真面目な問い掛けであつたのだろう。

「私に意見などありません。姉御が信じるものが、私の信じるものです」
「ダボが、頭にまで筋肉が詰まってるのか？ この蛆野郎」

フジはそんな罵声を浴びせられたが、嬉しそうに笑っていた。
それを見て、周りの騎士達の顔が嫉妬で歪む。

クイーンからの罵倒は、彼らにとって何よりのご褒美なのだ。

最早、主従と言うより——

「女王様と、その下僕達」と言つた方が早いであろう。



一方、噂の魔王は——

「都市国家の先にある、海の向こうの品ですか……」

「ええ、由緒正しい《茶器》です。私の国では論功行賞の際、領地や金銀だけではなく、茶器が褒美になるほどです」

商人相手に、全力で詐欺師と化していた――

商人の名はナンデン・マンネン。

この街で長く美術品を扱っている、大手の美術商だ。

「領地や金銀ではなく、この器が褒美になる……と？」

「雅な男達は、領地などよりも優れた茶器を求めるのですよ。金銀では腹は膨れませんが、大きな領地にも匹敵する茶器で喉を潤すなど――何とまあ、剛毅な話ではありませんか」

魔王が両手を広げ、雄弁に語る。

この男は魔王というより、天性の詐欺師であるのかもしれない。ただ、この男は全くの嘘は言っていない。

確かに、戦国時代などでは金銀や土地よりも茶器が尊ばれたこともある。全部が嘘ではなく、真実も混じっているからこそ、この男はここまで堂々としていられるのである。

「な、なるほど……」

現に魔王の堂々たる態度と、その身なり、そして大富豪という評判が背景となり、その言葉に重厚な重みを与えている。

それに加え、聖女と極めて親しい間柄である——というオマケ付きであった。

ここまで条件が揃ってしまえば、この人物が出す品をガラクタと思う者など、居るはずもない。

「初回の取引です。今回は——大金貨一枚でお売り致しましょう」
「だ、大金貨ですと!?!」

魔王が堂々と大金貨を要求する。

実のところ、魔王は大金貨どころか、この国の通貨の価値など殆ど知らない。

ただ、聖女が持っていた金の中で一番大きかったものを言ったただけだ。無知とクソ度胸が重なり、奇跡的なまでのハーモニーが奏でられていた。

「名品とは、付けられた値によつて更に輝きが増すものです——それは貴方も、十分にご存知のはずでは？」

「それは確かに、その通りですな」

魔王の言葉に、マンネンが深々と頷く。

彼も交易の街に店を構え、多くの美術品を扱っている男であつた。その言葉には納得できるものがあつたのであろう。

現に、マンネンはこの《茶器》と呼ばれる品を見たことも聞いたこともない。

聖女と極めて親しい人物が、海の向こうから運んできた品、ともなれば欲しがる者は幾らでも居るであらう。

「ただ、これを他者にお売りになる際には——最低でも大金貨五枚の値は付けていただきたい。それができぬのであれば、この話は無かつたことに」

「だ、大金貨五枚、でありますか……」

その言葉からは、この品に対する、圧倒的な自信と自負が溢れていた。

それ以下の値では——売ることすら許さないと言うのだ。

マンネンはその自信に対し、とうとう腹を括った。

「承知しました。その条件、必ず守らせていただきます」

「話が早くて助かりますな。サービスとして、これも出しておきましょう」

魔王がテーブルの上に置いたのはGAMEのアイテムの一つ、《蜂蜜》であった。

体力と気力を60回復するという優れものであり、SPを20も消費して作り出したものである。彼のなけなしの良心がこれを出させたのか何なのか。

GAMEでは使えば消える消費アイテムでしかなかったが、この世界において、体力と気力を同時に回復する——その劇的とも言える効果は筆舌に尽くし難い。

一説では神の涙とも言われる「エリクサー」に近いものであった。世界中の冒険者達が、王侯貴族が、望んで止まぬ奇跡の品である。

「これは……蜂蜜ですか？」

「大帝……いえ、私の国の物は特別でして。体の弱った方などに」

「ありがたいことですね……妻が長い間、患っておりまして」

「そうでしたか。では是非、奥方にどうぞ」

魔王とマンネンが握手を交わし、無事に商談が終わる。

この取引によって魔王は大儲けしたが、茶器の方も珍しい物には目が無い大富豪がすぐさま買入れ、マンネンの方も大儲けすることとなった。

彼は右から左に品を動かしただけで、大金貨四枚のポロ儲けである。

おまけに、病で弱っていた妻まで蜂蜜を飲んだ瞬間に元気を取り戻し、その肌まで若返ったような姿となった。

これによってマンネンは益々、魔王の持ち込む品を信用するようになっていく。



「あつはつは！ やればできるじゃないか、俺も！」

人気がない通りへと出て、魔王が大笑いする。

内心の怯えを隠し、ひたすらに堂々とした態度で振舞っていたのだ。その解放感たるや、凄まじいものであった。

「さて、金も入ったし——次はどうするかな」

魔王が笑みを浮かべ、空を眺める——

雑多な形をした雲がのんびりと流れており、何ともどかな光景であった。

「しかし、本当に雨が降らないんだな……」

この男は——雨が嫌いだ。

その点、この国の風土は彼にとても合っていると言える。しかし、ここで生活をしている人間からすれば、様々な苦勞があるのだろうと思いを馳せた。

時には乾いた太陽が——人の心も乾かしてしまうときがあるのだから。

——ルナ、出てこいッ！

のどかなひと時は、そんな声によって破られた。

この国には、滅多に雨が降らない。

だが、この日は街に大量の“血の雨”が流れることとなった――

サタニスト

聖光国——格差や意見の対立などはあれど、実在した智天使を信奉する、という一事を以つて、纏まつてきた国であつた。

だが、中には大きく道から外れた集団も居る。それは享樂的な山賊や野盜の類ではなく、天使とは正反対の存在を崇める者達。

悪魔信奉者——サタニストと呼ばれる集団である。

彼らは当初、裕福な者はその富を——貧しき者へ少しは分配せよ、という大人しい主張をしていたが、次第に貴族制度の廃止を訴え、遂には智天使こそが格差を作つた元凶であると叫び出したのだ。

実際のところ、智天使が貴族や格差を作つたわけでも何でもない。

悪魔王との戦いの後、智天使そのものが消滅しているのだから。

当事、智天使と共に戦つた者達の多くが後に権力を握り、貴族となつていっただけに過ぎないのだが、彼らにしてみれば歴史的事実やその真偽などどうでも良かった。

——今の現状が、結果だけが全てである。

いつしか、彼らの前に「ユートピア」を名乗る人物が現れ、その行動は益々、過激さ

を増していくようになった。遂には天使と敵対する悪魔を信奉するようになり、彼らは国のあちこちで無差別のテロ行為を行い——とうとう「魔王」を呼び出そうとしたのだ。

——ルナ、出てこいッ！

路地裏にまでクイーンの荒々しい声が響く。それを聞いて、彼らはほくそ笑んだ。

魔王の召喚には失敗したらしいが——聖女が動いた、と。

ならば、その行為は無駄ではなかったということだ。

彼らは計画通り、この地において聖女を暗殺するべく動き出した。

「聖女に災いあれ——」

「災いあれ」

暗殺団を率いる隊長、ウォーキングが声をあげ、路地裏に不気味な声が続いた。

聖女を一人でも仕留めることができれば、と考えていたところに二人揃うという僥倖に巡り合えたのだ。

(あれさえあれば、勝利は疑いない……)

つい、ウォーキングの顔が愉悦で歪む。

その近くに「魔王」が居たと知れば、彼らは腰を抜かしたであろう。



(すんげえ姉ちゃんだな……何処の世紀末だよ)

「俺」は路地裏で騒ぎを聞きつけ、大通りの人混みの中へと紛れ込んでいた。

そこで見たのは、馬鹿馬鹿しいほどの巨大な椅子に座る女と、モヒカンやスキンヘッドの集団である。最初は山賊か、サーカス団かと思っていたのだが、雑踏の中から聞こえてくるのは「聖女様」という単語であった。

(まさか、あれがルナの姉なのか……？　ねーよ！)

今にも「愛など要らぬツ！」などと叫び出しそうな女であった。益々、聖女という存在に対し、モヤモヤしたものが湧き上がってくる。

「ついでに——『魔王』つてのも居るんならよ。出てこいや？」

イカレ女のそんな言葉に、周りのモヒカン達も棍棒を振り回して叫び出す。どう考えても聖女、などという一行ではない。

今にも「ありったけの食料と水を持ってこいッ！」などと叫び出しそうであった。

「魔王つてのは『ヘタレ』か……？ そんなに俺が怖えのかよ」

(ふざけろ、馬鹿野郎！ 核戦争後の世界にでも行け！)

ありったけの力を込めて、心の中で叫ぶ。

誰がこんな集団を前にして「ドーも、私が魔王です。えへへ」などと馬鹿面を晒して出ていけるだろうか。その瞬間、周りのモヒカンからタコ殴りにされてしまうだろう。

「ね、姉様……何でこの街に!？」

遂に大通りにルナまで現れ、ざわめきが一層大きくなっていく。

それを見て、思わず頭を抱えた。

間違いなく、余計にややこしくなる――

「この『クソ』が……俺に黙って『火遊び』とは偉くなったもんだなあ？」

「ち、違うの！ 私に魔王が現れたって聞いて！」

「ど阿呆がッ！ てめえ一人で何がきんだよ、クソはクソらしく家で寝てろ」

椅子の上から女が中指を立て、ルナへ向ける。

その姿は堂に入っており、文句の付けようもないファックであった。

こいつ、もう何でもアリだな。

「そ、そんな言い方ないじゃない！ 大体、前から言おうと思ってたけど、その変な椅子

は何よ！」

「ああ？ てめえ、俺の『移動式玉座』にケチを付ける気か……？」

そのやり取りを聞きながら、黙って煙草に火を点ける。

とてもではないが、まともな神経で聞いてられる会話ではない。

大体、あれは本当に女なのか？ 見た目だけは綺麗だが、あれは「セイテイ」とかっていうモンスターじゃないのか？

「だ、大体、魔王の討伐は私がするんだからっ！ お姉様は帰って！」

「居るはずもねえ存在を討伐だあ？ 起きながら寝言とは器用なもんだな」

「ちゃんと居るもん！ あいつ、私のお尻に夢中なんだからっ！」

「……ああ？ 尻だあ？」

くっそおおお……予想は付いてたけど、更に斜め上の展開だな、おい！

何であいつの尻を狙う変態になってるんだ……。

つかいい加減、尻から離れろ！

(あ、待てよ……この騒ぎの間に、アクを連れて二人で街を出るか)

我ながら名案であった。

ルナ一人でも大変だというのに、このうえ、あのイカレ女とまで絡むなど、悪夢以外の何物でもない。宿へ向おうとした瞬間、耳を裂くような悲鳴が響き――

大通りに鮮血が舞った。



「偽りの天使に死を――！ 《火鳥／ファイアバード》」

「聖女に嘆きあれ――！ 《氷槌／アイスハンマー》」

（何だ、これ……）

光――それは赤であつたり、青であつたりした。

現実離れた光景に、子供じみた感想しか出てこない。遂には離れたここにまで熱さや寒さが押し寄せ、体ごと吹き飛ばされそうになる。

続けざまに放たれた魔法は無関係の野次馬まで巻き込み、容赦無く街の一角に血の雨を降らせた。

(クソ……また魔法か！)

悲鳴と叫び声が響く中、喚声まで聞こえてくる——何処から湧いてきたのか、黒い装束を着た集団が現れ、イカレ女とその一行に襲い掛かったのだ。

(あの服、何処かで……)

記憶を辿り、すぐに「それ」を思い出す。

願いの祠で骸を晒していた集団——あの連中と同じ服装であった。あの連中が何だったのかサツパリ分からなかったが、聖女と敵対している集団だったのか。

「……………ズ機嫌ズじゃねえか、サタニストども」

白煙が立ち上る中、女が馬鹿でかい金棒を取り出し、目の前の黒装束へそれを容赦なく叩き付ける。頭骨が粉々に砕けたのか、黒装束が血を吹き上げながら仰向けに倒れた。

女は棘のついた金棒を振り回し、二人、三人と黒装束を血祭りに上げていく。遂には狂ったような哄笑をあげ、黒装束の集団へと突っ込んでいった――

(何が聖女だ……只の化物じゃねえか！)

あんな金棒で殴られたら、普通に死ぬだろ。

今も横殴りに金棒を叩き付け、相手の頭部を吹き飛ばしている。その姿には人を殺す罪悪感など微塵も無く、何かスポーツでもしているかのような雰囲気だ。

「馬鹿は死んじゃえ――《金槍衾／ゴールドスプラッシュ！》」

ルナが杖を振るい、金色でできた幾つもの槍が前方へ繰り出される。瞬く間に十人近くの黒装束が血に染まり、路地裏にまで血が流れていく。

間髪を容れず、モヒカン達が声をあげた。

「サタニストは消毒だああああ！」

「姉御に血を捧げろ！」

「俺、この戦いが終わったら姉御に罵倒してもらうんだ……！」

モヒカンやスキンヘッドが一斉に叫びながら、黒装束の連中とぶつかる。

こうなってくると、もうどつちが襲撃者なのか分からない。

イカれた聖女二人も絶好調だ。

「あつはつは！ サタニストども、*“紅”*に染まる気分はどうだあ？」

「あんた達、私の魔法で死ぬるなんて光栄に思いなさいっ！」

どう見てもこいつらの方が悪魔です、本当にありがとうございました。

この騒ぎのうちに、アクを連れて街を出よう。と言うか、普通に関わりたくない。

聖女が出てくると流血沙汰になるって、何か色々オカシイだろ。

踵を返そうとしたとき、一人だけ服装の違う隊長格の男が大きな箱を持ち出し、その蓋を開けた。中から出てきたのは——漆黒の液体。

それは奇妙な音を立て、じわりと大通りに広がっていく。

それを見て、男が勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「秘蔵の『闇』であるが、聖女二人と引き換えならば許されよう——」

その瞬間、得体の知れない感覚が全身に広がった。

黒い液体が大きく広がり、それに足を浸されたモヒカン達が次々と膝を突いて倒れていったのだ。その異様な光景を見て——金棒女が焦りを含んだ声で叫ぶ。

「ルナ、下がれ——ッ！ こいつは『奈落』だ！」

「えっ、ちよ……！」

その言葉より早く——液体が一面に広がり、二人の足元を浸す。

途端、糸が切れたように二人が膝を突いた。

「今だ……！ 二人を仕留めろッ！」

隊長格の男が叫び、漆黒の液体が大通りだけでなく、路地裏にまで伸びてくる。巻き込まれた野次馬が次々と倒れ、自分の足元にも『それ』が来た。

（——毒か？）

毒ならば、GAMEの中和剤がある——とまで考えたとき、その液体は自分を避けるようにして広がっていった。そこから感じたのは——警戒。

それも、こちらをジツと凝視して観察しているような不気味な気配だった。

これは只の液体ではなく、何らかの生き物なのだろうか？

「皆の者、天使の加護は消えた——聖女を討ち取れッ！」

その言葉と同時に、黒装束が一斉に襲い掛かる。

さつきまで元気だった金棒女も、息を荒くして膝を突いていた。

小山のような大男が盾になるように前へ立ちはだかったが、その顔は蒼白であり、殆ど棒立ちの状態だ。

（ヤバくないか、これ……？）

かと言って、ここで自分が飛び出せば、もっとややこしいことになる。特に、あの金

棒女に顔を覚えられるのは致命的なことになりかねない。

姿こそ消せるようだが、《隠密姿勢》で戦闘に入るのも厳禁だ。あれは戦闘能力の七割ぐらいを失ってしまう。相手が何をしてくるか分からない以上、そんな博打のような戦闘はできない。

(いっそ、アイテム作成で《手榴弾》でも作って投げ込んでみるか?)

そんな大雑把なことを頭に浮かべた瞬間――

指輪が妖しい光を放ち、酷い眩暈と激痛に襲われた。

『その通りだ――あの女ごと、吹き飛ばしてしまえば全てが解決する』

ふざけろ……! またお前か!

あの女を殺したら、今度はこつちが指名手配だろうが!

GAMEみたいに何でもかんでも、殺せば終わりって話じゃないんだぞ。

『だが――あの女は、この国は、 “魔王” を殺そうとしているぞ?』

『そう、お前の好きな“正当防衛”というやつだ』
『実にめでたい。身を守るといいう大義名分を掲げ、お前の好きな殺——』

眩暈が一秒ごとに酷くなり、遂には立っていられずに倒れ込む。
周りに満ちている漆黒の液体まで、“九内伯斗”の声に共鳴しているかのようだった。

その表面には漣のような波紋が浮かび、時には奇妙な形となり、気を抜けばこちらを飲み込んでいきそうな気配を漂わせている。

(何か無いのか……この状況から抜け出せるものは……！)

震える手で管理機能を立ち上げ——
そこにあつた、見慣れぬコマンドに目を剥いた。

《キャラクターチェンジ — 操作不可能》

はあ!?



情報の一部が公開されました。

キラー・クイーン

種族 人間

年齢 17

武器 —— 鮮血の結末

馬鹿重い金棒。

その表面にはビツシリと棘がついており、破壊力は抜群。とにかく壊れにくい、ということでクイーンはこれを愛用している。

武器 —— 神槌シグマ

座天使の祝福を受けた、由緒正しい槌。

高い攻撃力だけでなく、四大元素の力が込められており、

気力を消費し、簡単な魔法を放つこともできる。

防具 —— シグマの修道服

座天使の祝福を受けた、由緒正しい修道服……のはずだったが、

クイーンが色々と魔改造しているため、原型は殆ど無い。

足の部分には大きなスリットまで入っている。

レベル 18

体力 ?

気力 ?

攻撃 28 (+12 or +20)

防御 26 (+15)

俊敏 25

魔力 15

魔防 5 (+15)

三聖女の次女。

そのステータスからも分かるように、聖女というより、前衛に立つ戦士。

高い技量と近接戦におけるセンスは、この世界ではトップクラス。その振る舞いは女王そのものであり、口を開けば罵倒しかしない。自分より強い男が居ないため、色恋には全く興味が無いが、心の奥底では、いつか運命の相手が現れると乙女チックに考えている。

龍人

人間、溺れたときには藁をも掴むという。

掴んだところで藁は藁、すぐに引き千切れてしまうものに過ぎない。

だが、それでも承知で——掴まなければならぬときがある。

魔王が震える手で管理機能からコマンドを選択すると、頭に響いていた声はすぐに消えた。それどころか——体が白い光に包まれていく。

余りの眩さに、大通りで戦闘をしていた集団すら度肝を抜かれたように動きを止め、その光が何であるのか注視した。

光が治まったとき、そこに立っていたのは——全身を白い服に包んだ男であった。

それだけ見れば、何やら光を背負った戦士のような気配がするが、その服には禍々しいまでの異様な文字が刻まれている。

「天下無敵」

「喧嘩上等」

「仏恥義理」

などなど、見る者が見れば眉を顰めるであろう文字の羅列。

至る所に文字が縫い取られた服の背中には、大きな銀色の龍が描かれており、本人の頭髪まで銀色に染められていた。

現代日本では絶滅したのであろう——「暴走族」である。

「んだ、ハハハは……」

その男の名は——霧雨きりさめ 零ぜろ。

大野晶がGAMEで遊ぶために作った、完全なネタキャラである。暴走族という設定だけあって、その眼光は鋭く、人に「メンチを切る」ためだけに存在しているような目であった。

「な、何だ貴様は……!」

「——あ“あ?”」

サタニストの一人が叫び、零が早速、その相手に向かってメンチを切る。

ここが何処かも分かっていないはずであったが、いつでも売られた喧嘩は買うつもりらしい。

零の目が大通りに向けられ、そこで蹲っているクイーンとルナを見たとき、その顔色が変わった。

「チツ、ガキと女を囲んで『弱いモン』虐めか——?」

「貴様……聖女の一派であろう! 殺れッ!」

「へえ、お前ら——『殺る気』かよ?」

——《遺恨設定》——

零がその言葉を呟いた瞬間、その体から青白い炎が立ち昇った。

黒装束の一人が短刀を振り上げ、問答無用で斬りかかる。零は無言で首を捻って短刀を避け、その右拳が凄まじい速度で振り抜かれた。

ゴガン!と得体の知れない音が響き——男の体がぐるりと一回転する。

男の顔面は哀れにも拳の形に陥没し、鼻骨も砕け、齒の殆どが押し折れてしまつていた。

暫く痙攣していた男であつたが、やがてその目が裏返り、意識を失う。

あまりと言え、余りの一撃に、サタニストの集団が静まり返る。

「てめえら屑なんざ——　〃ワンパン〃よ」

（やめろおおおお！　何言つてんだ、お前はああああ！）

あまりにも時代錯誤な台詞に、〃大野晶〃が絶叫する。

それは羞恥プレイなどを超え、もはや虐待に近かつたであろう。

しかし、その声は誰にも届かず、指一本動かすこともできない。〃ログイン〃しているわけではなく、〃チェンジ〃しているからだ。

故に彼は、与えられた〃設定〃のまま好きに動き、好きに口を開く。

その〃設定〃とは古き良き時代の不良であり、ヤンキーである。

弱きを助け、強きを挫く——絶滅種としか言いようが無い、硬派な暴走族そのものであつた。



(誰だよ……ありやあ……)

クイーンは今、光とともに突如現れた男に目を奪われていた。

一瞬、天使が降臨したのかと思つたのだ。

しかし、そこに現れたのは銀色の龍を背負つた人間——それも最高に“イカした男”であつた。

(あの“バツキバキ”の白装束は何だ……!? ヤバすぎんだろー！)

まるで全身に“呪紋”を刻んでいるようにも見える。

体に直接、魔法を“彫り込む”手段は確かにあるが、それは文字通り、命を削りながら戦うようなものだ。真つ当な神経と肉体では、とても耐えられるような代物ではない。

サタニストの一人が短刀を振り上げたときには、喉から思わず悲鳴が漏れた。

だが、自分の心配など吹き飛ばすような“閃光の一撃”がサタニストを貫き、その体

は一回転しながら地に沈んだのだ。

「てめえら屑なんざ——　〃ワンパン〃よ」

（ヤベエ、かつけえええええええ！）

痺れるような台詞に——こちらの心臓まで貫かれた。

これまで感じたこともなかった、異様な興奮が体の奥底から込み上げてくる。頭に浮かぶのは——鼻で笑っていた古臭い伝承。

《魔王降臨せし時——古き光もまた、降臨する》

（あの伝承は〃マジ〃だったのかよ……！）

教会のババアどもの寝言だと聞き流していたが、とんでもない話であった。現に今——〃龍を背負った光の男〃が目の前に居るではないか！

「い、いつたい、お前は何だ……何者だ！」

サタニストが動揺した声をあげ、つい自分も耳をそばだてる。

このイカした男はいったい、何処から来た？

「女を虐めるような腰抜けに名乗るほど、俺の名は安くねーんだよ」

（お、女……？ 俺を、女つて……）

その言葉に、全身の血が顔に集まってくる。

不覚にも手まで震えているらしい。

只でさえ『奈落』に浸かり、力が奪われてるつてのにヤバイだろ……。

いや、でも、この気恥ずかしさは……！ 何か、悪くない、気がする！

「……………こいつも聖堂騎士団の一員に違いない！ 怯むな、殺」

その言葉が終わる前に、黒装束が空に舞っていた。

蹴り——だったと思う。動きが速すぎて、残像しか見えなかったのだ。

この戦いを見逃すな、とルナの方に目をやったが、このクソは仰向けになって頭の周りにヒヨコを飛ばしていた。どうにもこうにも、救えないクソだ。

「行くぞ、てめえら——？ 《FIRST SKILL：拳法》」

男がその言葉を呟いた瞬間、体が一回り大きくなったように見えた。

そこから繰り出されたのは——稲妻の如き正拳突き。それを食らったサタニストの一人が派手に吹き飛び、数人を巻き込みながら団子状態で転がっていく。

だが、男の攻撃はつむじ風のように止まらない。

「派手に『踊れ』や——ッ！ 《SECOND SKILL：接近格闘》」

男が集団の中に飛び込み、渾身の廻し蹴りを放つ——！

周囲に居た十人ばかりのサタニストが竜巻に巻き込まれたように吹き飛び、遂に連中が恐慌状態に陥った。

「知ってるか？ 『龍』からは逃げられない—— 《THIRD SKILL：落風》」

続けて男が怒涛の三連突きを放ち、最後にその拳を大地へ叩き付ける——！

瞬間、前方へ凄まじい衝撃波が発生し、三十人ばかりのサタニストが遙か彼方へと吹き飛ばされてしまった。

気付けば、サタニストの群れは悉く地面に転がっており、立っているのは龍を背負った男だけとなっていた。

男が辺りを見回した後、両手で髪をかき上げ、痺れるような台詞を吐く。

「龍の前に『シャバ憎』が立つなんざ、千年早えんだよ——」
(格好いいいいいいいい！)

思わず、声に出して叫びそうになる。周りの騎士団が居なければ、きつと両手を組んで声を張り上げてしまっていただろう。

いつの間にか、辺り一面を覆っていた『奈落』すら、何処かに消え果ててしまっている。サタニストが回収したんだろうか？

「しっかし、見慣れねえ『街』だな——」

これだけ暴れたというのに、男の姿には疲労すら見えない。

まさか、本当に龍の血でも引いているのだろうか？ その鋭い視線がこちらへ向けられ、そこから覗く黒い瞳に心臓が驚掴みにされた。

「そのの女、無事かよ——？」

「は、はひ……」

はひ、って何だよ！

思わず自分の口を捻りそうになったが、とてもじゃないが、今は顔を上げられそうもない。

今、自分がどんな顔をしているのか恐ろしすぎた。

「お前も無茶しやがる。女がドッグ持った相手に何をしてんだか
(し、心配してくれてる……?)」

自分が「心配」されたことなど、いったいいつぶりだろうか？

それこそ、子供の頃以来だ……。

何故だか分からないが、胸にじんわりとした温かいものが込み上げてくる。

「ま、屑どもに虐められたらいつでも言つてこい——どつからでも駆けつけてやつからよ」

あああああ、もう無理！

心臓が死ぬ！ 四回くらい死にそう！

もう、この男の前では普段の自分など出せそうもない……見られたら死ぬ！
絶対に死ぬ！

「あ、あの……よ、良ければ、お名前を、お聞かせください……」

とても自分の声とは思えないような、甘ったるい声が喉から出た。

それを聞いて、横に居たフジが「ブッフオ！」と嘔き出す。

後でシメる。それも徹底的にだ。

「ん？俺は零——霧雨 零だ」

「零、さん……あの、ごめんなさい。こんなことに巻き込んでしまって……」

「別に構わねーよ。こちらら、『天下無敵』の『看板』しよってんだ」

（は、鼻血が出そう……っ！）

何故、この人の口から出る言葉はいちいちピンポイントで自分の心臓を突いてくるんだろうか……さつきから心臓が甘い音を立てっぱなしだ。

もしかしなくても——これは『運命』なんじゃないだろうか。

「怪我人が多いみたいだし、面倒を見てやれ。俺あ行くからよ」

「は、はい……っ」

霧雨……零さん……。

背中に描かれた銀色の龍が、目に痛いほど眩く映る。その後姿が人混みに消えていくまで、自分は一度も目を逸らすことができなかった。

「見つけちゃったよ——運命の相手——」

時代錯誤の暴走族と、ヤンキー女——運命の出会いであった。



「化物め…… “奈落” を回収できたのが、せめてもの救いか……!」

集団を率いていたウォーキングが箱を抱え、道無き道を走る。

彼のみは混乱に紛れ、見事に逃げ出すことに成功したのだ。集団を率いているだけあって、退き時を間違えなかったのだろう。

「あれが噂に聞く龍人か……まさか、二人も居るとは!」

ウォーキングは走りながら、懸命に頭を働かせる。

龍の血を引く——忌まわしき化物。

「獣人国め……隠していたのか!」

東の獣人国を統べる長は——紛れも無く、龍人である。但し、それは女であった。

龍人の存在は大陸中を見回しても一人しか確認されておらず、それも、“奇跡”と呼ばれる確率で誕生したものだ。

「あの連中め……この国の騒ぎに介入するつもりだな！」

ヤンキー女だけでなく、サタニスト側にも激しい勘違いが進んでいたが、当の本人は
 いったい、どうしているのか——



「くっそおおお……！ 殺せ、誰か殺してくれえええ……」

路地裏に入り、魔王が頭を抱えて転げまわっていた。

その姿はようやく元に戻ったようだが、心に負った傷は戻らない。羞恥プレイなどを
 超え、既にその心は自殺を考えるほどに病んでいるようだ。

「何が天下無敵だ！ アホか！」

魔王が呟く呪詛は終わらない。

だが、それも甘んじて受けなければならぬものであった。

何故なら、あのキャラクターも——GAMEで己が作り出したものなのだから。大人というものは、自分のケツは自分で拭かなければならないのだ。

こうして聖光国には魔王降臨という噂だけでなく、悪を憎む“銀の龍人”が現れたという二つの噂が駆け巡ることとなった。

それが、全くの同一人物であるとは知らずに——

この勘違いが、後に聖光国を大きく混乱させていくこととなる。



情報の一部が公開されました。

霧雨 零

種族 人間

年齢 17

武器 — 素手ステゴロ喧嘩

只の拳。

耐久力無限。

防具 — 銀龍特攻服

銀龍を背負った特攻服。

GAMEでは特殊能力が絡んだレア防具であったため、防御力は皆無。

様々な文字が刻み込まれた服は、この世界では異様の一言である。

耐久力無限。

所持品 — 750RS (ZII)

零が乗るバイク。

馬車よりも遙かに速く、離れた距離もひとつ飛び。

GAMEでは移動する際に気力を消費したが、それを抑える効果があった。

	レベル	1
	体力	165
	気力	300
	攻撃	7 (+85)
	防御	7 (+73)
	俊敏	8 (+80)
	魔力	0
	魔防	0 (+55)
属性スキル		
FIRST SKILL		拳法
SECOND SKILL		接近格闘
THIRD SKILL		落凰
戦闘スキル		
遺恨	手加減	その他
生存スキル		
裁縫	その他	

決戦スキル

？

特殊能力 —— 狂乱麗舞

「遺恨」を設定した「チーム」に対してのみ、全ステータスが爆発的に増加する。それ以外の存在には効果無し。

対象となる遺恨チームの変更は、一日に三回の制限あり。

特殊能力 —— ？

旅立ち

街の大通りでは怪我人が運ばれ、慌しく復旧作業が行われている。

だが、いつもなら先頭に立ち、大声を張り上げているであろうクイーンは椅子に座ったまま茫然としていた。とても、作業の指揮を執る気にはなれないのであろう。

腑抜けたような姿だが、フジはそんな彼女を見て、柔らかく微笑む。この国の男では、誰も彼女を満足させることができなかったのである。

このままでは、敬愛する姉御が喪女となってしまうと心配していたのだ。

(それにしても「太い男」だった……)

サタニストの集団を前にしても一步も引かず、フジの目には「奈落」すらあの男を避けていたようにも思えたのだ。奈落——と呼ばれる存在。

それは、あの液体そのものを指す言葉ではなく、大陸の中央に存在する巨大な穴であった。

北方の国々は群雄割拠の状態で戦争をしているが、そこで生まれた死体を、その大穴

へと投げ込み始めたのがその名の由来である。

人の埋葬には時間もかかり、土地も使い、費用もバカにならない。

遂に各国はその手間を惜しみ、地底に繋がっているなどと噂される大穴に全てを放り投げることにしたのだ。闇から闇に、とは良く言ったものである。

その穴からは時折、不気味な液体が這い出し、人を襲うという。

中でも、百年に一度と言われる確率で這い出てくる「黒い液体」は、聖なる力を奪い、天使に属する者への天敵となる。

(あの男は少なくとも、天使様に属する男ではない)

フジはそう思ったが、間違っではない。

もし、彼が聖なる力や、天使に属する力を持つ人間であったなら、奈落に力を奪われていたであろう。むしろ、彼は天使どころか——ただの「暴走族」であった。

治安や秩序を乱す側である。

(いずれにしても、あの男を我が国に招聘しなくては……)

フジはそんなことを思案していたが……
その男と魔王は——表裏一体なのである。



——聖光国 神都への道 馬車内

「それでね、その龍人が地面を殴ると人が飛んだのよ！ ブワーって！」
「へー、凄いですねっ！」

あれからヤホーの街を出た一行であったが、ルナが昨日の戦闘をさも見ていたかのよう
うに自慢気に語っていた。本当は気を失っていたはずであったが、純粋なアクはそれを
疑わない。

当然、それを聞いている魔王の顔は歪みっぱなしである。

（何が龍人だ……あれは只の暴走族だぞ！）

魔王の胸中は余りの恥ずかしさに、穴があったら入りたい気分であった。体は動かさないくせに、なまじ意識だけはあるのが救い難かったのであろう。

「魔王、あんたもあの龍人にぶっ飛ばされるかもね！ いい気味だわっ！」
「はいはい……」

ルナの言葉に魔王が適当な返事をする。

それはありえないことだ。

両人は同時に存在することなど、できないのだから。

「それよりもルナ、連れていた騎士はどうした？」

「んー？ 要らないから帰したわ」

「お前な……」

国のトップとも言える存在が単独で行動する。

魔王の感覚からすれば、それはありえないことだ。現に昨日、テロや暗殺騒ぎが起きて
いるではないか。

「何かあったらどうするつもりだ」

「……あ、あんたが居るじゃない」

「はあ?? いつから俺は、お前のボディガードになった」

「うるさいっ！ 本当は私の傍に居れて嬉しいくせに！ この変態！」

その言葉を聞いて、魔王の額に怒りマークが浮かんだが、二人の間に座っていたアクが笑い声を上げた。

「賑やかで楽しいですね！ 僕、ずっとこんな旅がしたかったんです！」

「マジかよ……」

「ほら、アクも言ってるじゃない。あんたは私のために働くのよっ！」

ルナが偉そうに指を突き付け、魔王が溜息をついた。

暫く沈黙していた魔王であったが、腹を据えたのかアイテムの作成を始める。

「馬車もあることだし、神都まで行くのは良いだろう……だが、その格好は目立ちすぎ

る。着替えてもらうぞ」

「き、着替えるって……あんだ、やらしい服を着せようとしてるでしょ！」

「アホか。これを着ろ」

「何、これ……と言うか、あんだどっから出したのよ」

魔王が出したのは《ブレザー》であった。

街を歩いていて、これならそこまで違和感はないだろう、と思った服だ。

他にもセーラー服やメイド服、チャイナ服など、多数の防具があつたが、そんなものを出した日には変態の謗りを免れない。

着替えさせるにしても、この世界の普通の服では防御力が心許ないと思ったのである。

SPを消費する苦渋の決断を下したらしい。

「防御力は10と高くはないが、今は聖女だとバレない方が先決だしな」

「10……？ あんたって、たまに変なことを口にするわね」

魔王はそれに答えず、更にアイテムを作り出す。

それは——《みたらし団子》であった。

GAMEでは気力を50回復させてくれる消費アイテムだったが、この世界においては神薬とも呼ばれるレベルのものである。

「アク、慣れない馬車で疲れただろう？　これを食べて少し休憩すると良い。私の国のお菓子だ」

「わああ……とても可愛いお菓子ですねっ！　それに、甘い香りも……魔王様、ありがとうございますっ！」

「な、何か美味しそうね……私も食べるんだからっ」

「6本あるし、適当に食べれば良いさ。暫く外で一服しているから、その間に着替えておけ」
「よ」

魔王が馬車の外に出ると、空には晴天が広がっていた。

青空の下で、手慣れた手付きで一服を始める。

(SPを何処かで稼がなければな……)

既にその残量は60ばかりであり、心許ない。何だかんだ言いながら、アクやルナに甘いのも原因の一つだろう。

(GAMEと同じように、戦えばSPが入る……)

魔王の頭へ真つ先に浮かんだのは、ファンタジー世界のお約束とも言える、冒険者などであった。実際、この世界にも冒険者は存在し、様々な依頼をこなすこともあれば、モンスターの退治もするし、トレジャーハンターのような者も居る。

北方にいけば戦争が続いているため、食えない時には傭兵になる者も多い。

(本気で魔王などと認定されても敵わんし、正業にも就いておくべきか?)

根が社会人であった「大野晶」には、そんな思考も浮かぶ。

その一方で、「異世界に来て働くのか」と何やら悲しげな呟きも洩らしており、その心中は複雑なようであった。

「聖女様、このお菓子すごく甘いですっ!」

「アクはまだまだ子供ね。一人前のレディーはお菓……美味しいい！」

「何だか疲れまで飛んでいくような気がします！」

「あの変態……私達を餌付けして、いやらしいことをするつもりね！ 悔しい、でも食べちゃう！」

馬車から聞こえてくる喧騒に「コントかよ」と魔王が呟いたが、その抜群の聴力が別の音も拾う。それは荒々しい人の声と、剣戟であった。

目を凝らすと、二人組の女が狼のようなものに追いかけている。

（願ってもない機会だな……）

自然に口端が吊り上がる。それはまさに、魔王として相応しい顔付きであった。

神都へ

「ユキカゼ、準備は良い？」

そう言いながら、女が背中に背負った剣を抜く。

生半可な男では持ち上げるのも難しいであろう大剣だ。

その剣には多数の魔石が埋め込まれているが、彼女は重量の軽減ではなく、重量を増すような物ばかりを組み込んでいた——攻撃力を上げるためだ。

その体は大きな茶色のマントに包まれているが、そこから見える肌は暑い国に相応しく、褐色である。その髪も動きやすいようにしているのか、ショートヘアであり、見た目からして活発そうな印象であった。その髪も瞳も——燃えるような赤色。

彼女の名はミカン。

鋭い眼光をしているが、その容貌は十分、美人のカテゴリーに入るだろう。

聖光国では知らぬ者が居ないほど、著名な冒険者である。

「……いつでもいける。むしろ、イキすぎ」

ユキカゼと呼ばれた可憐な魔法使いが怪しげな言葉を返す。

その名に相応しく、その髪や瞳は抜けるような白色であった。

黒いマントと、一般的な魔法使いが愛用する三角帽子を付けているが、その目は何処か眠そうである。

「あんた、お願いだから真面目にやってよね……」

「……私はいつでも真面目にやってる」

「何か言葉のニュアンスが変なのよ」

「そんなことはない。聞く側の問題。欲求不満」

ユキカゼの声はとても静かで、眠そうなものであるが、鈴の音のような可愛らしいものでもあった。聖光国における彼女の人気は凄まじいものがあり、殆どアイドルに近い。

年齢も十五歳と若く、その可憐すぎる容貌は男達のハートを掴んで止まないものがあつた。

——だが、男の娘である。

「この辺りに砂狼サンドウルフの“群れ”が居るって話だったけど……」

「……暑いから蒸れる。胸の辺りが」

「あなたは胸なんてないでしょうが……あああ、会話にならない！」

「ミカンの目は節穴。私の胸は心の綺麗な人に見えない」

ミカンが頭を掻き筆り、その言葉をスルーする。

二人の、いつものやり取りであった。

ちなみに、砂狼は単独でもそれなりのモンスターではあるが、群れになると途端、その数が爆発的に増えていき、凄まじい脅威となる。

餌を食い尽くせば、防壁に守られた街にすら平然と襲い掛かるほどに凶暴となり、備えの無い村などが群れに襲われでもしたら、一巻の終わりであった。

だからこそ、群れが“小さい間”に対処しなくてはならない。

二人が群れを見かけた、とされる地点によくやく着いたとき、その目が固まる。

そこには群れではなく——砂狼の“大群”が居たのだ。



「無理無理！ あんなの無理だから！」

「……あんなにいつぱい、受け止められない。私の体は一つ。穴も一つ」
「こんなときに何言ってるの!?!」

「俺」は騒がしい二人を見て、思わず笑ってしまう。

だが、その後ろを追いかけてくる狼の数を見て段々、顔色が青くなっていく。

（何だ、あれ！ 多すぎだろ！）

さつきまで嗤っていた顔に、冷や汗が流れてくる。

持っていた煙草までポロリと落ち、おまけに体まで震えてきた。

いかに強力なバリアに守られているとはいえ、あの数には原始的な恐怖を感じざるを得ない。

（何百頭居るんだよ……つか、「トレイン状態」じゃねえか！）

MMOなどで、たまに見られる状態である。

敵から逃げ出し、多くの敵がそれを追いかけて、遂には無関係の人間まで巻き込んでしまふ悲惨な状況を指す。

悪気があるが無かるうが、これをやると荒らし扱いされるほどだ。

「その人、逃げてッ！」

「……そのダンディー親父、後は任せた。骨は拾わない」

（ふざけんなよ、こいつら！ 責任持って喰われるッ！）

思わず叫びそうになったが、ギリギリの所で何とか堪える。

ここで自分が逃げ出したら、アクにまで危険が及ぶ。ルナは……まあ、どっちでも良
いが。

（だ、大丈夫だ……俺ならやれる。やればできる子なんだから！）

必死に自己暗示をかけ、自分を奮い立たせる。

バリアがあるから大丈夫大丈夫大丈夫……大丈夫、なん、だよな？

でも、GAMEでは当然、人間相手にしか発動しなかったし……。

いや、マジで……頼むよ!?

大きく息を吸い込み、気持ちを落ち着かせる。記憶にある「九内伯斗」のキャラクタ―を思い出し、それを完璧にトレースすべく、口を開いた。

「愚かしい——あんな獣相手に、逃げる必要が何処にある?」

逃げてきた二人に目をやり、自らに言い聞かせるように言い放った。

言葉にすると嘘でも段々勇気が湧いてくるのだから、人間の体というのは不思議なものだ。

「アク、ルナ、二人とも馬車から動くな——」

向ってくる大群の前に立ち、覚悟を決める。

先頭の一匹が飛び掛ってきたとき、思わず目を閉じ、歯を食いしばった——が、その牙が届く前に電子音が響き、狼が目の前で弾き飛ばされたのだ。

全身に、じんわりとした喜びが広がっていく——

(勝った……第一部、完ッッッ！)

思わずガッツポーズを作りそうになったが、そんな内面はおくびにも出さず、堂々とした態度で煙草に火を点ける。馬車からあの二人が見ているかもしれないし、できるだけ格好付けておきたかったのだ——男の悲しい性である。

「この私に牙を剥いたのだ——獣とはいえ、容赦はできんな」

良い機会だ、こいつらを相手にスキルを使って練習台にしよう。

まともに戦うことなど、殆ど無かったことだしな。

「さあ、我が腕の中で息絶えるが良い——《FIRST SKILL：突撃》」

抜き手も見せない速さで必殺のナイフを投擲し、それが数十匹の狼を貫通して貫いていく。その瞬間、体が高速で前方へと——翔けた。

(すっげ……！)

景色がまるでスローモーションのように流れ、静止した世界で自分だけが動いているような感覚であった。俄然、テンションが上がってノリノリになってくる。

「下賤の眼に、私を映す資格はない——ッ！ 《SECOND SKILL：自潰し》」

右手が隼のように動き、それが真一文字を描く。

周囲に居た狼の群れの目が次々と切り裂かれ、更に左手から粒子がバラ撒かれる。

大帝国製の、数十秒は視界を遮る砂タイプの目潰しだ。狼が混乱したような鳴き声を上げ、遂には背を向けて逃げ出す。

——知らなかったのか？

「魔王」からは逃げられない——《THIRD SKILL：迅雷》

右手に持ったナイフが乱れ斬りを放ち、その度に数え切れない程の狼が両断されてい

く。最後に力を込めたナイフを投擲したとき——群れの中央に突き刺さったナイフから衝撃波が生まれ、同時に巨大な炎が吹き荒れた。

数え切れないほどの狼が炎に巻き込まれ、一瞬で消し炭と化していく。

気付けば呆気なく、三百頭近い群れが消えており、残った五頭余りは怯えを隠そうとしているのか、必死に唸り声を上げていた。

「所詮は獣——これでは汗一つ掻けんな」

啜えた煙草を悠々とふかし、偉そうな言葉を吐く。

何か途中からノリノリで魔王っぽいロールプレイをしてしまったが、昨日の暴走族野郎から受けたストレスが解消されてスッキリだ。

「己の矮小さを知ったかね——？　では、散りたまえ」

その言葉に、狼が大慌てと叫んだ仕草で逃げ出した。

かなりスッキリしたことだし、別に追いかけてまで殺す必要はないだろう。

殺しすぎて、動物虐待とか言われるのも嫌だしな。



「あれが、噂の魔王だったのか……!」

ミカンは今、目の前で繰り広げられた一方的な虐殺に全身を震わせていた。

そう——あれは戦闘ではなく、虐殺であった。

何故かは分からないが、砂狼の牙は壁に阻まれたかのように魔王に届くことすら無かった。あまりにも異常すぎる。何よりも、本人自らが「魔王」と名乗っていたではないか!

「おじ様、渋い……お尻が熱くなった」

ユキカゼは今、目の前で繰り広げられた一方的な虐殺にお尻を熱くさせていた。

そう——あれは戦闘ではなく、陵辱であった。

砂狼の牙は見えない壁に阻まれたかのようにおじ様に届くことはなかったが、私ならどんな壁も乗り越えてみせる。性別の壁であっても、だ。

「あれは、危険な存在よ……！」

「確かに、危険。私の貞操が貫かれそう」

「神都に行つて、知らせなきや！」

「神都に行つて、全身を磨かなきや」

二人の会話は微妙に噛み合っていないが、それこそいつものことであつた。

一方、馬車で戦闘を見ていたアクも興奮した声を上げている。

「魔王様、凄いです！ 何だか胸がドキドキしてきました……」

アクが手を胸にやり、うっとりと目を閉じる。

あのまま生きていても、朽ちていくだけの自分を救つてくれた人。

いつも、自分を守ってくれる人。

あの人があんでもない悪の存在だつたとしても、もう自分はその人の傍を離れることはできない。

それこそ、*“世界”*を敵に回したとしても――

「——二人とも、大人しくしていたか？ 特にルナ」

魔王が馬車に戻り、ゆったりと腰掛ける。

既にルナはブレザーに着替えており、その外見は実に可憐であった。見た目だけは御嬢様と言つて良い。ルナはスカートが気になるのか、顔を赤くしながら甲高い声をあげた。

「な、中々頑張つてたじゃない……その調子で私を守るのよ」

「別にお前を守つたわけではないんだが……」

「そ、それより、言うことがあるでしょっ！ こういうときには！」

その言葉に、魔王が心の中で溜息をつく。

彼は一応、と付くが大人だ。

新しい服を着た女の子に、何と言うべきであるのかは十分に弁えている。

「まあ、似合っていると思うぞ。いや、正直よく似合う」

「と、当然でしょ……私ほどの淑女になると何でも似合うんだからっ！」

無い胸を張りながら、ルナが嬉しそうに言う。

だが、小さく「えへへ……やったっ」と呟いたのを魔王の耳は聞き逃さない。彼の聴力は異常なまでに優れており、聞き逃すということが無いのだ。

とてもではないが、難聴系主人公にはなれそうもない男であった。



「あーあ、せっかく集めたワンちゃんが消えちゃった」

動き出した馬車を見て、一人の少女が小さく呟く。

その頭には獣耳が付いており、その手には可愛らしい虎の肉球とも言えるグローブまで付いていた。獣人——それも、相当に高LVの存在である。

「でも、ワンちゃんよりもっと凄いの見つけちゃったなー」

少女の顔には虎じみたペイントまでされており、顔こそ可愛いが、その肉体的な能力は完全に化物である。現に、その後ろには砂狼などとは比べ物にならない「シールドライガー」と呼ばれる怪物が頭を垂れ、彼女に従っているのだ。

この一匹が暴れ出すだけで、聖光国は騎士団を出さなければならぬだろう。

「あの人間、本当に魔王なのかな？　だとするのなら、魔族の王だよな？　何で人間と一緒に居るの？　何で聖女と一緒に居るの？」

見た目の幼さに相応しく、思考がそのまま口に出ているらしい。

だが、彼女にとっては——いや、獣人族にとっては大切なことでもある。獣人族は魔族領と接しており、長い長い戦争を続けているのだから。

「どっちにしても、魔族領に行かれるとマズイよね」

少女の思案は取り留めもない。

これまた見た目と同じく、体を動かすことは得意だが、考えるのは苦手なのだろう。

「でも、あの人間なら『あいつら』にも勝てるかも……」

少女が小さく眩き、後ろに控えていた怪物の背に乗る。

何も指示せずとも怪物が走り出し、一瞬でその姿は豆粒のようになっていった。

長かったのか、短かったのか、一行はようやく神都へ近づきつつある。

そこではまた、新たな出会いと波乱が待ち受けていることだろう。

魔王と、悪と、聖女。

そして、噂だけが拡大しつつある銀の龍人や、サタニスト。

魔王が巻き起こす騒動は、遂に一国を揺るがす事態となっていくのだが……

——それはもう少し、先のお話。

三章 神都

魔王軍の始動

——聖光国 神都への道中

「あーはっはっ！ やつと、やつとこの時がゲフゴホッ！」

道中、馬車を降りて休憩していた魔王であったが、管理画面を開いた途端、狂ったような哄笑をあげた。しかも、笑いすぎて咳き込んでいる。

かなり馬鹿っぽい姿であった。

「あいつ、やっぱりバカよね」

「お、お茶目な人なんです……魔王様は！」

アクがフォローしていたが、ルナのジト目は変わらない。

むしろ、その目は険を含んだものとなっていく。

「あの顔、何かいやらしいことを思い付いたわね……」

「お、お尻……ですか……」

アクが顔を赤くしながら自分のお尻を触る。

連日の旅でルナに毒されているらしい。しかし、二人のそんな様子など目に入っていないのか、魔王が慌しく口を開く。

「二人とも、私は暫く思案に入る……念のため、拠点の中に入っている」

魔王が妙に気取った素振りで言いながら、先日作成した拠点を設置する。

まさに秒速であった。頑丈な建造物を一秒もかけずに地上へ出現させる——これを魔法と呼ぶのであるなら、世紀の大魔法であろう。

「あつ、この魔法の家！一度この中に入って見たかったのよ」

「聖女様、この中にはドラム缶風呂があるんですよ！」

「ドラム缶？なあに、それ？」

二人が騒ぎながら拠点に入り、魔王が御者にも声をかける。こういう所は妙にマメな男であつた。単純に日本人気質というだけかも知れないが。

「良ければ、貴方も中へどうぞ」

「と、とんでもない……！ あつしはここで、馬に餌でもやつときますんで」

御者が恐縮したように頭を下げ、魔王も釣られたように頭を下げてしまう。

こういう所も、やはり日本人であつた。

「ではせめて、一本どうぞ——疲れが取れますので」

魔王がマイルドヘブンを啜えさせ、火を点ける。御者は顔を青くし、泣きそうになつていたが、覚悟を決めて吸い込む。

断れば、この場で八つ裂きにされると思つたのだろう。

御者から見た魔王とは、たった一人で聖女様と騎士団を退けた化物であり、砂狼の大群ですら歯牙にもかけない、*“*正真正銘の魔王*”*であつた。

「あ、あれ……な、何だか肩の疲れが抜け……て……」

御者はその仕事上、長時間両手と肩を使って仕事をする。

彼は聖堂教会に勤めているベテランの御者であり、その肩には長年の疲労が溜まっていたのだろう。それらが爽快な気分とともに一気に抜けていく。

魔王の渡した煙草には、気力が40回復する効果があるからだ。

この世界の超一流の戦士の気力が50ほどと考えると、一般人への40の気力回復など殆ど全身を新品にするようなものである。

「あ、ありがとうございます……」

「なに、仕事中の『休憩』というものは非常に大切ですからな」

魔王のそんな言葉に、御者が引き攣ったような愛想笑いを浮かべる。

疲れが吹き飛んだとはいえ、その顔色は青白くなる一方であった。彼からすれば、渡されたこれが何であるのか、恐ろしすぎたのだろう。

後から魂でも要求されるのか、それとも数日後に死ぬ呪いでもかけられているのか、

御者はまるで見当違いの恐怖に苛まれていた。

(よしよし……今のは「理解ある男」っぽくいけたな)

魔王が無駄な演出をしていたが、当然の如く、空回りしていた。

彼はまだ、他者から見える自分の姿を明確に自覚できていないのだろう。笑みを浮かべたとしても、そこには凄みがあり、到底心を許せるようなものではない。

アクヤルナも今でこそ慣れ親しんでいるが、当初はそうではなかったものである。

(さて、そろそろ考えねばな……)

魔王が本題について、ようやく思索を始める。

管理画面を開いたとき、驚くべきメッセージとコマンドが出現したのだ。

CONGRATULATIONS——!

——SP1000 OVER!

《NPC召喚》が解放されました。

《FINAL JUDGEMENT》が解放されました。

(遂に、この時が来た……)

魔王は自ら啜えた煙草にも火を付け、その鋭い視線を虚空へと向けた。



(大量のSPは、この前の戦闘で入ったものだろう……)

“俺”は久しぶりに——頭をフル回転させていた。

砂狼と呼ばれるモンスターの大量を壊滅させた結果、1200前後のSPが一気に転がり込んできたのだ。何やら、宝くじにでも当たったような気分である。

(NPC召喚——SPを1000消費、か)

普通に考えれば、途方もない消費だ。だが、やる価値は大いにある。

彼らは「九内伯斗」の指揮下にあり、不夜城を守るように設定された側近達だ。その誰もが一騎当千と言える強者ばかりである。

身を守るという意味合いでも、行動範囲を広めるという意味合いでも、配下の側近達は必ず必要となるだろう。

(なら……問題は誰を呼ぶか、だ)

九内の指揮下には、近代的な装備を施した二千名もの軍隊が居たが、GAMEでは顔も名前もないモブであった。

故に——真つ当なNPCと呼べるのは8名である。女が四人に、男が四人、それも年少組と年長組にくつきり分かれている集団であった。

(考える……誰を最初に必要とすべきか)

もしかしたら、SPをこれだけ稼げる機会は二度と無いのかもしれないのだから。

人生の決断、とでも言うべきか。

俺は自身で作り上げた側近の設定を、入念に思い浮かべていく。

まず最初に浮かんだのは——宮王子みやおうじ蓮れん

俺の理想とも言えるものを全て詰め込んだ、最高のNPC。

容姿端麗、頭脳明晰、武芸百般、宮家の御嬢様、と現実では何処を探しても居るはずもない十五歳の女の子だ。

恐るべきことに、流石に体力こそ劣るが——そのステータスは九内伯斗を超えるのだ。殆どラスボスが二人居るようなものであり、色んな意味でプレイヤー泣かせの存在であった。

ちなみに、GAMEで遊んでいたプレイヤーから一番人気のあったNPCでもある。本来なら憎むべき敵であるのに愛される、それだけの要素が彼女にはあった。

冷静で氷のような印象を抱かせるが、その心はとても優しく、大帝国が行っている悲惨なGAMEに、内心では強い反発を持っていたからだろう。

(蓮ならば、間違いない……)

忠誠、という意味においても。

彼女は九内に対し、個人的に強い恩義を感じており、それが故にいきなり襲われたり

攻撃されたりする心配はなさそうだ。

先日の暴走族野郎を見ている限り、GAMEのキャラクターは自らの意思を持ち、勝手に動く。それは「設定」と言い換えても良いかも知れない。

危険な存在を呼べば、自分の命が脅かされる可能性すらあるのだから。

同じく年少組の——藤崎 茜ふじさきあかね

蓮と同一年の女の子だが、冷静沈着な蓮とは正反対の、太陽のような存在。

悪く言えば、考え無しの馬鹿だ。

その設定はアニメやマンガ、ゲームを好み、活動的なオタクそのもの。異世界にきた、なんてことを知れば、一番はしゃぐのは間違いない。

戦闘スタイルとしては近接戦——何故かチャイナ服を身に纏い、トンファーを使って戦う。その速さはNPCの中でも随一だ。

(こんなの呼んだら余計に騒がしくなるだろ！ いい加減にしろ！)

次は年長組の——桐野 悠きりのゆう

天才的な医師であり、科学者。サディスト気質と「人体の神秘を解明する」という趣

味と哲学が祟り、数多の人体実験を繰り返したという設定の女だ。

最終的には800人以上の患者を死に至らしめ、倫理裁判で死刑を宣告された女でもある。二十二歳——白衣を着た、絵に描いたような美女。

これが意思を持ち、動き出したらどうなるだろうか……ちゃんと自分の指揮下に入り、大人しく命令を聞くのか？

(だが、悠ならどんな病気だろうが怪我だろうが、治すことができる)

恐らく、アクの足ですら一瞬で治してしまうだろう。

この世界におけるGAMEの能力は、様々に経験してきたのだから間違いない。

最後の女性NPC——まとはしずか的場 静

悠と同年であり、悠を超える狂人。

大帝国で無差別殺人を繰り返し、「歩く災害」とまで呼ばれた存在。

老若男女問わず、出遭った者を片っ端から殺し、帝都をパニック状態に陥れた稀代の殺人鬼という設定だ。

人体の解体に性的な興奮を感じる、先天的な異常者でもあった。その攻撃力は蓮に匹

敵する領域であり、狂戦士とでも言うべきだろう。

(無理無理！ 俺が殺されるわ！)

他の四人の男は……今回は対象から外してしまおう。

その特殊能力は、戦闘面に偏りすぎている。

今のところ、純粹な戦闘ならば一人でも対処できているのだから、自分では対処できないことを可能にする存在を呼ぶべきだ。

(……悠、だな)

この体が病気になるとは思えないが、万が一を考えるべきだろう。

奴は科学者でもあるし、魔法に対抗する何かを作ってくれる可能性もある。

問題があるとすれば、あの危険な嗜好と、キレすぎる頭脳だ。

平然と人を殺すだろうし、解剖だつてする。おまけにシヨタ好きであり、美少年には目がない——正直、呼べばどうなるか分からない存在だ。

(くっそおお……何で俺はこんな変なのばっか作ったんだよ！)

もつとまともなキャラを作っておけよ、昔の俺！

お陰で未来の俺が苦労してんじやねえか！

(ああ、もう覚悟を決めろ……！ それに、悠なら万が一襲ってきたとしても、対処できる)

ふと、指揮下には居ない、三人のNPCのことが頭をよぎる。

あれらが出てきたら、自分ですら対処できるか分からない。それらの名前が項目に無かったことにホッと胸を撫で下ろす。

「管理者権限——《NPC召喚》」

言つて、しまった。始まってしまった。

もう、後戻りはできない。

「悠よ、我が前に姿を現せ——」

桐野 悠

「悠よ、我が前に姿を現せ——」

その言葉とともに、白と黒の巨大な光が前方に現れ、それらが重なったとき——

一人の女性の形となった。

現れたのは、白衣を着た美麗と言って良い女である。

長いストレートの黒髪に、抜群のプロポーション、女として理想的な姿形と言っているだろうか。

「お呼びでしょうか、長官」

その響きに、*“俺”*は何とも言えぬ懐かしさを感じた。

大帝国における九内伯斗の正式な肩書きとは、*“国民幸福管理委員会”*の長官であったのだ。その肩書きに相応しい態度で言葉を返す。

少しずつ、慎重に、相手の様子を探りながら行くとしよう。

「うむ、よく来てくれた——」

「長官のお呼びとあればいつでも。……ここは、新たな“GAME会場”でしょうか？」

悠が見慣れない景色に目をやり、困惑したような表情を見せる。

氷のような女が、困った表情を浮かべる様は妙な可愛らしさがあつたが、こつちの内
心は緊張で破裂寸前であつた。

(しゃべってるな……やはり、自分の意思を持っている)

自分の創作したキャラクターが目の前で動き、しゃべっている姿を見ていると感慨深
いものがあつたが、感動に浸っていられるような余裕はない。

彼女に何処まで打ち明け、何処まで話すべきか？

(しかし、まあ……とんでもない美人だな……)

GAMEでも一部のDOMプレイヤーから人気を集めていたが、何となくその気持ち

分かった気がする。ちなみに、悠や静は女性プレイヤーからの人気が非常に高かった。強い女性というのは、女の子から見ても良いものなんだろうか?!

「さて、何から説明すべきか……まず、ここは大帝国ではない。かと言って、他国でもなくてな」

恐らく、NPCは大帝国が電子空間の中のものだと考えていない。あの世界こそが「地球」であり、「リアル」であると考えているはずだ。

よもやあの世界が、自分が、何者かに創られたものである、などと言っても到底信じられないだろう。

慎重に言葉を選び、これまでの経緯を説明していく。

突如、大森林に居たこと、悪魔のようなものに襲われたこと、悪堕ちした天使が今回の件に関連がありそうなこと、今は神都に向かっていること、などなど。

どれだけ慎重に言葉を並べても、胡散臭い話ばかりである。だが、悠は大真面目に、時には深々と考え込むような表情を浮かべながら真剣に聞き入ってくれた。

「話を聞いていると、何らかの強制移動攻撃かと思いましたが……なるほど、この光景は

確かに、私達が居た世界とは違うように思えます」

「話が早くて助かる。で、今後の方針だが——」

熾天使を調べることに、SPを入手すれば権限が解放されることなどを伝えていく。

それらを聞いて、暫く顎に手を当てていた悠であったが、その口からすぐさま明確な解答が返ってくる。

「長官、経緯はどうあれ『不夜城』が必要になると思われます——」

「……そうだな」

思わせぶりに返したが、実のところ、そこまで必要だとは思っていない。

住む所という意味では拠点でも十分だし、街に行けば宿屋だつてある。このファンタジー世界に近代的な大要塞などを建ててしまったら、それこそ『魔王城』などと呼ばれてしまうだろう。

一時はノリで建てようと思っていたが、今は保留にしている。

(最後は『勇者』とかに討伐されるフラグが立ちそうだしな……)

無論、そんな存在が来たとしても、殺されてやる気は毛頭無い。

現に聖女が来ても、怒涛のスパンキングで対処してしまったのだから。伝説の勇者や、光の何たらなどが来ても、似たような対処しかできないだろう。

「長官——これは『天意』ではないでしょうか？」

「ふむ……『転移』であるとは、私も感じている」

「——やはり、そうでしたか」

悠が妖艶な笑みを浮かべ、思わずドキリとする。

こいつ、絶対にオツサンキラーだろ。

いや、女の子からも人気が高かったところを見ると、魔性の女とかそういう系か？

「私達がこの地で為すべきことが、見えてきましたね」

「そこへ辿り着くのはまだ早い。千里の道も一歩からと言うではないか」

ヤバイ、こいつが何を言ってるのか分からなくなってきた。

それとなく「急ぐな、ちゃんと説明してくれ」とニュアンスに含めてみたが、悠は益々笑顔を浮かべ、楽しそうな表情となる。

「流石は長官——このような事態でも『愉しんで』おられるのですね」
「……何事も楽しむべきだ。私はそう思っているよ」

まあ、これを旅行と考えるなら、こんなに豪華な旅は無いだろう。
自分が作り、遊んでいたGAMEの様々なものが具現化するなど、普通に考えればありえないことなのだから。

「では、長官。『最初の一步』は如何致しましょう?」
「まずは拠点を進化させ、『野戦病院』を作ろうと思っている」
「……………」 長官はいつも、私の願いを叶えてくださるのですね」
「当然のことだ——可愛い部下の願いは、私の願いでもある」

我ながら、呆れるほど適当なことをほざいているな。

何はともあれ、悠を召喚したからにはまず、病院を建てて魔王などという噂を吹き飛

ばしてしまいたい。

格安の値段で治療を行えば、悪しき噂も自然と消えていくだろう。

この世界の医療レベルは低いようだし、魔法の使い手も少ないときている。うまく運営すれば、大金が転がり込んでくるかもしれない。

「当然だが、殺すことは厳禁だ。我々はまず、*「知らなければ」*ならない」

勿論、しっかりと釘を刺しておくことも忘れない。

残った熾天使や、この国のこと、社会のシステム、魔法、冒険者、モンスターや悪魔など、知らなければならぬことはまだまだある。

殺人病院などという噂が立てば、元も子も無いというものだ。

「ええ、知らなければ何も始まりません……*「知ること」*が最重要です」

悠がしっかりと頷き、その姿を見てホッとす。

少なくとも、こちらに反意は無いようだし、命令も聞いてくれるようだ。この調子なら、NPCを増やしていつでも問題は無いだろう。

人数を増やし、行動範囲が広まれば、より多くの情報を手にすることができる。

「では、私の知る限りの情報を伝えておこう」

この異世界での知識を更に与えるべく、様々なことを話していく。悠はその頭脳に相応しく、スポンジが水を吸収するように即座に反応してみせた。

間違いなく俺より賢いよな、こいつ。科学だの医学だの、俺にはチンプンカンプンだからボロを出さないようにしないと……。

俺が「九内伯斗」ではない、と知れば——悠がどういった行動を取るか分からない。

「では、悠。旅の同行者を紹介する——仲良くな？」

「はい、長官」

「その前に、我々の立場は『遠国から来た人間』だということにしてある。今後はその辺りを踏まえた行動や言動を取ってくれ」

「了解しました」

こうして、悠を二人に紹介することになったが、当然のように大騒ぎとなった。

まあ、無理もない。

いきなり人間一人が現れたんだから、それこそ魔法だろう。

「す、凄く綺麗な方です……!」

と、アクが叫べば――

「ま、まさか愛人っ? 何処から呼んだの!」

と、ルナが叫んだ――

「私の『部下』を召喚した――皆、仲良くな」



(面白いことになったわね……)

悠は九内からの話を聞きながら、内心で小躍りしていた。

自分達に与えられた権限は大きかったが、それはあくまで会場の中だけのこと。

一歩でも会場を出れば、大帝国の上層部は権力闘争の嵐であり、自分達の立場は極めて危ういバランスの上にあったのだ。

(ここでは上層部に縛られることなく……私達の裁量で全てを動かせる)

一つでもミスを犯せば、いつ全員の首が飛んでもおかしくなかったのだ。

昨日までの味方が、今日は一斉に銃口を向けてくるなど、日常茶飯事の世界だったのだから。

自分からすれば、ここが何の世界であるのかなど、正直どうでも良い。

世界そのものであった「大帝国」から解き放たれること――

それこそ、本当の意味で自分達が「生きる」ということではないだろうか。

(それに、私達の世界とは違う人間、更には魔法ですって……!?)

知らなければならぬ。

知り尽くさなければならぬ。

この世界の人間を。

肉を、皮を、臓器を、頭の中を、その心を、細胞を、遺伝子を。

あらゆる情報を集め、解明しなければならぬ。

本当なら、今すぐにでもそうしたいくらいだ。

逸る心を抑え、懸命に呼吸を整える――

(それにしても、長官は相変わらず恐ろしい方ね……)

このような異常事態にも拘らず、優雅に愉しんでおられるようだった。

それも、この異世界に来たことを「天意」であるとさえ。

私も、全く同意見であった。

この地において、「私達だけの帝国」を作れ――何者かがそう言っているのだ。

煩わしい上層部の老害から切り離された私達の国――それは理想の国家となるだろう。

長官にとつても、私にとつても。

恐れ多いことではあるが、長官は私にとつて上司でありながら、同志でもあった。

僅か800名ばかり。しか、殺せなかつた身ではあるが、長官は400万以上の流血の上に立つ、生まれながらの魔王であつたのだから。

この世界で。

私が隣に立ち、長官を補佐すれば。

いったい……。

どれだけの。

(きい)きい……くきい……)

もうダメだ、笑いが込み上げてくる。我慢できそうもない。
世界に向かって、あらん限りの声で叫びたい。

“私達は解き放たれた”のだと——



桐野 悠
きりのゆう

種族 人間

年齢 22

武器 —— 手榴弾

広範囲に爆発ダメージを与える。

スキルの関係上、彼女がこれを使用したとき、恐るべき結果を生むだろう。

回数無限。

防具 —— 女医の白衣

見た目は薄い布だが、効果は高い。

あらゆる状態異常を防ぐ効果もある。

耐久力無限。

レベル 1

体力 6000 / 6000

気力 600 / 600

攻撃 40 (+50)

防御 40 (+25)

俊敏 40

魔力 0

魔防 0 (+20)

属性スキル

FIRST SKILL | 爆弾知識

SECOND SKILL | 四散

THIRD SKILL | 連鎖爆破

戦闘スキル

必中 本能 悦楽者 狩人 鉄の女 鬼畜 深慮遠謀 リベンジ

限界突破 強制突破

生存スキル

情報操作 回復 魅了 二面性 秀才 学習 医学 記録改竄

特殊能力

神の手

| ? |

| ? |

神の手

拠点の中で全員の自己紹介を終え、早速アクの治療を始めることにする。

悠の能力は信じているが、こればかりはやってみなければ分からない。

いや……弱気になるな。

自分が創ったキャラクターを、自分が信じないでどうする。

「じゃあ、アクちゃん……力を抜いて」

「は、はい……」

悠の右手、指が見る見るうちに変化し、その指が注射器やメスなどに変貌していく。

彼女の持つ特殊能力——ゴッドハンド神の手だ。

GAMEでは見慣れていたが、いざ目の前で見ると結構グロい。と言うか、怖い。

だが、この能力は「この世のあらゆる病魔を駆逐し、怪我を治癒する」という反則としか言いようがない設定が施されている。

「あ、あの……そ、その手……は……」

やはり、見た目がグロい所為でアクも怯えているようだ。

だが、天才的な医者という設定が生きたのか、悠が柔らかい笑みを浮かべ、患者を安心させるべく口を開く。良かった……この辺りはちゃんと設定を書いておいて。

「大丈夫よ、アクちゃん……先つちよだけ、先つちよだけだから」

「うう……何か息が荒くて怖いです！」

うおおい！ こいつは何を言い出してるんだ！

確かにアクは中性的な感じがするけど、女の子だぞ！

お前の好きなシヨタっ子じゃないんだからな！

「アクちゃん、治療が終わったら男装してみない？ お姉さんと遊びましょ」

「え、遠慮したいです……っ！」

「悠、遊んでないで早くやれ」

「これは失礼しました」

放っておいたら何を言い出すか分かったもんじやないな。
でも、こいつの美少年好きは、俺が作った設定なんだよな……。
何か責められるべきは俺のような気がしてきた。

「では、長官。始めます——」
「ああ、宜しく頼む」

悠の右手、変貌した様々な器官がアクの足に触れる。

まるで触診するかのように動いていた。それであったが、注射器のようなものに液体が満ちていき、それが足へ打ち込まれた。悠は様々な薬を体内で生成し、それを相手に打ち込むことができる。

勿論、毒薬の類もだ。

「ちよ、ちよつと……魔王！ 本当に大丈夫なの!？」

「心配するな。私と、その部下を信じろ」

「あ、あんたを信じたことなんて一度も無いわよ……っ」

ルナの言葉に堂々とした態度で返したが、内心は祈るような気持ちであった。医療機器の一種なのか、悠の指が次々と変化し、アクの足に触れていく。その度に、アクの右足に赤みが増していつているように思えた。まるで、血の通っていないなかった部分が生き返っていくような光景である。

(頼むぞ、悠……)

「さ、これでお終い。傷跡も綺麗にしておくわね。女の子の足だもの」

……え、もう治ったの!?

悠の指がブラシのようなものに変化し、それが傷の表面を撫でる度に傷跡が消えていく。控えめに言っても、物凄い光景だ。

俺は激しく動揺する気持ちを静め、さも当たり前のように振舞う。

「ふむ……終わったか」

「はい、長官。問題ありません」

「アク、立てるか？ 治ったとはいえ、少し歩いて慣らさなければなるまい」
「は、はいっ」

アクが立ち上がり、数歩歩く。

その姿はぎこちなかったが、もう足を引き摺るようなことは無かった。

「あ、歩け、ます……！ 僕の、足が！」

「それは重畳。では、少し外を歩いてみようか」

「あ、あの！ 悠様、ありがとう……ぎいます……！ こ、こんなの、何て言えば良いのか、その……」

「良いのよ、お礼なら長官に」

悠はそう言って笑ったが、俺は別に何もしてないしな……。

ともあれ、外を歩いて少し練習させるべきだろう。リハビリの知識などはないが、手を引いて、共に歩いてやるくらいのことではできる。

「少し出る。中に居てくれ」

アクの手を取り、拠点を出る。

外は相変わらずの太陽が出迎えてくれたが、今日のようなめでたい日には、晴れた空こそが相応しい——

「ま、魔王様！ 本当に歩けます……こんなの凄すぎますよ！」

「言っただろう——大帝国に不可能はない、と」

内心では祈っていたことをおくびにも出さず、偉そうに答える。

と言うか、長く続けると演技も段々、疲れてくるな。まだ側近の前では気は抜けんが、アクと二人の時なら態度を崩しても良いだろう。

「本当に夢みたいですよ……普通に、歩けるようになるなんて」

「夢じゃないさ。これからは普通に歩いて、生活できるようになる」

「ま、魔王様……ほっぺを、抓ってくれませんか？」

「また古典、的、な——」

笑おうとした言葉が、途中で止まる。

アクの目から——涙が零れていたからだ。

その姿を見てみると、妙に落ち着かなくなつて目を逸らす。ダメだ、こういう雰囲気つて昔から苦手なんだよな……。

「まあ、あれだ……その、良かったじゃないか」

何だ、この台詞は……！

もう少し、気の利いたことを言えんのか。

普段は幾らでも適当なことをベラベラ言えるくせに、肝心の時にこれじゃ、自分の口こそ抓りたくなる。

「……魔王様。もう少し、歩いてても良いですか？」

アクがそう言いながら手を握ってくる。散歩とも言えないような風景だが、この異世界を歩くことは、別に嫌いではない。

乾いた大地は所々ひび割れており、照りつける太陽も容赦無い暑さだ。

だが、何故だろう……リアルでの生活より、今の方が余程潤いがあるように感じてしまうのは。

(この子が、居るからなのかも……)

最初は何故、俺がこんな異世界にと嘆いていたが、アクの足を治すことができただけでも、自分がこの世界に来た価値はあったのかもしれない。

この為に呼ばれたと考えるなら、この理不尽もどうにか納得できるというものだ。

「魔王様におんぶ、してもらえなくなっちゃいますね——」

「別に、疲れたらおぶってやるさ」

アクの表情が妙に大人っぽくなった気がして、つい煙草に火を点ける。

女の子の成長は早いって言うけど、本当にそうなのかもな。

生憎と独身だから、その辺りの詳しいことは分からんが。そんなことを考えていると、握られていた手に強い力が込められた。

「魔王様、ずっと一緒に居てくださいね」

「……………。そういう台詞は、将来好きになる男のために取っておくと良い」

ずっと。

それは、この世界で生きるということだ。

リアルなの、何もかもを捨てて。

今から熾天使の事を調べようとしているのに、無責任なことは言えない。

「僕はもう、決めて〴〵いますから——」

「あんな……………」

13歳の子供が何を言ってるんだか…………。

思えば中学の頃、背伸びして教師を好きになる子が居たりしたもんだが、あんな感じなのか？

「さて、そろそろ戻るとしよう」

結局、繋がれた手は——拠点に戻るまで離されることはなかった。



「長官は、随分とあの子を気に掛けているのね……」

つい、口に出してしまふ。

昔から長官は、特定の条件を満たした者に対して、人が変わったように寛大な態度を示すことがあった。

それは——“GAMEの優勝者”に対して、である。

数多の苦難と絶望を乗り越えた勇者に対し、莫大な富と黄金に彩られた将来を約束する——これがGAMEのコンセプトの一つでもあったからだ。

そういう意味では、私も優勝者に対するリスクは当然のようにある。

だが、あの子は——優勝者ではない。

(何か、特別な力でもあるのかしら……)

長官は、人材を発掘するのに卓越した能力を持っていた。不夜城を守る八人の側近達は全て、長官がスカウトしてきた人間ばかりであったのだから。

その中には子供と言える年齢の者も少なくなかった。

(知りたいわね……色々と、この世界の“人間”を)

本当なら、あの子のことをもっと調べたかったが、流星に長官から紹介された客人に
対し、失礼なこととはできない。

それに、病院が建てば——幾らでも機会は訪れるのだ。

「あの怪我を治すなんて……魔王だけじゃなくて、部下まで何でもアリね」

ルナと紹介された少女が、隣で呆れたように呟く。

こちらからすれば、魔法なんてものを使う人間の方が、余程何でもアリとしか思えない。
い。

人間、自分に無いものを求めるといいうが、それに近い感覚であろうか？

「でも、私からもお礼を言うわ。あいつには言わないけど、あんたには感謝してあげる」

その言葉に、つい笑みが漏れる。

この子の無邪気さと、怖いもの知らずな所は「茜」に少し似ているかもしれない。

「なるほど。長官が気に入るわけね——貴女のこと」

「は……はあ!? そ、そんなの迷惑だし！ 大迷惑なんだからっ！」

ほら、素直になれない所もよく似ている。

それにしても、この子もかなり可愛い顔付きだ。男の子の格好をさせれば、結構いけるんじゃないだろうか？

髪を切って、半ズボンを履かせてみるのはどうだろう。

「た、ただいま戻りましたっ！」

「アク、足はどうだったの？ 変態魔王に何かされなかった？」

「お前はブレんなあ……ある意味、感心するよ」

そう言いながら、長官が近付いてくる。

そして、その手が自分の肩に触れ——ポンと叩かれた。

「悠、見事な処置だったな——お前を呼んで良かった」

（う〱っ……………）

その言葉に、掌に、電撃が走る。

それも、頭の前から足の爪先まで貫くような、異様な痺れと興奮。

（なに、これは……………!?!）

気を抜けば、今にも涙が溢れてしまいそうなほどの幸福感。

体が、心が、細胞が、髪の毛の一本に至るまで、歓喜に打ち震えている……………。

何故だろう……………まるで「全知全能の創造主」から自らの存在を認めてもらえたかのような、圧倒的な幸福感が身を包む。

「い、いえ……………お役に立てた、のなら、何よりです……………」

息が、荒い。

自分の体だというのに、自分のことが分からない……。

これまでも、長官に仕事を褒めていただいたことはあったけれど、こんな感覚に陥るようなことは一度も無かった。なのに……何故？

「これからも私を補佐してくれ。頼りにしているぞ？」

「は、はい……っ！」

（うう……言葉が、うまく出ない……）

気付けば、心臓までバクバクと音を立てている。

変だ。これは——変だ！

何故、褒められたり頼りにされることが、こんなに嬉しいのか……。呆れたことに、涙が滲んで視界まで歪んでくる。これを「幸せ」というのであれば、自分が今まで感じていた幸福とは、全てガラクタであったとしか思えない。

（何か、違う……これまでの長官では、ない？）

「さて、アクの足も治ったことだ。神都に着いたら、大いに祝おうではないか」

「賛成！ でも、今度はあんたが奢りなさいよ！」

「ぼ、僕は乾パンでも……」

「ダメだ。ルナ、向こうに着いたら一番良い店に案内してくれ」

「それは良いけど……あんた、本当にお金持つてるんでしょね……？」

三人の会話を聞きながら、考えをひとまず保留にする。

触れられた肩が、今も熱い。

まともな思考など、とてもできそうもなかった。

(まずは病院ね。長官はまた、褒めてくれるかしら……)



アクに生存スキル《ヒロイン》が追加されました。

生存スキル —— ヒロイン

G A M Eに存在したレアスキル。

発動確率は3%と極めて低いものであるが、

スキル所持者へのあらゆる攻撃を九内が全て無効化してしまう。

G A M Eでは実際、ここぞと言う必殺の一撃が全て無効化され、

ヒロイン所持者のプレイヤーが大逆転を果たしたケースもある。このスキルを持つ
た者からすれば九内は救いの神であり、相手からすれば地獄の悪魔にも等しい存在で
あった。

冒険者達

——聖光国 某所

そこは地下とは思えない広大な空間であった。

サタニストの本拠地、それも幹部の連中が集まる場所である。そこでは先日の襲撃について話し合いが行われていた。

「ウォーキング、奈落まで持ち出してあのザマか？」

「指揮は達者なようだが、相変わらず臆病癖は抜けん見える」

交わされる会話はウォーキングに対する罵倒が多い。

だが、彼は反論することもなく、じつと堪えていた。誰があの場に居ても、敗退していただろうと確信しているからだ。

「あの龍人は尋常ではない力を持っていた。それだけだ」

捨て台詞のように言い放たれた言葉に、他の連中が更にざわめく。

だが、最奥の椅子に座る人物が手を挙げた途端——部屋が静まり返った。サタニストを導く者、ユートピアがその重い口を開く。

「その男より、私は『魔王』が現れたという噂の方が気になるのですよ」

誰もその言葉には返事ができない。

魔王の降臨は彼らの宿願であつたが、願いの祠に赴いた者は誰一人帰つてこなかつたのだ。失敗した、と見るのが妥当であろう。

既に神都には、「魔王を名乗る存在」の人相書きが出回っているが、あれはどう見ても人間の男だ。何処か凄みのある顔付きであつたが、流石にあれを魔族と言うのは無理がある。

「悪魔王が蘇つたが——魔王に殺された、という話もありましたね」

ユートピアが更に放つた言葉に、全員が苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

自分達が降臨を願って止まなかつた魔王に、悪魔王が殺されてしまうなどあまりにも荒唐無稽な話である。

悪魔王の復活すら噂に過ぎないものだが、それが魔王に殺されるなど幾ら噂とはいえ、聞いていて気分の良いものではない。

「いずれにせよ、奈落には更なる『生贄』と『力』が必要です」

それは更なる混乱と、流血を齎せ、という指示。

全員がそれを聞き、深く頷く。彼らにとって、この国の病魔は癒せぬ所まで来ていると考えているのだ。

ならば、全てを灰にしてから立て直すしかない、という考えなのだろう。

「――神都を滅ぼし、玉石ともに奈落へと放り込みましょう」

ユートピアの口から出た言葉は破滅の宣言。

幹部の連中が慌しく席を立ち、其々が準備をすべく部屋を後にした。部屋に残ったのはユートピア一人である。

「グレオールの愚か者が——何の『小石』に躓いたのやら」

誰も居なくなった部屋に、ユートピアのそんな眩きが漏れた。



——神都 酒場「ノマノマ」

神都で一番、冒険者が集う酒場と言えばここだろう。

冒険者はランクの高低に関わらず、初期から愛用している店に通う傾向がある。

うだつの上がない頃から世話になっていた店に、強い愛着を持つ者が多いの
う。

そういう意味では、この店には世話になった者が多く、出世した後も通い続ける者が非常に多い。元は小さな酒場であったこの店も、度重なる拡張を続け、今では神都一の規模を誇る名物店へと成長したのだ。

店と客が共に成長を続けた、稀有な例と言って良い。

「魔王だ、ありや魔王だ、間違いない！」

ミカンが店の女主人に対し、愚痴とも何とも言えないものを洩らす。その手には冷えたエールが握られており、かなり酔っているようだ。

どうも、先日出会った魔王が忘れられないらしい。

「魔王ねえ……そいつは良い男なのかい？」

それを聞いた女主人は何とも豪快な台詞を返す。

彼女の名はイエイ。

恰幅の良い、五十代のおつかさんといった風貌である。面倒見が非常に良いため、彼女を慕う冒険者は非常に多い。

「……ダンディーなおじ様だった。私の心とお尻に空いた穴を埋めてほしい」

「なっはっは！ ユキカゼちゃんは相変わらずだねえ。男なんざタマを握っちゃまえばこっちのもんさ」

ユキカゼが牛乳を飲みながらトンでもない台詞を吐いていたが、イエイもそれを聞いて豪快に笑っていた。

二人とも素面でこれなのだから、酔えばどうなるのか恐ろしいものである。

この中でも常識人とも言えるミカンは、耐え切れずに顔を赤くして叫ぶ。

「ユキカゼ、あれは魔王なのよ？ あんた、分かって言ってるの!? 大体、あんたは男でしょうが!」

「……ミカンは無知。男の娘はちゃんと妊娠できる」

「その牛乳、アルコールでも入ってるの!?!」

酒場に居る男達は、それらの会話を聞いて顔を歪めていた。

自分達が全力で愛するアイドル、「ユキカゼたま」の心を奪った存在が現れたと聞いては、とても平穩では居られなかったのだろう。

「その男……ゆるるるささん」

「何が魔王だ! 誇大妄想を拗らせた奴に違いないぞ」

「拙僧はむしろ、ユキカゼ殿に妊娠させられたいでござるよ」
「アホウ！ 寝言は寝てから言え！」

彼らはユキカゼファンクラブの一員として、チームの垣根を越えた同盟を結んでい
る。様々なグッズを作成し、時には薄い本を出したりもしていた。

中には、マントに彼女の姿が描かれた痛マントを身に着けている者までいる。
何処の世界でも、ファンが取る行動は同じらしい。

「大体ね、三百頭近くの砂狼が居たのよ……？ それを一瞬で焼き滅ぼすなんてありえ
ないわ！ あれは災いを呼ぶ存在よ！」

「……ミカン、おじ様に命を救われたことを忘れたの？」

「うゝ……そ、それは、そうだけど……」

「……恩には体で返すべき」

「それはあんたが勝手にやってなさいよ！」

今日もノモノマの喧騒は果てしなく続く。

だが、その中でも一人の男が剣を膝に抱え、誰とも会話を交わすことも無く、度数の

強いワインを立て続けに空けていた。この国では著名な剣士、*“*剣閃のアルベルド*”*と呼ばれる男である。

一剣を以つて、全てを切り伏せてきた剣豪だ。

「カツカ、魔王を名乗る男か……良い功名の種が転がりこんできやあがつた」

噂となつている存在を斬る——どれだけの名声と富が転がり込んでくるか。

彼はそれを想像し、ふてぶてしい笑みを浮かべた。



——神都 酒場「アルテミス」

ここは冒険者の酒場ではなく、貴族が愛用する*“*超*”*が付く高級店である。

店の中は静謐と言える空気が満ちており、喧騒などは程遠い雰囲気であった。

店の隅では、二人組の女性が静かに食事を取っている。

周囲が貴族だらけの中、冒険者の格好をしている彼女達は浮いた存在であったが、それに對し、文句を言う者は居ない。

世界的に著名な冒険者、Sランクに位置する“スタープレイヤー”と呼ばれる存在であるからだ。

彼女達の話題は魔王ではなく——“龍人”であった。

「オルガン、本当に龍人だと思う？」

女がシチューを口に運びながら言う。

その女が着ている服は聖なる力に満ち溢れており、純然たる僧侶といった格好であった。下級悪魔などであれば、近寄ることすら難しいであろう。

だが、何よりも特筆すべきはその胸部であった。

服がはち切れんばかりに盛り上がっており、傍目から見ても苦しそうである。

女の名はミンク。

隠れも無いスタープレイヤーの一人であり、その美しい青髪と大きな胸は男の目を惹き付けて止まない。

「無い——と言いたいところだが、世に100%は存在しない」

オルガンと呼ばれた女が、サラダを口にしながら返す。

サラダには何の調味料もかかっておらず、そのまま口に放り込んでいるようだ。

その体は子供のように小柄であり、全身を黒いローブで覆っているため、その容貌までは分からない。

ただ、小さな口でサラダをモグモグと頬張っている姿は可愛らしくはある。

彼女は非常に珍しい混血児——“魔人”であった。

国によっては討伐の対象となるため、正体を隠し、活動拠点を次々に変えながら生活している。

聖光国は当然、魔の存在を認めておらず、旅の途中で立ち寄ったに過ぎない。

今ではもう、彼女のことを魔人と知る者は世界中を見回してもミンクしか居なくなつた。知った者を——全て消し去ってきたからだ。

「でも、夢がある話よね。悪を憎む龍人なんて」

「本当に居るなら、獣人国が放っておくわけがないんだがな」

「野生の龍人、とでもいうのかしら？」

「馬鹿馬鹿しい。居るなら是非、見てみたいものだが——」

同じ混血児であるというのに、龍人は尊ばれ、魔人は忌み嫌われる。オルガンからすれば理不尽でもあり、片腹痛い存在でもあった。

「尊では魔王が現れたとも聞いたわ。私の「闇」も、そう訴えてる」

「お前は僧侶だろうが……何が闇だ」

「この右目の疼き……間違いないわ。世界を混沌に陥れる魔王が降臨し、私達はそれを討つ闇となるの」

「お前は何を言っているんだ」

残念なことに、ミンクは中二病を患っていた。

何処のチームも、片方はおかしなことになるルールでもあるのかもしれない。

そんな冒険者達の思惑も知らず、魔王が神都に近づきつつある。

時を同じくして、サタニストも水面下で活動を開始していた。

近い将来、神都で起こるであろう騒乱は、もはや避けられそうもない――

容赦無き侵略

(都会に、近づいてきた感じがするな……)

“俺”はのんびりと景色に目をやりながら、そんなことを考える。

神都に近づくにつれ、乾いた大地が少なくなり、青々とした植物がよく目に入ってくるようになった。

道幅も大きくなり、時には馬車がすれ違う。道行く人間も多くなる一方で、街道沿いにある村なども中々に賑わっているようである。

——だが、その村だけは違った。

大きな柵が村全体を囲んでいるが、人の姿が殆ど見当たらず、一種、異様な雰囲気漂わせているのだ。廃村、とても言うべきだろうか？

村の規模がやけに大きい分、余計に寂れ具合が目立つ。

「ルナ、あの村は何だ？ 随分と活気がないように思えるが」

「……………私の村よ」

「は？」

「だからっ、私の領地！」

おいおい、聖女ってのは国で偉い立場じゃなかったのか。

こんな寂れた廃村が領地って…………。

「随分と寂れてるようだが、良いのか？」

「領地の経営なんて興味無いし。それに、教会から出向してきた人間が管理してるから、私が出る幕なんてないわ」

まあ、実際ルナが領地の経営などできるとは思えないしな。

馬鹿みたいな重税でも課して、反乱でも起こされるのがオチだろう。礫台の上でケツを叩かれるのが容易に想像できる。俺の察するところ、こいつは魔法の力こそあれ、単なる『神輿』なんじゃないかと思う。

良いように担がれてはいるが、美味しい権益や旨みのある土地などからは、きっちり

遠ざけられてるんじゃないのか？

本人もその手の事に興味がなさそうだし、良い操り人形だと言える。

浮かんだ考えを伝えるべく、悠へ《通信》を送って話し合う。

《私はそう考えているのだが、お前は どう思う？》

《同感です。恐らく、貴族や教会の上層部に巧く利用され、面倒な土地をあてがわれているのではないかと》

《ふむ。ならば——捨てられている土地を、我々が拾っても苦情は出まい》

《この村を使うと？》

《仮にも聖女の領地であるなら、横槍も少なからう。好都合だ》

それっぽく言っているが、一番の理由は金が無いことだったりする。

大金貨とやらはかなりの価値があるようだが、流石に土地を買えると思えない。神都は首都のようだし、余計に値が張るだろう。

どうせ拠点は建てるのも仕舞うのも一瞬なのだから、ダメだったら別の所に建ててしまえば良い。

「ルナ、この村の一角を借りたい」

「へ??」



村の中に入ると、面白い姿をした人間が目に入る。

頭にウサギの耳のようなものを付けた存在だ。最初は仮装でもしてるのかと思っただけだが、ルナが言うには《バニー》と呼ばれる種族らしい。

「まんま、兎耳人間だな……」

「その昔、智天使様が愛でられた種族なんだってさ。だから、数は少ないけどここに集まって暮らしているの」

「愛でる、ね……まるで隔離されてるようにも見えただろ?」

「聖光国は基本……人間以外の種族を嫌うから」

ルナの顔に、少し寂しげなものが混じったような気がしたが、今はそれを聞いている時ではない。聖女の村に病院を建て、多くの治療を施せば評判も良くなるとういうもの

だ。

ここはルナの名と、立場を存分に使わせてもらおう。

「魔王様、ここで何をするんですか？」

アクがテクテクと歩いてこちらに来る。その姿を見ていると、何とも言えない喜びが湧き上がってきた。

アクはもう——自らの足で歩くことができる。

何だか、自分が足長おじさんになってもなったような気分になるが……。

「なに、ここで医者者の真似事でもしようと思つてな」

「あ、悠様ですね！ 悠様がお医者様になれば、国中から人が来ると思います！」

人が集まるということは、*“金を落とす”*ということでもある。いつそ、病院の隣に《温泉旅館》も建ててしまおうか？

病人つてのは大体、老人が多いから温泉も好きはずだ。

アクの様子を見ていると、水や湯に浸かるのは相当な贅沢のようだしな。

「長官、この辺りの場所ですらどうでしょうか？」

「少し、狭いな。隣に温泉旅館も建てようと思っっているのにな」

「温泉ですか、それは素敵ですね……」

そう、女も大体、温泉好きだ。

こうなっていると、病院と温泉のダブル収入を目指した方が良い。抱き合わせで石鹸も売れば、良い売れ行きが期待できるんじゃないだろうか？

自分やルナの評判も良くなるし、利用者もニツコリ笑顔、誰も損をしない完璧な計画と言つて良いだろう。

「こ、これはルナ様……ようこそおいでくださいました。して、この方々は……あえ!?
そ、その方は人相書きにあつた……!」

「そ、魔王よ。今は私の『協力者』なの——」

ルナが無い胸を張つて、偉そうに言う。協力者というのは苦肉の策だ。

どうやら俺の顔は、人相書きとして既に神都などに出回っているらしい。正確に言う

なら「魔王を名乗る男」らしいが……。

(どうにかして、噂の方向を変えなければ……)

魔王のような力を持っているが、実は親切な人だった、とか。

魔王だけ良い人だった、とか。

最終的には、温泉や病院を経営する大富豪だとか。

(我ながら、相当無理がある気もするが……)

だが、こちらには現実に建てられる病院や温泉があるのだ。

一つ一つ事実を重ねていけば、いずれは人々の誤解も解け、万人から歓迎される魔王になるはずだ……って、魔王になってどうすんだ。

ちなみに《野戦病院》はそこに居るだけで気力の回復速度が上がる拠点であり、《温泉旅館》は体力の回復速度を上げてくれる効果がある。

いずれも、この世界において唯一無二の場所になるはずだ。俺は場所を確保すべく、早速教会から派遣された人間との交渉を始める。

できうることなら、教会の人間など追い出してしまいたい。ルナはともかく、聖堂教会とやらが自分の味方をしてくれるとは到底、思えんしな。

売り上げの何割かをよこせ、なんて言ってこられたら面倒すぎる。

「君が、教会から派遣された者かな？　今後、この村はルナと私で面倒を見ることになつてね。教会とやらに戻り、その旨を伝えてくれたまえ」

最初にかます一発は、上から高々と――

「な〱っ……し、しかし、それは……上の者にも相談しませんと……」

「上、ね……それは理屈が通らんな。本来の領主であるルナが、自ら手腕を振るうと言っているのだ。君や教会の上などというあやふやなモノが、この村における正当な領主であるとしても主張したいのかね？」

そのまま、一気呵成に畳み掛ける――

「い、いえ！　そんなことは……この村は、ルナ様のものでございます……」

「ふむ——今、君の口から『答え』が出たようだ。では、行動に移りたまえ」

男が慌てた様子で家に入り、馬に乗って飛び出していく。と言うか、逃げた。

クソ……そんなに怖いのか、この顔は……。

まあ、これで邪魔者は消えたというわけだ。これで思う存分、こちらの計画を進めることができる。

一連のやり取りを見ていたルナが、呆れたような顔で呟く。

「こういうときのアんたって、無駄に口が回るわね」

「心配するな。私に任せておけば、この村は必ず発展する」

「えと………お小遣い、増えるのかな？」

「無論、約束するとも」

ルナには飴として、お小遣いUPをチラつかせてある。

根無し草の自分が何かをやり出せば、様々な横槍や嫌がらせも来るだろうが、仮にも神輿として担いでいる聖女は排除できまい。

「さて、この村の人間……いや、バニーから少し話を聞きたい」
「それは良いけど……あんだ、変なものを建てないでよ？」

それには答えず、ルナの尻を軽く叩く。

「パァン！」と良い音が空に響いた。

「ひゃん！ な、なななな何すんのよ!?!」

「ふむ、特に意味は無い。単なる景気付けの一種だな」

「こんの変態く〜く〜！ 私の可愛いお尻をずっと触りたかったんでしょ！ そうなん
でしょ！ そうだつて言え！」

「寝言は寝……いたたつ！ 髪を掴むな、阿呆！」

貧しいバニー達が肩を寄せ合いながら住む村——「ラビ」

この地に魔王が訪れたことにより……

村は、急激に運命の転換を迎えることとなった。

慈悲無き侵略

——聖光国 ラビの村

バンニー達が畑に出て、人参の収穫をしている。

荒れた土地なので収穫できる数は少ないが、この大陸では人参を作れる農家が殆ど居ないため、バンニー達の独占状態であった。

種族として持つ特有のスキルが、人参の栽培、育成を助けてくれるのだ。

だが、近年では雨が少なく、流石のバンニー達ですらお手上げの状態が近づきつつあった。

「キョン、そつちの人参は？」

「ダメ……細いから売値が落ちちゃう。モモチヤンの方は？」

「こつちも良くない。水の魔石、また買いに行かないと……」

「最近、値上がりしてるよね……土の魔石も」

二人のバニーが成長の悪い人参を手に取り、その顔を曇らせる。

この国では人参が高く売れた——バニーにしか育てられないのだから。

だが、魔石の消費が激しくなれば、当然のように純利益は減ってしまう。年々、バニー達の生活は苦しくなり、貧しくなっていく一方であった。

最近では村を出て、東の獣人国へと行く者も多い。

だが、この二人は生まれ育った村に強い愛着を持っており、何とか踏ん張りながらこの地で生活していたのだ。

いつか来るであろう、決定的な破綻を感じながら。

——そんな所へ、魔王と聖女がやってきた。

「やはり、兎耳が付いている以外は人間と変わらん」

「北方の国だと、バニーは可愛いからとても人気があるんだって」

「何処の世界も、ケモナーというのは居るもんだな」

「けもなー? あんたってば、たまに変な言葉を使うわよね」

その瞬間から、魔王の脅威に『破綻』の方から逃げ出すこととなった——



「なるほど、水が無くて困っていると……」

「俺」はバニー達から話を聞きながら、畑へと目をやる。

正直、農業に関する知識など皆無である。

だが、単純に水を出せと言われれば、幾らでも出すことができる。GAMEで体力を回復させるのはペットボトルに入った水であったが、井戸があるエリアでは《滑車》というアイテムを使って大量の水を入手することができたのだ。

GAME特有の理論で、それらはペットボトルに入れなければ、只の水であって使えないという設計であったが。

井戸が枯れてようが、何であろうが、「水を汲み上げる」という結果だけを生むアイテムなのだから、この世界でも使えるだろう。

「それにしても、こうして領民が困っているというのに、手付かずとは……全く、大した聖女様だな？」

皮肉を込めて言つてやる。これは、髪を引つ張られた札だ——
攻撃ではないと判断したのか、バリアが働かなかつたのが恨めしい……。

「しよ、しようがないでしょ……ずっと、そういう世俗のことには関わるなつて教えられてきたんだから……！」

やはり、体の良い神輿というわけだ。

敵を討つためには使うが、それ以外のことには首を突つ込むな、ということらしい。

敬して遠ざけられ、金の絡む話には口を挟ませない。

何処の世界でも、ままある話だ。

「あー、君はキヨンと言つたか。この村に井戸はあるかね？」

「あ、あります……ピヨン」

「……一応、聞くが。その取つて付けたような語尾は何だ？」

「に、人間はこれを付けないとガツカリすることが多くて……ピヨン」

「すまんが、普通に話してくれ」

何がピヨンだ……ベタすぎるだろ。

最初に言い出した奴は誰だ。

「そつちはモモと言ったな。君も普通に話すように」

「分かったウサ」

「分かってねーだろ！」

くつそお……何なんだ、こいつらは！

思わずキャラを忘れて突っ込んでしまったじゃないか……！
こいつら、ギャグで言ってるのか、真面目にやってるのか分からなくなってきたぞ。

「井戸はこつちになります……ピヨン」

「ああもう、早く案内してくれ」

思わずその耳を引っ張りたくなるのを堪えながら、村の中を進んでいく。

案内された先の井戸は、案の定、完全に枯れ果てていた。これでは農業どころか、魔

石とやらが無いと、飲み水にすら困るだろう。

(さて、滑車は……下級アイテム扱いで5Pか)

ペットボトルが無ければ何の意味も無いということ、その価値は低く設定されているらしい。

こちらにとっては至って好都合である——残りのSPは265。
病院や温泉を作る分を引いたとしても、まだまだ余裕がある。

(食料や飲料を直接作るのも良いが……当然、飲み食いたら消えてしまうしな)

一概に食い物と言っても、GAMEには様々な物を用意していた。

各エリアで発見できる物で言えば、クッキーや餅、食パンなどが代表的だっただろう。缶詰などにも無駄にこだわっており、チェリー、桃、蜜柑、パイナップルと様々な味を用意していたものだ。

栄養価の高い七草粥や、見た目も楽しめる各種の饅頭、アイスからマンモス肉やマンガ肉などという、現実にはないものまであった。

マンガ肉ってどんな味がするんだろうな……食いたくなってきたぞ……。

飲み物も水だけでなく、飲料を冷やす氷パックからスポーツドリンク、ビール、ウイスキー、ブランデー、日本酒、麦焼酎、米焼酎、栄養ドリンクなども各種揃えており、豊富なラインナップであった。

これらに加え、サツマイモやジャガイモ、タマネギやニンニクなど農作物や、メロンやイチゴ、蜜柑やリンゴ、キウイやライチ、マンゴーなどのフルーツ類も順当に揃えてある。

一つ一つを生み出しているはSPが幾らあっても足りないが、サンプルとして出せば、種から作れるものもあるのかもしれない。GAMEでは会場にバラ撒かれるアイテムは1901種類あり、そこへスキルでのみ発見できるものが加わる。

全てを合わせれば、軽く2000種類を超えるであろう。

「やはり、大帝国に不可能は——うん？」

気付けば、全員から白い目で見られていた。

随分と長い間、思案に耽っていたらしい。

いかんいかん、GAMEの事を思い出すと、つい暴走がちになってしまう。

「さて、始めるか。下級アイテム作成——《滑車》」

管理者権限を使い、滑車を作り出す。

思っていたより、かなり本格的な代物であった。

現実に出すと、こうなるのか。

「あ、あんた……いつも、何処から取り出してるのよっ！ 何なの、それ!？」

「我が叡智の欠片——とだけ言っておこうか」

適当なことを言っただけ煙に巻く。

俺にだって、説明のしようがないのだから。あの狂った座天使とやらが、GAMEの能力ごと引つ張ってきたんだろうが、そんな理論を科学的に説明しろ、などと言われても不可能だ。

それこそ、お前達が信奉する天使とやらに聞けと言いたい。

「さて、早速取り付けてみるか……」

「あ、あの、その井戸は、随分と昔に枯れたものなんです……ピョン」

「私の滑車は、水を汲み上げるといふ“結果”を生む。井戸の状態など関係無い」
「何を言ってるか分からないウサ」

「私には、お前達の語尾の方が分からんよ……」

滑車を取り付け、井戸の底まで下ろした後に引き上げる。

車輪が付いているので、力のない者でも簡単に引き上げることができる仕様だ。思った通り、取り付けられた大きな桶にはたつぷりと水が入っていた。

「ちよ、ちよつと！ どういうことなのよ、魔王！」

それを見て、ルナが体をがくがくと揺らしてくる。

興奮するのは分かるが、揺らすな！ 水がこぼれるだろうが！

「モモちゃん、見て！ 水があんなに入ってる！」

「嘘でしょ……何これ!？」

お前ら、普通にしゃべれるんじゃないか……。

頼むからそのままの口調でいてくれ。

俺は桶の水に指を入れ、それを口に含む——予想通り、“只の水”であった。

これが体力を20回復する水であったなら、流石に考え直さないといけないところだったが、只の水であるなら問題無い。

とはいえ、水の魔石というものが商売になっっている以上、これを公にするのはあまり宜しくないだろう。外向けには、あくまで枯れた井戸が復活した、という体で行くとするか。

「これは私の国の『魔法の滑車』だ。見ての通り、枯れた井戸からでも水を生み出すものでね。これが、どれだけの価値がある魔道具であるか、諸君なら十分に理解できるだろう？　これが元で、戦争が起きてもおかしくない代物だ」

偉そうに言っているけど、5Pだから申し訳なくなってくるな……。

自分の言い様と、システムの見た評価との乖離が激しすぎるぞ。とはいえ、流石にルナやバニー達も自分の言いたいことは分かってくれたようだ。

「この村だけの秘密にしておきます……ピヨン！」

「ありがとうございます！ これで元気な人参が作れるウサ！」

やっぱり、こいつらわざと言ってるだろ。俺はもう突っ込まないからな？

しかし、農作物を作るとなれば、水だけでは片手落ちだ。

「中級アイテム作成——《肥料》」

更にもう一つのアイテムを作成する。

大きなビニール袋に詰まった肥料を漆黒の空間から引っ張り出す。

名こそ肥料だが、実のところ、これはGAMEでは爆弾を作るための合成アイテムであつた。

まさか、こんな所で役立つとは思ひもしなかつたが……。

「この肥料を使うと良い。適切な使い方は、お前達に任せる」

肥料をどのくらい、どの時期に使うのかなど、自分には分かりっこない。

それこそ、農作業のプロに任せれば良い話だ。これも滑車と同じく、大地に栄養を与えるという“結果”を生むだろう。

人を殺す爆弾を生むためのものが、農作物を生み出すというのも何だか皮肉めいた話ではあるが……。

「モモちゃん、これ凄い肥料だよ！ “大地の力”を感じるの！」

「す、凄い…… “恵みの力”に満ち溢れてる！」

何を言ってるかよく分からんが、役立ちそうならまあ良いだろう。

これで、この村にも多少の活気が出るというものだ。どれだけの施設を置こうとも、雰囲気の暗い土地になど、人は集まらない。

俺はその後、バニー達に細々とした注意を与え、この場を後にした。

「あ、あんたも……少しは良い所あるのね……」

「馬鹿を言え、私は聖人君子でも何でも無いぞ？ 良くするには理由がある」

「理由って何よ？ ま、まさかバニー達にいやらしいことをつ！」

「アホか。病院を建てるにせよ、温泉を建てるにせよ、どうしても人手が必要になるんで

な。バニー達にはそこで働いてもらうつもりだ」

バニーってのは見た目が可愛いから、客からのウケも良いだろう。

今でもBARだのラスベガスだのではレオタードに網タイツ、それに兎耳を付けたのが居るしな……古典的だが、廃れてないってのは人気のある証拠だ。

「さて、最低限の準備は整ったな。設置の方は、神都から戻ってからにしよう」

「向こうでは一杯、奢りなさいよね。服とかも見て回るんだからっ！」

「何でお前の買い物に付き合わなきやならんのだ……」

聖なる国

——聖光国 聖城

聖光国とは三人の聖女を頂に据えた国家である。

その下には聖堂教会と聖堂騎士団が同じ立場で並んでおり、外敵に対し、一致団結して国を守っていた。

教会は下は孤児から、上は大貴族の人間まで、魔法の素質がある者なら誰でも受け入れるという、間口の広い組織である。

騎士団も同じく、武の才能がある者なら誰でも受け入れる組織だ。

当然、其々に厳しい試験があり、それに合格する必要があるが、それでもあらゆる人間に対し、門を閉ざしてはいない。

これは諸国を見回しても——珍しい例と言って良い。

だが、最近では貴族の台頭が著しく、聖堂騎士団への囲い込みが進んでいた。

時には地位を、名誉を、金銭を、あらゆるものをチラつかせ、自分の子飼いのようにして取り込んでいっているのだ。

聖女の輩出には——聖堂騎士団の意見も重きをなすからである。

反面、教会の人間は買収するのが難しい。

魔法の才だけでなく、天使様に仕える身である、というのが大きく考慮されるため、厳格なまでの清廉さを求められるのだ。

これを買収し、囲い込んでいくのは貴族であつても不可能であつた。

故に、彼らは聖堂騎士団へと狙いを定め、自分達に都合の良い聖女を輩出させるべく、長い時間をかけて少しずつ聖域へと食い込んでいったのだ。

そして、現在——理想的とも言える聖女の輩出に成功している。

ルナ・エレガント —— 魔法の才はあるが、政治には全く興味が無い。

キラール・クイーン —— 戦闘に関しては理想的だが、政治にも金にも興味無し。

国のTOPが政治にも権益にも、全く興味を持っていないなど、理想的であろう。平たく言えば、やりたい放題である。

そんな状況の中——

聖城の円卓では国を代表する貴族二人と、三人目の聖女が会議を開いていた。

「いやはや、ルナ様にも聖女としての自覚が出てこられたようで……」

男が太った体を揺らし、脂ぎった表情を崩す。

この男の名は——ドナ・ドナ。

多くの貴族を纏め上げる、聖光国で一番の大貴族であった。金と若い女には目がない、典型的な貴族でもある。

反面、貴族のあしらい方には天性の才を持っており、その統率力は中々侮れない。

他にも領内に鉾山を多く抱え込んでいるため、年々魔石の価格を吊り上げ、実質的に経済を牛耳る男でもあった。

「……めでたき事」

ドナの正面に座り、短く呟いた男はマーシャル・アーツ。

貴族とは思えぬ引き締まった体をしており、何と彼は鎧まで着用していた。

歴戦の戦士、と言った方が早いであろう。その齢は六十を超えているが、白髪を後ろ

で一纏めにしており、その眼光は鋭い。

武断派とされる貴族を纏め上げる、もう一人のリーダーである。

「ですが、心配ですわ……魔王などと名乗る男に、あの子は誑かされているんじゃないかって」

円卓の上座に座り、ピンク色の髪を揺らしたのは最後の聖女。

エンジェル・ホワイトである。

その髪も、瞳も、唇も、全てが淡いピンク色であり、身に纏う気配すらも神々しい――その美しさは、とてもこの世の者とは思えない。

彼女を見たドナ・ドナの喉がごくりと鳴る。

下種なことを考えているのが丸分かりだ。

彼ははずれ、この聖女を自分のモノにしようとしていた。

「ご安心を。その男が気掛かりであるなら、私の方で処断しましょうぞ……」

ドナ・ドナが粘着質な視線を聖女の胸元へと向ける。

その大きな二つの膨らみを、脳内で揉みしだいでいるのであろう。円卓の下では手まで動いていた。

彼らの話題は——聖女ルナのこと。

これまで教会の管理者に投げっぱなしであった領地を、何と自らが手腕を振るうと言いつ出したのだ。これを何らかの変化と見るべきなのか、小さな成長と見るべきなのか、ホワイトは頭を悩ませていたのだ。黙りこんだホワイトを尻目に、二人の貴族がぶつかり合う。

「……仮にもルナ様が信用された方。我々が口出しすべきことではない」

「フンッ、既に街には人相書きまで出回っているというではないか！」

「……ドナ、その男が具合的に何かの被害を齎したのかね。噂だけでルナ様が信用された方を処断する？」

「辺境のビリッツォからは、村一つが焼き払われたと報告が来ておるわッ！ 第一、ルナ様の護衛まで投げ飛ばしたというではないか！」

二人が敵意を隠そうともせず、睨み合う。

国に対する心情も違えば、それ以前に人として水と油であった。

「……私の手元に来た情報では、農家が一軒焼けただけ、とのことだったが？ 大方、ピ

リッツォが大袈裟に騒いでいるだけであろう」

「アーツ！ 貴様は『貴族の言葉』を疑うと言うのか！」

「……身分ではなく、信用に値する人間の言葉であるかどうかだ。少なくとも私にとつて、ピリッツォの言より、自らが信用する部下の報告に信を置く」

二人の睨み合いは終わらない。

実質的な経済や、武力を握る貴族の頂点が割れていることにより、聖光国は未だ長い沈滞から抜け出せずにいる。

「あの子が珍しく、この手の事で自発的に言い出したことです……いま暫くは、様子を見ようと思います」

「聖女様が、そうおっしゃられるのであれば……」

「……御意」

ドナは不満を露にしながらも頷き、アーツは静かに目を閉じた。

二人の貴族が部屋を出ていった後、入れ替わるようにクイーンが荒々しく扉を開け、派手な音を立てながら椅子に座る。

それが定位置である、と言わんばかりに足は高々と円卓の上へ放り出されていた。行儀も礼儀もへったくれもない姿である。

「先日は大変だったようね……無事で良かったわ」

ホワイトが声を掛けるも、クイーンは何処か上の空である。

いや、本当に耳に入っていないのかもしれない。

「……………惚れた」

「え？」

「惚れちまったんだよ、あの男に——今、思い出しても最高にイカしてた」

「ちよ、ちよつと……待ちなさいよ、何を言ってるの？」

ホワイトとクイーンは長い付き合いがあり、クイーンの言動や行動が突拍子もないことは百も承知していたが、その口から出た言葉は耳を疑うようなものであった。色恋沙汰からは人類で一番遠い存在である、と思っていたのだ。

「まさか、噂の龍人とかいう人……？ あのね、クイーン。普通に考えて、龍人なんて居るわけないじゃない……」

「姉貴は見てねえから、そんな暢気なことが言えんだよ！ あの拳を！ あの姿を！ あの凛々しい顔立ちを！ イカした台詞を！」

「お、落ち着いて……」

「早く零様を探さなきゃ……はあああ、あの服に顔をうずめてえええ……」
「何で、どうして、妹が二人ともおかしくなってるの……!?!」

エンジェル・ホワイト——唯一、まともな聖女である。

そして、当然のように苦勞人であった。

その苦勞は——長く続くに違いない。



それから、数日後――

「ここが神都か――随分と大きいものだ」

「俺」は生まれて初めて見る、ファンタジー世界の大都市に度肝を抜かれていた。

何より驚いたのは、都市の周辺には途方も無く大きい堀があり、その中には満々と水が湛えられていたことだ。防御力という点では有効なのだろうが、ここでは水の価値が違うらしい。

「す、凄いですね！ 僕も神都は初めて見るんですっ！」

「ふふん……アク、あそこに見える聖城が私の家なのよ」

「あんなに大きな城が家だなんて！ やっぱり、聖女様は凄いです！」

「そう、私こそが最高の聖女――いずれ、この国を統べる者よっ！」

アホか、こいつは。

ルナが国の舵取りなんぞでした日には3日で財政破綻か、クーデターでも起きるだろう

よ。

政治のパラメーターとかがあるなら、こいつは1とか2じゃなかるうか？
俺も5ぐらいかもしれんが……。

《長官、入り口では検問のようなことを行っているようですね》

《なるほど、それなりの防犯意識はあるか……》

日本でも、空港などでは厳しいチェックが入る。

これが外国になると更に厳しい。世界中の犯罪者データと照らし合わせ、入国するだけでも相当な時間がかかったりする。

俺の場合、人相書きが出回っているらしいから一悶着あるかも知れない。

「ルナ、打ち合わせ通り頼むぞ？」

「ええ、あんたは私の下僕ってことにして通すから」

「協力者だ——お前の頭はニワトリ以下か？」

聖女の顔と名を使えば、どうにか入れるだろうとは踏んでいたが、門番には何らかの

話が既に伝わっていたのだろう。

拍子抜けするほど、簡単に入ることができた。

まさか歓迎されてはいないだろうが、門前払いもしない、ということらしい。ルナの護衛を全員投げ飛ばしたことを考えると、少し異様な態度でもある。

《聖女か、貴族か——長官にコンタクトを取りたい人間が居るのでは？》

《私もそう思っていたところだ。さて、鬼が出るか、蛇が出るか》

こうして、魔王が神都へその足を踏み入れた。

とてもではないが、平穩に調べ物をして帰る……と言うわけにはいかなそうな雰囲気である。

晩餐会

——神都 夜

(さて、宿も確保できたな……)

“俺”は持っていた大金貨を使い、神都での宿泊先を確保する。
随分と有名な高級宿らしい。

所持金の乏しさを考えれば安い宿でも良かったのだが、大々的に温泉や病院を宣伝していくことを考えると、大富豪であるというイメージを前面に押し出していく方が好ましい。

同じ言葉でも、貧乏人が言うのと金持ちが言うのとでは説得力が違うのだから。

「それで、アルテミスという店だったか」

ルナが紹介してきた店は、この国にしては随分とまともな店名であった。店名がま

もなだけで驚くというのも、大概酷い話ではあるが。

「ええ、私のような高貴な人間が使う良い店よ」

「高貴、ね……それよりも、何故お前まで宿に泊まるんだ」

「べ、別に良いじゃない……私が何処に泊まろうと勝手にしょっ！」

勝手じゃねえよ！ 宿泊代を払ったのは俺だぞ！

思わずその口を捻りたくなるが、街中で妙な注目を集めるわけにはいかない。只でさえ、既に注目を集めているのだ。

聖女に、魔王を名乗る男、白衣を着た美女に、白いドレスを纏ったお姫様。いったい、何の一行なのかと、歩いているだけでざわめきが起きているのだ。

《長官、懐かしいですね……この雰囲気》

《……そうだな》

いや、すまん。

何のことを言ってるのか、サッパリ分からないんですが。

《我々の武威に平伏する、占領地区の哀れな民衆にそっくりです。あの時、小石を投げた子供を静が「ダルマ」にしたのを昨日のこのように思い出します》
《は、ははっ……》

そういえば、GAMEの小話でそんなのを書いたっけ……。

NPCからすれば、あれも「現実」のものになってるんだな。静はこの手の話が多いから、本当に危ないキャラになってそうだ。

大帝国の無慈悲さを演出するための、ちよつとした小ネタだったのに現実にあつたことだとされると、腹の底から震えがくる。

「魔王様……僕なんか、そんな凄い店に行っても大丈夫なんでしょうか？」

「何の心配も要らんさ。今のアクは、お姫様にしか見えんよ」

「お、お姫様だなんて……」

顔を赤くし、照れるアクを見て動揺を落ち着かせる。

段々、この子が俺の精神安定剤みたいになってきてないか……？

(にしても、夢のような都市だな……)

夜を彩るように、街のあちこちには様々な光を放つ街灯が立てられている。

イルミネーション、と言っても良い規模だ。

大通りには噴水も設置されており、その周りでは多くのカップルが愛を語っている姿も見える。

(道行く人間の格好も、まるで違う)

清潔であるのは勿論だが、お洒落を意識している服が多い。髪型にもこだわりがあるのか、工夫を凝らしているのが感じられる。

昼間はそこまで感じなかったが、夜になると渋谷のようになる、といった感じなのだろうか。

道には魔石が使われた様々な看板が立ち並び、酒場の前では着飾った女が道行く人間に声をかけている。

この調子だと、何処かに歓楽街とかもありそうだ。

(昼は神都で、夜は別の顔、か……)

面白い、そう思った。

綺麗なだけの、取り繕った場所ではないようだ。俺は寺などの静謐な雰囲気も嫌いではないが、こうした活気のある派手な街も決して嫌いじゃない。

「ルナ、ここは面白い街だな」

「そ、そう？ あんたが褒めるなんて意外ね……」

予想外だったのか、ルナがきよとんとした表情で返す。

皮肉でも何でもなく、何かが掴めたような気がしたのだ。

「天使だ何だと言われるより余程、分かりやすい。人の欲望が、そのままに表れている——ここが、この国の原点なのだな」

努力をし、自分を磨き、遂には力や富を手に入れる。

そうした人間を迎える場所が、ここなのだ。死後の世界で幸せになる——などと胡散臭いことを言われるよりは余程、現実味があるというものだ。

「欲望つて、あんたね……あ、着いたわ。ここがアルテミスよ」

「ふむ——では、行こうか」



店内に入ると、そこはまた別世界であった。

客層を見ればすぐに分かる。

高そうな服を着た人間が、ワインや肉を口へと運び、優雅に談笑している。ちよつとした社交界であるようだった。

「これはルナ様、ようこそおいでくださいました——」

「ええ、今日も良いものをお願いね」

席へ座るや否や、支配人のような人間が挨拶にくる。流石に、聖女の看板は伊達では

ないらしい。この看板は、これから先も大いに役立ってくれそうだ。

メニューを向こうに任せ、其々に飲み物を注文する。当然、俺は酒だ。

「では、アクの足が治ったことを祝し、乾杯といこうか——」

テーブルに次々と運ばれてくる皿に、アクは目を白黒させていたが、俺も内心ではドキドキしていた。だが、「九内伯斗」の体はテーブルマナーを熟知しているのか、まるで生まれながらの貴族のように洗練された所作でそれをこなしてみせた。

「アク、作法など気にせず、自由に食べると良い」

「は、はいっ！」

こんな形式ばった店ばかりではなく、次はもつと、気楽に食える店にも行くべきかもしれない。

俺も肩の力を抜いて、気楽に食いたいしな。

《中々のものですが、我々の世界に比べると、大きく劣りますね——》

《まあ、無理もないことだ》

GAMEに用意していた食べ物は基本、現代日本にあるものが多かった。あれを現実のものに置き換えるなら、美味くて当然だろう。

日本と言えばファーストフードを作るために、地球の裏側からでも材料を空輸させるほどに食への拘りが深い国である。冷凍技術も、加工技術も、調理技術も、遥かに劣るであろうこの世界の料理と比べるのは酷というものだ。

(さて、めでたいと言えば……やはり、ケーキが必要だな)

GAMEにも勿論、ケーキは存在していたが、そのまま入手することはできないアイテムであった。加工アイテムである《食材》が必要だ。

これを使用することによって、4種類の回復アイテムを作ることができる。

- ・朝食セット | 体力を50回復 個数1
- ・野菜スープ | 体力を25回復 個数2
- ・苺のタルト | 気力を50回復 個数1

・チーズケーキ — 気力を25回復 個数2

これに加え、生存スキルの《料理》を所持している者は、更に選択肢が増加し、追加の項目が出現した。

・五穀米 — 体力を50回復 個数2

・滋養スープ — 気力を50回復 個数2

・鍋セット — 気力を100回復 個数1

といった具合だ。

残念ながら、九内は料理のスキルを持っていない。ここらへんはスキル会得の権限が復活するか、所持しているNPCを呼ぶまではお預けだ。

「上級アイテム作成——《食材》」

テーブルの下で食材を作成する。

食材と言いながら、それは綺麗な白色の球であった。何に変化させるか分からないか

ら、こういう形になっているのだろう。

こんな場所だ、少し気取ってみるか？

「アイテム加工——《苺のタルト》」

キザかと思ったが、左手で指を鳴らし、まるで魔法のような演出をする。食材が見る見るうちに変化し、輝きとともに苺のタルトが出来上がった。傍目から見たら、これこそ「魔法」だな……。

「わああああ！ 魔王様、それはお菓子ですかっ!?!」

「な、何よそれ！ すっごく可愛いんだけどっ!」

やはり、何処の世界でも女の子はケーキが好きなのだろう。

SPを20も消費した甲斐があったというものだ。別に自分が作ったわけではないが、何やら一流のパティシエにでもなった気分を味わえるじゃないか。

「アク、私からのプレゼントだ——悠、適当に切り分けてくれ」

「はい、長官」

気力も50回復するし、長旅の疲れも飛ぶ。一石二鳥というやつだ。

切り分けられたタルトが其々の前に置かれ、おそろおそろ口へと運ばれる。

味には自信があるが、俺は甘い物があまり好きではないしな……。

「甘いです！ 美味しいです！ 可愛いですっ！」

「いやああああ！ 美味しいいいい！ ほっぺが落ちそうっ！ あんた、どんな魔法を使ったの!？」

「これは、口の中が幸せになりますね、長官……ふうう……っ」

「そ、そうか……ならば、良かった」

こいつら、ちょっと騒ぎすぎじゃないか？

幾ら女の子が甘い物を好きだと言っても……しかも、悠まで……。

「随分と楽しそうね——ルナちゃん」

「ふえ、マダム!？」

見ると、碧のドレスを身に纏い——見るからに裕福そうなマダムがルナへと話しかけていた。その指には、ゴツイと思えるほどの指輪が嵌まっている。

それも10本の指に、其々一つずつだ。

ルナの知り合いなのか、随分とその態度は親しげである。逆に、ルナの方は苦手としているのか、珍しくその目が泳いでいた。

(何だ、このスーパー金持ちは……全身が光ってやがるぞ)

このマダムが何者なのか——密かに探りを入れるべく、動き出す。

これから「事業」を始めるというのに、妙な所で躓くわけにはいかない。

席を立ち、優雅に一礼する。

「これは、マダム。お初にお目にかかる——私は九内伯斗と申します」

「あら、挨拶が遅れたわね。私は——エビフライ・バターフライよ」

(一発芸人か！)

吹き出すよりも、むしろ怒りが湧いてくるような名前であった。
どんな気持ちで親はその名前を付けたんだ!?

《ルナ、このマダムは何者だ?》

《ふえ!?! 頭に魔王のいやらしい声か!?!》

《いやらしいは余計だ。さっさと答えろ》

《貴族の、奥様方の中心人物よ……。貴族の間でとても顔が広いし、影響力も大きいから怖い人なの……》

まさに、暇を持て余したマダム達の女王というわけだ。

巧く売り込めば、思わぬ効果が期待できるかもしれない。ネットなどが無い社会なのだから、影響力が強い人物の口コミは大きいだろう。

「マダム——良ければ一席、共にしませんか」

「ちよ、ちよつと、魔王!」

「あら、『噂の魔王様』からのお誘いだなんて……。とても刺激的ね」

こいつ、食えない女だな。

俺のことを知っていないながら、何食わぬ顔で近づいてきたらしい。

口煩いであろう、貴族の奥様方を纏めているだけはある。歳は恐らく、五十を超えているだろうが、正確なことは分からない。

その姿を見ると、小山のような大きな体であり、あまり運動をしてないことが見て取れる。

（話のタネに近づいてきたのか？ お前、逆に喰らってやるぞ——）

こうして、表面上は和やかな談笑が始まる。

同時に、その裏では。

サタニストが闇に溶け込み、合図が鳴るのをじっと待っていた——



情報の一部が公開されました。

加工アイテムは他にも存在し、《武器素材》や《非合法物》などが代表的な例として挙げられる。

前者は使用すれば武器の攻撃力に+2の効果を生むアイテムが生み出され、後者は各種ステータスをUPさせることが可能であった。

双方共にゲームバランスを著しく崩す可能性があるため、其々に《秀才》や《非合法物》などのスキルが必要であり、これを入力するハードルも高い。

他にも《変化アイテム》のように、使用すればランダムで効果や内容が変化するものもある。

《御神籤》や《占い雑誌》などは結果が善悪共に存在し、下手をすればステータスが下がるので使用するには十分な注意が必要だ。

《福袋》《小さな宝箱》《プタの貯金箱》《サンタの袋》などは貴重なものが多く出現するが、時にはゴミのようなものが出て、プレイヤーを落胆させることも多かった。

騒乱の兆し

アルテミスの一席、そこにはちよつとした注目が集まっていた。

店内では様々な楽器が優雅な音色を流し、客の耳を楽しませていたが、その目は一つのテーブルへと向いている。

聖女と魔王を名乗る男、それに——マダム・バタフライ。

貴族といえど、奥方に首根っこを掴まれている男は幾らでも居る。その怖い奥様方を束ねる大ボスがバタフライなのだ。

その影響力は計り知れず、彼女が嫌った者は社交界から締め出されるほどだ。何の関係も無い、周りの客の方が緊張感を持って成り行きを見守っていた。

「それにしても——マダムはとても美しい。貴女がこれまで美に費やした努力を考えると、頭が下がる思いですな」

「あらあら、こんな老婆を口説いているのかしら」

魔王とバタフライの談笑が始まったが、その目は全く笑っていない。

互いに相手を探りあう様は、白刃を向け合っているに等しい姿であった。

「ねえ、『魔王様』から見た、この街はどうかしら——？」

「素晴らしいものですな。とても素直で、とても分かりやすい」

「……他国から来られた方の中には、驚かれる方も多いのよ。余りの格差に、まるで天国と地獄である、なんて言う方も珍しくないわ」

「なるほど、言い得て妙ですな。ですが、それを解決する方法が一つあります」

そこまで言つて、魔王が言葉を区切る。

解決する策、とまで言つておきながら悠々と煙草に火を点け、続きを語ろうともせず
に煙をゆつたりと楽しんでいた。

次第に焦れたように、マダムの方からテーブルへと身を乗り出す。

「是非、聞かせてもらいたいわね。『魔王様』の知恵を」

「なに、簡単なことです——『全ての地を天国』にしてしまえば、何の問題も無くなる。
至極、単純な話ですよ」

「すべ……こゝ、これはまた、随分とスケールの大きい御話ね」

「——仮に私が国の頂点に立てば、数年で実行可能ですな」

魔王の言葉に、マダムが絶句する。

大言壮語、などと言うレベルではない。殆ど頭の病気を疑うレベルである。

これまでもマダムに気に入られようと大きなことを言ったり、美辞麗句を並べたてる者は多かったが、ここまでのことを放言する人物は初めてであったろう。

その実、この男には全てを天国にする策など、ありはしない。

そんなことができるなら、この男は現実世界で政治家にでもなっていたはずだ。

（うははっ。言うだけなら、幾ら言っても無料だからな）

一種の開き直りでもあったし、「途方もない人物である」との印象を持たせるために打った博打のような演技である。

だが、マダムの見るところ、横に居る美女は“それ”を無言で肯定しているようにも見えた。

今の発言は虚飾ではない、と言わんばかりの態度である。

「しかし、国などという退屈なものの前に——私はマダムにもっと別の『天国』を提供したいのですよ」

「興味深いわね……いったい、どんな『天国』なのかしら？」

魔王がテーブルの下で作り出した物を綺麗な紙へと包み、マダムへと手渡す。

女性陣に大好評の『石鹼』である。

だが、それを手渡されたマダムの顔は何とも言えぬ複雑なものとなった。この途方も無い放言をする男が、何を渡してきたのかと思えば石鹼である。

この国では銀貨1枚く5枚で売買されるほどの高価なものではあるが、マダムからすれば珍しくもないし、ありがたい物でもなかった。

「あ、その石鹼ってば凄いのよっ！」

「あら、ルナちゃんのお勧めの品なのかしら……？」

「もう『魔法』かってくらい汚れが落ちて、肌がピカピカになるの！」

「魔……ピカピカ、ね……」

（ナイスアシストだぞ、ルナ！）

思わぬ援護射撃に、魔王が内心ガッツポーズを作る。

実際、ルナの口から出た「魔法」という言葉は重かった。マダムからすれば、ルナなどはまだまだ子供であり、その無邪気さを愛でているだけに過ぎない。

が、彼女の魔法の才だけは違う——紛れも無く「本物」であった。

ルナが自らの魔法に強い誇りを持ち、そこに自尊心の全てがあると熟知しているマダムにとって、ルナの口から出た「魔法」は非常に重い。

「確かに、ここに居る御嬢さん方の肌は輝くようね」

マダムがテーブルに着いている女性陣を見渡し、微かな嫉妬を浮かべる。年齢も若く、その肌には皺一つない。

そのうえ、揃いも揃って——美少女と美女ばかりであった。

「是非、今晚にでもお試してください。効果の程がお分かり頂けると幸いです」
「そうね……魔王様からの素敵なプレゼントに感謝するわ」

マダムがつい、手にした石鹼へ熱い視線を送る。

幾つになろうと、女性にとって肌というものは気になるものだ。どれだけの富があつても、老化ばかりはどうしようもないということもあり、「美」という項目は鉄壁とも言えるマダムの唯一の弱点でもあつた。

「いえいえ、その程度で感謝されては困ります。近々、ラビの村に温泉を用意しようと思つていまして——文字通り、肌が、全身が、「生き返り」ますよ」

それは——魔を統べる王に相応しい、「魔性の言葉」であつただろう。

「生き返るだなんて、随分と大きなことをおっしゃられるのね……」

「私は自らが用意するものに対し、一切の虚飾を述べない——私の口から出た言葉は、
全てが現実」となるからだ」

（くううううう……っ！ 格好良いです、長官！）

もう言いたい放題であつた。

こうなつてくると、この男の独擅場であろう。

「そこでは一般的な湯だけでなく、炭酸泉や壺湯、岩湯、岩盤浴、水風呂や電気風呂、薬草風呂や塩ミストサウナ、ロウリュウサウナなど、様々なものを楽しむことができましてな。疲労が取れるばかりでなく、肩こりや腰痛、冷え性などにも効果が高いものばかりです。無論、湯上りの肌も若返ることでしょう」

「そ、そう、なの……」

魔王の言ってる内容は、マダムには正確には伝わっていない。

だが、それらが「とんでもないモノ」であることだけはひしひしと伝わった。聞いているだけで、今すぐにでも行きたくなるほどだ。

実際、この男が「それ」を建てた暁には、それは「現実」のものとなる。

本来なら体力の回復を早める施設であるが、温泉に書かれている効果もまた、現実的に即した「結果」を生むであろう。

「とても、楽しみね……いえ、それはいつ用意されるのかしら……」

「ここでの調べ物が終われば、すぐにでも」

「ぜ、是非、是非、伺わせてもらおうわ。ルナちゃん、カキフライには内緒よ?」

（カキフライって！ お前ら、揚げ物ばかりか！）

魔王が心の中で突っ込んでいたが、そんな表情はおくびにも出さない。だが、笑いを堪えているのか、煙草を持つ手だけは微かに震えていた。

「分かったわ。でも、マダムってば、相変わらず妹さんとは仲が悪いのね」

「ルナちゃんのとと同じよお？ 姉妹ってのは中々、分かり合えないものなの」

（揚げ物同士、仲良くしろよ……）

魔王が吹き出しそうになるのを必死に堪えながら、満面の笑みでマダムと握手を交わす。一時はどうなることかと思っただ遭遇であつたが、無事に終了したようだ。

その後、一行は賑やかに食事を楽しんでいたが、絹を裂くような悲鳴が響き、店内が騒然となった。

外から響いてくるのは振動と、怒号。

耳をすませば、叫ばれている内容は一つであつた。

「さ、サタニストの襲撃だあああああああ！」

——魔王の表情が変わる。

それはオモチャを見つけた子供のようにでもあり、湧き上がる喜悦を抑えかねているような姿であつた。

「晩餐会の余興に、丁度良い道化が来たようすな——」

その姿に、マダムが唾をごくりと飲み込む。

そこには今までの姿とはまるで違う——『正真正銘の魔王』が居たからだ。

魔王の片鱗

神都とは大きく四つの地区に分けられる。

一つは当然、聖城。

聖なる結界が幾つも張り巡らされた歴史ある城は、悪魔という存在を一切寄せ付けない。相当な力を所持する魔族であっても、中に入り込むことは困難であろう。

そして、聖堂騎士団の本部や、貴族の館が集まる高級地区に、聖堂教会の本部や一般市民の住居が集まる一般地区。

最後に、多くの商会や露店が集まる商業地区だ。ちなみに、商業地区の中には冒険者達が利用するギルドや、歓楽街なども存在する。

サタニストは聖城を除く、その全ての区画へ同時攻撃を開始した。長い時間を掛けて地下道を掘り進み、神都の真下へと潜り込んだのだ。

其々の地区に大穴が開き、そこから一齐に同じ装束を着たサタニストが湧き上がってきたのである。

神都に大きく開いた三つの穴は――

何処か『奈落』を思わせる不気味なものであった。



「なるほど、同時攻撃ね……中々やるもんだ」

俺は店を出るとすぐさま屋根へと跳躍し、高所から神都全体を見回していた。

自分の居る地区からも悲鳴と怒号が響いており、遠くを見ると更に二箇所から火の手が上がっている。

対応する人間をバラけさせようとしているのだろう。

同時多発テロ、という単語が頭に浮かぶ。古典的だが、有効な手段だ。

俺は店に戻ると、すぐさま悠へと指示を与える。別に急ぐ必要はないが、出来るだけSP……いや、敵を逃がしたくなかったのだ。

「悠、ここの人達を守ってやれ——私は騒動を収めてくる」

「了解しました、長官」

「ちよ、ちよつと勝手に決めないで！ 私も行くんだから！」

「ルナ、この騒ぎはお前が標的になっていて可能性もある。お前があちこち歩き回って
いては、守るに守れんだろう」

「ま、守るって……べ、べべべ別にあんたに守ってもらわなくても……」

ルナが顔を赤くして黙り込む。

こいつ……本気でチョロいんだが、大丈夫か？ 流石にここまで免疫が無さそうなところを見ると心配になってくる。

そもそも話として、ルナが魔法で敵を倒していたら、俺がSPを稼げないしな。

「アク、悠の傍に居れば心配ない。ゆっくり食事を楽しんでおくと良い」

「は、はいっ……で、でも、魔王様は大丈夫なんですか？」

アクが心配そうな顔でこちらを見上げ、手を握ってくる。

何だか子供に心配されるお父さんみたいな気分になってくるな……俺はまだそんな歳でもないし、独身だぞ？

「余興と言っただろう——食後の運動のようなものだ」

実際、SPを稼ぐということしか頭に無い。

相手がヤバそうなら、それこそ逃げれば良いだけの話だ。戦闘から逃げ出す手段など、ごまんとある。

「マダムもどうか、食事の続きを」

「本当に、貴方は凄く自信家なのね……いえ、貴方の言を借りるなら、『全てを現実』にする、だったかしら？」

「仰る通りです——連中にとっての不幸は、私がこの場に居たことでしょうか」

それだけ言い残すと、店の外へと出る。

相手がヤバそうなら逃げる気満々だったのに、良くぞ言いたい放題に言えるもんだ。我ながら、自分の心臓に毛が生えてるような気がしてきたぞ。

ともあれ、行く前に悠へ釘を刺しておこう……あいつを放置しとくと、何をやり出すか分かったもんじやない。

帰ってきたら襲撃者が全員解剖されていた、なんてこともありうる。

《悠、我々は知るために——動き易い立場で居なくてはならない》

《残虐な行為は控え、評判を得よ、と?》

《相変わらず、話が早くて助かるな。頼りにしているぞ、悠——》

《は、はひ……っ》

ん?

何か最後、囁んでなかったか?

いや、あの悠に限ってそんなことがあるわけないか……。

「さて、まずは何処から行くか」

通りを見ると、人々が逃げ惑っている姿が目に入る。

それは——TVの向こう側では、よく見る光景ではあった。

平和な街で突如テロが発生し、血だらけになった人間が救急車などで運ばれている姿を茶の間で“他人事”のように見ていたのだから。

いや、実際に他人事だった。

家の近所で起きた、というならまだしも、海を挟んだ遠い外国でどれだけテロが起こ

ろうとピンと来ないのだ。

(でも、ここでは他人事では済まんよな……)

ルナはまだしも自分を守る術を持っているが、アクに至っては小さな破片が飛んできただけでも大怪我を負ってしまうだろう。

折角、足を治したばかりだというのに、こんな騒ぎで怪我を負うようなことになれば何をしにここへ来たのか分からなくなる。

(それに、またお前らか……)

遠くに見えるのは見慣れた黒装束。その手には其々、凶器が握られており、中には杖を掲げている者も居た。

あの一団こそが、自分をこの世界へと呼んだ元凶でもある。

知らず、握った拳が硬くなっていく。

「行く先々でチョロチョロと。そんなに『魔王』に会いたいなら会わせてやる」

俺は人でごった返す道を避け——
屋根から屋根へと飛び移りながら行動を開始した。



——商業地区

この地区の集団を率いるマージは苛立ちを隠せずに行った。
当初こそ不意を打つ形で襲撃が行えたものの、冒険者ギルドから迎撃の人間が多数出てきたのだ。無論、マージらにとってそれらは織り込み済みではあったが、その中の二名が突出して手強く、計画の進行にまで狂いが生じていた。

「はああああああ——ッ！ 《剛撃》」

今も褐色の肌をした女戦士が、見上げるような大剣を振り下ろし、三人のサタニストが吹き飛ばされた。

その表情には疲労の色が濃く、いずれ力尽きるであろうと思われたが、このまま待っているだけでは被害も馬鹿にならない。

「まだまだああああ！ 《剛円武》」

女戦士が大剣を一周させ、周辺に強烈な衝撃が走り抜けた。

黒装束の体が紙のように引き千切られ、サタニスト側の戦力が次々と削られていく。遂にマージは堪えきれず、自らが前線に出ることを決意した。

彼にとって、ここで気力を浪費するのは想定外ではあったが、黙って見ているわけにはいかなくなったのだろう。

「卑しい冒険者どもが……！ 《氷刃／アイススラッシュ！》」

マージが放ったのは「水」の上位である「氷」が生み出す刃であった。

彼は「水」の魔法であれば第三魔法まで扱うことができる、かなりの力量の持ち主である。その上位である「氷」になれば第二魔法が限界であったが、それでも常人とは一線を画した存在と言って良い。

「汝、冷凍ミカン也——《雪の恋人／スノーキッス》」

だが、女戦士を守るように淡い白色の魔法使いが防御魔法を唱える。

「マジと同じく「氷」の、それも第四魔法であった。圧倒的な対・氷魔防が女戦士に付与され、氷刃が目前で粉々に打ち砕かれてしまう。」

「助かったわ、ユキカゼ！」

「……勝利のブイ。お口の恋人」

魔法使いが何やら意味不明の言葉を呟いていたが、女戦士はそれを無視して更に敵へと突っ込んでいく。

ユキカゼと呼ばれた少女も、更に魔法を放つべく詠唱を始める。

通常、魔法を一度放てば次に放つまでには結構な時間がかかるのだが、彼女の力量が相当優れているのだろう。

——連続詠唱

「……渚の海で捕まえて《氷の手／アイスハンド》」

「貴方のここ、カチカチです……《氷槍衾／アイススプラッシュ》」

ユキカゼが最初に放った魔法により、地面から無数の氷の手が生え、サタニストの足首を掴む。

身動きが取れなくなったところへ、氷の槍が殺到した。無慈悲とも言える連続詠唱にサタニストが血飛沫をあげながら次々と倒れ込む。

可愛い顔をしているが、やることは至って残酷である。

「怯むなッ！ 数はこちらが上だ……気力が尽きるまで攻め続けろ！」

マージの声に、後ろに居たサタニストが次々と押し寄せる。

そこからは、完全な乱戦となった。

冒険者とサタニストがぶつかり合い、双方の被害が飛躍的に増していく。

不意を突いたサタニスト側の勢いはやはり大きく、そこからは次第に冒険者が押されていく展開となった。

冒険者からすれば降って湧いたような状況であり、あくまで「護身」からの行動だったが、対するサタニスト側は「死兵」であった。

彼らは今日、この場で死ぬことを決意しているのだ。

冒険者からすれば、神都を守って討ち死にする義務など何処にも無い。

それは、聖堂騎士団や聖堂教会の役目であろう。冒険者の中には、既に逃げ腰になっている者も居たし、隙を見て逃走しようと周囲に目をやっている者も居た。

「ちよつとマズイわね……どうする、ユキカゼ」

「バージンのまま死ぬのは不本意」

「この状況で良く、そんな軽口が叩けるわね……大体、あんたは男でしようが」
「ミカンは無知。男の娘は——」

その言葉が終わる前に、サタニストの一人がユキカゼの顔へと剣を振り下ろす。

だが、それが振り下ろされる前に、奇妙な音が響いた。

それは大気を切り裂くような音。その後、戦場には場違いとも言える乾いた小枝が折れるような音が鳴った。

怒号と剣戟が響く中であるというのに、その音は不気味なほどに全員の耳へとへばり

付いたのだ。

振り下ろそうとした腕が、何かの衝撃で折れたのだろう。

剣を持った腕が猛スピードでぐるりと背中へと張り付き、その体までも独楽のように凄まじい速度で回転し出したのだ。

突然、目の前で始まった“人間独楽”に全員が動きを止め、目を白黒させる。

その動きが止まったとき——独楽が白目を剥いて地面へと突っ伏した。

「——道化に相応しく、良い芸を見せてくれるではないか」

見上げると、屋根の上には漆黒のコートに身を包んだ“魔王”が居た。

その手には幾つかの小石が握られており、それを宙に投げては遊ばせている。今の芸は彼が小石を投げたことによって生まれたのだろう。

小石を当てただけで、人間の体が独楽のように回る。

あまりにも馬鹿げていた。

この存在こそが——まさしく“格差”であつたらう。

「おじ様……また会えた。素敵過ぎる」

「魔王……！　何で神都に！」

二人の声に魔王は何も答えず、そうすることが当たり前であるかのように屋根から飛び降りた。何の躊躇無く、魔王は次の行動へと移る。

この地区を襲ったサタニストは総勢500名にも達する規模であったが、魔王の前ではあまりにも無防備過ぎた。

「誰の前で立っている？　跪け——《覇者》」

魔王の全身から赤いオーラが立ち上り、その右手が振るわれると同時に、無属性の嵐が吹き荒れた。それはGAMEの戦闘スキルの一つ、覇者。使用者の攻撃ステータス、その1/3のダメージを与えるものだ。

圧巻の「全体攻撃」に、サタニストの体から鮮血が迸る。

だが、魔王の攻撃は終わらない。

GAMEでの戦闘は基本、スキルを揃え、各自の好みで組み合わせ、「コンボ」を繋げていくことにある。

通常攻撃に、一定の熟練度に達していれば放たれる連撃、そこからの属性スキルに、無

属性スキル、遺恨攻撃、特殊能力、それらは組み合わせ次第では天文学的なダメージを叩き出し、名人ともなれば「神をも殺す」などと言われたものだ。

「下賤の正しい姿に——《開眼》」

次に左手が水平に振るわれたとき、青色のオーラが扇状に広がり、サタニスト達の体を貫いた。

覇者とは逆に、使用者の防御ステータス、その1/3のダメージを与えるものだ。サタニストが次々と膝を突き、口から大量の血を吐き出していく。

「今、戻してやる——《粉碎》」

魔王の体から黄色のオーラが吹き荒れ、それが巨大な槌へと変化する。天空からそれが振り落とされた時、500名にも及ぶサタニストの体に目も眩むような衝撃が走った。

それは相手の最大体力、その1/10のダメージを与える戦闘スキルであり、一定確率で「骨折」のバッドステータスまで与えるものだ。粉碎を食らったサタニストが次々

と腰や足を砕かれ、その頭を地へ擦り付けるように突つ伏した。

「良い姿勢だ——二度と忘れぬよう、頭に叩き込んでおきたまえ」

三種の無属性が吹き荒れ——

見渡す限りのサタニストが無残にも地へ転がった。その全身の骨はあちこちが砕かれているのだろう。

中には蛙のように潰されている者もあり、手足がおかしな方向へと曲がっている者も多数居た。

「なるほど——君らの体力は精々60〜80といったところなのかな？」

魔王がそう呟いたが、その意味が分かる者はこの場には居ないだろう。

一つだけ分かることと言えば、この男が「魔王を名乗る男」ではなく——
どうしようもなく、「本物の魔王」である、ということだけであった。

「これでも『俺』は、お前達に対し——怒るだけの正当な権利があつてね」

その眩きは誰の耳にも入らない小さなものであったが、重い実感が込められたものでもあった。

「今でこそ、多少の『感謝』もあるが——」

魔王がそう眩いた瞬間、血塗れとなったマージが逆十字を掲げ、怪しげな呪詛を呟いた。それは、サタニストが行う血塗られた術。

自身だけでなく、数多の生贄を捧げる——禁断の儀式であった。

悪魔 VS 魔王

「この呪われた地に……災いあれ……」

マージがそう呟いた瞬間、手にした逆十字からびつしりと棘が生える。それらがマージの掌を貫き、鮮血が迸った。

「父さん……すまなかった……」

マージは故郷の父を想う。

腕の良い靴職人だったが、不況の煽りを受けて注文が激減し、遂には廃業に追い込まれてしまったのだ。

そこからの父は酒に溺れ、家の中で暴れ回り、マージにも度々暴力を振るうようになった。

まだ若かったマージはそんな生活に耐え切れず、遂には父を刺し殺して村を飛び出したのだ。

転げ落ちるような転落の中、マージを拾ったのがサタニストの集団であった。

この時代、何処にでもある話であり、よくある話でもある。

逆十字から赤黒い煙が立ち昇り、マージの全身を包む。

それは自身を贄として悪魔を呼び出す儀式。赤黒い煙はマージだけでなく、更に後ろで蹲っている500名のサタニストの体も包んでいく。

人間如きの小さな贄では精々、呼び出せるのは下級悪魔であろう。

だが、ユートピアに手渡された逆十字が更にワンランク上の化物を誘き出す。それも、中級悪魔の中でも、極めて力の強い存在を。

「^{サモンデビル}悪魔召喚」――

血煙が一つの形となり――中級悪魔「カーニバル」が召喚された。

それらを見て、冒険者達が悲鳴をあげる。こんなこと、あつてはならない。

人の街に、こんな化物が現れるなどということは。それも、ここは悪魔を退ける「神都」である！

「あら……人間なんか呼び出されるなんて、いったい何事？」

頭から生えた二本の角、黒い頭髮、焦げたような肌の色に、醜さを寄り集めて形にしたような顔。見ているだけで体力が削られるような存在であった。

そのくせ、着ている服だけは場違いなまでに派手であり、金色の服のあちこちにはキラキラと光る石が無数に縫い付けられているのだ。

その背中には、奇妙な楽器まで背負っている。

「ま、いつか。美味しそうなのがいっぱい居るし——《美獄の地》」

カーニバルが悪魔特有のスキルを発動させ、周辺に不可視の壁が生み出された。

悪魔はまず、逃げ場を無くしてから遊ぶことを好む。

殺すにせよ、喰うにせよ、バラして遊ぶにせよ、逃げられるというのはあまり好ましくない。特にカーニバルのような人の悲鳴を歌にして、楽器を掻き鳴らすような悪魔にとっては「歌い手」の消失に繋がる。

冒険者がカーニバルを見て、慌てて逃げ出したがもう遅かった。

既に悪魔が固有の空間を作り出しており、その壁を打ち破ることなど、並大抵の力では不可能である。気付けば冒険者だけでなく、商業地域の一角、数千人にも及ぶ人間が

カーニバルの作り出した空間に閉じ込められていた。

「嘘だろ、何でカーニバルがこんな所に！」

「ま、待つてくれ……俺達は只の冒険者だ！」

「そ、そうだ！ 俺達は教会の人間じゃないんだぞ！」

「嫌……悪魔に食われるなんていやああああ！」

冒険者達が奏でる音色に、カーニバルがうつとりとした表情で目を細める。

“彼”にとって、愉悦とも言える時間であろう。

商業地区の人間達も家屋に潜み、身を震わせていた。無数の“ギャラリ”まで居るなど、カーニバルからすれば非常に好ましいステージである。

「歓迎されて嬉しいわあん。さあて、どの子猫ちゃんから歌ってくれるのかし——
ぎいひやあああああ！」

愉悦に満ちた言葉が、途中で遮られる。

何処からか飛んできた小石が、カーニバルの角をへし折ったのだ。

あまりの痛みに、悪魔が頭を抱えて絶叫する。悪魔としての誇り、叡智、それらを誇示する角が「石コロ」に砕かれたのだ。

「だ、誰がやりやがったああああアア！ この虫ケラがああああッ！」

カーニバルが今までの口調を捨て、剥き出しの声で絶叫する。

その声に冒険者達は身を小さくしたが、石を投げた本人の声は至って平静であり、まるで「明日は雨か」とでも語っているような声色であった。

「オカマ口調より——その方が似合っているな」



「てめえかああああ！ このクソ野郎がああああ！」

「……何ともまあ、品が無い。顔も悪い。声も汚い。着ている服も最悪だ。見るべき所は皆無だが、芸人として見るなら悪くないかもな」

そんな「魔王」の声にカーニバルが益々、その容貌を歪めて絶叫する。

この虫ケラには歌わせるような「贅沢」は与えない。カーニバルは即座にその頭を粉々に握り潰すべく、一步を踏み出した。

が、その足が止まる。

それは、優れた悪魔であるゆえに感じた、本能であったのかどうか。

魔王の口が静かに開く。

そこから紡がれる言葉とスキルの発動は——どんな悪魔であろうと、裸足で逃げ出すようなものであった。

「実のところ、悪魔とやらと会うのは二度目でね」

——生存スキル「闘争心」発動

(使用者の攻撃、防御に+10%)

「前回の「アレ」はあっけなく死んでしまったが」

——戦闘スキル「脱力」発動

(敵対者の攻撃に――100%)

「お前はどうかんだ？」

――戦闘スキル「威圧」発動

(敵対者の防御に――100%)

「後学の為にも、今回は本来のスタイルで行かせて貰うぞ」

――戦闘スキル「無双」発動

(使用者の攻撃、防御に+30%)

「カーニバルと言ったか――『準備』は良いか？」

言っている本人は気付いていないのである。

その体からは異様なまでのオーラが発せられており、カーニバルの体が見る見るうちに小さくなっていくような錯覚すら引き起こさせた。

逆に、本人の体は触れただけで破裂させられるような危険なものに満ちており、只でさえ圧倒的なステータスが、スキルの補正によって更に爆発的なまでに上昇している。

まさに、只の通常攻撃が——神をも殺す状態である。

「ま、待って……待って！ 素敵なムツシユ！ 私が、私が悪かつ……」
「おっと、大切なことを忘れていた」

魔王のそんな言葉に、カーニバルが一縷の望みを繋ぐ。

こんな悪夢のような状況は、本来あつてはならないのだから。強力な悪魔として著名なカーニバルが——“只の人間”に圧倒されるなど。

「そ、その大切なことをお手伝いさせてもらうわっ！ どんなことだつて私が！」

「基本態勢、変更——《戦闘態勢》」

「応戦姿勢、変更——《迎撃姿勢》」

カーニバルの言葉など耳に入っていないのか、魔王が基本態勢を変更する。

この態勢は敵プレイヤーを発見できる確率こそ下がるものの、全ステータスに＋補正を与えるものだ。相手がそのエリアに居ると確信しているとき、相手を逃げられないように追い詰めたときなどに高い効果を発揮する。

対する応戦姿勢も変更し、完全な迎撃状態を作り上げた。

こちらでも攻撃と防御に＋の補正を与えるが、何よりの特徴は敵プレイヤーと非常に遭遇しやすくなる、という点だ。

必殺の態勢を作り上げ、敵を待ち構えて一撃で狩る。これが、九内の本来の戦闘スタイルである。

が、カーニバルは動けない。

動けるはずもない。

「いったい誰が、『こんな相手』に攻撃を仕掛けることができるであろうか。

「いや……こんな所で……人間なんかにごろざれるなんてえええ！」

「散々、殺してきたんだらう？ 一度くらい自分が死ぬ経験もしておけ」

魔王が無造作にカーニバルへと近付き、その頭を掴む。

その後、野球のボールでも投げられるかのように高々と空へ放り投げた。

巨大な悪魔が、猛スピードで空へと打ち上げられる。とてもではないが、現実のものとは思えない光景である。

商業地区の人間達も、固唾を飲みながらそれを見守っていたが、更に驚愕の光景が目の前で起きた。

魔王の手から白き閃光が走る。放たれたソドムの火がカーニバルに突き刺さった瞬間、大気を震わせるような大衝撃が発生し、夜空を赤く染め上げるような地獄の爆炎が神都の上空へ広がったのだ。

カーニバルのものと思われる、肉片や破片が辺りに降り注ぐ。

暫くのあいだ、誰も身動きすることができなかった。

あまりの光景に、声を上げることすら憚れたのだ。

「思った通り——汚え火花だ」

魔王がカラリと笑った瞬間——凶悪な悪魔から解放された冒険者達が遂に喜びを爆発させた。

彼らのあげる大歓声に引き寄せられるように、閉じ込められていた商業地域の人間達も次々と街へ出ては互いに抱き合い、無事を祝い合った。

てつきり殺されると思っていた連中も涙を流し、拳をぶつけ合う。

「魔王様、万歳だ!」

「あんた、マジでとんでもねえな!」

「あのカーニバルが子供扱いだなんて……故郷に良い土産話ができたぞ!」

「旦那、今日は一杯奢らせてくれ!」

周囲の声に、珍しく魔王が狼狽したように辺りを見回す。

こんな展開になるなど、予想もしていなかったのである。だが、圧倒的な死の恐怖から解放されたのだから、彼らの反応も当たり前であった。

「ま、まあ……私にかかれば、あの程度、造作もないことだ」

魔王がソワソワしながら煙草に火を点け、空を見上げる。

今頃になって、かなりノリノリで戦っていたことを思い出して恥ずかしくなってきた

のであろう。だが、周囲の人間はそうは捉えない。

その言葉を真に受け、言葉すらも超えた歓声が周囲を包んだ。

「で、では……私は行く。他にも騒ぎが起きているようだしな」

魔王がそくさと逃げ出そうとしたが、その前に一人の魔法使いが立ちはだかった。白き魔法使いユキカゼである。

「君は確か……」

「……おじ様に命を救われたのは二度目。恩を返したい」

「その必要は無い。私にとって、（SPを稼ぐのは）大切なことだったんでな」

「……おじ様」

その言葉にユキカゼが顔を赤くし、体もモジモジとさせる。

何か大切な言葉が抜けているような気がしたが、魔王としてはこの場を早く離れたかったのだろう。

だが、ユキカゼの乙女メーターは上がりっぱなしである。男であったが。

「……私のせいで、おじ様を二度も危険な目に遭わせてしまった」

「躊躇する理由にはならん。それほどに、（SPは）大切だったということだ」

繰り返された言葉に、完全にユキカゼがノックアウトされる。

白く透き通ったような顔は、今やほのかにサクラ色となっており、非の打ち所のない美少女そのものと化していた。男であったが。

「……おじ様の名前を、教えてほしい」

「おじ……わ、私は、九内伯斗と言う」

何度も繰り返される“おじ様”という単語に、今度は魔王がダウンする。

小さく「中の俺はまだ若いんだよ……」と必死に呟いていたが、喜びを爆発させている周囲へその声は届かない。

（と言っても、こんな子からすれば、三十代はもうオッサンか……）

魔王はそんな切ないことを考えながら、月を見上げる。

何処となく憂いを帯びた表情に、ついユキカゼの心臓が高鳴った。

この魔王は凄みこそあれ、その顔は決して悪いものではない。一流の悪党だけが出せる、一種の“色気”があると行って良いだろう。

「くない！ クナイ！ くない！ クナイ！ くない！」

気付けば、周りの冒険者が魔王の名を連呼していた。

吊り橋効果とでも言うのか、只のハイテンションなのか、死の危険が遠ざかった周囲の喜びは、そこへ酒が加わったことで更に大きくなっていく。

通りにある酒場の店主達が、祝いと称して酒を配り出したのだ。

(何だこれ！ 冗談じゃないぞ……！)

悪い評判は消したかったのであろうが、ここまで来ると予想外であつたのだろう。むしろ、この状況は罰ゲームに近い。

魔王は逃げるように屋根へと跳躍し、あらぬ方へと飛び去っていった。

「あれが魔王、か……………」

ミカンが力無く眩き、その場にへたり込む。

500人にも及ぶサタニストを一瞬で屈服させ、中級悪魔すら殆ど鼻歌交じりに爆殺してしまう存在。最早、人がどうこうでできるようなレベルではなかった。

「…………私とおじ様は、赤い糸で結ばれていた」

「ま、待つて！ ユキカゼ…………あんた騙されてるのよ、きつとー！」

「…………ミカン、嫉妬？」

「誰が嫉妬なんかするか！ 私の好みはね、噂になつてた銀の龍人みたいな正義を愛する人なのー！」

「…………いやらしい。性技を愛する人が好みなんて」

「何か言葉のニュアンスがちがーうー！」

こうして無事、商業地区の脅威は跳ね除けられたが、他の地区では未だ騒乱が続いている。

更に、一人の道化が“アルテミス”へと近づいていた。
そこに、魔王へ忠誠を捧げる“恐ろしい魔女”が居るとも知らずに。

童話遊戯

— サタニスト 本拠地

「いったい、どうなっている……！ 使うタイミングが早すぎる！」

ユートピアが怒りを含んだ声をあげ、玉座に拳を叩き付けた。

これまで声を荒げることなど殆ど無かった男である。そんなユートピアが激昂している姿に、隣の少女が小さく体を震わせた。

「マージめ……何を血迷ったのかッ！」

「き、きつと……不測の事態とかが起きたの……」

ユートピアが、横で震えている少女に冷たい蛇のような視線を送る。

言葉にはせずとも、目が物語っていた——この出来損ないが、と。他者の感情を色で見ってしまう少女はつい目を伏せる。

そこには見たくもない——“悲惨な色”が見えたからだ。

「トロン……あれを持って残りの二つを聖城の前で使え、と伝えてこい。それぐらいはできるだろうな——混ざり者の出来損ないでも」

「……う、うん」

黒いゴスロリ服を着た少女がトボトボと歩き、一度だけ玉座を振り返った。

少女は“何か”を期待したのかもしれない。

だが、返ってきたものは至って冷淡なものであった。

「さっさと行け——目障りだ」

まるで犬でも追い払うようにユートピアが手を振り、顔を背ける。

視界にも入れたくない、といった姿であった。

彼のように強大な力を持ち、尋常ならざる地位に居る“悪魔”にとって、混ざり者など存在そのものが不快なのだ。

戦力が不足していなければ、この少女などユートピアの手で五体を引き裂かれていた

だろう。

この少女もオルガンと同じ混血児——“魔人”であつた。



一人の道化がアルテミスへと近付いている。

言葉の比喩ではなく、彼は本当にピエロのような格好をしているのだ。彼は指示されていた集団から勝手に離れ、独自の行動を取っていた。

その足取りは非常に軽い。

ずっと付け狙っていた聖女が、何と無防備にも護衛すら連れず、単独で食事を楽しんでいるというのだ。

それを聞いた瞬間、彼は集団から離れ、聖女を暗殺すべく動き出した。

「お馬鹿な聖女も居たものねえ……」

彼の名はカーミヤ。

裏社会ではちよつと名の知れた暗殺者である。その派手な格好で周囲を油断させ、様々なパーティーや舞踏会に入り込んで標的を殺すことを仕事としていた。

彼の扱うものは様々な毒薬や、吹き矢。遅効性のものが多いので、誰が犯人なのか分からぬまま、まんまと会場を抜け出し、仕事を続けてこられたのだ。

今は食うためにサタニストの集団へと入り、様々な貴族を対象としている。

聖女は、その筆頭であると言っている。ただ、彼はサタニストの集団に居る者としては異質であり、別に悪魔を信奉しているわけでも何でも無い。

あくまで食うためのものであり——『ビジネス』であった。

「……がああの女のハウスね……」

カーミヤが意味不明な言葉を吐きながら、アルテミスの扉を開ける。

店には大勢の客……それも貴族が居たが、何の問題も無い。

むしろ、カーミヤにとっては非常に好都合であった。

貴族などの立場の高い人間ほど、道化を好む。人ではなく、言葉を解する猿か何かのように思っているのだろう。

遠慮無く馬鹿にし、見下し、憐れみと共に小銭を放り投げる。道化は、彼ら貴族の自

尊心を満足させる大切な存在なのだ。

「まあ、何て尊き方々が集まっていらつしやるのかしら！ わたくし、目が潰れてしまひそうですわ！」

カーミヤがよろけながら、両手でわざとらしく目を塞ぐ。あまりの眩さに目を開けていられない、と言つた仕草である。

その剽げた動きは堂に入ったものであり、貴族の子供らがケタケタと笑う。

「あまりの眩さに、わたくしの目から高貴な薔薇が……！」

いったい、何処から出したのか——カーミヤが目から手を離れた瞬間、両手に美しい薔薇の花束が現れ、その花弁が店内へと華麗に舞つた。

思わぬ妙技に、店内から拍手が沸き起こる。

店内の客からすれば、これは“店の配慮”である、と思つたのだ。

「流石はアルテミスだな。このような事態であるというのに、客を安心させるために道

化を呼んだらしい」

「うむ、貴族たる者、このような時こそ堂々と構えていなければ」

「こんな騒ぎに怯えていては、我らの勇敢なる先祖に笑われようぞ」

貴族とは自尊心と見栄の塊である。

隣のテーブル客が悠々と道化を楽しんでいるというのに、自分が怯えていては沽券に
関わる、と考えたのであろう。

内心では外での騒ぎに恐怖を感じているにも拘らず、彼らはそれを誤魔化すように、
場違いな程の拍手や口笛を鳴らした。

カーミヤもそれに「乗る」形で次々とテーブルを回つては剽げた仕草で笑わせ、時に
は被った帽子から鳩を出し、遂には貴族から渡された銀貨を一瞬で金貨に変えるなど、
手品の妙技を尽くして拍手喝采を浴びた。

よもや、この男が暗殺のためにこの店に来たなど、誰も思いもしないであろう。
そして、遂に彼は聖女が居るテーブルへと辿り着く。

彼にとつて予想外だったのは、そこに社交界の重鎮であるマダム・バタフライまで居
たことだ。人を見る目が非常に厳しく、その観察眼は決して侮れない。

カーミヤは内心、白刃の上を裸足で歩くような緊張感を覚えた。

だが、本当に警戒すべきはマダムの方ではなく——妖艶なまでの美しさを持つ、美女の方であったのだ。

「とても愉快的な道化さんね。私からも一つ、手品を披露しても良いかしら？」

「あら、こおんな美しい方が手品までできるなんて！ わたくし妬いちゃうー！」

カーミヤがおどけた仕草でハンカチを噛み、その姿に店内の客が大笑いする。

この男は実際、暗殺者でなくとも、この道で食っていくことができるだろう。おどけながらも、聖女から決して目を離さなかつた彼だが、その目が固まる。

自分の「右腕」が何処にも無かつたのだ。

「へ……あ、あらあん……わたくし、の……」

何が起こつたのか分からず、唾を飲み込んだ瞬間、次に左腕が消えた。

それも、肩の付け根からバツサリとだ。

「や、やあね……なんで、うで、が……」

痛みが無い。

血の一滴も流れていない。

でも、腕が無い。

動かそうにも、感覚が無い。

思わずカーミヤが叫びそうになったとき、美女が優しく問いかけた。

「——貴方が落としたのは右手？ それとも左手？」

美女が嗤う。

その手には其々、自分の両腕が握られていた。

美女は傍目から見れば、どんな男であつても墮ちるであろう魔性の笑みを浮かべている。知らず、カーミヤの心臓が強い鼓動を打った。

勿論、恋心などという甘いものではない。濃厚な“死”を感じたのだ。

それも、絶対に逃げる事ができない類のものを。

「りよ、両方……かしら……」

「あら、欲張りなのね。でも、今日は特別にサービスしちゃう」

《——神の手：縫合》

「いったい、何がどうなっているのか——？ 切り離された両手が元に戻っていた。カーミヤの全身から、滝のような汗が吹き出てくる。

「あら……ごめんなさい、右と左を間違えて付けちゃったみたい」
「ちよ、ちよつと！ そんなの笑えないわよおおッ！」

カーミヤの叫びに、店内の客が手を叩いて大爆笑する。

彼らはまさか、本当に腕が切り離されたなど夢にも思っていない。これも手品の一種であると思っているのだ。

むしろ、カーミヤの“仕込みの妙”に感嘆する者が多かった。

「あの道化、大したものではないか……今度、我が邸宅にも呼んでみるか」

「パパ、ウチにも呼んでよお！」

「うむ、子爵の御家族を招待し、パーティーを開くのも悪くないな」
「あれは何処の店から来た道化だ？ 今度の舞踏会の目玉にするか」

カーミヤの知らない所で、どんどん話が大きくなっていたが、本人の心境は悲惨の一言である。本来、右手があるはずの場所に左手が付いているのだから。

間違えた、などで済む話ではない。

この荒唐無稽すぎる姿こそが、余計に手品と思われる要因でもあったが。

「じゃあ、お姉さん……次はちゃんと付けちゃう。良かったわね、道化さん？」

「は、は、あ……！ つ、付いてる！ 私の手、付いてる！」

両手が元の位置に戻され、カーミヤは安堵のあまり、両手を高々と突き上げる。

圧巻とも言える見事な手品を成功させた道化に、店内から万雷の拍手が送られた。アクヤルナも笑顔を浮かべて拍手し、マダムまで思わず笑っている。

テーブルの間は人間で、どうせ魔王の仕込みであると思っっているのだ。現に悠が、道化の耳に何かを囁いている。

「次は落とさないようにね、道化さん？　後、懐の毒薬——酷く匂うわ。人を殺したいなら、もっと良い物を使わなきゃ。ね？」

「は、はい……」

「次、視界に入ったら生きてまます活け造り」にしちゃうから気を付けて」

カーミヤが高速で首を縦に振る。その様はまるで壊れた人形のようにであった。

実際、彼女は何の躊躇も無く、噛いながら「それ」を行うであろう。僅かな接触ではあったが、カーミヤはそれを肌で感じる事ができた。

その後、カーミヤはぎこちなく店内の客へと手を振り、投げられた大量のチップを皮袋へと詰め込み、店を後にした。

(出なきゃ、逃げなきゃ……一刻も早く！)

カーミヤはその後、狂ったように北へと馬を走らせ、そこでも安心できなかったのか、更に都市国家にまで逃げる羽目となった。

「魔女」と遭遇して命が助かるなど、彼は古今稀な強運の持ち主であろう。

こうしてアルテミスでの騒ぎは一段落付いたが、騒乱の大本は未だ健在である。

残り二箇所の襲撃地点でも異変が起きていた。

聖城へ

——神都 高級地区

この高級地区にも襲撃が行われ、多くの被害が発生していた。

貴族の館が多いということもあってか、その攻勢は苛烈の一言に尽きた。サタニストの大部分が「持たざる者」であり、その恨みは骨髓に達しているためであろう。

彼らはあちこちに火を点けては、女子供であつても容赦なく殺害していった。

襲撃者は何も人間だけではなく、死の霧や墜犬、骸骨兵なども混じっている。

ここには騎士団の本部があるということで、戦力を集中させているのだろう。

最下級に位置する魔の眷属ではあるが、数が揃うと中々に厄介である。まして、消火活動と救助活動も同時に行わなくてはならないのだから。

そんな中、ヤンキー女と大男が猛火の中を駆けずり回っていた。

聖女キラール・クイーンと、マウント・フジである。

「姉御、これでは手が回りません……」

「ボケが……その口はクソを垂れ流すために付いてんのか!」

クイーンが叫びながら蹴りを放ち、墮犬の頭が吹き飛ぶ。

次に金棒をサタニストの腰に叩き付けると、その体が真つ二つに千切れながら飛んでいった。

フジの腰にもサタニストと思わしき生首が三つぶら下がっている。

見る者が見れば、「こいつらが悪魔だ」と叫ぶだろう。

だが、そんな二人の前に「本物の悪魔」が二匹現れた。

下級悪魔——「ハニトラ」である。

女性のような外見をしているが、人間の男を惑わし、疑心暗鬼に陥らせた挙句、殺し合いをさせるのが大好きな悪魔だ。

「ねえ、そこの大男さん。私とあそ——」

「とびきり臭え」ゾ、てめえ——? 《修羅車》

その言葉が終わる前に、クイーンの両手から六つの連弾が走る。

最初にハニトラの可愛い顔面が無残にも砕け散り、その体に五つの大穴が開いた。

声をあげる暇もなく、ハニトラが地に沈む。

「ゲロ以下のズベタが——肥溜めとファックしろ」

クイーンが死骸に向け、中指を立てる。

文句の付けようもないファックであった。放たれた拳も、口から出る言葉も、その全てが聖女からはかけ離れた悲惨なものではあったが。

「あ、あんたら……私の妹をおおオツ！」

残ったハニトラがクイーンへ襲い掛かったが、フジがその顔を掴み、万力のような握力でそのまま握り潰す。

なにかリンゴでも潰すようなえげつない音が響き、ハニトラの頭部がグシャグシャになつたが、フジの表情もいつも通りであった。

「ボケナス、他の地区はどうなってるんだ？」

「聖城はホワイト様が。教会の方も——」

その言葉が、途中で途切れる。

遠く離れた商業地区の空に、地獄を思わせるような爆炎が広がったからだ。

「何だ、ありや……ルナか!？」

クイーンが咄嗟に叫んだが、ありえないと思いつ返す。

ルナの魔力は確かに底知れないが、「火」は範囲外であり、あんな魔法を使えるならばクイーンヘドヤ顔で自慢しまくるであろう。

「魔力は感じませんでした……しかし、魔法でなければ、あんな……」

フジも絶句したように空へ広がる“地獄”を見つめた。あの色彩といい、威力といい、人の世界へ災いを齎すものとは思えなかつたのだ。

暴れていたサタニスト達ですら、呆然とした表情で空を見上げている。

戦いとは時に、ひよんな出来事で勝敗そのものが動く。

あの爆炎がキツカケとなり、サタニスト側の勢いが目に見えて落ちた。

騎士達が次々とサタニストを捕らえ、普段はふんぞり返っている貴族達ですら、火を消し止めようと懸命に動き出す。対岸の火事どころではなく、動かなければ自分の邸宅まで失ってしまうからだ。

「ま、ここはどうかかなりそうか……」

「ええ、アーツ様も手勢を率いて鎮圧に回っておられるようです」

「クソじじいが……歳を考えろってんだ」

クイーンが苦々しく呟いたが、フジはそれを聞いて微笑を浮かべる。

好悪の激しいクイーンではあるが、あの老貴族のことは少なからず認めていることを知っていたからだ。遂に残ったサタニストが次々と撤退し、とある方向へと走り出す。

彼らの走り出した先には——聖城があった。



— 聖堂教会 一般地区

オルガンが屋根に寝転がり、眼下の戦いを退屈そうに眺めている。

彼女は“人同士”の争いなどに何の興味もない。ただ、相棒であるミンクがノリノリで参戦しているの、仕方無く付き合っているだけだ。

今もミンクは右手で顔の半分を覆い、左目で相手を見つめながら詠唱を始めている。ミンクは何故か、戦いの時にこのポーズを好む。

本人曰く、自身に「闇が降臨している」らしい。

「我が深遠なる闇よ、嘆きを降らせよ——！ 《聖なる雨／ホーリーレイン》」

聖素に満ちた、“力ある雨”がサタニストの集団へ降り注ぐ。

悪魔を信奉する連中にとつては文字通り、身を焼かれるような地獄であろう。言つての内容と、発動した魔法はまるで違うものではあつたが。

彼女の詠唱は止まらない。Sランクにとつては連続詠唱など容易いことだ。

「クック……脆いな、“人間”とやらは—— 《聖なる泡／バブルキュア》」

重傷を負っていた聖堂教会の者達を、癒しの泡が包む。流れていた血がすぐさま止まり、青くなっていた顔色に赤みが差していく。

まさに、「聖素」を使った回復魔法の極みである。

言っていることは無茶苦茶であつたが。

「ミンク殿、かたじけない！」

「流石はSランク冒険者ね……何て魔力なの！」

「で、でも……あの詠唱って……」

「シツ！ 黙つてろ、新人！」

「スタープレイヤーと呼ばれる階級の方だ。何か深い事情がおりなのだろう」

「あの詠唱に、何か秘密があるのかもね……」

聖堂教会の者達が、其々に勝手なことを口にする。

厨二病などが認知されていないこの世界にあつては、彼女の台詞を本当の意味で解する者など居ない。

まして、彼女は世界的に著名なスタープレイヤーである。冒険者の中には彼女の詠唱

やポーズなどに惹かれ、真似を始める者まで出てきている始末だ。

「私に続きなさい。凍てつく闇に血を捧げよ——ッ！」

「おおッ！……お、おお？」

ミンクの言葉に聖堂教会の者達が奮い立ち、一部は頭を捻りながらではあったが、サタニストの集団へと突っ込んでいく。

最早、どちらが闇なのか光なのか、よく分からない。

「あいつはいつたい、何と戦っているんだ……」

つい、オルガンの口からそんな言葉が出る。見ていて退屈しない、というのが彼女と同行している理由の一つでもあったのだ。

オルガンの口が僅かに微笑を作ったとき、上空から白刃が振り下ろされた。彼女からすれば蚊が止まるような速度で、だ。

「何か用か——？」

振り下ろされた刃を軽々と避け、退屈そうにオルガンが返す。
その姿には別に怒りも無ければ、驚きすらも無さそうであった。

「カッカ……何か用か、ときたもんだ。流石に“魔人様”ともなりやあ大したもんだ。
うん、大したもんだわ」

「……………」

「噂の魔王を斬ろうと思つてたんだが、まさか魔人まで居るなんてな。こんなに功名の種が転がってるなんざ、嬉しくなつちまわあな。おつと、自己紹介が遅れたけどよ、俺あ剣閃のアルベルドつてんだわ。ヨロシクな？」

オルガンの眼が細くなる。

彼女を魔人と知る者は消し去ってきたはずであった。

なのに、何故この男は知っているのだろうか？

「北の迷宮で斬り殺した、情けねえ魔族が教えてくれたなあ。あれは混ざりモンの出来損ないだつてよお——つと！」

オルガンが無言で投げたナイフをアルベルドが避ける。

かなりの速度があつたが、男はそれに対応できる力量があるようだ。魔人を、スタープレイヤーを前にして相当な度胸と言つていい。

「四ツ星か……Bランクにしてはやるじゃないか」

「偉くなつちまうと、動き難くなるんでなあ。このぐらいが丁度良いのよ」

オルガンの言った通り、アルベルドの鎧には四つの青い星が付いていた。

希少金属の一つ、*「ブルーメタル」*と呼ばれる物で作られた特殊なものだ。

冒険者らはランクに従い、この星が増えていく。最下級の*「ルーキー」*には与えられないが、Eランクになれば星一つが与えられる仕組みだ。

星が一つ付いてようやく一人前の冒険者として認められるようになるが、大部分はルーキーの階級から抜け出せず、堅気の職に戻るのが常であつた。

この世界は一部の人間を除けば、その殆どが才能の壁を越えることができないのだ。

「そんじゃまあ、遊んでもらえるかい？ お嬢ちゃん」

「ガキが——」

二人が向き合ったとき、商業地区の空に途方も無い爆炎が広がった。思わず二人の視線がそちらへ向けられる。

「お、おい……お嬢ちゃん。まさか、お友達の魔族でも呼んだのか？」

「ふざける、心臓を喰われないのか」

「幾らなんでもありやねえだろ……あのキンキラの服は、まさか……」

アルベルドの卓越した視力が、かろうじて金色の服を捉えていた。

故に、思わず考え込む。

あの爆発の中心に居たのがカーニバルだとすれば、それをやった相手はとんでもない化物であると。

「まさか、あれが噂の魔王だったのか？ お嬢ちゃんが呼んだってわけじゃなさそうだが……つと！ 手癖が悪いな、あんた！」

「戦いの最中に、余所見をしている方が悪い——」

オルガンの体から、幾つもの魔力の渦が浮かび上がる。
 あまりの魔力に、マントが揺ら揺らとはためいた。
 だが、アルベルドの表情は変わらない。何か、圧倒的な自信があるらしい。

「虚を砕き、我が道を拓け—— 《暗黒獄光線》」

「……つて、うっそだろおおお！ 第五魔法つて、そんなのアリかよ！」

幾つもの渦が一つとなり、黒き閃光が迸る。

アルベルドは屋根から転げ落ちることによって、かろうじてそれを回避したが、黒き光線は直線上にあった家屋を悉く貫通し、円形状の穴を開けた。

無様に転げ落ちたアルベルドを見て、オルガンが嗤う。片方は高々と屋根の上でふんぞり返り、片方は溝に落ちた犬のような姿であった。

「その位置がお似合いだ—— “犬コロ”」

「へ、へっへ……犬つてのは案外、しぶといんだぜえ？ 油断した頃に喉元に噛み付い

……っつと！ 待て待て、最後までしゃべらせろ！」

オルガンが嗤いながら次々と魔法を放つ。

それも、「魔」の上である「闇」を連発していた。殺すよりも、遊んで甚振るつもりであるらしい。

「どうした、走れ。優しい飼い主が『散歩』してやってるんだぞ？」

「何て性格の悪いガキだ！ 親の面が見てえわ！」

「――」

その言葉に、オルガンの顔付きが変わる。

先程まではまだ理性らしきものがあつたが、アルベルドが放つた憎まれ口に、完全に理性が吹き飛んでしまった。

そう、彼女に対して『親の話』は禁句であつたのだ。

「気が変わった――貴様は生きてまます煮殺してやる」

「じよ、冗談じゃねえ……！ 俺あ死ぬときはな、女の腹の上って決めてんだ！」

「下種が――」

オルガンが魔法を放とうとしたとき、聖城の方から途方もないどよめきと、大歓声が鳴り響いた。

口々に叫ばれている言葉は一つ――

「た、龍人たつびとが現れたぞおおお！」

神都で突如発生した戦いであったが……
いよいよ、「クライマックス」が近付いていた。

正義漢

——聖城前

二箇所を襲撃したサタニストの残党が続々と聖城前へと集結する。

高級地区と一般地区に其々、かなりの被害を与えたが、サタニスト側の被害も馬鹿にならないものであった。

何より一番の想定外は、商業地区を襲撃した集団が一人も帰ってこなかったことであろう。

本来であれば、襲撃は一定の時間で切り上げ、聖城前で逆十字を三つ重ねて使う予定であったのだから。その一つを失うことは、計画に大きな狂いを生む。

片方はクイーンから、もう片方からはミンクに追い立てられるようにしてサタニストが押し込められていく。

二人の指揮官が目を合わせて頷き——逆十字を片手にありつたけの声で叫ぶ。

「サモンデビル
悪魔召喚——」

逆十字からびっしりと棘が生え、指揮官とサタニストの集団を黒い霧が包み込んでいく。

それはカーニバルを召喚したときよりも大きく、力あるものだ。

およそ700名の命と二つの逆十字を元に、上級悪魔が姿を現した。

——闇公爵オルイット

カーニバルとは違い、上品な燕尾服のようなものを身に纏った力ある悪魔だ。

青白い肌には傷一つなく、その顔も非常に整っており、その頭髮は腰まで届きそうな長さである。その色も透き通ったような白色であった。

その背には美しい黒き羽が生えており、貴族よりも貴族らしい風貌である。

「おや、随分と忌まわしい場所に呼ばれたものですね」

オルイットが目の前“聖城”を見て、眉を顰める。

そこは長い年月をかけ、智天使と多くの天使が心血を注いで作り上げた聖なる結界が

何重にも敷かれており、悪魔にとっては苦痛極まる場所であった。

オルイットにすれば、近くに居るだけでどうしようもない脱力感と不快感が込み上げてくる。

それもそのはずであった——この結界は力があればあるほど、その光と強度が増すように敷かれているのだから。

「本当に、不愉快ですよ——」

であるのに、オルイットはこの場から立ち去らない。目の前の気配が、この城が、憎くて仕方が無い。今すぐにでも粉々にしてしまいたい。この結界をブチ破り、中をメチャクチャに破壊したいという衝動が抑えられない。違う——抑えようとも思わない。

「闇公爵だと……何がどうなつてやがる……」

駆けつけたクイーンが、オルイットの姿を見て絶句する。

間違つても、〃それ〃は人の世界に現れて良いような存在ではなかった。だが、オルイットの方もクイーンを見て顔を歪める。

只でさえ不愉快であるというのに、更に不愉快が重なってしまった。

「そのうえ、忌まわしい天使の犬ですか……《公の威風》」

「カスども、目え閉じろ——ッ！」

オライトの目が紅く光り、それを見たクイーンが叫ぶ。

瞬時に相手のスキル発動を察知したのだが、その声は一瞬遅く、クイーンの後ろに居たフジヤ騎士団の連中が一斉に吹き飛ばされた。

「私は、蟻が二本足で歩くことなど認めていませんよ——？ 《美獄の地》」

悪魔が、悪魔特有のスキルを発動させる。

カーニバルよりもその範囲は広く、聖城を除いたこの辺り一帯に不可視の閉鎖空間が作り上げられた。

「てめえら！ 全員、聖城の中に入れ——ッ！」

「おやおや、そんなことを私が許すとても？」

オルイットが聖城の前で両手を広げ、やれやれと首を竦める。
見た目が美しいので、どんなポーズを取っても絵になる悪魔であった。だが、その美しい顔が再度歪む。非常に強い、聖なる力を宿した存在が現れたからだ。

「闇公爵とはね……やはり、闇と闇は引き寄せ合う運命なのね」

Sランク冒険者、スタープレイヤーのミンクであった。

彼女も聖素を扱えば大陸でも有数の存在である。

聖女と、スタープレイヤー、更に聖城の結界。

オルイットにとっては、ちよつと考えられないくらい不利な状況である。

だが、彼は退かない——この城から感じる、忌まわしい気配をこの手で引き裂かなければ気が済まないのだ。まるで退く気配を見せないオルイットを見て、クイーンがフジのもとへと行き、その大きな体を足で引っくり返す。

「……久しぶりに使うか」

クイーンがフジの背中に背負われていた、神槌シグマを握る。高い攻撃力だけでなく、簡易な魔法まで使える大陸有数の伝説武器レジェンドと言っている。手にした瞬間、クイーンが“それ”をオリットへと叩き付ける。

オリットは神槌を手刀で弾いたが、その顔が痛みに歪む。上級悪魔が顔を歪めるなど、人間とは思えない難いほどの一撃である。

「何とも品のない女性ですね——《暗黒光線》」

無詠唱でオリットが強力な第四魔法を放つ。だが、クイーンの手にした神槌がそれを拒むように光を放つ——！

「ちやつちやつと俺を守れ——《光壁／ライトウォール》」

ありがたい伝説武器に対し、まるで奴隷に命ずるようにしてクイーンが吐き捨てる。光の壁が黒き光と衝突したが、防ぎきれずにその体を貫く。間髪を容れず、オリットは次の魔法を放とうとしたが、横から入った邪魔に魔法をキャンセルする。

ミンクが駆け寄り、手にした十字の武器を振り下ろしたのだ。

オルイットは両手を盾にしてそれを防いだが、その両手から白い煙が発生した。ミンクが手にしているのは、悪魔にとつて非常に厄介な武器。

触れただけで悪しき存在にダメージを与える星の十字架トウインクルと呼ばれる、これまた特異武器であった。聖素を扱う彼女にとつて、相性は抜群である。

「ハハッ——やるじゃねえか、乳デカ女！」

「ち、乳つて……あなたね……！」

「人間どもが……」

オルイットにとつて、そこからは防戦一方の展開となつた。

とにかく、相性が悪い。そのうえ、場所まで悪い。

本来の彼なら、こんな場所では決して戦わず、即座に別の場所へと移動して戦おうとしただろう。

だが、冷静な彼ですら腹の底から込み上げてくる激情を抑え切れなかつた。

遺伝子にまで刻み込まれた、悪魔にとつての怨敵とも言える存在——その本拠地が目の前にあるのだから。クイーンが接近戦を仕掛けたのを見計らい、ミンクが更に詠唱を重ねる。

「我、鮮血の黒を纏う者——《天使の聖衣／エンジェルクロス》」

ミンクの全身に聖なる鎧が浮かび上がり、その忌々しい光にオルイットが呻き声を洩らした。見ているだけで魂が削られるような光である。

対悪魔に強力な補正を付けたミンクも、クイーン横に並び、手にした武器をオルイットへと叩き付けた。

聖素がオルイットの体を蝕み、逆にオルイットの闇素も二人の体を蝕む。

一閃、二閃、三閃——ぶつかり合う度に三者ともに傷付いていく。互いの相性を考えると、殆どノーガードで殴り合っているようなものだ。

だが、あらゆる不利な状況がオルイットを時間と共に追い込んでいく。

このまま時間が経過すれば、二人は勝利を掴むことができたであろう。

だが——べちやり、と。

空から黒い液体が降ってきた。

見上げると、そこには宙にぶかぶかと浮かんでいる少女が居る。その手に持った箱か

ら落とされたのは「奈落」であった。

地表を走るようにして黒い液体が広がり、一瞬で二人の足元を浸す。

「クソ……また奈落か、よ……」

「嘘でしょ!?! 何で、奈落がこんな所に!」

二人の腰から力が抜け、その場に倒れ込む。

多くの力を吸ったせいか——奈落の「強さ」は、以前よりも格段に強くなっていた。

「この、人間、どもがッ!」

蹲ったクイーンへオルイットが蹴りを放ち、その体が大きく吹き飛ばされる。

続けざまにその右手の爪を大きく伸ばし、ミンクの体を切り裂いた。

「これで、終わりですよ——《暗黒獄光線》」

オルイットが凶悪な第五魔法を放ち、二人の体どころか、背後の家屋ごと貫き、聖城

前に並んでいた直線上の建物が次々と倒壊した。

「結界があるから勝てる、とても思ったのですか——人間風情が」

オルイットの放った言葉に、二人は反応すらもできなかった。

聖女とSランク冒険者の敗北に、周囲が静まり返る。

しかも、オルイットの傷付いた体は奈落の影響か、みるみるうちに修復されていくのだ。

「クイーン！」

「来るな、姉貴……結界を維持してろ……ッ！」

たまらずホワイトが聖城の入り口まで出てきたが、クイーンが大声を張り上げる。聖城の結界は、聖女が完全に不在となると効果が薄れてしまう。

この状況でそんなことになれば、聖城は陥落してしまうだろう。

「さて、素敵な饗宴を始めましょうか。私を苛立たせた罪は重いですよ？」

オルイットがクイーンの腹部へ足を振り下ろし、骨が碎ける音が響いた。彼はそのままミンクの首を掴んで持ち上げると、その全身を執拗なまでに殴る。殴る。殴る殴る殴り続ける。

もつと効果的に、効率よくダメージを与える方法はごまんとあるのだが、その忌々しい鎧を自らの手で踏み躪りたいのだろう。

「あ、貴方の闇なん……………て……………私に……………」

「黙れ、小虫」

奈落が刻一刻と広がっていき、聖城前には容赦の無い打撃音が響く。

相手を楽に殺さぬよう、一発一発を計算した攻撃であった。オルイットは非常に理知的で冷静であったが、その本性はどうしようもなく「悪魔」である。



(何だ、ありや……………冗談じゃないぞ……………！)

ようやく聖城前に着いた魔王が、眼下に広がる光景を見て頭を抱える。

安全に状況を見れそうな、聖城近くの時計台へ入り込んだのは良いが、真つ先に目に飛び込んできたのは、あのイカれたヤンキー女であり、次に入ったのが得体の知れない化物であつた。

魔王がそれを見て、また悪魔かと目星をつける。

(それに、あの格好……あれが最後の聖女か)

城の入り口で何かを叫んでいる聖女を見て、魔王の背筋が震える。

あれも見た目だけはとんでもない美人のようだが、魔王の感覚では聖女がまともなはずがない、という強烈な先入観があるのだろう。

実際、ルナやクイーンを見てきた彼からすれば当然の判断であつた。

(クソツタレが……今更、あんな化物に好き勝手にされて堪るか！)

調べものもあれば、事業も始めようとしている。

こんな状況で、この国がメチャクチャになってしまえば元も子も無い。かといって、その後の面倒な事態を考えれば容易く出ることもできない。

(あ……！)

そのとき、魔王の頭に電流が走る——！

(そうだ、面倒な聖女なんぞ「あいつ」に押し付ければいいじゃないか)

脳裏に浮かんだのは、時代錯誤な暴走族野郎。

しかも、あのヤンキー聖女は明らかに零に対して好意らしきものを抱いているようでもあった。

まさに、割れ鍋に綴じ蓋というやつだろう。

一気に面倒事から解放され、魔王がウキウキ気分で管理画面を呼び出す。

(どうせ時間が経ったら戻るしな。これで世はなべて事もなし、ってやつだ)

魔王の決断とともに、時計台の屋根から辺り一面を照らすような白き光が放たれた。それはまるで、神話的一幕のようでもあり、闇を払う光そのものであった。

オルイットがその光に目を細め、周辺で震えていた数万にも及ぶ住人達ですら天使様が降臨したのかと目を剥いた。

光の後に現れたのは——純白の特攻服の背に、巨大な銀龍を背負った男。

天使でも何でもない、*「暴走族」*であった。

銀色に染め上げられた髪が揺れ、誰の目にもその*「龍」*が目眩いほどに映る。

「零さまあああああああつ！」

その姿を見て、周囲の目も気にせずクイーンが叫ぶ。

満身創痍の体であるというのに、完全に痛みすら忘れているようであった。

その姿を見て、零が軽く笑う。

零から見た彼女は、いつも黒い液体(?)に浸され、蹲っているのだ。

「何だ、おめえ……また「虐め」*られてんのかよ」*

零からすれば、こんな状況は訳が分からないものだ。

見渡す限り見たことのない街並みばかりであり、笑ってしまうことに、目の前には西洋の城っぽいものであるのだ。

目に入る人間も、全て外国人である。GAMEへの参加者は「外国人」が多かったこともあり、彼の脳内は一つの結論を導き出す。

「これもクソ帝国の新しい「会場」か……。変なポケモンも居るしよ」

大帝国内なら、何をしてもおかしくない。

あのイカれた国は、イカれた人間を集め、イカれた武力で世界をメチャクチャにしていったのだから。

GAMEの後半期には人間だけでなく、様々な動物にまで実験を施し、キメラのようなそれらを会場に解き放つては参加者を襲うように仕向けていたのだ。

大帝国内がどんな「化物」を作ったとしても、あの世界の住人なら驚きもしない。

「貴様は……何だ。いったい、何処から来た？」

オルイットが思わず問いかける。上級魔族の目から見ても、何か得体の知れないものを感じさせる、不気味な存在であったのだ。

零はその問いに答えず、軽々と屋根から飛び降りると、無言でオルイットへと近付いていく。

その歩みを、驚くべきことに奈落が避けた――

黒い液体を割るようにして、*“龍”*が進む。

聖城の前に居る全員が、その姿を固唾を飲んで見守っていた。

オルイットに近付く度、*“龍”*の眼光が鋭くなり、遂には額と額がぶつかるほどに接近し――ニヤリと龍が笑った。

「臭えな、てめえ――*“人殺し”*の匂いがすんゾ？」

オルイットが無言で爪を振るう。零はそれを屈んでかわすと、その腹へ無造作に蹴りを叩き込んだ。誇りある上級魔族の体が数メートル吹き飛び、その高貴な服に土足の跡が付く。

「き、貴様……ッ！」

零の体からは既に青白い炎が迸っている。

《狂乱麗舞》を発動させているのだろう。だが、彼の真骨頂はそこにはなく、本来は別の所にある。

まるでそれを誇示するかのように――

何と、戦いの最中であるにも拘らず、彼はオルイットに背を向け、その龍をまざまざと見せ付けたのだ。

「天下無敵の看板背負い、辿り着いたは修羅の道――！ 《正義漢》」

（相手の殺害数1に対し、5ダメージの上乗せ。上限50ダメージ）

零が時代錯誤としか言いようが無い大音を放ち、その体が紅い炎に包まれた。

戦闘スキル《正義漢》の発動である。

「何と下品な……今のは詠唱のつも――あぐげええあああああッ！」

次はオルイットが「下品」な叫び声をあげた。

零の左拳が、いつの間にかその腹部に突き刺さっていたのだ。

間髪を容れず、右拳が唸りを上げながらその顔面へとぶち込まれる——！

オルイットの体が地表を削りながら吹き飛び、後ろにあつた無人の聖堂へと激突する。

あまりの衝撃に耐えかねたのか、聖堂の壁にいくつものヒビが入り、遂に建物全体が悲惨な音を立てて倒壊した。

「ぐ……あぎ……っー」

瓦礫の中から這い出てきたオルイットの姿は、凄まじいものであった。

その髪は乱れに乱れ、その高貴な服は土に塗れている。

何より、その眼から——「涙」がこぼれていた。

闇公爵とまで謳われる上級悪魔が、人間の前で哭なく。その姿に周囲の人間が言葉を失う。

「女を泣かす屑が——てめえがどんだけ “弱え” か教えてやる」

零が凶暴な笑みを浮かべ、その右腕をぐるりと回す。その颯爽たる姿に周囲から異様などよめきが溢れ、もはやこらえることができなくなつたのだろう。

遂に——数万にも及ぶ観衆から、一斉に大歓声があげられた。

乾坤一擲

「あ……………ぐ……………」

オルイットの頭は今、混乱の極みにあつた。

強靱な肉体が、あまりの激痛に悲鳴を上げている。

何故？

只の人間の、只の拳が、どうしてこれほどの痛みを生むのか。幾つもの防御魔法をまるで「無視」するかのように貫通し、強烈なダメージを負わされたのだ。

それも、魂が絶叫をあげるような痛みである。聖素を扱う相手ならばまだしも、相手の拳には魔力など欠片も宿っていない。

「お前、いつまで「寝て」やがる——」

蹲るオルイットの横腹に、零が遠慮無く蹴りをぶち込む。

闇公爵とまで謳われ、賛美と憧憬を一身に集める上級魔族が、まるでサッカーボール

のように蹴り飛ばされ——聖城の結界へと激突する。

その瞬間、オルイットの全身が火を噴いた。

「ぎえあああああああああ！」

轟音と火花が周囲へ散り、焼け焦げたような臭いが辺りに充満する。

それも当然であつた——上級悪魔の身が、智天使が敷いた結界に触れてただで済むはずもない。

意図せずとも、まるで“電流爆破デスマッチ”のようである。

上級悪魔すらものともしない龍の強さに、周囲のボルテージが一層に高まっていくが、それを見た零の顔は段々と険しくなり、遂には舌打ちする。

「てめえ、俺よりギャラリーを沸かせやがって……“銀龍上等”か、コラ!」

暴走族特有の理論であつた。

ギャラリーを沸かせ、自らを誇示することに生理的な快感すら感じる種族ゆえに、注目が奪われたと完全に逆ギレしているのだ。

オルイットからすれば「ふざけるな！」と吐き捨てたかったであろう。

「この……ゴミクスがああああ！ 《暗黒獄光線》」

オルイットが渾身の闇魔法を放ち、黒い光線が零の体を直撃する。だが、万物を貫くはずの光線が消えた後、そこに居たのは無傷の暴走族であった。

闇公爵の魔力では、《狂乱麗舞》を発動させている零の体には、傷一つ付けられない。

「お前……俺との『タイムマン』中に『遊ぶ』余裕があんのか？」

零の眉間に皺が寄り、理不尽なまでの逆ギレが積もり重なっていく。

虚仮にされたとしても感じたのか、零の体は怒りに震えていた。彼からすれば、何か子供のおモチャである「光線銃」でも撃たれたような気分なのだろう。

オルイットからすれば、完全に『悪夢』としか言いようが無い。

「ふざけ……ふざけるなよッ！ こんな所で、この高貴な私が！」

オライトトが背中の翼を広げ、空中へと飛翔する。

そして、空からこの戦いを無表情に見ていた魔人——“トロン”の背後へと近付き、その体を遠慮なく手刀で貫いた。

「え……あ……」

オライトトが少女の体を持ち上げ、その体から溢れる血を飲み干していく。

彼の持つスキル《吸血》であった。

相手が人間程度であれば殆ど効果は望めないが、まがりなりにも魔人の血であれば、その場での回復が期待できる。

「汚らしい血だ……臭くて敵わん」

汚物でも放り捨てるようにトロンの体が投げ捨てられ、地面に激突する。腹部が破裂するような強烈なダメージにより、その命は既に消えようとしていた。

少女は薄れゆく視界の中、ぼんやりと想う。

何故、自分はこんな目に遭っているのか、と。

物心がついたときには既に両親は何処にも居らず、魔族領の中で徹底的な差別と日常的な暴力の中で懸命に生きてきた。

泥水を飲み、腐った豚の死骸をも食い、時には耐えかねて毒草まで口にしたり。

人間の領土に逃げた後も、待つていたのは迫害と討伐である。

何処にも生きる場所が無く、かろうじてユートピアに拾われたが、そこで待つていたのは変わらない蔑視と、ゴミのような扱いでしか無かった。

いつたい、何のために生まれてきたのか——少女の頭に浮かぶのは、そんな虚しいことばかりであり、悲痛な慟哭が込み上げてくる。

「ひでえことしやがって……おい、ガキンチョ。生きてるか？」

少女の視界に、“銀色の龍”が映る。

それが、彼女の見た最後の光景——

——に、なるはずであった。

「おい、口開けろ。聞こえねえのか、ガキ」

龍が少女の口を無理やりこじ開け、ナニカを放り込んだ。

不思議な食感と、少しの甘さを少女が感じた瞬間、貫かれた腹部が凄まじい速度で塞がっていく。それが“龍の血”である、と言われれば少女は納得したであろう。

「え……」

少女の体から痛みが消え、血が止まった。

傷が塞がる、などというレベルではない。

殆ど“時間を巻き戻している”かのような凄まじい光景であった。龍が口に放り込んだのはGAMEの回復アイテム——カローリ―冥土。

名前こそふざけているが、その回復力は100という優れものだ。

この世界における一般的な薬草などの回復力は1〜3であり、冒険者などが扱う高価なポーションですら、その回復力は10にも満たない物が殆どである。

その場で即効、100の回復などありえるようなことではないのだ。

周囲からすれば、どんな病も傷も癒し、不老不死を与えるとまでの言い伝えがある“龍の血”にしか見えなかったであろう。

オルイットも、そのありえない光景を戦慄とともに見ていた――

「貴様は、『新種の龍』なのか……そんなことが……ッ！」

オルイットが何かを叫び、遂に一つの決断を下す。

この龍を、「この場」で殺さなければ大変なことになる。これが魔族領に来るようなことになれば、どのような大乱を生むか想像も付かない。

彼は自らの両手を体に刺し込み、扉を開けるようにして体を引き裂いた――

一方、零も少女の傷が塞がったことを確認し、安心したように頷く。だが、少女の顔は無表情のままであり、陰鬱な空気を漂わせていた。

「暗いぞ、ガキンチョ。助かったんだから、ちったあ笑ったらどうだ」

「笑い方……そんなの、とうに忘れたの……」

少女が、血を吐くように言う。

零は困ったように顔を顰めたが、背後に蠢く気配を感じ、少女の襟首を掴んで路地裏

へと無造作に放り投げた。

その仕草は乱暴ではあったが、「子猫」を喧嘩に巻き込まぬように配慮したのだろう。

零が振り返ると、オルイットは自らの体を引き裂き——「裏返して」いた。

そこに現れたのは蝙蝠だ。それも数百なのか、数千なのか、数え切れないほどの。それが無数に密集し、一つの体を形作っていたのだ。

不気味な飛翔音と、二つの紅く光る眼。

これがオルイットの本来の姿である。この形態になれば身体能力が飛躍的に伸びるが、聖素に対し非常に脆くなるため、滅多にこの姿を取ることは無い。

「忌々しい『龍』が！ 『中立』を気取る傲慢さをここで裁いてやる！」

オルイットが剥き出しの殺意をぶつけるも、零の意識は目の前の化物ではなく、背後の少女に向けられていた。

その少女が辛い人生を歩んできたであろうことは、零にも分かる。

彼も決して、恵まれた環境に居たわけでは無かったのだから。

「笑えよ、ガキ。どんな辛いときでもな、馬鹿みてえに笑つてる奴がいつちやん強えーんだよ」

背を向けている零には、少女がそれに対しどんな表情をしたのか分からない。ただ、息を飲む気配だけは伝わった。

「余所見とは余裕だな、龍……その傲慢と共に、ここで滅びよッッ！」

オルイットの体が爆ぜるように突進する。

あまりの疾さに、大気が切り裂かれたような悲鳴をあげた。

迎え撃つ零の全身から、イメージカラーとも言える銀色の炎が吹き荒れる。

龍が叫ぶ。

あらん限りの大声で——！

『——天よ、ただ刮目しろッッッ！ 《乾坤一擲》』

巨大な闇と銀色が、真正面から激突し——交差する。

まるで世界が静止したような静けさの中、巨大な闇に幾つもの亀裂が入り、遂にその全身が絶叫を上げながら黒い霧となって消えていく。

零が放ったスキル——それは相手の殺害数1に対し、10ダメージを上乗せする壊れスキルであり、頂上攻撃。

それも、上限が500ダメージに設定されている最高峰のものである。

数え切れないほどの殺害を重ねてきた悪魔が、それに耐えうるはずもない。

零は暫く拳を振りぬいたままの姿でいたが、やがてその拳を突き上げ、人差し指を天に向かつて突き上げた。

——それは、堂々たる“NO. 1”の宣言。

集まってきたギャラリーへのアピールであった。

それを見て、静まり返っていた聴衆が拳を振り上げ、絶叫していく。数百から数千、遂には数万の人間が同じように拳を振り上げ、大歓声をあげる。

津波のような声が他の地区へも広がっていき、やがて神都全体が熱狂の渦へと包まれていった。

「どうよ、ガキンチョ……『笑い方』も思い出したる？」

零が珍しく、不良少年そのものの笑みを浮かべ、路地裏の少女に笑いかける。

少女は暫く目を見開いていたが、やがて涙を流しながら大きく頷いた。遂には我慢できなくなったのか、零へと駆け寄り、飛び上がるようにして抱きつく。

「たははっ！ 随分と元気になったじゃねえかよ、ガキンチョ」

「……ガキンチョじゃない。トロン」

「トロンだあ？ んだか、眠そうな名前してやがんな……」

零がそう呟いたとき、背中が柔らかいものに包まれた。

クイーンが顔を赤くしながら抱きついていたのだ。傍目から見れば、とてもしおらしい姿で。

子供には無造作な零も、これには流石に狼狽した。彼は古風な暴走族であり、絶滅した『硬派』な男なのだ。

「お、お前っ……人前で女が……！」

「もう、離れたくありません——」

クイーンがうつとりとした表情で密着し、その胸の柔らかさに今度は霧が顔を赤くした。

零の前でだけはクイーンは完膚無きまでの美少女なのだから、彼からすれば洒落にならない。

「は、離れろ！ 良いか、男つてのはな、人前で女と——」

「零様……この背中の龍、とても雄雄しいです……この胸板も……」

クイーンの両指が厚い胸板を這い、霧が飛び上がった。

先程までの颯爽たる姿は何処へ行ったのやら。その姿に数万の大観衆が大きな笑い声をあげ、神都を包んでいた闇は——完全に消え去ってしまった。

こうして、聖光国には悪を滅ぼす銀の龍人の降臨と、魔王の降臨という相反する二つの噂が国全体へと広がっていくこととなった。

やがてその噂は、国内だけに留まらず、諸国にまで広がっていく。

一人の男が生み出す混乱と大いなる勘違いは、遂に大陸全体へと広がっていき、世界を巻き込む騒動へと発展していくこととなるが……

それはもう少し、先のお話——

三章 — 神都 — F I N

四章 魔王の躍動

聖女との対談

神都では今、大勢の人間が集まり復旧作業が進められていた。

最悪の事態こそ免れたものの、受けた被害は大きい。大勢の人間が駆り出され、木材や石などが次々と現場へと運ばれていく。

大通りには幾つもの大鍋が据えられ、職人達が飯を掻き込んでいる姿も見られた。

「俺あ、見たんだ！ 噂になってた銀の龍人を！」

「バツカ野郎、俺は魔王を見たんだぞ！ ありやとんでもねえ存在だ！」

「それで、いったいどつちが強えんだよ？」

「んなことあ、俺らみてえなど素人が分かるわけねえだろ！」

話題の中心は当然、あの“二人”であった——同一人物であるが。

神都ではもう、寄ると触るとその話で持ち切りである。

無理も無い。魔王と龍人など、噂にならない方がおかしいのだから。

既に耳の早い北方諸国の中には、聖光国へ腕利きの間者を送り込み、細かく情報を集めさせている国まであった。

その噂の中心人物は——聖城の応接室で、最後の聖女と向かい合っていた。



聖城の奥にある応接室。

そこでは徹底した人払いがされ、入念な盗聴対策が施されたうえで魔王を名乗る人物を迎え入れていた。

部屋の中には聖女ホワイトと、魔王の二人だけである。

500名にも及ぶサタニストを一瞬で屈服させ、中級悪魔を鼻歌交じりに爆殺した存在。

先日の騒ぎ、その詳細を後から聞いて、ホワイトは自分の危機意識が甘すぎたことを痛感していた。悪魔王の復活、そして、その消滅にも、この魔王が絡んでいると確信したのだ。

何よりも恐ろしいことは、この魔王が聖城に易々と“入れた”ことだろう。

智天使が敷いた結界すら、この魔王を拒むことができない。

そのどうしようもない事実には、ホワイトは戦慄を感じていた。

「……はじめまして、ま……何とお呼びすれば良いでしょうか？」

「魔王で結構ですよ。私からすれば、今やあだ名や異名のようなものですから」

魔王が落ち着いた仕草で出されたコーヒーらしきものを口に含み、懐から煙草を取り出して火を点ける。

その傍若無人な姿に、ホワイトは一瞬だけ顔を顰めた。

聖城で、しかも聖女の筆頭とも言える彼女の前で悠々と煙を楽しむなど、前代未聞であり、今後もそんな人物は未来永劫出てこないだろう。

あのドナ・ドナですら、聖女の前でここまでの態度は取れない。

聖光国側の不備を咎めるつもりなのか、魔王は懐からわざわざ灰皿のようなものを取り出し、ホワイトへ見せ付けるようにテーブルの上へと置いた。

これを“外交”とするなら、確かに失点であろう。会談を申し込んだのはホワイトなのだから、相手が快適に過ごせるよう、全てに備えるべきであった。

「貴方は——本当に、伝承にある『魔王』なのですか」

「どのように捉えられようと、どうぞご随意に——貴女がそう思うなら、そうなのでしような」

魔王の言葉に、ホワイトが円卓の下で思わず拳を握り締める。

何たる態度であろうか。どのようなにでも勝手に思え、こちらは何と思われようが知ったことではない、と宣言しているのだ。

その態度が伝えてくるもの——それは、圧倒的な自信。

その気になれば、こんな国はいつでも滅ぼせるとも言わんばかりであった。

「貴方は、ルナをどうしようと考えているのですか——」

ホワイトが力を込め、問いかける。

本来の予定では、もつと後に聞くべき内容であったのだが、もう我慢ができなくなつたのだろう。彼女はとても妹思いの、まともな聖女なのだ。

「彼女との出会いはとても不幸なものでした——私を悪しき存在と考えたのでしょう。ですが、今は『素晴らしい関係』を築いておりますよ」

その『邪悪な言葉』に、ホワイトが奥歯を噛み締める。

いったい、どんな魔法を使ったのか——あの我侷が服を着て歩いているようなルナが、この魔王には妙に懐き、傍から離れないのだ。

ありえるようなことではなかった。

「貴方は、この国に害を齎す者ですか——」

ホワイトが思い切ったことを口にする。

普段の彼女であれば、こんな直接的なことは決して口にはしないだろう。

国の様々な行事のみならず、諸国からの使者への対応なども、全て彼女が一手に引き受けているのだ。

その柔らかくも、芯の通った外交は諸国からも一目置かれているほどである。

こんな乱暴なことを、直接相手に聞くなど余程、思う所があるのだろう。

「そこですよ、私が言いたいののは」

魔王が煙を楽しみながら、その鋭い眼光をホワイトへ向ける。

それだけで、ホワイトは密かに体を震わせた。

何という眼光、そして威圧であろうかと。全身、その全てが、人を恐怖させるために存在しているようにすら思えたのである。

「私の国には、『百聞は一見に如かず』という言葉がありましてね。人から聞いた話より、実際に見た方が理解も早いという意味ですよ」

魔王が何処かにこやかに、自信に満ちた態度で言う。

その姿は一見、友好的にも思えるが、ホワイトとしては到底、心を許せるようなものではない。

何せ、彼女からすれば――

既に大切な妹が一人、「人質」になっているのだから。

ルナを無理やり聖城などへ閉じ込めれば、この魔王はそれを口実として何を仕出かすか分からない。いや、恐らくはそれを『待つて』いるのだらうとホワイトは考えてい

た。

何より、あのルナを閉じ込めるなど、物理的に不可能なことだ。

どんな場所に入れようと、あの「金色」の魔法を防げるような建物など、この世の何処を探しても存在しないのだから。

「私がこれから行うことを実際に見て、そして判断してくださいれば良い。私は昔から、口舌ではなく、実際の行動を以ってそれを示してきた」

魔王の自信溢れる態度に、ホワイトは一層に警戒を強める。

何をやろうとしているのかは分からないが、確実にこの国へ何らかの侵略行為を行おうとしている、と。

表面上は笑いながら、しかし、その裏では着々と何かを進めている——
ホワイトから見た目の前の人物は、まさに「魔王そのもの」であった。

「それと、貴女に一つ、頼みたいことがあります——」

遂にきた、とホワイトが覚悟を決める。

先日の騒ぎにおいて、この魔王は一応、鎮圧へと動いた。その功績をもって、国へ何らかの要求をしてくるであろうことは想定していたのだ。

「私は『熾天使』のことを調べたいと思つていまして——書庫などがあれば、自由に閲覧させていたいただきたいのですよ」

ホワイトは、目の前が暗くなっていくのを感じた。

いや、実際に眩暈が起きている。

事もあろうに、何と「熾天使様」のことを知りたいなどと言い出したのだ。殺そうとしているのか、弱点でも探そうとしているのか。

何より、それを聖女の前で堂々と口にしたことへ、ホワイトはこれまで感じたこともない恐怖を覚えた。

「書庫の、閲覧は……ご自由に……ただし、私の口から熾天使様のことを語るのは遠慮させていただきます」

「なるほど、それで結構ですよ。私も尊き方を語るなど、恐れ多くとてもできませんからな」

魔王が深々と頷き、理解を示す。

ホワイトにはそれが、痛烈な皮肉のように感じた。

こちらの足掻きを嗤っているのだろう、と。

「では、私はそろそろ失礼させていただく——とても、有意義な時間でしたな」
「ええ、こちらにとつても……とても、有意義な時間でしたわ」

魔王と聖女が握手を交わし、漆黒のコートを翻しながら魔王が部屋を出ていく。ホワイトはその背に、最後の問いかけを発した。

「貴方が——『悪魔王』を滅ぼしたのですね」

その問いに、魔王は長い沈黙を続ける。

やがてその口が開き、ホワイトにとつて恐るべき内容を告げた。

「あれが『王』などと、少々片腹痛いですな。出来の悪い作り物ですよ——」

悪魔王すら、出来損ない。

王を名乗る資格など、欠片も無い。

魔王はその背で雄弁に語り、部屋を後にした。



情報の一部が公開されました。

エンジェル・ホワイト

種族 人間

年齢 18歳

三聖女の長女。

民の事を第一に考える心優しい女性。

唯一と言って良いまともな聖女であり、聖光国に残された最後の良心。
熾天使が残した幾つかの“奇跡”を行使することができる。

対談の裏側

(とんでもない美人だったな……)

“俺”は聖城の廊下を歩きながら、先程の会談を振り返っていた。

あまりにも現実離れた美人だったので、落ち着こうとつい、煙草をスパスパと吸ってしまったほどだ。最近は分煙とかでうるさかったが、灰皿も持参していったことだ。彼女もそこまで怒ってはいないだろう。

(それにしても、随分とまともな聖女だったが……)

今までが酷すぎた所為か、エンジェル・ホワイトと名乗った聖女には仄かな好意すら感じたほどだ。この国のネーミングセンスは最悪だと思っていたが、ようやく名前と人柄が一致する人物に出会えたような気がする。

何よりも一番の成果は彼女に対し、自分の想いを伝えられたことだろう。人の噂ではなく、実際の行動を見てくれ、と。

サタニストとかいうテロ集団を鎮圧し、次はルナの村に「病院」や「温泉」まで作ろうというのだ。

誰がどう見ても、魔王などとはかけ離れた、善性の人間としか言いようが無い。

それらを見ていつてくれれば、こちらの本当の姿を知ってもらえるだろう。ルナとの関係も良好だと伝えたいし、書庫の利用まで許可してくれた。

まずまずの一步、と言つて良い。

「昨日の龍人、見た!？」

「見た見た! 最高に格好良かった!」

「クイーン様もメロメロになってたよね!」

通路から聞こえてくる声に、思わずこけそうになる。

そう、先日の騒ぎであの暴走族は完全に「龍人」とかいう妙なものに祭り上げられてしまったのだ。とは言え、思った以上の結果を得られたとも感じている。

巨大な力を持った「魔王を名乗る男」など、この国の跳ねつ返りがいつか討伐しよう、などと言いつしかねない。そのときには零を担ごうとするだろうが、そんなことは不可能であり、零が居るのだからいざと言うときは何とかしてくれる、と「油断」もし

てくれるだろう。

その間に、こちらは着々と事業を進めていける。

(にしても、昨日は…… “違和感” を覚えなかったな)

殆ど「一体化」していた、と言って良い。

乾坤一擲を放ったときなど、殆ど自分で拳を振り抜いた感覚すらあった。

その事に、改めて作ったキャラクター達を想う。

(GAMEの前半期は、俺は九内伯斗そのものだった)

いや、九内伯斗などというキャラクターは何処にも存在せず、「大野晶」とそのまま自分の名前を使っていたのだ。

時間が経つにつれ、ネットに本名を晒している危険を感じ、中頃には改名することとなり、九内伯斗が誕生した。

(GAMEの中盤に入ってから、ずっと零だった)

それこそ、零として戦っていたのは一年や二年ではきかず、10年近く常に一緒に居た、と言って良い。当初はネタキャラとして作ったものであったが、それだけ飽きずの中に居られたということは、自分が思っている以上に気に入っていたのだろう。

(いや、そんなレベルじゃないか……)

10年近くそのキャラクターを使い続ければそれは、「自分そのもの」である、と言っても過言ではない。あんな暴走族が自分であるなど、とても認められたものではないが……。

片や魔王で、片や暴走族である。

両方、ロクでもないと言えばそれまでの話ではあるが……。

(俺は、九内伯斗のように平然と暴虐を行えるようなタマじゃない。かといって、零のようにキザで、硬派な暴走族でもない……)

GAMEならばまだしも、現実の世界で「零をやること」には気恥ずかしさがあり、俺

は拒絶していたが……。もしかすると、自分が零を受け入れさえすれば、それこそ「俺そのもの」になってしまうんじゃないだろうか。

それは恐ろしいことでもあり、何処か愉快でもあり、腹の底から笑えてくるような、奇妙な思いを抱かせた。

(……止め止め！ そんなことより、今はこれからのことだろ)

書庫への出入りも許可されたことだ。

存分に調べさせてもらう方が先決だろう。それに、SPも十分すぎるほどに溜まった。

新たに側近を召喚することも考えなければならぬ。これまでの残りど、前回の戦いで得たSPを合わせれば、1249ポイントものSPがあるのだ。

(くふふ……あつはっは！)

思わず高笑いしたくなる。

これなら側近を召喚して、病院や温泉を建ててもまだSPは残る。

痛快とはこのようなことを指すのだろう。いったい、誰を召喚するか考えるだけでワクワクしてくるといふものだ。

「そういえば、新しく《解放》されたのもあったな……」

つい、口に出して考えてしまう。

新しく解放されたコマンドは《全移動》と呼ばれるものであった。

GAMEでは広い会場をあちこち動き回る必要があり、これを使えば行ったことのあるエリアには瞬時に移動することができたのだ。

ただし、気力を30も消費するデメリットもあるが。

(この調子で、売店とかメダル交換も復活すれば良いんだけどな……)

売店——まんま、金でアイテムを購入するシステムだ。

ここらへんには、所持金が関連しているような気がしてならない。

うまく金を溜め込めば、GAMEにあった売店が復活し、そこでアイテムを購入できるようになる可能性がある。

そうなれば、アイテムによってはいちいちSPを消費して作らなくて済むようになるだろう。

メダル交換もそのまま、GAME会場に落ちているメダルを集めれば様々な高性能アイテムと引き換えることができるシステムであった。

一種の宝探しでもあり、戦闘が苦手な人にも楽しんでもらえるように配慮したお遊び要素でもある。お遊びといっても、多くのメダルを集めると、それこそ何種類もの、洒落にならないようなアイテムと引き換えることができたが……。

「魔王様つ、聖女様との話し合いはどうでしたか？」

廊下を出ると、アクが笑顔で走り寄ってくる。

思わず、こちらも笑顔になってしまうような可愛らしさだ。

つい、これまでの癖で片手で抱えてしまう。アクも嬉しそうに両手を首に巻きつけてきた。

(益々、父と娘だな……こりゃ……)

照りつける太陽を眺めながら、そんな益体も無いことを思った――



――聖城 クイーンの私室

先日の戦いが無事に終わり、クイーンは部屋で体を休めていた。

回復魔法だけでなく、高価なポジションなども惜しげもなく使われ、その体は戦闘前に近い状態へと戻っている。

とは言え、流星に様子を見るためにここ暫くは安静に過ごす必要があるが。

「はああ……零様あ……」

その息は荒く、顔も赤いが、別に熱を出しているわけではない。

むしろ、ベッドの上で枕を抱きながら転げ回るくらいの元気さはあるようだ。体の傷はほぼ塞がっているのだが、別の所が重症なのだろう。

——完全に恋の病である。

普段の彼女を知る者が、この姿を見れば心臓が凍りつくに違いない。いや、その前に物理的に殺されてしまうかもしれないが……。

「超絶イカしてたなあ……格好良かった……」

クイーンは零の勇姿を頭に浮かべ、酔ったような気分に入る。

あの雄々しくも、猛き龍。そして、闇を切り裂くような銀の閃光。鋭くも、非常に整った顔立ち。

全身の全てが、戦うために存在しているような鍛え抜かれた肉体。零を構成する、ありとあらゆる全てが彼女の理想そのものであった。

——天よ、ただ刮目しろッツツ！

「ああああああ………！ もうダメ………つつつ！」

遂には耳にまで「龍の咆哮」が蘇り、クイーンはベッドの上で身悶えする。

枕を抱きながら転げ回り、遂にベッドから落ちたが、彼女はそのまま部屋の隅まで転がり続け、壁に勢い良くぶつかったことでようやく停止した。

俺には為すべき「使命」がある――

別れる際に、零が言った台詞だ。

クイーンはつい、そのことへ想いを馳せる。使命とは何だろうか、と。

あれほどの「龍」が、何らかの使命を帯びて動くということは余程の重大事だろう。

(もしかすると、奈落か……?)

クイーンの頭に、即座に浮かんだのは「それ」である。

思えば、零が出てくるときは、決まって奈落が出現したときだ。

前回もそうだったが、今回も奈落はいつのまにか消えていた。まるで、龍を恐れるかのように。

(あの穴の先も……もぬけの殻だったみてえだしな……)

神都に開けられた三つの穴は当然、真つ先に騎士団が中心となつて調査隊が送り込まれた。

人の手であれを掘つたとするならば、相当な執念……いや、妄念といえる。

ただ、調査隊が調べた結果としては、穴の先は既にもぬけの殻であり、何の痕跡も残つていなかった。当然、奈落の姿も。

今は急ピッチで穴が埋められ、「土」を扱う魔法使いが総動員されて修復作業が行われている。

今度は入念に、強い土や石などが何重も敷かれることになるだろう。

(あのクソ奈落が……あ、でも……)

クイーンは忌々しい奈落に舌打ちしたが、あの奈落のお陰で零と出会えたことも思ひ出す。

奈落は憎い。この手で引き裂きたい。踏み躪りたい。蹂躪したい。

だが、あれが出てくれば、また会えるかもしれないのだ。

あの猛き——銀色の龍に。

「ああああああ……！　俺はいつたい、どうしたら……！」

クイーンが悩ましげに懊惱し、再び転がり出す。

ホワイトと同じく、彼女の苦悩も長く続きそうであった。

魔神達

——聖光国 最高級宿「オルテミス」

貴族や一部の富豪が利用する最高級酒場「アルテミス」の姉妹店である。

ここもまた、ハードルが非常に高く、利用料金も同じく高い。

オルテミスのカウンターでは一組の冒険者が精算を済ませ、宿を後にしようとしていた。

スタープレイヤーのミンクとオルガンである。

彼女達は冒険者であるというのに、荷物が非常に少ない。

持っている鞆が特殊なためであった。

ミンクが持つ武器も特異ユニークと呼ばれる希少なものであるが、その鞆も北方にある「監獄迷宮」で見つけた逸品である。

所持者の魔力により、入れられる容量が拡大するという、考えようによつてはこの世界におけるチートともいえるものであった。

これは余談であるが、迷宮などから掘り起こされた新しいアイテムなどには当然、名

称が無い。

普通は発見者が名付けることとなるが、最近では名声を欲しがる者や、一種のコレクターがスポンサーとなり、冒険者に新しい物を探索させることも多い。

当然、見つかった物にはスポンサーが好きな名前を付けることになるが、自分の名前を入れる者も居れば、凝った名称を付ける者や、多くの人に愛されるような名称を付ける者などもおり、まさに十人十色であった。

これが、北方諸国の人間ならばまだ良い。

ネーミングセンスが壊滅的とも言える、聖光国の人間がスポンサーであった場合などは大変なこととなってしまふ。

次に並べた物らは、彼らが生み出した悲劇の一部である。

カラダナオール（緑色の液体 体力を1回復）

スツキリ（青色の液体 気力をたまに回復）

バルブンデ（赤色の液体 ハイテンションになる）

カキフライの憂鬱（黄色の液体 眠くなる）

赤茶げた何か（栄養素の多い土）

飛び出るキノコ（たまに男性器へ力を与える）

お口に出して（白い液体　気力を3回復　命名：ユキカゼ）

余りに酷い名称が多いため、食い詰めた冒険者ですら、聖光国の人間がスポンサーとなっている新アイテム探索依頼には手を出さないようになっていくほどだ。

ちなみに鞆を見つけたのはオルガンであり、彼女が名称を付けることになったが、1秒後には「便利君」という名称を付けていた。

ミンクは「圧縮せし我が漆黒の宙」と名付けたかったようだが、どっちもどっちであろう。

オルガンが手にした「便利君」を軽く撫でる。

自分が名付けたアイテムに、多少の愛着があるのかもしれない。

「行くぞ、ミンク。こんな国はとっとと出るに限る」

「……私、こう見えて重傷を負った身なんですけど？」

「馬鹿騒ぎに首を突っ込むお前が悪い」

「昨日から機嫌が悪いわね……」

回復魔法をかけたとはいえ、ミンクの体はまだまだ本調子ではない。普段ならオルガ

ンもこんな無茶は言わないが、虫の居所が悪いようであった。

ミンクには、その心当たりがある。だからこそ、あえてそれを口にした。

「それにしても、昨日の龍人は凄かったわね〜」

「何が龍人だ。下らん……」

打てば響くような態度でオルガンが返す。

それを見てミンクが内心、やれやれと溜息をつく。

「良いか？ あれは只の人間だ。龍の血など混じっていない」

オルガンは自身が混血児であるがゆえに、血には非常に敏感だ。

彼女から見た零は、只の人間であり、それ以上でもそれ以下でも無い。

「じゃあ、あのとんでもない力は何なの？」

「……知るか。本人に聞け」

オルガンの機嫌が益々、悪くなる。彼女の怒りの原因は龍人だけではなく、色んな要素が重なったことによる、一種の不幸ともいえるものであった。

自身と同じ魔人らしき少女と、それを救った存在を見て、どうしようもない怒りと不快感が込み上げてきたのだ。

彼女は昔、トロン以上の悲惨な境遇に居たが、それを救ってくれる者など一人も居なかった。

故に、彼女は自分を守るため、懸命に努力を重ね、強くなったのだ。そして、今やスタープレイヤーと呼ばれるまでの輝かしい地位にまで登りつめた。

口を開けて、ただ救いを待っているような存在にも苛立つ。

そんな愚者を、得意顔で助ける馬鹿にも苛立つ。

彼女からすれば何もかもが気に入らない。今度あの男に会ったら、衝動的に殺してしまいかもしれない、と本気で考えているほどだ。

「ま、私もあの男とは合わないけどさ。恩人にこんなことを言うのも失礼だけだ」

「ほう、意外だな。お前はてつきり気に入ったのかと思っていたが」

「私はダメね、ああいう男は。もつとこう、闇とか、深い暗黒を感じさせる男じゃなきやイヤ」

「なら、悪魔とでも結婚しろ——カーニバルとかな」

「止めて！ あんな落ち着きの無いキンキラなんてありえない！」

二人が妙な話題で盛り上がりながら宿を出ていく。

彼女達の向かう方向は、北。

戦争が続いているが、それだけに一種の活気があり、迷宮や遺跡と呼ばれるモノも数え切れないほどに存在する地である。



—— 聖城 書庫

「うーん……よく分からんな。西洋というか、ファンタジーというか」

許可を貰い、入室した書庫で魔王が首を捻っていた。

数え切れないほどの書物があったが、その中から天使に関連のありそうなものを司書に選んでもらい、目を通していたのだ。

「でも、たまに入ってる絵とか凄く綺麗ですよっ」

「絵本ならそれでも良いんだがなあ……」

魔王が椅子に座り、その膝にアクが座って本を覗き込んでいる。

傍目から見れば、子供に絵本を読んでいる父親の姿であろう。

「そもそも、天使とは元から居たのか？ それとも誰かが作ったのか？ 何より、何故そ

いつらは消えた？ 敵対している悪魔は健在じゃないか」

「ええー……そんなこと、考えたこともないです」

本に書かれているのは、天使と悪魔が敵対していること。

この辺りを荒らし回っていた悪魔王グレオールを、智天使が封印したこと。

その際の消耗で、智天使が消滅したこと。封印には座天使も力を貸したこと。

その後、座天使まで居なくなること。そして、大天使や中天使と呼ばれる存在も次々に消えていった、と記されていたのだ。

「肝心の熾天使については何も書かれていない。夜逃げでもしたのか？」
「そ、そんなことはないと思います！ きつと、何処かで見守ってくれてます……」

魔王の言葉も大概であったが、アクの返事も自信無さげであった。
無理もないことだ。

熾天使と呼ばれる存在を見た者など、誰も居ないのだから。現状ではただ、文献に残されているだけの、あやふやな存在でしかない。

「名前だけあって誰も見たことのない存在。UMAみたいなもんだな」

「UMA、ですか?？」

「未確認生物、要するにそんな存在は居ないものと変わらん、ということだ」

魔王らしく、酷く断定的な口調であった。

この男は——いや、「大野晶」は宗教にも興味がなければ、幽霊などの類も頭から受け付けない脳をしている。現に彼は、霊感の強い友人から「お前のような奴には幽霊の方が近寄らない」と呆れながら言われたほどだ。

「まあ、時間はたっぷりある。今後、暇を見ては足を運ぶようにしよう」
「はいっ。僕も色んな本を読みたいです！」

アクの可愛い態度につい、魔王の手が動いて頭を撫でてしまう。
撫でられているアクも嬉しそうであった。

「あ、魔王様……最後にこの本も読んで良いですか？」

「うん？ 破壊犬ポチの大冒険……何だ、これは」

タイトルも意味不明だが、表紙までボロボロの絵本であった。恐らく、司書が間違えて中に入れてしまったのであろう。

本題からは外れているが、子供に読ませるには丁度良いか、と魔王が考え直す。

絵本の内容は、何でもかんでも噛み付いて壊してしまうポチという犬が、遂に村を追い出され、冒険者になって迷宮に潜るというものであった。

「何で犬が冒険者になる……どんなストーリーだ」

「でも、ワンちゃんが可愛いですよ？」

ページを開いていくと、ポチは周りの冒険者の武器や防具を壊しながら、迷宮の奥深くへと潜っていく。「何て迷惑な犬なんだ……」と魔王が呟いたが、アクは楽しそうであつた。

本の中でポチは迷宮の奥底でモンスターを倒したり、スライムに襲われている雌犬を救つたりと実に忙しい。

《クツソ汚い粘液が……許さんワン!》

《スララ〜!》

魔王の体から力が抜け、本が落っこちる。

「何なんだ、この本は! いったい、何処の層へ向けて書いているんだ?」

「で、でも、スララ〜ってちよつと可愛くないですか?」

「この世界のスライムはしゃべるのか? そうなのか!」

「い、いえ! 僕は会ったことがないので……」

魔王が最後の力を振り絞り、ページを進めていくと、ポチは遂に迷宮の最奥へと辿り着いていた。そこでポチは多くの武器や防具、魔道具を見つけ、それらを村へと持ち帰り、村の人気者（犬）になりましたとき——で、物語は終わっていた。

「何だこれは……本来、絵本ってのは何かの教訓になる話が多いはずなんだが」

魔王が力無く呟いたが、一つだけ疑問に思うことがあった。

それは、迷宮で武器や魔道具などを見つけた、という部分である。絵本とはいえ、真偽が気になったらしい。

「その司書君、この本には迷宮に行けば色々な武器や防具などが落ちているとあるが、本当なのかね？」

「は、はい……古い時代のアイテムなどが稀に見つかる、とか」

「ふむ……」

魔王の頭をよぎったのは——魔法に対する防具や、何らかのアイテムである。

これまでは上手くいっているが、今後もそうだとは限らない。

いかに圧倒的な体力があろうが、油断は禁物であろう。現にGAMEの中でも、鉄壁を誇っていた不夜城ですら一度、陥落しているのだから。

（魔法への抵抗を高める「何か」が、絶対に必要だ……）

魔王をそれを入れてつつ、書庫を出た。



（さて、やることが多いな……）

魔王は改めて、今後のことを考える。

ラビの村の整備、施設の設定、NPCの召喚、魔法防御を高める物の探索。

そのどれもが、疎かにできないものばかりである。

魔王が考え事をしながら宿へと帰る最中、その背中をじつーと見ている視線があった。

それも、全身を舐め回すような濃い視線だ。

魔王はとうにそれを察知していたが、何も反応せずに宿の前へと戻る。

「アク、先に宿へ戻っておいてくれ。少し用事ができた」
「分かりました！」

アクを見送り、魔王が何気なく街を歩きながら路地裏へと入っていく。

適当な場所で立ち止まり、煙草に火を点ける。

相手が出てくるのを待っているのだろう。

これだけ有名になってしまえば、調べようとする者が出てきても当然だ、といった態度である。

聖光国の者なのか、他国の者なのか、いずれにせよ間者の類であろうと。

「こう見えて、私は忙しい身でな——鬼ごっこをしてる暇は無い」

魔王の言葉に、相手は少し戸惑っているようであったが、やがてその姿を現す。それは、予想していた相手ではなかった。

「お前、は……」

それは薄い金色の髪に、紅い目を持つ少女。

「——見つけたの」

先日、零が助けた少女——トロンであった。

はじめの一步

(何故、このガキが俺を……)

昨日、零は「使命がある」とかほざいて、うまく去ったはずだ。

恐らく、あいつは風のように去ることが格好良いとも思っているのだろう。全く、度し難いほどの馬鹿である。

まあ……その中に入り、10年近く演じていたのは俺でもあるのだが。

(い、いや、違う、違うぞ！ あれはゲームの中だからできてたんだよ！ 現実で、人前で、あんなキャラクターができるか！)

妙な葛藤に苛まれているあいだも、ガキンチョはじつとこちらを見ていた。

うまく言えないが、こちらの顔や体ではなく、何か違うものを視界に入れていような、不思議な気配を漂わせながら。

これから忙しくなるのに……適当に追い払うとするか。

「で、何か用か——ガキンチョ」

言ってからしまった、と軽く思ったが、もう遅い。

上目遣いでこちらを見ていた紅い視線が、より強くなってしまった。

「——やっぱり、零と同じ言い方。同じ色」

「色?? 何を言ってるんだ、お前は？」

煙を吸い込み、ゆっくりと吐き出す。

気力が回復する効果がある所為なのか、どんどん頭がクリアになっていく。こいつは、思ったより面倒な案件になるかもしれない。

「……私は万物を色で見るの。人の感情や魂を」

「新手の人相占いか何かか? 他を当たってくれ」

そのまま立ち去ろうとしたが、コートの端が掴まれる。しかも、凄まじい力で。

このガキ、見た目で侮ってたらヤバイかもしれない。漂わせている空気も、何処か人間とは違うような気がする。

かと言つて、何度か見た悪魔とやらとも違う……。

「零を出して。今すぐ」

「お前はさつきから何を言ってるんだ？ 人違いだ」

「出して。ここで。今すぐ、出して」

「妙な言い方で連呼すんな！ 衛兵さんが来たらどうすんだっ！」

何だか路地裏に少女を連れ込んで、いかがわしい台詞でも言わせてるみたいじゃないか！

やつと事業を始めるつてのに、こんなところで妙な評判を立てられて堪るか。

(しっかし、こいつ……)

コートを掴んでいる手に益々力が込められ、意地でも離そうとしない。

どういう理屈なのか、俺が零だと確信しているようだ。

とは言え、こんなガキが何を言ったところで信じる者は居ないだろう。見た目も、年齢も、声も、何もかも違う存在なのだから。

「お前はさつきから何が目的なんだ——？ 金でも欲しいのか」
「零は……うん、貴方は私を助けてくれたの」

助けたのは俺じゃない、と言いついそうになったが口を噤む。

何だか口を開けば開くほど、妙なボロが出そうな気がしたのだ。見たところ、ホームレス少女といった感じがするが、実際もそれに近いんじゃないだろうか。

なら、誤魔化すより言い包めた方が早そうだ。

「見るからに家無き少女つてところだな……行くアテが無いから拾ってくれ、とでも言いたいのか？」

「……うん。零に会いたいの」

目尻に小さな涙を溜め、俯く表情を見て地味に心が抉られる。

軽く言ってしまったが、ちよつと軽率だっただろうか……。

このガキが何歳か知らんが、折角、零が苦勞して助けた命を野垂れ死にさせるのもなんだしな……言い包めるついでに、巧く使ってみるか？

「そうだな、零に会わせてやってもいいが——幾つか条件がある」

「条件？ 何でもする」

気軽に何でもか言うな、と思ったが子供なので他意は無いのだろう。実際、こいつは同情心を抜きにしても、使える人材なのかもしれない。

この異常な腕力と、「色」で視るといふ不思議な力。

「私の命令に従い、大人しく働くのであれば会わせてやってもいい」
「働くつて、何をすればいいの？ 人間をたくさん殺せばいいの？」
「違うわっ！」

どいつもこいつも、俺を何だと思つてやがるんだ。

顔は怖いかも知れないが、善性の人間だと言つてるだろうが！

「近々、人手が幾らあっても足りんようになるんぞ……」

そこで一旦、言葉を区切る。

正確に数えてはいないが、ラビの村は多くても300人くらいの小さな村だ。その大部分が農作業に取られることを考えると、人手が欲しい。

来客が増えれば、今のようは無防備な態勢でいるわけにもいかないだろうし、警備という意味でもこいつは使えそうだ。

「その腕力と色とやらを私のために使うなら、拾ってやつても良いぞ。ガキンチョ」

「私はトロン——ガキンチョじゃないの」

「ガキはガキだろうが。行くぞ」

宿に向かって歩き出す。

こんな路地裏で長時間、小さいガキと居たら妙な噂でも立てられかねない。

(にしても、益々周囲の女率が高くなるな……もうやってられんぞ)

次に側近を召喚するなら、子守に慣れていているあいつを呼んだ方がいいかもしれないな。

いい加減、歳の近い同性が一人欲しい。

「おい、ガキンチョ……もうコートから手を離してもいいだろう」
「ん……」

ガキ——いや、トロンが大人しく手を離す。

命令に従え、といったのが功を奏したのかもしれない。だが、離れた手がするりと伸び、自分の右手が握られた。

「おい、何してる？」

「この街のこと、知らないから。はぐれると困るの」
「アホか！ いい歳してこんな格好で歩けるか」

ガキを片手で抱え上げ、宿へ早歩きで向かう。

この悪人面で、小さい子供と手を繋いで歩くなんて冗談じゃない。

俺はパパじゃねえんだぞ！

「零と同じ匂い……」

ガキが何かほざいていたが、無視して足を速める。

あちこちから視線を感じたが、手を繋いで歩くよりはまだマシだろう。

中には口笛を鳴らしたり、昨日は助かったぜ！などと叫ぶ奴もいたが、全てをスルーし、ようやく宿へと辿り着いた。

（何で宿に戻るだけで、こんな苦労すんだか……）



「さあ、全員支度は整ってるな？ 行くぞ！」

宿に戻り、大きく手を叩く。

さつさとラビの村に戻って、諸々の準備を済ませなければならぬ。予想外のトラブル

ルやら展開が多すぎるだろ。

「長官、その子供はいつたい……？」

「わあ！ 凄く綺麗な髪ですね！」

悠は「九内伯斗」が人を拾ってくることに対し、それほどの不思議さを感じないのだろう。実際、側近達は全て九内がスカウトしてきた設定なのだから。

中にはスカウトどころか、無理やり拉致したのもいるが……まあ、それは良い。アクはアクで、純粋にトロンの可愛さに目を輝かせているようだ。

「あ、あんた……その子、「魔」が混じってるじゃない」

ルナが珍しく表情を硬くし、トロンを凝視する。

魔が混じるとは何のことだろうか……？

ファンタジー世界でよく聞く、ハーフェルフとかそういう類か。

俺からすれば見た目は全く人間と変わらないのだが、聖女というだけあって、判別する何かの能力でもあるのかもしれない。

「今後のラビの村に必要な。目を瞑ってくれ」

「聖女が、魔人を……無茶言わないでよっ！」

「あの村を発展させれば、上の姉二人を見返すことができるぞ」

「う〱っ……そ、それは……」

思った通り、ルナは姉に対して強い対抗心を抱いている。

そこを突いていけば、何とかなるだろう。

「第一、国の頂点に立つような存在とは、清濁併せ呑む人物のことを指すんだ。お前のように何でもかんでも白黒で分けていては、一步も前に進まんぞ」

「何よっ、偉そうに言っちゃってさ……」

「——それだけ、お前には期待しているということだ」

「んんっ……わ、分かったよ！ ただし、悪さしたら承知しないからね！」

ルナがトロンへ指を突き付け、トロンが頷く。

行くアテもないようだし、後で細かく言い含めれば問題は起こさないだろう。

零という「飴」もあるしな。

まあ、あれが飴というか、甘いとはとても思えんが……。

《悠、全移動は使えるようになったか？》

《はい、長官。抑え付けられていたものが一つ、外れた気がします》

《ならば、結構。ラビの村へ向かうぞ》

全移動は委員会の面子だけでなく、プレイヤーの誰であっても使えるコマンドだ。気力さえあれば、スタート直後から使えるものだし、悠も問題なく解放されたということだろう。

（誰が機能やコマンドを制限し、誰が解放しているのかが問題だが……）

それを考えようにも、今は手掛りが少なすぎる。

その辺りの根源的な疑問こそ、熾天使を調べていくことによって明らかになっていくと思いたい……。

「では、私に掴まれ。ラビの村まで飛ぶ」

アクやルナはその言葉に首を捻っていたが、自分が何度も魔法めいたものを見せていたので、頭にクエスチョンマークを付けながらも黙って従う。

だが、一つだけ疑問なのは、何故か悠まで自分の腕に手を絡ませていることだ。

《悠、お前は自分で飛べるだろう》

《30で済むところを60も使うのはナンセンスです、長官》

《まあ……そうかもしれんが》

悠にしつかりと腕を確保され、数学の教師のような態度で諭される。

他の子供らと違って、悠のプロポジションは整いすぎてるから困るんだよな……色々と。

「では、行くぞ——《全移動：ラビの村》」

一瞬で視界が切り替わり、飛んだ先には妙に懐かしいラビの村があった。

全員、無事に飛べたようだ。

ルナやアクが一瞬でワープしたことに騒いでいたが、俺の意識は村の中で必死に働いているバニーの方へと引き寄せられていた。

ウサ耳を揺らしながら、バニー達が畑の中で懸命に作業している。

その姿は汗まみれで、服も泥塗れだ。

だというのに、その姿を、妙に美しいと感じたのは何故なのだろう――

貧しさゆえか、バニーの子供達も同じように畑へと出て働いている。遊びたい盛りの年齢だろうに、その姿には余裕というものがない。

水は幾らでも使えるようにしたが、それだけで済む問題ではないのだろう。

村人の流出、荒れた土、滅多に降らない雨。

バニーに対しては緩いようだが、聖光国は亜人に対する偏見も強い。

「悠、早速だが設置を始めるぞ」

「はい、長官。その後はお任せください」

こちらに気付いたのか、バンナー達が手を振り、こちらへ駆け寄ってくる。滑車や肥料を渡したこともあって、自分達に対する信頼があるのだろう。

だが——その顔には疲労の色が濃く、着ている服もボロボロだ。

(見ていろ……何もかもを引っくり返して、この村に見たこともない量の黄金を降らせてやる)

野戦病院

「ふむ、この辺りが最適か」

“俺”はラビの村を歩きながら、頭に村の全体図を浮かべ、病院を設置するに相応しい空間を見繕う。ラビの村は後ろが高い山に遮られ、正面は神都へと続く大きな街道に面している。

立地としては、決して悪くはない。うまく人を誘致すれば、“化ける”はずだ。

交易の街であるヤホーと、神都の中間地点に存在しているのだから、其々に宣伝活動を行うことも視野に入れておかなければならない。

(さて、以前に作った拠点を出して……)

愛用していたノーマルの拠点を、アイテムフアイルから引つ張り出す。

これに拠点強化アイテム、もしくはは拠点進化アイテムを合成することにより、拠点の防衛力や耐久力が強化され、様々な機能を持ったものへと変化するのだ。

防衛力の強化方向で突き詰めていくと、こんな感じになる。

・拠点（防衛力10 耐久力50）

砲撃属性を無効化し、あらゆる攻撃を10ダメージ減少させてくれる。

基本、これが拠点の性能となる。

様々な機能を持ち、進化した拠点もこれらの特徴は変わらない。

・中規模拠点

ここまで進化させるのは大変だが、あらゆる攻撃を20ダメージ減少させてくれる。

GAMEではこの拠点を作成すれば、まず「最終日」まで安全に過ごすことができる。た。

外観だけでなく、内装も一気に変わり、高級ホテルに宿泊しているような快適な時間を過ごすことができるだろう。

・大規模拠点

一部の特例を除いて、最大の防衛力を持つ拠点だ。

あらゆる攻撃を40ダメージ減少させる、もはや「要塞」といい。

これを破るのは、GAMEの世界であつても至難の業であつた。

拠点の防衛力ではなく、耐久力への強化へひた走ると、今度は別の系統へと形を変え
る。

・秘密基地

ノーマルの拠点と基本性能は変わらないが、敵との遭遇率が劇的に下がる。

耐久力にも+25の効果がある。

以前に使つた《隠密姿勢》の凄まじい効果を考えると、この世界では発見することすら難しいのではないだろうか？GAMEでは次の段階へのステップアップ途中の拠点でしかなかったが、この世界では使える場面が多そうだ。

・天然要塞

大規模拠点と対を成す、耐久力強化の最大拠点だ。

秘密基地とは違い、遭遇率の低下は失われてしまう。だが、その耐久力は100となり、これを破壊するのは実質的に不可能となっている。

更に15種類の罠が敷かれており、運が悪ければ近付いただけで手酷い目に遭わされ

る最悪の拠点となってしまう。

油による転倒からの頭負傷、毒蛇による毒負傷、落とし穴による足負傷、強化鳥による多段ヒットダメージ、偽宝箱による気力減少 e t c ……

(何というか、我ながら酷いもんばかり作ってるな……)

つい、そんなことを考えてしまう。

あくまで『ゲームの世界』だから良かったが、これを現実に設置したら相手は地獄を見るんじゃないだろうか？しかも、これらは強化系だけの一例であり、進化系には更に酷い拠点が満を持して待ち構えているのだ。

(設置には注意しないと、本当に魔王と呼ばれかねないな……)

思わず首を振り、そんな妄想を振り払う。

それらの拠点など、建てる必要が無ければ永遠に使うようなことはないのだから。そんな事態など、こないと思いたい。

「長官、どうされましたか？」

「いや、我々の輝かしい一步に想いを馳せていてな」

横に居た悠が、首をかしげながら聞いてくる。

くそ、こいつとんでもない美人だから、そんな仕草を見るとギャップで凄い可愛く見えるんだが……。美人つてのは、本当に何をしても得なんだな。

「ここで治療を行えば、多くの者から支持を得られるだろう」

「お任せください。私が翼となり、必ずや長官を“高み”へと——」

「う、うむ……」

あれ？ 悠ってこんなキャラだったっけ……？

九内との関係なんて、あくまで上官と部下として設定していたから、どちらかと言えばドライな関係であつたはずだ。

こんな殊勝なことを口にするような性格ではないはずなんだが……。

(まあ、嫌われたり、壁を作られるよりはマシか……)

側近達の中でも、残酷さは抜きん出てるキャラだしな。怒られたり、嫌われるようなことはできるだけ避けて、良い関係を築いていかなければ。

「あつ、魔王様……待ってください！ 先に乾パンを取り出して良いですか？」

遠くからアクが駆け寄りながら言う。

乾パンって、あんなもんを取り出してどうするんだ。まあ、進化させてしまうと中身が丸ごと入れ替わるから消えてしまうが……。

「別に乾パンなど、要らないだろう」

「ダメですよ！ 勿体無いですっ！」

「そ、そうか……？」

その声に押されるようにして、拠点の中からダンボールに詰められた乾パンを運び出す。自分で設定しておきながら言うのもなんだが、無駄に数が多いぞ。

まあ、食い物を無駄にしないってのは良いことだけぞ。

「トロンさん、村の中央に運びましょう！」

「ん、運ぶ」

二人がダンボールを抱えながら、村の中央へと去っていく。

トロンは一人で10箱くらい積み上げられたものを軽々と運んでいた。やっぱり、人間じゃないな、ありや……。

「では……そろそろ始めるとするか」

「はい、長官」

「希少アイテム作成——《医療器具一式》」

漆黒の空間から、赤い十字のマークが付いた箱を取り出す。

これを拠点へ合成すれば、それだけで完成だ。

「拠点進化——《野戦病院》」

拠点の中へと箱が吸い込まれ、眩い光とともに外観が見る見るうちに変化していく。中央には白亜に輝く建物が出現し、その周りにはいくつもの迷彩色の大きなテントが出現した。

建物の中には診察室と手術室、そして私室用のスペースも取られてあり、周りのテントの中にはパイプベッドが設置されている仕様だ。

まさに野戦病院といったところだが、設備としては十分すぎるほどだろう。

「長官、念のために中を確認しませんか？」

「そうだな」

中を確認するのはいいが、何で腕を組んでくるんだ……。

まさか、俺を解剖しようとか思っていないよな??

バリアがあるから大丈夫なのは分かっているんだけど、心理的な怖さまでは防いでくれないからな。

病院の中に足を踏み入れると、そこには懐かしいともいえる近代的な設備が整っていた。コンクリートの建物、廊下、様々な医療器具。

地味にありがたい冷暖房に、消毒薬の匂い、所狭しと並べられた薬品。

(電気もきてないってのに、問題無く動いているな……)

GAMEのアイテムなんだから当然か、とも思えるし、どんな原理だよと突っ込みたくもなる。最悪、電気が必要ななら《発電機》を出そうと思っていたが、これなら心配は要らないだろう。

ちなみに、発電機は電気を作る用途では使われず、GAME会場に設置されている動かない自動販売機を動かし、中のジュースを奪うために使われる。

体力を20回復するジュースを大量にGETできるということもあって、会場では発電機を見つけたら小踊りしてしまうような品でもあった。

「悠、問題は無さそうか？」

「はい、今日からでもすぐに。ですが、料金はどう設定しましょうか？」

問題はそこだ。

この国は地域によって、随分と経済の規模やら金の価値が違う。

アクの村などでは銅貨と、大銅貨だけで生活できていたようだし、銀貨すら殆ど見た

ことがないようであった。草深い村では物々交換も主流のようだし、貨幣価値の判断が難しい。

「これはあくまで暫定だが、無理やり我々の金銭感覚へと当て嵌めよう。それでおかしいようなら、後で逐次修正していけばいい」

「そうですね。これほどに価値や文化が違う世界では、最初は手探りで進めるのも止むを得ません」

ざっと考えると、銅貨は百円辺りで、大銅貨は千円くらいと言ったところだろうか。銀貨を一万と考えるなら、金貨は十万くらいだろう。

大金貨の価値は正直、よく分からない。更の上に、ラムダ聖貨と呼ばれるものは時期や、市場に流通している枚数によって価値が変わるらしい。

ラムダ聖貨には多くのコレクターが居るらしく、大量に買い漁る者や、逆に一気に売りに出す者などが居るらしいので、何も知らない自分達が手を出せば痛い目に遭いそう
だ。

いわば、株のようなものだろう……素人が手を出してもロクなことにならない。

「貧乏人には安い料金で治療してやるといい。金の無い者から徴収しても、大した金額にもならんしな。逆に——貴族には遠慮なく吹っかける」

「——はい、承知しました」

実際、悠はどんな怪我や病気すらも治してしまう。

金持ちからどれだけポツたくろうが、全く心は痛まない。

これが現代日本なら、不治の病すら治療してしまうのだから。料金が1億や2億であつたとしても、払う者は幾らでも居るだろう。

何処の世界でも、金はあるところにはあるのだから。それこそ、唸るほどに。

「貧困層からの支持を集め、特権階級からは富を奪っていく——長官は、大帝国と正反対の道を往かれるのですね」

「同じ道を歩むなど、退屈極まりない。そんなもの、退化と同じではないか」

悠の言葉に合わせ、適当なことをほざく。

いや、すいません……そんなところまで考えてないですから。

金なんてあるところから取れば良い、つてだけなんだよな……。

それに、悠は人体の神秘を追求し、人体が秘める無限の進化を追い求める科学者でもある。

退化とは、彼女が最も嫌う言葉だからチョイスしてみたのだ。

効果はあったようで、悠は見惚れるような笑顔を浮かべ、深々と頷いてくれた。

「はい、私と長官は——いつも同じ想いで強く結ばれています」

「う、うむ……」

悠が浮かべる笑顔に、思わずドキリとする。何だか、妙に可愛いんだが……。

さつきも思ったけど、こんなキャラだっけ？

マッドサイエンティストで、噛いながら幾らでも人を解剖し、苦痛に歪む顔を見ては悦楽に浸るキャラのはずなんだけど……。

もしかして、異世界にきた影響で性格が少し変わったんだらうか？

（まあ、時間はたっぷりある。気長に様子を見るか……）

俺は病院を後にし、温泉旅館の設置準備へと入るのだった。

温泉旅館

(病院の隣に温泉、か……我ながら良い感じだな)

療養所、とでもいうべきだろうか。

“俺”は新たに拠点を作り出し、乾パンを外に出した後、希少アイテムである《大垣の湯》を使って温泉旅館を完成させていた。

堂々たる、三階建ての巨大な施設だ。

一階部分には入浴施設や巨大なホール、食堂などがあり、二階と三階部分は宿泊施設となっている。露天風呂もあるため、旅館の周りにはそれらが見えないよう、びっしりと竹が並んでいた。何処か雅さを感じる風情である。

(竹か……何だか懐かしいな)

ザ・日本の旅館と言った感じで、自分からすれば落ち着く風景だが、この世界の住人からはどう見えるんだろうな。

西も東も、文化や美しさには共通するものがあるとは思うが……。

「な、何か凄いのができてる……ピョン！」

「訳が分からないウサ」

旅館を見たバニー達が騒ぎ出す。

確かキヨンとモモとかいうバニーだったな……こいつらは見た目もスタイルも良いから接客にまわってもらおうことにしよう。

施設だけ豪華でも、従業員の態度が悪ければ片手落ちだ。

（益々、あいつを呼ぶ必要があるな……）

俺はサービス業だの、接客などに深い経験も知識もない。

何でもそつなくこなす側近を召喚して、従業員の教育も丸投げしよう。何事も分担作業で進めていかないとな。

「お前達、今日の仕事が終われば村の全員をここに集めるんだ」

「呼んで、どうするんですか……ピョン」

「客への案内や説明をするには、何よりも自分が体験して、熟知しておくことが大切なん
でな。入浴タイムというわけだ」

「入浴……？ そんな贅沢、貴族の人間しかできないウサ」

まあ、普段は濡れタオルで体を拭く程度が限界。贅沢といっても雨が降ったときに全身を洗うぐらいが精々らしいからな……。

水風呂が最高の贅沢ってことを考えると、湯に浸かるってのは俺が思っている以上に凄まじい贅沢なのかもしれない。

それこそ、日本でも昔は薪なんかを燃やして、フーフーと息を吹いて焚き上げてたよ
うだし、その労力を考えると毎日の入浴などありえないことなんだろう。

薪も集めるのにも苦勞するだろうし、火の魔石も高いときてる。

（温泉旅館は貴族用に……庶民用には「銭湯」を作るか？）

温泉旅館の下位互換と言える拠点だが、こつちだと希少アイテムではなく、上級アイ
テムの《神田川》で作ることが可能だ。

体力の回復効果が温泉旅館に比べると遥かに劣るので、GAMEでわざわざ作成する者は殆ど居なかったが……。

(よし、そっちは庶民用に安い値段で開放しよう)

銅貨1〜3枚程度で運営すれば、それなりの集客も見込めるだろう。

こっちはもう、金儲けは度外視だ。

施設の中も脱衣所と、大浴場と水風呂しかないしな。そっちは庶民用つてことで、温泉旅館から離れた場所に設置するとするか。

「それと、近いうちにお前達の家も全て壊して作り変えるぞ」

「ええ!? そんなの困ります……ピョン!」

「黒い人……恩人だけど、それは横暴ウサ」

「誰が黒い人だ! ブラック企業の社長みたいに言うな!」

このモモってバニー、思ったことをズバズバ口にしゃがるな……。

まあ、それはそれでDMの客には良いかも知れんが。

ともあれ、今はまだいいとしても、これから貴族を大勢集めるともなると、景観というポイントも大切になる。

いずれは畑も移動させ、村全体の形を変えるべきだ。

(いずれ——カジノも置くことだしな)

進化拠点の中には、「カジノ」と「裏カジノ」というものがある。

実際、GAMEの中でチンチロやポーカー、カードゲームやスロット、パチンコなどで遊ぶことができたのだ。金を持って余した貴族や金持ちを程々に楽しませつつ、こちらも儲けさせてもらおう。

古今東西、ギャンブルというのは必ず、胴元が儲かるようになっていく。

それは、いずれ設置する「カジノ」でも変わらない。

「くつくく……あつはつはつ！　もう笑いが止まらない、これは！」

「黒い人、怖い……ピョン」

「黒い人がイカれたウサ」

こうして、ラビの村に《野戦病院》《温泉旅館》《銭湯》と三つの施設が設置されるところとなった。

大いなる一歩と言えるだろう。



——その夜

「皆さん、一人一缶ずつどうぞっ」

「頑張って配るの……もしかもしゃ」

アクトトロンがダンボールを開け、乾パンを配っていた。

一部は配りながら食っているようだが。

最初は物珍しそうに見ていたバニー達であったが、乾パンを口にした瞬間、ウサ耳がブンブンと動く。喜んでいいのか、怒っているのか、一見した限りではよく分からない。

(本当に大丈夫なのかよ。これから働かせる従業員に乾パンを食わせるなんて)

反応を恐れた魔王が音もなくその場を立ち去り、村の入り口で一服を始める。彼の感覚からすれば、乾パンとは災害時における緊急用の非常食である。

とてもではないが、どや顔で従業員に配れるような品物ではなかった。だが、それは心配のしすぎというより、まるで見当違いのものである。

この国で貧しい者が口にするのは、精々が固い黒パンであり、等外と呼ばれる石のように固くなった黒パンを口にする者も多い。

副菜も精々、少量の豆が入ったスープや野菜などが限界であろう。

豊かな農村であれば鶏が産む卵や、鶏肉もたまには口にできるが、他の村と殆ど交流すらないラビの村ではそれすらも難しい。

「甘い……柔らかい……ピョン！」

「これはスイーツ……ウサ」

乾パンとは本来、災害用の非常食に設定されているだけであつて、栄養も豊富である。糖分の補給や、唾液の分泌を促すという意味合いもあり、缶の中には、氷砂糖まで入っているのだ。

甘味など、よほどの金持ちでなければ味わうことはできないであろう。

バニー達が騒いでいる声を聞きながら、村の入り口で魔王が首を竦める。煙草を持つ手まで、微かに震えていた。

(やつぱり怒ってるじゃねえかよ！ 早めに食料もどうにかしないと……従業員にソツポ向かれたら計画がパーだぞ！)

魔王がまるで見当違いの恐怖に苛まれる中、村の中央に集まったバニー達の入浴タイムが始まろうとしていた。

《悠、バニー達に入浴のマナーや施設の説明を頼む。私は所用で少し出るぞ！》

《は、はい……お帰りをお待ちしています》

魔王が大急ぎで悠へと通信を飛ばし、急いで出掛ける準備を整える。

両手を頬を叩き、何やら気合まで入れているようだ。

「とにかく、金だ……金を集めて、開店資金としよう。ついでに食糧事情もどうにかし

て、仕事用の服も用意しなければ」

古来、金を稼ぐためにはまず金が要る、というジレンマである。
この辺りの機微は、どんな世界でも変わらない真理であるらしい。

——全移動：ヤホーの街

魔王が向かったのは交易都市、ヤホー。

その手には咄嗟に作り出した下級アイテム「オルゴール」が握られていた。

GAMEでは投属性のゴミ武器であり、その攻撃力は堂々たる1。

回数も当然のように1という、救いようのない品であった。

SP残量——1084P

踊る詐欺師と大金貨

——ヤホーの街 ナンデン・マンデンの店

「これは……いったい、どういう魔道具なのですか!？」

魔王が厳かにテーブルの上へオルゴールを置き、そのネジを巻いた瞬間、マンデンの目が驚愕に見開かれた。

どういふ力が働いているのか、そこから心に染みるような音が溢れ出したのだ。

不思議なことに、聞いていると何処か懐かしい風景が浮かぶような、それでいて心が落ち着き、涙までも出そうになる絶妙な音色である。

「驚かれるのはまだ早い——もう二種類のネジがありましたね」

魔王が別の色のネジを差し込み、それを軽やかに回す。すると、今度は明るい音色が部屋の中へ響き出し、聞いていたマンデンの顔も、つい綻んでしまう。

「これもまた、『海の向こう』の品でありますか!？」

「その通りです。私の国では、冬の夜などにこれらを鳴らし——ワインを嗜む、というのが雅な者達の間で流行っております」

「これは、とんでもない逸品ですな……楽器も要らず、楽師を呼ぶ必要もなく、これほど簡単に音を楽しめるなど」

「舞踏会や社交界では、それらも必要でしょう。ですが、一人で部屋に居るときや、少数の集まりではこちらの方が仰々しきもなく、スマートです。それに、持ち運びも簡単ですからな。楽団を連れて歩くなど——私に言わせれば品が無い」

魔王の言葉に、我が意を得たりとマンデンが頷く。

貴族の中にはこれみよがしに楽団を引き連れ、旅行先にまで引つ張っていく者も居るのだ。まるで、それが貴族の嗜みである、と言わんばかりに。

マンデンからしても、そういった姿は失笑を誘うものであった。

「で、この品は——如何ほどの値でありますでしょうか」

「私としては、マンデン氏に価値を決めていただきたいと思っています」

マンデンが目を見開き、ごくりと唾を飲み込む。

事もあろうに、このとんでもない品を目利きせよ、と言うのだ。下手な値段を付けてしまえば、見限られるかもしれない。マンデンの身に、そんな恐怖が走る。

この魔王が持ち込む品は摩訶不思議なものばかりであり、絶対に逃せない顧客なのだ。

「九内様のお国では、さぞ高い価値があつたのでしような……」

「さて、この手の『美』や『芸術』に関連する品というのは、見る者・持つ者の感性によつて大きく変わるものですからな」

マンデンがさりげなく探りを入れるも、魔王がそれを絶妙な言葉でかわす。

言質を取らせない、というより、相手を試しているような風情だ。少なくとも、マンデンからすれば、魔王の態度はそうとしか見えなかつた。

暫く懊悩していたマンデンであつたが、とうとう諦めたのか、腹を括つたのか、搾り出すような声で言う。

「正直に申しますと、私にはこの品を競売に出したとき、どれ程の値が付くのか想像が付かないのです……」

「ふむ——それなりの値になる、とお考えですか？」

「それは勿論です！　このような摩訶不思議な品、欲する者は探せば幾らでもおります！　」

「なるほど——では、競売にかけた際の最低金額は幾ら辺りとお考えですか？」

きた、とマンデンは思った。

その値で判断するつもりなのだ、と——

ここでしくじれば、魔王は他の店へこの品を持ち込むであろう。美術商など、それこそ探せば幾らでも居るのだから。一度だけの損失ではなく、今後の取引からも外される可能性がある。

マンデンは腹を括り、思い切った値段を口にした。

実際に、それを最低金額とするつもりだ。

「私なら、最低でも大金貨十五枚から始めるでしょう。それを払えないような人物は、競売の場に立つ資格が無いといえます」

その言葉に魔王が目を閉じ、耳が痛くなってくるような沈黙を続ける。マンデンにとって、運命を左右する地獄のような時間であった。その沈黙は長かったのか、短かったのか——魔王が厳かに口を開く。

「——流石の『慧眼』ですな。私が見込んだ人物だけはある」

魔王がそう言いながら立ち上がり、マンデンへ勢い良く手を伸ばす。

握手をかわしながら、マンデンは思わず涙が出そうになった。この海の向こうからやってきた、不思議な人物の信頼を得られたことに。

聖女ともただならぬ関係であることを考えると、マンデンからすればこの男は遠国の貴人であるとしか思えないのだ。

それも、とんでもない品を多数所持している宝の山のような人物である。

魔王は大金貨十五枚という途方も無い金額を受け取り、ほくほく顔で店を出たが、その後、オルゴールとはあるマダムが落札することとなった。

その落札額は——驚くべきことに、大金貨四十二枚。

落札者は珍しい物を片っ端から収集する、マダム・カキフライ（妹）であった。

莫大な差額を手に入れたマンデンはその後、店を拡張してその地位を一段と高めていくこととなる。まさに、win-winの関係であったであろう。

オルゴールを入手したカキフライもその自尊心を大いに満足させ、周囲の貴族から羨望を一身に集めることとなった。彼ら貴族にとつて、他者が持つていない品を持つことは大いなるステータスであり、武力などより、よほど「武器」になるものであった。



——ヤホーの街 人気服飾店「ファッションチェック」

その人物がドアを開けて入ってきた瞬間、店主である「ビンゴ」は思わず飛び上がった。てしまった。

先日やってきた、途方も無い「お大尽様」だ、と。

「九内様、ようこそいらつしやいましたっつ！ 皆さん、ご挨拶してッ！」

「ようこそいらつしやいました！」

「う、うむ……」

従業員から盛大に迎えられ、魔王が落ち着かない様子で左右を見る。

こんなに歓迎されるとは思っていなかったであろう。だが、前回とは違って今回は注文するべき服がもう決まっている。

魔王は落ち着きを取り戻したのか、二着の服をテーブルへと並べた。

一つは絹のタキシード。以前に作ったものだ。

もう一つは、新たに作り出した下級アイテムの《バニースーツ》だ。

双方とも防御力は5であり、GAMEではゴミ扱いのものである。

「店主、これらの服を其々20着ほど欲しいのだが、作れるか？」

「少々、お待ちください……」

ビンゴがそれらを手に取り、プロとしての目で細部まで見ていく。

作りとしては、それほどに難しいものではない。むしろ、貴族が舞踏会などに着ていくドレスに比べれば、シンプルといってもいいだろう。

バニースーツの方はかなり扇情的ではあるが、娼館などにこの手の服を作り卸すことも多い。むしろ、網タイツなどの刺激的かつ見たこともない意匠が、ビンゴの目を釘付

けにしていた。

「ええ、問題なく作れると思います。ただ、サイズは——」

「サイズを計る者が一人要るな。とにかく、今回は早い仕事を求めている。出来上がり次第、ラビの村へと迅速に届けてもらいたい」

「早さ、とおっしゃられましても、製作にはそれなりのお時間が……」
「その早さに、応えるだけの金は用意する」

魔王が無造作に金を取り出し、テーブルの上へ大金貨を五枚並べた。

眩い光が店内を照らし、店にいた全員がその輝きに息を飲む。

「い、い、い、れ、は……」

ビングゴが声にならない声をあげ、魔王を上目遣いで見上げる。

その顔は、今にも泣き出しそうに歪んでいた。

「いいか、これは前払いだ。仕事を早く終わらせれば更に二枚出す。できるな？　でき

ると言え」

「できますツツツ！ 必ず、早く、一秒でも早くお届けします！」

「素晴らしい——では、早速行動に移ってくれ」

「皆さん、今から『戦争』よ——走ってッ！」

店内が時ならぬ大騒ぎとなり、各自が狂ったように走り出した。

素材を買いに行く者、製作の準備に取り掛かる者、夜食の用意をする者、全員に共通しているのは——目が大金貨になっていることだ。

大金は時に人を狂わせ、時には奔らせる。

魔王がそれらを見ながら、ゆっくりと煙草へ火を点けた。

その顔は非常に満足気であり——何処までも不遜。

関わる人間を悉く狂奔させていく姿は、まさに魔を支配する王のようである。

P O K E R F A C E

(よし、食料もどうにかなったな……)

あれから俺は、ヤホーの街でも最大手といわれる商会へと足を運び、大金貨五枚を出して食料を得る段取りを付けた。パンやミルク、野菜、肉や卵などをラビの村に定期的な運ぶように注文したのだ。こちらが何か言う前に商会の人間が全員走り出していたが、すぐに仕事に取り掛かるその姿勢は中々のものであった。やはり、大手ともなれば教育が行き届いているのだろう。

出費が続いているが、こんなものは施設が動き出せば幾らでも取り戻せる。

そして、一度動き出した施設は永遠に金を生み続けるのだ。これだけ払っても、大金貨はまだ三枚残っている。運転資金としてはこれぐらいあれば何とかなるだろう。

(大方、準備は整ったな)

俺はその後、マダム・エビフライへと手紙を出し、服飾店の女店員を一人連れてラビ

の村へと戻った。全移動でワープしたことに店員は目を白黒させていたが、『海の方この魔法』だと適当に説明したら震えながらも頷いてくれた。ちよつと怯えすぎな気もするが……。

「何も心配することはない。君は、自分の仕事だけを考えたまえ。あの金には余計なことを口にするな、との意味も含まれている。分かるな？」

「は、はい……！」

「そうだ、サイズを測るならついでに温泉に入っていくといい。一石二鳥だ」
「オ、オン||セン……ですか？」

女店員を温泉旅館へ連れていくと、口を大きく開け、何やら形容し難い表情になっていた。この世界の人間からは、どう映っているんだろうな。

まあ、その辺りも追々調査していこう。

《悠、説明は終わったか？》

《はい、少々手間取りましたが……あ、ルナちゃん、そこは電気風呂よ》

——アキヤアアア！ ビリビリするううう！

何故だろうか……。

聞こえるはずもない、ルナの叫び声が聞こえた気がした。個人通信は一對一だから、他の声は入らないはずなんだが。

《サウナなどは水分の補給もしないと危険だからな。その辺りも——》
《それで——あ、キヨンってバニーの子。そこは壺湯だから深いわよ》

——きやあああ！ 壺怖い！……ピヨン。

何故だろうか……。

こんなときでも、語尾に何かを付けている声が聞こえた気がしたが。
ある意味、根性が……って、全然話が進まないだろ！

《それと、長官。連日の疲れも溜まっているのではないかと……是非、お背中を流したく
思います》

《い、いや、それには及ばない——少し考え事があるのでな》

《……村のことでしょうか?》

《それも含め、部下をもう一人呼ぼうと思っている》

折角、うるさいのが全員、温泉に入っていることだ。

この機会にじつくりと考えながら、側近の召喚を行おう。彼ら彼女らと呼ばば呼ぶほど、単純に戦力は桁違いに増していく。

優秀な者に仕事を任せれば、自由に動ける時間も増えるはずだ。

(今度は男だな……)

本当なら蓮を呼びたいが、これからの状況を考えてと少々まずい。

俺も温泉旅館の中へと入り、男湯の暖簾をくぐった。



「ふううー……これだなあ……」

露天風呂に肩まで浸かり、首をコキコキと鳴らす。

肩を動かすと、筋肉の張りが解れていくような感覚がある。連日の疲れで、思っていた以上に凝っていたのかもしれない。

湯を掬って顔にかけると、えもしれない気持ちよさが顔全体に広がった。

生きていて良かったと思える瞬間だ。露天の隅では鹿威しの中に湯が注がれ、カポーンと心地良い音まで鳴っている。

夜空を見上げれば、月まで浮かんでいた――

(ははっ、ファンタジー世界で露天風呂かよ……)

GAMEで《温泉旅館》を作っていないければ、こんなものを味わうことはできなかっただろう。昔の自分に、少しだけ感謝だな。

作った当時は遊んでいるプレイヤーから「この殺伐ゲームで温泉!?(笑)」と言われたものだが、今となってはそれも良い思い出だ。

(さて、改めて念入りに設定を思い出していくか)

今回は既に候補があり、それは揺るがない。

だが、こんな機会でもないし最近の中々一人になれないしな。

今後のことも含めて、じっくり考える時間が必要だ。村の整備、従業員への教育、貴族や客に対する窓口役、警備という観点。

これらを全てをこなせるのは、蓮ともう一人しかいない。

(近いうちに、村を一時離れる可能性も含めて考えないと……)

強く言い含めれば大丈夫だと思いたいが、自分が村を留守にするあいだ、悠への目付け役が欲しい。

それを考えると、蓮と悠は絶望的なまでに相性が悪いのだ。

自分が間に居なければ、普通に殺し合いにまで発展しかねない。

(女ばかりつてのもいい加減、息が詰まるしな……)

それこそ、頼りになる目付け役と子守役が必要だ。

俺は湯に浸かりながら、自らが作った四人の男性NPCを頭に浮かべた――



加藤勝 かとうまさる 16歳。

所謂、年少組の一人だ。

二振りの神刀を扱う、二刀流の剣士。その実力はまだまだ荒削りだが、成長途中なので今後の伸びにも期待できるだろう。

その性格は至って単純であり、脳筋そのもの。口より、まず手が出るタイプだ。

実力や立場など一切考慮せず、誰に対してもタメ口で偉そうな態度なため、痛い目を見たのは十や二十ではきかないが、反省するということがない。

こいつの脳には、そんな余分なスペースがないからだ。

暇があれば筋トレと鍛錬、強くなること以外に興味がない。

金も要らない、女も要らない。

ただ、戦う場と強者との死合いのみが生きがいの、剣術馬鹿である。

九内との関係は、単なる上官と部下でしかない。

ただ、作った俺からすれば、手のかかる近所の子供のような、馬鹿ほど可愛いというか、何とも言い難い難いキャラクターだ。

近藤 友哉 こんどう ゆうや
16歳。

加藤と同じく、年少組の一人だ。

弓を扱えば百発百中の腕前を持ち、尋常ではない“眼”を持っている。

殆ど未来視に近い神眼から放たれる矢は、カンストプレイヤーでも回避することが困難であった。

この世界においては、最早放たれた瞬間に死が確定するといつていい。

性格は小心者で臆病、典型的な引き籠もりだ。

実際、不夜城に居たときも部屋から出てくることはまず無かった。

アニメ、ラノベ、漫画、ゲーム……二次元に魂まで穢されきっており、三次元に全く興味が無い極端な性格をしている。

八人の側近の中でも極めて善性で、無害な人物。

ただし、引き籠もりだけあって、彼の“領域”に踏み込むと地獄すら生温い超絶反撃

コンボを食らう。可愛い顔をしているが、決して近付いてはいけない存在だ。

放置していれば無害、ということとで数え切れないほどに行われた不夜城攻防戦の中でも、そのままスルーされるが多かった。

女性プレイヤーからも「近藤キユンは可愛いから攻撃しない」などと言われることもあり、色んな意味で得なキャラクターである。

やっぱり顔か、馬鹿野郎。こつちも好きで怖い顔になったんじゃないんだぞ！

丸内との関係は……何と言うべきか。

怖い人、としか思われていないだろうな。かなり人見知りが激しいので、年少組以外のNPCとは、ほぼ会話や接触がない。

子供の頃から同じ学校だった加藤にだけは、意外と毒を吐く。

田原 たはらいさみ 勇 31歳。

こちらは年長組と言われる一人。

銃の扱いにかけてはスペシャリストであり、世界中の銃器に愛される体質を持っている。

47丁の銃に付き纏われ、強烈なストーカー被害を受けていた。

戦闘スタイルとしては嫌らしいスキルを万遍なく揃えており、全ての銃器が自らの意思を持ち、嵐のような弾丸を放つという滅茶苦茶なキャラクター。

NPCの中で唯一「天才」の設定を与えたキャラであり、何をやらせてもすぐに習熟し、人より遥かに高い結果を出す。

ただし、普段の姿はヘラヘラ顔で人をからかい、怠惰で無気力そのもの。

人を煽るスキルも無駄に高い。

昼行灯でもあり、POKER FACEでもあり、敵からすれば掴みどころのない嫌なキャラクターだ。

田原には歳の離れた真奈美という妹がおり、妹の養育費を稼ぐために委員会の汚れ仕事を引き受けることになった、という設定がある。

ちなみに重度のシスコンであり、病気。

女の見方は「真奈美」か「それ以外」の「記号」で分けられており、医者も匙を投げる「高み」に到達していた。

九内との関係は良くもなく、悪くもなく、まさにビジネスの関係である。

基本的に善性の人物ではあるが、敵に対しては一切の容赦をしない。

野村 武文 41歳。
のむらたけふみ

こちらも年長組と言われる一人。

大帝国が誇る、不敗にして無敵の総合格闘技チャンピオン。

不世出の世界的スターともいえる名声を得ていた男だったが、神民ではなく、属国の女性と恋に落ち、周囲の反対を押し切って結婚。

上層部の再三に渡る説得にも首を横に振り続け、遂に面子を潰された一部が暴走し、野村は薬物疑惑、八百長疑惑、脅迫疑惑などのでつち上げの冤罪を連日報じられ、格闘技界から追放されることとなった。

その後は妻と共に諸国を放浪していたが、大帝国に恨みを持つ現地住人に妻を惨殺され、失意と絶望の中、消息を絶った。

数年後、穢れたヒーロー、堕ちたヒールとして裏格闘技場で人を殴り殺す日々を送っていたが、そこを九内にスカウトされ、委員会へ。

その力は全盛期の實力には程遠く、かつて掴んだ栄光は既に失われている。九内に対する忠誠心は皆無、と行っていいだろう。

残酷極まりないGAMEにも内心、軽蔑しか抱いていなかった。委員会に対しては、堕ちた身を置くには相応しいと自虐的に考えているフシもあつたが……。

妻を亡くして以降、口を開くことは滅多になく、会話をするといいことがない。

設定上、全盛期の力が戻れば、作り出したNPCの中でも最強と言える力を持つ。だが、それを覚醒させるキーは、残念ながらもう失われている。



(今回は当然、田原だ……)

男性NPCを振り返り、思わず懐かしい気分に戻ってしまった。妙な設定のキャラばかり作ってしまったな、とも思う。

特に野村に関しては悲惨の一言だ。

製作していたときは「影のある渋いオッサンって良いよな！」などと軽く考えていたが、実際にそれが意思を持ち、動き出すとなると……。

(何というか、顔を合わせられんよな……)

露天風呂を出て、のぼせた体を冷やす。

次は時間をおいて、サウナにでも入ろうか？ それともジェット風呂にでも入って全

身をマッサージするのも捨てがたい。

そんなことを考えていたら、聞こえるはずもない声が耳に飛び込んできた。

「見つけたの——」

「ガキンチョ!? 何でお前がここに居るんだよ!」

女湯に居るはずのトロンだった。

慌ててタオルを腰に巻く。

こんなところを誰かに見られたら、シャレにもならない。

「乾パンのお礼に、その長い髪を洗ってあげるの」

「ここは男湯だぞ、ガキンチョ!」

「ガキンチョじゃない。私はトロン」

「つか、こいつ丸裸じゃねえか!」

いかにガキンチョとはいえ、マズイだろ。悠にでも見られた日には、視線だけでマンモスすら凍らせるような視線を送られるに違いない。

ルナなんぞ「ようやく本性を現したわね、変態魔王！」と鬼の首でも取ったように騒ぐのが目に見えている。

「早く出ろ！　というか、タオルぐらい巻け！」

「零になら見られても平気なの」

「零じゃねえよ！」

この後、何とか闖入者(?)を追い出し、「人前では絶対に零と呼ぶな！」と重々に言い聞かせてから温泉を後にした。

何だか最後にどつと疲れた気がする……温泉に入った意味あんのか？

(さっさと田原を呼ぼう……こんな中で男一人なんてやってられるか！)

俺は温泉の外に出ると早速、管理画面を呼び出す。

このドタバタから解放されるなら、SP1000の消費すら安い。

「管理者権限——《NPC召喚》」

これで二度目になるが、やはりNPCを呼ぶときは若干の緊張を感じてしまう。それと同時に、高揚感も。

自分が作り出したキャラクターに会えるというのはある意味、創作者にとっては“究極の夢”でもあるのだから。

「田原よ、我が前に姿を現せ——！」

田原 勇

「田原よ、我が前に姿を現せ——！」

その言葉とともに、白と黒の巨大な光が前方に現れ、それらが重なったとき——
一人の男性の形となった。

その顔は寝ぼけたような面をしているが、身長も高く、その体格もガツシリとしている。
る。

「んあ……？ 長官殿じゃねえか。って、ここ何処だよ！」

（ああ、田原だなあ……）

自分が創ったキャラクターが動き、喋っている姿に何とも言い表せない感動に包まれる。
る。

だが、気を抜いている暇はない。

こいつも悠と同様、自分が九内伯斗でないと知れば、どんな行動を取るか分からない

のだから。

「よく来たな。ここではなんだ、落ち着いて話せる場所へ行こう」

「お、おう……」

田原があちこちを見回し、髪をガシガシと搔く。

まあ、無理もない。寂れた寒村の中に、目の前には温泉旅館があるという、よく分からない光景なのだから。

「ここは、新しい『会場』なのかよ——相変わらず、金を掛けてんだな」
「それも含め、ゆつくりと説明したい」

温泉旅館のロビーへ行き、そこに設置されてあるソファへと腰掛けた。

ここなら灰皿もあるし、落ち着いて話ができるだろう。ロビーに置かれたスピーカーからは琴の音が軽やかに響いており、中々に落ち着く空間だ。

「まず、最初に言っておきたいのは——ここは大帝國があつた世界ではないということ

だ」

「はあ??」

以前、悠に説明したことを繰り返す。

あれから知った事情も含めて話していくと、田原はその表情を百面相のように変え、呆れたように溜息をついた。

まあ、この態度が正常ではある……いきなり納得されるのも怖いしな。

「するとなにか、ここはガキの頃に見た、アニメみてえなファンタジックな世界だったのか??」

「端的に言えば、そうなるな」

自分の返答に、田原が長い沈黙を続ける。

眠そうなツラで天井を見上げたり、頬を搔いたり、傍目から見れば間抜けな姿にしか見えないのだが、自分には分かってしまう。

こいつを作った——自分には分かる。今、こいつの頭は恐ろしい速さで回転し、様々な推測や答えを導き出しているはずだ。

「ま、あんたはこの手の冗談なんぞ、槍が降つても言わねえだろうが……」

「ちなみに、悠も居るぞ」

「げえっ！ あのマッド女が!? 冗談じゃねえぞ！」

「悠とも協力し、事にあたつてもらいたい」

俺は何気ない仕草で煙草に火を点けながら、思わず吹き出しそうになっていた。

こいつの悠への反応、俺に似てるよな。

綺麗だけど、怖いもんな……何であんな設定にしちやっただら。

「長官殿よお、一つだけ確認していいか？」

「どうした」

「ここは、本当にあの『大帝』が存在しない世界なんだな——？」

「断言しよう。間違いない」

田原はそれを聞いて安堵したように一息を吐くと、自身も煙草を啜って火を点けた。こいつも俺に負けず、ヘビースモーカーなんだよなあ。

煙を幾らか吸って落ち着いたのか、田原がおもむろに口を開く。

「長官殿の前で言うのも何だけどよ、ここが大帝国の無い世界ってんなら、こんなに嬉しいことはないね。あんたにとつちや……どうか知らんがよ」

最初は遠慮がちに、だが、はつきりとこちらの目を見ながら田原が言う。

そんなことを言われても、「九内伯斗」ならまだしも、俺からすれば別に大帝国というのはあくまでGAMEの「背景」であり、あのサバイバルゲームを行うために作った「舞台装置」に過ぎないのだ。

遊ぶ人が「ゲーム」に入り込めるよう、入念に世界観は作り込んだが、別にプレイには何の関係も無い要素だ。実際、山のように書いていた小話にまで、全て目を通していったような熱心なプレイヤーはそこまで居なかったはずだ。

ライトなプレイヤーからすれば、スタート時に「ああ、このGAMEはそういう国がやってんのね」ぐらいのものであったろう。

「別に、私の前だからといって遠慮する必要は無い。今の我々は、大帝国内に縛られることのない存在なのだから」

「そうかい？　なら、ついでに幾つか聞かせてくれ——あんたは、この世界で何をする気だ？　最終的には元の世界へ帰るつもりなのか？　俺達を集めて、何をさせようとしてる？」

難しい質問だった。

何と答えればこいつは納得するのか、ではなく——俺もまだ、最終的な結論やゴールを決めかねているからだ。

管理機能を、権限を、全て取り戻す……これはまだ良い。

熾天使を調べて、いずれ元の世界へ帰る——それが本当に可能なかどうか。

そもそも、戻ったとして、俺は何をするつもりだ？

変わらない日常と、仕事か？

いずれ誰かと結婚して、子育てでもして、最後には墓の中に入って……。

いや、その前に——呼んだこいつらはどうなる？

元の世界に戻っても、もうGAMEは存在しないんだぞ？

つまり、間接的に俺はこいつらを、あの世界全てを「殺した」といつてもいい。

自分の用事が終われば、まだ消して「殺す」のか？

「今はまだ言えることは少ない。だが、そうだな、少なくとも——」

田原の眼が、こちらを見ている。とても静かで、不思議な感覚だった。心のヒダを掻き分け、全てを読み通そうとしている目付きだ。

「私は、大帝国とは正反対の道を往こうと考えている」

「——へえ」

以前、悠との会話で出てきた言葉をそのまま口にする。実際、俺はあんな血塗られた道を歩もうなどと夢にも思っていない。

アレと同じ道を往くということは、武力で世界を支配していくことなのだから。何が悲しくて、こんな異世界にまできて、殺しあったり恨まれなきやならんのか。

「……まあ、いいさ。あんたにや、たつぷり稼がせてもらった恩がある。あんたが居なけりや、真奈美ともども野たれ死んでただろうからな」

「……その、妹のことだが」

こいつは重度のシスコンだ。

自分が設定したんだから、それだけは間違いない。

妹と会えない環境に居ることについてはどう思ってるんだらうか？

「良いんだよ。こんなヤクザな商売やつてる兄貴なんざ居ない方が、良いに決まってるんだから。創玄のじじいに預けてるし、心配要らねえよ」

創玄……：そういうえば、田原の小話でそんな爺キャラを描いたな。

大帝国の上層部にまで顔が利く由緒ある神社の神主であり、大地主だ。

描いてて良かった……：そんな設定を作ってなかったら、今すぐ戻せと銃口を突き付けられてたかもしれない。

「で、当面は何をすりや良いんだ——？」

「まずは、この寒村の運営だ。施設は野戦病院、温泉旅館、銭湯の三つがある」

村全体の構図を変える作業、従業員の教育、利益を生み出す経営、トラブル処理、貴族との折衝……：そして、子守り。

それらを伝えていくにつれ、田原の顔が愉快なほどに曲がっていく。

「無茶言うなっ！ 俺あ青い猫型ロボットじゃねえんだぞ！」

「お前は『天才』だ——必ずできる。私が言うのだから間違いない」

「うう、あ！ お……が……」

「どうした？」

田原が急に飛び上がり、妙な顔付きになる。

前に悠もこんな反応をしてなかったか？

「な、何か体にビリっと……んだ、こりやあ……」

「体調でも悪いのか？ 悠に診てもらえ」

「やめてくれ！ あんな奴に見られた日にやあ、体をバラバラにされちまわあ！」

——随分な台詞ね、田原。

「げっ！ マッドおん……い、いや、悠じゃねえか……ははっ……」

振り返ると、そこには風呂呂上りに浴衣を纏った悠が居た。

その頬はほんのり赤みが差していて、とてつもなく綺麗だったが、目が怖い。思わず、俺までそつと目を逸らす。

「魔王様、その方はどなたですか?？」

「何かいやらしい顔してるわね……あんだ、魔王の手下でしょっ!」

「……綺麗な色。優しい人だね」

その後ろに居た子供達まで騒ぎだし、ロビーは途端に喧騒に包まれていく。まあ、田原ならこいつらを上手く守りながらやってくれるだろう。

これで、ようやく俺も子守りから解放……いや、仕事の分担ができるというものだ。

(さて、マダムを迎える準備を進めなくてはな……)

こうして、魔王の下に“常軌を逸した”戦力が続々と集まりつつあった。

世界から見れば、こんなものは脅威以外の何物でもない。

望む望まないに関わらず、この集団がいずれ、世界を巻き込む騒動の中心となっていくのは、むしろ当然のことであったといえるだろう。



たはらいさみ
田原 勇

種族 人間

年齢 31

武器 —— 銃器多数

47丁の中から、任意で選択。

マニアックな古い銃から、スナイパーライフルなど、あらゆる銃器を使いこなす。

彼女ら(?)は田原を熱烈に好いており、敵には容赦の無い弾丸をぶち込む。

普段は異空間の中で漂っているが、戦闘時は宙に浮かび、全面展開する。

弾丸無限。

防具 —— ケブラーージャケット

全身のあちこちにホルスターなどが付いており、銃を取り出しやすくなっている。

接近戦に持ち込まれたときを考え、防刃に優れているのも特徴。耐久力無限。

所持品 —— 赤外線暗視ゴーグル

闇夜であろうと視界を確保する。

装備中、命中率に常に+20%してくれる優れもの。

所持品 —— ラッキーセブン

大帝国製の煙草。

気力を40回復させる効果がある。

銘柄に対してこだわりはなく、他の種類も所持しているようだ。

レベル 1

体力 5000 / 5000

気力 6000 / 6000

攻撃 50 (十可変)

防御 40 (+12)

俊敏 50

魔力 0

魔防 0

属性スキル

FIRST SKILL | 連射

SECOND SKILL | 弹幕

THIRD SKILL | 乱射

戦闘スキル

さきがけ 大破 必中 リベンジ カウンター 痛恨 深慮遠謀

生存スキル

情報操作 回復 スリ 神速 学習 医学

特殊能力

天才

| ? |

| ? |

変化していく村

— 数日後 ラビの村 「銭湯」

「ああく心がウサウサく」

「肌がピヨンピヨンく」

バニー達が朝の畑仕事を終え、銭湯の湯に浸かっていた。

先日まで畑に撒く水にすら困っていたことを考えると、とんでもない変化である。何せ、ボタンを押せば水やお湯が幾らでも出るのだ。

椅子が多数並べられた前には、目を剥くような綺麗な鏡が一枚一枚設置されており、その上部にある不思議な物（シャワー）からは細かく分けられたお湯が勢い良く噴出され、それを頭に浴びる心地良さはこの世のものとは思えない。

その上、貴族くらいしか使えないはずの石鹸までが山のように置かれており、当然のようにシャンプーやリンスまで設置されていた。

石鹸はまだしも、シャンプーやリンスの意味がよく分かっていないバニー達は、それ

らには手を付けていなかったが、いずれは使うようになっていくだろう。

「ウササー！　水風呂で消毒だあー！」

複数の子供達が水風呂で元気良く遊んでいたが、これもまた、銭湯でよく見る光景である。

銭湯の方はバニーに無料開放しているうえ、二十四時間いつでも入れるとあって、朝と夜に入る者が多い。

ちなみに、床や椅子などの掃除は必要だが、湯や水は自動で循環し、常に清潔さが保たれる仕様となっている。銭湯はまだ清掃範囲が少ないといえるが、温泉旅館の方はそうはいかない。

今日も、田原がバニー達へ清掃の仕方を熱心に指導していた。

「いいか？　温泉の区画はこのブラシやタワシで磨くんだ。洗剤も惜しむなよ？」

田原が自ら手本を見せつつ、床や壁を磨いていく。

タイルの部分もあれば、鄙びた石を敷き詰めている箇所もある。其々に洗い方や、使

うブラシも違う。まして、温泉は素足で歩かし、垢も溜まりやすい。

田原が各区画の清掃を指導しつつ、バニー達もそれに対し素直に従っていた。

これほどにとんでもない施設を作り、毎日のようにパンや野菜まで届けられるようになったのだ。何とかこの恩を返そうと、バニー達は至って真面目な姿勢で仕事へと取り組んでいた。

清掃の指導が一段落し、田原が休む間もなくロビーへと足を運ぶ。

そこにはバニースーツを着たキヨンとモモが居た。

「温泉旅館にバニースーツかあ……最初はどうかと思ったが、意外とイケるもんだな。何せ、本物の兎人間だしよ」

「こ、この服……恥ずかしいんですけどー……ピョン」

「あんたら変態ウサ」

二人が胸を隠しながら、田原へ恨みの籠った視線をぶつけたが彼の表情はまるで変わらない。

彼にとって、妹以外の女は“女ではない”からだ。

「こんなもん慣れだ、慣れ。何ならケツでも振ってサービスしてやれ」

「絶対にイヤピョン！」

「ウザッ！……じゃなくて、ウサッ！」

「んなことより、客を迎える姿勢の復習だ。おじぎはしつかり深く、三秒は頭を下げとけ。笑顔とハキハキした声も忘れんなよ」

田原が懸命に仕事をこなしていたが、肝心の魔王は――

何故か、病院の診察室で上半身を裸にされ、悠から検査を受けていた。

魔王が椅子に座り、鋼で出来たような背を悠へ向けている。その「鋼」へ、悠が聴診器を当て、うっとりした表情を浮かべていた。

「私は、健康そのものだと思うのだが……」

「いえ、万が一のことを考え、定期的に検査は行うべきです。長官に何かあれば大変なことになりますから」

「まあ、そうだな……」

背を向けている魔王には、悠がどんな表情を浮かべているのかは分からない。

言葉だけ聞いていると、至極もつともなことを言っているのだから尚更だ。悠が聴診器を外し、その白磁のような指で直接、背を触っていく。

悠の呼吸が段々荒くなり、その顔には赤みが差していったが、それを受けている魔王の顔は段々青くなっていく。

赤と青のコントラストである。

「も、もう大丈夫じゃないか……？ 体調が悪くなったときに、また頼むでしょう」

「いけません、長官。まだ検査は終わっていません」

悠の手が背中から前へと回り、その胸を背に押し付けながら胸板へ指を這わせる。最早、検査でも診察でもない、別の何かへと変わりつつあった。

「とても、厚い胸板です……固くて、雄々しくて……」

「そ、そろそろ、私は次の仕事があるのでな——また次の機会に頼む」

「あぁん、長官……」

悠が恨みがましい目を向けたが、魔王は服を掴んで立ち上がり、慌しく診察室を出ていく。

その額には脂汗が浮かんでいたが、爆ぜろというべきなのか、同情すべきなのか、よく分からない光景であった。



——西の大鉱山地帯 ドナ・ドナの館

「カキフライの女狐がつっ！ ワシの顔に泥を塗りおつて！」

ドナ・ドナが豪勢な朝食を口へ運びつつ、テーブルを荒々しく叩く。

先日行われた競売でドナ・ドナは《オルゴール》なる摩訶不思議な魔道具をマダム・カキフライに搔つ攫われたのだ。

あのときの悔しさを思い出すたび、ドナ・ドナの怒りが高まっていく。

「あのような品は、私のような本物の貴族こそが持つに相応しいのだ！ それをあの脂

肪の塊めが……何が国一番の収集家か！」

ドナ・ドナが醜い肉を揺らしながら叫ぶ。

彼のように大勢の貴族を従えるような存在にとつて、珍しい品を手元に置くことは外せない要素なのだ。

時には、それらが金銭よりも遙かに求心力を發揮することもあるのだから。

故に、少しでも力のある貴族は美術品や芸術品を掻き集め、それらを誇示する。当然、そこには珍しい武具すら含まれるのだ。

「大金貨四十二枚だと……ふ、ふ、ふぎけおつてええええッ！」

遂に怒りが堪えきれなくなったのか、ドナが両手をテーブルへ叩き付ける。衝撃で料理を載せた皿が何枚も床へ落ちたが、彼は視線もくれない。

近年の競売では以前のような値を告げ、張り合っていく形式が改められたのだ。本人達が予想している以上に落札額が大きくなってしまいうケースが多く、互いに理性の範囲内で収めようと暗黙の了解の下、ルールの改定が行われた。

それは、品を見て——其々が値を書いた紙を投票箱に入れるというもの。

これならば、自分が想定している以上の金銭を支払うことはない。以前の形式では熱くなつて落札したはいいものの、落ち着いてみれば恐ろしい金額になっていることに気が付き、後になってキャンセル騒ぎなどが度々起きていたのだ。

この新しい形式で競売を行えば、そんなトラブルも発生しない——
当初はそう思われていた。

だが、この形式はこの形式で、激しい“心理戦”が起きるのだ。何せ——後にも先にも、一度しかチャンスが無い。どうしても欲しければ、思い切つた値を付ける必要がある。

だが、周囲はそれほど値を付けているのかどうかは分からない。周りは大した金額を付けていないのに、自分だけが馬鹿のような値を付けて大損するケースとて考えられるだろう。

「旦那様の出された金額は、問題無かつたと思われます——」

ドナの後ろで、姿勢を正しながら立っていた男が見かねて声をかける。

ドナが北で雇つた“アズール”という男だ。

その界限では、腕利きの暗殺者として知られている。その容貌は男とは思えぬほどに

非常に整っており、その肌まで陶器のように白い。

ドナは彼のことを暗殺者として雇ったが、中々に知恵も回り、見た目も良いことから普段は執事のようにして使っている。

「旦那様の、大金貨四十枚を超えてくるなど……」

ドナは当初、オルゴールに大金貨三十八枚という途方もない金額をつけた。十分すぎる数字であり、他者を蟻のように潰せる金額であろう。

だが、カキフライの存在を考え、ドナは用心深く更に二枚の上乗せを行い、四十枚という鉄壁の数字を弾き出したのだ。

文化や価値の違いを度外視すれば、それは日本円にして八千万に相当する。

だが、勝者として名を呼ばれたのはカキフライであった――

競売の場に詰め掛けていた大勢の貴族達は、高々と告げられた大金貨四十二枚という金額に驚愕し、遂にはカキフライの豪胆さに万雷の拍手が起きた。

「大金貨四十二枚とは……マダムはいつも我々を驚愕させてくれるわ！」
「かの婦人があれ程の値を付けるとは……何とも幸福な魔道具であるな」
「マダムこそ、貴族の中の貴族よ！」
「マダム・カキフライの勝利に乾杯ッ！」

あの拍手、あの畏敬、一瞬で場を飲み込んだ尊敬の嵐——
あれが、あれこそが、貴族としての“力”となるのである。ドナ・ドナからすれば、衆人環視の中で完全に面子を潰された格好だ。

あのような場で、“読み合い”に負けるなど貴族として致命的であろう。

「クソ……クソツツ！ アズール！ どうか奪えんのかツツツ！」

「かの品は、既にカキフライ様の所有物であると知れ渡っております。奪うことはできません。下策であるかと」

「ならばどうせよと言うんじゃ！ ワシに泣き寝入りをせいとほざくかつ！」

「いつそ、オルゴールなる品を持ち込んだ人物に話を付けては？」

アズールとしては、主が妙な暴走を起こさぬよう、さりげなく誘導したつもりである。忠誠心などは欠片も無いだろうが、主が没落しては自分の食い扶持も無くなるのだから当然の行動であつた。

「フン、それができれば苦勞はせん……その男、いつの間にか『三番目』の後見人のような立場に収まつておるらしい」

「それ、は……」

アズールも当然、その男の噂は聞いていたが、まさかオルゴールを持ち込んだ人物であるとは想像もしていなかつたのだ。彼が街で聞いた噂では「魔王」などと呼ばれる恐ろしい男であり、あの不思議な音色を奏でる品を持ち込むような「優しげ」なイメージとは程遠いものであつた。

「『我が妻』であるホワイトからも、あの男との接触は厳に禁ずる、とまで言われての。アーツの愚か者はただ頷いておつたが」

「……左様ですか」

ぬけぬけと我が妻、などと勝手に言っている姿にアズールが一瞬、顔を顰める。

彼はこの国の出身ではないが、少なくともあの高潔な女性がこんな男の妻になるなど、想像もしたくないと思ったのだ。

「まあ、よい……いずれ、その男が持っている品を根こそぎ奪ってくれるわ。そのとき、あのカキフライがどのような顔に歪めるか楽しみじゃわい」

「はい——」

取りあえず、暴走だけは避けられたことにアズールは安堵しつつ、その魔王と呼ばれる人物への警戒を強める。

その姿は、語る者によって千変万化に変わるではないかと。

ある者は大富豪といい、ある者は魔王といい、ある者は海の向こうからやってきた貴人であるなどと言う。

（主の様子を見ている限り、いずれは敵対することになるのでしょうか——）

ドナの屋敷ではそんなやり取りが行われていたが、ラビの村ではそれどころではな

かった。

マダム・エビフライの来訪が近付いていたのである。

其々の夜

「柵を変えねえとな。向こうの区画も広げてつと……」

夜、村の中を田原がメモ帳片手に歩き回っている。

殆ど明かりらしい明かりなどないのだが、この男は超一流のスナイパーでもあるので、異常なまでに夜目が利くのだ。

殆ど昼間と変わらない仕草でメモに何事かを書き記していく。

「いっそ、こっちの山は『削つち』まうか？」

たまにとんでもないことを口にしていたが、彼ならやつてのけるだろう。

田原の能力は、全方位への攻撃に向いているのだが、それが一箇所に向けられれば、戦車どころか山すら破壊してしまうに違いない。

随分と仕事熱心ね——

田原が振り向くと、そこには妖しい笑みを浮かべた悠が居た。

月夜に照らされた彼女の姿は、非常に美しくはある。だが、GAMEのプレイヤーがこんな暗闇の中、彼女と出遭ったら飛び上がるだろう。

せめて、明るい場所で死なせてくれ、と――

「ま、長官殿にあんだけ期待されちゃあなあ……」

田原がぶすつとした表情で、何処か納得がいかない様子で返す。

そう、彼は無気力で怠惰でだらけているのが大好きな男なのだ。まかり間違っても、自分から能動的に動いたり、働いたりするような男ではない。

「おめえの方こそ、随分と大人しいじゃねえか？　いつものお前サンなら、この辺りの人口”が減つててもおかしかねえんだが」

「酷い言い方ね。私は常に、長官の意を汲んで行動してきたつもりだけど？」

そう、それだ――と、田原は思う。

これまで、その「意」とやらに一番近いのは悠であった。彼女は「静」とは違い、狂いながらも非常に頭の切れる女なのだ。無意味な殺しや、簡単に足が付くような犯行、出遭った者を片っ端から殺したりなどの短絡的なことはしない。

深く、静かに潜行し――

気が付けば、地上にはもう「取り返しつかない地獄絵図」ができていた、というパターンだ。

表に出てきたときには、既に「手遅れ」になっているという非常に厄介なタイプの大量殺人鬼といつていい。

「で、長官殿はいつたい、何を考えてンだよ？ おめえさんのことだ、幾つか答えられないもんを持ってんだろ？」

あらゆる前準備を惜しまず、時には大枚を叩き、あらん限りの悪謀を張り巡らせ、遂には己にとつての「目的」を必ず成就させる。

その身が、どれだけの血と嘆きと悪名に塗れようとも。

そういつたカテゴリーでは、九内と悠は非常に似ていると田原は見ているのだ。

また、それに対して田原は別に悪意を抱くこともなければ、嫌悪感もない。それでも

しなければ、あの世界では生きていけなかったのだから。

相手を嵌めなければ、時には殺さなければ、自分が破滅していたことだろう。

田原もそういった“人生”を歩んできた。

「正直、私も全ては掴みかねているの——」

「へえ……こいつあ、アテが外れたな」

田原が煙草に火を点けながら、さり気なく悠の表情を窺う。

嘘は言っていない——田原はそう判断した。

根拠らしいものは別がないが、田原には一種の独特の勘があり、彼は自分の“それを強く信じている。

「長官殿は、大帝國とは別の道を往く——とか言ってたけどなあ」

「そうね、それは“退屈”だとも仰られていたわ」

「悠、おめえさんはそれで良いのかよ？」

田原は思う——それこそ、悠にとっては“退屈”になるのではないかと。

これまでの悠なら『実験動物』に溢れた世界など、存分に蹂躪しながら平伏させていくような道こそが望みに近いのではないか。

「——私はね、田原。『世界の断層』に触れたの」

「まあた、妙なことを言いやがる……」

田原が乱暴に髪を掻きながら煙を吐き出す。

悠はたまに理解し難い、突拍子もないことを口にするのだ。紙一重な科学者などにおりがちな、妙な言い回しやら哲学やらだ。

「それに、私は長官の中に『神の存在』を感じるの——」

「だあつはつはつ！ んだ、そりゃあ……またアレか。人体の神秘だの、進化だの、おめえさんの口癖の親戚みてえなもんか？」

「いいえ、違うわ。時間とともにその想いは濃くなってる」

——貴方も、薄々感じてるんじゃないの？

悠はそれだけ言い残すと、音もなく病院の方へと去っていく。

数歩先ですら臆気な、墨を流しこんだかのような暗闇の中、白衣が揺れていた。

田原はぼーっとそれを見ていたが、やがて吸っていた煙草を携帯灰皿に揉み消し、また村の中へと歩みを進める。

《長官の中に“神の存在”を感じるの——》

妙に頭へと残る、その言葉を考えながら。

一方、魔王なのに神呼ばわりされていた男は——



「まあ、流石にTVは付かんよなあ……」

温泉旅館の最高級の部屋に堂々と陣取り、羽毛布団に寝転びながらリモコンを弄っていた。

その姿だけ見れば、出張先で寛いでいるサラリーマンのようである。

間違っても神などと言われるような姿ではない。

「部屋の中の饅頭もないし……やっぱり食い物関係はダメってことか」

本来の設定であるなら、食堂の中は元より、部屋の中にも様々な和菓子などが置かれているはずなのだが、何処にも見当たらなかったのだ。

拠点の中にあつた「乾パン」は例外だったのだろう。

「ただ、消耗品は勝手に補充されてたしな。悪いことばかりでもないか」

あれから魔王は様々な実験を行い、石鹼やシャンプーなどが湯と同じように補充され、循環するようになっていたことを確かめた。

これなら消耗を気にせずに運営していけることだろう。使う度にいちいち作り出すようなことになれば、SPが幾らあつても足りなかったに違いない。

「魔王様つ、温泉って本当に凄いですね！ 湯と湯気が、水がつ」

「落ち着け、アク」

襖がガラつと音を立てて開き、黄色い浴衣を着たアクが布団の中へと勢い良く滑り込んできた。

当たり前のように一緒に寝るつもりらしい。

「今日はハーブ風呂というのに入ったんですっ！」

「ん……確かに、ハーブの良い香りがするな」

「本当ですか？ えへへ」

「また一緒に寝るのか……」

魔王はそう溢しながらも、追い出すようなことはしない。

何だかんだ言って、アクには甘いのだ。

魔王がりモコンで電気を消し、就寝しようとしたとき、荒々しい足音が廊下から聞こえてきた。

「アクっ！ 今日私の抱き枕になりなさいって言ったでしょ！」

ルナも自分のカラーであるピンク色の浴衣を着ていた。恐らく、悠が着せたのだろう。

「あくなら私の隣で寝てるぞ」

「へ、へへ変態っ！ あくに何をするつもりよっ！」

「何を想像してるのか知らんが、お前は頭の中までピンク色だな」

温泉に入った所為か、元々寝付きの良いあくは既に寝息を立てていた。それを見たルナも、流石に沈黙する。

「しよ、しようがないわね……なら、私も今日はここで寝てあげる」

「いや、お前は自分の部屋に帰れよ」

「うるさいわね……私はこの村の領主なんだからっ」

そう言いながら、ルナがあくとは反対側に回って布団の中に入り込む。幼女とペたん娘のサンドイッチであった。

だが、魔王の顔には「迷惑」という感情しか浮かんでいない。

「普通に大迷惑なんだが……」

遂には口に出していた。

ルナにはルナで、遠慮のない態度である。

「私は領主なの……ここで一番偉いんだからね……」

最高級の羽毛布団、その心地良さにルナが思わずうつとりと目を閉じる。

いかに聖女と言えど、これほどに柔らかいベッド(?)は経験したことがないだろう。

これもまた、大帝国が作り出した最高品質のものである。

寝心地の良さと、柔らかさを何処までも追求した変態品質とっていい。

「何なの、この柔らかいの……信じ、られない……」

ルナが柔らかさを楽しむように何度か寝返りをうち、そのお尻が魔王の左手に軽く触れる。途端、ルナが悲鳴を上げた。

「あ、あんた！ 今、私のお尻を触ったでしょ！」

「お前はどんだけ冤罪をバラ撒くんのだ」

「いい、言い訳したって無駄よ……！ この悪い手は預らせてもらおうわ！」
「おいおい……」

ルナが魔王の左手を掴み、それを枕にする。

始めからそうして欲しかったのか、何なのか――

「な、中々の固さじゃない……け、血管もピ、ピクピク動いてる……」
「揃いも揃って、妙な言い方ばっかすんなっ！」

寝室では妙な言い合いが続いていたが、それから数日後。

遂に社交界の重鎮である、マダム・エビフライが村へと訪れた。

マダムのお訪

ラビの村の入り口に、豪華な馬車がお止まる。

その馬車にはバタフライ家の紋章と旗が掲げられており、それは本来、こんな寒村に止まるようなことはありえなかった。

従者が次々と降り、馬車のドアを恭しく開く。

馬車の中から重そうな体を揺らし、降りてきたのはエビフライ・バタフライ、その人であった。

社交界の重鎮であり、貴族の奥様方から熱狂的な支持を受け、それらを一手に纏め上げている女帝である。

彼女が白と言えばどんなものでも白になり、その逆も然りであった。

あのドナ・ドナですら、一枚岩となつて纏まっているマダムの集団に対しては手の付けようがなく、無視できないほどの大勢力となっている。

現在の聖光国内の勢力図は、非常に細かく分裂しているといつていい。

一国の在り方として、三人の聖女を中心とした形は変わらない。

その下に聖堂教会と聖堂騎士団が存在するが、教会は聖女を輩出する機関であると同時に、魔法の才を持つ者を一箇所に集めて教育する「学校」の役割も果たしており、政治的な集団ではない。

そして、《ドナ・ドナ》が率いる一派。

領地から『水』に適した魔石が採れることもあり、その資金力はダントツだ。

聖堂騎士団の一部にも金をばら撒き、更に勢力を拡大しつつある。

次に《マーシャル・アーツ》が率いる一派。

国境近くの武断派と呼ばれる貴族を纏めており、資金力には乏しいが、戦場で背を預けあつてきた独特の絆で結ばれている。聖堂騎士団の中にも彼らへのシンパは多く、武力では随一といつていい。

少数ではあるが、決して無視できないのが《カキフライ・バタフライ》を中心とする芸術家肌の集団である。貴族であるなら、誰もが欲する名品を多数所持しており、自身が芸術家である者も多く、尊敬と畏敬を一身に集めている一派だ。

貴族の中の貴族、などと呼ばれることもあり、これらと表立って喧嘩をするような愚か者は少ない。自分が野蛮人であると宣伝するようなものだからだ。

最後に、《エビフライ・バタフライ》の一派である。

貴族の奥方は揃いも揃って非常に自尊心が強く、また権力も強い。入り婿の旦那など、一顧だにされないことも多いほどだ。

尻に敷かれている、などというレベルではなく、本当に頭が上がらないのだ。実際、奥方に嫌われれば家を放り出されるような立場の者も多い。

この下には多くの一般階級の者がおり、そして貧民が居る。

更に地下へと潜ると、サタニストが蠢いているという形であった。一見すれば、一つの信仰を元に一枚岩となっている国に思えるが、その内情は激しく分裂しているといつていいだろう。

「ようこそいらつしやいました、マダム——」

タキシードを着た魔王と田原が胸に手をあて、優雅に礼をする。

二人とも中々の役者であつた。マダムも二人を見て、笑顔を浮かべる。人を見る眼が非常に厳しく、その豪快な見た目とは裏腹に、細かい所にまでうるさいマダムであつたが、二人の姿は満点であつた。

(相変わらず、いい男ね……)

マダムから見た「魔王」は非常に色気のある男だ。

それも、一流の悪党だけが持つ——独特の「危うい色香」を漂わせている。それが分かる女からすれば、堪らない男であつた。

近付けば、どんな危険があるか分からない——そのスリルは言葉では形容し難いものである。

魔王の横に居る男——田原もマダムから見れば非常に「危ない男」だ。

恭しく振舞っているものの、その怜悯な眼光はマダムの心胆の奥底を暴き立て、臍腑の一つ一つまでを見通しているようであつた。相手がどんな存在であれ躊躇わずに殺し、何事も無かつたようにその場を立ち去る。マダムの脳裏には、そんな光景すらありありと浮かぶのだ。

「とても感じの良い村ね……聞いていた噂とは大違い」

マダムが周囲を見渡し、小さく驚きの声をあげる。

村を覆う柵は全て新品に変えられており、畑や家屋も景観を崩さぬよう、上手く配置変えがされていた。寂れた村ではなく、「鄙びた村」といったところであろう。

神都の騒がしい街並みに慣れたマダムにとっては、妙に新鮮であった。

「いえいえ、まだ手を付け始めたばかりです。後、一月もすれば少しはマシな形になるでしょう。この地はご婦人方にとつての“天国”となりますよ」

「そうね——貴方はこれまで腐るほど見てきた、口だけの男じやあない。貴方の口から出る言葉と、出す品には“実”があるわ」

その言葉を聞き、「石鹼が効いたな」と魔王は思う。

実際、驚くほどに汚れが落ちるし、サツパリするのだ。特にこの国は砂埃が多いため、一日外に居るだけで砂まみれになってしまうことも多い。

「光栄ですな——ですが、これから御覧にいれる施設は、より多くの驚きと、マダムの人生に『幸福』を齎すことを保証しますよ」

「あらあら、とても楽しみね——」

二人の笑顔とは裏腹に、何処か緊張感が漂う雰囲気であったが、馬車からもう一人、老いた男性がフラつきながら姿を現した。

「ほう、ここがマダムの言っておった村かの」

「ちよつと爺さん、呼ぶまで待ちなさいと言ったでしょー!」

「ふあふあ! 老人はせつかちでのお……」

それは、腰に立派な剣を佩いた老貴族であった。

だが、その目には青い布が巻かれており、異様な雰囲気を漂わせている。魔王は老人の佇まいを見て、少し『警戒』するような素振りを見せた。

「マダム、そちらの御仁は——?」

「急なことで申し訳ないわね……この爺はコマンド・サンボっていう死に損ないなんだ

れど、見ての通り目が悪いのよ。古い先短い爺だから、せめて最後までいいはいい思いをさせてやろうと思つて連れてきたの」

「相変わらず、マダムは口が悪いのお……少しは老人を敬わんかい！」

「お黙り、爺！」

仲が良いのか、悪いのか——マダムが軽い口調でサンボを紹介する。

マーシャル・アーツという武断派を纏めている貴族の元腹心であり、勇猛な人物であつたらしい。数年前、領内に出没した魔獣と戦つた際に負傷を負い、視力の殆どを失つたとのことであつた。

その話を聞いて、魔王と田原が痛ましそうな表情を浮かべる。二人の視線が一瞬だけ絡み合い——無言でイレギュラーへ対応すべく行動を開始した。

「それは、大変な思いをされたようで。しかし、私の部下には非常に腕の良い医者がおりましたな。そちらの御仁の負傷ですが——『問題なく治癒』することが可能でしょう」

「お、おい……今の声！ それはまことか!？」

サンボが両手を伸ばしながら、声のした方に詰め寄る。

その手を田原がそつと掴み、恭しく声をかけた。

「お客様——良ければ、まずはそちらへとご案内致しますが」

「お、おう……頼む！ 頼む！ たとえ少しでも可能性があるならワシは！」

「全く、困った爺ねえ……申し訳ないわね、何だか手間を増やしちやつて」

「何の問題もありませんよ。では、田原——案内を頼む」

魔王が笑みを浮かべ、田原がマダム一行を野戦病院へと誘導していく。

その背を見ながら、魔王は何事かを通信で飛ばした。



「これ、は……」

「——どうぞ、中へ」

マダムが病院を見て目を剥いていたが、田原が恭しくエスコートをしながら中へと進んでいく。

建物の中に入り、最初にマダムが感じたのは絶妙といえる「涼しさ」である。聖光国は暑い国であり、マダムは氷の魔石や風の魔石を使って涼を取れる身分ではあるが、魔石の影響が及ぶ範囲は狭いのだ。

冷房のように建物全体を冷やそうなどとすると、それだけで大変な費えである。

マダムはその体型もあつて非常に暑がりであり、汗の対策だけでどれだけ悩んできたことか分からない。だが、この建物の中に居ると一瞬で汗が引いていくのだ。

「随分と、涼しいのね……どれだけの魔石が使われているのかしら」

「我が主・九内は——様々な工夫をされる御方でして」

マダムが田原の背に声をかけるも、その返答は煙に巻くようなものであった。

本来なら不快になるであろう返答だが、マダムはそうは思わない。むしろ、あの男のミステリアスさが増すようではないか。

マダムのような立場の者にとって「分からない」ということなど、もはやこの世に殆ど存在しないのだから。

(「こんな建物、見たことも聞いたこともないわね……」)

マダムは時に、叫び出しそうになるのを堪えながら歩いていた。

この世の珍しい物、富貴、芸術、華やかな社交——あらゆるものを経験してきたマダムではあるが、こんな「近代的な建物」の中を歩くなど初めての経験である。

「こちらが診察室でございます。どうぞ——」

田原が普段の姿からは想像も付かないような恭しさでドアを開き、二人をエスコートする。

「ようこそ、マダム。そして、サンボ様——」

中では悠がにこやかな笑顔を浮かべ、二人を迎え入れた。

その部屋にあるのは様々な器具や薬品、簡易なベッド。血圧を測るものもあれば、体重計もあり、人体模型などもある。

(まるで、違う世界にでも迷い込んだようね……)

マダムは素直なまでの気持ちでそう思った。

ここまで来ると、いつそ笑えてくるような心境になったのであろう。サンボの背中を強く叩き、椅子へと座らせた。

「ほら爺さん、さっさと診てもらいなさいな！」

「何というおなごか……男が逃げ出すわけじゃわい！」

「やかましい、この耄碌爺！」

二人のやり取りを微笑みながら見ていた悠であったが、その手がゆるりと伸び、目に巻かれていた布を取った。

そこにあるのは白く濁った眼球と、赤く爛れたような痕。

「すまんの、御嬢さん……不気味なものを見せて。赤斑カガシの蛇シの毒液を喰らつてしもうての」

「なるほど」

「今では精々、人の輪郭がぼんやり見える程度じゃよ……少しでもマシになるのならあ

りがたいんじゃないが」

「ご安心ください。わたくしどもの国では、この症状への『薬液』が既に完成しております」

悠が患者を安心させるような、力強い声で応える。

サンボはその声に半信半疑ながらも、嬉しそうな声を上げた。これまでどんな医者に見せようと、匙を投げられたのだ。

魔法も赤斑の蛇が出すような強力な毒液に対する治療は難しく、まして、眼球のような複雑極まる器官の修復などは不可能であった。

「では、こちらへ——」

悠がサンボを簡易ベッドに寝かせ、薬品棚から小さな薬を取り出す。

目に爽快な気分を齎す——只の目薬であった。

悠はその蓋を開けながら、先程伝えられた内容を思い出す。

《上手く薬を使ったようにして治すんだ。『神の手』を見せるのは少々、マダムには刺

激的すぎるだろうからな》

悠が目薬を挿した瞬間、サンボが奇妙な声をあげる。

それもそうだろう。

疲れた目に染み込むような爽快感があり、こんな効果のある薬など、この世界には存在しないのだから。

悠の親指が瞼へと当てられ、薬を揉み込むように優しく動く。瞬間、その親指がメスへと変わり——深々と眼球へと捻じ込まれた。

サンボが一瞬、呻き声を上げたが、その指が離れたとき、彼の視界に劇的な変化が訪れた。

「お……お……!!? おお……!!?」

サンボが左右を見渡し、天井を見上げ、また左右に首を振る。

捻じ曲がり、歪み、失われていた視界が戻ったのだ。

「み、見える……見えるぞ！　ワシの、ワシの目が戻ったんじゃああああ！」

「爺さん、あんた……本当なの!？」

「おお、マダム……また随分と太ったではないか！ 何を食えばそんな体になるんじゃないあ!？」

「やかましいわツ、死に損ないが！」

マダムが躊躇無くサンボの頭を全力で叩き、その体がベッドから転がり落ちる。だが、床に転がったサンボは笑ったままであった。

腹を抱えて笑い、息をするのも苦しそうに転がる。暫くすると、その笑い声は泣き声へと変わっていった。

「ワシの、ワシの目が、見える。見える、んじゃあ……」

その姿を見て、マダムも何とも言えぬ表情となった。

サンボとマダムは腐れ縁ともいえる長年の付き合いがあったが、彼が泣いている姿を見たことなど、初めてであったからだ。

やがてサンボが涙を拭き、姿勢を正して腰の剣を外す。

「御嬢さん、あんたは恩人じゃ……この剣を受け取ってくれい」

サンボが差し出した剣には余計な装飾などは無く、実用一点張りのものである。長年、彼と共に戦場に在った魂といつていい。

だが、それを見たマダムは呆れたような大声をあげた。

「お馬鹿ッ！ 年頃の綺麗な御嬢さんが、そんなもんを貰って喜ぶはずがないでしょうがッ！ あんた、それでも貴族の端くれなの!？」

「そんなもんとは何じやいッツ！ この剣はサンボ家に代々伝わる家宝で——」
「お黙り！ そのこの貴方、この爺を馬車に放り込んできて頂戴！」

その声に田原が一瞬、迷う。

「……さつさとアーツのところに戻ってやりなさいな。あの爺も喜ぶでしょうよ」
「そ、そうじゃ！ アーツ殿……今、サンボが戻りますぞおお！」

サンボが突然、外へと走り出し、その背を田原が追う。

二人が去った後、診察室にはマダムの長い溜息だけが残った。

「ごめんなさいね、騒がしくして——謝礼は私が代わりに払っておくわ」
「これは……宜しいのですか？」

マダムが懐から出したもの。

それは小さな箱であり——中には一枚のラムダ聖貨が鎮座していた。相場にもよるが、最低でも軽く大金貨百枚はする代物である。

聖貨を初めて見た悠であつても、神秘的な何かを感じるような逸品であつた。

治療代としては、あまりに破格と云つていいだろう。

「いいのよ、貴女のお陰で厄介な頑固者二人に大きな恩を売れたんだもの。それはね、このラムダ聖貨なんかより、何十倍も価値があることなのよ」

マダムが妖しく嗤う。

実際、彼女からすればどれだけ大金を払つても惜しくない、と判断したからこそ出したのだろう。金額以上の、何らかの利益があるに違いない。

「では、遠慮なく——マダムとは、とても良い関係が築けそうな気がします」
「あら、奇遇ね。私もよ」

二人が微笑を浮かべ、互いに見つめあう。

何処か似ている部分がある、非常に怖い女達であった。



情報の一部が公開されました。

マダム（エビフライ・バターフライ）

種族 人間

年齢 不明

中央の社交界を牛耳る女帝。

貴族の奥様方から圧倒的な支持を受けており、巨大な派閥を形成している。

聖光国では、彼女の一言で流行が左右されると言っても過言ではない。

領内には「土」に適した魔石を産出する鉱山を多数所持しており、その富は汲めども尽きぬ領域にある。

マダム、温泉旅館へ

(これもまた、見たことがない建物ね……)

サンボが慌しく村を去り、マダムは男性パニーの案内の下、温泉旅館の前に立っていた。何とも言えぬ不思議な建物である。

見たこともない木のような植物が周囲へびつしりと植えられ、これまで感じたことのない、何処か静謐な雰囲気漂っている空間であったのだ。

(察するに、*“和み”*と*“癒し”*といったところかしら……)

マダムは妹と違い、芸術や美術にはそれほどの興味はない。だが、妹と同じく、その審美眼は非常に優れている。

温泉旅館を見て、すぐに本質を見抜いてしまったほどだ。ただ、彼女の興味は自らの*“美”*や*“健康”*などに向けられており、姉妹でありながらも、目指すところはまるで違っていた。

(何だか、眺めているだけでも風情があつて良いわね……)

慌しい喧騒から離れ。

鄙びた村で。

不思議な時間を過ごす。

耳をすませば。

風に乗つて、鈴のような音まで鳴っている。

(ふふつ、おかしいわね……何だか、子供の頃に戻つたみたい……)

何故だろうか——？

マダムはついぞ思い出すことも無かつた、自らの子供時代を思い出していた。まだ何も知らなかつた頃は、ほんの少し遠くへと足を伸ばし、知らない街並みの中を歩いているだけで「大冒険」であつたのだ。マダムだけではなく、誰もがそんな遠い日の記憶を持つているに違いない。

静かな鈴の音が響く中、マダムは遠い記憶の中へと入り込む。

子供の頃は妹とも仲が良く、二人で屋敷の中を探検したり、時にはこつそりと抜け出し、街の中へ出掛けては大目玉を食らったこともある。

畑に生えているスイカを勝手に割り、二人で食べたこともあった……。

「とても、良い音色ね……」

何故、この音を聞いていると遠い日の断片が浮かぶのか？

マダムには不思議で仕方がなかった。

「——私の国では『風鈴』と呼ばれているものですよ」

「ふう、りん……」

その声に応えるようにして、魔王が姿を現す。

そして、恭しく手を伸ばすと——マダムを旅館の中へと導いた。

「改めて、ようこそ——『私の世界へ』」

それは——魔性の言葉であつたに違いない。強力な魔法でも帯びているのか、その台詞はマダムの耳朶に長く残ることとなつた。



「いらつしやいませ、お客様！」

タキシードを着た見目麗しい男性バニーが両側に並ぶ中、二人がその中央を堂々と歩く。二人が建物の前に立つた瞬間、透明なガラスの扉が自動で開き、思わずマダムの体がビクリと動く。

周囲を見回すも、人は居ない。建物の中に目をやると、目に飛び込んできたのは目を剥くような扇情的な衣装を纏つた女性バニーであつた。

勿論、バニースーツを纏つたキヨンとモモである。田原が熱心に教育をした結果、「ま、短い時間なら大丈夫だろ」とGOサインが出たのだ。

見ているマダムの方が赤面してしまうような、“物凄い衣装”である。

(表の静謐な空間と、この違いはいつたい、何なのかしら……)

余りの落差に、マダムがつい考え込んでしまう。

マダムからすれば、この魔王が無駄にこんな衣装を着せた女性を用意するわけがないのだから。やがて、聡明な彼女は一つの結論を導き出す。

魔王が何度も口にしてきた「美」と「幸福」という単語を。

「この二人こそが『象徴』と『研鑽』である、ということね——？」

バニーは種族として元々、男性も女性も美形が多いのだ。

それが、こんな扇情的な服まで身に纏ってしまえば、その魅力は弥が上にも増すというものだろう。全身、その全てが女の武器であるといっている。

だからこそ、彼女は思う。

ここに通えば、この二人のように美しくなれる、という象徴であろうと。生きた見本と言いつてもいいかもしれない。そして、ここを訪れる女性はみな、彼女達を見ては奮起し、研鑽を忘れぬよう気を引き締めることだろう。

だからこそ、こんな衣装を着せてわざわざ入り口に配置しているのだ。

「ふむ——」

魔王はマダムの問いに、決して短くない沈黙を続けた。
やがて、諦めたかのように口を開く。

「困りましたな——貴女には、隠し事が何もできぬらしい」

魔王が両手を広げ、珍しく剽げた仕草をした。

それを見て、マダムも会心の笑みを浮かべる。ようやく、この男から一本取れた、と
いったところであろう。だが、建物に足を踏み入れたマダムを待っていたのは驚愕の嵐
である。

（なるほど、だから靴を脱げと言ったのね……）

まるで、鏡のように磨き抜かれた木の床である。

実際、マダムの姿が映っているのだ。

そして、何よりの驚きは——“紙でできたドア”であった。

「これ、は……貴方は途方も無いことを考えるのね……」

一体、どういう発想がこんな物を生み出したのか——？

触れるのが恐ろしくなる程の精巧な“絵”が描かれているのである。それは鶴であつたり、亀であつたり、時には華やかな蝶などであつた。

それらが艶やかな極彩色で描かれているのだ。

マダムからすれば、それはドアではなく、“一枚の絵画”なのである。それも非常に魅力のある、エキゾチックな香り漂う名画であつた。

「こんな名画を“ドア”にしちゃうなんて……本当に、貴方ときたら……」

「これは“襖”と言いまして——まあ、私の“好み”ですな」

「こゝ、好みつて……」

マダムが呆れたような声を上げる。

万金の価値があるろう名画を何故、ドアにするのか？マダムには分からない。

人の手が触れる以上、必ず汚れも付くであろうし、時には破れることすらあるかもしれない。そこまで考えたとき、マダムの頭に電流が走った。

「どれだけ泥に塗れようと、美しいものは美しい——そう言いたいよね？」

マダムからすれば、それは激しく同意できる話であったのだ。

美を求める女性の“過程”とは、どれも涙ぐましいほどの努力があり、世の男性が見れば、思わず一歩も二歩も後退りしてしまうような泥臭いものばかりである。

だが、その泥臭さがあつてこそ——はじめて女は輝くのだ。

それはある種、マダムの信念であるといつてもいい。

「言葉ではなく、こんなもので示すなんて……これは貴方の優しさ？ それとも、気付かない女への意地悪なの？」

「ふむ——」

魔王はその問いに、決して短くない沈黙を続けた。

やがて、諦めたかのように口を開く。

「今は『両方』である——そう言っておきましょうか」

「もうっ、本当に困ったお人ね」

マダムが嬉しそうに笑う。

この一見、豪胆にして摩訶不思議な力を持つ男にも、こんな繊細でさりげない一面もあるのか、と。マダムからすればある意味、女の『智』を試しているような姿でもあり、逆にこの男の奥ゆかしさも感じてしまう、不思議な感覚であった。

廊下を進んでいけば、所々に置かれている壺や皿、紐に掛けられた絵（掛軸）などが目に飛び込んでくる。マダムからすれば、どれも逸品ばかりだ。

「妹が見れば、きつと発狂しちゃうわね……こんな美空間……」

「ははっ、それは光栄ですな」

目を白黒させながらマダムが温泉の入り口へと迫り着くと、中からルナが慌しく出てきた。その顔は満面の笑顔である。

「もうっ、マダム！ 遅いじゃない！ ほら、早く早く！」

「あらあら、今日は随分とご機嫌なのね」

ルナは本来、巨大な影響力を持つマダムを苦手としていたのだが、今日は違う。何せ、この女帝ともいえる人物に“思いつきり自慢”しまくれるのだ。

「では、私はここで——ごゆるりとお楽しみください」

魔王のそんな言葉を皮切りに、ルナが嬉しそうにマダムの手を引き、温泉の中へと連れていく。二人が去った後、廊下には長い沈黙がおりた。

やがて、魔王が長い息を吐き出し、ポツリと呟く。

「適当に合わせてみたが……大丈夫だよな？」

魔王が煙草を啜え、一仕事終えたといった姿でロビーへと向かった。



「さあ、マダム。行くわよ！」

「ふふ、今日のルナちゃんは元気ねえ……」

服を脱ぎ、扉を開けると――

そこにはマダムが見たこともない光景が広がっていた。

まず、見渡す限りの広大な空間である。

そこには様々な形をした浴槽らしきものがあり、視界を覆うほどの白い湯気に満ちていたのだ。床には綺麗に形が整えられたタイルが一面に敷かれており、その精巧さときたら魔法で作られたとしか思えないほどだった。

遠くには平べったい石で作られた道のようなものもあり、驚くべきことに、その隙間には小さな白い石がびっしりと敷き詰められているのだ。

まさに、マダムからすれば見渡す限りの異空間である。

「これ、全てがお湯なのかしら……信じ難い空間ね……」

「ちゃんと水風呂もあるわよ？」

違う、そういうことが言いたいんじゃない、とマダムは思ったが、ひとまず黙る。

まずはルナに説明や案内をしてもらわなければ、分からないことがあまりにも多すぎたのだ。ルナが何かスイツチらしきものを押すと、勢い良く細分されたお湯が噴き出し、マダムを驚愕させた。

「な、何よつ、これ……どういふ魔石の使い方なの……!?」

「シャワーつていふの。さ、まずは体を洗いましょ」

「お背中を流しますピョン♪」

キヨンが石鹸とタオルを片手に、マダムの背を手際良く洗い流していく。マダムの巨体を考え、その背を流すために練習を重ねたのだ。

お陰でモモの背中も真つ赤になったが、その成果はきつちりと現れていた。

マダムとしても、自分の体が大きいがゆえに、背を洗わせることには慣れていたが、この石鹸は特別製である。GAME会場で一回投げたら終わる消耗品の石鹸と、温泉旅館に置かれている最高級の石鹸では「書かれている設定」が違うのだ。

「何だか、皮膚に溜まった汚れが根こそぎ落ちていくのを感じるわ……」

「でしよ〜？ 私もこれがないと、もう生きていけないもの」

ルナも熱心に自分の体や顔を磨く。

洗えば洗うほど、肌がピカピカになっていくのだから無理もない。

最後にキヨンが全身へシャワーをかけ、泡を勢いよく流す。マダムは何だか、皮膚を一枚丸ごと脱いで、新品になったような気分になってしまった。

次にモモがシャンプーとリンスを片手にマダムの後ろに立ち、髪を綺麗に洗いながら、頭皮のマッサージを行っていく。これもキヨン相手に練習を重ねた成果がきつちりと出ていた。

お陰でキヨンはウサミミの毛までサラサラになったほどだ。

モモの指が無言で動く。

田原から「お前はしゃべるな」と言われているのである。

頭皮を撫でるように、時には髪を労わるようにして指が踊る。

髪に纏わりついていた砂埃が、頭皮に溜まった汚れが、根こそぎ洗い落とされていく心地良さに、マダムは思わず呻き声をあげた。

「ああ……はあああ……」

この国の女性は太陽に晒され、肌や髪に結構なダメージを負っているのだ。

それが、少しずつ再生していくかのようであった。実際、シャンプーには汚れを落とすし、リンスにはダメージケアの効果がある。

最後にシャワーを浴び、頭皮ごとスツキリしたところで、マダムが恍惚とした表情で思わず洩らす。

「何だかもう、これだけで満足しちゃうわね……」

実際マダムからすれば、これだけで金貨を数枚払っても良いと思える気分であったが、それを聞いたルナは慌てたように大声を上げる。

「ちよつと、マダム！ 何を言ってるのよ！ 私の自慢はこれか……じゃなくて、まだ案内すら始まってないんだからねっ！」

「ルナちゃんは相変わらず“我侬”で“素直な子”ねえ……」

マダムが思わず苦笑したが、ある意味では新鮮でもあつたらう。

常に何枚もの仮面を被り、決して本音を見せず、言質を取らせず、虚飾の塊ともいえる社交の世界で生きてきたマダムからすれば、ルナのような存在は天然記念物とでもいえるものである。

「もう、マダム！ 早く行くわよ！」

「はいはい……」

マダム、吼える

「最初はこれよ、マダム。炭酸泉っていうんだって」

「何だか奇妙なお湯ね……」

マダムは小さな泡が次から次へと浮かび上がってくる湯を見て、微かに眉を顰めた。

だが、ルナは躊躇無く全身を浸からせ、心地良さそうな表情を浮かべている。とてもではないが、偽りの表情とは思えない。

遂にマダムが恐る恐る足を踏み入れ、思い切って全身を湯へ浸からせる。

温度としては決して熱くはない。どちらかと言えば温いぐらいであり、長時間入っていられるようなお湯であつた。

「マダム、動いちゃダメよ……泡が張り付いてくるから」

ルナがうつとりと目を閉じ、横のマダムへ声をかけた。

泡が張り付くとはどういう意味かとマダムは思ったが、その言葉の意味をすぐに悟

る。

本当に肌へ、泡が張り付いてきたのだ。

「これ、は……」

炭酸泉の代表的な効果は、血管の拡張と血流の改善である。

高血圧や糖尿病、血栓などの予防にも良く、それらの症状の緩和も期待できるものであった。

血流が良くなれば、冷え性や肩こり、腰痛や関節痛にも効果があるので、肉厚なマダムにとっては打ってつけとあっていい。

「いいわ……何だか体が『解放』されていくような感覚よ……」

自らの体に、美に、その半生を費やしてきたマダムだからこそ、それらの効果をすぐさま実感することができた。彼女が自らの体に費やしてきた金と時間は尋常なものはない。

最早、自分の体のことに関しては『神通力』があるといってもいいだろう。

そもその話として、彼女も好きで体が大きくなつたわけでも何でもない。家系の遺伝であり、今は亡き両親も、妹も、その全てが小山のような肉体を持つ一族であつただ。

彼女がまだ子供の頃は、その所為で周囲の貴族から嗤われ、蔑まれ、社交界では惨めな思いをすることも多かつた。それら幼少の頃の体験がマダムを美へと走らせ、妹を芸術へと走らせたのだ。

「あ、それとマダム……このお湯つて肌にも凄く良いのよ」

そう言いながら、ルナがぼしやぼしやと可愛い仕草で顔へ湯をかける。

ルナの発言は嘘ではない。炭酸泉は肌を優しく労わる化粧水としての効果もあり、肌荒れなどを防ぐ高い効果がある。それを聞き、マダムも慌てて顔へお湯をかけた。

「これは……荒れた、肌が……」

当然、すぐに効果が現れるわけもない。ごくごく僅かなものであろう。

だが、マダムには分かるのだ。

この湯が、自らの肌を改善させているということ。

「さ、マダム！ そろそろ次に行くわよ！」

「え、つ……ちよ、ちよつと待ちなさいよ、ルナちゃん……」

「早く早く！」

ルナが容赦なくマダムを引つ張り上げ、次の温泉へと連れていく。

実際、ルナはマダムに限定すれば案内役としての確であったかもしれない。放っておけば、マダムは何時間でも炭酸泉に浸かっていたことだろう。

また、マダムに対してここまで図々しく踏み込んでいけるのもルナしか居ない。

「次はハーブ風呂よ。良い香りがするんだからっ」

「ハーブ、ねえ……」

そこにはマダムの体でも悠々と入れるであろう、五つの湯があった。

色とりどりの、見た目からして可愛い湯もあれば、妙に“夜”を連想させるエロティックなものまである。

「私はやつぱり、これねっ！」

ルナが「ピンクゴールド」と書かれた湯に飛び込む。

その他にも「イエロービーム」「ナイトファイバー」「グリーンフォレスト」「ディープブルー」などと書かれたものがあり、マダムは自らが好んでよく着る碧色の湯へと入ることにした。

グリーンフォレスト——爽やかな朝の森をイメージした湯である。

ちなみに、このハーブ（？）風呂は三十六種類あるのだが、それらは日替わりで変更される。その決定は全くのランダムであるため、どの湯になっているかは誰にも予測できないのだ。

「これは『森』なのね……爽やかな香りがするわ」

心憎いことに、この風呂は横臥したままで浸かれる設計となっているのだ。

頭部の当たる場所には金属でできた枕のようなものが設置されており、その枕の中には冷水が循環しているため、のぼせ難いという特長もある。

下手をすれば、このまま寝てしまいかねないほどの心地良さである。

「この香りがね、肌に染み込んでいくの♪」

ルナが元気良く隣で声を上げている姿を見て、マダムの顔が思わず綻ぶ。

思えば、この小さな聖女様も随分変わった——と。

昔から無邪気ではあったが、何処か人を寄せ付けないような、誰に対しても牙を剥いて唸っているような、妙な危なっかしさがあったのだ。

「そう……『恋』を知ったのね。ルナちゃんも」

「は、はああああ!! な、何を言い出すのよ!」

「隠しても無駄よお? 好きなんですよ、あの『魔王様』のこと」

「ばばば馬鹿なことを言わないでよ! 何であんな奴をつ!」

その反応を見て、マダムが今度は苦笑を浮かべる。

恋愛初心者、などというレベルではなく、見ている方が恥ずかしくなってしまうような、実に分かりやすい態度であった。

「ルナちゃん、あの人は強敵よお……？　よっぽど女を磨かなきゃ、そこらの女じゃ見向きすらしてくれないでしょうね」

マダムが見るところ、あの魔王はどう考えても「普通の存在」ではない。

この施設もそうだが、あの恐ろしいサタニストの集団を一瞬で屈服させた挙句、噂では中級悪魔すら鼻歌交じりに爆殺したとも聞いているのだ。

人間以外の「ナニカ」である、と言われてもマダムは驚かないだろう。

また、そうであつたとしても、マダムとしては一向に構わない。

（あの魔王様は、私に何らかの大きな価値を見ている……）

でなければ、こつとも良い待遇はしないだろう。

なら、自分の価値を更に高めれば良い。利用しあう間柄など、マダムのような大貴族にとつては当たり前のことであり、むしろ望むところであるのだから。

利害が一致することほど、「安心」できるものはない。

「あ、あああんな奴の話なんていいでしょ！ 次に行くわよ！」

「ちよ、ちよつと、ルナちゃん……せめて、もう少し浸かせなさいよ」

「ダメ！ ダメつたらダメ！」

顔を赤くしたルナがまたしてもマダムを引つ張り上げ、「次に行くわよ！」と元気良く先導する。次に辿り着いたのはサウナであった——それも塩サウナである。

マダムにとって、運命の出会いとなる施設であった。



「ここがね、塩サウナっていうの」

「塩って……」

聖光国は南側が高い山に覆われており、海と面していない。

故に塩は輸入品であり、決して安い品ではないのだ。ルナがドアを開けると、程よい熱気が噴き出してきたが、その部屋の中身はとんでもないものであった。

幾つもの椅子や、長椅子が置かれてあり、部屋の中央にはこれでもかというほどの塩

がてんこ盛りにされてあったのだ。驚くことに、床にまでくるぶしが埋まってしまおうほどの塩が撒かれていた。

まさに、一面の白——それも、塩でできた白色であった。

「大昔に都市国家で見た……『雪』のようね……」

マダムが遠い記憶を引っ張り出したが、あれは空から『無料』で降ってくるものであり、この『白』とは意味合いが違いすぎた。

「ささ、私が教えてあげるから座って」

「え、ええ……」

ルナが自慢気に口を開き、まるで教師のような態度をとる。

先日、ルナも悠から教えてもらったばかりだというのに、まるでこの道のベテランであるかのような顔付きであった。

塩サウナの入り方は別段、難しいものではない。中に入って発汗するのを待ち、汗が出てきたら塩を肌へおいて溶かし、それを撫でるように体へと塗り込む。そして暫くし

たらシャワーで洗い流すのだ。ただこれを繰り返すだけである。

だが、その効果は女性にとつては嬉しいものばかりなのだ。

まず、顔にそれを行えば皮脂や老廃物がどんどん排出され、すべすべ肌へと生まれ変わる。やりすぎは厳禁だが、スクラブすることによつて古い角質が落ち、肌の色が明るくなる時まで言われているほどである。

「昨日ね、これをしたら効果覿面だったの」

「そう——」

マダムの様子が少し変だと思つたが、ルナが構わず説明を続ける。

いわば顔はオマケのようなもので、体への効果がやはり一番大きいであろう。

塩は体に塗りこむことによつて——皮下脂肪を外へと出す効果があるのだ。

分厚い脂肪に包まれたマダムにとつて、堪らないものである。どんな世界であつても、一度ついた脂肪とは中々消えないのだから。

これまでマダムはどれだけ運動しようと、食事に気を使おうと、古今東西のあらゆる魔道具を試そうと、全て無駄に終わったのだ。だが、塩を塗りこんでは発汗させ、シャワーで綺麗に流すというのを繰り返しているうちに、マダムの表情が変わっていく。

この繰り返しが意味するところは——新陳代謝を大きく高め、皮下脂肪を燃焼させていくという行為に他ならない。それも、狙った部分を「狙い撃ち」できるといふ優れものだ。

これが只の塩であるなら、只のサウナであるなら、その効果は人によつて個人差が出るだろうし、そこまで急激に何かが変わるようなことはないだろう。

だが、滑車がそうであつたように、これは「GAME」のものである。

設定のままに「結果」を生む——1+1が2になるように、肌を美しく甦らせ、皮下脂肪を綺麗に燃焼させていく。そうせざるを得ない。

それが、この施設に書かれている設定なのだから。

「ね？ 肌も綺麗になるし、太もものお肉……つて、マダム？」

「お……あ……」

「どうしたのよ、マダム?？」

「お……おおおおおおおおおおああアツツ！」

「ヒイイツ！」

「よつつつつしやあああああああいいいいいいッ！」

マダムが咆えた。

それは戦場で武人が咆え猛るような、凄まじい咆哮であった。彼女が咆えるのも無理はない——実感してしまったのだ。

——否、聞こえてしまった。

自らを覆う厚い脂肪が、*“悲鳴”*を上げたのを。

それも、抗うことすらできぬ敵へとあげる、*“断末魔の絶叫”*であった。これまでついで聞くことのできなかつた悲鳴が、先程から耳を割るような大ききさで鳴り響いているのだ！

「な、何!? 怒ったの!? な、何が気に入らなかつたの……?」

「ルナちゃん。私、決めたわ——」

「な、何を……?」

「——今日から、この村に住むわ」

「ええええええええええ!!」



— その夜 温泉旅館「松の間」

部屋の中では二組の羽毛布団が敷かれ、ルナは既に寢息を立てていた。

マダムも横たわり、静かに天井を見上げている。

部屋に入ってもマダムはその内装に驚かされっぱなしであったが、一番驚いたのは奇妙な草で編まれた床であった。

当然、それは畳であるのだが、マダムの目からしたら実に奇妙なものである。

しかし、慣れてしまえば、えも言われぬ味わいがあるのだ。良い香りがするだけでなく、彼女の好きな「色」でもあったことも大きかったかもしれない。

(何だか、この調子だと眠れそうね……)

マダムの巨体では、必ずベッドが軋みを上げるのだ。それこそどんなベッドに横たわろうとも、ギシギシという耳障りな音は決して消えない。それに苛立つて、彼女は中々眠ることができなかつたのだ。今ではそれが体質になるまで悪化しており、完全に不眠

症の状態に陥っていた。

だが、大帝国製の羽毛布団はマダムの体など余裕綽々と受け止め、その柔らかさと弾力でマダムの体を逆に悠々と持ち上げてくる始末である。まるで「お前が重さを語るなど、千年早い」と嘲笑っているような、不敵さすら漂わせているのだ。

(何て偉そうで、 “男前” なベッドなのかしら……)

心強くもあり、妙に腹が立つようでもあり。

そんな奇妙な思いに包まれながらも、マダムは神経を甚振るような軋み音から解放され、遂に数十年ぶりともいえる “熟睡” の気配を感じた。

——住むって、マダムのような立場で移住なんてできるわけじゃないじゃない!?

眠りへと誘われる中、マダムの頭に先程のやり取りが蘇る。

「そうね、立場ある者の移住なんて認められないわ。下手をすれば、横の繋がりを勘ぐられて、反逆の意思ありとも思われかねないもの」

「そ、そうよ……」

「でもね、一つだけ前例……というより、抜け道があるの」

「抜け道？」

「そう——『療養』よ」

実際、不治の病に冒された老貴族などが草深い田舎へと引つ込むこともある。若い先短い者が「最期は友と」と戦友の館へ転がり込み、短いながらも最期の時を共に過ごしたケースもあった。

中には腕の良い医者の下で療養するため、僅かな期間ではあったが、国外に身を置いた者も居ないわけではない。どの国も医療レベルは似たり寄ったりなので、わざわざ不便な国外へ行く者などは居ないし、許可されるケースも稀ではあるが。

これらは極端ではあるが、前例といえばまあ、前例といえる。

無論、マダムは至って健康であり、病気でも何でもないが。

(多少の無茶なんて知ったことじゃないわ……)

マダムは揺るがない決意で『それ』を想う——

これまで、この巨体の所為でどれだけ蔑まれてきたことだろう。

遠い日の断片を思い出す度、マダムの胸中に悔しさが蘇る。長じてそれらを実力で黙らせてきたが、やはり美への想いは捨てがたいのだ。

マダムは固い決意を秘め、目を閉じる。

（私は、私の運命に抗う……！）

彼女のその決意が、女としての想いが。

何処かの魔王様の思惑などを遥かに超え、国を揺るがすことになっていくのだ。

魔王の鬼謀

(まさか住みたいとはな……これは予想外の成果というべきか)

魔王とマダムがロビーで向き合い、ゆったりと朝食を楽しんでいた。

スピーカーからは軽やかな琴の音が鳴っており、何とも良い雰囲気である。互いに考えていることはまるで違うだろうが、双方とも笑顔を浮かべていた。

「なるほど。国の法に触れぬのであれば、私としては一向に構いませんよ」

「魔王様のお気持ちに感謝するわ」

「ただし、幾つか条件があります——」

きた、とマダムは思う。

こちらの無茶を聞いてもらうからには、相応の条件を呑まされるであろうと。

無論、マダムとしては覚悟の上であった。

「必要な部屋を引くと、この旅館で使えるのは三十部屋です。泊まる客をマダムの方でリストアップし、『貴女の判断』で選別してもらいたいのですよ」

その言葉にマダムが息を飲む。

昨日の体験を通していえば、この世に存在するどんな女であろうと、この施設に通いなくなるであろう。たとえ、万金を積むことになろうとだ。

それを、マダムに選べと言うのだ。

(これで面倒な貴族を相手にしなくて済むな。対応を丸投げしてしまおう)

魔王の思惑とは裏腹に、マダムの方は身を震わせていた。

こちらで自由に選べるということは、たとえ相手がどんな存在であろうと、圧倒的に上の立場から権力を振るえるということでもある。

だが、魔王の条件は更に続く――

「一つ付け加えましょう。相手が誰であろうと、一泊を限度としてもらいたい」

「一泊……」

(当然、色んな客を泊まらせて口コミで広げてもらわないとな)

魔王の思惑とは裏腹に、マダムの方は更に身を震わせた。

この夢のような施設を味わわせてから、翌日には強制的に領地へと戻す。それは身を引き裂かれるような思いをするであろうと。

マダム自身がそんな立場になれば、泣き叫ぶか大暴れするに違いない。

「魔王様は、よほど私に『力』を与えたいのね……」

評判を聞きつけ、この施設に泊まりたいと思つた者は何度でもマダムに陳情してくるであろう。一度味わつて領地へ戻つた者など、より強い勢いでマダムへと懇願してくるに違いない。

そこには当然、金や物品も絡んでくる。

口だけで頼んでくるような粗忽な者など、マダムの周囲には存在しない。

その姿を傍目から見ると、まるで天国への切符を握る選別者として浮かび上がってくるであろう。否が応にも、その求心力は高まらざるを得ない。

「力など——私は美を求めめる女性の味方である、というだけですよ」

マダムはそれを聞いて思う。

そう、確かに美しさを求めない女など居ないのだ。

そこには年齢など何の関係もない——女は死ぬまで女なのだから。

「つまり、魔王様は『世の半分』を握っていくということになるのね」

当たり前のことだが、世の中は男と女でできている。

女を驚掴みにするということ——

それはまさに、世界の半分を手中にしてしまうのと同じ意味でもある。

「ふむ——」

魔王はその問いに、決して短くない沈黙を続けた。

やがて、厳かに口を開く。

「私は100%を求めない。『半分』あれば、十分に事は成りますからな」

魔王の頭に浮かぶのは「温泉の話をしてんのに、こいつは何を言ってるんだ」といったものであったが、それをおくびにも出さず、思わせぶりなことを口にした。

適当に合わせておけば何とかなるだろう、といった態度だ。

だが、傍目から見ればその姿は、重厚極まりない。

実際、マダムの思考は先走り過ぎていたともいえるし、魔王は魔王でその思考が平和的過ぎたとも言える。片方は権力の坩堝の中で半生を過ごしてきたマダムであり、もう片方の魔王は金を稼いで、評判を良くしようとしか考えていない。

「そうね、この国の女は強いわ——魔王様が考えてらっしゃる通りよ」

「ははっ、それは頼もしいですな」

思考はすれ違っているのに、マダムは今以上の権勢を振るえるようになり、魔王は魔王で金を稼ぎながら評判を良くしていける、と妙な部分で一致しているため、歯車だけは奇妙なまでに噛み合っていく。

何より、この二人の組み合わせは互いに損をしない。

それどころか、得しかない。

それは美であり、権勢であり、求心力であり、金であり、評判である。極めて現実的な要素であり、“実益”であつた。

これに敵対する者からすれば、悪夢のような組み合わせでしかないが。

そして、この魔王は——女性に対する“一言”も忘れない。

あながち、それはお世辞で口にしたのではなく、真実が込められていた。

「それにしても、昨日より美しくなりましたな——マダム」

「いやね、相変わらず口がお上手なんだから……」

そう、マダムはこんな台詞を言われることに慣れている。

耳にタコができるほどだ。彼女はそんな言葉に踊らされない。右から左に流れるだけである。

——本来ならば、だ。

だが、この男が……魔王の口から出た言葉は、意味合いが変わってくる。

「言つたはずです、マダム。私の口は虚飾を述べない、と——」

魔王の鋭い眼光がマダムを貫く。

その圧巻とも言える「迫力」に、流石のマダムも息を飲んだ。

「そうだったわね。そして——」

「私の口から出た言葉は」

「全てが、現実になる」

二人の声が重なり、嬉しそうにマダムが笑う。

魔王も胸に手を当て、何か手品を披露したような仕草を取った。

実に平和な朝食の風景である。



—— 聖城

「そんな……こんな、ことが……」

届けられた書簡を見て、ホワイトの背筋が凍る。

何と、あのマダム・エビフライが「ラビの村」にて療養したい、という内容を送ってきたのだ。ありえることではなかった。

「つい先日、派手なパーティーをしていたじゃありませんか……」

ホワイトの目の前が暗くなっていく。

あの派手好きな社交界の中心人物がよりにもよって、ラビの村で療養など笑い話にもならない。あの村には、「何も無い」のだから。

馬鹿にしているというよりも、完全に愚弄しているレベルであった。

「あのマダムが寒村に引つ込……あつ！」

そこまで考えたとき、ホワイトの頭に衝撃が走る。

ラビの村——領主であるルナが、最近になって手腕を振るうと張り切り出した村であ

る。それは、本来なら妹の成長を喜ぶべき事柄であった。

だが、今は違う。その後ろには恐るべき魔王の存在があるのだ。

「妹だけでなく、あのマダムまで取り込んだというのですか……!?!」

それはホワイトにとって、更なる悪夢である。

あの社交界の女帝ともいえる存在は、貴族の奥方への影響力が尋常ではないのだ。彼女の口から出るものが流行を左右し、経済すら動かしてしまう。

彼女が美味しいと言った物はたちまち品薄となり、彼女が不味いと洩らした店などはその日から閑古鳥が鳴く。

ある者にとっては歩く災厄であり。

ある者にとっては福の神であろう。

それだけに、非常に扱いが難しい存在なのである。

マーシャル・アーツはマダムとは大きく距離を取り、ドナ・ドナは嫌悪感を出しつつも、時には媚びるような態度を取るほどだ。

女性の集団を敵に回す恐ろしさを、両者共に知っているのであろう。

「あのマダムをどうやって……それよりもいったい、何をするつも……あつ！」

《私がこれから行うことを実際に見て、そして判断して下さい。私は昔から、口舌ではなく、実際の行動を以ってそれを示してきた》

ホワイトの頭に魔王の言葉が蘇る。

改めて浮かべると——それは衝撃の内容であった。

確かに口舌ではなく、あの魔王は“実際の行動”で示したのだ。

「そう、ですか……宣戦布告であったのですね……」

ホワイトが思わず、拳を握り締める。聖城で、聖女の筆頭たる彼女の前で、あの魔王は堂々と宣戦布告を行っていたのだ。

その姿の、何と不敵で禍々しいことであろうか。

前代未聞ともいえる敵の本拠地での、敵の総大将の前での侵略宣言。

そこから浮かぶ単語は最早、一つしかありえない——“魔王”である。

「クイーン、これを見て……」

ホワイトとしては珍しく、乱暴に書簡を投げ渡す。

相変わらず、円卓の上に足を放り出しているクイーンであったが、無言で書簡を受け取り、目を通していく。大きく入ったスリットからは艶めかしい足が丸見えであり、とても書簡を読むような態度ではない。

「んー、療養ねえ……良いんじゃね?」

「ちよつと! そんな簡単に言わないで!」

「誰が何処に居ようと、どうでも良いことじゃねえか」

「これはね、クイーン。あのマダムが、魔王に取り込まれたってことなのよ!」

クイーンが天井を見上げ、どうでも良さそうに口を開く。

心底どうでも良さそうであり、その態度はいつそ清々しいほどであった。

「魔王魔王ってよお……あんなもん、単にルナの『お気に』ってだけだろうが」

「お気につて……どうして、そんな簡単に考えられるのよ!？」

「姉貴は見てねえから知らねえんだろな。ヤホーの街でルナのボケカスに会ったけどよ……あのアホ、一丁前に『女のツラ』してやがったぜ」

「いったい、何の話をしてるの……っ!」

ホワイトの怒りは高まっていくが、クイーンの方は相変わらずである。足を放り出したまま両手を頭の後ろで組み、ヤンキー女そのものであった。

「あのボケナスも恋をしてんのさ……放っておきやいいんだよ」

「何が恋よ……!　これは国の危機なのよ!？」

必死に叫ぶホワイトを見て、クイーンが「ハッ」と鼻で笑う。

そこには何故か、憐れみの籠った視線があった。クイーンが珍しく足を下ろし、両手を胸の前に持ってくる。

「まあ、姉貴には分からねえか……良い相手、見つかるといいな？　聖女として祈ってやんぜ」

「人を可哀想な女みたいに言わないで！　今は真面目な話をしてるのよ!」

クイーンが笑いを堪えながら祈りの言葉を捧げる。

目を閉じ、両手の指を組むとそこには完膚無き美少女が出来上がるのだ。

誰が見ても聖女様であり、男であるなら釘付けにならざるを得ない。

「天にいやがる……大いなる……あー、何だっけ。姉貴が喪女にならんように頼むわ。

それと、零様……大好きです。愛してます」

「貴女、最後のを言いたかっただけでしょ!」

「零様……」

「まだ続いているの!」

今日も聖城は大騒ぎであった。

適合率20% ★

「……あら、田原だけ？」

「だけ、とは言いやがるな。こつちあ仕事してんだぞ」

温泉旅館の一室——悠が襖を開けると、そこでは田原が図面らしきものを広げ、鉛筆で何かを書き記していた。耳には赤鉛筆が挟まれており、一見すると競馬の予想でも立てている姿にも思えなくはない。

「それは村の地図？ 施設の位置も変わっているようだけれど」

「んー、そだな」

「貴方——長官の建てた位置に不満でもあると言うの？」

「状況が変わりゃあ、場所だって変わる。一応、言っておくが、長官殿にはもう許可を取ってるかな」

「そう、なら良いわ♪」

「あいな……」

悠の掌返しに、田原が苦々しい表情を浮かべる。
清々しいまでの変わり身の早さであった。

「お前サンが長官殿にそこまで傾倒するとはなあ……何かあるか分からんもんだわ。つかよお、単純に趣味が変わったってことか？」

そう、悠の好みは幼い美少年である。それを辱め、甚振り、苦痛に歪む顔を見ては愉悦を感じる、生粋のサディストなのだ。

間違っても、丸内のような男は趣味の範疇ではなかったはずである。

「ここにや、バニーのガキも多いってのになあー」

田原が鉛筆を走らせながら呟く。

美形揃いのバニーだが、当然この村には子供もいる。まさに、絵に描いたような幼い美少年だ。

これまでの悠であつたら、絶対に放っておかなかつたに違いない。

「んー……最近は長官以外の男が目に入らないのよね」

「さいですか」

——田原は思う。

どうか、その可愛らしいままで居てくれ、と。

自分の胃的な意味でも、この世界のためにも。この女がその本性を剥き出しにすれば、数十万という単位で人がゴミのように死ぬ。

潜伏期間が長く感染しやすく、致死性も高い強力な細菌を数種類作ってバラ撒くだけで、一国を滅ぼし尽くすことも容易いだろう。

「それにしても、随分と大掛かりな改造案ね……」

「んだな。大きく区画を分けて、機能を分けちまおうと思ってる」

田原が乱暴な手付きで図面に線を加え、村の中を幾つかの区画に分ける。幸いなことに、ラビの村は人口こそ少ないが、領地としては広大なのだ。

村を出たバニーも多いため、空き家や使われなくなった畑も多い。

「ざっと、そうだな。療養区画、商業区画、庶民区画、バニー区画ってところか」

「随分と資金が必要になりそうね……」

「そこはアレだ、お前さんの聖貨とやらを売り払って使うってよ」

「そう、私の仕事が役立つのね」

「おう、長官殿も「大きな資金源になる」って喜んでたぜ」

「ふふ……ふふふふ……」

悠が嬉しそうに笑い、うつとりと目を閉じる。

それを見て田原は思う。

——どうか、その可愛らしいままで居てくれ、と。

マジで頼むよ？ と叫びたい心境であった。

これ以上、無駄に仕事が増える事になれば、田原の胃に穴が開くだろう。

「でも、そうね……これだけ大幅に手を加えるなら、マダムの見聞も聞いてみたらどうか
し……」

「——却下だ」

その瞬間、部屋の温度が下がり、切り裂くような口調で田原が返す。

悠の顔を、青みがかつた瞳が見ていた。

田原が、本気のときの目付きである。

「ここは言わば、俺達の城だ。マダムがどうこう、とかじやねえ。貴族なんて生き物に俺らの『テリトリー』をどうこうする『前例』なんて与えちゃいけねえんだよ。悠——お前、ボケてんのか？ 殺すぞ」

——不夜城の一件を忘れたのか？

「……………めんなさい、確かに失言だったわ」

田原がまた作業を再開する。

静かな部屋に、鉛筆の走る音だけが響く。部屋の中には険悪な空気が一瞬漂ったが、それを引き摺らないのが田原の良いところでもある。

「うっし！　ざつとこんなもんだろ」

「ふうん……拠点も増やすのね」

「療養区画は、徹底的に鄙びた空間を演出してそれを推していく」

「逆に商業区画は随分と派手だけれど……それに、私の病院にも言いたい放題ね」

「そこに関しちゃ、真実しか書いてねえよ」

「まあ、そうね」

（作：田原勇　タイトル　く真奈美、天使すぎかく）

「ちよつと待ちなさいよ、田原……この立ち飲みとかは何なの!？」

「ああ？　ひとつ風呂浴びた後には一杯欲しくなんだろが」

「親父臭い……真奈美ちゃんからオッサンと呼ばれる日も近いわね」

「馬鹿野郎！ 真奈美は幾つになつても、お兄ちゃんつて呼んでくれる地上に舞い降りた天使なんだよ！ そこの記号女と一緒にすんなツツ！」

「……貴方、一度医者に診てもらわうべきよ」

「医者はお前だろうか！」



—— 神都 とある宿

魔王が椅子へと座り、何かを試していた。

朝から何度もその作業を繰り返しているのか、その額には汗が浮かんでいる。

魔王の体が「また」眩い光に包まれていく。

光を外へと洩らさぬよう、窓はカーテンで閉じられ、明かりすら点けず、鍵も何重にもかける用心深さであつた。

音一つしない部屋に、光だけが漂っている。

（視界が、歪む……）

魔王の体が龍へと変化し、その鋭すぎる眼光が部屋を見渡す。暗闇の中でも、その銀色に輝く瞳は全てを見通すような輝きを放っていた。

霧雨 零——もう一人の“彼”である。

(この感覚を何と言えいいのか……)

“魔王”の中に居るとき、彼は実家に居るような安心感を覚えることがある。

全ての起源にして、始まりを告げる存在。

当初は、自らの名を与えていたキャラクター。

(逆にこっちは、一人暮らしの部屋って感じだよな)

彼はおぼろげに、そんなことを考える。

そう、“実家”を離れて十年近く、“龍”の中で過ごしていたのだから。

好き勝手に、自由に振舞える、という意味でも、一人暮らしの部屋と称するのは言い得て妙であるかも知れなかった。

(この、湧き上がってくる気持ち……)

マグマのように吹き荒れる、熱い感情。

それは、脚光を浴びたいというもの。格好を付けたいというもの。

注目を集めたいというもの。

あらゆる人間を沸かせ、ギャラリィを驚愕させ、徹底的に自分を魅せること。

それは、人間の「原始的な欲求」そのものであった。

(恥じることじゃない。むしろ、そんなのは当たり前じゃないか)

ある意味、開き直ったような心境で「彼」は思う。思ってしまう。

人であるなら、誰だつてそうしたいに決まっている。

恥ずかしさや、照れ、世間体、色んなものを考えて自重しているだけで、そこから解放されるなら、どんな人間も華やかな道を歩きたいに決まっているのだから。

(確かに、こいつは……いや、俺は「龍」なのかもしれない)

いや、誰だって龍になる下地がある。

それが、許されるのであれば。それを、認められるのであれば。

そんな「力」があるのなら――

強きを挫き、弱きを助ける。たとえどんな相手であろうと立ち向かう、そんなヒー

ロー願望を、子供っぽい想いを、誰もが秘めているのだから。

(任意で戻れるようにしなければ……)

彼の推測と経験では――

龍は存分に自らを魅せ、満足すれば元に戻ると踏んでいた。

これからは、そういうわけにもいかないだろう。

「疼くな……体が……」

それは、「どっち」の言葉だったのか。

龍が掌に拳をぶつけ、その体からオーラが溢れ出す。

「何もかんも、ぶっ飛ばしてやる——」

凶暴な眼が、暗闇の中で光る。

『——俺が、いつちゃん強え』

龍の口が歪に曲がる。この存在の前に立ってしまった悪は、地獄を味わうだろう。

龍を構成するスキルは、邪悪を滅ぼすものに特化しすぎている。そして、龍が敵と見做した者へ特化しすぎている。

限定された空間、限定された敵に対して、この龍は「無敵」なのだ——

彼の背中に刻まれた「天下無敵」とは、決して誇張ではない。

「見てろよ、ファツキン大帝国が——」

龍が椅子から立ち上がり、その体が光に包まれる。

光が消えたとき、そこには漆黒の闇よりもお暗く深い魔王の姿があった。休む間もなく、魔王の体がまた光に包まれる。

飽きることも無く繰り返し返される「それ」は、ほんの少しずつ、変化を生む。

いや、それは変化ではなく――

分かれていた半身との融合とでも言うべきか。

何せ「彼」は元々、龍そのものだったのだから。

いずれ彼は魔王と龍を支配し、双方を自在に操るに違いない。

当たり前の話であった。

彼はその両者を作り、共に在った存在なのだから。

ユキカゼ、襲来

— 神都

(最近はほんとに忙しすぎたな……)

久しぶりに「俺」は、一人で街を歩いていた。

一人つてのはいい。非常に身軽で、歩くスピードも自分の思うがままだ。

アクヤルナと居ると、どうしても歩調を合わせる必要がある。何せ歩幅がでかい——魔王の体は能力だけではなく、体型までハイスペックなのだ。

全身が鋼の如き肉体なのは言うまでも無いが、その身長も187とモデル並だったりする。何だかんだで見栄えの良い男なのだ。

故に——歩いているだけで目立ってしまう。

「……おじ様、やっと会えた」

「何で魔王!? どうして!」

見ると、以前に何度か会った二人組の冒険者だった。

片方は健康的な褐色の肌をした戦士であり、片方は透けるような白い肌を持つ魔法使い。何というか、アウトドアとインドアの極致のような二人組だ。

「ほう、久しいな」

重々しく告げてはみたものの、こいつらの名前が分からん。

もしかしたら、聞いたかもしれないがサッパリ忘れてるぞ。ここ最近は何も目まぐるしなかったし、無理もない事だが。

この世界じゃ、名刺交換とかもしないわけだしなあ……。

(ん……名刺、か。もしかしたら、流行るかもしれないな)

最近は何も金のことばかり考えていた所為か、ついそんなことが頭に浮かぶ。

実際、ラビの村の特産品が人參だけというのも寂しい話だしな。他にも色々と考えてみるのも悪くないかもしれない。

「……おじ様はどうして神都に？」

「少し、冒険者ギルドとやらに用事があつてな」

「……ギルドに？ 何を知りたいの？」

「まあ、北方の迷宮とかについてな」

「本当は魔法を防ぐようなアイテムについて聞きたいのだが、わざわざ人に話すようなことでもない。それこそ、自分の弱点を晒すようなものだ。」

「……国外のことを職員に聞いても得られるものは少ない。私が教える」

「ちよつと、ユキカゼ！ 勝手に話を進めないで！」

「……じゃあ、ミカンは帰つて。家で冷凍ミカンになつてて」

「誰が冷凍ミカンよツ！」

なるほど、こいつらはユキカゼとミカンか。

分かりやすいというか、何というか。

このタッグはユキミカン、とでも略しておくことにしよう。

「……おじ様、この近くに行きつけの店があるの。今までのお礼を込めて、ご馳走する」

「以前にも言ったはずだ。恩に着る必要はないと」

「……うん。『大切なこと』だったと聞いた」

「その通りだ」

その言葉を言い終えた瞬間——白い手がこちらの手を優しく掴む。

こいつ、本当に白いんだな。

何だか溶けない雪のようでもあり、神秘的ですらある。

「……まだ昼だけど、そこはお酒も飲める」

「酒、か……」

久しぶりに飲みたくはある。

最近は一人でいれる時間なんてまるで無かったしな。

「……じゃあ、こつち」

「後ろを付いていこう。子供じゃあるまいし、手を繋ぐ必要は無いぞ」

「……ダメ。迷子になる。私が」

（お前がかよ！）

思わず素で叫びそうになったが、どうにか堪える。この子、見た目は図書館で本でも読んでそうな物静かなイメージだけど、天然なのか？

「……ミカン、先導して」

「分かったよ！ 行けば良いんでしょ、行けばー」

どうも、ミカンという子にはあまり歓迎されていないらしい。

まあ、魔王なんて呼ばれているし、好かれるような要素もないだろうが。

それもこれも、村の経営が上手く行くまでの我慢だな。

「……恋の迷宮。ラビリンスラブ」

（何言ってるんだ、こいつは……）

案内された先にあつたのは、ノマノマと書かれた看板がかけてある店であつた。時間はまだ早い、店内にはかなりの客が居るらしい。漏れ聞こえる声に耳を傾けると、酒を飲んで盛り上がっている男女の声が聞こえてくる。

「オーナー、エールを三つ！ 客を連れてきたわよッ！」

「おや、ミカンじゃないかい。珍しいね、あんたが客なん……えっ?！」

店に入ると、女主人と店内の客が一斉にこちらへ向いてくる。

とんでもない注目度だ。

俺、何かしたつけ……いや、もしかして、先日の騒ぎのときに居た連中か？

「噂の魔王様じゃないかい！ ミカン、でかしたよ！」

「おお、あんたか！」

「こつちのテーブルに来てくれよ！ 一杯奢るぜ！」

「んお？ 誰だ、あれ？」

「バッカ野郎！ この前、カーニバルをぶつ飛ばした旦那だよ！」

「おい、暇してる連中も集めてこい！」

(おいおいおいおい！)

店の連中が慌しく動き始め、店内が騒然としていく。
俺は話が聞きたかっただけだっつーのに！

「……おじ様、ここに座って」

「うむ」

案内されるまま、とりあえず壁際のテーブルに座る。

とてもじゃないが、落ち着いて飲める雰囲気ではなさそうだ。女主人がエールを豪快にテーブルへと置き、先日の礼を言ってくる。

「この辺りの店も、皆あんたにや感謝してるんだ。今日は幾ら飲んでも、こつちの奢りにさせてもらうよ！」

女主人がこちらの肩を叩き、豪快に笑う。

マダムといい、この女主人といい、そこらの男顔負けの気風の良さだ。

何はともあれ、まずは飲ませてもらうとするか。話はそれからだ。

ジョッキへと手を伸ばすも、ユキカゼが横からジョッキを掴み、こちらの膝にちよんとして座ってくる。

「何をしてる……?」

「……おじ様に飲ませる」

「すまんが、自分で飲ませてくれ」

何処の場末のキャバクラだ。

昼間からこんな格好で飲む馬鹿が何処に居る。大体、酒つていうのは誰にも邪魔されず、自由に救いがなきやダメなんだ。

ユキカゼを膝から降ろし、ようやくエールに口を付ける。

「うん、美味しいな」

ここ数日の疲労は、この為にあつた気がしてくるほどだ。

久しぶりの酒に感動していたら、持っていたジョッキを横から奪われ、ユキカゼがそれをコクコクと飲み干す。何で自分のエールもあるのに、俺のを飲む？

「ん……おじ様の、喉に、絡んで……」

「妙な言い方をするな」

こいつら、揃いも揃っておかしな言い方ばかりしやがつて。

衛兵さんに引つ張られるつて言ってるだろ！

「……間接キス。恋はバブリシヤス」

「すまんが、ちゃんとした言語で話してくれ」

「ユキカゼちゃんとは相変わらさずだねえ。ほら、つまめるもんを持ってきたよ」

「ほう、これは——」

炒めた豆のようなものや、肉の串焼き、野菜の炒め物などが次々とテーブルの上へ置かれていく。見た目も香りも、悪くない。

ヤホーの街で食ったのは余り美味くなかったが、ここはどうだろうか？

見た目から濃そうなタレがかけられている串焼きを、口の中へ放り込む。

「これは……普通に美味しいな」

「普通について、あんたも失礼な言い方するねえ」

「すまない、他意はないんだ。ヤホーの街で似たような物を口にしたんだが、あまり美味くなかったんでな」

「ああなるほどねえ。でも、あんなところとウチを一緒にされちゃ困るよ」

女主人が豪快に笑い、カウンターの奥へと戻っていく。この女主人は、中々腕が良いのかも知れないな。

そんなことを考えていたら、持っていた串をユキカゼに奪われていた。

こいつ、人が口にしたものばかり手を付けてないか？

「ん……おじ様の、濃くて……ドロドロしてる……」

「だから、妙な言い方をするな！」

こいつ、天然とかじゃなくて痴女じゃないのか!?

さつさと本題に入らないと、いつまで経っても無限ループしそうだ。

「で、そろそろ話を聞かせてくれ。私はこの辺りの風習や、冒険者のシステムなどに疎くてな」

本当はすぐにも魔法に効果のあるものを聞きたかったが、用心深く、冒険者という職業やそのシステム、ギルドの役割などから聞いていく。

大方、俺のイメージしていた冒険者像と大きな違いは無い。魔物を倒して報酬を得たり、迷宮や遺跡からお宝を発掘するというのもお約束だ。

ギルドは依頼を受付け、それを斡旋して仲介料を取ったり、魔物の体の一部を買い取り、商会へと卸したりするらしい。

腕の良い冒険者を抱えている所は、中々に羽振りが良いようだ。それだけに引き抜き合戦も盛んなようで、ランクが上がれば待遇や条件面で次々と優遇されていくらしい。

(何だか、プロのスポーツ選手みたいだな)

プロ野球や、サッカーの選手などが頭に浮かぶ。

あれも実力があれば、色んなチームからスカウトが来て金を積まれる。その中から、条件の良い所を選べるというわけだ。

「……稼げないときは傭兵をする人も居る」

「傭兵、ね」

そして、実力が足りない者は、それこそ何でもやるしかない。この辺りも、似たような感覚と思つて良いんじゃないだろうか。

「……潜つても空振りしたり、魔物が少ない時期もあるから」

「ま、安定した収入とは無縁だろうな」

公務員じゃあるまいし、毎月決まった給料にボーナス、というわけにもいかないのだろう。俺からすれば、命懸けの自営業といった感覚に近い。

話を聞いていると、普段は人夫のような仕事をすることも少なくないうだ。何というか生々しい現実というか、夢の無い話というか。

「……今は戦争期だから、暇してる人も多い」

「戦争期？」

「……戦争期は北方諸国に入るのが難しくなる。密偵や工作員も多いから」

「その口振りだと、逆に休戦期もあるわけか」

「……うん」

長く戦争が続いているため、自然と休戦期も設けるようになったらしい。

そりゃ、年中戦争してたら生産も農業もクソもないだろう。

全員纏めて、お陀仏になるだけだ。

「思ったより、多くの話が聞けたな。感謝する」

「……おじ様になら、何でも答える」

そう言いながら、ユキカゼが隣に来て密着してくる。どういうわけか、その手もこちらの太腿の上に置かれていた。

こいつ、距離が近すぎないか？ 馴れ馴れしいってレベルじゃないぞ。

「そ、それで……：迷宮から発掘できる品とはどんなものがあるんだ？」

「……：すりすり」

「頬擦りするな。私は真面目に聞いてるんだ」

「……：私も至って真面目。出来杉君」

「お前は何を言ってるんだ？」

苦勞しながらもどうかこうにか、発掘品についても聞いていく。

大まかに分けると、この世界の武器は5種類に分かれるらしい。普通の金属や皮などから作られるノーマルと呼ばれるもの。

これはまあ、分かりやすい。

他には魔物の牙や皮、鱗などから作られる固体ソリッドと呼ばれるもの。

相当に腕がなければ、加工することは難しいらしい。

そして、特殊な金属や素材から作られる最上級ハイエンドと呼ばれるもの。これに関しては人間では加工できず、ドワーフなどが得意としているらしい。

そして、一部のSランク冒険者などが所持しているらしい特異ユニークと呼ばれるもの。ユキカゼも詳しくは知らないようだ。

最後に、伝説レジェンドと呼ばれるものがあるらしいが、いつだったかルナが自慢してたような

気がしないでもない。

あいつの杖がもしかして、そうなのかもしれないな。腐っても聖女だし。

「……未発見のアイテムを探したりもする。名付け親になれる」

「ほう、それは興味深いな」

「……二人で名前を考えてつけよ？ 字画にもこだわる」

「新婚かッ！」

ダメだ、こいつと居ると調子が狂う。

あの褐色ミカンのように一方的に避けられるのも困るのが、馴れ馴れしすぎるのも考えものだ。

とは言え、得られたものは結構ある。最後にもう一つだけ確認しておくか。

「例えば、店で売っている物に良品はないのか？」

「……広く流通している物は量産品。高い効果は望めない」

「金さえ出せば、良い品も入るんじゃないのか？ 魔法に効果のある物や、固い鱗を切り

裂く剣だとか」

「……第四魔法や第五魔法を防ぐには、特異級が必要。おじ様の武器なら、どんな敵にも対処できると思うけれど」

「ふむ——」

確かに、ソドムの火はGAMEの中でも最高の数値である50の武器だ。

それを言えば、不夜城に居た面子は全員が50のものを所持しているが、其々に特徴がある。ソドムの火なら、火傷を与える効果があるし、悠の手榴弾などは通常攻撃であつても広範囲に渡つてダメージを与える。

（いずれにせよ……一度行つて、自分の目で確かめるべきだな）

人から聞く話だけでは、全ての判断はできない。

実際に行つて、この目で確かめるべきだろう。幸い、村の方は準備も整つたことだしな……後は田原が居れば何とでもしてくれるだろう。

むしろ、あいつに丸投げした方が確実に高い成果を出してくれる。

「北方、か……まあ、一度行つてみることにするさ」

「……おじ様、北に行くなら私も連れて行ってほしい」
「君を？」

「……私はこう見えてBランクの冒険者。役に立つ」

コートの袖がぐいぐいと引つ張られる。

確かに、道案内をする者や経験者は欲しいところではあるが。側近達は村のことがあ
るから連れていけないし、子供連中を連れていくのも危険だ。

特にトロンなど、村から出れば討伐されかねない。

「そうだな、迷惑でなければ近いうちに頼むとしよう。何事も、最初は先人から学ばねば
な」

「……任せてほしい。きつと力になる」

ユキカゼが嬉しそうに、こちらの目をまっすぐに見てくる。

たまに妙なことを口走っているが、改めて見ると物凄い美少女だな。この悪人面と二
人旅なんかしてたら、検問とかで止められそうな気がしてきたぞ。

「……今なら、オマケにミカンも付いてくる」

「勝手に人をいれんなっ！ オマケってなによ！」

「ふむ——なら、宜しく頼む」

「頼まれないわよ！ 勝手に二人で行け！」

「……二人でイケ。ミカンはふしだらな子」

「あんたはもう、黙っててっ！」

重責を担う者達

——要塞「ゲートキーパー」

北方諸国に面する要塞——ここは武断派と呼ばれる貴族の中心地である。

この要塞を預かっている男は勿論、彼らの盟主たるマーシャル・アーツ、その人であった。彼は普段、笑顔など滅多に見せぬ男であったが、今日ばかりは静かな微笑を浮かべている。

「良く戻ってくれた、サンボ」

驚くことに、彼は席から立ち上がるとサンボへと近付き、その両肩を何度も強く叩き、抱擁した。

敬愛して止まぬ盟主からの、温かい歓迎にサンボが涙を流す。

アーツは彼の「主君」ではない。北方諸国に面する貴族を纏め上げる、あくまでも盟主であったが、その絆は代々の主従関係にも等しいものがあつた。

彼らがアーツへと向ける感情はただ一つ——信頼である。

どのような苦境にも駆けつけ、自らを顧みることなく、国境付近の彼らの領土を守り抜いてきた、アーツという無骨な人間が得てきた無形の財産である。

ここに居るのは苦しいときには食料を分け合い、塩を分け合い、背を預けて戦ってきた男達であり、もはや金銭などでは小揺るぎもしない、異様なまでの一枚岩の集団であった。

実際のところ、中央の腐敗に嫌気が差し、内心では既にアーツを主君として仰いでいる者も多い。国境付近の貴族達は、間断なく侵入してくる北方諸国との戦いの中で揉まれてきた家ばかりであり、貴族というよりも「武家」とでもいった方が早いぐらいなのだ。

中央がやれ社交だ、芸術だと騒いでいるあいだも彼らは前線を守り、戦いの中に身を置いてきた。中央の馬鹿騒ぎなど、彼らからすれば笑止の一言である。

最早、彼らからすればいざという時に頼れる存在といえ、アーツしか居ない。

その武人達から寄せられる信頼に。

アーツという男は、十分に応えることができるだけの能力を有している。

有して——しまっていた。

本人の意思はどうあれ、非常に「危険な状態」といつていい。

「ア、アーツ殿……長らく、この地に戻れなんだことを詫びる」

「何を言うか。お前の姿があるだけで、心強いのだ」

「アーツ殿……」

アーツが大きく手を叩くと扉が開き、大きな酒樽が幾つも部屋の中へと運ばれてきた。アーツは分厚い蓋を手刀で叩き割ると、豪快に中へと杯を突っ込む。

貴族というより、完全に武人の姿である。

「今日ばかりは祝おう。我が友の帰還に——」

アーツが杯を掲げると、周囲でそれを見守っていた男達が次々と酒樽へと杯を突っ込み、それを掲げていく。

時刻はまだ早かったが、部屋の中に一斉に歓声が満ちた。

「サンボ殿が戻られれば百人力よ！」

「今日ばかりは戦いを忘れて飲もうぞ！」

「盟主殿も今日ばかりはえびす顔よ！ 幾らでも飲めい！」

「サンボ殿、腕が鈍っておらぬか後で手合わせじゃ！」

要塞の一室で男達の賑やかな宴が繰り広げられ、男達の乱雑な声が響いた。夕刻が迫る頃になって、ようやくアーツが自室へと戻る。

（マダム、か……）

質素な部屋で一人、アーツがグラスを傾けた。

一杯では足りなかったのか、二杯、三杯、と杯を重ねる。戦友が戻った嬉しさと、妙な相手へ借りを作ってしまったという苦々しき。

それをどう処理すべきか思案しているような面持ちであった。

（中央の女帝か……厄介な姉妹だ）

アーツからすれば社交界の女帝と、芸術にうつつを抜かす愚かな姉妹である。絵に描いたような「貴族」といつていい。

アーツ自身も貴族ではあるが、最早その身も心も武人そのものである。最近では貴族と呼ばれる存在は、もはや唾棄すべきものであるとの思いすら抱いているのだ。

国家の象徴たる聖女様を担ぎ、その下に内外の敵を討つ武人を置き、その下に民が居れば良いのではないのか？

ここ数年、そんなことばかりが頭に浮かんでいるのだ。

(とは言え、サンボの身は重い……)

彼は武断派のムードメーカーとも言うべき人物であり、居ると居ないのでは士氣に大きな差が出るのだ。

現に、今日はサンボが戻ったというだけで軽いお祭り騒ぎである。

とてもではないが、一片の書状などで片付けられるような事柄ではなかった。

(何を以って礼とすべきか……)

金銭など、アーツがどれだけ掻き集めようとマダムからすれば端金であろう。

かといって、マダムが満足するような美術品など持ち合わせていない。

いや、違う。アーツにはもう「答え」がとうに出ている。

(……「何か」あつた際に、味方せよというのであろう)

それは時に、金銭などより遥かに重い要求である。

何せ、命が関わるのだから。

(あの姉妹に欠けているもの——それは武力だ)

アーツの考えは正しい。

バタフライ姉妹に、固有の武力などは無い。

金で傭兵を集めるぐらいは幾らでもできるだろうが、そんなものは蠅螂の斧に過ぎないのだから。戦場でならした「本物の軍兵」の前では草木も同然だ。

(もう一つ——男達からの支持)

その考えも正しい。

ただし、逆から見れば、武断派に対する女性の支持も薄い。

あれは貴族ではなく、野蛮人である——などと公言している者までいるほどだ。

(あの女は、クーデターでも企んでいるのか……?)

聖光国は今、乱れきっている。

故にアーツの思考もつい、そんな物騒なところへと飛んでしまう。

ある意味、そう考えるのも無理もない話であった。資金と武力、男と女、それらが揃えば「何か」の条件が揃ってしまうような気がしたからだ。



—— 聖城

聖城の最奥「祈りの祭壇」と呼ばれる部屋で、ホワイトが一つの決意を固めていた。

それは——妹の奪還。

「最早、一刻の猶予もありません……」

ホワイトが手にしているのは、オメガの聖杖と呼ばれる伝説武器^{レジェンド}であった。能力もさることながら、この聖杖は魔力を溜め込み、一つの奇跡を可能とする。

それは、聖光国内における瞬間移動——

聖杖に溜め込んだ魔力を全て消費し、詠唱者の魔力を飛躍的に高めるこの部屋の魔法陣も駆使し、初めて可能となる奇跡の御業だ。ホワイトが頭に描くのは当然、ラビの村。かの魔王は遂に牙を剥き出しにし、あの女帝をも取り込んでしまったのだ。ホワイトからすれば、とうに静観していられるような時期は過ぎた。

「熾天使様……私に力を」

聖女の一人でもあり、大切な妹でもあるルナを奪還しなくては、どうにもならない。戦うにせよ、交渉するにせよ、人質を取られたままでは行動の自由すら与えられないのだから。

ホワイトが祈りを捧げ、魔法陣から光が溢れ出す。

本来なら、聖女が外に出る際には多数の護衛が守りにつくが、今回は単独での行動である。何せ、相手はあの悪魔王をも滅ぼした魔王であった。

下手を打てば、巻き添えになって犠牲者を増やすだけであろう。

「魔王……これ以上、好きにはさせません 《熾天使の跳躍》」

ホワイトの体が光に包まれ、その身が消える。

彼女が目を開けたとき、そこには記憶とは違うラビの村があった。

「……………え？」

彼女の記憶では、ここは「何も無い寒村」である。

だが、目の前では大勢の人間が動き、材木や石などが運ばれていた。手にハンマーやつるはしを持つている者もいれば、土嚢を抱えている者も居る。

村全体を変えるほどの土木作業——それも、極めて大規模なものであった。

どれだけの人間が雇われているのか、中には魔法使いも多数混じっており、井戸掘り

を専門とする特殊な業種の者まで居た。

更には村の四方に堀か石壁でも作ろうとしているのか、『土』を扱う魔法使いが二十人以上集まって作業をしている。

「間違えた……なんて、ことはないわよね……」

ホワイトがふらふらと村の中へと入り、あまりの事態に呆然とする。

その姿を見て、櫓のような物に座る人物から荒々しい声が飛んできた。図面を片手に、あちこちへ指示を飛ばしている田原である。

「おう、その姉ちゃん。あんた頼んでた『光』とかを使う魔法使いだっけ？ その魔法に頼むわ。建てるのは商業地区だから間違えんなよ？」

「え……えええ?」

「何をボケつとしてやがる。大体、そんな白いドレスで仕事場に来る奴があるか！ おめえ、仕事を舐めてんのか？ ここは舞踏会じゃねえんだぞ！」

「え……ええええええ!!」

「ちやつちやと済ましてくれよー。あつ、そつちの小石は溝に敷き詰めてくれ。水捌け

が変わるからな」

ホワイトが反論する暇もなく田原が他の指示へと回り、生真面目なホワイトはつい、魔石へと『光』を籠めてしまう。

そして、自分が何をしにきたのか思い出し、ハッと我に返る。

「何故、私がこんなことを……！　大体、あの乱暴な人は誰ですか！」

「姉様……何でここに!?!」

「ルナ!?!」

囚われた妹と、それを奪還しにきた姉との感動の再会である。

だが、囚われた筈の妹の手にはどういいうわけか人参が握られており、姉の手には良い感じに輝きを放つ魔石が握られていた。

白天使と魔王様

手に妙な物を持った姉妹が見つめ合い、ホワイトが震えた声を絞り出す。喧騒の中であつても、彼女の透き通つた声はよく通る。

「ルナ、ここを出ますよ。貴方はあの魔王に誑かされているのです」
「へ?? いったい、何の話をしてるの?」

ルナの暢気な態度に、ホワイトの額に怒りマークが浮かぶ。

決死の覚悟を決めてきたのに、これではあんまりだろう。実際、ルナは手に持った人参を掲げ「意外と大きいでしょ?」などとふざけたことを口にしてる。

「人参の自慢をしている場合ですか……! 早く聖城に戻りましょう」

「戻って、そんなの無理よ。今から私の領地を改造するんだからつ! あ、違った。魔改造って言ってたわね……!」

「……魔、ですって!」

その邪悪な響きに、ホワイトの頭痛が酷くなる。

この村を中心にして、魔物でも呼び寄せようとしているのかもしれない。その光景を想像し、ホワイトの背筋に冷たいものが流れた。

「それに、こんな大規模な土木作業……何処からお金が出ているのです！」

「確か聖貨を売ったとか言ってたけど……私もよく分からないの」

「し、神聖な聖貨を！」

　　噛み合っているのか、噛み合っていないのか、姉妹の会話は流れるように進み、ホワイトの頭が沸騰していく。彼女はしきたりや伝統を尊ぶ立場でもあり、聖貨を神聖な物と捉えている。

　　それらを売買することには元来、反対の立場であったのだ。だが、ホワイトを更に驚愕させる事態が訪れた。

「ルナ、向こうで皆が呼んでるの」

フラフラと宙を飛んできたトロンである。

その手には何故か、風に乗ってクルクルと回る風車が握られていた。温泉旅館の備品なのだが、気に入ったらしい。

「またあ？ 次は何なの？」

「大きな岩があつて邪魔なの。金ピカで壊して」

「しようがないわね。私が居ないと何も出来ない奴ばかりなんだからっ」

「……さっさと来るの」

「ちよつと、服を掴まないでっ！ あ、お姉様、話は後で！ キョン、お姉様を温泉にでも案内しておいてあげて」

ルナとトロンが慌しく去り、ホワイトがその後ろ姿を呆然と見つめていた。

聖女としてのスキルが、彼女に知らせている。間違いなく、あれは魔が混じった存在——忌まわしき“魔人”である、と。

「()案内します……ピョン♪」

頭の中まで真っ白になったホワイトの手を引き、キヨンが温泉旅館へとエスコートしていく。ホワイトは今の光景を見て、完全に思考停止に陥っており、その施設に驚くような「余裕」すら与えられなかった。

(ルナはもう、そこまで魔に魅入られて……)

ホワイトがそう考えるのも、無理もない。魔王ときて、次は魔人である。

ホワイトがどう鼻肩目に見たとしても、ルナには最早、聖女としての自覚は失われており、魔の陣営に堕ちたとしか思えなかったのだ。

「ルナ様も後で来ますので、先にお湯へどうぞ……ピョン♪」

「お湯……」

「マダムもサウナが大のお気に入りです……ピョン♪」

「マダム……サウナ……」

ホワイトはオウム返しをするだけの機械のようになりながらも、行儀の良さが祟り、案内されるがままに旅館の中を進んでいく。本来なら、そこには彼女にとっても驚きの

光景が幾つもあるはずなのだが、今は驚いているような場合ではなかった。

(どうすれば、ルナから魔を取り払えるのか……)

「中に脱衣所がありますので、そこで服を脱いでお入り下さい……ピョン♪」

案内を終えたキヨンが去り、ホワイトが中へ進む。

深い熟考へと入った彼女は周囲を確認する余裕もなく、そのまま男湯と書かれた暖簾の下をくぐっていった。

(やはり、どうにかして魔王を討つしか、ルナを解放する術は……)

ホワイトの頭に浮かぶのは、熾天使が残した幾つかの奇跡。

いずれ、時が来れば悪魔王へとそれをぶつけ、もう一度封印するための切り札にしようとしていたものである。だが、それを使うには、今少しの時間が必要であった。

(それにしても、お湯なんて……)

ホワイトは様々な儀式を執り行う前に、身を清めることが多い。

昔はそれこそ、クイーンやルナと共に潔斎し、祭事に臨むこともあった。思わぬところで懐かしい記憶が頭へと浮かび、ホワイトが勢い良く服を脱ぐ。

余人を交えず、二人で話し合う良い機会であると考えたのだ。

昔も今も、どんな世界であつても、裸の付き合いという言葉がある。

そこでは思わぬ本音が漏れたり、普段はとても口にできないような、秘めているものが出たりするものだ。そこには体だけではなく、心も裸にしてしまう効果があるのかも知れない。

(これがルナを説得する、最後のチャンスかも知れませんか……)

全ての服を脱ぎ終えたホワイトの姿は、完全に天使であつた。

長いピンク色の髪は何かに保護されているかのように輝き、そのプロポーションは天使からの贈り物であるかの如く、整いきつっている。

その胸の膨らみだけで、百万人の男すら平伏させてしまうだろう。

その神秘的な容貌は言うに及ばず、形の良い唇だけでも何時間でも眺めていられそうであつた。そんな彼女が、何一つ身に纏わぬ姿で温泉への扉を開ける。

途端、白い湯気が視界を覆い、心地良い熱気がホワイトの全身を包み込んだ。

(これ、は……)

見たこともない光景に、ホワイトの足が止まる。

訳が分からない、と言った方が良かったかも知れない。何せ、理解できるものがただの一つもないのだ。

「これ、お湯……なの？ 全てが？」

ホワイトがおぼろげに頭へ浮かべていたのは、清められた水や、お湯が入った一つの浴槽である。それも聖城にあるものは当然、一般のものよりも遥かに豪華で大きいのだが、ここの施設に比べると子供騙しでしかないだろう。

この温泉施設は、百人でも軽く入ることができるほどの広さなのだから。

「ルナ……。いえ、魔王はいつたい、何を考えて……」

ホワイトが不安そうに辺りを見回し、更に興味深いものを発見する。遙か奥に目をやると、岩や妙な植物に囲まれた“庭”が見えたのだ。

それも、何処か静謐な空気が漂う空間である。

何かに引き寄せられるようにして、ホワイトが奥へと向う。

(「」にも、湯が……外に……!?)

そこは当然、露天風呂であった。

だが、ホワイトからすれば訳が分からない。

何故、外にお湯が張ってあるのか。

何故、静謐な庭の中にお湯を置く必要があるのか。

何故、岩の中にお湯を張ったのか。

全てが不可解であり、理解の範疇を超えすぎている。

そして、一番の衝撃は――

その湯の中に、忌まわしき魔王が不敵な表情で浸かっていたことである。

「ま、魔王ツツ！」

その禍々しい姿を見て、ホワイトがつい叫ぶ。

自分が今、どんな格好で居るのかも忘れて。

魔王がゆつくりと振り向き、片眉を上げる。その姿は泰然としており、不意の遭遇とは思えぬ、落ち着きがあつた。

「ほう——珍しい闖入者が居たものだ」

「わ、私を待ち伏せていたというのですか……ッ！」

「ふむ——」

ホワイトの叫びに魔王が一呼吸置き、おもむろに口を開く。

「ここは露天風呂と言われる場所だね。ここで騒ぐような者は常識を知らぬガキか、無粋な者だけだ。貴女は、そのどちらでもないと思いたい」

その挑発的な言葉に、ホワイトの顔が怒りに染まる。

そして、この邪悪な存在へ——最後の問いを発すべく、覚悟を決めた。



——貴女は、そのどちらでもないと思いたいが。

魔王の頭は今、かつてないほどにフル回転していた。ここでベタに悲鳴など上げられた日には、評判を良くするどころか、その名は地に落ちるだろう。

何故かこういう場合、理屈もクソもなく男が悪者になってしまうのだ。満員電車での痴漢冤罪などが頭に浮かび、魔王は密かに身を震わせた。

故に、まずはホワイトが叫んだりせぬよう、魔王は牽制の言葉を投げかけたのだ。

(聖女視姦罪とかふざけた罪で、投獄されたりしないだろうな……)

魔王が湯の上に浮かべていた盆から、日本酒の入った杯をゆつくりと持ち上げ、口を含む。その仕草は実に落ち着いたものであったが、内心は相当焦っていたのだろう。杯を持つ手は微かに震えていた。

(クッソ！ 何で俺が風呂に入っているとこんなトラブルばかり！)

それは天罰であつたのか、ご褒美であつたのか。

外では大勢の人間が働いて作業をしているというのに、この魔王は昼間から露天風呂で日本酒を嗜んでいたのだから。そのうえ、先程見たホワイトの裸体を即座に脳内フォルダへと保存している始末である。

まさに——許し難い邪悪な存在であつた。

(そもそも、何で聖女がこの村に居る？ それに、ここは男湯だぞ……!?)

魔王の頭に、当然の疑問が浮かぶ。

まさか間違つて入った、などと思うはずもない。

周囲が見えぬほど、彼女が思い詰めていることなど、魔王は知る由もないのだから。

(まさか、ハニートラップとかじゃないだろうな……)

魔王の頭にはそんな考えも浮かんだが、即座にそれを打ち消す。

今後、そんなものが仕掛けられる可能性はあるにしても、一国の頂点ともいえる女性
がそんなことをするはずも無いだろうと。

故に彼の思考は——いつもの流れへと行き着く。

「こんなところに来て来られるなど、余程の用件がおありのようですね。私はこう見え
て、聞く耳を持っている方だと自負している」

思わせぶりな事を口をしながら、相手の態度を探るといふ待ちの姿勢である。

これが案外、馬鹿にできない効果を発揮するのだ。その迫力と威圧に相手の態度が崩
れ、勝手にボロを出すことが多い。

「用件ですって……!? そんなもの、貴方の——」

「その前に、その格好は『目の毒』ですね。これを使われるが良い」

魔王が用意していたバスタオルを投げ渡す。

それを見て、ホワイトがようやく自分の状態に気が付いた。

「ヒッ！ あ、あああ貴方、わ、私のはだ——」

「そろそろ、湯に浸かられては如何かな？ 大切な御身が、風邪など引かれれば国の損失だ」

「~~~~ツ！」

その皮肉めいた言葉にホワイトは齒噛みしたが、バスタオルで体を包みながら湯へと飛び込む。少しでも肌を隠そうとしたのだろう。その顔は屈辱と恥辱で真っ赤になっていた。

男に裸を見られたのも初めてだというのに、それを「目の毒」とまで言い放たれたのだ。彼女の心境は察するに余りある。

「では、そちらの用件を伺いましょうか——」

魔王が杯を傾け、その鋭い眼光を空へと向ける。

その姿を見て、ホワイトの顔が更に歪んだ。その態度には、自分の裸体など視界に入れる価値もないという空気が滲み出ていたからだ。

「魔王、貴方はマダ……はうっ！」

一陣の風が白い湯気を払い——ホワイトが思わず絶句する。

否、当たり前のことには気付く。そう、相手もまた裸であったことに。

それも、異様なまでの迫力が漂う筋骨隆々の肉体である。今度はホワイトの顔が別の意味で赤くなっていく。

「どうされた、聖女ホワイト？　よもや、一国の代表が男の裸程度で動揺する、などと可愛らしいことは言い出すまいと思うが」

魔王が不敵に嗤い、黒いゴムを使って長い髪を後ろで一括りに纏める。

何度目になるか分からない、聖女大戦の始まりであった。

湯煙の死闘

「どうされた、聖女ホワイト？ よもや、一国の代表が男の裸程度で動揺する、などと可愛らしいことは言い出すまいと思うが」

魔王が威風堂々たる態度で言い放つ。

そこには男の裸など大したことではない、猥褻罪でも何でもないんだ、と祈るような切ないまでの気持ちが進められていた。

(聖女相手に男根を見せ付けた、などと評判が立った日には……)

どう考えても投獄か、火炙りものである。

それも、前代未聞の性犯罪者として歴史に名を残しそうであった。

魔王は更に杯を傾け、天上の神をも射殺しそうな視線を空へと向ける。どれだけ素数を数えても、先程見た裸体がフラッシュバックし、魔王の下半身に巨大なマグマが集結しつつあったのだ。

それも、魔王と称するだけあって、その雄々しさは尋常なサイズではない。万物を貫くといわれる魔槍——ゲイボルグに匹敵するものであった。全身の全てが凶器と化した魔王は、宙にやった視線を彷徨わせる。

(あの蒼空、きわみ極はいずこであろうな……)

魔王が古の大軍師、諸葛孔明のように蒼穹を見上げるものの、車は急に止まれないし、一度活動を始めたマグマも鎮火するには時間がかかるのだ。

「ええ……私は貴方の裸になど、何も思うところなんてありませんからっ！」
「それは、重畳。落ち着いた話ができそうで幸いですな」

片方は顔を真っ赤に染め上げ、片方は歯を食い縛りながら空を見上げている。傍目から見れば、敵対しているように見えなくもない。

「貴方はマダムまで取り込んで、この国をどうしようというのです！」
「取り込む、とは穏やかではありませんな。ルナもマダムも、自らが望んでこの村に滞在

しているのです。私は、強要などしておりませんよ、天使に誓つてね」

「いったい、どの口が言うのですか！ 貴方は——」

ホワイトが思わず詰め寄り、魔王の顔を睨み付ける。

その顔は怒っているというのに、不思議なほどの美しさがあつた。しかも、バスタオルで体を包んでいるとはいへ、その肩は露になつており、男ならば誰であつても魂を奪われるであろう、二つの膨らみが大きな谷間まで作つているのだ。

「余り、近寄らないで頂きたい——その体は少々、刺激が強いのでね」

「あ、貴方は……ど、どどど何処まで私を馬鹿にすれば気が済むんですかっ！」

「心外ですな。私はいつも真面目なつもりですよ——この口は真実しか告げない」

「し、ししし真実とまで言い切るのですか……貴方は！」

ホワイトの体が余りの屈辱に震え、涙目になる。

普段の彼女ならば、こうも感情を揺さぶられるようなことはなかつただろう。彼女は二人の妹とは違い、対人接触の経験も豊富であり、優雅でさえあるのだから。

だが——

生まれて初めて男に裸を見られ、初めて男の裸まで見たのだ。まして、その相手が諸悪の根源ともいえる魔王であったのだから堪らない。

そのうえ、目に毒だの、刺激が強いだのと言われ、混乱のあまりそのままの意味で受け取ってしまい、その心は千々に乱れていた。

「マダムに關しては、そうですね——この湯が、一つの答えとなるでしょう」

「湯が何を答えるというのですか……!」

「心を落ち着け、肩まで浸かられるといい」

そう言いながら、魔王も逃げるようにして目を閉じる。

暗闇に逃げ込めば、集まったマグマも鎮火されるだろうと考えたのだ。

ホワイトはその姿を睨み付けていたが、魔王が微動だにせず、口を開こうともしない態度を見て渋々、自らの体も湯へと沈めた。

暫しの沈黙の中——外からの作業音だけが響く、静謐な空間が出来上がる。

それら色気の無い音と暗闇に、魔王がようやく愁眉を開く。

(いいぞ、光あるところには必ず闇がある。私は今、無だ。無の中に居る)

「あう……この湯、何か……あつ、肩が……はううつ……」

（お前、変な声出すな！ 声まで可愛いとかアホかツツッ！）

「な、何なんですか、これ……こんなの……初め……てっ……」

（だああああ！ お前、わざとだろコラッ！）

折角、散りかけたマグマが再集結するのを感じ、魔王が慌てて口を開く。その姿を俯瞰して見れば、聖女が魔王を追い詰めていると見えなくも無い。

「この露天風呂には疲労の回復だけでなく、〃日常からの解放〃という効果があるのですよ。辛い日常を忘れ、一時の解放を得る。そして、また英気を養って明日へと向かう、という施設なのです」

「日常……解放……」

「他の湯にも荒れた肌を整えたり、潤いを保つ効果などがありますね。マダムがこの村で療養する、というのは別に冗談でも何でも無いのですよ。今、貴女が感じている〃心地良さ〃が——全ての答えだ」

魔王が日本酒で満たされた杯を差し出す。

その視線は前へ向けられたままであったが、有無を言わせぬ雰囲気があった。後は酒でも飲ませて、全てを有耶無耶にして逃げようとしているのだろう。

「わ、私にこれを飲めと言うのですか……」

「魔王が差し出す酒など、恐ろしくて飲めませんか？　一国の頂点たる貴女の慎重さと臆病が、この国を乱れさせている原因の一つだというのに」

「あ、貴方にそんなことを言われる筋合いはありません……！　第一、私に毒物を飲ませようとしているのなら、無駄ですから！　《天使のスプーン》」

ホワイトがスキルを発動させ、その瞳が淡く光る。

これは毒や危険物の有無を判別するものであり、一部の聖職者が修めているものだ。だが、それに対する魔王の返答は激烈なものであった。

「私からすれば、毒物とはこの国の上層部の人間に他ならない。多くの人民に塗炭の苦しみを舐めさせ、省みることがない。そのうえ、現状を打破しようともせず、そのための政策すら何一つ持ち合わせていない。私の国では、こういった者を“無能”と呼ぶ」

最早、言いたい放題である。

ある意味、この魔王の姿にこそ、とにかく“この現状を打破しよう”とする強靱な意思があったといえるだろう。無論、保身から出たに過ぎない台詞であったが、ホワイトの胸には強烈にその言葉が突き刺さった。魔王の発言に——反論できなかつたからだ。

「……貴方から見れば、確かにそうなのでしょね。私のような小娘が空回りしている様は、さぞ可笑しいでしょう」

ホワイトが力無く杯を受け取り、その瞳に日本酒を映す。

その透明な液体は光に反射し、キラキラと光っていたが、それを持つホワイトの方が遙かに輝いており、その姿には言葉にできぬ淑やかさがあつた。

（傾国の美人とはこういう女を指すんだろうな……いや、この世界風に言うなら、それこそ天使というやつか）

まるで、一枚の絵を割り貫いたかのような姿に魔王が密かに息を飲む。

その身から溢れる神聖なオーラに、魔王の体の一部分に集まっていたマグマも散ら

ばっていったほどだ。ホワイトが伏し目がちに杯を傾け、その可憐な唇に日本酒が触れた。

「これ、は……」

これもGAMEのアイテムであり、気力を回復させる効果がある。

元々、日本酒は飲みすぎなければ体に良いものなのだ。

百薬の長、などといわれるのは伊達ではない。

「これは、私の国の酒だね。古くから愛されているものですよ」

ホワイトの手から杯を取り、魔王も杯を傾ける。

その姿に一瞬、ホワイトの口が「間、接……」と洩らしたが、魔王は全く気にせず、容赦なく日本酒を胃の中へと叩き込んだ。むしろ、ホワイトが最初に飲んだときこそ間接キスだったのが、あのときは気落ちしていて気付かなかったのだろう。

「間接キスなど……処女のカキでもあるまいし、何を寝言を——」

魔王が鼻で笑う。

この男の感覚からすれば、初体験の年齢などニユースなどでは年々下がっており、今では小学生の時でした、などという話までよく聞くのだから。

今時、間接キスなどでどうこう言う女など絶滅種であろう。

だが、その不遜な言葉が途中で止まる。

相手が、聖女であったことを思い出したのだ。ホワイトの細い肩が震え、その口から搾り出されるようにして言葉が漏れる。

「……悪かったですね」

そう、運が悪かった。

そして、タイミングまで悪かった。

彼女は先日、クイーンに散々からかわれたばかりである。

その上、「姉貴の固さじゃ、喪女確定だわな」とまで言い放たれており、密かに傷付いていたのだ。先に妹二人が良い相手を見つけたような話まで聞かされ、姉妹の中で一人だけ取り残されたような気分まで味わっていた。

「どうせ私は喪女ですよ！ 処女ですよ！ 悪いですかっ!？」

露天風呂が与えてくれた開放感と、日本酒が齎した酔いも後押ししたのだろう。ホワイトの口から、普段は絶対に漏れないであろう言葉が迸った。

「い、いや、別に悪いとは言っていない。むしろ、貞淑な女性というのは好まれるものだ。胸を張って良いのではないか？」

「こんなことで、どうやって胸を張るんですか！ 私を小馬鹿にして笑っているんでしょ!？」

「小馬鹿になどしていいない。むしろ、その固さを褒めているほどだ」

「貴方もクイーンも、固い固いつて……私をゴーレムか何かのように……っ!？」

最早、收拾が付かないと思ったのだろう。

内心は慌てながら、しかし、見た目だけは重厚な仕草で魔王が漆黒の空間へと手を突っ込み、一つのアイテムを取り出す。

頭に装着する防具——《天使の輪》である。天使の輪はその名の通り、光り輝く輪で

あり、ふわふわと浮遊していた。

防御力は2とゴミ性能だが、見た目が可愛いので女性プレイヤーが好んでよく装備していたものだ。逆に《小悪魔の角》という頭防具もあったが、これも防御力が低い割には人気があった。

「な、何ですか……これ……。どうして、貴方が天使様の輪を?!」

「聖女の名に恥じぬ貴女へ——これを贈りたいと思いましてな」

魔王がホワイトの頭へ、優しく天使の輪を載せる。

その顔には微笑が浮かんでおり、ホワイトの目から見てもそれは渋い、と思えるものであった。長い髪を後ろで束ねていることもあって、精悍でもある。

その筋骨隆々の肉体といい、容貌といい、その悪辣な頭脳といい、ホワイトからすれば、その全てが生まれて初めて見るタイプの男であり、大人の男性でもあった。

「その輪に恥じぬよう、研鑽したまえ。私は、君の敵ではない——」

魔王はその言葉を残し、霧のようにその姿を消した。

単に《全移動》で脱衣所に戻っただけなのだが、ホワイトからすれば「消えた」としか思えなかつただろう。

「天使様の、輪……どうして、魔王が……」

ホワイトが呆然と呟いたが、魔王の頭にあつたのはただ一つである。

「女関係で困ったときには、とりあえずプレゼントしとけば機嫌が直る」という、世の女性が聞けばふざけるな、としか言いようがないものであつた。

しかし、ホワイトにとって――

このアイテムは到底、軽く考えられるようなものではない。

慌てて露天風呂から上がり、鏡にその身を映す。その頭には光り輝く天使の輪が浮かんでおり、その荘厳な美しさと神聖な輝きに、ホワイトは息を飲んだ。

北へ

魔王は温泉旅館の前で一服し、ホワイトが出てくるのを待っていた。

何とか騒がれずにこの一件を収めることには成功したが、この男は一度やると決めたら、徹底的に最後までそれを貫き、詰めを誤ることがない。

(遠足と同じだ……無事に帰らせて、はじめてゴールになる)

やがて、旅館の入り口からホワイトが姿を現したが、その頭には天使の輪がしっかりと装備されたままであった。

(まだ着けていたのか……まあ、似合うけど)

魔王としては、可愛らしい天使系のアイテムをプレゼントして、ご機嫌を取ったつもりである。聖女だし、これ系なら喜ぶだろうと。GAMEの内容は殺伐としたものであったが、女性プレイヤーも多かったため、アイテムは意外と可愛らしいものが多いの

だ。

花柄のワンピースや金のブレスレット、黒や白のメイド服、黒ニーソや白ニーソ、厚底ブーツやハイヒール、猫や犬の着ぐるみや肉球、尻尾などまである。プリーツスカートやミニスカ、何故かは分からないがルーズソックスや縞パンなどまで用意されていたのだ。GAMEで遊んでいたプレイヤーが、色んな意味で変態であったことが窺える一幕である。

「聖女ホワイト、この村には馬車などで来られたのかな？」

「い、いえ……」

「では、一人で？」

「はい……」

魔王の言葉に、ホワイトの言葉が詰まる。

相手が誰であれ、軽々しく“奇跡”を口にすることはできない。ホワイトとしては、曖昧に濁すしかなかったのだ。

「なるほど。では、聖城まで御送りしよう」

「え？　いったい、どうやつ……あつ……」

魔王が有無を言わず、ホワイトの腰を掴み、引き寄せる。

別に、魔王の側には他意はない。

ただ、国の重要人物が間違っても怪我などをしないよう、しっかりと掴んだだけのことである。

「あ、あの！　な、何をするつもりですか……」

「何も心配することはない。私に身を任せたまえ」

ホワイトの耳元で、魔王の声が響く。深い、耳朶に残る声である。

その力強さと強引さは、到底抗う事など許されない域にあった。ホワイトがこれまで見てきた男とは、まるで次元が違う存在である。

「あの、貴方は私の——あうっ」

「——静かに。こういうときは、沈黙を尊ぶものだ」

何かを言いかけたホワイトの唇に、魔王の人差し指がそつと添えられる。これも、別に他意はない。

移動時に、舌でも噛んだら大変だと思っただけである。だが、ホワイトの顔は心なしか赤くなり、その体もカチカチになった。

「羽よ、我が身を運べ——《全移動：聖城》」

魔王が誤魔化すために適当な魔法っぽい詠唱（？）を口にし、二人の姿が一瞬で聖城の前へと現れる。視界に映るのは——見慣れた聖城。

そのありえない光景に、ホワイトは驚愕とともに全身を震わせた。

無理もない。

無理も、なさすぎた。

それは、彼女が起こした「奇跡」と同じ——天使の御業に他ならない。

「あ、貴方は、いったい……!?!」

「私がかつて、貴女に言いましたな。——人から聞いた話より、実際に見た方が理解も早

い、と」

「あつ……」

その言葉に、ホワイトの胸が詰まる。

確かに、魔王はかつて聖城で対談を行った際、そう言っていたのだ。

「貴女は今、無事に帰ってきた。経緯はどうあれ、それが全てだ」

実際、ホワイトの体には傷一つ付いていない。

むしろ温泉に入り、氣力を回復させる日本酒を口にしたことにより、その体は元氣になつたほどだ。

何より、その頭上には——神々しいまでの「天使の輪」が浮かんでいる。

「念のために言っておくが——今日のことは、他言は無用だ」

「はい……」

ホワイトが何処か、力無く頷く。

言われずとも、このような事を軽々しく口にすることはできないだろう。下手をすれば、一国に大混乱を引き起こしかねない。

熾天使が残した奇跡を、同じように使える存在が居るなど。

天使の頭上にのみ輝く神聖な輪を、誰かに与えることができる存在が居るなど。

「もう一度言っておく——他言は無用だ」

「は、はい……！」

必死さすら感じる声に、ホワイトが慌てて頷く。

だが、彼女は問わざるを得なかった。

「貴方は、いったい何者なのですか？ 私は、もう分からなくなりました……」

その問いに、魔王も珍しく思案顔となる。

自分でも分からなかったに違いない。その体は魔王と呼ばれるGAMEのキャラクターであり、その中には現代の日本人である「大野晶」が居るのだ。何者だ、などと問われても説明に苦しむのが当然であった。やがて、意を決したように魔王が口が開く。

「私はいずれ、貴女に協力を願いたいことがあつてね。以前にも言った、熾天使のことについて調べたいのですよ」

「どうして、熾天使様を……」

「——私が『座天使』に呼ばれた存在だからだ」

「座天使様に!?!」

ホワイトの顔に驚愕が浮かぶ。

だが、何かに納得したのかホワイトの表情が面白いくらいに変わっていく。今の話が真実なら、腑に落ちなかったことの数々に説明がつくのだから。

あの我俣の塊でありながらも、智天使には深い信仰を捧げていたルナが、どうしてこれほどに傾倒したのか。あの扱い辛いマダムまでが、その足元に駆け寄るかのようにして中央から離れたことも。

熾天使と同じ、『奇跡を行使』することも。

天使の輪を人に与える、などというありえない御業を行えることも。

あの、人の手によって作られたとは思えない摩訶不思議な施設も。

ホワイトの思考が頭の中でグルグルと回り、点が線で繋がっていく。

「貴方は、熾天使様と敵対する存在なのですか……？」

「少なくとも、私にその気は無い。幾つか疑問をぶつきたいだけでね」

それだけ言うと、魔王がようやく腰から手を離す。話に集中しすぎて、くっ付いたままだったことを今頃になって気付いたのだろう。

魔王は何を思ったのか、ホワイトの頭から天使の輪を外したり、また載せたりと、何度かその行為を繰り返し、真剣な目でホワイトを見つめた。

「あう……あ、あの……」

「やはり、貴女は天使の輪がよく似合う」

「~~~~~ッ！」

ホワイトが何か言いかけたが、魔王はそのまま漆黒のコートを翻す。その背から、落ち着いた深い声が響いた。

「では、また会おう——聖女ホワイト」

その言葉を残し、魔王の姿が消えた。

ホワイトはその場に立ち竦み、暫く呆然としていたが、やがて頭から天使の輪を外し、ぎゅっとその大きな胸に抱きしめる。

その頬は心なしか赤く染まり、嬉しそうであった。

ホワイトの頭に浮かぶのは幾つかの仮説——

著名な天使である、ルシファーなどだ。

古に大いなる光に齒向かい、伝承では墮天使とも魔王ともサタン記されている存在。

伝承には残っておらずとも、他にも似たような存在は居るだろう。

古い伝承では悪魔でありながらも、天使側に属した存在も居るのだから。

(天使様の、輪……)

ホワイトの手にある輪は、その輝きを一向に失うことなく、目が眩むほどの神聖な光を放っている。彼女からすれば、こんなものを作り出せる存在が、悪しき存在であると

はどうしても思えなくなったのだ。

(私がきつと、貴方を元の天使様に……)

天使の輪を抱き締めながら、ホワイトは嬉しそうに目を閉じた。



——夜 ラビの村

(まるで黒○げ危機一髪だったな……刺し所が悪ければ首が飛んでたぞ)

温泉旅館の縁側に座り、魔王が月を見上げて一服していた。

何か大仕事でも成し遂げたような、男の顔である。

傍目から見れば聖女の裸を見て、混浴を楽しみ、日本酒を飲ませて全てを有耶無耶にした屑の所業でしかなかったが、その顔には誇らしさすら浮かんでいた。

「魔王様っ、ここに居たんですわね」

「ん、アクか……ここに来るといい」

魔王が隣を指したが、アクはそのまま膝の上に乗る。

最近のアクはもう遠慮なしにくっ付き、躊躇がない。魔王もアクに関して好きにさせているのだが、このときばかりは少し困惑した表情を浮かべていた。

アクは今日も黄色い浴衣を着ており、そのお尻の柔らかさがダイレクトに太腿へと伝わっているのだ。

「いいか、アク。今は良いかも知れんが、男とは適度な距離を取ることだ。この警戒心の無さは流石に心配になってくるぞ」

「魔王様以外の男の人に、近付いたりなんてしないですっつ」

「そうかあ……？　ならいいんだが……」

「はいっ」

アクがその背中を魔王へと預け、その力を抜く。

全幅の信頼といったところだろう。

何だかんだで魔王もその体を引き寄せ、頭を撫でていた。

「魔王様は明日から、北へ行かれるんですよね？」

「とは言つても、私には全移動があるからな。いつでも帰れる旅など、旅の範疇にも入らんよ」

「……はい。でも、寂しいです」

アクが魔王のシャツを掴み、上目遣いで見上げる。それを見て魔王が一瞬、困ったような表情を浮かべたが、明るい声で返す。

「面白いものがあれば土産に買ってこよう。楽しみに待っているといい」

「……魔王様、無事に帰ってきてくださいね？」

「ははっ、私を誰だと思ってる」

そう、この男はふざけた面も多いが、正真正銘の「魔王」なのだ。

その配下たる側近もまた、常軌を逸した戦力を宿している。

この男が本気で「その気」になつてしまえば、この大陸どころか、全世界に途方も無

い流血が齎されるだろう。

「アク、何処に行ったのよ？ 抱き枕になりなさいって言ったでしょ！」

「ルナは横暴なの」

廊下の向こうから慌しい足音が響き、ルナとトロンがその姿を現した。

「アクなら私の膝の上だぞ」

「こ、この変態！ 私のお尻だけじゃなく、アクのお尻までっ！」

「そういえば、伝えるのを忘れていたが、お前の姉は城に送っておいたぞ」

「あ、あああんと、まさかお姉様まで毒牙に!？」

「眠いからそろそろ寝るの」

魔王の言葉にルナが騒ぎ出したが、トロンがその名の通り、眠そうな声をあげたことによりお開きとなった。お開きといっても、場所が部屋に移っただけである。

いつもの面子が、いつもの騒ぎを起こし、いつものようにキツズに囲まれながら魔王の布団がぎゅうぎゅうに埋まる。

右側にはアク、左側にはルナ、そして体の上にはトロンまで覆い被さっていた。まさに、魔のトライアングルである。

(寝れるわけないだろ！ いい加減にしろ！)

こうして魔王は一睡もできないまま——旅立ちの朝を迎えた。



——翌朝。

空はまだ仄暗かったが、村の入り口には既に大きな馬車が止まっている。

中にはユキカゼとミカンが乗っているのだろう。

大人が優に八人は乗れる大型の馬車だ。

見送りなどを魔王が嫌ったため、ここに居るのは田原と悠のみである。実際、全移動の性能を考えれば、大袈裟な見送りなど無用であった。

「悠、病院のことは任せる。我々の評判を高めるように努めよ」

「はい、万事お任せください。あつ、長官……ネクタイが」

悠が魔王の下へと歩み寄り、そのネクタイを優しい手付きで正す。

別にネクタイは曲がついていなかったのだが、単にしてみたかったのだろう。その姿だけ見ていると、単身赴任に赴く夫を見送る妻のようであった。

「田原、お前には村の全般を任せる。緊急の案件があれば、いつでも《通信》を飛ばしてくるように」

「りよ〜かい。つても、長官殿を煩わせるようなへマはしねえつもりだけどナ」

実際、田原が処理できないような案件など、余程の事態であろう。

天才が処理できないことを、*“大野晶”*が処理できるはずもないのだから。この魔王が動くとき、それは即ち——*“実力行使”*を伴うときでしかありえない。

魔王が村の全体を見渡すように視線を向ける。

まだ完全に夜明けを迎えていない空の下、何人かのバニーが畑へと出て作業を開始していた。農家の朝は早いのだろう。

村のあちこちに目をやると、数時間後には再開されるであろう、大掛かりな作業が幾

つも残されていた。

村が、変わる。

変わっていく。

ただ、一人の男が訪れたことによって。

(ここ)まで巻き込んでしまつたら、徹底的にやり抜くしかないな)

魔王の漆黒の瞳に、温泉旅館が映る。

あそこにも魔王と出逢つたことにより、大きく運命が変わつた者が何人も居る。

守るべきものが増えた――

魔王が目を閉じ、素直なまでの気持ちでそう思う。

そして、それらを守るためには、より強くならなくてはならないと考える。魔法という弱点を克服しなければ、いつか必ずその点を突かれることになるのだから。

魔王が再び目を開いたとき――

嬉しそうにネクタイを直し終えた悠の手が止まった。

そこに、絶対的な力を持つ“神”の存在を垣間見たからだ。

——田原、指示に一つ付け加える。

「この村に害意を持って近付く者が居れば、消せ。一人残らずだ。いいな？」

「……了解」

田原が短く答える。

表情だけは辛うじて変えなかったものの、その身体は震えていた。魔王の肉体から、彼をもつてしても到底抗いようなない“絶対の力”を感じたからだ。

魔王が漆黒のコートを翻し、大型の馬車へと乗り込む。

同時に、馬車が勢いよく走り出した。田原と悠は馬車の姿が見えなくなるまで、その場でただ、立ち竦んでいた。

やがて、田原がポツリと洩らす。

「俺あよ、どういいうわけか……さつき懐かしい記憶が浮かんでなあ」

「懐かしい記憶？」

「長官殿と、初めて会った日のことをな」

「……興味深いわね」

田原がポケットから煙草を取り出し、火を点ける。無造作に入っていた所為か、煙草は皺くちやになっていたが、全く気にならないらしい。

「別にどうって話じゃねえよ。ただ、あのときな……もしも長官殿の誘いを断ってたら——俺あ、死んでただらうなって」

田原の言葉に何か想う所があったのか、悠も黙り込む。

二人とも、いや、不夜城に居た委員会のメンバー達は全員が魔王からスカウトされて集まった面々なのだ。その出会いも、経緯も、其々が違う形ではあっても、あの「魔王」こそが、全ての始まりなのである。

「あんなもん、逆立ちしても勝てっこねえわ」

「当たり前じゃない。貴方なんて長官と比べたらゾウリムシよ」

「お前な、もうちよつとマシな喻えはねえのかあ？」

「長官……早くお戻りにならないかしら」

「行つたばつかだろうが！」

側近二人が騒いでいるあいだも、馬車は進んでいく。

魔王を乗せた馬車が目指す方向は——戦乱渦巻く、北の大地。

そこでは新たな出会いと、数々の迷宮や遺跡が彼を出迎えることだろう。

魔王が齎す混乱は、遂に大陸中央部にまで広がっていくことになるが……

——それはもう少し、先のお話。

四章 — 魔王の躍動 — F I N

記録 とあるチャットにて

NEO UNIVERSE

「大野さん、本気ですか？ ここを消すって」

「消すと言うか、新しく生まれ変わらせるって感じですよ」

「いや、消すってことじゃないですか。変な誤魔化しは止めてくださいよ」
「誤魔化しとかじゃなくて、次へ持っていくってことですよ」

カタカタカタカタ。

チャットが鳴る。

1999年。

恐怖の大王に世間は大騒ぎ。

「ここを、この空間を楽しんでいる人はどうなるんです？」

「勿論、そのまま次の方へ来てもらえれば」

「……大野さん、勝手ですよ。そりゃ、貴方の作ったゲームでしょうけど」

「得た経験や知識を、次に引き継ぐつてのは普通のことだと思いますよ」

カタカタカタカタ。

チャットが鳴る。

恐怖の大王なんて居なかった。

2000年。

NEO UNIVERSE。

世界は新たなページを開く。

「それって、切り捨てられる側のことは考えてませんよね？」

「切り捨てるって……さつきから言い方が大袈裟じゃないですか？」

カタカタカタカタ。

チャットが鳴る。

Millennium

何処もかしこも大騒ぎ。

だって、世界が変わる。

「僕がここが好きでした。だから、次なんて言われても正直、腹立たしいです」

「きつと、満足してもらえようなものにしますよ」

「何か、さつきから話が噛み合っていないんですけど……」

——XXXが入室しました。

「お前ら、さつきから喧嘩しすぎwwこんなときに揉めんなよwwww2000年だぞ！

ウエーイ！ 飲め飲め！」

「僕はそんな気分じゃないですね。今日は落ちます」

——XXXが退室しました。

「参ったなあ……喜んでもらえらと思っただけだ」

「あいつはここ、メツチャ好きだったもんなwww実家レベルwww」

「次のゲームの方が絶対面白いんだよ。ぶっちゃけ、自信がある」

「お前はほんと自信家だよな。俺にもハロワに行く勇気を分けてくれww」

「じゃあ、飲んでないでハロワ行けよ（笑）」

「イヤでござる！ 記念すべき2000年に働きたくないでござる！」

カタカタカタカタ。

新しい千年紀が始まる。

2000年。

さあ、輝かしい一步を踏み出そう。

「……何つか、出会いと別れってあるもんだな」

「はい？ww酔ってんのか？ww」

「まあ、良いさ。見とけよ、次はもつと人が集まるゲームにしてみせるから」

「おうよ、お前が何処へ行こうとウチは付いていくわww暇だしww」

「いや、仕事しろよ」

カタカタカタカタ。

「つかさ、恐怖の大王来なかったじゃんww世界ぶっ壊してくれっかなーって期待して

「ただけどwwノストラダムスマジ使えねえwww」

「お前、あれ系のオカルト好きだよな……」

「晶はああいうの嫌いだよ？ww」

「何が恐怖の大王だ。次のゲームで、本物の魔王つてやつを見せてやるよ」

カタカタカタカタ。

世界が消える。

五章 恋の迷宮

大帝国と異世界

— D I V E T O G A M E —

大帝国が存在する世界。

そこは、一部の人間が新たな能力に目覚めた世界。

それはスキルであり、特殊能力。

大帝国が存在する世界。

そこは、全てが数値化された世界。

大帝国が存在する世界。

そこは、〃ここ〃ではない世界。

——間違った未来。

全世界へ侵略を開始した〃帝国〃は快進撃を続け、およそ世界の六割にも及ぶ版図を手中へと収めた。彼らの技術力が、桁違いに優れていた所為である。

そして、自国から新たな力に目覚めた「能力者」が多く誕生したためでもあった。抜きん出た科学力と、能力者——

その両輪が帝国を狂わせ、奔らせた。

結果、世界に「大帝国」と呼ばれる人類史上最も残酷で、最も最悪な、そして、最も絢爛豪華な国家が誕生した。

しかし、大帝国の進撃は世界の六割を収めた時点で停止する。

その版図が、余りにも巨大になりすぎたのだ。

当然、属国にされた国々がそのまま黙っているはずもなく、世界にはテロとクーデターが嵐が吹き荒れることとなった。

そして、多くの利権を巡って内部での対立・分裂が頻発し、大帝国は陸に打ち上げられたクジラのごとく、自らの巨体を持って余し、身動きが取れなくなつたのだ。

下を見れば、毎日のようにテロが発生する地獄の世界が出来上がり、上を見れば離散集合を繰り返す、愚かな高官の群れが出来上がった。

そんなときである。

一人の男が、大帝国の上層部に「一つの案」を提出した。

それは、とても愉快的ゲーム。

それは、とても幸福なゲーム。

大帝国の民たる「神民」を笑顔にし、属国の「国民」にすら救済を与える。

何事にも絢爛豪華なる事を好む大帝国は、「無粋」な弾圧や虐殺ではなく――

この「GAME」を以って逆上せ上がった属国への鉄槌とし、徹底的に内部の引き締めを図っていく方針を固めた。そう、このGAMEへ送られる参加者は国民だけでなく、失敗を犯した中枢部の人間や、失脚した高官すら含まれる案であったのだ。

昨日までの勝者も、しくじれば断頭台^{G A M E}へと送られる。

上にも下にも、一切の容赦が無い極彩色の地獄絵図。

その案を描き、提出した男の名を九内伯斗という。

後に――「大帝国の魔王」と呼ばれる男であった。



(寝ていたのか……何だか、懐かしいものを思い出したな……)

馬車の心地良い揺れに、眠っていた魔王が目を覚ます。

昨夜、一睡もできなかったのが原因だろう。加えて、この大型馬車は横になって休めるような作りになっているのだ。

冒険者特有の簡易キャンプを兼ねた馬車と言っている。魔王が上半身を起こすと、膝に微かな重みがあることに気付く。

「おい、何でこいつは私の膝で寝ているんだ……」

「私に聞かれたって、知らないわよ」

ユキカゼが静かな寝息を立て、魔王の膝で熟睡していた。

その寝顔は夢げな雪のようであり、絵に描いたような美少女である。魔王の感覚では、TVなどに映っていたアイドルよりも可憐な雰囲気であった。

ユキカゼの性別を知れば、流石の魔王も顔色を変えるだろう。

(ダメだ、まだ頭がぼーっとしてるな……)

寝不足が祟っているのか、魔王が眠そうな表情で馬車の外へと目をやる。

そこには代わり映えない乾いた大地と、乾燥した空気があった。彼は寝起きに数字を見て目を冴えさせることが多いのだが、生憎と腕時計は村へ置いてきている。迷宮に潜ることを考え、破損を恐れたのだ。

「ミカンと言ったな。今は、何年の何月だ……?」

「……はい?」

「いいから答えろ」

「何なのよ……『聖暦』2000年の七月十日ですけど!」

「……2000年か。ははっ」

魔王が乾いた、何かを懐かしむような笑い声を上げる。何を笑ったのか、何を懐かしんでいるのか、ミカンからすればサッパリ分からない。

只でさえ不機嫌だった彼女の顔が、余計に険しくなっていく。

(不思議なものだな。年や月、時間や言語まで同じなのだから……)

ひらがな、カタカナ、漢字、それに英語。

その辺りが混ざり合っているのも現代の日本とそっくりであり、まんまコピーしたかのような観があった。魔王からすれば、非常に都合が良いものだ。

だが、魔王の頭に浮かんだのは全く別の感想である。

(何と言うか…… “雑な仕事” だよな……)

その考えの方向が正しいにせよ、間違っているにせよ、この男からすれば、それが一番しっくりくる “答え” であった。現代日本の基本情報をコピーして、貼り付けただけの簡単なお仕事です、とでも言わんばかりなのだから。

「確か、今は “戦争期” とか言っていたな？」

「……………」

「聞こえなかったのか？ 冷凍ミカン」

「誰が冷凍だ！ あんたね、さつきから質問が多すぎなのよ！」

ミカンが赤い髪を揺らし、魔王に噛み付く。瞳まで赤い彼女が唸ると、細い体も相俟って、何処かドーベルマンを思わせるような野生的な雰囲気があった。

その肌も褐色であり、大きく肩を出した身軽そうな服と、短いスカートから覗く足が健康的な色気を感じさせる。

「何度も聞かれると面倒だから一気に答えるわよ！ 北方諸国は四月から九月までが戦争期！ 十月から三月までは休戦期！ 分かった!？」

「すまんが、早口で何を言ってるのか分からなかった。もう一度言ってくれ」

「もおお……面倒臭いわねえ……！ 北方諸国はく〜」

「すまんが、ユキカゼのイビキで聞こえなかった。もう一度頼む」

「静かに寝てんでしようがッ！」

ミカンが赤い髪を逆立て、魔王が肩を揺らして笑う。

この男は、ミカンのような女をからかうのが好きなのだ。当然、ミカンからすれば迷惑以外の何物でもないだろうが。

「大体、あんたって本当に“人間”なの？　カーニバルをあんな風に倒すとか……とても人間とは思えないんだけど？」

「失礼なことを言うな、私は人間だ」

「言つとくけど、人間っていうのはね——うわわっ！」

ミカンが興奮しながら立ち上がったが、石でも踏んだのか馬車が軽く揺れる。

バランスを崩したミカンが倒れ、履いていた赤色の下着が魔王の目に飛び込んできた。暫しの間——馬車内に沈黙が続く。

「……………たでしょ」

「ん？」

「今、私の下着……見たでしょ……」

「私の瞳に映るのは——今も昔も、青い空だけだ」

魔王が自信満々の態度で、よく分からない事を口にする。

それを聞いたミカンの体は、プルプルと震えていた。

「意味不明な言い訳をするなッ！　一瞬だけ『戦士の目』になつてたじゃない！」

「まあ、『夕焼け』も空に含まれるがな」

「い、色までしつかり見てんじゃないッ！」

「私は空の話をしてるんだが……君はさっきから何を言っているのかね？」

魔王がやれやれ、と首を竦める。

この男は相手が責めてきても、逆ねじを食わせることに長けている。先程の『赤』をしつかりと脳内フォルダに保管しながら、何食わぬ顔をしていた。

まさに——許し難い邪悪な存在である。

「何で、私の周りにはこんなのぼっかりなのよ……！」

ミカンが頭を抱え、その声でユキカゼが目を覚ます。

その姿は寝起きの雪の妖精、とでも言った風情であつた。

「……おじ様の膝、とてもカチカ——あむ」

「妙なことを口走らんよう、これでも舐めておけ」

魔王も学習したのだろう。ユキカゼが口を開く前にキャンデーを放り込む。

GAMEでは気力を5しか回復してくれないゴミアイテムであったが、数が10個単位で拾えるため、緊急時以外ではそれなりに使われていたものだ。

例によって、これもイチゴ味やコーラ味など無駄に様々な味が用意されていた。

「……ふおじ様の、あやあい」

「これが、大人の知恵というものだ」

魔王が誇らしげに笑い、もう一つのキャンデーをミカンへ放り投げる。

特に狙ったわけではなかったが、それはミカン味であった。

「……あんたの出したものなんて、信用できない」

「女性が好む甘味なのだな」

「砂糖で気を引こうってわけ？ 私はそんなやつすい女じゃないんですけど」

ミカンが鞆を漁り、中から一つの魔道具を取り出す。

それは紅白の旗を持った、妙な人形であった。魔王の目が訝しげに人形へと向けられ、哀れみを含んだ声を洩らす。

「君は……まだ人形遊びを卒業してないのか？」

「バツ……これはね、《とりま使つとけ君》よ！　これを知らないとか、あんたの一般常識、どうなってるのよ」

「その名称の方が、よほど非常識だと思うが……」

「はいいい？　分かりやすくして良いじゃないのよ」

ミカンが掌に載せたキャンディーに人形を向ける。

やがて人形は厳かに白い旗を揚げ「おk」と声を上げた。

その姿に魔王が座りながらズツこける。

「何だ、その非常識の塊は！」

「フン、非常識の塊はあんたでしょうが。これはね、食べ物や飲み物に危険なものが入っていないか教えてくれる、貴重な物なんだから」

事実、その魔道具は非常に有名である。

聖職者などが扱う《天使のスプーン》と同じ効果があるのだ。パーティーに聖職者が居ない冒険者にとっては、垂涎の品とっていい。

「それも、迷宮とやらで入手したものなのか？」

「ううん、これは都市国家まで行って買ったのよ。高い金を払っただけの価値はあったけど……つて、あつまゝゝゝい！」

包装を解き、キャンディーを口に入れたミカンが思わず叫ぶ。

この世界の甘味といえば、やはり代表的なのは砂糖であろう。他にあげるとすれば果物だが、キャンディーのようなものは存在するはずもない。

初めての味覚に、ミカンの顔がつい綻ぶ。

「これ、ミカンの味がする。私の味だ……」

「……私の味。ミカンは変態」

「あんたは黙ってて！」

二人が騒いでいるのを横目に、魔王は別のことを考えていた。

それは、都市国家と呼ばれている地域のこと。現代の地球にはそんな国がないため、いまいち想像が付かないのだろう。

「都市国家について、少し聞かせてくれるか」

「あんたに説明なんて、二度とごめんよ！」

「……おじ様、私が答える。答えたらまたペロペロしたい」

ミカンがそっぽを向き、ユキカゼが怪しいことを口にしていたが、魔王はそれには突っ込まずに質問を続けた。

無知でいられる期間はまだもう過ぎた——そう考えているのだろう。

ユキカゼから都市国家の概要を聞いてみるも、魔王の頭にはすんなりとは入ってこない。一つ一つの都市が国であり、それらが一つの集合体となって大きな国家になっていると言っただ。

其々の都市が自治権を持ち、法も違うが、包括的に一つの国を名乗っている。

当然、それは北方諸国の争いから身を守るために生まれた一種の自衛・同盟的な国家なのだが、魔王からすれば身近には存在しなかった国であり、システムだ。

(諭えるなら東京国、埼玉国、神奈川国、とかが集まって「関東王国」みたいに名乗っているということか？ 一つ一つの県では対処できない問題も、多くの県が集まれば話は変わってくるだろうしな)

魔王の頭に浮かぶのは、当然のように日本地図である。

それらを暫定の概要として、魔王は頭の片隅へと置いた。あくまで、暫定だ。

彼は基本、自分の目で見て、自分の耳で聞き、自分の鼻で嗅いだものを信用し、それを以って判断の中心に据えていく。

一見、そこからは冷静な人物像が浮かび上がってくるが、少し違う。

そこから見えるものは、常に「自分を中心」に据えているということだ。

何事も自分が判断し、自分の判断に重きを置いている。

時と場合によっては、容易く独善に陥るタイプであろう。

だが、幸か不幸かこの男は——魔王であった。

頂点に立つ「独裁者」としては、それは得難い資質の一つである。常に自分の判断で、自分の意思だけを貫いていく。

歴史上、こういった人物が権力を握れば、善悪両面に大きな結果や被害を生む。

「いずれ、都市国家とやらにも行ってみるか」

「……おじ様、そのときは私も連れて行ってほしい」

「私は行かないからね！ 絶対にッ！」

騒がしい馬車の旅が続き、やがてヤホーの街を越え、国境の砦を越えていく。

本来、この時期に国境を越えるなど、余程の事が無ければできないのだが、魔王が差し出したマダムからの書状が、それを易々と可能にした。

まさに——手にした“人脈”の力である。

ルーキー

——地下 某所

「龍め……このままでは済まさんぞ……」

ユートピアはあれ以来、苛立ちを隠せずにいた。長い時間をかけて作り上げた“逆十字”を三個も消費し、そのうえで何の成果も得られなかったのだ。

力ある中級悪魔カーニバルが消滅し、闇公爵とまで謳われる上級悪魔オルイットまでが消滅した。

——悪魔が、悪夢を見ている。

ユートピアの目論見では、聖城を破壊することは流石に難しくとも、せめて聖城を覆う結果へ、大きなダメージを与えることは可能であると踏んでいたのだ。

それが、“魔王”と“龍人”などという冗談としか思えないイレギュラーによって、

計画を滅茶苦茶に壊されてしまった。

笑うに笑えない、とはこのことだろう。

当然、ユートピアは魔王の復活などを信じているわけではない。

お伽噺のような存在ではあるが、そんなものが復活したのであればとうに魔族領へと姿を現し、あらゆる魔を支配していることだろう。

そして、今頃は大陸の全てを席捲し、血の雨を降らせているに違いない。

むしろ、魔王と名乗るような詐欺師めいた男よりも、ユートピアからすればとても無視できない存在が浮かび上がってきたのだ。

自然、彼の意識もそちらへと向かざるを得ない。

そう——“もう片方”の存在だ。

一度だけであれば単なる噂で済ませることもできたが、二度目である。

彼らからすれば、殺しても飽き足りない——“龍”だ。

中立を気取りながらも、実質的には獣人達の頂点に居座る存在。

龍は度々、魔族と獣人との争いに介入した。

そして、最終的には「住処を荒らされた」と獣人側へ肩入れし、幾万もの魔族を巨大

な力で踏み躪ってきたのだ。そのうえ、自らの力と血を分け与えた「龍人」まで獣人の纏め役として地に送った。

その名目は「荒々しい獣人を一つに纏めさせ、魔族との下らぬ諍いを起こさぬようにするため」というものである。魔族からすれば、龍の力を持つ存在を片方にだけ送り込んでおいて「何が中立か」と叫びたかったに違いない。

それだけに、もう一人現れたという「龍人」の存在は、到底無視できるような存在ではなかった。魔族の立場で考えるなら、それは忌々しい龍から新たに送られた刺客ではないのだから。

「ユートピア様……この群れは何処から……」

思案に耽っていたユートピアに、ウォーキングが声をかける。

そこには老若男女、様々な人間が集められていたのだ。誰もが痩せ細り、何かを訴える気力もないのか、身動きすることすら億劫そうであった。

「心配することはありませんよ。『救い』を与えるのです」

「……救い、とは？」

ウオーキングが訝しげにユートピアを見る。

彼からすれば、最近のユートピアは変なのだ。これまでは偉大なる首領、導く者として常に余裕のある態度であったのだが、このところは妙に苛立ち、小さなことでも声を荒げることが多くなった。

「幸福に様々な形があるように、救いにも様々な形があるのですよ」

禅問答のような言葉に、ウオーキングは心の中で溜息をついた。

まともに答えるつもりがないのだ、と。

先の戦いでは、サタニストの多くが死んだ。その中には、ウオーキングとソリが合わなかった者も多い。

血気盛んで、狂人のような者までいるサタニストの集団の中において、彼は理詰めです事を進めていくタイプであり、集団の中では浮いた存在であったのだ。

ただただ、殺せ壊せと周囲が叫ぶ中、彼は一人、綿密に計画を立て、聖女を待ち伏せて奈落を使った。現に、後一步のところまで追い詰めることができたのだ。

結果だけ見れば計画は失敗に終わってしまったが、零というイレギュラーがあった所

為であり、彼の立てた計画は決して間違つてはいなかった。

だと言うのに、彼に残つたのはおめおめと逃げ帰つてきた臆病者、という評判だけである。

古来、閉鎖された集団にありがちな、生きて帰ることを恥とする風潮である。相手と刺し違える覚悟こそが美である、というものだ。

(馬鹿馬鹿しい……死んで何になるというのか……)

ただ、ウォーキングにはこの国を良くしたいという理想が根っこにあるため、それらの風潮を良しとはしていない。

死ねばそれまでであり、この国を変えることができないのだから。

(我々はいつたい、何処に向かっているのだろうか……)

ウォーキングは玉座へと目をやり、ふと、そんなことを頭に浮かべた。



— 聖光国 ドナ・ドナの館

アズールがその扉を開けたとき、僅かにその秀麗な顔を歪めた。

屈強な男が少女に馬乗りとなり、力のままに拳を振り下ろしていたのだ。少女は顔だけでなく、全身のあちこちが青痣や内出血で血膨れしており、何か肉の詰まった袋のような有様となっていた。

「ミリガン、また貧民の少女を攫ってきたのですか」

「そう怖い顔すんなって、旦那よお。こりやあ遊びよ、遊び」

少女はとうに絶命している。

だが、男は一向に気にせず死体を眺っていたのだ。

「旦那様の評判が落ちる。前にもそう言っただけです」

「固えこと言うなって。それこそ、ドナの旦那が一番遊んでるじゃねえか」

この男の名はミリガン。随分前からドナに雇われている傭兵の一人であり、立場としてはアズールの方が上なのだが、彼に対する命令権はない。

ドナはミリガンの凶暴さを気に入っており、好きにさせているのだ。手元に一匹は置いておきたい猛犬、といったところだろう。

「旦那様からの命令を伝えます。ラビの村に赴き、調査を——」

「へえ！ やつとバニーと遊んでいいってか!? こりやいやー!」

「ミリガン、私は調査と言いました」

「ドナの旦那はそんなケチ臭えことは言わねえさ。遊んでこいつてこつたる?」

アズールの目付きが変わる。

その見た目も服装も秀麗な執事にしか見えないが、彼は暗殺者なのだ。

「調査、ですよ。旦那様の言葉を、勝手に解釈されては困ります」

「チツ……分かったよ。つたく、何て目えしやがる」

ミリガンが舌打ちしながら部屋を出ていき、アズールは鈴を鳴らし、男の使用人を呼

んだ。女性の使用人には、この惨状を見せられないと思ったのだろう。

「彼女を埋葬するように。せめて、丁重に」

「はい」

使用人達も慣れたもので、手早く黒い布で少女を包むと屋敷の外へと運び出す。

その顔にはあまり感情らしい感情がない。

金のため、と心を殺しながら働いているのだろう。

事実、ドナの館で働けば給金は良いのだ。だが、最初は嬉しそうにしていた者も、次第に顔を曇らせ、最後は無表情になっていく。

アズールからすれば、ここは黄金に満ちた“顔無しの館”なのだ。

（私も、顔無しの一人ですがね……）

自嘲気味に唇を歪めながら、アズールはラビの村のことを考える。

魔王を名乗る男が居る村。

何故かその男は北へと向かい、国境を越えたという。

彼の主であるドナはそれを聞いて早速、動いたのだ。

魔王に接触することは禁じられたが、その男が不在であるなら村を調べても一向に構わんだらう、という子供のような理屈でだ。

事実、彼の子供っぽさを止められるような存在は居ない。ドナがギリギリのラインで踏みとどまっているのは、ホワイトの存在があるからだ。

(下手をすれば、村にオルゴールのような物があれば盗んでこい、との内命を含んでいるのかも知れませんか)

オルゴールを目の前で搔つ攫われたことが、余程に屈辱だったのだろう。

ドナは日夜、カキフライへの呪詛を口にしていた。

それほどに欲していたのなら、それこそ大金貨百枚とでも書けば良さそうなものだが、その辺りは貴族特有の感覚があつて非常に難しいのだ。

一度限りの心理戦で読み合い、ギリギリのラインで相手に競り勝つ――

この華麗さが勝利であり、貴族なのだ。大金貨百枚、などと紙を入れて読み上げられれば、周囲は白けるだけであらう。

尊敬どころか、顰蹙を買いかねない。

(ミリガンか……どう考えても、騒ぎを起こすでしょうね)

アズールはそう思ったが、それを止めることはできない。

彼はドナが抱える直属の子飼いであり、誰の命令を聞く必要もないのだから。アズールとしては、せめて騒ぎが小さい規模で済むように願うだけであった。

無論、そんな甘い考えが通るわけもない――

あの村には魔王が信を置く男と、恐ろしい魔女がいるのだから。



――バーロー共和国 国境付近

魔王を乗せた馬車が、目的の街へ近付きつつあった。

北方諸国の中でも南東に位置し、山を隔てて獣人国にも接するバーロー共和国の中でも一番賑やかな街である。

「本当に国の名前なのか、それは……」

「威勢がよくていいじゃない。あんたは文句が多すぎ」

魔王はバーローという単語を聞き、とある少年探偵を頭に浮かべたのだが、それをミカンに話しても通じないだろう。

「街の名前は何と言うんだ？ まさかコーナンとかじゃないだろうな？」

「……ルーキーという街。そこには監獄迷宮があるの」

「ルーキーか。初心者が集まる街ということだな」

「……おじ様、鋭い」

ユキカゼが拍手し、魔王が格好付けながら馬車の外を見る。

ミカンが「バツカじゃないの？」と呟きながらキャンディーを口に放り込む。文句を言いながらも、キャンディーの甘さだけは気に入ったらしい。

「ちよ、つと、何これ！ 辛い！ 口がスースーするッ！」

「ほう、バツカ味にでも当たったかな？ 違った、ハツカ味か」

「……スースーする。ミカンは露出狂？」

「もう私、帰っていいかな！ いいよね!？」

ミカンが帰ろうとするのを程々に宥めつつ、魔王がルーキーの街について質問を重ねる。元々、ルーキーの街というのは、この監獄迷宮から派生した名なのだ。

本来は別の名前があつたのだが、初心者御用達ともいえる監獄迷宮に多くのルーキーが集まったため、分かりやすく改名されたものであつた。

「それにしても、監獄とは穏やかではないな」

「……迷宮の地下深くには、本当に牢獄のようなものがあるの」

「ほう、元は何かを捕らえておく施設だったということか？」

「……分からない。恋の監獄。ラブ・プリズン」

「お前の言語中枢はどうなっている？」

魔王の質問は続く。この男は普段は大雑把だが、必要だと思つたことは執拗なまでに知ろうとする。例えば、日常は部屋の掃除など放つたらかしでも、年末の掃除だけ徹底

的にやるタイプなどがいるが、あれに近いとっていい。

何故、迷宮に色々な物が落ちているのか？

何故、それらは枯れないのか？

迷宮に現れる魔物は、何処からきているのか？

その魔物は何故、狩り尽くされないのか？

魔物同士で繁殖でもしているのか？

言わば、魔王の質問は根源的なものばかりである。それらの質問には、ユキカゼもミカンも答えることができなかった。

むしろ、二人ともそんな疑問を考えたこともないのである。この世界で生を受けた者からすれば「そういうもの」であり、疑問にすらならない。

現代の街に電信柱が立っていても、現代人が何とも思わないのと似ている。

逆にこの異世界の住人が、街中に立っている電信柱や張り巡らされた電線などを見たら気になって根掘り葉掘り聞くに違いない。

「……おじ様は、牢獄に閉じ込めたい派？」

「お前は何の話をしているんだ」

「……それとも、牢獄に監禁されたい派？」

「どっちもお断りだ。私は束縛という単語が嫌いだね」

「……おじ様、格好良い」

ユキカゼが頬を染めながら魔王を見つめる。

実際、大したことを言っているわけではないのだが、その外見と、そこから醸し出される雰囲気、一つ一つの言葉を妙に重く響かせてしまうのだ。

それらを横目で見ながら、ミカンがしかめっ面で水を飲む。

ハツカ味がまだ残っているらしい。

「なくにが束縛は嫌いだね、よ。既に私のことを束縛してんじゃん」

「……ミカンは縛られたい派。ロウソクも好き」

「ほう——私は特殊な性嗜好を否定はせんが、程々にな？」

「こいつら、もういやあああああ！」

馬車内に悲痛な声が響きつつ、一行の前にルーキーの街が見えてきた。

前夜

——ルーキーの街

「中々に栄えているではないか」

魔王の口から明るい声が漏れる。

アクの村や、ラビの村を見たときは正反対の反応だ。この男は賑やかな街が嫌いではない。かと言って、寺などの鄙びた空気も悪くないと思っっている。

要するに、我侭なのだろう。

街を往く人間はやはり、というべきか冒険者の風体をしている者が多い。

剣を担いでいる者や、いかにも魔法使いといった姿や、ラクダのようなものに大きな荷物を括りつけている者もいた。

(しかし、思っていたより一般人も多いな。冒険者相手の商売か?)

そう、冒険者が多く集まるならそれに対する商売が成り立つ。

食料や飲料だけでなく、道具屋や宿屋なども必須になるだろうし、酒場や娼館などの娯楽施設も必要になってくる。

(古来、軍の駐屯地には自然と「街」が出来上がると聞いたものだが……)

確かに、魔王の考えは間違っていない。

軍などになると、何千・何万という「客」となるため、こんな美味しい商売はないといっただころだ。

「冒険者と、商売人だけではなく、裕福な身なりの者も多いな」

「この国は迷宮以外には何も無いからね。わざわざ獣人国と国境を接するリスクを抱えてまで、攻め込む馬鹿なんていないわよ」

「ふむ——つまりは体のいい「防波堤」というわけか」

「ま、そうね。そんな事情もあつて戦争期には避難してくる金持ちも多いのよ。言つとくけど、別にあんたに話してゐるわけじゃないからね。これは私の独り言だから」

ミカンがそつぽを向いて言う様に、魔王が思わず吹き出す。何だかんだで、根が親切なのだろう。

「いや、感謝する。私は自分に足りない部分を補ってくれる者や、自分にできないことができる存在を好む」

「好まれても迷惑ですから。これも独り言だけどね」

「それは残念。今回の礼に、塩みかん風呂に招待しようと思っただが」

「何よ、それ！ あ、これも独り言だけど……」

そつぽを向いていたミカンであつたが、つい魔王を見てしまう。

彼女は自分の名でもある果物が好きなのだ。

しかし、二人の会話を聞いていたユキカゼが、氷のような一言を放つ。

「……ミカンはミカンが好き。〃一人遊び〃が好き」

「ユキカゼは黙ってて！」

「……一人遊びとは、つま——むぐ！」

ミカンがユキカゼの口を押さえ、強引に口を塞ぐ。

白と褐色が絡み合い、昼間から何とも言えない姿であった。二人の騒ぎを耳に入れつつ、魔王は抜かりなく道行く人間や街並みへと目をやる。

全移動のため、というのもあるが、この男は自分の目で見たもの、感じたものを大切にすからであろう。聞いた知識も自分の中に一旦溶かし込み、全て自分の中のファイルを通してから頭へと蓄える。

一見、それは普通のことのようにも思えるが、この男は一事が万事、それなのだ。

それはやはり、異常であろう。

そこには、「他人が介入」する余地がない。

だからこそ——「大野晶」は十五年もの間、一人でコツコツと「世界」を作り続けることができた。

それは異常なまでの「意思の強さ」と、「閉鎖性」であろう。

一人で世界を創生し、一人で完結させ、一人で消滅させる。

その姿は神のようでもあり、独裁者のようでもあり、そして——「魔王」と呼ぶに相応しいものであった。



「安宿にしては、中々の部屋だな……」

魔王が部屋を見渡し、珍しそうな手付きで壁を撫でる。

彼の目から見れば、それは何らかの土でできた素材であると判断しているのだが、それにしては異様に固いのだ。当然、それは『土』の魔法で固められたものであり、詠唱者の力量によつては、コンクリートに匹敵する固さとなる。

この街に集まるルーキー達は、酒を飲んで騒ぎ、暴れる者も多いため、安宿であっても頑丈な作りになっている。ドアや椅子一つとっても、非常にしつかりとした作りであった。

「……おじ様、どうして安宿に？ お金がないなら私が養う」

「何故、私がヒモにならねばならん。それに、安宿に泊まるのも経験の一つだと思つてな……今しかできんことだ」

事実、魔王は今のところ、金には困ってはいない。

悠が入手したラムダ聖貨を大金貨120枚で売り払い、そのうちの110枚を田原へと預けて残りの10枚を所持しているのだ。

一財産といつていいだろう。

それに、アクヤルナやトロンなどが居れば、気軽に安宿に泊まることなどできないだろうし、側近達が近くに居れば立場上、良い部屋に泊まる必要が出てくる。

単独で動いている今だからこそできることであつた。

「……今後は私が養う。三食昼寝付き。朝も夜もおじ様にござ奉仕する」

「お前は完全にダメ男製造機だな」

「……おじ様は家で寝て暮らすの。夜は私が全てを受け止める」

「ダメ男どころか、廃人製造機ではないか……」

魔王が顔を顰めながら、髪を後ろで束ねる。

ホワイトとの一件以来、リラックスした部屋の中などではゴムを使って髪を纏めるところが多くなっている。

単純に「大野晶」は長髪にしたことがないため、慣れないのだろう。

「……おじ様は、髪を切らないの？」

「まあ、作ったときの“こだわり”でな」

「……作った?？」

「気にするな」

「……でも、束ねた顔も素敵。おじ様、格好良い」

ユキカゼがつま先で立ち、魔王の髪を両手で触る。

彼女(?)の目には、この“黒髪”が非常にエキゾチックに映っているのだ。

身に纏っている服といい、黒曜石のような瞳といい、黒髪といい、全身の全てから“異国の香り”が漂っている。

そのうえで——あの圧巻の強さである。

人間以外の種族も多いこの世界では、人の立場は決して強くない。

一部の例外を除いては、様々な意味で“食い物”にされることも多いのだ。この世界では当然、強さとは正義でもあり、格好良さでもあり、ステータスでもある。

魔王などと呼ばれるこの男が、冒険者には妙に人気が高いのも当然であった。

彼ら、彼女らにしてみれば、強さこそが第一なのだから。

「ひとまず、今日は休んで明日から監獄迷宮とやらに行ってみるか」

「……おじ様となら、監獄に閉じ込められてもいい」

「今更だが——お前は幾つなんだ？」

「……16になった。ミカンは一つ上」

それを聞いて、魔王は「ガキだな」と洩らす。

彼の感覚では、一般的な高校を卒業する18ぐらいから、ようやく大人への一歩と
いったところだ。完全に大人扱いして良いのは20歳からだろう、というのがあ
る。

「ま、ガキのうちは大いに遊んで、大いに食って、大いに女を磨くといひさ」

魔王がユキカゼの襟首を掴み、猫のようにして部屋の外へと運ぶ。

そのまま軽く手を振り、容赦なくドアを閉めた。絶世の美少女(?)からこれだけ言
い寄られても、まるで動じない姿である。

だが、それに対するユキカゼは——

「……おじ様、私のことをやっぱり『大切』にしてくれてる」

更に勘違いを加速させていた。

魔王はユキカゼに対し、必要や大切といった言葉を度々放っており、ユキカゼの中では既に相思相愛なのだ。結婚式は何処で挙げようか、などと妄想しているレベルであり、魔王が聞いたら仰天するであろう。

だが、魔王の『意思の強さ』が尋常ではないのと同じく、ユキカゼの意思もまた、尋常なレベルではなかった。

二人の綱引きが今度どうなっていくのかは、まだ誰にも分からない——

翌朝——

ミカンは時間通りに目を覚まし、支度を整えて部屋を出た。

真面目な彼女は時間にもキツチリしており、常に10分前行動を心掛けている。時間にルーズな者が多い冒険者の中にあつては、非常に珍しいタイプであった。

そんな彼女だからこそ、扱にくい大剣を名人レベルにまで習得し、Bランクにまで駆け上がってくる事ができたのだろう。

「あの魔王……ちゃんと起きてるんでしょようね……」

朝からイライラしながら、ミカンが魔王の部屋へと向かう。

真面目な彼女と、あの悪辣な魔王では相性が良いはずもないのだが、魔王からすればからかい甲斐がある、面白い女であつた。

（寝てたら枕を蹴飛ばしてやる……）

ミカンが魔王の部屋の前に立ち、ドアをノックしようしたとき、部屋内から二人の声
が聞こえてきた。眉間に寄っていた皺が、僅かに解れる。

（最低限、時間だけは守れるようね）

ミカンはそう思ったが、中から聞こえてくる声は異質なものであつた。

「ふん、こんなに出るとはな。余程溜まっていたのか？」

「……白いのが、こんなに……おじ様、もう……これ以上は」

「馬鹿を言うな。この程度で、私が満足するとも思っているのか？」

——パアン！　パアンツ！

力強い音が響く。

腹の底に、鼓膜に、叩き付けてくるような重い音であった。

慌ててミカンがドアを開ける。

「あんたら、何してんのよツツ！」

そこには布団を窓から出し、埃を叩いている魔王の姿があった。

部屋内に、何とも言えぬ微妙な空気が流れる。

「布団の埃を払っていただけだが……お前はいつたい、何を想像したんだ？」

「……おじ様は、ベッドの魔王」

「いちいち、ややこしいのよツ！」

こうして、おかしなトリオが遂に迷宮へと足を踏み入れることとなった。
魔王の——迷宮デビュー戦である。

監獄迷宮 一階層

(ごった返しているが……活気があって良いものだ)

魔王は広場の賑わいに、思わず笑みを浮かべた。

弁当や飲料を大声で売っている者、薬草などをゴザに並べている者、共に潜るチームメンバーを募集している者までいる。

監獄迷宮は街の中心部にあり、ここはダンジョンを内包している街なのだ。

むしろ、ダンジョンが一大産業になっている、と言っている。

人が集まる場所では様々な商売が生まれ、チャンスも生まれる。

「確か、入場料が大銅貨一枚だったな」

「そうよ。後は中で得られた物と、獲物を売った金額を足して、そこから国に1割が徴収されるの。……独り言だけどね」

「まあ、1割なら税金としては妥当か。むしろ、安いと思えるほどだ」

「冗談じゃないわ。潜る方は命を賭けてるのよ……これも独り言だけどね!」

ミカンの独り言を聞きながら、魔王は考える。

この国からすれば「濡れ手に粟」の商売だな、と。迷宮内では「勝手に補充」される様々な物と魔物が居て、それらを自己責任で集めさせ、徴収する。

何ら投資することもなく、延々と広く薄く搾取し続けることができるのだ。

冒険者など正規雇用しているわけでも何でもない連中だから、怪我をしようが死のうが、それこそ知ったことではないだろう。この国からすれば、磨り潰されるまで勝手に金を運び続けてくれる、働きアリのようなものだ。

（勝手に湧き、補充されるのは迷宮内の物と魔物だけではない。「冒険者」もそれに当て嵌まるのではないのか？）

魔王はそんな風に考えたが、わざわざ口にするようなことはしない。

それは多くの冒険者を侮辱することになるだろう。魔王は頭に浮かんでいた疑問を、今度はユキカゼにぶつけてみる。

「北方の国には大抵、一つはこういった迷宮や遺跡があると言っていたな？」

「……そう。ここより難易度の高い場所は幾らでもある」

「なるほど。『これ』が年中戦争をしていられる『原因』か」

「……原因？」

「財源とでも言い換えるべきか。まあ、気にするな」

魔物の皮や角、爪や尻尾などの部位が金になるといふなら、それは大袈裟に言えば大きな金山のようでもある。現に迷宮の入り口に近付くにつれ、多くの露店や商店が並び、早朝から凄まじい活気が溢れていた。

当然、迷宮に一番近い場所には冒険者ギルドの建物があり、その隣には税金の徴収所が仲良く隣に繋がっている。迷宮を出ればその足でギルドへ獲物を売り捌き、その隣で税金を支払う流れになっているのだろう。

(どう考えても、その日に全てを精算する『日払い』のシステムではないか)

社会保障もクソもなく、その日に働いた分の金だけを支払い、その場で税金もしっかりと徴収する。手元に残った金も、酒や女や服などに消えるのだろう。

元気なうちはそれでいいかもしれないが、歳を取ればどうなるのか。怪我をしたり、

病気をしたときには迷宮にも潜れなくなるだろう。

当然、冒険者ギルドも国も、そのときに助けてなどはくれない。

「ルーキーの階級から抜け出せず、引退する者が多いのも当然だな。先がまるで見えな
い、日雇い労働者のようなものだ」

「……おじ様の言う通り。でも、冒険者には一発逆転の夢がある」

「それは、レア品の入手などを指しているのか？」

「……そう、一発当てて家を購入した者も居る」

（磨り潰れるまで命をチップに宝くじ、だな……まあ、嫌いな生き方ではないが）

何だかんだ言いながらこの魔王は——“いちかばちか”が嫌いではない。

ただし、それは自分がするのではなく、それを用意して挑戦させる側である。

だからこそ、“GAME”には不要ともいえるカジノや裏カジノなどにこだわり、
バージョンアツプを繰り返していたのだ。

その度を越えた作り込みと“いちかばちか”は、最大難易度のギャンブルに表れてお
り、何とそれに勝利すればその回のGAME会場は強制終了。勝利者はSPECIALL
ENDを迎え、参加者も全員解放というものまで用意されていた。

尤も、それを達成できた者は一人も現れなかったが――

「それにしても、大きな箱やら袋やらを持っている者が多いな」

彼らは大銅貨6枚やら、中には4枚やらと大きな声で叫んでいる。

冒険者がそれらに近付き、交渉している姿も見られた。

「ミカン、あれは何だ？」

「馴れ馴れしいわね……あれはポーターよ。獲物の運び人」

「ほう、あの連中に運ばせるわけか」

「腕が良いのは解体もできるから、結構高く付くの。雇いたいなら、あんたの金で雇ってよ」

「私には不要だな」

この男は「アイテムファイル」に無限に物を放り込むことができる。

四次元にも繋がっているポケットを持っているようなものだ。

正確には、GAMEでは装備品を除けば所持品を最大でも10個までしか持つことが

できなかったが、その内訳は所持品として5個、売店などで購入できる《予備バッグ》を買っていくたびに増えていくといったものだ。

プレイヤーはこれを最大でも5個までしか購入できないが、不夜城にいた委員会メンバー達は最初からこれを95個所持しており、合計で100個のアイテムを所持できる設定になっている。

拠点と同じように、予備バッグも大きさや重量を無視したGAME特有のシステムが適用されており、中に“軽トラック”などを放り込むことも可能である。

それが現実に適用されるのだから、まさに魔法であろう。

(さて、まずは魔物とやらを相手にSPを稼がせてもらうか。恐らく、ここでは魔道具とやらには期待できまい)

何といつても、ここはルーキーが集まる迷宮である。魔王は今回、迷宮や冒険者のシステムというものに慣れようとしていた。

いつ複数人で迷宮へ潜るときがくるかも分からない。その時に側近達やキッズの前で、無様な姿は見せられないという見栄もある。

「あ、それとあんたはポーターってことで中に通すから」

「私が運び人、とやらになるのか」

「……おじ様は冒険者として登録されてないから」

「已むを得ないな。今回はそれで行こう」

「びびり運ばせるわよ！ あんたは今日、ポーターなんだから！」

ミカンが勝ち誇ったような表情で言う。

その顔はとても輝いていた。

これまでの積もり積もったストレスを解消しようとしているのだろう。

「ふむ——運び人だったな？ 任せておけ」

「私があんたに、冒険者の何たる——にやつ！」

魔王がミカンの腰を引き寄せ、そのまま小脇に抱え上げて歩き出す。ミカンが大剣を背負っていることを考えると、それはとんでもない膂力であった。

「は、離せ！ は、運ぶって私のことじゃないからあああ！」

「…………ミカン、殺す」



——監獄迷宮 地下一階層

(「これが迷宮、ね…………誰が作ったのやら…………」)

入り口から長い階段を降り、その先に広がっていたのは通路である。

大昔に掘られた坑道のようにでもあり、いかにもファンタジーな世界でよくありそうな洞窟であった。

それに、広い——

この通路だけで、軽く二十人は横一列に並べるだろう広さだ。

何のために、誰がこんなものを作ったのか？

魔王の頭に、またそんな根源的な疑問がよぎる。

「ミカン、この迷宮はいつたい、いつからあるんだ？」

「がるるー！」

ミカンが威嚇するように喉を鳴らす。

いや、唸っていた。魔王に腰を掴まれ、警戒しているらしい。

しかも、力自慢の彼女がまるで身動きできなかつたのだ。警戒だけではなく、屈辱も感じているようであつた。

「それに、人がごつた返していて緊張感がないな」

これに関しては魔王の言う通りであつた。大勢の冒険者が雪崩れ込んでいるため、冒険というよりも大勢で観光地にでも来ているような雰囲気である。

地下1Fでもあり、その辺りは差つ引く必要があるだろうが、それでも命賭けの冒険には程遠い雰囲気が漂っていた。

「……三階層までは人が多い。そこから下はぐつと減る」

ユキカゼがそう答えたとき、薄暗い洞窟の隅から大きな殻を背負つたかたつむりのよ

うなものが現れた。人の膝くらいまでの大きさがあり、軟体の体をうねらせながら三人に近付いてくる。

「砂つむりか……懐かしいわね」

「……ルーキーの頃を思い出す」

（普通にデカくてキモいんだが……）

ユキカゼとミカンは懐かしむような目で“それ”を見ていたが、魔王からすればありえない大きさのかたつむりだ。

とてもではないが、塩をかけても溶けそうもない大きさである。

「へっへ、久しぶりに狩ってみますか」

ミカンが大剣を振り下ろし、軟体部分を斬る。

そのまま腰からダガーを抜き、手早く殻だけを切り離れた。

「ミカン、その殻が獲物になるのか？」

「そうよ。この殻を細かく砕いて、土に混ぜると固くなるの」

「ほう、建築素材というわけか」

「……カチカチになる」

ミカンがボールを渡すようにして、殻を魔王へと放り投げる。

難なく受け取った魔王ではあったが、それを手で触ったり、叩いたり、細部を見たりと暫くのあいだ、興味深そうにそれを弄っていた。

「これは、幾らくらいで売れるんだ？」

「……時期にもよる。普段は3個で銅貨5枚くらい」

「大きな戦争前には高く売れるのよね」

「なるほど、砦や陣地を築くためだろうな。被害地域への復旧にも使えそうだ」

震災の後などに、建築素材が飛ぶように売れるのと同じだろう。

古来、災害や戦争は被害を生みつつも、あらゆる需要が伸びる。北方諸国は戦争を続けながらも、様々な産業を刺激するという奇妙な状態にあった。

「……運んで《雪の台車／スノートロリー》」

ユキカゼが杖を振ると、雪と氷で構成された巨大な台車が出来上がった。

これは詠唱者の後ろを付いてくる台車であり、様々な物を運ばせることができる。温度を調整すれば冷凍も可能なため、肉なども腐らせない優れたものであった。

「……おじ様、挿れて。そのカチカチで、固い——あむ」

「それでも舐めておけ」

魔王がキャンディーをユキカゼの口へと投擲し、同時に殻も台車へと投げる。

この男は『投』のスペシャリストであり、文句の付けようもない見事な投球であった。その気になれば、針をも通す正確さで狙った場所へと投擲することができるだろう。

「一つ気になったのだが……魔物の死骸はどうなるんだ？」

「へ？ 時間が経てば消えるわよ」

「この殻は消えないのに、か？」

「そんなの知らないわよ。死骸から切り離してるから別扱いなんじゃないの？」

「いい加減というか、アバウトというか……」

魔王が呆れたように呟いたとき、奥から大きな声と、笛が鳴り響いた。

その笛の音に、ユキカゼとミカンの顔色が変わる。

奇妙な三つの音が何度も繰り返され、耳を澄ましていた二人が騒ぎ出す。

「この音……『鬼湧き』よ！ きたああああ！」

「……お祭りワツシヨイ」

「祭りだあ？」

気付けば、周りの冒険者達が全員走り出していた。

その顔は興奮しているのか真っ赤であり、威勢の良い声やら笑い声まで口から漏れている。薄暗かった迷宮内が一気に明るくなり、興奮した声が広がっていく。

「二人とも、行くわよー！」

ミカンが背負ってた大剣を手に持ち、奥へと走り出す。

まるで野生の豹のような姿である。

「……ミカン。イキすぎ」

「祭りか——なら、参加せざるを得んな」

賑やかなことを好む魔王も、格好を付けながら走り出した。



情報の一部が公開されました。

ミカン

種族 人間

年齢 17

武器 —— オーガソード

オーガの特異種が持つていた大剣。

ミカンはこれを討伐し、重量が増す魔石を多数取り付けている。

破壊力は抜群であり、これを扱える彼女は一流の戦士とっていいだろう。

防具 —— スカーレットパンサー

赤豹の皮をなめし、作られた高級防具。

柔軟性が非常に高く、動きを妨げない。

打撃や斬撃への吸収力も高い。

レベル 12

体力 ?

気力 ?

攻撃 15 (+15)

防御 10 (+10)

俊敏 20

魔力 3

魔防 5 (+5)

四つ星のBランク冒険者。

殆どがルーキーの階級を抜け出せないこの世界において、有数の実力者。

大剣を使った様々なスキルを会得しており、戦闘経験も豊富。

前線に立つ戦士としては申し分がない。

好物はミカン。嫌いなものは魔王。

ユキカゼ

種族 人間

年齢 15

武器 —— スノーバレンタイン

『氷』の魔法効果を上げてくれる杖。

溶けない氷と呼ばれるスノークリスタルが埋め込まれており、人間には滅多に武器を卸さないドワーフであるが、腕利きの一人がユキカゼを気に入って製作した。

文句無しに最上位ハイエンドの武具である。

防具 —— 黒い風と黒サンタ

黒サンタと呼ばれる中級悪魔が着ていた服を元に、腕利きのドワーフが製作。
魔法防御力を全体的に高めてくれる。

これまた最上位ハイエンドの防具である。

レベル 13

体力 ?

気力 ?

攻撃 ?

防御 ?

俊敏 ?

魔力 23 (+15)

魔防 15 (+15)

四つ星のBランク冒険者。

若くして魔法の才を開花させた、この世界でも有数の魔法使い。

第四魔法を使いこなし、既に第五魔法にも近付きつつある。

性別次第では、聖女の候補にも上がっていたであろう。

魔王が好き。

鬼湧きとラビの村

— 監獄迷宮 鬼湧きポイント

大勢の冒険者が狂ったように砂つむりを狩っていた。

何処から湧いてくるのか、数え切れないほどの砂つむりや、おおからす大鴉と呼ばれる魔物が

続々と押し寄せてきているのだ。

冒険らはそれらを狩っては袋や箱に入れ、ポーター達も忙しく往復する。

大鴉はその嘴に多少の需要があるが、一番の需要はその羽根だ。青光りする羽根は見栄えが良く、矢に使われることも多いし、服や鎧の装飾としても利用される。

ちなみに一羽から12本の羽根が採れるが、それらは大体1セットで大銅貨1枚の値が付く。傷んでいたり、損傷が酷いと当然、値が落ちてしまう。

狩ったその場で解体や羽筆りという大騒ぎである。

後続からも次々と人が押し寄せ、迷宮全体が喧騒に包まれていく。

これらを——“お祭り”と呼ぶのも頷ける話であった。

ミカンもそれらに混じり、楽しそうにダガーを振るう。彼女のランクからすれば、全

く儲けにもならない獲物なのだが、冒険者にとつての鬼湧きとはやはり、心躍るものなのだろう。

「……昔は、鬼湧きのお陰で何とか生活できていた時期があつた」

「臨時ボーナスのようなものか」

魔王はそう呟いたが、冒険者にしてみればもつと切実なものであつたに違いない。今日の宿代が払えるのかどうか、明日は食えるのかどうか分からない、といった者達も多いのだから。

そのうえ、大怪我でもすれば一巻の終わりである。稼げるときに、少しでも稼いで蓄えておきたいと思うのはごくごく当たり前の姿であろう。

だが、大勢の人間が騒いでいる姿を見て、魔王の頭に浮かんだのは別のこと――

「思い出すな――」

「……おじ様?」

「いや、なに。少し昔のことをな」

魔王が何かを懐かしむような、遠い目で騒ぎを見る。

彼の頭に浮かぶのは、GAMEでの様々な場面。混雑してロクに登録すらできなかつたとき、カジノで誰かが当てて大騒ぎとなったとき、特殊なイベント戦のとき、不夜城へと押し寄せる一世一代の祭りのとき。

それらは全て、セピア色で網膜に焼き付いている。

もう——色彩を得ることはない。

「この祭りは彼らのものだ。私のような部外者が入るのは邪魔になろう」

魔王が背を向けたとき、奥から大きな物音が響いてくる。それは苔生した金属で作られた、巨大なゴーレムであった。

「やべえ！ ブリキまで出てきたぞ！」

「誰か魔法で動きを止めろ！」

「罨を持ってきてる奴はいねえのかよ!？」

ブリキと呼ばれたゴーレムの動きは鈍い。だが、ルーキー達がどれだけ斬りつけても

ビクともせず、逆に剣が折れ、ハンマーまで曲がってしまう始末である。ブリキの腕が力任せに払われたとき、三人の冒険者が吹き飛ばされた。

「……おじ様、あれはルーキーには荷が重い」

「ふむ——」

ユキカゼが、何かを期待するような目で魔王を見る。

ミカンも大剣を手にブリキのもとへ走り寄ろうとしたが、それよりも早く、一筋の赤い線が奔った。

魔王が投擲したソドムの火である。

瞬間、ブリキの頭が玩具のように吹き飛んだ。

ブリキは暫く、何が起こったのかわからないように立ち尽くしていたが、やがて大きな倒壊音を立てながら地面へと沈んだ。

祭りに集まっていた冒険者の男女が、一斉に魔王の方へと振り返る。

「失礼——引き続き、祭りを楽しんでくれたまえ」

「……たまえ」

魔王がそのまま背を向けて去り、ユキカゼも可愛く杖を振ってその場を後にした。冒険者達は暫く呆然としていたが、時間とともに騒ぎが一層大きくなっていく。そう、鬼湧きもまだ終わっていないのだ。

「だ、誰だ？ 今のは！」

「何を投げたんだよ……？」

「ぼーっとしてんじやねえぞ！ 今日の飯代が転がってんのを忘れんな！」

「ブリキの金属は誰のものなんだよ！」

「本人がいねえんだから、早いもん勝ちだろうがッ！」

「砂つむりより、ブリキから金属を剥がせ！」

「凄いダンディーな人……誰なの、あの人は!？」

「あの横の女が恋人？」

「愛人じゃない？」

「くっそー……顔か！ やっぱり可愛くないとダメなのか！」

冒険者達が騒ぐ中、ミカンも叫ぶ。

「ナチュラルルに私を置いてくくなあああ！」

いつそ、このまま迷宮を出れば苦労せずに済んだのだが、そこはミカンである。自ら苦労を背負っていくスタイルなのか、何なのか。

ミカンが二人の後を追いつ、久しぶりの鬼湧きに冒険者達も大賑わいとなった。

SP残量——41P



——ラビの村 温泉旅館

「マダム、このオリエントタルな名画はいつたい……！」

温泉旅館の摩訶不思議な佇まい、響く風鈴の音、姿まで映るほどの磨き抜かれた床、扇情的な衣装を身に纏った美しいバニー達。

選別された30名の奥様方は、その全てに息を飲んでいた。

この国の、いや、世界中の何処を探しても、こんな施設などあるはずもない。

「いやあね、奥様。これは『襖』というドアなのよ?」

「ド、ドアって……こんなもの、部屋に入るたびに触れていたら……!」

「——泥に塗れてこそその、美しさなのよ」

奥様方にざわめきに、マダムが自信溢れる微笑を返す。

既にマダムは旅館の設備を知り尽くし、田原から入念に説明を受けていた。この施設への切符を握っているだけでなく、知識の先駆者でもある。

選別者としての権勢と、この施設における万能の知恵。

元からあつたカリスマが、更に上がっていくのは当然の帰結であつた。ざわめき止まぬ一行をマダムが引き連れ、温泉の方へと足を進めていく。

そこでは更なる驚愕が待ち受けていることだろう。

そして、それを『体感』したからには——もう、この施設から離れられない。

いや、もう逃げられない。

(あのマダムってのも大したもんだナ)

廊下の片隅に潜んでいた田原が、隠匿姿勢を解いて姿を現す。

あの30名の一人一人が、家の権力を握る当主でもあり、鬼嫁でもあるのだ。それから集団のリーダー、カリスマとして仰がれるのは並大抵のことではない。

まさに女傑や、女帝といった存在であろう。

(こりゃ、トンでもねえ。おせぜ) が転がりこんでくつかもなあ)

田原が頭を掻きながら、煙草に火を点ける。実のところ、この温泉旅館の一泊の料金は決して高くはない。

魔王が「金貨一枚でいいだろう」と発言したためである。仮に一泊を10万と考えるなら高い金額ともいえるが、この施設の効果を考えると格安であろう。

だが、別に料金でどうこうする必要はないのだ。

魔王のいう「評判」を考えるなら、表向きはあくまで他の街にもある高級宿の値段と変わらない方が良く決まっている。

なら、何処から徴収するのかといえば当然、表には出ない「口利き」だ。

マダムの下へ自然と集まるであろう、物品や金銭。既にこれらはラビの村と、マダム側で折半するという案で纏まっているのだ。

料金でぼったくる必要など、全くないというわけである。

マダムは当初、ここに住ませてもらえるなら金など銅貨一枚も要らないと言っていたのだが、魔王は「取引とは、双方が得られるものでなければならぬ」と強く主張したため、渋々頷いたのだ。

そして、田原は思い出す。

彼の上に君臨する、唯一の存在——『長官殿』との打ち合わせを。

《いいか、田原。入手した『現地の品』はヤホーの街にいるマンデンへ、相場よりも低い金額で売却し、あの商人と深く交われ。今は不特定多数より、信用できる一人を作ることに急務だ。我々と繋がれば儲かる、とな》

《ま、俺らにすりやこの世界の美術品なんざ大して役に立たねえだろうからなあ。で、その儲けさせた金で『こつちの品』を高く買い取ってもらうってことか？》

《当然、そうなるな。商売とは自分の利益だけでなく、最初に相手を、時には自分よりも相手を儲けさせることによって信用が生まれていくのだから》

《ご尤も。で、入った金はどうすんだ——？》

《全てラビの村の整備と、拡張に回せ。110枚の大金貨だけでは、いずれ足りんようになるのが目に見えているからな。後、バニー達の食料だけではなく、住居や衣服、給料にも一切の金を惜しむな？　ここを、黄金の降る村へと変えるんだ》

《……それも、長官殿のいう“評判”を得るってやつか？》

《まあ、それだけではないがな——》

北へ行く前の打ち合わせでは、そこで二人の会話は終わった。魔王の最後の言葉は思わせぶりではあったが、別に何も考えてはいない。

従業員たるバニーの家や服がボロボロだったら、商売にならないと思っただけである。だが、田原からすればそこには別の考えが浮かぶ——

（こんな寒村を、瞬く間に黄金の降る村に変えるってか？　そりゃ、自らの力を、手腕を、周囲へこれでもかかってくらい誇示することになる。当然、周りの村はさぞかし羨むだろうな。で、行き着く先は「自分達の領主は何をしてる？」だ）

重い税を取るだけで、何もしない。

灰色の生活だ。

で、横を見れば——昨日までの寒村に黄金が降っている。
こんな馬鹿げた話はないだろう。

（こりやあよ、武力を使わねえ『侵略』そのものじゃねえか。それも、上手い具合に表面上は砂糖味を付けて可愛くデコレーションしてやがる）

田原の脳裏に、一つの言葉が浮かぶ。

それがいつたい、何を差していたのか。

彼の頭を以ってしても、中々答えが出なかつたもの。

——私は、大帝国とは正反対の道を往こうと考えている。

「なるほどなあ。でもまあ、悪い話じゃねえわな」

大帝国が往くならば、当然それは武力による制圧だろう。

そこには数百万人の血が流れるに違いない。

だが、この『侵略』は少し毛色が違う。

むしろ、向こうから「是非、私達の村も侵略してください！」と頭を下げてくるような侵略だ。

「だっはっはっ！ 相変わらず怖い男だね、長官殿は。くわばら、くわばら」

田原が携帯灰皿に煙草を揉み消し、旅館の外へと出る。
そう、彼がやるべき仕事はまだ多い――

田原の視察

マダムが一行を連れ、温泉へ導いてからというものの、大変な騒ぎであった。

磨きぬかれたタイル、幾つもの浴槽、一面を覆うほどの湯気、色も鮮やかな湯に、ス
イツチ一つで水とお湯が噴き出すシャワー。

そこは、お伽噺にある『桃源郷』に他ならない。

「この石鹸は何ですか!？」

「髪が……私の髪が潤ってる……!」

「ああ……この泡の湯。このまま溶けてしまいたいですわ……」

「岩盤、浴……こんなのはじめて……」

一行の驚愕と、どよめき。そして、歓喜が止まらない。

止まるはずがない。

ここは、全ての夢が叶う理想郷。

女であれば、誰もが一度は夢見る——『約束の地』に他ならない。

それら一人一人にマダムが微笑を浮かべながら説明し、時には女性バニー達が氷の入った贅沢な水やジュースを運び込む。

露天風呂に限定されてはいるが、ここでは望めば冷えたワインやエールなども提供されるようになっており、正に身も心も溶かしきる桃源郷と化していた。

(あんた達、もう逃げられないわよお……?)

マダムがお気に入りのハーブ風呂、グリーンフォレストに浸かりながら笑みを浮かべる。と言つても、その笑みは邪悪なものではない。

どちらかといえば、まんまと悪戯にハマたような子供っぽい笑顔である。この世に、こんな夢のような施設がある、と知れるだけでも万金の価値があるのだから。

まして、彼女達は第一陣だ。

それを誇りに思い、周囲にこれでもかと自慢し、喧伝するであろう。

珍しきものを好む貴族の中にあつて、それを最初に体験したということは彼女達自身にも大きな利益を生む。

「わたくし、もうこの湯から出ませんわ……っ!」

「私も、この電気風呂が……あはあああ！」

「この壺湯が落ち着きますの」

「奥様……私もその壺に入ってみたいんですの」

「いやですつ！ この壺は私のものです！」

子供のように騒ぐ面々を見て、マダムが思わず吹き出す。

自分もルナが居なければ、あぁなっていたであろうと自覚したからだ。

(それにしても、折半ねえ……)

マダムは思う――

この施設への口利き料というものは、恐らく想像しているより遥かに凄まじい金額になるであろう、と。

何故、それを折半するのか？

マダムはありのまま、それを田原へぶつけたことを思い出す。

そして、あの眠そうな惚けた眼を。

普段は隙だらけにしか見えない、間抜けな姿を。

(田原 勇、とつても怖い男ね……それに、いい男)

マダムは時に、震えるような気持ちでそれを思う。

あの魔王の腹心は、命令が下ればたとえどんな相手であろうと、容赦なく殺すであろう。それこそ、“天使”であつてもだ。

そして——あの瞳の奥にある青い光。時折覗かせる“それ”は、決して女を退屈させることがない。

(流石に、あの魔王様の持つ色香には敵わないけれど……)

マダムのように多くの男を見てきた女からすれば、あの二人の男は堪らない存在である。滴るような色気と、一歩間違えば何をされるか分からない危なさが混ざり合い、その妖しいまでの魅力はまるで魔法のようであつた。

森の香りに包まれながら、マダムの脳裏に田原の声が蘇る。

《折半? そりゃ、同じ利益を食む“お仲間”つてこつたら。そうしときゃあ、少なくとも

も背後から刺される危険が減る。この辺りの機微にや、あんたも身に覚えがあんじやねえのか?》

その通りであった。

互いの力で車輪を回す関係である限り、それを攻撃する馬鹿は居ない。そんなことをして、損を蒙るのは自分だからだ。

《それに、死蔵してる金が動くつてのは悪いことじゃなくてなあ。上が貯め込む一方で吐き出さねえと、経済つてのは止まって死んじまうんだよ。どこの世界も、それで割を食うのは下つて寸法さ》

死蔵した金、止まった経済。

それを怒涛のように動かし、民衆へ金と活気をばら撒いていく存在。マダムの目には、魔王の姿がそのまま、そう映るのだ。

それはあながち彼女の勘違いではなく、一面から見れば実際にそうなのである。

(あの魔王様はいずれこの国を、大陸を、席捲していくのでしょうね……)

マダムはそのことに對し、何の異議もない。

むしろ、それを全力で後押ししようとしている。

彼女は生まれてから何度、自らの体を呪い、天使に祈ったことだろうか。

その切なる願いは、只の一度も叶うことは無かった。

しかし、そんな彼女に手を差し伸べ、運命に「断末魔の悲鳴」を上げさせたのは、漆黒の闇よりも尚、深い——あの魔王であつた。

耳朶に残る、あの深い声が蘇る。

《ようこそ——「私の世界」へ》

あの声を思い出すたび、マダムの全身に痺れが走るのだ。

それは未知への恐れ。だが、あの声こそが自らを何処までも導いてくれると確信させるだけの不思議な余韻があつた。

(私にとつての天使とは、あの魔王様ね……)

伝承にある魔王は、とても恐ろしい存在であると伝えられている。

だが、古に大いなる光に齒向かったとされる墮天使ルシファアの別名は、奇しくも魔王サタンであった。あの大胆不敵で、全ての言葉を現実にするとと豪語する姿は、妙にそれへと重なってしまふのだ。

マダムはしみじみ思う。

確かに、あの魔王なら「天」にも逆らうであろう。むしろ「天」を掴み上げ、地に捻じ伏せ、屈服させようとするのではないか？

（天使でもあり、魔王でもある。こんな存在、他に居るはずがないわね……）

マダムはそんなことを頭に浮かべながら、湯の中へ体を預ける。

森の香りが静かに全身を包み、湯の中に居ながら森の中に居るといふ感覚に、マダムは人知れず酔い痴れた。



「この工事がなけりやヤバかったな」

「戦争期は稼ぎがなあ……」

隠密姿勢のまま、田原が村の中を歩く。

専門の大工や土木関係の人間が多いが、人夫として雇われている者の中には冒険者も多い。彼らの腕力や気力が、単純に力仕事にも向いているのだ。

村から、彼らに支払われる賃金は大銅貨5枚。命を賭けず、これだけの賃金が得られるのは美味しい。

尤も、この道で食っている専門の大工には最低でも倍は支払われている。

ただの力自慢や体力馬鹿と、何年も経験を積み、技術を磨いてきた人間とでは支払われる金額が違うのも当然のことであった。

夢を追うより、堅実に正業で経験と技術を得ていく。何処の世界であっても、それが賢い生き方であるのは変わらない。

特に冒険者は迷宮に潜る際、一人で潜る者などは居るはずもないので、稼ぎは全て人数割りとなる。そのため、成果によってバラつきが酷いのだ。

例えば20人のチームを組んで潜るなら危険こそ減るだろうが、稼ぎとしてみればとても食っていけるようなものではない。

故に、彼らは2〜4人でチームを組んで迷宮へと潜る。

それが「安全」と「稼ぎ」からみて一番バランスが良いからだ。ルーキーの中には一人で突撃して死ぬ者も多いし、ランクが上がったことで分不相応な自信を持って少人数で挑んだ挙句、全滅という話も珍しくない。

「しかし、ここの銭湯つてのは堪らんな！」

「全くだ。いつそ、ここに住みてえよ」

「宿屋はできねえのかな？」

それらを聞きながら、田原が細かく作業内容をチェックする。

彼は村の土台となる道には特にこだわっており、上質の石畳を敷き、万が一にも割れることがないように、入念に魔法を何度もかけさせている。

いずれ、馬車が引つ切り無しに往復することになる、と確信しているからだ。

(定期馬車の数を増やさねえとナ……)

冒険者達の言う通り、この村に宿屋などは無い。働き手は神都とヤホーの街から定期馬車を走らせて集めているのだ。

彼らはいわば歩く広告塔であり、口コミを広げるためにも、是が非でも街に帰つても
らわなければならぬ。

彼らは街に戻り、話すだろう。銭湯という施設を。

ラビの村に行けば仕事がある、食えるぞ、と。

何か知らんが、途方もない工事が行われているぞ、と。

それらは一見、胡散臭い話であろう。だが、その工事が行われているのがラビの村で
あり、その作業の総責任者が聖女の一人であるルナとなれば話は変わる。

一転してそれらは公的なものとなり、“公共事業”へと様変わりするのだ。

その昔、親方日の丸などという言葉があつたが、それに近い性質のものといつていい
だろう。誰も彼も、安心して働くことができた。

(で、噂の聖女様はつと……)

田原がバニー達の住居区画に赴くと、木箱の上に立ち、偉そうにふんぞり返っている
ルナが居た。この区画に畑を移し替えているのだが、以前と比べかなり贅沢な土壌が使
われている。

只の土ではなく《赤茶けた何か》と命名された、栄養素が多く含まれている土を土壌

としているのだ。そこへ大帝国製の肥料を混ぜて作っているため、どんな作物であつても大いに育つてあろう。

(本当なら、色んな野菜を作りたいんだけどナ……)

キャベツやキュウリ、ナスや芋、大根や玉葱。田原からすれば様々な農作物を作つて多角的にマーケットへと売り込みたいのだが、市場を見れば見るほど、人参がズバ抜けて高いのだ。

バニーにしか上手く育てられないということもあつて、完全に独占市場である。それらを考えると、人参を育てるのが一番儲かる、と判断せざるを得ない。

「私の村に相応しい、エレガントな人参にするのよっ！」

「……食いモンに気品も何もねえと思うんだけどナ」

「きやああ！ 急に出てこないでよ！ このストーカー！」

「何でお嬢ちゃんのストーカーなんぞしなきゃならねえんだか……」

田原が煙草に火を点け、楽しそうに農作業をしているバニー達に目をやる。

今は農作業を行うグループと、施設での従業員を交互に交代させているが、いずれは適性や個人の希望を聞き、どちらかに専業として就いてもらう予定であった。

「畑は更に広げても良さそうだな……てーしたモンだわ」

煙を吐きながら、しみじみと田原が言う。

どう考えても、少人数で行っているとは思えない効率の良さである。

農作業に向いている、などというレベルではない。

(むしろ大地が、農作物の方がパニーを愛してやがるんだろうなあ)

世界中の銃器から問答無用で愛される体質を持っている田原だからこそ、そんな感想が浮かぶ。ちなみに「GAME」でも、この男に銃器を向けるのはご法度であった。高確率で弾詰まりが発生して、攻撃が空振りする。

最悪、暴発して装備している銃器が破損してしまう。

主力武器である銃器が使えないなど、控えめに言っても最悪の敵である。何故か女性プレイヤーからの人気は高かったが、男性プレイヤーからは「シスコン、まじうぜえ！

死ねッ！」と非難轟々であった。

「そ、それで……あいつはいつ帰ってくるのよ」

「ん？」

「だ、だから！ あ、あいつよ、あいつ！」

「ああ、長官殿のことかあ？ お嬢ちゃんといい、悠のやつといい……」

田原が呆れたように首を振る。

そう、〃相変わらず〃彼の上司は凄まじいモテっぷりであったのだ。元の世界でも、あの魔王は全世界規模で見ても恐らくは1、2を争う有名人であった。

全世界へ流されるGAMEにおいて、その主催者であり、総責任者であった魔王は度々、その姿をTVが映す存在であったのだ。時には〃GAME〃の司会者として、世界中の液晶を独占する人物であったといっている。

映画スターなどという次元ではなく、世界中の人間から視線を集める有名人であったといえるだろう。

無論、その視線には憧れではなく、多くが怨嗟であったが。

その観点からいえば、不夜城に居た側近達も有名人であったといっている。彼らは何

度もTVで特集を生まれ、その顔を知らない者は居なかった。

其々の首には天文学的な懸賞金が設定されており、それらを打倒すれば一生どころか十生は遊んで暮らせる世界であったのだから。

田原からすれば、自分を見ても何の反応もしないこの世界の人間を見ているだけで、ここが異世界であると分かってしまうレベルである。

(確か、長官殿には熱狂的なマニアが居たっけか……)

TVに度々映る有名人ゆえの現象なのか、NINE(ナイン)というグループが生まれ、九内伯斗個人を熱狂的に支持する集団が居たのだ。

彼ら彼女らは帽子や腕章に「九」「9」「NINE」などが描かれた様々な物を身に付け、それらを誇示した。

「お嬢ちゃんもNINEの一人ってことかねえ……」

「ナイン??」

「ま、それはともかく。お嬢ちゃんが寂しがってたって伝えとくからよ」

「だ、だだだ誰が寂しがってるですって?! あんなやつ、帰ってこなくてもいいんだか

「らっ！」

「あいあい」

田原は適当にいなしながら、更に庶民区画へと足を伸ばした。

側近達

(いいねえ、やっぱ庶民つてのはこれだわな)

多くの立ち飲み屋や屋台などが並ぶ様を見つめ、田原がうんうんと頷く。

区画の最奥には銭湯が設置されており、そこへと続く道にはびつしりと店が並んでいるのだ。夜には、それらが祭りの時の夜店のように明るい光を放つ。

ここの店の多くは簡易な作りであり、売られるものも簡易なものばかりだ。

ちなみに、この区画に出す店からはテナント料を取らない。売れば売れただけ、自分の懐に入るといふ夢のような立地条件であった。

その代わり、田原は人気の無い店は容赦なく入れ替えると布告してある。そうすることによって、人気のある店だけを残して質を高めようとしているのだ。

この区画には儲けをこれっぽっちも求めておらず、純粹に人を集め、活気を得ることだけを目的としている。

「トロンさん、あつちに暴れ鶏の串焼きがあるみたいですよっ」

「食べるの！」

アクとトロンが楽しそうに屋台を回っている。それらを見て、田原はつい思考に耽つてしまう。

あのアクという少女は何だ——と。

(トロンはまあ、分かる)

子供とは思えないような腕力と、人を“色で見る”という不思議な能力。田原からすれば、それは長官殿の目を惹き、スカウトさせるに値する能力であった。

才があれば、たとえどんな悪党であつても懐に掻き集めるのが“長官殿”の特徴ともいえたし、仕事でもあつたのだから。

が、田原の見るところ——アクには何も無い。

(ありやあ、只の子供だろ……それとも、俺が見えない何かがあんのか?)

分からない。田原には分からない。

実際、〃九内伯斗〃であれば、アクには一瞥もくれなかつたであろう。だからこそ、余計に頭がこんがらがるのだ。

まさか、中に居る〃大野晶〃がアクのことを妙に大切に思っているから、などという答えはそれこそ、神でもない限り導き出せるはずがないのだから。

(どつちにしろ、一番の警護対象だわな)

この村の中で誰を一番に守るか、となれば田原は迷わずアクを選ぶ。それによつて——他の誰かが死ぬことになつても、だ。

(蓮や、茜とも違うんだよなあ……)

九内伯斗は、才ある者を好む。

たとえそれが子供といえる年齢であっても、彼がその才を認めた者は不夜城へと招き、しつかりとした地位を以つて遇する。その観点から見れば、アクという少女には余程の何かがあるのだろう、と田原は考える。

(ま、悪い子じゃねえしな。今は長官殿のお気につてことでいいか)

田原はそんなことを考えながら、野戦病院へと向かった。

魔女の住処ともいえるその場所には、既に大勢の患者が列を作っている。その多くが貧民と呼ばれる層の者達である。

近隣の街や村に馬車を走らせ、安い料金で治療を行うと布告したためだ。

「あの薬を飲んでから頭痛が消えてな……」

「ワシの打ち身も《湿布》というものを貼ってから〜」

「悠先生……美しすぎる……」

「あの手に、触れてもらえるだけで俺は……」

まだ少数ではあるが、マダムの口利きで貴族の何人かも訪れている。

その治療を受けた者は口々に「神医である」と吹聴しているため、やがてその名は聖光国全体へと広まっていくことになるだろう。

「あの方の美しさは、まるで月のようではないか！」

「いや、水面に映る月というべきだな」

「それにしても、とんでもない建物であつたな……あれが、マダムのおつしやつていた魔王と呼ばれる男の財力と力か」

「建物なんぞどうでもいいわ！ わしやあ、この歳になつて恋に落ちたわい……」

概ね、評判は上々である。

料金の安さと、その治療の確かさもあるのだが、それ以上に悠の美貌が人の目を惹き付けて止まないのだろう。彼女の内面を知る田原からすれば、笑うに笑えない。

だが、現地の患者からすれば、まるで救いの女神であろう。現に彼女は様々な薬を用いて懸命に治療を施している。いや、治療ではあるのだが——彼女からすれば毎日が新発見の連続となる歓喜に満ちた“実験”であつたのだが。

薬の投与だけではなく、悠は時に“外科手術”も行った。

麻醉で眠らされている患者には、そのときに彼女が“どんな顔”をしているのか分からなかつたのが幸いであつただろう。

(悠からすりや、毎日が天国だわナ……)

実験動物が毎日、列を作って自分の下へと訪れてくれるのだ。笑いが止まらないに違いない。

尤も、治療の腕だけは確かなのだから、相手にとつても損はないが。

(俺あ風邪を引いても、ぜってーここにだけは来ねえぞ……)

想像するだけで、ぶるりと田原の体が震える。

体どころか、脳の中まで好きに弄られそうであった。

いや、彼女は事実——“それ”ができるのだから。



夜、ミリガンは村から少し離れた草むらに身を潜めながら、ラビの村をじつと見つめていた。そこは、彼の記憶にある寒村とは完全に様変わりしており、何か白昼夢でも見ているような心境であったのだ。

寂れた寒村が——“何か”に変わろうとしている。

その何かが、彼には分からない。

ミリガンは優れた傭兵であり、戦場においては有能な男とっていいだろう。

だが、それだけだ。それを抜いてしまえば、溢れる暴力性を弱者にぶつけ、その生命を甚振ることにはしか興味のない狂犬でしかない。

(何が起きてるのかはしらんが、バニーのガキを何人が攫つちまうか)

彼が好むのは、幼い少女である。

それを徹底的に殴り、痛めつけ、両親に助けを求める様を見ながらボロ雑巾のように犯す。彼が唯一、生きていて満足する瞬間である。

いや、そのために生きているとっていい。

そんな彼であっても、バニーの子供というのは初めてである。

この国では、バニーは智天使から愛でられたという伝承が多く残されており、その関連もあつて敬されるものの、妙に近寄り難い人種でもあつたのだ。

だが、ようやく彼の雇い主であるドナから許可が下りた。

ミリガンが歓喜の一步を踏み出したとき、前方から間延びした声がかけられる。

体の力が抜けるような、妙に暢気な声だ。

「よお、あんちゃん。何処に行こうとしてんだあ？」

「……ん？」

ミリガンが声をした方向に目を向けると、そこには木の上にかけられた板があり、そこに寝そべっている男が居たのだ。妙な鉄の棒を持っているところを見ると、衛兵なのだろう。

ミリガンは思わず、笑ってしまいそうになった。

彼はこれまで多くの衛兵を見てきたが、これほどにやる気のない姿の衛兵は見たことも聞いたこともない。寒村とはいえ、堂々と寝そべっている衛兵など案山子にもならないだろう。

「まあ、答えなくても分かってんだけどナ。一応、形式美っつーかな」
「悪いな、夜分遅くに」

ミリガンは考える。

この間抜けを殺して騒ぎを起こすより、適当にいなして中へ入ろうと。

ミリガンは知らない。

その寝そべっている「間抜けな姿」が、スナイパーライフルを構え、必殺の態勢に入っているということ。

ミリガンは知らない。

既に、その射線から逃れることは、何人であろうと不可能であることを。

「暗くて道に迷っちゃまったみたいだよ、悪いん——」

「あつそ」

——パシユン、と。

ミリガンの聞いたことがない音が耳に入る。

その瞬間、彼の右足が付け根から吹き飛び、横倒しとなった。

その衝撃にミリガンが失神し、痛みで再度覚醒する。その口が大きく開き、絶叫をあげようとしたが、上手く言葉が出ない。

後ろにいた悠が、ミリガンの体に何かを打ち込んだからである。

「ちよつと、田原！ 素体を乱暴に扱わないで！」

「どうせ繋げたり、千切ったりすんだろうが。一緒じゃねえか」

「貴方つて本当に適当な男ね……モルモットの扱いをまるで分かってない！」

「んなもん、分かりたくもねえっつーの」

ミリガンはそれらの声を聞きながら、必死に手を動かし、合図を鳴らした。

離れた場所にも一定の光を送る、貴重な魔道具だ。

だが、連れてきたはずの後衛からは何の動きも、反応もない。

「あつ、ごめんなさい。後ろのお仲間さんはこの中よ」

悠が笑顔で《予備バッグ》を開き、それをミリガンへと見せる。

バッグというより、白い異空間の中にある“それ”を見たとき、ミリガンは声にもならない絶叫を上げた。そこには彼の仲間が奇妙な形で納まっていたからだ。

両手や首が捻じ曲がり、全身から血を流したそれから、不気味な植物が生えていたからである。

「や、やめつ、たすつ、助けてくれ……本当なんだ、道に迷つ……」

ミリガンが涙を流し、懸命に無実を訴える。

気が付けば足の痛みも消えており、それが一層に恐怖を増幅させた。

だが、悠の表情は変わらない。

むしろ、その微笑みは深くなる一方である。

何とか救いを求めてミリガンは必死な表情で田原を見たが、そこにあつたのは、明日の晩飯でも話しているような「日常の顔」である。

「お前さあ、昼間からチラチラと村を見てたよナ？」

「ち、違つ……俺は、迷つて……」

「へー。トロン、おめえはどう思うよ？」

「この人、嘘ついてるの。ギルティなの」

「だよなあ。俺の勤も、こいつはゲロ以下のクソだつて訴えてんだわ」

いつからそこに居たのか、トロンまで混じつて好き勝手に会話を交わす。

ありえないことではあるが、田原がミリガンの言い分を認めたところで、悠がそれを認めるはずもなく、既に彼は「死んで」いたのだ。

「さ、行きましようね……貴方には大切な土壤になつてもらおうと思うの」
「はなつ、離して、頼む……助けっ……！」

悠がミリガンの髪を掴み、ズルズルと引き摺っていく。

まるで怪物に攫われる、哀れな昆虫のような姿であった。

「悠、おめえさんの遊びは好きにすりゃ良いが、しつかりと情報だけは聞いておいてくれよ」

「ええ、任せて頂戴。尋問と“お医者さんごっこ”は得意なの」

「ヒエツ。聞いたか、トロン？ 体調を崩してもあそこには近寄んなよ？ 正直、聞きたかねえが……土壌つてのは何をするつもりなんだ？」

「今、新しい植物を育てているのよ。人体を土壤にして、血液を吸って成長するんだけど、とつても綺麗な花を裂かせ……いえ、咲かせるの。北からお戻りになる長官に、その花をプレゼントしたいと思つて」

悠の言葉を聞いて、必死にミリガンが暴れようとしたが、その体はピクリとも動かない。その、恐ろしい内容を口に出している本人は、ラブレターをしたためる儂げな中学生のような表情をしていた。

「ねえ、田原。長官は喜んでくださるわよね？」

「お、おう……」

「やつぱり！ さっきのお仲間さんで試してみたらね、痛みを与えると花の色が鮮やかになった気がするの。この子にも頑張ってもらわなきゃ」

「そ、そうだな……」

顔を引き攣らせる田原と、「バイバクイ」と無邪気に手を振るトロンを置いて、悠がウキウキとした姿で「土壌」を運び出す。

魔女に引き摺られながらも、ミリガンが必死に声を絞り出した。

「俺は、俺、何も、知らねえ……ただ、言われて遊びに來ただけなんだッ」

「大丈夫よ、貴方が素直に話せるようにお姉さん、頑張るから。そうね、例えば私は《記

録改竄』というスキルを持っているの。人間ってね、言い換えると多くの記録が集まって一つの体になっているのよ」

「な、にを言ってる……」

「例えば貴方の年齢、これも『記録』よね。これを8歳なんか改竄しちゃえば、身も心も幼子に戻って素直に話せるようになるわ。例えば、貴方の性別という記録を改竄しちゃうのもいいわね。他にも貴方の両親を改竄するのも悪くないわ。私が母親になれば、貴方も安心して色んなことを話してくれるわよね？」

悠が黒板の前に立つ、教師のような姿で説明を続ける。

そのたびに、ミリガンの顔が青くなり、遂には蒼白になっていく。

本来、『記録改竄』というスキルはGAMEにおいては自身の殺害数を『リセット』するために作られたスキルである。当然それは、正義漢や乾坤一擲などの激烈な攻撃に対する防御のためだ。

だが、この世界では細かい裏設定まで全てが適用されるため、その用途は格段に広がっている。

あらゆる記録を改竄してしまう、仏にも鬼にもなるスキルと化していた。

「長官に喜んでいただくためにも、頑張ってるね？ お姉さんも今回は張り切るから」

「だす、助け」っ……」

「——アツハツハ！ ばあああ〜か」

ミリガンの哀れな声に、遂に悠が口を開けて嗤いだす。

それは彼女の、いや、魔女としての本来の顔である。

「だあ〜れも助けてなんてくれないわよ？ 貴方だつてそんな言葉を言われて解放したことなんてあつた？ 無いでしょ？ だから、私も助けない。助けるはずもない。貴方は人としてではなく、植物として死ぬの。じきに言葉も忘れるわ」

「いや、だ……いやだあああああああ！」

「あら、元気な声で良いわね。私はね、最近思うの。たとえ蟻であつても、長官の靴を汚すのは不敬極まりないつて。蟻の方から道を空けなきや。ね？」

悠が優しく諭しながら、予備バッグへ千切れた足と共にミリガンを収納する。

翌日、ラビの村は何事も無かつたように平穏な朝を迎えた。

事実——「何も無かつた」のだから。

監獄迷宮五階層〜七階層

鬼湧きから離れた魔王一行は、凄まじい速度で下の階層へと進んでいった。

元々、ここはルーキーが挑む迷宮であり、Bランクであるユキカゼとミカンにとっては目を瞑っていても進めるような難易度ではない。

三階層までは似た魔物が出現していたが、五階層に降りた途端、暴れ鶏と呼ばれる魔物が出現し、魔王を内心で驚かせた。

1メートルほどの大きさがあり、それが凶暴さを剥き出しにして襲ってきたのだ。

ミカンが難なく一撃で首を切り落としたが、大きな鶏が人に突撃してくる姿は魔王にとつては衝撃的であつた。

「羽根を筆つて〜肉を切る〜♪」

ミカンが嬉しそうに、下手糞な鼻歌を歌いながら解体していく。

手早く白い羽根を筆つて次々にダガーで肉を小分けに切り分けていくのだ。

その手付きはベテランと呼べるものであり、何よりも——速い。

「あれは幾らぐらいになるんだ？」

「……肉は庶民の楽しみ。羽根も用途が広い。全部で銀貨2枚にはなる」

「それなりの儲けにはなるわけか」

二人のチームなら銀貨1枚の儲けとなり、四人なら大銅貨5枚にはなる。命を賭ける金額とすれば安いだろうが、何羽も狩れるとなれば話は変わってくるだろう。

二人の会話をよそに、ミカンの解体がどんどん進む。

「見直したぞ、ミカン。大したものだ」

「ハッ、何処かのポーター様が解体をしてくれれば、時間を無駄にせずに済んだんですけどね。独り言ですけど」

ミカンがジト目で皮肉を口にしていたが、それを聞いている魔王の顔は何処吹く風である。そもそも、この男は獲物を運んですらいらない。

全てユキカゼの作り出した台車に放り投げてあるだけであった。

「よし、と！ おしまい！」

「……お疲れ様《白い光／ホワイトニング》」

汚れを落とす魔法を手を受け、ミカンがサツパリとした表情を浮かべる。

何だかんだで良いコンビであった。

それを見て、魔王の顔にも自然と笑みが浮かぶ。かつての“GAME”でもそうであったが、連携の取れたチームというのは、見ていて非常に心地が良いものだ。

——よお、ミカンじゃねえか。

だが、そんな空間に染みを落とすようなダメ声が響く。

魔王が振り返ると、そこにはあばただらけの顔に小太りの男がいた。

咄嗟に魔王がユキカゼへと《通信》を飛ばす。

《ユキカゼ、あの男は何者だ？》

《……ハッ、私の頭におじ様の声が。これが結婚？》

《何を言っている。あの男は何だ？》

《……あれはDランクのエンジョイという男。ミカンの処女を狙っている》
《それはまた、ご苦労なことだ》

あのじゃじゃ馬を狙うなど、魔王からすれば乙、としか言いようがない。
だが、エンジョイの態度は実に馴れ馴れしいものであった。

「つれないじゃないか。ここに來ていたのなら声をかけてくれよ」

「はあ？ 何であんたに声をかける必要があんのよ」

「俺とお前の仲だろ？ ツンツンすんなって」

「キモッ！」

エンジョイの態度も大概であったが、それに対するミカンの態度もそれに準じた酷いものであった。続けて、エンジョンがわざとらしく「今、気付いた」と言わんばかりの態度で魔王へと目を向ける。

半笑いの、何処か見下した目付きであった。

魔王はそれを見て反射的にブン殴りそうになったが、何とか堪える。

そう、彼は大人なのだ。

「ミカン、まさかこんなオツサンに興味を变……おげええええッ！」

エンジヨイの言葉が途中で止まる。

魔王が軽く小石を親指で弾き、腹にぶつけたためであった。

そう、彼は大人ではあるが、無礼な若者に対しては鉄拳制裁も辞さない勇氣ある大人であったのだ。

「おやおや、腹痛かね？　昨夜は腹を出して寝ていたに違いない」

そんな魔王の皮肉すら耳に入れている余裕がないのだろう。

エンジヨイが腹をpushさえながら悶絶する。

あまりの激痛に膝を突いたとき、強烈な腹部への圧迫が頂点に達し――

――ブツ。ブツ！

と、エンジヨイの臀部からガスが漏れた。

一瞬、場に静寂が訪れ、魔王が「は。ぷっ！」と吹き出す。だが、魔王は大きく咳を一つすると顔を顰め、重々しく口を開いた。

「迷宮内で堂々と放屁とは、君は冒険者の風上にもおけんな。緊張感が足りん、と言わざるを得んよ」

「て、てめっ、ふざけ——」

「それとも、何か？ その悪臭で魔物を誘き寄せる、何らかのスキルだとても主張したいのかね？」

「お前、殺……し……ッ！」

——ブツツ！

エンジョイが怒りのあまり立ち上がろうとしたとき、引き締めていた力が抜けたのか、二度目の力ある放屁が迷宮内に響いた。

「全く、度し難い男だな——君には失望したよ」

「~~~~~！」

まるで、最初は期待していたかのような口振りで魔王が話す。

次々と矢のように放たれる煽りに、ミカンが遂に大笑いする。

無論、期待どころか魔王はもう彼の名前すらロクに覚えていない。もう一度聞いたところで、脳内には「屁こき男」としかインプットされないであろう。

「抜け！ 殺してやるよ、てめえ！」

「ほう——」

魔王が無言で小石を投擲し、それがエンジョイの臀部を擦る。

それは摩擦熱であったのか、ガスに引火したのか——エンジョイの臀部に、薄暗い洞窟を照らすような、小さな火が灯った。

「あつつつつ！ あつちいいい！ 水！ 水うううう！」

「次は炎上芸かね。君も冒険者ならば、戦いの中で体を張りたまえ」

「……炎^{エン}ジョイ」

ユキカゼの放った一言に、魔王も遂に大笑いする。

火を消そうと必死に転がりまわるエンジョイを尻目に、一行は笑い声を響かせながら六階層へと向かっていった。

「殺してやる……あいつ、殺してやるぞおお！ あつち！」



一行が七階層まで進んだとき、魔王の足が止まった。

田原から《通信》が届いたのだ。

「すまないが、私は少し瞑想に入る。二人で遊んでいてくれ」

「……分かった。魔物からおじ様を守る」

「なくにが瞑想よ。カツコ付けちやってさ」

ミカンが不満を露にしながらも、大剣を引っさげて暴れ鶏へと向かう。

彼女からすれば、ここは懐かしい地でもあり、思い出の地でもあり、何だかんだ言い

ながらも楽しんでいるのだろう。

《どうした、田原。緊急の案件か？》

《いんや、只の報連相だわ。昨日、馬鹿が来たんで始末したってだけの話なんだけどよ……悠の話じゃ、例のドナ・ドナって貴族の手下らしい。長官殿の狙い通りってわけだ》
《ほう、ようやくか——》

咄嗟に魔王が適当に合わせる。ようやくも何も、この男はドナ・ドナという貴族の名すら初めて聞いたばかりである。

むしろ頭には、その名前から否応なしに連想される、独特のメロディーしか流れていない。

《あんたの狙い通り、オルゴールを狙ってたみたいだな。相変わらず、良い餌をぶら下げて釣り上げるのがお上手なこつて。あんたのことだ、堂々と国境を越えて留守をこれみよがしに“アピール”したのもこのためなんだろう？》

《ははっ、私にそんな思惑はなかったさ》

《かーっ、いけしゃあしゃあと良く言いやがらあ。ま、これで堂々と相手の非を鳴らせ

るってわけだ。狙いは、やつこさんが持つてる鉱山か?」

《まあ、その辺りも含めて帰還後に会議を開くとしよう——》

《りよくかい。しみじみ、あんただきや……敵に回したかないね》

田原との通信を終え、魔王がよろめきながら壁に手を付く。

気力をごっそり持っていかれたような姿だ。

(何を言ってるんだ、あいつは!? オルゴールが何だつて??)

無論、魔王は金に困ってオルゴールを売却したに過ぎない。だが、田原や悠の中では何事かの謀になっているらしい。

それも、用意周到に張り巡らされた罠の類であるらしかった。

(むしろ、俺が罠にかかった気分だよ!)

魔王はそう叫びたくなかったが、それを口に行えるはずもなく、必死に震えを押さえ込んだ。
んでいた。

そんな魔王へ続けざま、悠から《通信》が入る。

《長官、ご報告は聞いていただけましたでしょうか？》

《ああ、ご苦労だったな。追って、次の指示を出す》

《はい、それとお戻りになった際、長官にお渡ししたいものがあります。最近、綺麗な花を咲かせる植物を育てているんです》

《ほお！》

魔王がそれに対し、強い反応を示す。

マツドな設定を施していた側近が、そんな可愛らしい趣味を始めるなど思いも寄らなかったのだろう。現に、“大野晶”はそんな設定など一行も書いていない。

それだけに、悠の始めた女性らしい趣味について笑顔になってしまう。

《お前がそんな趣味を始めるとはな。素晴らしいことではないか》

《は、はいっ！ 長官に喜んでいただけるよう、立派に育てたいと思います》

《うむ、楽しみにしているぞ》

《はい、お帰りをお待ちしております》

悠との通信を終え、魔王が嬉しそうに煙草へ火を点ける。

解剖や解体をこよなく愛する悠に、何らかの良い変化が訪れていると心が浮き立つような気分だったのだろう。

無論、今の通信によって外道達が生まれてきたことを後悔するはめになるのだが、魔王が知る由もないことであつた。

「よし、今日はこれまでにして、デイナーにでも赴こうではないか」

「……おじ様とデイナー。素敵」

「何であんたが仕切つてるのよ。仕事しないポーターのくせに」

ミカンが狩った獲物を台車に放り込みながら、小言を洩らす。

実際、今日の狩りはミカンとユキカゼばかりが働いており、魔王は特に何もしていない。この男がしたのはエンジンジョイのケツに火を点けたことくらいだろう。

「まあ、そう言うな。今日は私が奢ろうではないか」

「マジ!? 高いもんばっか頼んで後悔させてやる……」

「あまり遠慮なしに食うようなら、ケツに火が点くことになるぞ」

「……ミカンなら逆に喜ぶ。ロウソクファイヤープレイ」

「あんたら二人が燃えてろ！ いっそ灰になれッ！」

こうして、一行の迷宮初日は無事に終了した。

白き光

迷宮を出た一行はギルドへ直行し、報酬を受け取った後に税を支払った。まさに日払いの後に即徴収の体制である。

取りっぱぐれがないようにしているのだろう。現に迷宮から出た後は衛兵からの厳重な監視の下にギルドへと案内されたのだから。

(報酬は満額か……)

魔王はユキカゼから聞いていた獲物の報酬と、実際に支払われる額の差に注視していたが、結果は満額回答であった。獲物の部位に傷が少ない、切り分けも巧みであったことなどが理由として挙げられる。

当然、これがルーキー達であつたらこうはいかない。

仕留めるまでに羽根はポロポロになり、肉は損傷だらけ。解体の腕も悪いので報酬は三割減額なども珍しくない。

ギルドを後にし、魔王はユキカゼに問う。

「獲物の状態だけではなく、解体の腕も報酬に直結してくるのだな」

「……そう。ミカンはとても手際がいい」

「それより、分配よ。今回は何も決めてなかったし三分分ね」

ミカンが三分分にした金を其々に渡す。

小さな皮袋を受け取った魔王はそれらを揺らし、銅貨や銀貨が立てる小気味良い音を
楽しんだ。

「別に、私の報酬は要らんぞ？」

「ダメよー！」

魔王の言葉に、ミカンがハッキリとした口調で告げる。その語尾の強さに周囲が振り返ったが、すぐに興味を無くしたのか再び歩き出す。

「確かにあんたはポーター失格だけど、働きによつて報酬が左右されるなんてあつちやいけないことなの。あんたも迷宮に潜るなら覚えておいて」

「なるほど——」

その言葉から、魔王は多くのことを察する。

この男は普段こそ大雑把であるが、その想像力とイメージ力に関しては桁違いだ。でなければ、一人で“世界”を作り続けることなどできない。

——魔王は考える。

実際にそういった事例があつたのだろう、と。

その結果、ポーターのなり手不足に陥つたに違いないと結論付ける。

迷宮に潜るからにはポーターにも当然、危険がある。命まで賭け、出来高報酬ですと言われて誰が手を挙げるだろうか。

まして「お前、働きが悪かったから減額な」などということが堂々とまかり通つてしまえば、そんな仕事に就く人間など居なくなるに決まつている。

最終的にポーターが居なくなつて困るのは冒険者であり、それは国の徴収システムにまで破綻を生む。

「行政側も、その辺りには目を光らせるようになったのだろうな」

「え？ ええ……まあ、そうだけだ」

魔王の“数段飛ばした”言葉に、ミカンが訝しげな表情を浮かべる。

この男は、いつもこうなのだ。

時に一つの言葉から様々に連想し、それを自分の中で決定付ける。覆る何かが起こらない限り、それが真実として固定されてしまう。

それは、独裁者の思考。

正しい方向に転がれば、何処までもプラスの結果を生む。

何故なら、他人に左右されないから。何処までも自分の意思を貫き続け、途中で折れるということがない。

間違った方向に転がれば、何処までもマイナスの結果を生む。

何故なら、他人に左右されないから。何処までも自分の意思を貫き続け、途中で諦めるということがない。

この男は、自らの欠点を臆気ながら自覚している。故に、少しでもそれを補おうと周囲に人を集め、様々な声に耳を傾けるようになった。

彼が作り出したラスボス“九内伯斗”が有能な人物をスカウトし、それらを側近として並べていたのは、自らの理想がそこにあつたからなのかもしれない。

「おおい！ 今年も勇者様が来たぞおおい！」

誰かのそんな叫びに、周囲が騒然となる。

子供達が真っ先に走り出し、大人達も走り出す。

「勇者だと!? 本当にそんな存在が居たのか?」

「はいい? 居るに決まってるじゃない。あんた、本当に何も知らないのね」

「……ライト皇国には二人の聖勇者ホーリーブレイブが居る」

ホーリーブレイブという響きに、魔王が「ちよつと格好良いじゃないか」と内心で思いつつ、自らもその勇者を見るべく、騒ぎの中心へと走り出した。

「勇者様〜!」

「こつち向いてー!」

「白い……圧倒的な輝きだ!」

街の入り口には大勢の人間が詰めかけ、繁華街に一流の芸能人でも現れたかのような

大騒ぎとなっていた。

全員が笑顔で手を振り、少しでも自分を見てもらおうと必死になっている。

「相変わらず白馬が似合う方ね」

「……白い」

「ふん、白馬に乗った勇者か。絵に描いたよう……ん？」

その人物を見たとき、魔王の目が大きく見開かれる。

美しい白馬に跨っているのは、男であった。それも、腹の出た結構なデブであり、その顔には白光りする眼鏡がかけられていたのだ。

背には大きな白い箱を背負っており、そこからは二本の柄が出ている。魔王の目には、どう考えてもコミケ帰りの戦士のようにしか見えなかったのだ。

「おいおい、まさかとは思いますが……勇者とはそっちの意味じゃないだろうな」

「何を言ってるの？ ヲタメガ様は紛れもなく勇者よ」

「酷い名前だな、おい！」

魔王が思わず、素のキャラで叫ぶ。

名前も見た目も、そのまんまであった。

「……ヲタメガ様は、『白い彗星』という異名を持っている」

「確かに白いが、引き籠もってるから肌白だけじゃないのか？」

「……もう一人の聖勇者は、『赤い悪魔』の異名を持っている」

「逆だろ、逆！ 何処から突っ込めば良いんだ」

魔王の頭に二人のニュータイプが浮かんだが、慌ててそれを打ち消す。

名や異名こそふざけたものであったが、ヲタメガは周囲に軽く手を振ると白馬から降り、後ろに数珠繋ぎのように引き連れていた馬車を止めた。

子供達がそれを見て、一斉に歓声を上げながら一列に並び出す。いつの間にか多数の衛兵が集まり、列の整理や見物人の誘導などを行っている。

そこで行われたのは——無料の配給と、炊き出しであった。

ヲタメガは子供達にパンとチーズを配り、大きな釜を据えて、大人には麦粥の配給を行ったのだ。皆が笑顔で集まり、歓迎するのも当然であろう。

「あの男は、いつもこんなことをしているのか？」

「二年の半分は北方諸国を回ってるみたいよ。ほんと、凄い人よね」

魔王の問いに、ミカンがしみじみとした表情で頷く。

だが、それを聞いた魔王の顔は何処か胡散臭げであった。この男は募金やらポランティアに対してそこまでの思い入れはない。

むしろ、募金を呼び掛ける人間などがとんでもない豪邸に住んでいたりするのを見ると、「お前がその家売って募金しろ！」と突っ込むタイプだ。

「これは人気取りのためか？ それとも、勇者とはこういういった行為を義務付けられているのか？ いや、その皇国とやらの指示でやっているのか？」

「あんたねえ、何処まで捻くれてるのよ。むしろ、ヲタメガ様は皇国からは中止するよう言われてるのに、自腹を切っていつも子供達にパンを配ってるんだから」

「それは、中々に興味深いな」

「……他国の事情に首を突っ込み、媚を売っている、と自国では非難されていると聞いた」

「——へえ」

それを聞いて、魔王の顔が——変わる。

胡散臭げだった目付きが猛禽のように変化し、相手の表情一つすら見逃さないような、怖いものとなった。

「デイナーは中止だ。悪いが、二人で出掛けてくれ」

「あんたね、奢るって言ったのを忘れたの!？」

「これで食うと良い」

「え……ちよつと、これ大金貨じゃないの！ 何考えてんのよ!」

魔王がそのまま立ち去ろうとしたが、ユキカゼがその袖を掴む。

その顔は、とても寂しそうであった。

誰がどう見ても、非の打ち所のない美少女が浮かべる儂げな表情に、流石の魔王も罪悪感を覚えたのか、優しく声をかける。

「まあ、その、なんだ。好きな物を食うといい。余れば二人で分ければ良いさ」

「……おじ様とのデイナーの方が大切。お金なんて要らない」

「なら、明日にでも行くとしよう。別に焦る必要はないのだから」
「……約束。破ったら添い寝してもらおう」

ユキカゼが小指を出し、魔王が顔を顰める。

こんな街中で、指切りなどしている凶を浮かべて頭痛がしたのだろう。だが、ユキカゼは容赦なく小指を絡め、一方的に約束を固めた。

魔王は何処か諦めたような表情でそれを見守り、群衆の中へと姿を消した。

「……ディナーと添い寝。どちらに転んでも私に損はない」

「あんたって結構、策士よね」

ミカンが呆れたように呟いたが、手にした大金貨の輝きにうつつりとした表情を浮かべ、遂には片手を突き上げジャンプした。

「今日は食べるわよー！ あいつの金だし、全部食いきってやるー！」

「……添い寝。朝までくっつく。引っつく。張り付く」

考えている内容はまるで違ったが、二人とも笑顔を浮かべてその場を後にした。



夜、人気のない路地裏にヲタメガが居た。

顔と全身を覆うボロボロのマントを身に付けているため、傍目からは浮浪者のようである。彼が居るのは何処の街にもある、貧困区域。

光があれば、闇もまた存在する。

光が強ければ強いほどに、闇の濃さは増すと云っても過言では無いだろう。好景気に沸くルーキーの街であっても、その法則から逃れることはできない。

あちこちに並ぶ薄暗い屋台に、貧民や金のない冒険者が集まり、安っぽい飯を掻き込んでいた。ヲタメガもその中の一軒に近寄り、店主に声をかける。

「親父さん、今日はどんなものがありますか？」

「麦粥なら銅貨3枚だ。器がないなら4枚になるが、どうする？」

「そうですか。器もお願いします」

「他にも大根の切り干しがあるぜ。入れると、銅貨2枚追加になるが」

ヲタメガは手を振って断り、麦粥を受け取った。
路地裏の手頃な石に座り、無言でそれを啜る。

「去年より値が上がっていますね。ジャガイモの油揚げも、銅貨2枚の値上げとなつて
いるのに量は減っていました」

「ほう、そうなのか——？」

ヲタメガの独り言に、何処からか声が聞こえ、反応する。

隠密姿勢で姿を消している魔王であつた。

だが、ヲタメガは驚きを表すことなく、そのまま独り言を続ける。

「そもそも、油も酷いものでしたよ。ずっと換えていないのでしようね……あれでは体
に毒となるでしょう。クズ野菜の炒め物に使われていたラードも消えていましたし、こ
の麦粥にも塩っ気がまるでありません」

「随分と細かい部分まで見ているのだな」

「貴方には負けますがね」

ヲタメガが苦く笑いながら麦粥を啜る。

味が殆どなく、不味のだろう。彼が炊き出していた麦粥にはしつかりと味を付けていたため、余計にそれと比べてしまふに違いない。

「お前は面白いな。やらない善より、やる偽善とは良く言ったものだ」

「偽善、ですか……確かにそう言われても、反論できませんね」

「誤解するな。私は褒めている——年中諸国を回つて、自腹で炊き出しを行うなど、常人にできることではない。まして、その行為が自国での地位を揺るがしているというのにな」

「地位など……私は、やりたいようにやるだけです」

——お前は、そんなに「自分の意思」が大切か？

その、底冷えするような声に、初めてヲタメガが顔を上げる。

無意識に背負った箱へと手が伸びていた。

それほどに、その声が禍々しかったのだ。まるで地の底から無数に手が伸び、全身を

絡め取ってくるようであった。

「今更ですが、貴方の目的をお聞かせ願いたい」

ヲタメガのそんな声に、魔王は長い沈黙を続ける。

姿こそ見せないものの、その気配はしきりに領き、楽しそうであった。

「面白いな。うん、お前は面白い。面白いじゃないか」

ようやく返ってきたのは、まるで子供の感想である。

そこには邪気はなく、むしろ無邪気といえるものがあつた。

「欲しいな——お前のことが」

それは、何処までもストレートな言葉。

飾りつ気など、まるで無い。だが、それだけに魔王の本音でもあつた。

「お言葉はありがたいですが、私は貴方が恐ろしい。実のところ、貴方の視線を感じてからというものの、ずっと震えが止まらなかつたのですよ」

「それはすまなかつたな。私は何事も、自分の目で判断する性質だね」

「それだけの力がありながら、他人任せにしないのは立派なものです」

「任せるときは幾らでも放り投げるさ。優秀な部下が増えれば増えるほど、私は楽になり、効率も良くなり、多くの人間がその恩恵を受けることに繋がる」

「シンプルではありませんが、至言でもありますね」

ヲタメガが麦粥を食べ終え、そのまま立ち去ろうとする。

その背に向け、魔王が声をかけた。

「私は今、聖光国にあるラビの村を開発していてね。お前にはいずれ、私の力になってもらいたい。いや、違うな——なつてもらおう」

「……何処までも、怖い人だ」

ヲタメガが振り返らずにその場を去り、魔王も逆方向へと歩き出す。

魔王と、勇者の、初めての遭遇であつた。

魔王の行進

——ルーキーの街 郊外

街の外には多くの馬車や布で幾つかのテントが張られており、キャンプ地のようなのが設営されていた。ヲタメガ率いる一団である。

彼は諸国を回る際、必ず街の外で宿泊するようにしているのだ。街に滞在していると、国の要人達から引つ切り無しに声がかかるためである。

彼を労おうとする者、その人気にあやかろうとする者、利用しようとする者、時には国ぐるみで彼を引き抜こうとすることも珍しくない。

当初はそんな誘いが多かったため、余計に彼は故国から疑惑の目で見られることとなり、今では外がどれだけ灼熱の季節であろうと、寒風が吹き荒ぶ中であろうと、街の外で過ごすことを自らに義務付けているのだ。

この一団に随伴している騎士は、決して多くない。

ヲタメガと行動を共にするということはライト皇国の上層部から睨まれ、出世コースから外れることになるのだから。

其々の馬車は御者を雇っているが、正式な騎士はたった三名しかない。

「ヲタメガ様の顔が憂い顔であるな」

「何か、思い悩んでいることがおありなのだろうか……」

「気になるな」

彼らは「白い三連星」とまで謳われる、手練の騎士達である。

その容貌は一言でいえば魁偉。その肉体も筋骨隆々であり、ヲタメガと共に戦場を駆けてきた無類の強者達であった。

揃いも揃って反骨心が強く、ヲタメガ個人へと強い忠誠を捧げているため、今ではライト皇国の上層部も匙を投げてしまった三人だ。

皇国からすれば厄介な一団でしかないのだが、他国に行かれては大きな痛手となるため、切るに切れない面倒な一団でもある。

「だが、見ろ。ヲタメガ様のあの輝きを」

「何という白き光か」

「見ているだけで浄化されるようだな」

彼らの言う通り、確かにヲタメガの体は白い光に包まれている。

それは幻覚ではなく、背負っている箱に秘密があった。箱の中には伝説レジェンドを超える武器が収納されており、箱自体が《白い光／ホワイトニング》を常時放っているのだ。

どれだけの戦闘の最中にあっても、彼の身が穢れることはありえない。まさに、一点の穢れなき聖勇者であるといつて良いだろう。手頃な石に座り、焚き火の前で佇んでいたヲタメガであったが、ようやく重い口を開く。

「皆さんは、ラビの村をご存知ですか？」

「無論、知っておりますとも」

三人の代表格、カイヤがヲタメガの声に応える。ちなみに余談ではあるが、他の二人はアルテマ、マツシユルムと言う。

「私の記憶では、あの村には大勢の貧しいバニー達が住んでいました」

ヲタメガの声に三人が頷く。ライト皇国と、聖光国の仲は決して悪いものではなく、しつかりとした国交もある。

ただ、ライト皇国は《大いなる光》を信奉する国家であり、聖光国は《天使》を信奉しているという違いがあるのだが、方向性は似ていると言って良いだろう。

《大いなる光》は文献にしか残されておらず、天使達を率いたと記されているのみであり、実際に存在したのかどうか、また、何を成したのかどうかも定かではないため、それを信奉するライト皇国はより濃厚な宗教国家と言って良い。

《天使》はその昔、確実に存在していたことが確認されており、その教えも実生活に利益を齎すものが多いため、聖光国は少し宗教色が薄いと言って良いだろう。

ただ、国家として向いている方向は近いため、その仲は良好である。

「ヲタメガ様、ラビの村がどうかしましたので？」

「旅の最中、何度か耳にしたのですよ。聖光国に、魔王が降臨したと」

三人が苦笑を浮かべ、何とも言えない表情となる。

当然、三連星もその噂は聞いていたが、与太話として聞き流していたのだ。

「ヲタメガ様の言葉に逆らうようですが、魔王なんてのは……」

「その魔王がラビの村に居るとしたら、どう思いますか？」

「それ、は……どういう意味でおっしゃっておられるので？」
「いえ、すみません。変なことを聞きました」

ヲタメガが再び、焚き火へと目を向ける。

眼鏡の奥にある瞳はとても澄んでおり、それを見ているだけで、三人の心は何とも言えぬ充足感に満たされてしまう。

まるで、溜息を洩らすかのように三人が呟く。

「何という美しい方であろうか……」

「ヲタメガ様こそが、我々の光なのだ」

「あの雄々しい腕に、朝まで抱かれないものよ」

「マツシユルム、その汚え口を閉じろ」

「ヲタメガ様から、いずれ寵愛を受けるのは私なのだ」

「寝言は寝てから言え。あの白き光が貴様らなんぞに穢されてなるものか」

彼らは強者であり、国の圧力にも負けない立派な騎士であった。

ただ、残念なことに三人はヲタメガを性的な目で見ており、忠誠と愛情が混じった複

雑なものを抱いている。

魔王も勇者も——中々に苦勞が多いようであった。



——ルーキーの街 安宿

「ほう、今日は休日か」

「そうよ、潜った翌日は必ず休むようにしてるの」

翌朝、魔王とミカンが宿屋のロビーで朝食を取っていた。

ユキカゼはまだ寝ている。と言っても、別に寝坊したわけではなく、気力を回復させるために睡眠を取っているのだ。

二人は長い冒険者生活の中で学んだのだろう。

しつかりと一日休むことが、体力と気力を回復させるということを。故に、二人は潜った翌日は必ず休日を設けるようにしている。

「正しい判断だな」

魔王が苦いコーヒーを飲みながら、深々と頷く。

例えば野球でも、連日同じピッチャーが投げるなどということはありえない。球威は落ちるだろうし、そんなことをしては肩も壊す。

まして、命懸けの戦闘に挑むなら万全の状態で臨むのは当たり前のことであった。

「お前達は、意外にしつかりとしているのだな。偉いものだ」

「何よ急に。変な物でも食べたの？」

「いや、私が16や17の頃など、遊び呆けることしか頭になかったのだな。それらを思い出すと、お前達は実に立派なものだ」

「変な奴……」

ミカンはそっぽを向いていたが、これは魔王の本音である。

いや、彼だけではなく、平和な現代日本に住んでいる者で16やそこらで命懸けの日を送り、自分の稼ぎだけで食っている者など存在しないだろう。

魔王からすれば昨日のヲタメガといい、この二人といい、大したものだと改めて思っ

たに違いない。

「別に興味はないけど……あんたって若い頃は何をしてたのよ？　って言うか、大体どっから来たのよ」

「少なくとも、お前達と同じ年の頃は学校に通っていたな」

「学校?？」 冒険者の養成所みたいなの？」

「まあ、基本的な学問を学ぶ場所とでもいうべきか。むしろ、多くの人間と交わることによって、人間関係や小さいながらも『社会』を学ぶ場所であったのかもしれないが」

魔王の説明は、何とも取り留めの無いものであった。

実際に学校へ通った者でなければ、上手くイメージが浮かばないであろう。だが、ミカンはそれなりに興味深そうな顔でその話を聞いていた。

紅い、ルビーのような瞳がじっと魔王の顔を見つめる。

「ま、あんたも一応は人間ってことで良いのかもね。まだ疑わしいけど」

「さて、な——実際のところ、それを決めるのは私ではないのかもしれない」

「はいい？」

「私は少し出る。休日というなら、これでも使って遊んでいるといい」

魔王が漆黒の空間から《白ひげ危機一髪》を取り出し、ミカンへ手渡す。

「な、何よ、この小さい樽！　っていうか、どつから出したあああ!？」

「順番に剣を突き刺し、真ん中の白髭が飛んだ方が負けだ。ユキカゼが起きたら、何かを賭けて遊んでると良いさ」

それだけ言って、魔王が宿屋を後にする。

残されたミカンは樽のあちこちを見て、目を白黒させていた。

(さて、魔物とやらと戦ってSPを稼ぐとするか)

魔王は全移動を使い——昨日降り立った七階層へと飛んだ。

そう、この男は入場料を払う必要がない。



そこは昨日と何ら変わらず、薄暗い洞窟のままであった。

ただ、要所要所に《光》が込められた魔石が埋め込まれているため、それなりに視界は確保されている。魔王の姿を見て早速、魔物達が蠢き出す。

(こいつらのLVはいつたい、幾つぐらいなんだ?)

向かってきた暴れ鶏に、魔王が豪快な蹴りを放つ。

途端、大きな胴体が突風でも食らったかのように吹き飛び、壁へ衝突する。

魔王が管理画面から確認すると、SPが29から33へと増加していた。

(こいつのLVは4で間違いないだろう)

GAMEでは先制攻撃を行った際、必ずSPに+1がされる仕様となっていた。

そして、LV差による差額の入手。

反撃に関してはもう少し複雑なシステムとなっていたが、この男が後手に回らなければならぬケースなど稀であろう。

「こちらのLVが低いことが幸いしたな」

魔王が誰に言うわけでもなく呟く。

確かに、不夜城に控えていた委員会のメンバーは全員がLV1であった。只でさえステータスやスキルが強烈なので、レベルアップに必要な経験値が天文学的な数値に設定されていたのだ。

他にも理由があるのだが、あの“GAME”では高LVであることが有利になるとは限らないシステムとなっていた。

設計者である“大野晶”が、ごり押しの高LVプレイを嫌ったためである。彼が作り上げた世界は、頭を使って戦わなければ生き残れないものであったのだ。

(さて、存分に稼がせてもらおうとするか……)

薄暗い洞窟の中を、魔王が進んでいく。

この迷宮に現れる魔物の知性は低いため、戦力差を弁えずに次々と立ち向かってくるであろう。それらは全て、魔王の“贄”でしかない。



情報の一部が公開されました。

ライト皇国

北方諸国ではなく、西方に位置する大国。

《大いなる光》を信奉し、その教えを伝える教皇を頂点とした国家。

二人の聖勇者を抱えるだけでなく、その下にも無類の強さを誇る騎士団を有しており、その国威は揺るぎない。

豊かな耕地と温暖な草原に恵まれているため、食料の一大生産地でもある。

北方諸国への食料供給地とも言えるため、邪推のある見方をすれば、戦乱を長引かせている何よりの元凶であるとも言えるだろう。

国内に迷宮が存在しないため、食料と引き換えに多くの獲物を輸入している。

無情の行進

「無人の野を往くが如し、だな……」

魔王が小さく呟く。別にその顔は嬉しそうではない。

どちらかと言えば、拍子抜けしているような表情である。

元々、この迷宮はビギナーが挑む場所であり、深階まで降りない限りはそこまで危険な魔物も出現しないのだ。まして、魔王と呼ばれるに相応しい力を備えたこの男が往けば、敵など皆無に等しい。

「またお前か。懲りない奴だ」

魔王の前にブリキが立ちはだかる。その体は苔生した金属に覆われており、その金属を剥がせばそれなりの収入になるが、ルーキーが相手をするには中々、厳しい相手であつた。

無論、この男の前では文字通り、只のブリキでしかない。

無言で魔王が距離を詰め、その拳を胴体へ叩き付ける。

ソドムの火を使うまでもなく、金属を撒き散らしながらその生命ごとブリキが壁へと吹き飛ばされた。今日は迷宮に入ってからというもの、この男は全て格闘だけで敵へ対処しており、様々な戦闘スタイルを模索している。

「金にはならんが、SPを稼ぐには丁度良いな」

そう、この男は魔物を倒しても一切、剥ぎ取りや解体などをしていない。

そんな技術もなければ、それをやるつもりもなかった。この邪悪な魔王には汲めども尽きぬ黄金を生む源泉があり、ちまちまと低級の魔物を解体する必要がない。

現れる魔物を次々と撃退しながら、下の階層へと突き進んでいく。

そして、遂に十階層に降り立ったとき——異変は起きた。

「まくた一人で潜る馬鹿を発見つと♪」

「今日はカモが多くて助かるな」

魔王の前にガラの悪い冒険者が二人現れ、ナイフをチラつかせる。見た目からして既

に危ない雰囲気であった。現に、辺りには錆びた鉄のような不快な血の臭いが漂っており、魔王の顔を聳めさせている。

「何か用か——と聞きたいところだが。まあ、察しはつく」

「お利口じゃねえか。ありったけの金を置いてけ」

「でもよ……こいつ、獲物を持ってねえぞ？」

ゴロツキコンビが困惑するのも無理はない。

余程腕に自信のある者なら一人で潜ることもあるだろうが、それでもポーターを連れていたり、獲物を入れる何らかの箱なり、袋なりを所持しているはずであった。

しかし、この男にはそんな気配すら見えない。

「素直に払っても、無事に帰れるとは思えんな」

魔王が視線を向けた先には、首のない死体が転がっていた。

臭いの発生源である。首のない死体というのは何処か作り物のようでもあり、良くできた人形のようなようでもあり、魔王の頭ではあれをすぐに「人間である」と認識するのは難

しいものがあつた。

「あいつは特別だあ……抵抗しやがった馬鹿の末路よお」

「おめえも、ああんりたくなきや、素直に払うんだな」

「死人に口無し、とは良く言つたものだ。まあ、上に戻つて訴えられては身の破滅だろうしな。お前らの対処は、間違つてはいないさ」

こんな修羅場であるというのに魔王の頭に浮かんだのは、大昔のアメリカなどで金山が発見され、ゴールドラッシュとなつたときの風景であつた。

発見された当初は皆、金を掘るのに夢中になつていたが、いつからか発掘現場では「これまでとは違う」金の掘り方が発見されたのだ。

——金を発見した者を殺し、それを奪い取るという「掘り方」である。労力を使わず、時間も使わず、実に賢い掘り方と言えるだろう。

無論、人道を無視したやり方ではあるが。

魔王が無言で一步踏み出したとき、ゴロツキの一人が咄嗟に魔法を唱えた。

「おっと、動くなよ——《睡眠／スリープ》」

「おあつ……」

ゴロツキの指から放たれた『水』の魔法が、魔王の瞳に飛び込む。

途端、魔王の膝が崩れ、その上半身が揺れた。これは『水』の第二魔法であり、人間だけではなく、魔物に対しても効果が見込めるものである。

まして、魔法への防御力が皆無のこの男には覲面であった。

「ぐっ……あ、あああああッ！」

瞬間、魔王の右手に嵌められていた指輪から禍々しい黒い霧が立ち昇り、その全身を瞬く間に包み込む。

カチリ、と——“ナニ”かが変わる。

変わって、しまった。新たにそこに現れたのは本来の体の持ち主——九内伯斗、その人である。

九内の右手がソドムの火を掴み、自らの太腿に深々と刺し込む。

強烈な痛みを以って、眠気を打ち払おうとしたのであろう。理屈では分かるが、それを実際の行動に移せるかどうかは別問題である。

咄嗟に、自らの体に刃物を突き立てる判断を下すなど、とてもではないが人間の思考ではなかった。

ゆらりと立ち上がったその姿から、大気を震わせるような憎悪が溢れ出す。その眼からは、紅蓮の火を思わせるような紅い光まで迸っていた。

紅い残照を引きながら、九内が一気に距離を詰め、魔法を放ったゴロツキの顔を掴み上げる。右手一本でその体を持ち上げつつ、万力のような力で相手の顔面を握り潰す勢いで締め付け始めた。

『下賤——私に何をした？』

「はぎつ、が、顔、はが……ッ！」

『言葉の意を解する、知すら持ち合わせておらんのか？』

九内が力を強めると、人体からこんな不思議な音が漏れるのか、と思えるような無骨極まりない音が漏れ、ゴロツキの顔が骨格ごと変化していく。

まるで、柔らかいゴムが握り潰されるような姿である。九内の、何処か優雅さすら感じる指がゴロツキの皮膚を破り、肉を破り、骨にまで食い込んでいく。

「ま〃つ、まほ、う……水の……ふえひ！」

九内が無言で腕を振るい、ゴロツキを壁へ叩き付ける。

瞬間、その体がゴシヤリと奇妙な音を立てながら壁に赤い染みを作った。力なく四肢を投げ出したゴロツキの姿は、それこそ人形としか思えない。

『魔法か……厄介な世界だ』

「だす、だすげ……」

もう一人のゴロツキは腰が抜けたのか、尻餅をついたまま後退していく。しかし、その背がいつしか迷宮の壁にぶつかり、逃げ場がなくなる。

九内がゴロツキへ向かい、一步一步、ゆっくりとその足を進めていく。その顔は不思議な生き物でも見ているかのようにでもあり、何か昆虫の生態を観察しているかのようにもあつた。

「もう、じません……お金も出します。あげます、お金ツツ！」

『……下賤はいつも、同じ過ちを繰り返す』

「えっ?」

ゴロツキの顔に、ほんの少し希望が生まれる。九内の口調は酷く落ち着いており、これから自分を殺そうとするような気配が見当たらなかったのだ。

この男はもしかして、自分に他のものを求めているのではないかと。例えば情報であつたり、金ではなく物品であるかも知れないと。

だが、正解はそのどちらでもなかった。

『命乞いとは、 “慈悲のある相手” にするものなのだ——』

九内が足を持ち上げ、ゴロツキの顔にそのまま靴底を叩き込む。ゴロツキの頭部が様々なものを撒き散らしながら四散し、壁にもう一つの赤い染みが出来上がった。辺りに転がる三人の死体を見回し、九内が呆れたように “苦言” を洩らす。

『間抜けな創造主め——もつと私を愉しませてもらわねば困る』

そう言いながら、九内が右手に嵌められた指輪を見つめる。そこには血でできたよう

なメーターが刻まれており、「順調」にそれが満ちつつあるのを確認し、その顔には似つかわしくない笑みを浮かべた。

『いや、確かに「混沌」を齎してはいるか……くつく……』

眼から赤い残照を引きつつ、九内が更に下の階層へと向かう。

その足が進むたび、体を覆っていた黒い霧が少しずつ剥がれ落ち、下の階層に降りた頃にはすっかりと元の姿へと戻っていた。



「クソがつ……あの野郎、好き放題にやりやがつて！」

魔王が呪詛を吐き出しながら拳を壁にぶつける。拳の方に痛みはなかったが、壁の方には大きな亀裂が走り、遂には粉々に砕け散った。

憤懣やるかたないのか、煙草に火を点けてしきりに煙を吸い込んでいたが、苛立ちが収まらないらしい。

「気楽にぼんぼん殺しやがって……」

相手は殺人犯だった、正当防衛だった、色んな言い訳が魔王の頭には浮かんでいたが、行き着くところは何ら抵抗することすらできないまま、人をゴミのように殺したという平凡な結論しか出てこない。手と足に、生々しい感触がまだ残っているのだろう。SPの無駄使いと知りながらもペットボトルに詰められた《水》を生み出し、それらを使って手や靴を洗っていた。

「んだよ、これ……綺麗になった気がしねえぞ！」

正確に言えば、それは少し違ったかもしれない。

彼の身に付けている衣服は全て《耐久力無限》であり、既にナイフを突き立てた太腿の部分も自動的に《裁縫》が施され、破れも綻びも無い。

自身が流した血も、付着した血も、いずれ時間とともに《耐久力無限》の修復作用で跡形も無く消え去るであろう。

だが、自分の意思とは無関係に人を殺したという事実は簡単に消えはしない。

自らの意思で立ち向かうのと、まるで身動きも取れないまま勝手に人をゴミのように殺されるのでは感触も意味も違いすぎた。

まるで工場のベルトに人間が乗せられ、運ばれてきた“ソレ”を自動的に殺す機械にでもなったような気がしたのだ。

無論、九内伯斗が聞けば大笑いするであろう。

400万以上の人間を殺し尽くした身に、一滴か二滴の血が加わったところで何の意味があるのか、と。その声が今にも耳に聞こえてきそうで、魔王は残ったペットボトルの水を勢い良く顔にかけ、気分ごと洗い流した。

「あの野郎、今に見てろよ……」

その眩きは小さなものであったが、闘志と一つの希望に満ちたもの。

九内へと意識が切り替わったとき、ハッキリと感じたのだ。右手に嵌められた指輪の強烈な意思と、その効果を。

(この指輪は、世に“混沌と破滅”を齎すことを望んでいる。それを達成すれば、願いが叶う)

イラついていた魔王の顔が、徐々に不敵な面構えへと戻っていく。
それは世に混沌を齎す“魔王”に相応しい容貌であつただろう。

「お前の願いなんで、叶えてたまるか。何もかも、俺が全て搔つ攫つてやる」

監獄迷宮 十二階層〜十五階層

— 監獄迷宮 十二階層

「なるほど、これが言っていた『監獄』か」

魔王の目の前に、鉄格子の付いた牢屋のようなものがあった。

尤も、その鉄格子は錆びており、朽ちている部分も多いため、牢屋としての役割を果たすことはもうできないだろう。

軽く見ただけでも、遙か昔に作られたものであることが見て取れる。

「岩壁を削り貫き、鉄格子を嵌めているのか……原始的だな」

鉄格子をコンコンと叩いたり、岩肌を触ったり、好奇心を剥き出しにして調べるも、特別変わった部分はないようであった。魔王としてはベタに、中には人骨が残っていたりするんじゃないかと考えていたのだが、そんな思いに肩透かしを食らわせるように、牢屋

の中は綺麗なものであった。

（誰かが掃除でもしているのかつてくらい綺麗だよな。いや、それを言うならこの迷宮そのものが清潔だ）

これだけ多くの人間が入り込んでいるというのに、ゴミ一つ落ちていない。

まして、ここは観光地でも何でもなく、命懸けで戦う場所だ。刃毀れた破片や血痕、それこそ人体の一部が転がっていても不思議ではないだろう。

魔王の頭に浮かぶのは——“管理”という文字。

マンションがそうであるように、誰かが行き届いた管理・清掃でもしていなければ、こゝも清潔さを保つことはできない。

（もし、そうだとしたら……それはいつたい、何者だ？ まさか凄腕の清掃集団などということはないだろう）

走り寄ってきた魔物に回し蹴りを放ちながら、魔王が思案に耽る。吹き飛ばされた魔物が背後にあった鉄格子を撒き散らしながら牢獄に収納された。

それを見ている限り、鉄格子も特別なものではなく、只の金属のようである。

「ここは昔、何かを閉じ込める牢獄だった。それは間違いない。そして、今もこの場所を管理している何者かが居る」

そこまで考えたとき、魔王は楽しそうに笑った。俄然、興味が湧いてきたのだ。

ユキカゼからこの迷宮は二十階層までであると聞いていたのだが、その最下層にも特別なものは何もなかったという。そこで行き止まり、ということと別にこの世界の住人は誰も不思議に思わないらしい。

それもそのはずであった。

冒険者にとってここは「職場」であり、知的好奇心を満たすような場所でも何でもなく、もっと生活に直結したりリアルな場所なのだ。

この男のように、生活を背負わずに気楽に潜っているような者など居ない。

「気になるな……その『管理者気取り』が」

魔王が更に下の階層へ続く階段を降りていく。

ここまでの深部に潜るような者は全く居らず、辺りは静まり返っていた。

次々と襲いくる魔物を振り払いながら、遂に十五階層に降り立ったとき、魔王の鋭い視線が鈍く光る何かを発見する。それは——小さな木箱。

それも、中にあつたのは見覚えのある物。

この世界で目にするには、あまりにも違和感があるものであつた。

「嘘だろ……。これ、銃じゃないのか……？」

魔王が木箱に入った銃らしき物を、穴が開くほどに見つめる。

次に、指でツンツンと触れた。まるで未知な物に怯える女子中学生のような姿である。こんな姿を誰かに見られたら赤面ものであろう。

「これは……田原に見てもらった方が良さそうだな」

こと、銃に関しては田原に丸投げすれば問題はない。

魔王はそう考え、木箱ごとアイテムファイルへと放り込んだ。銃どころか村のことも丸投げしているのだが、適材適所と言うべきだろう。

この男は統率や戦闘、詐欺行為などを働いているときに最も光るのだから。

「二度、宿に戻るか——」

魔王が《全移動》を使い、安宿の自部屋へと戻る。

気力を30消費すれば、距離など無関係に移動できてしまう壊れ性能であったが、迷宮からの離脱にも使えるのはあまりにも反則であった。

当然、戦闘中には使用することができないが、それでも時間の節約という観点から見れば魔法を超えた『奇跡』と称して良いレベルである。

魔王が難なく部屋に戻り、漆黒のロングコートを壁にかけたとき、ベッドが不自然に盛り上がっていることに気付く。

布団を捲ると、そこにはユキカゼが可憐なパジャマ姿で熟睡していた。数瞬、思考が止まり——その体が固まる。

「何故、私の部屋にいる?」

その問いに、ユキカゼは答えない。

完全に熟睡しているからだ。

「いや、その前にどうやって中に入った」

「……中に、挿れる。おじ様が私を求め——あむっ」

「これでも舐めておけ」

特定のキーワードに反応し、目を覚ましたユキカゼの口にキャンディーが放り込まれる。最早、様式美であった。

ユキカゼがキャンディーを口の中で転がしながら、甘い息を吐く。

「……宿の主を買収して、マスターキーで開けさせた」

だが、吐かれた言葉は甘くはなく、どちらからかと言えば辛いからものであった。魔王が思わず顔を覆い、込み上げてきた頭痛を抑える。

迷宮ではゴロツキに絡まれ、部屋に戻ったら戻ったで無断侵入されているのだから堪ったものではないだろう。

「この世界は犯罪者天国か……」

そう嘆く魔王であったが、この男の所業も大概であり、人様のことを言えるような立場ではない。聖光国を大混乱させている辺り、ベッドへの無断侵入犯など可愛く見えるような大悪人であった。

「……おじ様。あの玩具、とても楽しかった」

「それは何より。由緒正しいパーティーグッズだしな」

あれも例には漏れず、攻撃力一のゴミアイテムであったが、遊ぶ分には何の問題もない。ユキカゼが言うには、ミカンや冒険者が小銭を賭けて大いに盛り上がっているらしく、今もロビーでは熱い戦いが続いているらしい。

「ふん、久しぶりに私もやってみるか」

「……おじ様。犯るなら——あむっ」

「それでも舐めておけ」

「……悔しいけど甘い。びくんびくん」

魔王が様式美を達成しつつ、ロビーへと降りていく。下からは興奮した声が聞こえてきており、かなりの人数が白ひげ危機一髪で遊んでいるようであった。

やはり、伝統と歴史あるパーティーグッズとは何処の世界であろうと、盛り上がるの
だろう。

「イヤッフー！ 私の勝ちよ、さあ銅貨3枚払った払った！」

「クソー！ この赤い姉ちゃん強すぎるだろ！」

「この白ひげ、舐めてんのか！」

「ちよつと刺されたぐらいで飛び上がりやがって……！」

口々に冒険者らが叫び、ミカンが投げ出された銅貨を嬉しそうに掻き集める。彼女の稼ぎからすれば小銭でしかないのだが、その顔は太陽のように輝いていた。

冒険者らしく、賭け事が好きなのだろうし、勝つことも好きなのだろう。何せ、日常からして命を賭けているのだから。

「随分と盛り上がっているようだな」

魔王が不敵な笑みを浮かべ、樽が置かれた中央のテーブルに近付いていく。

その気配に冒険者達が自然に道を開け、一本の道筋が出来上がる。ミカンだけが腕を組み、じつと魔王を待ち構えていた。

形の良い胸、細いウエスト、しなやかな足、キツイ眼光——その姿にはまるで、磨き抜かれた野生の豹のような美しさがあつた。

「へー、あんたもカモにされに來たつてわけ？」

「私はどちらかと言えば『胴元』でね。運否天賦の勝負などはしない」

「やる前から逃げるんだ？ 恥を搔くのが嫌なんだあ？」

「安い挑発だ——」

魔王がそう言いながら、白髭を掴み樽にセツトする。そのまま、懐かしそうに小さな剣を握つたかと思うと、一つの穴へと突き刺した。

ミカンもそれを見て、挑発的な笑みを浮かべる。朝から遊び続けていたのか、勝つことに自信があるらしい。

早速、小さな剣を握つて刺そうとしたが、それよりも早く魔王の声が響いた。

「この私に勝負を挑むのであれば、賭けてもらわねばならん」
「幾らよ?　　と言うか、先に昨日のお釣りを返しとく」

ミカンがぶつきらぼうに皮袋を投げ渡す。

大金貨を貰ったものの、結局は使い切らなかつたらしい。銀貨2枚だけを使つたらしく、袋の中には二百万相当の金がそのまま残されていた。それを受け取つた魔王は、その皮袋の中身を豪快にテーブルの上へとぶちまける。

「ぎ、金貨だあああ!」

「銀貨があんなに……眩しいいいい!」

「何だありやああああ!?!」

ロビーに居る冒険者達は、安宿に泊まつているルーキー達ばかりである。それらを前に、この金銀の輝きはあまりにも眩しすぎた。

Bランクの冒険者であり、良いときには月に金貨80枚を稼いだことのあるミカンであつても、思わず唾を飲み込むような大金である。

「あんた、何のつもりよ……」

「私に勝てば、これを全てやる。ただし、負けたときには——」
「負けた、ときには……？」

全員の視線が魔王へと集まる。

その一挙手一投足からもう、目が離せない。たつぷりと間を置き、もったいぶった口調で魔王の口から禍々しい言葉が発せられた。

「そうだな。一日、従順なペットにでもなってもらおうか」

「なっ……！」

「犬と猫、どちらが好きだ？ 兎でも構わんぞ。語尾には全て、ワンやニャン、ピョンやウサなどを付けてもらおうことになるが」

「そんなの、死んだ方がマシよッ！」

ミカンが顔を真っ赤にして叫び、剣を差し込む。続けて魔王も、躊躇無く差し込んだ。何度か応酬が続き、段々とミカンの迷う時間が増えていく。

だが、魔王の動きには何の躊躇も無い。まるで、その鋭い眼光は全てを見通す力でも持っているかのような風情であった。

「どうした、そんなところで固まって？ 自ら冷凍ミカンになってどうする」

「うるっさいわね！」

苛立つミカンを尻目に、周りの冒険者達は剣が差し込まれるたびにどよめきを上げ、時には固唾を飲んだ。何せ、目の前には眩い金銀が転がっているのだ。

彼ら彼女らにとつて、それは夢のような額である。

「——ハハッ！」

ミカンの裂帛の意思を込めた突き——それは見事に、白ひげを宙に舞わせた。

歓声と悲鳴が響く中、ミカンの目にはまるで、白ひげがスローモーションで飛んでいくような錯覚すら感じた。

様々な歓声でロビーが包まれていく中、魔王が優雅に笑みを浮かべる。

「古来、戦とは——始まる前には終わっているものだ」

その重々しい台詞に、ミカンが思わず床に突つ伏す。

事実、始まる前に終わっていたのだ。白ひげはセットし、それを捻った位置によってアウトの穴が決まってしまう。ミカン達は適当にセットして、適当に遊んでいたため、それらの事実気付くことがなかったのだ。

「折角のゲームだ。盛り上げるために、更に一役買おうではないか」

魔王が無造作にテーブルの上に散らばっていた金銀を皮袋に放り込み、それを宿屋の主へと放り投げる。

「その金で酒や食べ物、果物などを買ってきたまえ。綺麗に使い切るようにな」
「こ、これをぜ、全部……ですか……!」

「全て、だ。それと、今後は私の部屋に何人も入れぬように」

「は、はいいいいっ!」

店主が米搗きバツタのように何度も頭を下げながら店の外へ飛び出していき、安宿のロビーに歓声が響き渡った。普段は露店で質の悪い物ばかりを口にしてているルーキー達にとっては堪らない振る舞いであろう。

評判を良くする、という意味でこの男は勇者を真似てみたのかもしれないし、単に懐かしいグッズでの遊びに気分を良くしただけなのかも知れない。

(大帝国とは別の道を往く、か……)

喜びに沸く冒険者達を眺めているうちに、魔王の頭にはいつか適当に吐いた言葉が蘇っていた。それは——側近達に苦し紛れに放った言葉。

だが、指輪の意思を知ったからには、別の意味合いを持つてくるであろう。明らかに九内は、この指輪を通して何事かを叶えようとしていたのだから。

(二度、村に戻ってみるか)

手に入れた銃らしきもの、ドナ・ドナという貴族への対処、作業の進捗具合……やらなければならないこと、考えるべきことはまだまだ山積みであった。

魔王は早速、田原へ《通信》を飛ばそうとしたが、相手を切り替える。頭に浮かぶのは、一人の少女。

《アク、今は何処に居る？》

《魔王様!! 今は畑で作業を手伝っていましたっ!》

《そうか、今から少し村へと戻る》

《本当ですか! すぐに迎えに行きますっ》

通信を終えた魔王は、未だ項垂れているミカンへと声をかける。

「ミカン、私は少し出る。朝には戻る予定だ。それと一日、ペットになる練習もしておくようにな」

「もう、帰ってくんなああああ!」

こうして魔王は久しぶりに、村へと戻ることとなった。

ホワイトの帰還

— 聖光国 聖城

魔王が迷宮で好き放題に暴れ、悠が花を育て始める少し前——聖城では大きな騒ぎが起きていた。騒ぎの中心となったのは、聖女の筆頭であるエンジェル・ホワイトである。何せ、その頭上には荘厳なまでの輝きを放つ、天使の輪が鎮座していたのだ。騒ぎにならないわけがない。聖光国の住人にとって、天使とはそれほど特別なのだ。

彼女が聖城の正門前に姿を現したとき、まずは門番があんぐりと口を開き、次に勢い良く地面へと突つ伏し、頭を下げた。とてもではないが、その神聖な輝きの前に頭を上げていられなかったのだ。騒ぎが騒ぎを呼び、聖城から次々と人が飛び出してきては、黒山の人だかりとなった。

その全てが声を上げ、時には膝を突いて手を合わせ、ホワイトを拜んだ。万人を平伏させるであろう天使の輪の輝きと、彼女の美しさが合わさり、完全に地上に舞い降りた天使となつてしまったのだ。

「ホワイト様——！」

「天使よツ！ ホワイト様が天使になったのよ！」

「何という神聖な輝きか！」

「目がつ、目があく——！」

「ホワイト様——！ 俺だ——！ 結婚してくれ——！」

「ホ、ホ——つ、ホアア——ツ！ ホア——ツ！」

大歓声の中、ホワイトが優しい笑みを浮かべ、手を振りながら聖城の中へと入っていく。その姿は女であっても見惚れるような美しさがあった。

それは外見の美しさだけではなく、内面から溢れる自信もあつたに違いない。

彼女の頭上に輝く神聖な輪は、遙か高次元の存在から直接与えられたものなのだ。故に、彼女は堂々と自信に溢れた態度で振舞う。

まして——「お墨付き」まで得ているのだ。

（あの方は、私に「よく似合う」と言ってくださいました……）

ホワイトが目を閉じ、あのとときの光景を臉に浮かべる。

彼女の中での魔王の姿は、その背に漆黒の翼を付け、大いなる光に抗う稀代の反逆者であった。だが、いつの時代も真面目で優等生な女性ほど悪に惹かれるものであり「自分だけが彼を理解し、守ることができる」などと考えるものだ。

(ルシファア様……)

白煙を薫らせる姿を思い出し、ホワイトの頬が高潮する。

あの悪辣な頭脳、何人も恐れない態度、地獄をも蹂躪するであろう魔王、古に謳われる墮天使。そんな存在が自分を認め、天使の輪を授けてくれたのだ。

彼女が感じた嬉しさと喜び。そして、高揚感は察するに余りある。

「ホワイト様……！　それはいつたい……！」

聖城の廊下を進んでいくに従い、騒ぎは増していく一方であり、ホワイトの姿を見た者は口々に叫びながら同僚へこの「慶事」を伝えていく。

まさに蜂の巣を突いたような大騒ぎに聖城全体が包まれていったが、とある人物が姿を現したとき、誰もが背を正し、その口を閉じた。

聖堂教会の生き字引ともいわれる「オババ」である。

その齡、既に90を超えているともいわれているが、その威厳は些かも失われておらず、ご意見番としての威圧感は相当なものであった。

「ホワイト、この騒ぎは何ぞや！ 神聖な聖城を何と心得……ひよええ！」

だが、オババもその頭上に輝く輪を見たとき、あまりの神々しきによるめき、遂には腰を抜かした。ホワイトが慌てて抱き起こしたが、オババの口からはまともな言葉が出てこない。

「ホワイトや……そ、それ、そ、あた、頭……！」

「——とある方から授かったのです」

ホワイトが笑みを浮かべ、二つの大きな双丘の前で手を組む。

まさに、比類なき天使の姿であった。

「と、とある方とは誰ぞ……！」

ホワイトはその問いには答ええない。ただ、静かに微笑むだけである。

何度も何度も「他言は無用だ」と言い聞かされていたからだ。オババもその態度を見て、何事かを察する。いや、察せざるを得ない。

よもや、天使の輪を授けてくださるような存在を、軽々しく口にするようなことはできないであろうと。

既にこの世界から、天使が消えて久しいのだ――

万が一にも、いや、億が一にも、そのような存在を不快にさせるようなことがあれば大変なこととなる。長らく待ち続けた、一本の蜘蛛の糸なのだから。

「わ、分かった……多くは問わん。じゃが、これだけは聞かせてくれ。その方は、我が国に居てくださるのじやろうな？ よもや他国へ行かれるようなことはあるまいな？」

オババの形相は必死である。

折角、掴みかけた糸を他国が掴むようなことがあつてはどうにもならない。だが、その問いにはホワイトがハッキリと答える。

「そのようなことはさせません。私が必ず、あの方を我が国に」

「そ、そうか……」

「はい、私が隣に仕え、あの方を……」

隣という言葉について、ホワイトが赤面する。

露天風呂で仲良く並んでいた姿を思い出したのだろう。だが、オババはその姿に目を見開いた。

そこに——“男の匂い”を敏感に嗅いだからだ。

「ほお、ほお！ 信じられんことじゃ……その様子から察するに、ま、まさか御子を為すことすら！ 聖女との間、に……？ 何という、何ということじゃ……！」

「ち、違つ……わ、私はそんな……！」

「分かつておる、分かつておる。事はあまりにも重大よ……」

オババは即座に、一部の情報を除いて緘口令を敷くことを決断する。

——聖女が遂に、天使の輪を授かった。

これは良い。実に良い。他国への喧伝にもなれば、自国の民にも大きな希望を与える

ことになるであろう。元々、ホワイトは民草からの人気が高いのだ。

だが、それを授けてくれた存在に関して騒ぎ立てるようなことがあれば、嫌気が差して何処かへ消えてしまわれるかもしれない。伝承に謳われるような高次元の存在には、様々な性格を持った者が居るのだ。

その点は、人間と何ら変わらない。静かな者も居れば、荒ぶる者もいるし、時には世俗を嫌って隠遁生活を送っていた者も居る。

「その方に關しては、ホワイトや。お主に任せる。決して手放さぬようにな？」

「はい、私が必ず……いい、いえ、その、近くに、居ていただきます」

「ふあつふあつ！ ええ覚悟じゃわい」

普段は控えめなホワイトであったが、照れながらも決意に満ちた言葉を洩らす。それを聞いて、オババも笑顔となった。

小さい頃からホワイトのことを知るオババであったが、色恋には最も程遠いと思っていたので喜びもひとしおであったのだろう。



ホワイトがいつもの部屋に戻ったとき、クイーンは相変わらず円卓に足を放り投げて退屈そうに頭の後ろで腕を組んでいた。だが、ホワイトの頭上に輝く輪を見たとき、椅子から派手な音を立てながら転げ落ちた。

「あ、姉貴っ！ な、何だそりやああああ！ 頭……頭にっ！」
「ふっふっ」

ホワイトが珍しく、悪戯っ子のような笑みを浮かべる。

普段はこの妹に驚かされたり、困らされることばかりであったのだ。それが驚きのあまり椅子から転げ落ちたのだから、してやったりとも言わなければならない。

「それ、天使の輪じゃねえか……何がどうなってやがる!？」
「うん、とある方からね——授かったの」

同じ言葉を口にしたホワイトであったが、その心境はかなり違う。今回はより濃厚に、一人の男としてその映像が浮かんだのだ。

無理もないことであった。ホワイトと魔王の接触は時間こそ短かったものの、内容があまりにも濃すぎたのだ。

裸体を晒してしまったこと、間接キスをしてしまったこと、腰を引き寄せられ「奇跡の行使」を共にしたこと、天使の輪を授けられたこと、「よく似合う」と笑ってくれたこと。

そして——また会おうと約束してくれたこと。

それらを思い出すたび、ホワイトの胸がじんわりと暖かくなる。短い時間であったにもかかわらず、それら全ての印象が強烈すぎて、経験したことのない危険に満ちていて、振り返ると胸がドキドキするのだ。

だが、クイーンは姉のそんな姿を見て敏感に何かを嗅ぐ。

「どういうことだ……何で姉貴が『女のツラ』をしてやる?」

「お、女のツラって、貴女ね……!」

「もう天使の輪なんざどうでもいい、相手は何処の誰だ? 『男』の匂いがプンプンしやる」

「ど、どうして貴女に言わなくちゃならないのよ……」

これは妹相手に気を許した、ホワイトの失言であつただろう。その発言は、間接的に相手の存在を認めたことになる。それも、男であると。

「おいおい……姉貴みてえな堅物を落とすとか、そいつは聖剣でも持つてやがんのか？ それとも、まさか龍のような……」

「それは貴女の趣味でしょ！ あの方には感謝はしていますが、私は——」

「ああ!? 零様に何か文句でもあんのかよ！ 幾ら姉貴でも聞き捨てならねえぞ、おい！」

「べ、別に文句なんてないわよ……ただ、私の好みはこう、落ち着いた大人の」

「馬つつつ鹿野郎！ 零様の少年のような笑みと強さと仕草と服と格好良さが分からねえのか！ 天下無敵だぞ、天下無敵イ！」

「な、何が天下無敵よ……あの方は奇……あ、いえ、何でもないわ」

つい対抗して「奇跡」という単語が口から出そうになり、慌ててホワイトが口を嚙む。幾らクイーン相手でも、軽々しく言えるようなことではない。

「とにかく、そいつに会わせる。俺のしごきに耐えられたら合格をくれてやる」

「何で貴女の合格を貰わないといけないのよ！」

「ああ？ 単に気に入らねえからだよ。ブン殴らせろ」

「ブン殴……貴女、本当に聖女としての自覚はあるの!？」

「あるわけねえだろ」

「ないのっ!？」

こうして姉妹の間まで騒がしくなりながら、聖城の一日が更けてゆく。

だが、ホワイトに休む暇はない。彼女は「その真意」を探るべく、とある人物へ会談を申し込んだのだ。互いに多忙なため、その日を迎えるまでに幾許かの時間は要したが、ようやく段取りが整い、その会談が実現する。

一個人を以って、聖光国に巨大な影響を与え続けるマダム・バタフライとの接触であった。

白蝶会談

聖城の前に一台の馬車が到着し、長い緊張の一日が始まった。

馬車には巨大な紋章と旗が掲げられており、聖光国に住まう者ならばそれを見間違はずもない。一匹の蝶が羽を広げた、優雅な紋章。

どんな貴族であっても、この紋章の前では背を正すであろう。

社交界と芸術界を牛耳るバタフライ家の紋章であった。馬車の中から降りてきたのは、美しい蝶が描かれた碧のドレスを身に纏ったマダムである。

門番は緊張した面持ちで背を伸ばし、精一杯の声を上げた。

「あら、元気の良い子ね」

マダムが門番の頬を軽く撫で、その胸にさりげなく銀貨を一枚入れる。門番はそれに慌てたが、やんごとなき高貴な方からの好意を拒むなど失礼にあたる。

より一層に背を伸ばし、マダムに感謝の意を示した。

民衆からは何かと嫌われている貴族であるが、バタフライ家に関してはそこまで嫌わ

れてはいない。と言っても、マダムの影響力が民草にまで及んでいるわけでも何でもなく、単なる商売上での好意である。

バタフライ家の領地にも鉾山があり、そこからは『土』に適した良質の魔石が採れるのだ。乾いた大地が多い聖光国にとっては大事な資源であるといえる。

家の代々の方針として、これらを高値では売らず、薄利多売の形で売り出しているのだ。それ故の、民衆からの仄かな好意であった。

バタフライ家はこれを高値で売り出せば大地が更に干上がり、それは巡り巡って自分達に破滅を齎す、ということを知っていたからであろう。

故にそれは慈愛でも慈悲でもなく、むしろ「自衛」であった。

(ここに来たのはいつぶりかしらね……)

マダムが聖城にある最奥の一室へと足を運ぶ。入念な盗聴対策が施されたそこは、奇しくもホワイトと魔王が会談を行った部屋でもある。

マダムが椅子に座ると、目の前に紅茶や小麦粉を水で練って焼いたビスケットなどが並べられた。マダムは躊躇せず、優雅な手付きでそれらを口に運ぶ。

周囲に居る者からすれば、まさに緊張の一瞬である。

マダムは別に美食家というわけではないが、その舌は確かだ。そのうえで齒に衣着せぬ発言をするため、その口から「不味い」という言葉が出たときは店や料理人にとつては「死」に直結してしまう。

本来なら格式高い店、名のある料理人が作ったものであるなら、味はどうあれそれを褒めるのが「貴族の社交」というものであろう。

味ではなく、格式や名を褒めるのだから。逆にそれらを罵倒などすれば、伝統や格式の分からぬ野蛮人よ、と笑われるのがオチである。

だが、マダムだけはその慣例に従わない。名もない木っ端のような料理人が作ったものであれ、それが美味しければ素直にそれを口にする。

店の看板や格式ではなく、「中身」を見る——マダムほどの立場の者がそれを大真面目にやってしまうのだから、周囲は堪ったものではないだろう。

彼女は自分の思いに、欲望に、何処までも愚直で、素直だ。これまでそうやって生きてきたため、多くの敵を作り、また多くの味方も手にしてきた。

(普通ね……)

肝心の紅茶や、粹を凝らしたビスケットには一言も洩らすことは無く、周囲は落胆と

安堵を同時に味わった。良くも無ければ悪くもないものに対しては、マダムはわざわざ口を開いてどうこう言うような無粋な真似はしない。

やがて部屋の中にホワイトが現れ、周囲の人間は一礼の後に静かに去っていく。残されたのはホワイトと、マダム——二人だけである。

「お久しぶりね、ホワイトちゃん」

開幕早々、マダムが先制攻撃を放つ。

これは公式の場ではなく、あくまで私的なものである、と宣言したのだ。事実、この場は記録に残すような公的なものではない。

(相変わらず、とんでもない女ね)

ホワイトを見るマダムの目がつい、細くなる。まるで身体の全てが特注で作られたような、嘘のような存在であった。天使からの寵愛を一身に受けたような美しさと空気を纏っており、ここまで突き抜けた美しさになってしまうと、同性であっても憧れや畏敬の目で見えてしまうものだ。

だが——マダムはそうではない。

マダムだけは、そうではなかった。

彼女の美しさから目を背けず、逃げず、真つ向から立ち向かつてしまう。故に、強烈な嫉妬を感じてしまうのだ。

それはマダムの気高さでもあつたであろうし、同時に弱点でもあつた。

そう、これまでは。

「ええ、ご無沙汰をしております……えつ」

ホワイトの体が一瞬、固まる。

以前に見たときより、マダムの体が一回り小さくなっているように感じたのだ。

その上、肌の色——特に顔が白くなっていることに気付く。それだけ並べれば、額面通りに病気のために療養している、という話になるだろう。

だが、違う。全く違う。

マダムは健康そのものであり、むしろその全身から以前には無かつた光が漏れているのだ。それは自信からくる女の輝き。

彼女は今、*“実感と前進”*を感じながら日々を過ごしているのだ。

その楽しさと痛快さは言葉にもならない。「明日」を迎えることへの希望に満ちているといつていいだろう。こんな女が、輝かないはずがない。

門番や使用人達が気付かなかつたのは、そもそもマダムの姿を殆ど見たことがないためである。

「……」無沙汰しております、マダム」

ホワイトが何とか動揺を抑え込み、席に座る。

だが、目の前から溢れてくる輝きには気圧されるものがあつた。只でさえ、迫力と威圧感のあつた存在が、より厄介なものに進化してしまつた、というのがホワイトの偽らざる思いであつた。

その輝きに何事かを感じ——ホワイトの心が一瞬だけ濁る。本人も自覚できないほどの「それ」を、その僅かな変化を、マダムは決して見逃さない。

「——アツハツハツ！」

突然、マダムが口を開けて哄笑する。

貴族の嗜みも何もない、扇で口元を覆うことすらしない、まさに高笑いであった。その無礼な姿に、流石のホワイトも眉間に皺を寄せる。

「何が可笑しいのです」

「こんな愉快なことが私の人生にあるなんてね。諸国にまでその美しさを以って知られるホワイトちゃんが、*“嫉妬”*を感じてくれたなんて」

「し、嫉妬など……!」

「いいえ、嫉妬よお? 私には分かるの——誰よりも嫉妬を感じながら生きてきた私だからこそ、分かるの」

マダムの態度は酷く断定的であった。事実、ホワイトはマダムの輝きに気圧され、微かな嫉妬を感じてしまったのだ。充実した日々、努力が叶い続ける日々、一歩ずつ前進を刻む日々。こんな毎日を過ごしている女の輝きは、尋常ではない。

「私は、そのような話をしにきたものではありません」

「そお? 私はもう、このまま帰っても良いぐらいに満足しちゃったわ。いいえ、大満足と言わなきゃね」

事実、マダムは非常に上機嫌であった。これほどの歓喜に包まれたのは塩サウナと出会って以来のことであろう。

この天使からの寵愛を一身に受ける女から「嫉妬」されるなど、マダムはもう床に転がり、地を叩いて叫びたいほどの気持ちであった。

ホワイトはそんな姿を、可愛いジト目で見ながら口火を切る。

「私が今日、マダムをお呼びしたのは……魔王と呼ばれる存在について、忌憚の無いお話がしたいと思つてのことです」

「——あら」

それを聞いて、マダムが態度を変える。

思わぬ方向に話が転がりそうであったからだ。

「率直にお伺いします。マダムはあの方を、どう捉えているのです？」

「そうねえ……」

マダムの頭が忙しく回転する。

だが、聡明なマダムはホワイトが口にした「あの方」という単語から敏感に何事かを察した。そこには敵愾心が見えなかつたからだ。

「幾つか仮説はあるけれど、一言でいうのは難しいわね」

マダムが勿体ぶつた口調で回答を引き伸ばす。別に意地悪をしているわけではなく、彼女が生きてきた社交界ではこれが普通であつたのだ。

幾ら率直にものを言うマダムであっても、重要な話に関してはいきなり本音や、思っていることを洗い浚い口にするような迂闊な真似はしない。

「逆に聞きたいのだけれど、ホワイトちや……おおああッ！」

今度はマダムが驚愕の声を上げる番であつた。

ホワイトが懐に隠していた天使の輪を——その頭上に浮かべたのだ。

天使の輪が放つ圧倒的な輝きと、神聖な光に今度はマダムの目が見開かれ、次にその体が大きく震えた。

「な、何よそれは！ 幾ら天使に寵愛されているからって、それは無いでしょ、それは！ あんた、いったい何処まで女を愚弄するつもりよ！」

マダムが感情を剥き出しにして叫ぶ。

只でさえ、天使から特別に寵愛されていると思っていた存在が、遂に天使の輪まで頭上に掲げ出したのだ。マダムからすれば、こんな馬鹿な話はない。

自分達の努力を、数段飛びで軽々と超えていかれたような気がしたのだ。

「天使の輪を人間に与えることができる存在について、他ならぬマダムには心当たりがあるはずですよ」

ホワイトの冷静な声に、マダムが冷や水を浴びせられたように沈黙する。

天使の輪——そんなありえないものを与えることができる存在。マダムはそれを頭に浮かべ、昂ぶっていた感情を宥める。

何度か深呼吸をし、マダムも努めて平靜な声で返す。

「そうね……私にも心当たりがあるわ。いいえ、改めて「確信」したわ」
「そうですか。私の見解と、マダムの見解は近いのかもしれない」

その応答を最後に、長い沈黙が部屋を支配する。

それを「公式の見解」としてしまえば、大変な騒ぎとなるであろう。

聖光国のみならず、ライト皇国などがどのような反応をするか考えるだけで恐ろしいものがあつた。あの国は大いなる光を信奉する国家なのだ。

当然、それに対する「反逆者」など国を挙げて討伐すべき対象となる。

「——戦争になるわね」

ポツリ、と。

マダムがサバサバとした口調で漏らす。

「それは、避けねばなりません。ライト皇国とは長い友好があります」

「遅かれ早かれ、それはやってくるわ。下手をしたら、北方諸国を巻き込んだの大きな大きな戦争になる。ホワイトちゃんはそのとき、どちらに付くのかしらね」

「……随分と意地悪なことを聞くのですね。そうならぬよう外交があるのです」
「普通に考えるならそうでしょうよ。でも、皇国が稀代の反逆者を外交程度で見逃すなんてことはありえないわ。まして、あの人が売られた喧嘩から逃げる姿なんて想像もできないわよ……あの国、綺麗な『更地』になってしまっくんじやないの？」

サラッとマダムがとんでもないことを口にしていたが、『あの人が聞けば仰天するであろう。』

「俺を宇宙怪獣か何かとでも思ってるのか」と。

「はい、私もそう思っています。だからこそ、避けなければならないのです」

ホワイトもサラリと皇国が更地になってしまおうと考えているようであった。

これまた『あの人が聞けば「んなわけねえだろ、いい加減にしろ！」と叫ぶに違いない。』

「なるほど、ホワイトちゃんとしては、あの人の存在が表立って露になるのは避けたいということかしらね」

「少なくとも、今の段階では」

「別に異議を唱えるつもりはないけれど、結局はあの人次第ね。あの人の部下にも、怖い男が居るのよお？ 私には戦いのことなんて分からないけれど、あの人が顎をやつて部下を派遣しちゃうだけで、何だか終わりそうな気がするのよねえ」

少なくとも、これに関しては事実であつた。

田原が行けば、皇国の頂点や主要人物を超長距離狙撃で一人残らず射殺し、ものの数日で無力化してしまうであろう。悠が行けばどのようなことになるか、想像もしたくないレベルである。

恐らく、草木一本生えない焦土と化すに違いない。

ホワイトとマダムは、「あの人」とその側近の力を詳しく知っているわけではないのだが、マダムは敏感に何事かを感じていたし、ホワイトは熾天使と同じ奇跡を行使するあの人に対して、無限の力を感じていた。

「むしろ、相手を思い遣つて表立たせたくないというわけね……。きっと、向こうにはその優しさは通じないわよお？」

「それでも、やれるだけのことはやりたいのです」

「そうねえ。あの年から特別に指示でもない限りは、私も特に吹聴するつもりはないけれど……」

——ただし、私はあの人の意思を最大限に尊重し、それに従うわ。

マダムがはつきりと告げた。聖女の筆頭たるホワイトに対し、それは反逆の意思をありありと示すものであろう。

聖光国という国家より、一個人の意思に従うと堂々と宣言したのだから。

「無理もないことです——」

ホワイトはその言葉に怒りを表すわけでもなく、静かに目を閉じる。

あのような超高次元の存在に対しては、国が定めてきた法や決まりなど、何の役に立つだろうか。ホワイト個人の想いとしても、既にあの人を悪しき存在であるとは思っていないのだから。

「聖堂教会も表立って騒がず、詮索しないことで話は纏まっています。今日はマダムに、

私達の考えをお伝えしたかったのです」

事実、聖堂教会は天使の輪を授けた存在がよもや「魔王」であるなどと思ひもしていない。故に聖女が天使の輪を授かった、という事実だけを内外に都合良く吹聴するであらう。

「ええ、確かに聞かせてもらつたわ」

それに対し、可とも不可とも言わずにマダムが立ち上がる。

自分の意思など、あの人の言葉次第で右にも左にも行くのだから、これ以上意見を交わしても無意味である、と態度で示したのだ。

「ところで——」

二人の声が重なる。

嫌なタイミングであつた。

「マダム、どうぞお先に——」

「いいえ、ホワイトちゃんに譲るわ」

「……………」

二人が無言で視線をぶつけ合う。

ホワイトは聞いたかった。何故、短期間でそこまで痩せたのか、と。何故、肌の色がワントーン白くなり、美しくなっているのか、と。

マダムは聞いたかった。

どうすれば、あの人から天使の輪を授かることができるのか、と。その美しい輪を貰えるなら鉱山の一つや二つ、幾らでも差し出す、と。

だが、両者ともそれを口に出すことができない。

先にそれを言えば、何だか“負けた気”がするからだ——

「……………い、いえ。何でもありません。マダム、気をつけてお帰りください」

「え、ええ……………私も何を言おうか忘れちゃったみたいよ」

二人が「うふふ」と固い笑みを浮かべ、会談が終了する。

国として、何か大きな変化を生むような内容ではなかったが、互いの立場や意見を交換できたことは大きかったであろう。少なくとも、即座に敵対する間柄ではなさそうだが、と互いに思うことができたのだから。

魔王の帰還

魔王は数日ぶりに見るラビの村の活気に目を瞠っていた。

大勢の人間が土や材木を運び、慌しく往復している。中には迷宮内で手にした砂つむりの殻を砕き、土に混ぜて捏ねている男達もいた。

(随分と形になるのが早いものだ……)

現代の日本でも建築スピードは凄まじいものがあるが、この世界では魔法というチートがあるため、速度に関しては決して劣るものではない。現場の作業に慣れている魔法使いなら、それこそ重機並みの働きをしてしまうのだから。

「魔王様、お帰りなさいっ!」

「アク、元気にしていたか?」

魔王が走り寄ってきたアクを抱え、その小さな体を引き寄せる。アクも嬉しそうに頬

擦りしていた。無意識にマーキングしている猫のような姿であった。

「ここも随分と変わったものだな」

「はいっ、やっぱり魔王様は凄いです!」

「別に、私は何もしていないさ」

魔王が苦笑う。この男からすれば、田原に概要だけ伝えて後は丸投げしているだけであつた。病院で手腕を振るっているのも悠であり、褒められるべきは側近達であつて自分ではない、という想いがある。

無論、これは魔王の過小評価だ。

この男が居なければ、そもそも二人の側近達がこの世界に現れることなどあり得るはずもなく、多くの拠点が生み出されるようなこともなかった。

大勢の人間を動かす資金を集めたのも、この男である。

「今回は急ぎで土産がないんだが、今度は良い物を持って帰つてこよう」

「無事に戻ってくれれば……それで良いんですっ」

アクの赤い瞳が真っ直ぐに魔王を見る。

前髪に隠された、碧色の瞳もキラキラと光っていた。この左右で違う光を放つ瞳に、魔王は神秘的な何かを感じており、それを見るのが嫌いではない。

つい手を伸ばし、アクの前髪を横へとやる。

「魔王様……?」

「うん、相変わらず綺麗な瞳だ」

「……ぼ、僕は、自分の目があまり好きじゃないです」

そう、アクは自分の瞳が好きではない。

この瞳のせいで村では迫害の対象となり、遂には顔の半分を隠すようにして生きてきたのだ。アクが村でどのように扱われていたのか、実際に見た魔王もその事は知っているのだが、この男は自分の意思に忠実だ。

「私は好きだぞ? 見ていると落ち着くしな」

「うう……」

アクが顔を赤くし、それを隠すように魔王の首元に抱きつく。別にこの男は口説いているわけでもなんでもなく、何か神秘的な宝石でも眺めているような気持ちで言っているのだが、アクからすれば照れくさいものであろう。

「北での用事も、じきに終わる。戻ったらバカンスにでも出掛けるか」

「バカンス、ですか……?」

「この国は暑いからな。プールでも作ろうかと本気で思っているくらいだ」

「……ぶーる?」

「まあ、今は気にするな」

アクからすれば想像も付かないだろう。

水風呂が最高の贅沢であるこの国で、貴重な水を目一杯に入れ、その中で泳ぐなどということは。そこには何の生産性もなく、一時の快を得るだけなのである。

飲むわけでもなく、何か農作物を育てるわけでもなく、ただ大量の水を消費するなど、ハッキリ言つて無駄の極みでしかない。この世界の住人からすれば、水の中で泳ぐ、という概念自体が存在しないといつて良い。

「さて、私は先に仕事を済ませてくる。また夜にな」

「はいっ」

アクの金色の髪を優しく撫で、魔王が温泉旅館へと向かう。旅館の前では綺麗な花束を持った悠が出迎えた。

「長官、お疲れ様でした」

「うむ、ご苦労。これが言っていた花か」

赤や黄、紫やピンク——悠の手元には色鮮やかな花がある。

触れるのが恐ろしく思えるような美しい花であり、魔王もこれには驚いた。

この男には花に対する造詣など全くないのだが、この花が尋常ではない美しさを持っていることぐらいは分かる。

「これは、思っていた以上に立派なものだな……感謝するぞ」

「は、はい……長官に喜んでいただけようと『品種改良』を繰り返したんです」

「そうか、素晴らしい趣味ではないか」

悠が嬉しそうに笑い、魔王の顔も綻ぶ。

魔王からすれば、地上に地獄を齎すような設定を施した悠がこんな可愛い趣味を始められるなど、嬉しくてしょうがなかったのであろう。

つい、余計なことを口にしてしまう。

「特に、この紫が良い——震えるほどの美しさがある」

魔王の頭にある花とは、チューリップなどの代表的なものでしかない。

花屋に並んでいる中には、余り紫色のようなものなど記憶になかったため、何となく口にしたのだ。

「やはり、そうですか——」

何故か、それを聞いて悠が満面の笑顔を浮かべる。

絶世の美人が無邪気な笑みを浮かべると、これほどに可愛くなるのかと感心してしまうような可憐さであった。無論、その「紫」が何から生まれたのかを想像すると、その

笑顔はまるで別の意味を持つてくるのだが。

「良い趣味だ。長く続けるようにな」

魔王の“それ”は、まるで祈りのようなものが込められていた。得てして、そういった本気の気持ちは相手に伝わる——伝わってしまう。

「は、はいっ！ これからも品種改良に力を入れたいと思います」

悠が手を組み、魔王を下から見上げる。

姿だけ見れば、憧れの先輩に花束を渡しているような姿に見えなくもない。

悠は女性としては背が高いのだが、流石にこの魔王の前に立つと、その身長差は歴然であり、並んでいるだけで絵になる二人であった。

「では、引き続き——病院の方を頼む」

魔王が労うように悠の肩を優しく叩き、その場を後にした。

(あつ……く……ううう)

残された悠は暫く震えていたが、触れられた肩を何度も触り、やがてその口を歪に曲げた。

「沢山、あの子達に裂か……咲かせなきや。紫は電気と腫れだったわね」

その目は爛々とした光を放ち、白衣を着るべき人物とは思えぬ禍々しさを放っていた。今日から私室では、更なる品種改良が始まるに違いない。

だが、それに同情する者は誰も居らず、助けてくれる人物も居ない。幼い少女達を甚振ってきた分、億倍の苦しみとなって己に返ってきただけの話である。

魔王が温泉旅館の中に入り、従業員スペースの奥にある執務室へ入る。そこには既に田原が待機しており、挨拶もロクにしないまま、開口一番、天才が口を開く。

「長官殿よお、そろそろ宿を作っても良いんじゃないかねえか？」

「ふむ——」

魔王がロングコートを壁にかけ、本革張りの高級感溢れる椅子に腰掛ける。その前には重厚感溢れるデスクが置かれており、その姿はまるで独裁者か、巨大なマフィアの集団を束ねるボスにしか見えない。

「ロコミの初動もそろそろ終わった頃だろうし、切り上げて近くに住ませた方が効率が良いと思うんだがな。神都とヤホーの街にや、其々に宣伝要員を置く必要が出てくるが」

「そうだな、私もそう思っていたところだ」

魔王が厳かな手付きで煙草に火を点け、天井を見上げる。田原は次々と紙に記した計画書を取り出し、大きな街での宣伝方法まで細かく挙げていく。

それは酒場での張り紙であったり、広場で吟遊詩人に謳わせるものであったり、中には紙芝居で子供に見せるといふ案まで含まれていた。

そこに必要なコストや人員、訪れるであろう人数の割り出しから必要な宿屋の数、そのグレード、往復の馬車の数などが記されており、魔王はそれらの数字に激しい眩暈を

感じた。

「その辺りは必要に応じて、逐次処理していくといい。お前の判断ならば間違いないだろう」

「そ、そうかあ……?」

「それより、随分と道を広く取っているのだな」

「最低でも二車線は必要になるだろうからなあ。馬車が通る『車道』と、歩道を完全に鉄柵で分けちまった方が便利だと思っただけ。今後は『交差点』も必要になるだろうから、手旗信号も仕込もうと思ってる」

車道や交差点という近代的な響きに、魔王は密かに冷や汗を流した。

その顔には「こいつはいったい、何を作ろうとしているんだ」と書かれてある。魔王が煙を吐き出したとき、部屋のドアがノックされ、キヨンが顔を覗かせた。

ピヨコンとウサ耳と顔半分だけを出した、可愛い姿である。

「田原さん、水桶や樽がもつと欲しいって言われたピヨン」

「まあ足りなくなったのか。わあーった、職人に追加で頼んでおくからよ」

「お願いします……ピョン」

ウサ耳が引つ込み、ドアが静かに閉められた。

魔王が「水桶か——」と思わせぶりに呟く。畑の区画には形だけの井戸を作り、そこに滑車を据えて水を汲み出しているが、他の区画には温泉旅館から水を出し、それを桶や樽に入れて運んでいるのだ。

望めば幾らでも綺麗な水や湯が手に入る——

この世界ではありえないことであつたが、魔王からすれば水道がないというだけで不便極まりないものであつた。

「いっそ、村の主要な場所に《回復の泉》を設置するのも悪くないな」
「ピュ〜♪」

魔王の言葉に、田原が口笛を鳴らす。

回復の泉とは野戦病院などと同じく、進化拠点の一つである。その拠点で戦闘を行えば、設置者の体力を自動で回復してくれる効果があるものだ。

泉の周りには何故かヤシの木などが生えており、トロピカルな雰囲気もあつて、年中

暑いこの国には似合いそうでもあった。

「長官殿、他にも《癒しの森》も頼めねえか？　このままいくと病院がパンクしちまいそうなんぞでな。あれなら景観も崩さねえし、悠の手間も省けると思うんだわ」

「そうだな、北から本格的に戻れば設置することにしよう」

それを聞いて田原が地図に何かを書き込み、赤鉛筆で注釈のようなものを付けていく。恐らく、田原の中では次々と「何か」が広がっているに違いない。

「この分だと、大陸中から人が集まる一大スポットになるだろうナ」

「うむ、そうなれば我々の目的にも一歩近付くことになるだろう」

「神都なんざ軽く超える、首都になるだろうさ。あんたの狙い通り、周辺の村も騒ぎ出してる。いざれ向こうから、私達の村も「侵略」してくださいってな具合でお願いに来るだろうよ」

「私にそんな邪よこしまな考えなどないさ。幾許かの金と、精々評判を得ることくらいしか考えていないのでな」

魔王が動揺を隠すため、悠から貰った花を軽く撫でながら口にする。金を入手し、評判を良くしようとしていたのが、いつの間にか侵略行為となり、拳闘には新首都の建造計画などになってるのだから、口に何かを含んでいたら派手に吹き出していたところだろう。

だが、その花が何であるのかを知っている田原からすれば、まさに生き血を啜って大輪の華を咲かせる魔王そのものでしかない。

「かーっ！ よくぞまあ、んな白々しい台詞を口にできるもんだ。あんたの面の皮の厚さはどうなってやがんだか……」

当然、反応はこうなる。

まるで、全ての化学反応を読んで一手一手を打ち、相手が気付かぬ間に百雷を轟かせる地雷を次々に埋め込んでいつているような姿なのだ。

これで邪な考えがない、など笑い話にもならない。

「ところで、ドナ・ドナという貴族についてだが――」

魔王が事の概要を改めて耳に入れ、ゆつくりと煙草の煙を吐き出す。その容貌は何事か謀を練っているようであり、田原もそれを見て口を噤んだ。

当然、魔王に謀などは欠片もない。会ったこともない貴族なのだから。

「オルゴールが欲しければ、言ってくれば 売った」のだが」

つい、魔王が思つたままを口にする。だが、これまでのあらゆる状況が、それを言葉通りには受け取らせない。

聞く側からすれば、単なるブラックジョークである。

「だつはつは！ 代金はやつこさんの鉾山、全部と引き換えてか？」

当然、反応はこうなる。

釣竿を垂らし、ぶら下げた餌に食い付いた魚に対し、そんなに欲しければ餌だけやつたのだがな、と言いながら俎板の上に乗せているようなものだ。

聞いている方からすれば、性質の悪い皮肉でしかないだろう。

「ともあれ、その貴族に対しては後ほど対処する。私に考えがあるのでな」

「りよ〜うかい。必要ねえかもしれねえが、悠がそのドナ・ドナって男に関してファイルを纏めてる。根掘り葉掘り聞いてるらしくってなあ」

「ふむ。その結果も楽しみに待つとしよう」

魔王の出した結論は——先延ばし。

頭がフットーしていたため、これ以上考えることが苦痛になったのだろう。まして、その男の名がドナ・ドナという時点で、放っておいても何処かに運ばれていきそうな気がしたので。普通に考えると、実に失礼な話であった。

「んで、そっちに並べてんのがマダムから受け取った品なんだが……まだ第一陣が帰ったばっかなんだけどよ、既に争奪戦が勃発してるらしくってなあ。選別が大変らしいわ」

「ほう、上々の滑り出しではないか」

魔王が綺麗に並べられた壺や絵画を手に取り、鋭い視線を這わせる。

外見がマフィアのボスにしか見えないため、実に絵になる姿であったが、当然この男

に審美眼などは欠片もない。

「ちなみに、その壺は大金貨5枚するらしい。さっきの絵は7枚だとよ」
「ほ、ほう……」

それを聞いて幾分、魔王が慎重な手付きで床へと置く。徐に懷から巻物のような形をした《アイテムファイル》を取り出し、その中に素早く収納していった。

割ったり汚したりしたら大変だと考えたのだろう。ファイルの中に記された名称は《アダンの壺》《ドリル男爵夫人の肖像画》などであった。

他にも現金が並べられていたが、魔王はそれらを全て田原へと預ける。自分が使うよりも、遙かに効果的に使うだろうと考えてのことだ。その後、出店させる店の打ち合わせなどが続く。

「ふむ——店には少し心当たりがある。何人か引き抜いてこよう」
「長官殿の十八番おはこだナ。大船に乗った気持ちで待たせてもらうわ。ついでに言うなら、慢性的な人手不足でな……ぶっちゃけ何人居ても足りやしねえ。宿を作つて、労働力を根こそぎ囲い込みたい」

「そちらも私が請け負おう。お前は村の作業に集中してくれ」

そう言いながら魔王が立ち上がり、田原の対面のソファに座る。そして、アイテムファイルから木箱を取り出し、田原の目の前へと置いた。その中に鎮座している銃らしきものを見たとき、田原の目が一瞬だけ青く光る。

「これは北の迷宮で見つけたものでな。こいつをどう思う？」
「……銃、だな」

田原が銃を手に取り、目を閉じる。

「んん……？ 名称はSUN—F。攻撃力は13。太陽光をエネルギーにして、16発の弾を撃つ、だあ……はあああ？」

「思ったより低いのだな——」

魔王はそう呟いたが、太陽光をエネルギーにして、という部分には内心で驚いていた。そんな技術は現代の日本にも無いだろう。

それこそ、アニメや漫画の世界だ。

「どういふこつた……この世界には銃器が存在するってことか？」

「正確に言えば違うだろうな。この世界には何か秘密がある」

「先史文明ってやつか？ 茜辺りが居たら、オーパーツだなんだと大騒ぎすんだらうけどナ」

「その辺りも含め、暫し北での活動を続けるつもりだ。引き続き、村を頼む」

魔王が立ち上がり、執務室を後にする。

田原は訝しげな目で銃を見ていたが、やがて銃がふわふわと宙に浮き、その銃身を顔へと擦り付けてきた。

この男は世界すら問わず、あらゆる銃器に愛される体質を持っているのだ。

「先史文明、ね。あんたはいつたい、何処まで先を見越し……って、固いんだよ、お前は！ 冷てえし！ おい、離れろ！」

付き纏ってくる銃に振り回され、田原も慌てて異空間へと銃を放り込んだ。

何処か似通ったところのある主従である。

魔王のスカウト

温泉旅館を出た魔王は隠匿姿勢となり、村のあちこちへ視線を這わせながら歩いていく。姿を見せていては、相手の手を止めさせてしまうからだ。

バニー達の住居区画まで足を伸ばしたとき、ルナの明るい声が入ってくる。どうやら木箱を重ね、その上で踏ん返り返って指示を出しているらしい。

「いい？ 太くて長いのを作るのよ！」

「相変わらず、ピンクなことを口走っているな」

「きやあああ！ 急に現れないでよ、このド変態！ ずっと姿を隠して私のことを見てたんでしょ！ 見てたって言えっ！」

「何をトチ狂っている。それよりも、少し出掛けるぞ」

ルナが嬉しそうに突っかかってくるのを程々にかわしながら、魔王がその小さな体を掴んで木箱から下ろす。

「こゝ、こちら……変なところを触るなっ！」

「今日は《ブレザー》ではなく、正装に着替えてもらおう」

「せ、正装って……何処に行くのよ」

「なあに、お前の威光に縋ろうと思つてな」

「へえ、やつと私の偉大さが分かつたつてわけ？ なら、私にお願いしなさい。どうし

てもルナ様のお力が必……きや！ あんっ！」

——パパアン！ と乾いた音が蒼天に鳴る。

魔王の掌が、ルナの臀部をリズムカルに叩いたのだ。一つの動作で軽快な二つの音を響かせる、芸術的な技巧であつた。

「時間が惜しい。行くぞ」

「小脇に抱えて運ぶな！ お姫様抱つこで運びなさいよっ！」

「寝言とは、寝てから言うものだ」

着替えたルナを連れ、魔王がヤホーの街へと《全移動》で飛ぶ。田原との打ち合わせで決まったことを、今日一日で全て済ませようとしているのだ。この男には距離など関係

なく、600の気力は疲労という概念すら物ともしない。

「ここ、ヤホーの街じゃない……何の用があるのよ?」

「まあ、簡単に言えばスカウトだな」

ルナが魔王に引つ付いたまま、上目遣いで問う。全移動の際、魔王の腰へ回していた両手は未だそのままであった。今日は聖女として《ラムダの修道服》を着ていることもあり、その姿は異様なまでに目立つ。

「どういうことよ。ちゃんと説明しなさい」

「有力な店を、ラビの村に引つ張ろうと思ってるな。お前は隣でニコニコと笑ってればいい。口を開けばボ口を出しかねん」

「あ、あんたねえ……私のことを何だと思ってるのよ! 私は聖女なんだから!」

「無論、お前は性女だとも。私はそのことに關して、一度も疑ったことはない」

「そ、そう……?」

「ああ、胸を張るといい」

微妙に噛み合っていない会話であったが、何だかんだで楽しそうな二人である。出会いが出会いだったので、互いが素に近い状態で接していられるためであろう。

魔王がまず、マンデンの店へ向けて歩き出そうとしたが、ルナが引つ付いたままであった。

「そろそろ離れろ。行くぞ」

「……手」

「うん？」

「……ちゃんと手、繋いでエスコートしなさいよ」

そつぽを向きながらルナが言う。

漆黒の魔王と聖女が仲良く手を繋いで街を歩いている姿を想像し、軽い眩暈でも感じたのか黒いロングコートが揺れる。

「そうか。そこまで言うなら、望み通りエスコートしてやろう」

「え？」

魔王がルナの小さな体を掴み、そのままお姫様抱っこで歩き出す。開き直ったというのもあるだろうが、これも宣伝になるとでも考えたのだろう。

この男は一度腹を括ると、常人では成し難いことも平然と行う。無論、それが良いことであれ、悪いことであれ、だ。

「ちよ、ちよつと！　ここまでしろなんて言つてないわよっ！」

「なら、降ろそう」

「だ、ダメ！　ちや、ちゃんど……お姫様扱いしてっ」

「お前はお姫様じゃなくて、聖女だろう」

「私は聖女でお姫様なのっ！　プリンセスでホーリーでゴールドなの！」

「プリンセスホーリーゴールド……突き抜けた馬鹿だな」

そんなやり取りをしながら、二人がマンデンの店の前へと立つ。その店構えは以前よりも大きくなっており、景気の良さを窺わせるものであった。

事実、マンデンは魔王と接触してからというもの、その資金力に大きなブーストがかかっている。

「まずは、こここの店主との商談を纏める」

「ふうーん、あんた美術商の知り合いなんて居たんだ？」

一方、マンデンはドアの前に立つ人影を見たとき、すぐにそれが“海の向こうの貴人”であることを察した。魔王の背丈はこの世界においてもかなりのものであり、その風貌もあつて、まさに見上げるような偉容である。

が、今回はそれに——輪をかけて“酷いもの”であつた。

「これはこれは、九内さ……げええええ!？」

「久方ぶり、ですな」

魔王が抱える、小さな少女を見てマンデンが驚愕の声を上げる。

以前から、この貴人は聖女とただならぬ関係にあると見ていたのだが、何と白昼に堂々とお姫様抱っこをして店に現れたのだ。

マンデンが慌てて立ち上がり、その頭を深々と下げる。

「楽にしていいわよ。今日の私はお姫様だからっ」

ルナの意味不明な言葉にマンデンは目を白黒させたが、素早く従業員に命じ、最高級の紅茶と茶請けを用意させる。魔王もゆったりとソファに腰掛け、手に抱えていたルナを横へと座らせた。

「なによつ、もう降ろしちゃうの?」

「当然だろう。女性を抱えて商談をする人間が何処に居る」

魔王が懐から巻アイテムファイル物を出し、そこから次々と美術品を取り出し、床やテーブルの上に

並べていく。

それは圧巻の光景であり、驚愕すべき光景である。が、マンデンは驚かない。

もはやこの貴人が何をしても驚くまい、と肝を据えているのだろう。だが――

「こ、これは……著名なアダンの壺ではありませんかっ!」

そんなマンデンであつても、限界であつた。

見たことのない「収納」は辛うじて我慢できた。海に向こうの、系統が違う魔法の一

種なのか、新種の魔道具なのだろうと。だが、自身のライフワークでもある美術品に関してには到底、感情を抑えることができなかった。

「これらはマダムから頂いた物でしてな。私では少々、持て余すのでマンデン氏に有効活用してもらおうと思ったのですよ」

「マダ、ム……それは、著名な収集家である妹君の方でしょうか？」

マダム、という単語にマンデンが激しく反応する。

この国でマダムと呼ばれるのは二人しかおらず、その妹は著名な収集家なのだ。以前に出したオルゴールの落札者でもある。

「いえ、姉の方ですよ」

「なるほど……」

魔王の言葉に、マンデンがホツとした息を吐く。

あのマダム・カキフライが、よもや《アダンの壺》を手放すようなことなどありえない、と思ったからだ。逆に姉の方は美術品には興味が薄く、それらを譲ることはありえ

ることであつた。

「それにしても、とんでもない品ばかりですな……ドリル男爵夫人の肖像画に、こちらはヘルンの金杓、こちらは翡翠のネックレスですか」

「今後も、それらの美術品が次々と入ることになりそうですな」

「そ、それは、マダムから……でしようか？」

マンデンが震える声で問う。目の前の聖女——そして、マダム。

それらが出す品が偽物であるはずがなく、何度自分の目で見ても全てが本物なのである。ここにある品だけで、ざっと大金貨20枚以上の価値がある。

魔王はおもむろに煙草に火を点け、悠然とした態度で口を開く。

——大陸中、からですよ。

その不敵な言葉に、マンデンが目を剥く。

あのマダムから美術品を譲られる、というだけでも驚愕であるのに、それどころか大陸中から品が集まるというのだ。横にいたルナも一瞬、驚いた顔をしたが、やがて何か

に納得したのか深々と頷く。

「それって温泉のことよね。いったい、どれだけのお金が動くのかしら」

「金銭ではない。あの村を中心に——大陸が動くのだ」

「なら、その領主である私は世界一のお姫様になるってことじゃないっ!」

「ふむ……確かに、そうとも言えるな」

「やった!」

ルナが魔王の腕に抱きつき、無邪気な笑みを浮かべる。マンデンはそれら一連の流れに、腹の中で呻いていた。

「いったい、何が起こっているのか。いや、起ころうとしているのか。」

ただ、途方もないことが裏で進んでいるようであり、商人としての勘がこれに乗り遅れるな、と先ほどから絶叫をあげている。

「く、九内様と聖女様は……その、何やら、とても大きな事を進められておられるようですな」

「なに、ほんの『箱庭』を作っているに過ぎませんよ」

白煙を燻らせ、魔王が笑う。

実際、言葉は悪いが、この男からすれば箱庭ゲームのようなものである。拠点の設置や撤去など、動作一つで行える簡単なものでしかない。計画の立案や細かい作業などは田原が行っており、この男は確認するだけなのだから。

「さて、先に商談を済ませるとしましょうか。これらの品を、今回は大金貨10枚でお譲りしたい」

「じゅ……そ、それは幾らなんでも安すぎでは？」

「浮いた金で、二号店を出していただきたいのですよ。ラビの村にね」

「ふーん、この人を誘うのね」

魔王が立て続けに吐く言葉に驚くマンデンであったが、何よりの驚きは、聖女がその腕に巻き付きっぱなしであることであった。非常に我侷で、癩癩持ちであると恐れられている存在であったが、今はどう見ても一人の少女でしかない。

「品の方は、喜んで買い取らせていただきます。しかし、店となりますと、その、契約内

容などをお聞かせいただけますと……」

「当然の疑問ですな。マンデン氏に関しては、土地の家賃などは不要ですよ。ただし、月の売り上げの1割を税として納めていただく形となります」

「た、たった……1割、ですか？」

「おや、高い方が安心できますかな？」

「い、いえいえいえ！ 1割の方が安心できますとも！ 是非とも1割で！」

マンデンが思わず絶叫する。魔王としても別に意地悪したわけでもなく、深い考えがあつて1割という数字を弾き出したわけではない。単に迷宮へ潜った際に見聞きした冒険者のシステムを丸々、流用しただけのことである。

当然、税とは領主や街によって変わる。迷宮も場所によっては天と地ほどの差があるのだが、魔王が知っているのは監獄迷宮の税率だけであつた。

ちなみに、ヤホーは交易の街として名高いため、その税率は非常に高い。

「では、商談成立ですな。細かい話は、私の部下である田原という男に」

「は、はい！ 今後とも、よろしくお願いいたします！」

「おっと、貴方には特別にプレゼントを用意していただきますよ」

「プレゼント、ですか……」

「急遽作ったものですが、中々に面白い値で売れるやもしれませんな」

魔王が差し出したのは名刺のようなもの。温泉旅館にあった、簡易な名刺作成の機械で作ったもののだが、そこには《温泉旅館一泊招待券》と書かれてある。

マンデンはそれが何かも分からないまま、とにかく頭を下げて礼を述べたが、これが後に一つの騒動を生むなど、このときは想像もしていなかった。

この一枚の紙きれは後にオークションにかけられるのだが、それを落札することになるのは、もう一人の華麗な蝶。

カキフライ・バターフライ——その人となるのである。

魔王のスカウト②

マンデンの店を出た二人は、その足で一軒の服飾店へと向かう。

ファッションチエック——ビンゴの店である。アクの服を買ったり、バニー達の衣装を作らせたりと、何かと魔王に縁がある店であった。

「ふーん……あのド変態な服を作らせた店なんだ」

「今後も、色々と変わった服を作ってもらうことになりそうなんだな」

「ふーん、ふーん」

魔王の腕に巻き付きながら、ルナが恨みがましいジト目で言う。恐らく、バニースーツを着てくれ、と言われなかったのが原因だろう。

ルナとしては着るのは嫌だが、着てくれと言われもないのも、女として何か屈辱を感じていたのかもしれない。

「お前には《ブレザー》をやっただろう」

「あの服は可愛いから認めたくないけど……私にはもつとこう、淑女な服とか、セ、セセクシーな服とかも似合うと思うのよね」

「はっはっは。面白いことを言うな、お前は」

「何が面白いのよ！ 何処に笑う要素があつた！ 言えっ！」

ルナが飛び上がって首を絞めるも、魔王は巻きつかせたまま平然と歩みを進めていく。周りから見れば、聖女を真正面から抱きつかせたまま街を歩いているようなものだ。やがて目的の店へと辿り着いたが、こんな格好で入ってこられた方は堪ったものはない。

「いや〜くん！ 九内さ……おあぁっあぁあ！」

「久しぶりだな」

超が付くお大尽である魔王を見て、ピングゴは腰をくねらせながら大歓迎しようとしたが、その体に聖女が抱き付いているのを見て、思わず野太い声が漏れる。

ピングゴはいわゆるオネエ系の男であり、その心は完全に乙女なのだ。こんな声を客の前で洩らしてしまうのは、失態以外の何物でもなかった。

「し、失礼しました……皆さん、改めてご挨拶してツツッ！」

「ようこそいらつしやいました！」

「う、うむ……」

ビンゴと従業員の、一糸乱れぬ声と動きに魔王が後退る。ルナは反対に、それを当たり前のものとして受け止めた。

彼女は自分が尊ばれるのを好んでいるし、実際に尊ばれる立場に居る。

「今日は聖女様とシヨツピングでしょうか？　こおんなゴージヤスな二人組を見るのは初めてですわッ！」

ビンゴが腰をくねらせ、ハンカチを噛む仕草にルナが目を輝かせる。ちなみに、まだ首に巻き付いたままであり、その姿はコアラのようなであった。

「そうよ、思い出したわ！　あんた、前に神都で買い物に付き合うって約束したじゃない！」

「お前が一方的に言ったただけだろう」

「男らしくないわねっ！　こういうときは黙って女を着飾らせるものよ！」

「ほお——言うではないか」

その言葉に、魔王の口元が歪む。

この男の頭に過ぎったのは、この店のあらゆるエロい衣装を全て着させようとしたものであったが、ここに来た目的を思い出し、辛うじて自重した。

この男はふざけた面が多々あるが、流石に目的を忘れるほどに子供ではない。

「喜べ、ルナ。今日ではないが、お前のファッションショーは必ず行つてやる。それも、時間をたっぷり取つてだ」

「へっ……」

「これは楽しみになってきたな。私も『男らしく』、全力で様々な衣装を惜しみなく出そうではないか。確か、縄ふんどしや裸エプロンなどがあつたな」

「なっ、何よ、その禍々しさに満ちた名称は！」

「はっはっは」

「な、何が可笑しいのよっ！　私はそんな服なんて絶対に着ないんだからねっ！」

「はっはっは」

「笑うなああああああつー！」

二人の会話を聞きながら、ビンゴは冷や汗が流れるのを止められなかった。聖女の末っ子は恐ろしい癩癩持ちであり、その機嫌を損ねると大変なことになるのだ。

だが、今は年相応の少女でしかない。ビンゴとしてはどう対処し、どう持て成すべきか分からなくなったのだ。

「さて、余談が過ぎた。ビンゴ、ラビの村に二号店を出す気はないか？」

魔王がストレートに言う。これまでの接触を考えると、断られる気がしないというのもあっただろう。

実際、ビンゴは散々に美味しい思いをしている。

「それも、店を二つ出してもらいたい」

「ふ、二つ、ですか……」

店を出すという返事も聞かずに、魔王が話を進めていく。まさに傍若無人であった。

「一軒は貴族向けに特化した高級店だ。温泉で女を磨き、自信を付けた客は必ずワンランク上の衣装を求めるだろう。何せ、彼女達の最終的な目標はパニースーツが似合うほどの女になることなのだから」

「あ、あの衣装が……目標、ですか……？」

ビングはそれを聞いて気が遠くなる思いがした。世に女はごまんといえるだろうが、あの扇情的な衣装が似合う女など中々居るものではない。

それこそ全身を絞り、何処を見せても恥ずかしくないスタイルでなければならぬだろうし、あの露出を考えると、肌の艶や張りも当然高いレベルが要求される。

「もう一軒は手軽な値段で買える、仕事着や下着を扱う店だ。こっちに関しては、一般区画に建てるので税は要らんぞ」

「え、えつと……税が……なひ……？」

「家賃も要らん。こっちは売れば売れただけ、全て懐に入れるといい。主に用意して

ほしいのは、労働着や職人が着る服だな」

魔王が次々と概要を伝え、マンデンに説明したような条件を並べていく。

殆ど相手の同意を求めない一方的なものであったが、ビンゴからすればまるで損のない話だ。まして、あの村に行つた従業員から散々「オンセンリヨカン」なる摩訶不思議な施設のことを聞かされていたのだ。

「是非、是非、そのお話、私達にお任せくださいっ！ 必ずやご満足いただける店にしてみせますツツ！」

「それは重畳。詳しい話は、田原という部下に伝えておく」

魔王がじゃらり、と重い音を立てながらテーブルに5枚の大金貨を放り出す。

圧倒的な黄金の輝きが、ビンゴと従業員の目を釘付けにし、全員の目が大金貨そのものとなっていく。

「これは当面の材料費だ。貴族用に置く衣装には、金に糸目をつけるなよ」

「おまがぜくださいツツ！ がならず、おぎやくざまに満足頂げるものをッ！」

「素晴らしい——では、早速行動に移ってくれ」
「皆さん、今から『戦争』よ——走ってッ！」

何処かで聞いたやり取りであったが、店内が時ならぬ騒ぎとなり、従業員が全員走り出す。それも当然の話であった。何せ、この男が店に来るたびに黄金が無造作にぶちまけられるのだから。

それらが齎す余波は当然、ビンゴ達だけに留まらない。材料となる布地を扱う店、様々な糸や針を製作する職人、アクセサリーを作る店、あらゆる業者に金が回るようになるのだ。

——死蔵した金、止まった経済。

一人の男が、それらを怒濤の勢いで転がしていく。

その車輪の大きさは障害となる小石を踏み砕き、敵対者を容赦なく弾き飛ばしていくことになるだろう。それによって、この男の歩みが鈍ることもない。

この男が——『魔王』だからだ。

「ルナ、次は神都に行……って、まだくっ付いてたのか！」

「あ、あんた……こんな美少女にくっ付かれておいて、その態度は何なのっ！」

「はっはっは」

「何処に笑う要素があつたっ！ もっと喜べ！ 嬉しいって言いなさい！」

「はっはっは」

「何が可笑しいのよっ！」

魔王が笑いながら、そのままの格好で神都へと《全移動》で飛ぶ。

まさに“奇跡”の大乱発であり、ホワイトがこの光景を見れば激しい眩暈に襲われることだろう——二重の意味で。

嵐の前

二人が飛んだ先である神都では様々な噂が流れており、人々を驚愕させたり、困惑させたりと混乱の中にある。それは時に魔王が降臨したという噂であったり、どんな病気をも治す神医であったり、聖女の筆頭たるホワイトが天使の輪を授かった、という噂であったりした。

だが、一番ホットな噂はやはり——「銀の龍人」であろう。

ホワイトは聖城に居るため、その姿を民衆が見る機会は少ないのだが、零と上級悪魔であるオルイットの戦いは、数万人がそれを目撃したため、その噂の伝播力と熱気は尋常ではないのだ。

「あの龍人が聖城を守ってくださいったのさ」

「噂の魔王つてのが、ルナ様の後見人になってるらしいぞ」

「ラビの村に仕事があるらしいな」

「俺っちも髪を銀色にしてえな……」

「ホワイト様が天使になったんだってさ！」

「クイーン様と、銀の龍人は相思相愛と聞いたぞ」

「龍人がここに現れたのは、クイーン様を守るためだろうか」

「二人の結婚式はいつだ？」

新聞やTVなどといったものがないため、良くも悪くも人の口から出るものが噂の正体であり、それらが無秩序に広がっていく。

正しい情報もあれば、中には見当違いのものもあるが、SNSなどが存在しないこの世界では、それらの真偽を見極めるのは至難の業とあっていい。

そんな中、新たな噂をぶち撒けるような光景が現れた。

漆黒のコートに身を包んだ魔王と、そのコートを掴みながら嬉しそうに歩いているルナである。二人の姿を見た群集が時間と共に群がり、どよめきが広がっていく。それらを見た魔王は頭痛を抑えるように前髪へと手をやり、後ろへと流す。

「魔王と聖女が仲良く並んでいれば、こうにもなるか。何故、お前は姿を消せないのか。聖女の力にそんなものはないのか？」

「何処の世界に姿を消せる人間なんているのよ。あんた達は自分が非常識な存在だってことを自覚して」

まさに、平行線であろう。

魔王からすれば、魔法なんてものを使うこの世界の人間こそが非常識であり、ありえない存在なのだが、この世界の住人から見れば魔王とその側近こそが、さらりと大魔法を駆使する存在なのだ。

「ねえ、次は何処の店に行くの？」

「美味しい飯を出す店があったのでな。そこの女将を誘おうと思っている」

「そういえば、村には本格的なレストランってないわよね……なら、アルテミスの支配人にも話を通しておくわ」

「ほお——それは良い。やるではないか」

魔王が見直した、と言わんばかりにルナの頭に手を置き、労うように優しく叩く。ちなみに、これも素の行動である。この男から見ればルナはまだまだ子供であって、女性というほどの対象ではない。

ただし、それはあくまで今の段階では——という注釈が付く。

いつの時代も、どんな世界でも、女性は早熟であり、男より遥かに早く大人になって

いく。そのことを思えば、今は笑っているこの男も、いつかはルナに狼狽させられる日が来るに違いない。

「ふ、ふんっ。褒めるのが遅いのよ。私は偉い聖女なんだからっ」

「うむ。素晴らしいぞ」

立て続けに、魔王が素直に称賛する。この男は自分にできないことや、思いも寄らなかった部分を補ってくれる存在をストレートに好む。

その点だけ抜き出すと、良き君主のようでもあり、何処か子供っぽくもある。

「アルテミスは店を構えさせるのではなく、温泉旅館の食堂スペースをに使わせることにするか。いや、違うな——月の売り上げや評判が一番であった店に、翌月の食堂を独占的に使わせるというのはどうだ。うん、これは良い」

「競争ってわけね。良いじゃない、それこそが智天使様の教えよ。競争のない所に成長なんてないんだから」

「成長、ね……」

つい、魔王の目がルナの胸部へと向けられる。

そこは無法の荒野であり、競争どころか敵対者を寄せ付けない絶壁の断崖と化していた。これではとても成長は見込めないだろう。

「ど、どどど何処を見てんのよ！ 幾ら私が可愛いからって、いやらしい目で見ないでっ

！」

「はっはっは」

「何が可笑しいかっ！」

魔王が乾いた笑いを洩らしながら、「ノマノマ」へと向かう。

店は相変わらず冒険者でこった返しており、活気に満ちている。店主であるイエイの腕もあるのだろうが、やはり世話になった店に愛着があるのだろう。

魔王が店の扉を開けると、中の目が一齐に入り口へと向けられた。

「あいよ、いらっしや……って、せ、聖女様!? それに黒い旦那まで！」

「久しぶりだな、女将」

「お、女将って……その呼び方は何だい」

「黒い旦那の方がどうかと思うが……」

魔王の目から見たイエイは、その恰幅や気風の良さもあつて相撲部屋の女将のようなイメージなのだ。実際、それに近い氣質がある。

「そ、それで今日は食事かい、それとも……」

イエイがルナの方をチラ見しながら、魔王へと問う。

流石のイエイであっても、聖女が店に来るなど緊張するのであろう。現代でいえば、警視庁のTOPがいきなり家や店に来るようなものだ。何も悪いことはしていないくとも、落ち着かなくなるのは当然であつた。

「心配するな。今日は女将の勧誘にきてな」

「か、勧誘……?」

二人が話を進めている間、ルナは店内の風景にチラチラと目をやっていた。その目は意外と鋭く、店の作りを確かめているような雰囲気である。

魔王とイエイの話の方は論ずるまでもなく、すぐに纏まった。一般区画への出店は、何といつても税がかからないのだ。そのうえ、多数の人間が労働力として集められており、客も豊富だ。商売人がこんな話を見逃すはずもない。

当面、ラビの村に建てる二号店には愛弟子が赴き、イエイはたまに顔を出して様子を見る、という方向で話が纏まっていく。

「これは支度金だ。この店の味に期待している」

「えっ……ちよ、ちよつと旦那！　これ、大金貨じゃないのさー！」

「わざわざ女将の愛弟子にご足労願うのだ。それぐらいは用意せねばな」

魔王が大金貨を2枚並べる。

どうやら、この店の味が入っているらしい。商売人であるイエイにとっては、銅貨1枚であっても大切なお金である。

繁盛しているこの店であっても、大金貨など滅多に見れるものではない。

「我々はあの区画に儲けを求めている。質を求めている。女将のことは部下によく説明しておくので、大船に乗った気持ちで来てもらいたい」

「そ、そうかい……」

魔王と聖女が嵐のように去った後、大金貨の眩い輝きがイエイの顔を照らす。

この店はツケ払いの客も多く、纏まった現金が入ったことよって一息つけたのだ。神都では客が多い分、食材も高い。

大金貨が2枚もあれば、随分と余裕が持てるというものだ。

「あの旦那は……本当に『魔王様』なのかもしれないね」

イエイがぼつりと呟く。

彼女の頭に浮かぶのは魔王という単語と、乱世にのみ生まれる、『英雄』などと謳われる存在。それらの単語には悲劇的な最期が付き纏うものだが、あの男の前では、悲劇の方が地に捻じ伏せられそうな雰囲気があった。

店を出た二人はアルテミス、冒険者ギルド、と次々に訪れ用件を済ませていく。

これらに関しては、聖女であるルナの威光が靦面であった。前者はルナの機嫌を損なうまいと即座に出店を決め、ギルドも公共事業に近い仕事であると大規模な呼び掛けを確約してくれた。

(さて、そろそろ村へと戻るか)

流石に人前で消えるわけにもいかず、路地裏へ入った魔王であったが、ルナの様子がおかしいことに気付く。

いつもはやかましいルナが、ノマノマに入ってから妙に静かになったのだ。

「どうした、あの店に不満でもあるのか？」

「ううん……ちよつと、懐かしくなっただけよ」

俯いて話すルナの表情は窺えないが、その声は決して明るいものではない。

「ほう、あの店に行ったことあったのか」

「ないわ。昔、外から見たことがあるだけ」

「そういえば、無言で店内を見ていたな。庶民的な店が珍しかったのか」

「……ううん。私は昔、店になんて入れなかったもの」

その言葉に、魔王が何かを思い出すような表情となった。かつてレストランで話したとき、アクが言っていたことを。

「そうか。確か孤児院から才能を見出されたと言っていたな」

「まあね」

その短い返答を聞いて、魔王が懐から煙草を取り出し、火を点ける。

孤児院に居たということは、幼い頃に両親と死別したのか、捨てられたのか、そもそも両親が誰なのかすら分からないのか、そういった類であろう。

流石にこの男であっても、その辺りを茶化するようなことはできない。

（昔を思い出したということか——）

魔王がその光景を、おぼろげに思い浮かべる。

店に入れなかったということは当然、金がなかったのだろう。もしくは、店に入れるような格好ですらなかったのかも知れない。

現に、アクも最初は酷い格好をしていたことを否応無く思い出したのだ。

「努力の果てに今を掴んだ、か。立派なものではないか。少なくとも、恥じるような話ではない」

「そんなこと、あんたに言われなくても分かってるわよ……」

「なら、胸を張ることだな。お前は常人には成し難いことをしたのだから。私も、時にはみっともなく足掻きに足掻いて、恥を晒しながら生きてきた」

「あんたがあ？ 想像もつかないんだけど……生まれたときから、えっつらそうにしてたんじゃないの？」

「ははっ、期待に添えなくて残念だが、私はそんな特別な人間ではない」

「な、なら……きやつ」

魔王が有無を言わせずルナの腰を引き寄せ、全移動の態勢に入る。ルナも黙って魔王の腰に両手を回したが、そのピンク色の瞳は何かを問いたげであった。

「い、いつか、聞かせなさいよ……あんたの昔の話を」

「そうだな、お前が大人の女になったら考えるとしよう」

二人の姿が路地裏から消え——瞬時にラビの村へと辿り着く。

気付けば辺りは既に暗く、夜の帳が降りようとしていた。魔王は即座に《通信》を飛ばし、今日の結果を田原へ伝えていく。

《相変わらず、仕事が早いこつて。こつちとしちや助かるけどナー》

《それと、お前に少し話がある。二人で温泉にでも浸かりながら、どうだ?》

《温泉だあ……? ちよ、長官殿と、二人でか!》

《何を驚いている。まあ、お前が銭湯好きなのは承知しているが、あそこは人目が多いのでな》

田原は銭湯派であり、その設定を施した張本人がこの男であった。田原は昔、金のない頃は妹と共に銭湯へ行き、妹を出てくるのを表で凍えながら待っていた時期があったのだ。それらの「小話」から、田原は今でも銭湯を愛しており、豪華な温泉が目の前にあるというのに全く足を向けることすらなかった。

《では、温泉で待っている》

《ま、まじか〜!》

嵐の前②

魔王とルナが帰還する少し前、田原は旅館の執務室で地図と睨み合っていた。

何かを思い付けばそれを書き込み、時には白紙のメモに様々な項目を並べ、それを丸で囲ったりしていく。その範囲は既にラビの村を越え、周辺の村を飲み込んだうえでの計画になっている。

この計画書を「長官殿」が見れば仰天するだろう。

無論、田原からすればこの規模で計画を進めることこそが長官殿の意を汲んだ行動であり、まだまだ手緩いと思っているほどであった。

「千里の道も一歩から、ってか」

この天才の頭の中では、最終的な本拠地こそ《不夜城》に定められているが、大規模な首都を作り上げ、それを抱え込んだ姿こそが理想である。

武力と恐怖で世界を抑え込む体制では大帝国と同じ末路を辿り、必ず何処かに歪みを生み、時には強烈な逆撃を蒙ると考えているのだ。

田原が再度、紙へ何かを記そうとしたとき、扉がノックもなしに開いた。

「……あら、田原だけ？」

「長官殿ならまだ戻ってねえぞー」

田原が顔も上げず、紙に何かを書き込んでいる姿を見て、悠が珍しい生き物でも見るような目付きとなる。

「貴方、変わったわね。以前はやる気を見せたことなんて無かったのに」

「ん……？ まあ、そうだな」

「随分と楽しそうに見えるわ。『仕事』をしているっていうのに」

仕事、という単語を聞いて初めて田原が顔を上げた。

その表情は目が点になっており、実にマヌケな表情である。やがて耳に挟んでいた赤鉛筆を上唇と鼻の下に挟み、何事かを深く考え込む表情となった。

「仕事、か……いや、悪い。どうも俺あ、これを『仕事』と思ってなかったみてーだわ。

こいつあ、驚いたな」

「は？ 気でも狂ったの？」

ピシヤリ、と悠が叩き付ける。だが、田原はそれを意にも介さない風情で煙草に火を点け、旨そうに煙に吐き出した。

「いや、なんつーかよ……皆、楽しそうにしてんだろ？ ここに来る前はよ、〃仕事〃をするってのはいつペー人が死んで、真つ暗で、どうしようもねえ虚しさしか残らなかつたしよ」

「虚しさ、ねえ……」

「だけどよ、ここで俺らがやってることは違うだろ。少なくとも何かを遺し、何かを生み出してる。こいつあ、前の世界に居た頃には得られなかつたモンだ」

「今後も、ずっとそうだとは限らないわよ？ 敵対者は必ず現れるし、長官はそれに対して容赦なんてしない。何処までも無慈悲な鉄槌を下されるわ」

「そりゃ、そうだろうよ。お手手繋いで仲良く世界平和なんざ、ありえるわけがねえんだから。俺が言いたいのはよ、1万の人間を泣かしても、100万の人間を笑顔にするなら、前よかよっぽど〃マシ〃ってこつた」

田原が灰皿に灰を落としながら言うものの、悠はいまいち理解できないという表情をしていた。田原は以前の血塗られた仕事より、今の仕事によほど遣り甲斐というものを感じているのだが、悠からすれば他人の命に興味などない。

故に、彼女の出した結論は実に味気ないものであった。

「あら、結局は『数値の問題』なの?」

「かーっ! おめえの頭には人の気持ちとか、人情つてもんがねえのかあ?」

「そんなもの、人体の研究には不要よ。勿論、長官がそれをお求めになるのなら、私は喜んでそれを研究するけれど」

「人情を研究だあ? んなもん、試験管やリトマス試験紙で測れるようなもんじゃねえだろうが」

絶対的な上官を頭上に据える二人であったが、その内面は何処まで行っても平行線である。田原はそれが必要とあれば、100万の人間でも殺し尽くすだろうが、悠は別に必要でなくとも100万の人間を殺し尽くす。とどのつまり、二人の違いはそこであろう。

「それよか、頼んでたもんはできたのか？」

「ええ、効果は保証するわ」

悠がポケットから出した小さな瓶には、透明な液体が入っていた。炭酸泉を利用した“化粧水”だ。この暑い国では、男女共に肌へのダメージが大きい。

これがあれば、温泉に入れない者も肌を労わることができであろう。

「特産品が人参だけっつーのはなあ。化粧水やら、温泉卵やら、色々と考えてんだが、最終的にはやっぱ《不夜城》が必要になるわナ」

「そうね、私達の城が戻れば、全てを圧殺できるわ」

「馬鹿言っつてんじやねえよ。不夜城を武力に使う必要なんざ何処にあんだ？俺が言いたいのは、不夜城の生産施設だ。食料生成プラントに、工場ライン、この辺りをフル稼働させて国の中心に据えるってこった」

「食料はともかく、工場なんて何の意味があるのよ」

「何のつて…… “電化製品”でも作りゃ良いだろ」

「電化製品!？」

悠がその単語に絶句する。このファンタジーな世界に、その言葉はあまりにも違和感があるものであった。だが、電気が来ていないこの状況でも、何ら変わりなく温泉施設は動き、天井の照明もつき、入り口の自動ドアも動いている。

それらを考えると、あながち電化製品という単語も妄想ではなくなってくる。

「電気がないとダメだっつてんなら、《エリア設置》があんだろ」

「エリア設置って……」

確かに「長官」の権限にはエリア設置というものがある。平たく言えば、会場が常に同じだと飽きるので、模様替えといったところである。

どんなゲームであっても、色んな「ステージ」を用意するのは当たり前であり、珍しくも何ともないものであるが、現実世界でそれを行うとなれば、想像を絶する力である。それは「天地創造」のレベルであり、人に成し得ることではない。

「昔の会場にや、「発電所」もあつたら。それこそ、採石場や採掘所、食料庫や工場に診療所だっつてあつた。他にもプールだの、山だの池だの、中には樹海なんて笑えるモンも

あつたよナ」

「貴方……」

田原がぼんぼんと口から出す言葉に、悠も思わず考え込む表情となった。この男はあろうことか、このファンタジー世界に“オール電化”や、天地を新しく創造することを描いていたのだ。

「ねえ、それは長官の……」

「俺が思い付くことなんぞ、長官殿が考えてねえはずがないだろ」

田原が溜息を吐きながら煙草を揉み消す。

勿論、“長官殿”がそんなことを考えているはずもなく、田原の考えている構想を知れば椅子から転げ落ちるであろう。

二人が思わず無言になったところで、扉が可愛くノックされた。顔を出したのは、飲物を持ってきたあくである。

「お二人にコーヒーを持ってきましたっ」

「あら、アクちゃんに運んでもらうなんて悪いわね」

「悪いな、嬢ちゃん」

悠も田原も、アクに対する態度は丁重だ。

いや、慎重といった方がいいかもしれない。あの長官殿がこれだけ目をかけているからには、余程の何かがあるのだろうと。故に、二人の中では「長官の客人」という極めて珍しいものにカテゴライズされていた。

「それで、嬢ちゃん。長官殿は何か言っただけでなかったか？」

「え、えっと、僕には分からないことが多くって……」

「ほえー、例えぼどんなのだ？」

「うんと、ぶ、ぶーるを作るとか何とか……」

「——へえ」

田原の口元がニヤリと上がり、悠もカップに口を付けながら、その目だけが鋭く光る。アクがおじぎをして去った後も、部屋の中には不気味な沈黙が続いた。

その沈黙を破ったのは、悠の方である。

「確かに、とうに考えてらっしゃったようね」

「そりやそうだろ。影も踏めねえってのはこういうこつた」

田原が両手を上げ、お手上げのポーズを作る。

その後、二人の密談が続くも、やがて飛んできた《通信》によつて会話は唐突に終わりを告げた。田原の表情が面白いくらいにコロコロと変わり、それを見ていた悠は怪訝な顔付きとなつていく。

「悪い、ちつと温泉に行つてくるわ」

「待ちなさい——」

頭を搔きながら立ち上がった田原であつたが、その手を悠が掴む。頑丈なケブラージャケットの繊維が、ミリミリと奇妙な音を立てた。

「どういうこと？ まさか、長官と湯に浸かるなんて言わないでしょうね」

「いてえ！ マジで痛えっつーの！ 離せ、馬鹿野郎ッ！」

「答えなさい——この腕と永遠にお別れしたいの？」

「しようがねえだろうが！ 誘われたんだからよ——！」

「どうして、貴方が……ツツツ！ ありえない！」

遂に田原のケブブライジャケットに悠の爪が食い込み、猫にでも引つかかれたような傷が出来上がっていく。

凄まじい握力であり、そして執念であった。

「わ、わあーった！ 今度、お前とも入るように言っとくつてば！ マジで——！」

「本当でしようね——！」

「マジマジ！」

「嘘をついたら、口から濃硫酸を流し込むわよ。目にも一本一本、針を刺す。手の指も一本ずつ缺で切り落とすわ」

「言うことがいちいち怖えーんだよツツ！ ホラゲーの世界に帰れツ！」

田原が悠の手を無理やり振り切り、逃げるようにして執務室を飛び出す。

このやり取りを『長官殿』が聞いていたら腰を抜かし、その黒々とした髪も一瞬で白

髪と化しそうであつた。

「長官と、温泉……ふふっ」

悠が凄艶ともいうべき表情を浮かべ、嗤う。

その時がくれば、どうなってしまうのか——まさに神のみぞ知る世界である。

侵略者

脱衣所で田原が服を脱ぎ捨て、その頭に折り畳んだタオルをのせる。この男は銭湯好きというのもあるが、どうも昭和の匂いが漂う古めかしい一面があった。

最新の武器ともいえる銃と、それに反するような格好。このアンバランスさこそが、天才という一種の「変人」であることの証明のようでもあった。

「しっかし、長官殿と温泉なんざ……以前じゃ、考えられんことだわな」

田原がぐるりと脱衣所を見渡すものの、ここは銭湯とは違い、全く人の気配が感じられず、ロクに使われている形跡すらない。

実際、ここは魔王しか使っておらず、ほぼ専用の空間となっているのだ。鏡を見れば、曇り一つない鏡面に田原の鍛え抜かれた肉体が映る。

「訓練の時間が減ってるよな……せめて、野村がいりやなあ」

田原がしかめっ面で頭をボリボリと搔くものの、その腹筋は見事なシックスパックスであり、重い銃器を扱う両腕、反動をもつものともしないバネのような全身には、およそ無駄というものがない。

同性から見ても、惚れ惚れとするような肉体であった。

「さて、長官殿はもう入ってんのか……？」

扉を開け、田原がひとまず全身をシャワーで洗い流す。悠に掴まれた腕にはまだ、うっすらと爪痕が残されていた。それを見て田原の顔が青褪める。

「冗談じゃねえぞ、あのマッド女が……」

そう毒づいたとき、奥の露天風呂から声がかかる。

田原がそちらへ足を向けると、そこには魔王が湯に浸かり、杯を口にしていた。どうやら日本酒を盆に浮かべ、酒を飲んでいるらしい。

「よく来たな、田原」

「露天風呂で日本酒たあ、随分と粹なことをしてんだナ」

田原も遠慮なく湯に浸かり、差し出された杯を呷る。露天風呂の効果と、日本酒の気力回復の効果が重なり、まさに天国の心地であった。

「くあー！ 堪らねえな、こりやあ」

「少ないが、つまみも用意した」

もう一つの盆には、たこわさや枝豆、冷奴や刺身などが並べられてある。魔王がSPを消費して生み出した「おつまみセット」だ。

GAME会場では、単品なら気力を20〜40回復してくれるものであったが、このセット物は15しか回復しないため、微妙な扱いのものである。だが、この異世界において、回復量よりも種類が豊富な方が余程ありがたみがあるだろう。

「刺身まであるたあ……つああ！ うんめえ！」

「いずれば、海産物の入手も考えたいところだな」

「んー、手っ取り早さで考えるなら《釣り》だけどよお、気力の消費がナ」

「うむ」

生存スキルには《釣り》というスキルがあり、気力を30消費すればどんなエリアであつても釣りを行うことができたのだ。

鮮魚を代表として、黒アワビや鱧鱈、本マグロや大王イカ、真鯛や河豚、人面魚や海藻類、貝類など、釣れる内容も滅茶苦茶であつた。

他にも水脈探索、食料探索、薬草探索、道具探索、空き巣、宝探しなど、様々な探索系スキルが用意されており、其々で手に入る内容が変わる。探索物の中には高値で売却できる物も多く、回復だけではなく、資金源にもなるものであつた。

一般的なゲームでいう、「生産職」に近いものといつていいだろう。

「こんな世界にきてても、会場でやってたことが殆ど再現されちまうとはなあ。俺にや、何がなんだかわからねえが……」

「その辺りも、いずれ解明するだろうさ。権限が回復すればするほど、我々に穴はなくなるのだから」

そこからは今後の打ち合わせが続いたが、軽い表面的なものであつた。田原は自分の

構想などとうに織り込み済みだろうと考えていたし、魔王は魔王で迂闊に口を滑らせてはボロを出す、と深く突っ込むことはしない。

互いに手酌で酒を飲み、つまみを口へ運ぶ静かな時間が続く。

これはこれで、中々の風景であった。中身はともかく、魔王は杯を含んでいるだけでも絵になる男であり、田原にも歴戦の男だけが醸し出せる色気がある。

「……全員が揃った日にや、さぞ賑やかになんだろうけどナ」

「無論、全員を揃えるつもりだ」

ぼつりと田原が呟いたが、それに対する魔王の返答は力強いものであった。そして、予想を超える言葉まで飛び出す。

「いずれ、お前の妹も呼ぶつもりでいる」

「……えっ?」

一瞬、田原の動きが止まり、何かを言おうとしたが、それよりも早く魔王の右手がその顔の前に広げられた。

そこにあるのは、以前は着けられていなかった——禍々しい指輪。

「そ、その指輪が、何だつてんだよ……」

「特定の条件を満たせば、願いを叶える奇跡の指輪、とでも言っておこうか」

「よしてくれよ……何処ぞの漫画じゃあるまいし」

「私が、この手の冗談を口にすると思うかね？」

その言葉に、田原が思わず唾を飲み込む。

確かに、田原から見た『長官殿』は間違つてもこんな冗談を口にするような人物ではない。善悪に関わらず、言った言葉を悉く有限実行する、大帝国の魔王と呼ばれるに相応しい存在であった。

「真奈美、と……いや、待て！ こっちに呼んで、万が一にも危険が……」

田原の表情が百面相のように変わり、ぐるぐると思考が回る。

そう、田原は不夜城で働くこと決めた『あの日』から一度も妹と会っておらず、手紙はおろか、メールなどの通信も一切遮断していたのだ。

田原のみならず、委員会のメンバーは莫大な賞金をその首に懸けられており、世界中から憎悪を集める存在であったのだ。もつと言うなら、一発逆転を狙う参加者の前へとぶら下げられた、“人参”でもあった。

故に、無力な妹に害が及ばぬよう、一切を遠ざけ、共に過ごした痕跡を悉く消し去つたのだ。当然、不夜城で共に暮らすなど論外である。

あの場所こそが、世界中から殺意を向けられる場所であったのだから。幼い少女が暮らすには、あまりにも過酷すぎる場所であった。

「落ち着け、田原。この世界で、我々の首に賞金などは懸けられていない。この先はどうなるか分からんが、今やっている仕事を思えば、恨みを抱く連中など自分の權益を侵されたと逆恨みする小物だけであろう」

「ん……」

「我々が、そのような愚物に後れを取るとでも思っているのか？」

「……いんや、思わねえな」

「ふむ——今、お前の口から“答え”が出たようだ。私はこれを以って、お前の働きに報いようと思う」

魔王がそう言いながら、更に杯を傾ける。これは褒美であると同時に、先に奇跡を叶え、九内伯斗の何らかの狙いを阻止するためでもあった。

無論、田原からすれば、どちらでもいい話である。肝心なのは妹と共に暮らせる日々であつて、その理由などを問うている場合ではない。

「なら、ここの守りをもつと固めないとな。ピアノ線にスネアトラップ、デッドフォー
ル、地雷……いや、自動固定小銃も要るだろ」

「……………いや、まだ気が早いのではないか？」

「その前に、真奈美の城……いや、家が要るよな。その辺りは長官殿に大規模拠点を建て
てもらおうとして……」

田原がぶつぶつと物騒なことを口走り、やがて派手な音とともに立ち上がる。

その顔には——少年のようなはにかみが浮かんでいた。

「いやー、あんたにそんな人情があるとはな！　こりや、計画を一から立て直す必要があ
るだろー！」

田原が魔王の両肩に手を置き、嬉しそうに笑う。

上官と部下の、感動の場面である。しかし、田原が立ち上がったことにより、その立派な一物が、魔王の目の前にぶら下がっていた。

「う、うむ……ともあれ、落ち着いて座るといい」

「これが落ち着いてる場合かよッ！ 俺あ、嬉しいんだ！ 真奈美とは10年以上会ってねえんだぞ！」

田原が興奮して叫ぶたび、一物も激しく揺れる。

それは時に左右に揺れ、時に前後に揺れ、縦横無尽の凄まじい迫力であった。魔王はこの異世界にきてから、これほどまでに危機感を覚えたことはない。

「わ、分かった……まずは座っ……！」

「こうしちゃいられねえ！ 計画の練り直しだ！」

田原が露天風呂を飛び出し、残された魔王は巨大な圧迫感から解放されたように息を吐いた。気分を変えようとしたのか、日本酒を銚子ごと傾け、胃の中へと叩き込む。

「まさか、あいつの一物をどアップで見ることになるとはな……何の罰ゲームだ」

魔王はしかめつ面でつまみと日本酒を堪能した後、露天風呂を後にした。その後は就寝するだけであつたが、念のためにユキカゼへと《通信》を送る。

また自分の部屋に侵入してないか、気になったのだろう。

だが、その《通信》から——やがて大陸全土を巻き込む戦いが始まることなど。この時の魔王は想像すらしていなかった。

《ユキカゼ、聞こえるか?》

《——さ——ま》

《うん? どうした、何が起きている?》

通信の乱れに、魔王の顔付きが変わる。

ユキカゼが戦闘状態にあることを察したからだ。

《……おじ様、アグレッサに侵略者が発生した》

《アグレッツサー？ それは魔物か？》

《……指揮官級の魔物。迷宮から逆侵攻を仕掛けてくる、特異種》

《そうか、すぐに戻る》

ユキカゼとの通信を終え、すぐさま魔王は《チーム通信》で田原と悠を呼び出す。これは対個人ではなく、チームを組んでいる全員に繋がるものだ。

《悠、今すぐ旅館前に来てくれ。北の方で少し、荒事が発生しそうでな。田原、村のことを頼む》

《了解、こっちは任せてくれ》

《すぐに向かいます》

数分後、合流した二人はすぐさまルーキーの街へと飛んだ。

魔王と魔女

その異変に真つ先に気付いたのは、郊外に居るヲタメガであった。

すぐさまテントから飛び出し、ルーキーの街へと目をやったが、そこには赤々とした炎が燃え盛っていたのだ。

三連星もテントから体を出し、その炎に鋭い視線を向ける。

「ヲタメガ様、どうやら侵略者アグレッサのようですね」

「そのようですね」

誰も火事であると判断しない辺り、流石の集団であった。

だが、三連星は祈るような気持ちでヲタメガを見る。どうか、あの騒乱の中に飛び込まないでくれ、と。戦闘を恐れているのではなく、これ以上、他国の事情に首を突っ込めば、ヲタメガの立場は益々悪くなるのだ。

「ヲタメガ様、街には我々が赴きましょう。どうか、そのままお休みを」

「私のことなら、心配は無用ですよ。今更ではありませんか」

珍しく、ヲタメガが悪戯っぽく笑う。確かに国許での彼の評価は最低ともいえる位置にありこれ以上、下がりようがない。

それでも、三連星としては心配なのであろう。だが、ヲタメガは保身を考え、自らの信念を捻じ曲げられるような性分ではなかった。

ヲタメガが背負った白い箱から二本の柄を引き抜く。右手に握られているのは神々しいまでの白き光を放つ、光剣。左手に握られているのは、これまた眩い光を放つモーニングスターであった。疾風のような速度で、ヲタメガが街へ向けて走り出す。その眩い背を、三連星も無言で追う。

白い一団が街に到着したとき、既にあちこちで戦鬪が発生していた。

逆侵攻を何度か見た一団であっても、その光景は絶句というに値するもの。迷宮の入り口から、雲霞のような魔物が押し寄せてきていたのだ。

「何だこれは……ブリキがあんなに。火吹き鳥まで居やがるぞー！」

「首狩り猪も、だ」

「冗談だと思いたいが……奥に居るのはヒュドラか？」

三連星が其々、乾いた声で洩らす。それらは監獄迷宮という、ルーキーが挑むべき迷宮に出現していいような魔物ではなかったのだ。

迷宮では時に特異種が生まれ、それらが指揮官となつて周辺へ逆侵攻をかけるときがあるが、それでも迷宮に応じた強さの魔物しか出てこないというのが通説だ。

既に魔物が方々へと散らばり、無秩序に暴れ、火を噴き、目に入った人間を手当たり次第に殺害していた。ヲタメガがそれらを見て、瞬時に判断を下す。

「この規模ではバラけると危険でしょう。皆さんは三人で行動してください」

ヲタメガは短く告げると、前方へと突出した。

三連星も異論を挟まず、すぐさま行動を開始する。戦場では一瞬の迷いが死に繋がり、救える命も救えなくなることを熟知しているからだ。

三連星も其々、手にした白剣を持つて走り出す。

彼らが剣を振るうたび、魔物に二つの裂傷が生み出され、見る見るうちに群れが切り裂かれていく。

それは——『連撃』と呼ばれるもの。

GAMEでも其々の属性に対し、熟練度というものが設定されており、その数値が100を超えるると発生するものであった。通常攻撃の後に10の追加ダメージを与えるものであり、平たく言えば「2回攻撃」である。

歴戦の騎士である三連星は、長い修練の果てに遂にはこの連撃を使いこなすほどの猛者となった。

ヲタメガもまた、光剣とモーニングスターを振るい、縦横無尽に魔物の群れを切り裂いていく。聖勇者である彼は「斬」と「棍」の双方から連撃を繰り出す。

実に一呼吸で——「4回攻撃」という冗談のような存在であった。
魔物を真正面から見据え、ヲタメガが叫ぶ。

「——出てこなければ、やられなかったのにッ！」

彼の往くところ、白き光が魔物の群れを割っていくような有様であり、まさに聖勇者の名に相応しい勇姿であった。どれだけ魔物の血が降ろうとも、臓腑がぶち撒けられようとも、その身を包む白い光が全てを浄化していく。

「だ、誰か助け……ッ！」

「――！」

恐らく、逃げ遅れたのであろう。幼い子を抱える母親に、火吹き鳥が猛炎を噴き出しそうとしていた。しかし、火を噴く前にその頭部が粉々に吹き飛ぶ。

ヲタメガの手に握られたモーニングスターの鎖が伸び、先端に付けられた鉄球が火吹き鳥の頭部を粉々に打ち砕いたのだ。

続いて突っ込んできた首狩り猪も、光剣によつて真つ二つに切り裂かれる。強靱な皮と、鎧のような筋肉を持つ首狩り猪であつたが、ヲタメガの前ではまるで豆腐かバターのようにあつた。

「ここは危険です。郊外へ」

「は、はい……っ！」

その鮮やかな立ち居振る舞いに、逃げ惑つていた冒険者達まで勇気をもつて立ち上がる。聖勇者とはその強さだけでなく、周囲の人間にまで勇気を伝播し、奮い立たせる存在のことを指すのであろう。

「ヲタメガ様アアアアア！」

「聖勇者が来てくれたぞー！」

「三連星もだ！」

「勝てる、勝てるぞー！」

「ヲタメガ様ー！ 俺だー！ 結婚してくれー！」

「キヤアアアー！ ヲタメガ様、抱いてー！（野太い声）」

「手の空いてる奴はバリケートを築け！」

ミカンとユキカゼもまた、それらの中に居た。

Bランクである二人は抜きん出た実力者であり、自然とその周りにルーキー達が集まりつつある。無理もないことであった。

こんな修羅場では、せめて強者の傍に居たいと願うのが人情であろう。

「こんな魔物……どっから湧いてきたのよ！」

「……おじ様が来るまで頑張る」

二人は大剣と魔法を駆使し、周辺の魔物を蹴散らしていたが、肝心の衛兵の動きが鈍

い。と言うより、殆ど姿が見えなかった。

「こんなときに衛兵は何してんのよ！」

「……恐らく、逃げた」

ユキカゼの言は正しい。彼らはいわば「安定した公務員」であり、よもやこんな危険に身を晒そう、などという考えはなかった。

むしろ、冒険者の方が「職場」を守るために踏み止まっている有様である。とは言え、別に衛兵が悪いわけでも何でもない。

この国は長い戦乱の中にあっても、防波堤として平穩の中にあつたのだ。

今更、いきなり命を捨てろ、などと言われても土台、無理な話である。彼らの役目は冒険者を監視し、そして搾取することにあつて、戦うことではない。

「ちよつと、ユキカゼ！ あれ火吹き鳥じゃないの!？」

「……ヒュドラも居る」

「あつつりえな——い！ いつからここは『六獄の滝』になつた!」

「……私の盾になれ『雪の恋人／スノーキッス』」

ユキカゼが投げキッスとともに、ミカンへ防御魔法を付与する。火吹き鳥を見て、火に対する防御を施そうとしたのであろう。

「誰が盾かッ！ あんたが燃えてこい！」

「……愛は永遠。私は溶けない雪。ミカンは炎ジョイ」

「ふざけんな！」

こんな状況にあっても騒がしい二人であったが、この一角は魔物の侵攻を食い止めることに何とか成功し、後続の冒険者達が次々とバリケードを築いていった。

だが、他の全てがこうではない。殆どの区画が蹂躪ともいえる悲惨極まりない状況となり、火吹き鳥が吐く火によって次々と建物が延焼していく。

やがて、時間の経過とともに――

あちこちから吹き荒れる黒煙が、街全体を覆っていった。



「思っていたより、酷い有様だな」

「数だけが多いようですね」

街で一番の高所に陣取り、漆黒の魔王と魔女が眼下を見下ろしていた。方々から黒煙が立ち昇り、あちこちから絶叫や悲鳴が響いている。

悠の顔は平然としていたが、魔王は先日までの平穏な街並みを見ていた分、余計にこの光景が悲惨なものとして映った。

何せ、魔物だけではなく——人の一部も暴徒と化していたのだ。

目ぼしい商店へと押し入って品を盗む者、金を奪い取る者、両手一杯に薬草や植物の蔓のような物を抱えている者。

魔王からすれば、それはいつかTVで見たスラムの暴動のようであった。今も眼下では剣を突き付け、女を犯そうとしている男までいる。

(下種が……)

「剥き出しの人間の姿、ですわね。長官」

「——気に入らん」

「えっ」

魔王が無言でソドムの火を投擲し、眼下に居た男の頭を撃ち抜く。

男の体は死んだことすら理解できないような姿で立ち竦んでいたが、やがて頭部が無
いことに気付いたのか、その体が横倒しに倒れた。

それを見て、魔王が無言で煙草に火を点ける。

悠の目がじつと自分を見ていることに気付き、魔王が軽く笑いかけた。

「我々は常に状況を作る側だ。勝手な振る舞いをした慮外者に、身の程を叩き込んでや
ろうではないか」

（くううう！ 長官、今の台詞最高ですっつっ！）

悠の目がキラキラと光り、その両手が無意識にそろりと伸びる。

そのままいけば、思わず抱きついていたことだろう。

だが、魔物の侵攻はそれを待つてはくれなかった。中央の広場へ向けて、数え切れな
いほどの火吹き鳥や、ブリキが押し寄せてきたのだ。

「ふむ、（ハハ）では少し遠いか」

「あつ……♪」

魔王が悠の腰を引き寄せ、一気に跳躍する。そこは中央の広場を眼下に収める、絶好のポジションであった。魔物の群れはそこで一旦集結し、更に方々へと散らばる気配を見せている。それを見て、魔王が顎をしやくる。

「——悠、派手に殺れ」

「は、はいっ—」

悠の蕩けていた顔が引き締まり、その掌に禍々しい手榴弾が握られる。

そこから《属性スキル》の乗せられた——破滅的な一撃が放たれた。天高く放り投げられた手榴弾に、まずはFIRIST SKILLである《爆弾知識》が発動し、15く25の追加ダメージが加算される。

次にSECOND SKILLである《四散》が発動し、手榴弾が数十個に分裂した。最後にTHIRD SKILLである《連鎖爆破》が発動する。

そのダメージ加算量、実に30く40ダメージ。それらが一齐に魔物の頭上に降り注ぎ——連鎖的な“大爆発”を引き起こした。

凄まじい轟音が街中に鳴り響き、あちこちで戦っていた冒険者や、逃げ惑っていた住人も、それを引き起こした存在へと一斉に目を向ける。

そこには、月を背景に悠々と煙草を愉しむ魔王と、目の覚めるような白衣を着た凄艶な美女がいた。

（ふむ——側近達の属性スキルも、しつかり発動するようだな）

魔王が満足気に頷き、悠の頭を引き寄せる。

細部に至るまで設定を施した側近が、その能力を余すところなく発揮したのが嬉しかったのだろう。まして、自分の作ったスキルが凄まじい威力をもって目の前で再現されたのだから、その嬉しさは二重のものであった。

「ちよ、長官……ご満足いただけましたでしょうか……?」

「うむ——素晴らしいぞ、悠。まさに芸術的な一撃だったな。属性スキルが全て決まったときの爽快感は堪えられん」

魔王が哄笑をあげる姿を見て、群集は声にもならない声を上げた。

目を瞠るような美女を傍らに引き寄せ、幾百の屍を見下ろす姿は、まさに魔王そのものであったからだ。

遠くからその姿を見ていた三連星は、それが“噂の魔王”であることを瞬時に察した。何が行われたのかすら分からない、凄まじい大爆発。

白き光に真つ向から反するようない、漆黒の姿。そこから連想されるものは、まさに古の伝承にある、稀代の反逆者そのものであった。

「あれが……ヲタメガ様の言っておられた魔王か」

「稀代の反逆者に相応しい容貌であるな」

「早まるな。我々の進退はヲタメガ様に預けてある」

ミカンとユキカゼも、漆黒の魔王とその傍らに佇む魔女の姿を見ていた。目を背景に屋根の上で哄笑を上げる姿は威風堂々たるものがあり、見る者によつては、様々な感情を呼び起こさせるであろう。

「何よ、あいつ。横に女を侍らせて格好付けちゃってさ」

「……私は愛人が何人居ようと気にしない。ただし、ミカンはダメ」

「ダメも何も、あいつに興味なんてないわよッ！」

「……嘘吐きは炎ジョイのはじまり」

「そのネタ、どこまで引つ張んのよ！」

ヲタメガもまた、魔物の屍の中、魔王の姿を振り返った。

以前は気配と視線、そして声だけの存在であったが、今ではその姿を現し、はつきりとした輪郭を備えた存在となっている。

「貴方だけではなく、部下までが……」

広場の惨状を見て、ヲタメガの体が揺れる。いつたい、何が起こったのかは分からな
いが、あれだけの魔物が一瞬で爆殺されたのだ。もしも、あれを「連発」で放つことが
できるなら、個を以って軍にすら対抗できそうであった。

——また会ったな、勇者。

魔王がコートのポケットに手をつ突つ込んだまま屋根から跳躍し、ヲタメガの隣に舞い

降りる。その姿が見えている分、以前より遥かに威圧感が増していた。

続けて魔女もその隣に舞い降り、ヲタメガからすれば、近くに居るだけで寿命が削られていくような思いを抱いた。知らず、二つの柄を握る手が強張っていく。

「そう警戒せずともよい。奥のデカブツはこちらで片付けようではないか。お前達には、周辺の魔物に対処してもらいたい」

「……あれはヒュドラという、連撃すら無効化する首領級の化物です。多くの人命がかかっていますが、貴方には勝算がおありですか」

その言葉に悠の目がスツと細くなったが、魔王がその手を頭に置くと、途端に大人しくなった。

「連撃を、か——面白いな」

「そもそも、貴方は魔を統べる王なのでは？ 何故、人の側に立つのです」

「可笑しなことを言う。魔物など、私にとって『糧』に過ぎん」

これは魔王の本音というより、素の発言であった。

だが、ヲタメガからすれば意味深長な言葉である。その真意を探る暇もなく、魔王と魔女が傍らを通り過ぎていく。

その奥には凶悪なヒュドラが居るのだが、まるで眼中にないようであった。

「長官、あの蛇の出来損ないは何でしょうか……？」

「ふむ、JUGも溜まっていることだ。実験に丁度良い。ついでに迷宮内も一掃しておくとするか」

迷宮の入り口に陣取っていたヒュドラが鎌首を擡もたげ、二人を視界に収める。巨大な蛇のようであり、9つの頭を持つ魔物である。

Aランクの冒険者達が挑む大迷宮、「六獄の滝」に出現する首領級の魔物であり、断じてこんな場所に出現していい存在ではない。その固い鱗は連撃を無効化するため、熟練の冒険者や騎士達にとっても大変な強敵である。

「では、私の『連撃』も披露しようではないか——」

魔王がソドムの火を投擲し、それがヒュドラの胴体に突き刺さったとき、その首から

絶叫が漏れた。戦闘スキルを発動させずとも、この男の通常攻撃は既に致死量のダメージを与えるのだ。

本来ならそこへ連撃が発生するのだが、この男の場合、熟練度が500に達しているため、《極連撃》へと昇華し、そのダメージ量が25へと跳ね上がる。

更にそこへ戦闘スキルの《狂撃》が上乘せされることにより、5ダメージの加算が行われ、計30ダメージ。通常の連撃に比べ、実に3倍の威力である。

オマケに戦闘スキルの《強制突破》が付与されるため、連撃を防ぐスキルや技術を通り抜けてしまう。要するに、この男の連撃を防ぐことは——「不可能」なのだ。

突き刺さった刀身から衝撃波が迸り、ヒュドラの巨体が跳ね上がる。極連撃が突き刺さったのであろう。とどめにソドムの火が齎す火傷効果——爆炎がヒュドラの体を一瞬で包み込んでいく。

まさに、流れるようなコンボである。

GAMEでは更にここから属性スキルや無属性スキルなどに繋げていくため、先制攻撃を取られると逃れるのが至難の業であった。

「——ハッハッハッ！」

湧き上がる高揚感に、魔王が嗤う。

全身から赤い霧が立ち込め、その姿を覆っていく。赤い霧は一秒足りとも同じ形を作らず、断末魔の悲鳴をあげているような顔となり、時には髑髏となり、視界に入れてい
るだけで、魂まで汚染されそうな「地獄そのもの」となった。

——戦闘スキル《限界突破》発動！

——特殊能力《法典の支配者》発動！

「羽虫が——這い蹲った姿がお似合いだッ！《FINAL JUDGEMENT》」

まるで号令を下すように魔王の右手が振り下ろされた。禍々しい赤き霧が幾万の髑髏となり、悪夢のような咆哮とともに地獄の一撃が突き刺さる！

一瞬でヒュドラの体が黒い粒子となって消滅し、それだけにはとどまらず、瀑布を叩き付けるようにして、幾万の髑髏が迷宮内の最下層である20階層までぶち抜いた。

それは全体攻撃ではなく——エリア攻撃。

只でさえ強烈な「それ」に、幾つものダメージが上乘せされ、迷宮内の魔物は悉く一撃で死滅した。その中には、今回の侵略者たる大きな目も居たのだが、十把一絡げに消

滅する悲惨な有様となった。

後に残されたのは――耳に痛いほどの静寂。

誰もが今の地獄のような一撃を見て、魂が消し飛ぶような思いがしたのだ。

「これで後続の魔物も途絶えるだろう」

「お見事でした、長官」

頬を上気させた悠が笑顔を浮かべ、魔王も満足気に頷く。だが、魔王はその顔を引き締めるとユキカゼへと《通信》を送った。

《ユキカゼ、聞こえるか？》

《……おじ様、最高に格好良かった。私の雪もドロドロに溶ける》

《何がドロドロだ。それよりも少し、気になることがあるのな。私はこのまま迷宮へ潜る。引き続き、残党を片付けておいてくれ》

《……うん》

そう返すユキカゼの声は、少し寂しそうであった。

だが、魔王の戦闘を見た後では足手纏いになると考えたのだろう。寂しさを滲ませながらも、素直に頷いた。

《今回はお前達に沢山のことを学ばせてもらった。この騒動が終われば、ラビの村に来ると良い。歓迎しよう》

《……必ず行く。絶対行く》

通信を終え、魔王が迷宮へ向かって歩き出す。

その背に、ヲタメガが声をかけた。

「——貴方は再び、反逆を起こすのですか？」

再び、という言葉に魔王は片眉を上げたが、悠が居る手前、無様な応答はできないと考えたのだろう。ほんの少し間を置いて、重々しく口を開いた。

「私は常にシステムと体制を作ってきた側でね。反逆というのであれば、それに反する者達のことを指す」

それは、「大帝国の魔王」としての返答。悠が聞いても変だと思われぬようにしたものであつたが、それを聞いたヲタメガの方は驚愕していた。

古に謳われる稀代の反逆者は、自らを反逆者などと夢にも思つておらず、むしろ周囲こそが、下手をすれば「大いなる光」こそが反逆者だと思つていたので。

見解の相違、などというレベルではない。古代からの神話、その通説がガラガラと音を立てて崩れていくような気持ちをもつたのだ。

「では、また会おう。勇者」

迷宮へ潜つていく二人の背を。

ヲタメガは只、呆然とした眼差しで見送るだけであつた。



情報の一部が公開されました。

・FINAL JUDGEMENT

GAMEにおける、エリア全体攻撃。

戦闘によって増減していくJUGと呼ばれる数値が100に達すれば発動。

初期ダメージ量は30だが、自分より相手のレベルが高い場合、

著しくダメージが加算される。レベル差が1につき、8ダメージの上乗せ。

自分より相手のレベルが10高いケースでは、実に80ダメージもの上乗せとなり、致死量の攻撃となる。

これによって、GAMEではレベルを上げれば上げるほど、強くなればなるほど、この攻撃が脅威となり、弱者が強者を一撃で葬ることも可能なシステムとなっていた。

大野晶はGAMEにこの手のギミックを多数仕込んでおり、

レベルを上げてごり押し、などの単純な勝利をできなくしていた。

・戦闘スキル——限界突破

FINAL JUDGEMENTの初期ダメージを倍に引き上げる。

30ダメージ ↓ 60ダメージ

・特殊能力——法典の支配者。

魔王の専用能力。

FINAL JUDGEMENTに40ダメージの上乗せ。

不夜城の側近達は《法典の守護者》という類似能力を持っているが、こちらは20ダメージの上乗せとなっている。

未知との対峙

魔王と魔女が長い階段を降り、迷宮内へと足を踏み入れる。

当然、そこには人っ子一人居らず、物音一つすらしない空間と化していた。魔王の放った一撃が、迷宮ごと沈黙させたかのようなのである。

「ここが、長官の仰っていた迷宮なのですね」

「うむ、静かなものだな」

普段とは違い、今は街の方が騒乱の中にある。とは言え、残された魔物の数を見ている限り、ヲタメガや三連星が残らず片付けてしまおうだろう。

ヒュドラのような首領級の化物が出てこない限り、ユキカゼやミカンとて後れを取るようなことはない。

「長官。ここは、暗くて不気味ですわね……」

「まあ、そうだな」

悠がいかにも「私、怖がってます」といった風情で、魔王の手に腕を絡める。この光景を田原が見たら「おめえが一番こえーんだよッ!」と叫ぶことだろう。

「何だか、お化け屋敷のようです。変に明かりがあるのが余計に」

「そ、そうだな……」

悠が形の良い胸を魔王の腕にさり気なく押し付け、頬を上気させる。この光景を田原が見れば、「お化け屋敷はてめえの病院だろうがッ!」と叫ぶことだろう。

魔王も慌てた風情で咳払いし、全移動で下層へと飛ぶことを告げる。

「お言葉ですが、長官……一階一階を確認しませんか? 何か落ちている可能性もあります。時間をかけて、二人で”ゆっくりと探索すべきです”」

「い、いや、そうしたいのは山々なのだが、少し急ぎでな。では、行くぞ」

「ああん、長官あん……」

悠が未練がましい目を向けたが、魔王がその体を掴み、強引に十五階層へと飛ぶ。そ

こは以前に見た、*“監獄”*が存在した階層である。流石に悠もその奇妙な光景に目を奪われたのか、鋭い視線を左右へと向けた。

「随分と古い……いえ、原始的な牢獄ですね」

「悠、お前はここに——*“何を”*捕らえていたと思う？」

「普通に考えるなら人間、それも成人に近い大きさの生物かと」

魔王も改めて牢獄を見たが、確かに悠が言った通り、人間が捕らえられていたと考えるのが無難であった。それも、極めて悪い扱いで。

二人が更に下の階層へ降りると、そこにも牢獄が並んでいた。似たような作りのものもあれば、少し頑丈そうな鉄柵のようなもので作られた物もある。

下に降りれば降りるほど、階層が広くなり、牢獄の数も増えていく。悠は平然としていたが、魔王から見ればそれは、*“異様”*な空間である。

誰が、何のために、こんなものを作ったのか。何故、こんなものを迷宮内に作る必要があったのか。魔王にはとても理解できないものである。だが、悠は明日の天気でも占うような軽い口調で言う。

「——人を飼っていた、のかもしれないね」
「ははっ」

軽く笑った魔王であつたが、その言葉は妙に耳へと残るものであつた。魔物が溢れる空間の中で、牢獄などに入れられては気が狂つてもおかしくない。

いや、平然としていられるはずもない。

「どちらにせよ、気に入らん——」

「おっしゃる通りです。『国民の幸福と管理』は全て長官の思うが侭であるべきですから」

「うむ」

それっぽく頷きながらも、魔王は内心で悲鳴を上げていた。

叫べるものなら「そんな管理、したくねえよ」と叫んでいたことだろう。しかし、最下層である二十階層に降り立ったとき、フロアの雰囲気が一変した。

同時に、魔王の顔付きだけが変わる。

そこに広がっていたのは——近代的な工場。

このフロアだけは、床や壁が明らかにコンクリートで作られており、剥き出しの鉄骨や、無数のベルトコンベアが動いていたのだ。

そこには斬られた魔物や、黒焦げになった人間までベルトへと載せられ、何処かへ運ばれていく。中には衣服や刃物、家の壁のようなものまで含まれており、無作為に何かを掻き集めているようであった。

「なるほど、どうやら違う階層へ案内されたらしい」

「……長官？」

「いや、以前に聞いていた『二十階層』とは随分と違うんだ。悠、ここは今までの階層と変わらないものか？」

「ええ……無骨な岩肌と、薄暗い空間です」

魔王がユキカゼから聞いた二十階層は、あくまで普通のものであった。

間違つても、こんな近代的な施設ではない。

魔王がうつすらと感じていたものが——今、確信へと変わった。

「どうやら、私を『招待』しているらしい——」

十五階層で見つけた銃、本来とは違う二十階層。

誰も知らないものを、そつと自分に見せて「愉しんで」いるのだろうか。挑発でもしているのか、何か伝えたいことでもあるのか、どちらにしてもロクな用件でないことだけは確かであった。

「悠、ここで待っている。何かあれば、私を掴んで全移動で飛べ」

「お待ちください、お一人で往かれるのは——」

「二人同時に何か仕掛けられては、どうしようもないのでな。私に何か状態異常でも起これば、躊躇無く治癒しろ。良いな？」

「は、はい……」

不気味なベルトコンベアが無数に並ぶ中、魔王が奥へと足を進める。そこでは魔物と人間が、仲良く「平等」に運ばれていた。

端的に言つて、気味の悪い光景であり、常人ならば足が竦む光景であろう。だが、魔王の足は止まらない。

(この先に、何かがある。俺が知りたいもの。もしくは、俺に見せたいものが)

工場の奥にあった扉が“自動”で開く。

それは電気で動かしているのか、それとも魔法で動かしていたのか。魔王がその中に足を踏み入れると、一つの答えが示された。

「なるほど、リサイクル工場というわけか」

眼下を見ると、運ばれていた魔物や人間が、巨大な溶鉱炉のようなものに落とされ、そこから新たな魔物となつて運ばれていたのだ。世の中には“輪廻転生”などという言葉があるが、目の前の光景はそれとはかけ離れたものであった。

そして——部屋の中に並ぶ、無数の液晶。

小さいサイズのものもあれば、巨大なものもあり、軽く100以上の液晶が無造作に積み重ねられ、一つのアートのようになっていたのだ。

ゾツとするような光景であり、流星の魔王も息を飲む。

「私に、美術の採点でもしてほしいのかね？」

魔王が問う——これを用意して、待っていたであろう相手に。未知の魔法を持つ相手に。未知の科学力を持つ相手に。

眼下に広がる命のリサイクル、太陽光を利用した銃。

分かっている範囲だけでも、既に現代日本の科学力を超える相手であった。

魔王の問いが聞こえたのか、液晶が一斉に答えを映す。

『遊ぼうよ、魔王』

映し出された文字を見て、魔王が無言で煙草に火を点ける。

その仕草が気に入らなかったのか、液晶の幾つかにヒビが入った。そして、新たな文字が液晶へと映し出される。

『遊ぼう、魔王』

似たような文字であったが、その本質は違う。

前者はまだ誘いが含まれたものであったが、後者はより強い、自らの意思を押し付け

そのメッセージに、その悪意に。魔王は密かな恐れを感じている。

だが、この男の意思の強さは——込み上げてくる恐怖という名の鎌首すら抑え込み、その容貌を一層に鋭くさせていく。そう、この男は逆境になればなるほど、弱音を捻じ伏せ、自らの意思を貫いてきたのだ。たとえそれが人から見て、ツギハギだらけの不恰好なものであっても。

「こんな寂れた工場で上位者気取りか？ 実に滑稽だな」

腹を括った魔王が真正面から液晶を見据え、堂々と言い放つ。

そう、この男には武器がある。

そして、勝算もある。

只の現代人では決して持ち得なかったであろう、強力無比な“世界”が。彼の15年にも及ぶ執念が作り上げた、チートの塊ともいえるGAMEの世界が。液晶の文字が次々に流れ、目まぐるしくその内容を変えていく。

『GAME OVER』

魔王がそのメッセージへ向け、無言でソドムの火を投げつける。
粉々に砕け散った液晶がまるで雪のようにキラキラと降り注ぐ中、魔王が未知なる相
手へ宣戦布告を行う。

——貴様が、何処の、何者か知らんが、一つだけ言っておこう。

「私と大帝国に——不可能はない、となッッ！」

魔王が漆黒のコートを翻し、部屋を後にする。

この日から——この異世界を牛耳る何者かと。

魔王の激しい戦いの火蓋が切られた。

五章 — 恋の迷宮 — F I N

特別SS その先へ

魔王様、リトライ！

——カジノ 黄金樹

豪華極まりないBARに、聖光国における上層部の面々が集っていた。

極一部のメンバーとはいえ、その顔触れは錚々たるものである。

田原、悠、近藤などの側近に加え、そこには大天使として敬われる真奈美の姿もあった。

反対側の椅子にはホワイトやルナが座っており、サンボやマダムの姿もある。

その間を縫うように、アズールが手際よく紅茶や菓子などを並べていく。

この場に居ないのは零と旅立ったクイーンやトロン、要塞で指揮に当たっているアツ、温泉に籠りつ放しのカキフライくらいものだ。

これらの面々を集めたのは、当然のように魔王である。北へ出発した直後の事でもあり、予定外の集合に田原や悠は何事かと不安を隠せずにした。

「田原、何か聞いている?」

「いんや。恐らく、予想外のアクシデントが発生したんだろうナ」

悠からの問いに、田原は顔を顰めながら答える。

あの長官殿が予定外の集合をかけるなど、余程の事であろうと。このような集まり方をしたのは、貴族派を消滅させた後の“大会議”以来であった。

それだけに、田原の胸には先程から嫌な予感が過ぎつている。

自分たちの知らないところで、大きな何かが。それも、不吉な決断が下されたのではないかと。

「おい、近藤。おめえは——」

念の為、田原が声をかけようとするも、近藤の視線は手元のゲーム機に向けられており、その画面には《グランレッドファンタジー》と描かれてあった。

「おめえ、ピコピコなんてやってる場合か!」

「ピコピコとか、止めてくださいよ……いつの時代なんですか」

「てめえ、俺をオッサン呼ばわりする気か？ 俺あ、まだ31だぞ馬鹿野郎！」
「ちよ……止めてくださいよ！ 今、水着イベで大事なところなんですから！ 僕はこ
の1000連ガチャに人生の全てを賭けてるんですッ！」

騒ぐ二人を前に、ホワイトは落ち着いた様子で紅茶に口を付ける。ルナはルナで姉に
対抗しようとしているのか、退屈そうにクツキーを咀嚼していた。

サンボは黄金樹の華やかな空気が気に入っているのか、隣に座るマダムへ上機嫌な様
子で話しかける。

「ここは相変わらず豪勢じやのう！ 酒の一杯でも頼みたくなるわい！」

「老碌じじい、場を弁えなさいな。今から魔王様がいらつしやるのよ」

「……だから、酒が欲しいんじゃない。ワシあ、あの人を見とると心臓が縮み上がりそうに
なるんじゃない」

あの漆黒の佇まいや、眼光を思い出したのか、サンボの体にブルリと震えが走る。か
の墮天使は表面上、大貴族のような優雅な振る舞いをしているものの、ドナの城では三
千人もの軍兵を一瞬で皆殺しにした破滅的な存在であった。

軍人であるサンボの目を通して見れば、それは畏怖の対象でしかない。そこには戦略も戦術もあつたものではなく、存在が天変地異そのものであつた。

「何を言われるのかのう……まさか、隣国を根切りに、とか命じられるのではないじやろうな?」

「あの方の目的に合致するなら、それも止むを得ないわね」

「お主という奴は……はああ、気が重いのう……」

そう答えながらも、マダムはあの堕天使が意味もなく、そんなことを命じるなどは毛ほども思っていない。

先ほどから、妙に落ち着きのないサンボの口を閉じさせたかっただけである。

(それにしても、妙ね。あの二人の顔色が悪い……)

マダムが注視していたのは、田原と悠である。

非常な知恵者として認めているあの二人が、あそこまで考え込んでいる姿はこれまで見たことがなかったからだ。

實際、田原の胸には嫌な予感がわだかまっており、悠も同様であった。何故かは分からないが、「あの日」のことが繰り返し思い出されるのだ。

——不夜城が陥落した、あの運命の日を——

知らず、田原は拳を握り締める。

その額からは冷や汗が流れ、破滅的な文言が頭に浮かぶ。

(まさか、打ち切りとかじゃねえだろうナ……………)

胸中によぎる、不吉でメタな予感に田原は顔を覆いたくなくなった。

同じことを考えているのか、悠の目付きも鋭くなっていく。各人が不気味な沈黙を続ける中、エレベーターが軽快な到着音を告げた。

「——辞儀は不要だ。楽にしてくれ」

現れた魔王に、全員が姿勢を正す。

その背後には秘書である蓮が寄り添っており、田原は蓮の顔から何事かを掴み取ろうとしたが、鉄仮面ともいえる表情からは何も読み取ることはできなかつた。

全員が重い沈黙を続ける中、其々の表情を確かめるように魔王は場を見渡し、咳払いを一つする。その眉間には深い皺が寄っており、かなり重い内容を告げようとしているようであつた。

田原はこれまでの日々を振り返り、断腸の思いで目を閉じる。

妹と再会したのも束の間、全ては夢となつて消え果てるのかと。ごく自然に、隣に座る真奈美の手を握り締めた。

これまで見せたことがない兄の行為に、真奈美は驚いたように目を見開いたが、何かを察したのか、そつと兄の手を握り返す。

やがて覚悟を決めたように、魔王は死刑宣告にも等しい“それ”を口にした。

「この作品の、アニメ化が決定した——」

その言葉に、全員が絶句する。

身動きするのも憚られるような、重い沈黙が場を包み込んだが、この場で真つ先に動いたのは、意外な事にマダムであった。

「それは、魔王様のジョークというやつかしら……?」

「残念ながら、ジョークではない」

魔王の顔には苦渋とも言えるものが浮かんでおり、重い空気を放っていた。

よもや、地上波に自分達の姿が流れるなど、想像もしていなかったのだろう。

同時に、この訳の分からない勘違いの輪が日本全国どころか、全世界へ広がることに七転八倒したい気分であった。

(アニメ化とか笑えねえよ……! どうせ、田原辺りから「これも長官殿の狙い通りつてやつか」なんてニヒルに笑われるんだろうしな! クソー!)

魔王が恐る恐る、田原の顔を窺うように視線をやると、バツチリと目が合ってしまう。しかし、田原の表情に浮かんでいるのは、予想とは違ったものであった。

「アニメ化って……長官殿、マジかよ。こいつあ、たまげちまったナ」

「えっ」

「俺の真奈美が日本中に……いや、世界中に俺の天使の姿が……」

「い、いや……粹的に考えると登場は難しいのではないか？」

思わず魔王がメタい発言をするも、田原の頭には入っていないようであった。

段々と田原の瞳が青く染まり、遂には勢い良く立ち上がる。

「こうしちゃいらねえ！ 真奈美、ビンゴの店で着替えの用意をすんぞツ！ ちゃん

と一話ずつ、服と髪型を変えねえとナ！」

「ちよ……何言ってるの、お兄ちゃん！」

真奈美の手を引き、田原が慌しく走り去る。

その隣では悠が不気味に微笑み、何事かを妄想しているようであったが、やがて勝ち誇ったように蓮へと目を向けた。

言葉には出さないものの、その表情に浮かんでいるのは“勝利”である。

真つ先に召喚された自分こそが、地上波で長官と結ばれるのだ、と。実際、この場に魔王が居なければ、悠は狂ったように高笑いしていたことであろう。

(宮王子いい……あんたの絶望が、私には手に取るように分かるわよ……?)

悠からの視線を真正面から受け止め、蓮は毅然とした表情で見つめ返す。

彼女も彼女で、何事かを画策しているのであろう。蓮は武力だけではなく、智略にも非常に秀でているのだ。

同じ側近でありながらも、近藤は受け止め方が違うのか、椅子から転げ落ちそうになっっていた。

「ア、アニメって僕らが……?　じゃあ、僕が見ていたアニメは……ま、まさか、僕らは二次元の存在だったって……?!」

ブツブツと何かを呟く近藤の姿は廃人のような有様であり、黄金樹に混乱と混沌が広がっていく。

やがて、これまでずっと沈黙していたルナが立ち上がり、ホワイトへ高々と指を突き

付けた。

「あーはっはっ！　とうとう私の勝ちね、お姉様！」

「ル、ルナ……急に何を……」

「アニメでは圧倒的に私の出番が多いはずよ！　序盤じゃ、お姉様の出番なんてほとんどないんだからっ！　モブ聖女とでも名乗るのがお似合いよっ！」

「そ、そんな……」

シヨックを受けたのか、ホワイトの体が左右に揺れる。

実際、物語の冒頭では彼女の出番は少なく、むしろ敵として登場してくる気配が濃厚であった。ホワイトが望むような、甘い展開など期待できそうもない。

「なんでよ……っ！」

遂にホワイトがテーブルに突っ伏し、ルナが勝ち誇ったように高笑いを上げる。

賢明にも自重した悠と、自重などしないルナの見事な対比図であった。

同じく自重しないサンボは頭に？マークを浮かべており、事態を全く把握していない

様子である。

マダムはうつすらと笑みを浮かべ、短く一言だけ告げた。

「……活気に溢れた時代が来そうね」

「ど、どういう意味じゃあ? ワシにも分かるように説明してくれい!」

「少しは自分のお頭むで考えなさいな」

それだけ言うと、マダムは魔王に一礼し、優雅にその場を立ち去った。サンボが慌てたようにその背を追い、黄金樹の中から次第に人が減っていく。

最後に残ったアズールも食器を片付け、立ち去る魔王と蓮の背を見送った。

(アニユメ、とは何なのでしょう……田原様の様子を見るに、どうやら目出度い出来事のようにでしたが……)

神話に登場してくる超常の存在が何をやってのけようとも、今更、アズールは驚いたりはしない。その頭はやがて、今日の献立で埋まっていった。

（今日はあの子たちに、人参のスープでも作りましょうか。ハマー様が仰っていた、チーズリゾットなるものに挑戦してみるのも悪くありません）

暗殺者として鍛え抜かれたアズールは、いつ何時も表情を崩さなかったが、家で自分の帰りを待つ子供達の姿を思い浮かべ、その足取りは若く早くなっていった。

其々が動き出す中、心中穏やかでないのは、魔王本人である。

今も、何かに急かされるように大腿でオーナールームへと向かっていた。

その背を、息も乱さずに蓮がピッタリと寄り添う。

（どうしてこうなった……！）

ドナをドナドナした後、自らも見知らぬ何処かへ運ばれつつあることに魔王は焦りを隠せずにいた。

足早に歩く魔王の背に、蓮が落ち着いた声色で声をかける。

「マスタ―」

「これはあ、あれだ、きつと誰かの陰謀に違いない。世界をこう、陰から操る機関とか、

シユタインズなんたらとか……」

「——晶さん」

「うおっ! 急にその名で呼ぶな!」

突然、本名で呼ばれたことに魔王が飛び上がるようにして足を止める。振り返ると、そこには桜を思わせるような蓮の笑顔があつた。

「随分と考え込んでいらつしやるのですね」

「蓮、お前たちはいまいち分かつていないようだが、いいか、地上波というのは」

「きつと、そちらでも私のことを迎えに来てください——」

「あ、あのな……今は全く違う話をして」

「すぐでなくとも構いません。いつか、きつと——約束です」

固まる魔王にそつと近付き、蓮が小指を絡める。

半強制的な指切りであつた。性質の悪いことに、この約束を破れば地獄の果てまで追
い回されそうでもあつた。

「と、考慮しておこう……」

「……………」

「い、いや、約束しよう！ 何か、途方もない間違いが起こったりすれば、いつか、二期や三期などの話も……あつたら良いのだが……いや、無理ゲーだろ」

蓮からの強い眼差しに狼狽し、魔王があらぬことを口走つたが最後は思わず、素の言葉を漏らす。

「と、とにかく、私は暫し熟考に入るぞ！」

これ以上、蓮の傍に居れば何を約束させられるか分からないとでも思ったのか、魔王は慌しく全移動で姿を晦ました。

「きつと、お待ちしています。晶さん——」

微笑を浮かべながら、蓮がそつと目を閉じる。廊下で余韻に浸る蓮に、大慌てといった姿で光秀が駆け寄ってきた。

何故か、鎧兜を装備した戦支度で。

「蓮殿！ 今、田原殿から聞いたのでござるが、あみゆめいかなるものが始まるとか
！」

「言葉は少し違いますが——」

「某が察するに、キング殿の前で行う御前試合でござろう！ 蓮殿の一番槍として、某が
必ず優勝を果たしてみせます！」

「い、いえ、そういったものではなく……」

その頃、全移動で姿を晦ました魔王は——

何故か、海の上に浮かんでいた。

釣りに出かけようとしていたハマーを捕まえ、その船に乗り込んだのだ。

「うーみーはー広いなー大きいーなー」

コートやスーツを脱ぎ捨て、ネクタイも外し、ラフな格好で魔王がボートに寝転がる。

遂には下手くそな鼻歌まで歌いだした。ハマーこそ、いい迷惑であろう。

仕事中に現実逃避した墮天使ルシファーが船に乗り込んでくるなど、神話レベルの罰ゲームであった。

(大いなる光様……大天使様……あ、あつしをお救いくださいませ……！)

ハマーの心臓は破裂しそうなほどの鼓動を刻んでおり、失神せぬよう、正気を保つたけで精一杯であった。

とはいえ、これまで何処で働いてもクビを宣告されてきたハマーである。震える体に鞭打ち、日常の業務を果たそうと必死に動き出した。

最初に網を仕掛け、次に釣竿を垂らす。

その合間に、ハマーは時に素潜りで獲物を狙うのだ。日中は休む間もなく働き、手が空けば砂浜へと戻り、貝に砂を吐かせたり、日干しの準備などを整えていく。

その間、魔王は飽きる風もなくハマーの姿をぼーっと見ていた。

ハマーからすれば勤務態度をチェックされているようで気が気ではなかったであろうが、別に魔王は悪気があったわけではない。

「随分と、よく働くのだな」

「へ、へえ……! こ、これがあっしの仕事なんで」

「お前、ちゃんと休憩や休日を取っているのか——?」

「あつ、いや……そ、その……あっしは、働けるだけで嬉しいんで!」

(何でこの世界は社畜ばかりなんだ……)

以前にも鉱山で働く鉱夫たちから、休日を減らしてくれ、などと集団でトチ狂ったとしか思えない直訴をされたばかりであった。休日よりも進んで労働を求めるなど、魔王からすれば訳が分からない。

「まあ、休憩や休日に関しては田原に話を通しておこう」

「め、滅相もない! あっしのことなん——」

「それより、釣りに関して幾つか聞きたいことがある」

「へ、へい……!」

この男は自分が創った世界に関しては、人が変わったように綿密で、何処までも執念深くなる。スキルも無しに、自らのエリアで海産物を入手できるハマーという存在は、

魔王からすれば興味の尽きない相手であった。

反面、ハマーからすれば、古に謳われる存在との二人きりの空間でもあり、その緊張感たるや心臓が飛び出してもおかしくない状況である。

(な、何か受け答えを間違ったり……) 機嫌を損ねた日には……)

ハマーからすれば受難とも言うべき時間であろう。

しかし、意外にも魔王の口調は柔らかく、ハマーが話す内容に驚いたり、時には手を叩いて喜んだりと、話を進める度に上機嫌になっていく。

「海に入ると疲れを感じない、ね……興味深いな。とても興味深い話だ」

「い、いえ……つまらない話で申し訳ありやせん……」

「ハマちゃんはトロンやアイズと同じように、私の知らない異能を持つてるといわけだな」

嬉しそうに魔王が笑う。

有能な人物、異能を持つ人物を抱え込んでいけば、領土の発展は更に加速すると考え

ているのだろう。それは、自らの権限を取り戻すことに繋がっていくのだから。

田原から貰った手拭いで汗を拭いつつ、ハマーはこの現状に目が眩む思いであった。夢のような状況でもあり、悪夢のようでもある。

(あ、あつしなんぞが……こんな、とんでもない偉い方と……)

万人から畏怖され、顔を仰ぎ見ることすらできない堕天使様と同じ船に乗り、二人で会話をしているという信じ難い状況である。

(で、でも、この方は……あつしのことを認めてくださってる……)

何処に行っても無能呼ばわりされ、誰からも顧みられることのなかった辛い半生を思い、ハマーの目からは涙が溢れ、慌てて背を向ける。

乱暴に拳で涙を拭っていると、その背に魔王がしみじみと声をかけた。

「しかしまあ、私が言うのも何だが……毎日のように釣りをしてよく飽きないものだな。飽きられても困るが」

「あ、あつしは、これしかできねえもんで……こんなあつしにも、何かできることがあるなら、精一杯にやりたいと思ってるんでさあ」

「なるほど、な……」

汗を流し、気弱に笑うハマーの姿に何か思うところがあつたのか、魔王は深々と考え込むような表情となった。

そこにはあの聖勇者と同じく、自分にできることを精一杯の力を振り絞って生きていく、愚直で、一生懸命な男の姿があつたからだ。

(できることを、精一杯に、か——)

おもむろに魔王が立ち上がり、ハマーの肩を軽く叩く。

墮天使様に触れられた、ということにハマーの体が小さく震える。

「どうやら、私はお前に学ばなければならんことが多いようだ」

「へ?」

それだけ言うと、魔王は全移動で姿を消した。

残されたハマーはただ、呆然と船の上で立ち尽くし、押し寄せてくる静かな波にその体を揺らし続けた。

——その夜 カジノ屋上

煌びやかなネオンが瞬く中、それに負けぬほど輝く満天の星空の下に魔王は一人、佇んでいた。

その表情からは険がとれ、落ち着いたものになっている。

「魔王様、ここに居たんですわねっ!」

「……ん。アクか」

走り寄ってきたアクが、嬉しそうに魔王の隣に並ぶ。

いつもは肩に乗せている神獣が見当たらず、魔王はそのことを聞いてみた。

「あの冷えピタは何処にいった?」

「ミ、ミミです……今はルナ姉様の指示で氷風呂を作ってるんですよっ！」
「氷風呂、ねえ……」

普通なら罰ゲームとしか思えない代物であったが、この暑い国ではそれなりに需要がありそうでもあり、魔王はつい口を開けて笑ってしまふ。

自分の価値観と、この世界の価値観は相変わらずチグハグだと。

「魔王様、何か目出度いことでもあったんでしようか……？ 皆さんに聞いても、僕にはよく分からなくて……」

「ははっ、目出度い以上に、忙しくなりそうだ……」

「……魔王様、僕を置いていかないでくださいね？」

ロングコートの端を掴み、アクが不安そうに魔王を見上げる。魔王からすれば、逆にこの子から見放された日には、自分の精神が崩壊しそうであった。

「心配するな、私は何処にも行かんさ」

「僕は、世界中が魔王様の敵になってもずっと傍にいますから……」

アクも、北で蠢き始めた戦乱の気配を感じ取っているのだろう。

実際、魔王の存在は大陸全土を脅かす脅威になりつつある。下手を打てば、人類共通の敵として全国家から宣戦布告される恐れすらあった。

「世界。世界、か……」

魔王も馬鹿ではない。自らの権限を解放するために領土の拡張を続けなければいずれ、何処かと戦争になるのは自明の理であった。

追い求める果てに、全てを敵に回す覚悟が必要であることも。

「言っていないかったが、私は諦めの悪い男だな」

「諦め、ですか……?」

「たとえ世界を敵に回しても、どれだけ悲惨な状況に陥ろうとも、私は、私の求める勝利の為に立ち上がり続ける。何度でもだ」

かつて、自らが捨て去った世界。

巨大な津波に、押し流されるようにして潰えた世界。

プレイヤーの手によって落城した世界。

そして、滅んだXX世界。

再び構築せんと、戦いはじめたこの世界。

(「こんな異世界にきても、俺は『飽き』もせず……)

相も変わらず、戦い続けていることに笑いが込み上げてくる。

あれはハマーに言うべき台詞ではなく、自らに言うべきものであったと。

やがて、沸々と湧き上がる闘志に身を委ねるようにして、魔王は堂々たる大宣言を言い放つ。それは、この男の半生そのものの叫びであったのかもしれない。

——たとえば、神を敵に回そうと。何度、滅びを迎えようとも。

「勝つまで、リトライしてやるさ——ツ！」